KAIZO

改造

二月號

1926

ANIMASA

das erste kausal wirkende und per os gegebene
organotherapeutische Mittel gegen

Arteriosklerose

動脈硬化症

の治療劑・腦溢血豫防劑として近時
醫界の愛用頗る盛んなる……………

内服用脈管臟器製劑

アニマザ

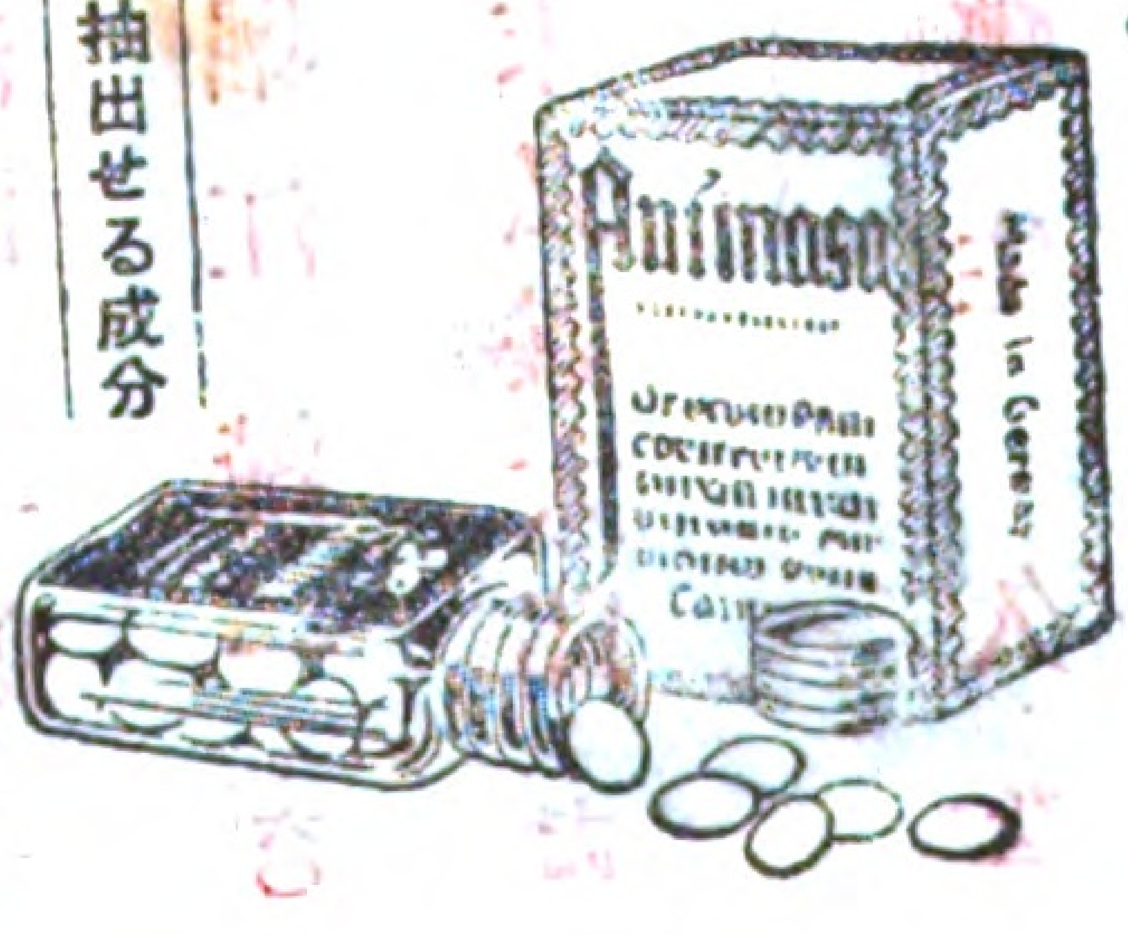
幼若動物の血管内膜及中膜より抽出せる成分

動脈硬化症……延いては壯年期にある貴重の人命を突如として奪ひ去る腦溢血……其治療及豫防は醫家の最も苦慮するところなりしが、獨乙ギーゼン大學グリースバッハ教授を始め多數の專門家はアニマザの内服が現時に於ける最も有力なる療法なりと高唱せり。

乃ち特殊の生活狀態にありて本病の素因を有するもの、例へば大酒家、美食家、體格肥滿者、腦力過勞者、白粉(鉛)中毒者、梅毒罹患者等に本劑を常用せしむるときは、血管の硬化を阻止し、眩暈・不眠・頭痛・足部寒冷・全身倦怠等の自覺的症狀を除き且つ亢進せる血壓を或る程度まで低下せしむることを得べし。

用量 一回一錠宛一日三回食間に與ふ

包裝 三〇錠入…二圓四〇 一〇〇錠入…六圓八〇



說明書進呈

日本總代理店 東京日本橋區本町 株式會社 田邊元三郎商店



改造二月號目次

一頁辯



■レオトオ綺語……堀口大學

■二十萬圓の補助金

《大同館發行圖書新刊と增刷目錄》

◇原田實氏新譯◇

（ルッソーの『エシール』に次く大名著）

六版

エレンケイ女史原著 兒童の世紀

四六判最上美本 全壹冊五百頁

正價金貳圓五拾錢 送料十八錢

エレンケイ女史の名は今や全く世界的である女史の至純なる戀愛を高調し高尚眞面目なる結婚を主張するは何の故ぞ！！其間に生るゝ兒童を眞の人格者たらしめんが爲である兒童を眞の人格者たらしむるは人類を眞の人類たらしめて幸福と平和と悦びとを此世に齎し生命に輝く世界を創造せんが爲めであるるそして其第一の又最大の準備として女史の主張するものこそ所謂「兒童の世紀」である內容は兒童中の思潮を徹底的に說けるもの譯者は夙に女史の偉大なる思想と人格とに敬服し多年其著者に親炙するもの其敬仰の熱情遂に茲に女史が代表的著作の全譯となる或は淚に濡れ或は力に輝く其原文を移植し得て餘す所なし我が思想界教育界婦人界は本書を得て一の至寶を加へたりと謂つべし。

カント哲學批判 大關增次郎 正價金貳圓 送料十八錢

カント研究（三版） 大關增次郎 七圓八拾錢 送料卅六錢

西洋哲學史講義 高橋敬視著 參圓八拾錢 送料十八錢

高尚な理論平易に講義 哲學概論 市川一郎譯 四圓八拾錢 送料十八錢

教育の基礎たる哲學 吉田熊次郎 市川一郎著 貳圓五拾錢 送料十八錢

タゴール哲學文藝 吉田絃二郎 貳圓五拾錢 送料十八錢

ベルクソンと現代思潮 野村隈畔著 貳圓五拾錢 送料十八錢

オイケンの哲學 稻毛詛風著 壹圓六拾錢 送料十二錢

最新哲學辭典 渡部政盛著 五圓八拾錢 送料廿七錢

源氏物語活釋 前篇 小林榮子著 四圓八拾錢 送料十八錢

源氏物語活釋 後篇 小林榮子著 四圓八拾錢 送料十八錢

大鏡活釋 小林榮子著 貳圓五拾錢 送料十八錢

竹取物語新釋 福永弘志著 壹圓參拾錢 送料十二錢

改訂古事記新釋 植松安著 貳圓五拾錢 送料十八錢

萬葉集古今集新古今集選釋 石川誠著 正價金參圓 送料十八錢

太平記新釋 石田吉貞著 貳圓五拾錢 送料十八錢

現代田園文學新選 古屋利文著 正價金貳圓 送料十二錢

現代詩歌新選 石川誠著 貳圓八拾錢 送料十八錢

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

豫約出版

全部十二册　一ケ年完了

短期締切　至急申込あれ

▼全十二册。毎月一回發刊▼菊判紙裝一册三百五十頁内外▼三月中旬第一巻配布。十六年二月完了▼會費毎月拂金貳圓。全部一時拂貳拾貳圓（郵送本社負擔）▼會員に限り頒布し一部賣りをせず。

社會問題講座

是れ現代生活の指標也。明日の日本を祕めたる思想の大寶庫也。

◆◆◆◆趣旨◆◆◆◆

十九世紀が『我』の自覺時代であつたとすれば、二十世紀は『社會』の發見時代であり、創造時代である。何人も先づ此の講座によつて、現代に生きる資格を得ると共に、歴史の方向を指示する羅針盤を獲得せねばならぬ。

講話目次

總論

◇社會問題總論……安部磯雄

社會思想解說

◇ギルド社會主義……北澤新次郎
◇基督教社會主義……賀川豐彦
◇無政府主義……新居格
◇サンヂカリズム……石川三四郎
◇マルクス派社會主義
　マルキシズム概說……高畠素之
　價値論……櫛田民藏
◇社會思想發達史……波多野鼎
◇日本社會主義史……木村毅

財政學

◇法律と階級鬪爭……平野義太郎
◇治安維持法其他……清瀬一郎
◇財政學概論……大内兵衞

勞働問題

◇日本勞働運動發達史……赤松克麿
◇日本勞働運動の現勢……村島歸之
◇各國勞働運動發達史
◇各國勞働運動の現勢　}　産業勞働調査所
◇勞働組合論……野坂鐵
◇日本の勞働事情……村島歸之
◇國際勞働問題……淺利順四郎
◇インタナショナル發達史……青野季吉

◇教育に於ける國家的と社會的……長谷川如是閑
◇ブルヂョアカルト　プロレツトカルト……平林初之輔
◇各國勞働者教育發達史……服部之總
◇勞働組合と勞働者教育……阪本勝
◇セツルメント……大林宗嗣

社會文藝

◇無産階級文藝論……藤森成吉
◇社會と文藝……菊池寛
◇重農主義藝術論……生田長江
◇社會主義小説解說……木村毅
◇ロシヤ無産階級文學……片上伸
◇上部構造としての近代文藝……平林初之輔

特色一斑

▼學界最高の權威と新進有爲の少壯學者とを悉く網羅して、此の未曾有の大講座が遂に完成した。

▼全體が研究的進歩的であつて而も一黨一派の立場に偏することはない。

▼講話は平易明快を主とし隨時隨所に日本に適切な實例を引き、術語にはそれ〵〵註解を附する。

▼各科すべて歴史と理論と實際問題とを洩らすところなく包含する。

▼大原社會問題研究所・產業勞働調査所・東洋經濟新報社を始め各大學研究室及び各新聞社調査部が特に本講座の爲めに提供せられた貴重な資料や正確な統計を滿載する。

▼毎號一流大家の科外講話及び雜録記事豐富で雜誌的興味横溢してゐる。

社會學

◇社會學概説……高田保馬
◇人間行動の社會學……長谷川如是閑
◇日本社會史……本庄榮治郎
◇社會學史……新明正道
◇社會心理學……市村今朝藏
◇社會倫理學……淡德三郎
◇社會統計學……岡崎文規
◇共同社會と利益社會……波多野鼎

經濟學

◇經濟學概説……安部磯雄
◇經濟學史……久留間鮫造
◇經濟史……石濱知行
◇產業革命史……上田貞次郎
◇世界經濟の大勢……丸岡重堯
◇日本經濟の現勢……高橋龜吉
◇日本資本主義發達史……野呂榮太郎
◇金融論……堀江歸一
◇恐慌論……岩田義道
◇資本主義經濟と社會主義經濟……猪俣津南雄
◇社會政策……小林輝次

政治學

◇明治政治史……吉野作造
◇政治意識と政治機關……長谷川如是閑
◇政治と社會統制……大山郁夫

法律學

◇勞働法制……末弘嚴太郎
◇日本勞働法制史研究……瀧川政次郎

農村問題

◇土地國有論……安部磯雄
◇資本主義と農制問題……河田嗣郎
◇小作制度發達史概論……小野武夫
◇近世農民暴動史論……小野武夫
◇各國農民運動の現勢……河西太一郎
◇日本農民運動の現勢……杉山元治郎
◇農民教育論……賀川豐彦
◇農民と政治運動……莊原達
◇法廷に於ける小作爭議……水谷長三郎
◇社會主義と農民運動……稻村隆一

無產政黨問題

◇普通選擧と無產政黨……安部磯雄
◇無產階級と無產政黨……大山郁夫
◇勞働組合と無產政黨……麻生久
◇各國無產政黨發達史
◇各國無產政黨の現勢……產業勞働調査所
◇農民勞働黨結黨前後……小岩井淨

婦人問題

◇婦人の自覺史……山川菊榮
◇日本の婦人運動……奥むめお
◇婦人參政權問題……市川房枝
◇婦人と勞働……野坂龍子

智識階級問題

◇資本主義社會に於ける智識階級……新居格
◇智識階級と社會運動……麻生久

社會教育

◇教育と社會……森戸辰男

其他諸問題

◇日本の人口問題……高野岩三郎
◇マルサスの人口論……布川靜淵
◇生物學と產兒制限……山本宣治
◇產兒制限の實際方面……馬島僴
◇失業問題……堀江歸一
◇兒童問題……高田愼吾
◇借家爭議の戰術……布施辰治
◇婚姻制度……穗積重遠
◇防貧問題……賀川豐彦
◇消費組合論……岡本利吉
◇勞働保險……岡崎文規
◇社會組織と新聞雜誌……早坂二郎
◇民衆娯樂……權田保之助
◇共產部落の研究……阪本勝
◇階級鬪爭史……西雅雄
◇日本民權史……白柳秀湖
◇水平運動發達史……吉井浩存
◇ロシヤ革命史……富士辰馬
◇支那の社會運動……宮崎龍介
◇英國フェビアン協會發達史……川原次吉郎
◇中流階級論……青野季吉
◇娼婦の研究……村島歸之
◇帝國主義論……猪俣津南雄
◇マルクスの國家論……河野密
◇社會主義と原始宗教……嘉治隆一
◇社會科學に於ける階級性……藤田喜作
◇社會運動家及社會思想家列傳……大宅壯一
◇科外講話……諸名家

倉敷勞働科學研究所編纂

日本社會衛生年鑑 最新版

（最新刊）菊版横組 四百頁 定價參圓 送料十二錢

醫學は其本質に於て一個の社會科學である。しかも從來我國に於ては醫學の有する社會性は等閑視され醫學の立場よりする社會的哲學的考察は微々とし學界に重きをなさなかつた。本年鑑は醫學と他の科學殊に社會科學との融合と協同とによつて附一層社會的研究の勃興と進歩とに貢献せんがために蒐集し編纂されたものであつて醫學に關聯する文化科學及自然科學の貴重なる文献と資料とを悉く網羅し之が大要を紹介してその意義と根據とを檢討し一切の所説主張に綜合と體系とを與へたものである。本年鑑の刊行は醫學の社會的使命に關する劃切なる回答であるのみならずその歴史的發達の過程に於けるエポック・メーキングな事業である。

嘉治隆一著

近代ロシア社會史研究

（最新刊）四六判布裝函入 上製五百頁 定價貳圓八拾錢 送料十二錢

十九世紀の世界はロシアに於いて、最も賴もしい反動勢力をもつてゐた。二十世紀のそれは彼の女に於いて最も勇敢なる革命の先導を見る。ロシアの社會史は何人にとつても見のがすべからざる所である。今や吾國と彼の國の修交成つて兩國の經濟と文化の交渉は密ならざるを得ない。彼の國の社會を知るは、また以て吾國自身の緊急事に備へる所以である。この書は十九世紀の初頭より最近に至るまでのロシアの社會史、資料正確にして叙述明快、史眼透徹せるものがある。敢て愛讀を乞ふ。

發兌 東京神田西紅梅町 同人社 電話大手五五八五 振替東京二七〇六五

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其らしこ先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今日は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつゝ之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね！、驚いたと仰有いました、此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取り上げてお試しになりました「やあこれでは煙草は吸へませんね！」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた」「驚いた」と口々に御賞讃下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸に近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本領を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御讃詞の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を路上に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徵

外見恰も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の弊なく新鮮朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が其有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘味と辛き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を忘れて斷じて再び顧みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中一ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康則して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を全治すべし

日、英、米、專賣特許出願中

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢	（ベークライト製パイプ付）	送料（内地十八錢、臺、朝、樺四十五錢）
金參圓五十錢	（サック入象牙製パイプ付）	送料（内地三十錢、臺、朝、樺五十五錢）

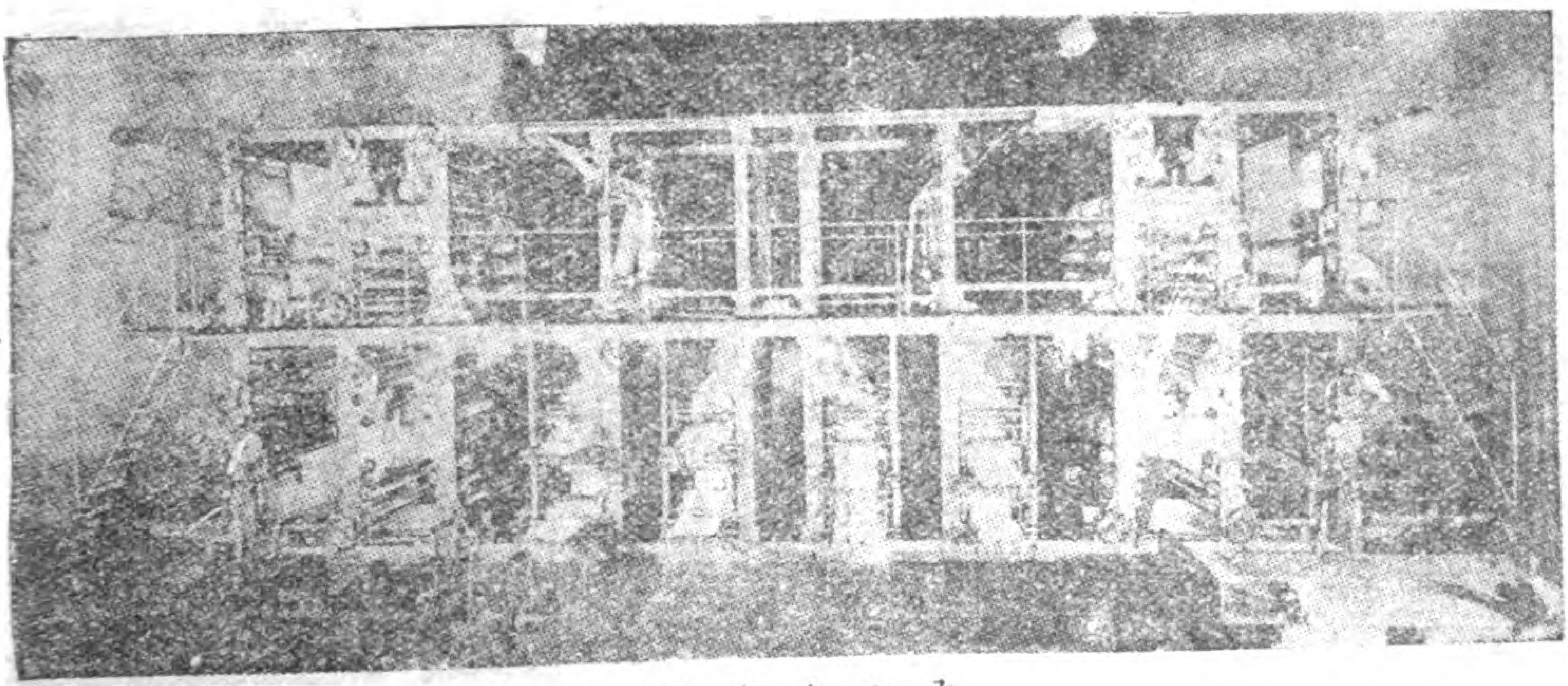
御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては郵券にて御申越次第引替小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二九壹壹

代理店 東京市京橋區瀧山町十三番地 天下堂



ブハリン原著
横田千元
富士辰馬 共譯

（菊判）

定價參圓五十錢
郵送料二十五錢

唯物史觀

本日發賣

勞農政治家中の學者として有名なるブハリン氏の原著である。(一)唯物史觀に關するあらゆる問題を網羅せると(二)難かしき問題を說明するに詩や小說を引用し平易なる文章を以て明晰に記述せると(三)引用豐富にして社會科學及生物學等に關するあらゆる新說を批判せると等は本書の特色で、本書に依つて世界思潮の指導原理たる唯物史觀を容易に且つ徹底的に會得することが出來る。尙ほ世上行はる丶獨逸譯は誤譯脫漏可なりに多く、本書全部の要約とも云ふべき附錄の如き重要なものさへ全く之を脫落してゐる狀態であるが本書は兩譯者が露原文及び獨譯文より譯出の上更に露文によりて嚴密に校訂したもので譯文の正確なるは勿論文體亦平易流暢である。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四二〇番 改造社

京大助教授 大宰施門著

ロマンチック時代

（定價貳圓 送料二十錢）

新刊

文藝の花園、佛蘭西文學史上に、わけても絢爛たる研精の時代、十九世紀前半のロマンチク時代を其社會的背景と共に述べたものである。ラマルチーヌ、ジョルジュ・サンド、バルザック等が如何に此時代に生き、如何に其作品を完成したか。著者はロマンチクの名を負ふて立つ本邦唯一の權威者、本書は佛文學の本質にふれ、ロマンチクの諸相を細敍す、ロマンチクを概念的に抱懷する者、或は個々片々たる飜譯によつて佛文學作品を讀みたる者、若し本書を看過せば永遠に暗愚の暗に閉さるべし。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

松崎實編

（四六判 上製） 定價參圓 郵送料廿二錢

校註 切支丹鮮血遺書

改訂版

鮮血遺書はクラッセの日本敎史と竝び稱せられる切支丹文献中有數の名著。而も久しく世に埋れてゐたが、嘗て内田魯庵氏「バクの舌」中に該書を紹介して、讀んで聖書よりも深き感動を與へられたりと推賞し、また吉野作造博士その「主張と閑談」中に本書の價値を紹介推賞するあり、近年一躍世に現れたが、何分明治二十年代の古版なり、また多少史實的價値を缺く憾あり、こゝに「切支丹殉敎記」の著者が歴史的考證其他必要なる註釋を附して新裝以て世に公けにす。往古日本基督敎徒の眞生活、世界未曾有の大迫害に對する壯烈哀絶を極めし聖徒殉敎の顛末が、劇よりも面白く繪よりも麗しく展開されてある。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

瀧本誠一編

佐藤信淵家學全集（上卷）

（最新刊）

菊判九八〇頁	背革製函入
定價七圓五拾錢	送料書留卅六錢

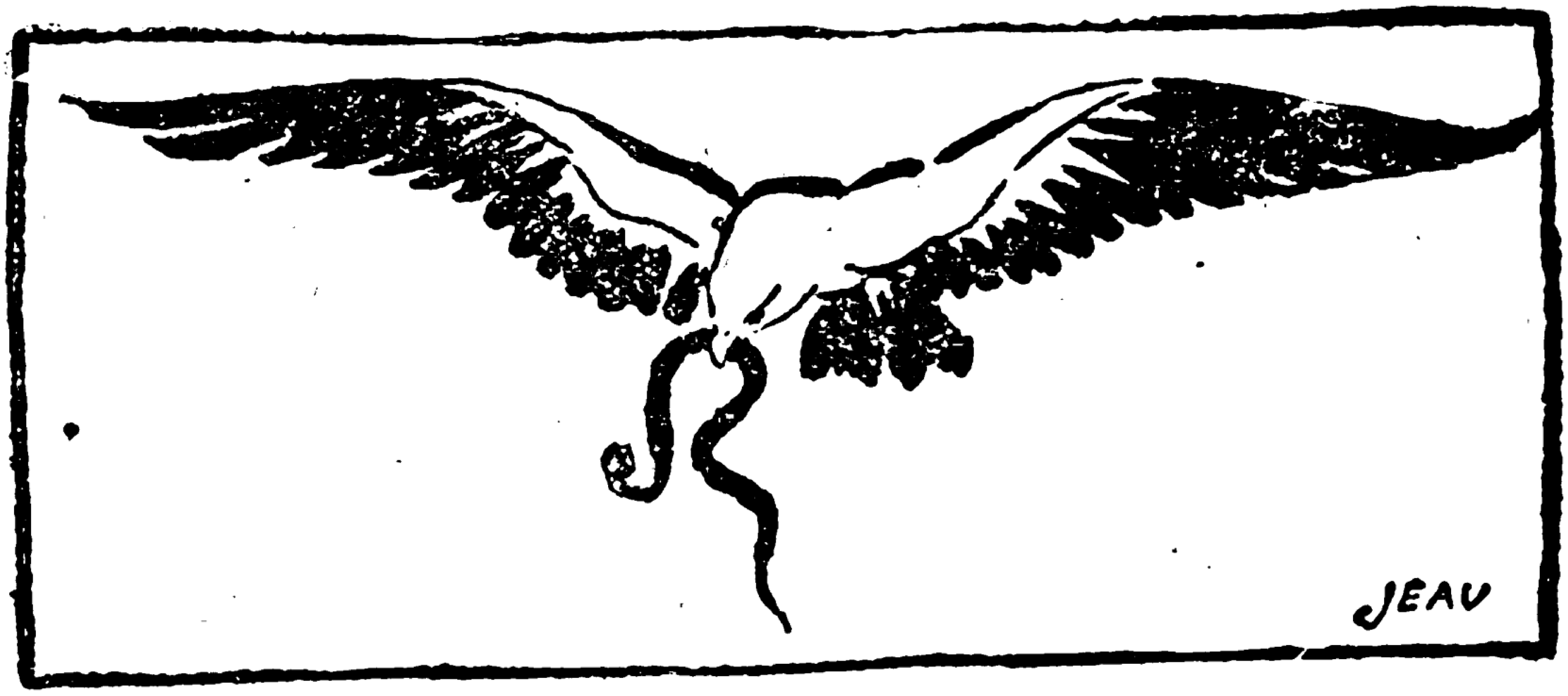
本全集は徳川時代の大經濟學者佐藤信淵及び其父祖の著書中、經濟學に關する總ての著作を網羅して系統的に編纂したるもので、其中には三四十年前に出版せられたるも今は既に絶版となりたるもの、又は未だ曾て出版されなかつたもので寫本としても容易に得難き希覯本など悉く收容されてある。信淵の學識は甚だ多方面的で、而かも斬新奇拔の思想に富み、農學に於いては實に驚くべき科學的の知識を表はし、社會經濟學說に於ても亦最も進んだ卓見を有して居る。例へば彼が所謂垂統法の如き實に極端なる國家社會主義を具體的に論述したもので、當時腐敗を極めたる德川政府の組織を社會主義的に變革せんとした大膽な意見など最も見るべきものの一である。

本集編纂の方は、先づ佐藤家學の始祖元庵の著作より信淵の父玄明窩の著作を收錄して家學の傳統を明にし、信淵の農學及び經濟學の根本思想を述べたものの數部を收めて上卷とし、次に主として社會經濟學に關する著作、就中彼が得意とする社會的の大抱負を論じたる諸作、外數部を收めて中卷とし、終りの下卷には農政及び其他の科學的著作を始め種々の重要なる雜著を收容したものである。

編者瀧本博士は本集の編纂に就ては多年非常の苦心を爲して原本の蒐集對校に努力せられ佐藤家の學說を廣く世上に紹介した篤學者で、故織田完之氏の遺書中、信淵關係の著作は悉く借覽檢討して遺す所なく、又信淵の保護者であつた伊達侯爵家の文庫、秋田市立圖書館並に西馬音內町信淵文庫其他信淵の舊門人等の家など洽く搜索して、迭書又は善寫本の蒐集に努め、終に此の全集を完成されたのである。

内容　第一、氣候審驗錄（信行）。第二、十字號糞培例（信行）。第三、土性辨（信景）。第四、山相秘錄（信景）。第五、堤防溝洫志（信季）。第六、培養秘錄（信季）。第七、漁村維持法（信淵）。第八、天柱記（信淵）。第九、鎔造化育論（信淵）。第十、坑場法律（信淵）。第十一、經濟要錄全四卷（信淵）。第十二、開國要論（信淵）。

發兌　東京神田南神保町　岩波書店　振替東京二六二四〇番　電話四谷五八七〇番



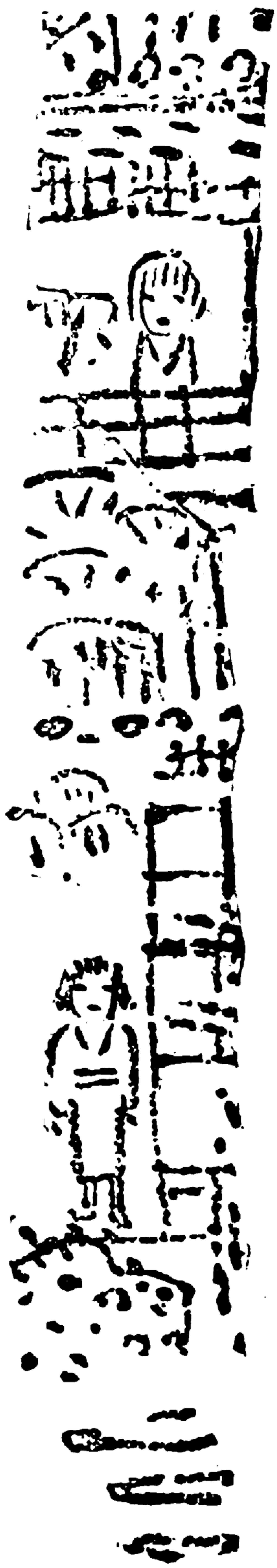
（二月號）

解散と舊勢力・新興勢力

今期議會の解散は必然だ。之を回避せしむべき變則に出でてはならぬ。政本黨が解散回避の爲めに憲政に苟合し、又其一部が政友に秋波を送りつつあるのは、政府が税整その他の重要案件で政本の顏色を見つつ逡巡躊躇の狀と好一對の醜態である。政然として自信を大衆に問ふの堂々の陣なく、糊塗一日を職ふせんとするの陋態唾棄すべきだ。

解散が必然とすれば我大衆はふだんの解散に對すると餘程違つた意味で選擧に對應すべきである。今回は人物本位より所屬本位であるべきである。所屬本位と云つても既成政黨ならばどちらでもよし、政策、主張に於て五十步百步のみであれば、ただ意味深き三分の二以上の新選擧權獲得者が、依然として既成政黨の人々を代表として選擧するが如きことあらば、折角の普選による民衆の期待も、議會の空氣も何等の生色を見られないであらうと共に、結果は依然として舊勢力の延長に了つてしまふ。我々は此際は總ての面目を一新する意味に於て、そして今回の普選を意義づける意味に於て現存の各代議士が後進の進路を開く爲に、全部今回の立候補を遠慮し、新しき氣鋭の徒のみを擧ぐるやうにしたらばそこに國政悉く革まり、溌剌たる政治が見られ、興國興民の生々した血の色が久しぶりに國内隈なく湧き返るであらうとこを期待する。

我々は繰返す、今回の總選擧には斷乎として幾多の、そして積年の宿弊を打破し、金權官僚候補を葬り、一面には陣痛久しきに亘る新興政黨の大を成さしむる爲めに、大同團結し、萬難を排して戰ふ準備をすべきだ。でなかつたとしたら我々が血と汗とを以つて獲得した三分二以上の新選擧權も依然として憲政——政本の勢力爭ひの道具に了り、そして舊勢力の延長として無意義に終つてしまふ。左翼、右翼、ボル等は共同戰線の下に特權階級に對立するであらうと期待せられたが、その對立せんとする正面の敵よりも内輪の軋轢にいよりヘビーをかけてをるのはどうした譯か。今回の總選擧はかかる形勢下に新興階級が未だ延びず、蛟龍永遠に池中の者にあらざるかを疑ふるものである。



學生と政治

——我國學校教育の階級性とその矯正としての社會科學運動——

森戸辰男

一

今から約二十年前、私がまだ一高の學生であつた時のことだ。當時先輩であつたところの前田多門氏の、たしか『公民としての學生』といふ演説を聞いて非常に感動したことを、私は今でも記憶してゐる。その要領は、大凡、次のやうなものであつたやうに思ふ。封建時代には日常生活の羈絆から解放されて專心文武の道を研究し得る一階級、即ち武士なるものがあつて、當時の道德的水準を引き上げてゐた。然るに、現代においては時代の頽廢を阻止し、之に道德的基調

を與へて行くべき何等の階級も存在してゐない。しかし、唯、ここに現代には一團の青年大衆がある。彼等は、大體、實生活における利害鬪爭の上に立つて、專心研學と修養とに沒頭し得る境遇にある。若し、この一團にして眞に覺醒するならば、彼等は恐らく嘗ての武士階級のやうに、時代の頽廢に抗して之に道德的基調を與へて行くことはできはしまいか。この青年大衆こそ吾々學生であり、そしてこの道德を昔の武士道に因んで『學生道』と呼ぶことができよう、と。

この內面的目醒めと『學生道』との强調は當時の學生──少くとも一部進步的學生の間に非常な感動を惹起したものである。さうしてそれは理由あることであつた。といふのは、丁度、當時一高には新渡戶先生が校長として來られて間もない頃であつた。そして一方ではその新校長の感化の下に、他方ではそれより先きに、魚住、安倍等の諸先輩によつて始められた所謂『校風』に對する個人主義的鬪爭の影響の下に吾々は toko 黨と todo 黨とに分れて切りに議論を戰はしたものだ。toko とは內的教養の高調者であり、todo 黨とは外的活動の力說者である。ところで、この教養主義と活動主義との二潮流の爭ひは、少くとも進步的學生の間では、大體教養派の方に旗色がよかつたかの如くであつた。即ち、吾々は學生時代を以て、官界、政治界における活躍や實業界における成功の準備期と見ることをやめて、一個の人間としての人格の建設、教養の充實といふことに注意を轉向するに至つた。そしてそれにはまた次の事情が作用したのであつた。

一方、吾々はもはや「アムール河の流血」をうたふた征露の歌や「あはれ祖國の柏葉旗、その旗の下我死なん」といつたジヨオギニステイツクな寮歌で、帝國主義的陶醉に從ふには餘りに多く目醒めて來た。と同時に他方に於て、日露戰後の當時は、我國の政治が資本主義の確立に伴うてその保守的な、そしてまた俗惡的な性質を漸く暴露し初めた時であ

る、換言すれば、明治維新の理想的革新的色調が政治から全然その影を匿した時である。從つて、神田あたりにおいては、未だなほ傳統的に多くの學生の興味を惹きつつあつた所謂政治は、も早向陵の吾々の間には顧みられることが極めて少くなつたのである。吾々は所謂政治家の經綸よりもトルストイヤンの徳富蘆花氏や、宗教的に轉化した木下尚江氏の非政治的所説を好んで傾聽したものである。一高の辯論部がかなりの歴史を持つてゐた擬國會を一時やめることにしたのも恐らく氏の當時であつたかと思ふ。此の政治的模擬戰の廢止はたしかに學生間における反政治的傾向の一つの象徴であつた。要するに、當時における一部進歩的學生の思潮は政治からの離反であつたやうに見える。さうして、この反政治的傾向は、積極的には内面的教養への轉向であり、それぞれ宗教、哲學、藝術等の諸方面へと向つたやうである。いづれにせよ、それは當時の學生思潮における一大躍進であつた。勿論、これは私が在學してゐた前後の一高における進歩的學生間の風潮であつたに留つて、素より一般學生の傾向と云ふべきものではなかつた。が、しかし、この傾向は其後に至つて程度の差こそあれ、漸次諸方の學生の間に擴がり行いたかに私は記憶してゐる。

それから十數年ほど立つた大正七八年頃である――私はも早學生ではなかつたが――一部の進歩的學生の間に、更に新しい傾向が現はれて來た彼等はも早在來の所謂、内的教養に飽足らなくなつた。彼等は勿論内的發養を現したのではない。しかし彼等は漸く、個人とその人格とが社會的に制約されてゐることに氣づいて來た。從つて、彼等は、彼等の悩みつつある個人的、内面的の諸問題の多くが社會から切り離して解決し得るものでないことがわかつた。と同時に、彼等の周圍には彼等の後生大事に考へてゐた所謂内的の問題よりもつと眞劍な、もつと緊切な問題が彼等の助力を待ちつつあることをも發見したのである。勿論、これは彼等が個人的沈潜の結果、案出したのではなかつた。世界戰爭の事實、それに續いたロシア革命、ドイツ革命の事實が、そしてまた我國におけるデモクラシイ運動と勞働運動勃興の事實

が、彼等に新なる反省と考へ直しとを要求したからであつた。それはともかく、斯様にして彼等の關心の重點は個人的から社會的、內的省察から社會的考察へ、そして人格の修養から社會革新の運動へと轉向したのである。

人々は新人會、建設者同盟、曉民會等より最近の『社會科學』運動に至るまでの一聯の學生運動を想起するであらう。彼等の中心興味は最早個人主義的な內觀や教養や自己の擴張や人格の建設ではない、それは社會科學的眞理の探求と革新的熱意の涵養とに向ひ、或は、直接、勞働運動に參加するにさへもあつた。今日我國の勞働運動の實際的又思想的指導者の中には少からず當時學生であつた人々あることを忘れてはならない　併し、この運動は、それが所謂內面的省察から社會的考察と外面的活動への轉向ではあつたけれども、そのデモクラシイにも拘らず、未だ大體においては、一通俗の意味で反政治的であつたと云ひ得ると思ふ。彼等の多くは無意識的に又は意識的に——彼等は思想的にヨリ多くシンヂカリズムの影響の下にあつた——所謂政治とは沒交渉であつたのである。

ところが、極めて最近に至つて、一部進歩的學生の思潮は三轉し、彼等の間に政治的興味が再び復活しつつあるかのやうに見える。嘗て、明治革新に續く時代におけるやうに、學生と政治とが再び結び付かうとしてゐるのである內面的時代を經過した後のこの政治的興味が、單なる外面的活動への復歸であり得ないのは勿論であるが。この學生と政治との結合は抑も何に由來するものであるか、それはまた、何を意味するものであるか。このことを、私は進んで考へて見たいのである。

二

先づ第一に、一部學生の間に最近かやうに政治的關心が復活して來たのは、どうしたわけであるか。

以上の言ふところを以てすれば、この新たなる現象の原因をこれを學生社會の内部に求めることはむづかしいやうである。一般的に言へば、學生は經濟的にも思想的にも生産者ではない。彼等は經濟的にも目的的にも社會の將を斷つてゐるのだ。それかと言つて、彼等はもちろん社會における權力的地位にある寄生階級でもない。して見れば、社會的に重要な意義を持つ思想乃至運動が斯樣な依屬的な過渡的な集團に根源するであらうことは到底想像し難い。從つて、學生界の思潮の新しい轉化は、大概、之に先行する社會的變化の影響の下に行はれるものと考へてよいのである。

併し、それがために、學生の思潮乃至運動の存在の意義がなくなるわけではない。學生はその若々しい心持、その理想に直進する純情のために、更に、直接生活上の利益鬪爭の渦中に立つてゐないために、外界から來た影響を醇化して、之を純眞な生一本な形で、場合によつては往々餘りにローマンチックな、ナイーヴな、又、センテイメンタルな形で、反映するのである。そして學生運動の強味と弱味とは、その社會的貢獻と躓の石とは共にこの點に存するが如くである。

ところで、既に社會的への道を辿つてゐた進歩的學生の思潮が、最近、更に政治的色彩を加へるやうになつたのは何が故であるか。此の新なる轉化が今春議會を通過した普選法と密接な關係があることは餘り多くの說明を要しない所であらう。

しかしながら、普選なるものが、三百萬人を千二百萬人といふ風に單に選擧權者が數の上で增加しただけのことで、其他の萬事が舊來通りに進み行くものであるとするならば、この事實は少くとも進歩的學生の興味をそれに惹きつけることは到底できなかつたであらう。實際において、普選は有權者の數量上の增加を齎すばかりではないそれとともに必然に、性質上の變化を結果する、即ち、之によつて政治の世界に新なる要素が惹き入れられるのである。普選の實施は、

治維法の脅威にも拘らず、農民勞働黨の解散にも拘らず、プロレタリアの政治的活動の機會を與へ、そしてプロレタリアは此の機會を攫むの決意を以て政治の舞台に乘り出し、茲に階級闘爭が現實に政治的形態を採らんとしてゐるのである。このプロレタリアの政治的圏内への進出によつて、初めて我國の政治に——沈滯し、腐敗し、頽廢してゐた我國の政治に、新生面が開かれる機運が到來したのである。即ち政治が、階級的政治戰の機構によつて、全人格的意義を持つに到つたのである。この機運の到來こそ、現在、一部學生の間に政治が再び強い興味を呼び起しつつある重要なる一原因である、と私は考へてゐる。

三

それでは進んで、かやうにして生じた學生と政治との接近は果して喜ぶべき現象であるであらうか。

我國の當局者や多くの教育家はこれまで學生と政治との接近を好まなかつた。否、彼等はこれら兩者を絶對に隔離しようとさへ試み來つたのである。その理由を推測して見ると、根本的には次の二つのものに歸着するかと思ふ。先づ第一に、學生が實際政治に接觸することは彼等の人格の陶冶に有害である。政治は黨利の爭奪戰であり、それは屢々陋劣極まる手段によつてさへ戰はれる。青年學徒の理想に對する接近は此の如き卑俗なる現實によつて穢されてはならない、といふ。さうして第二に、政治に對する興味は學問的興味と相容れない。政治的興味の增進は、それだけ學問的研究の閑却を意味する。政治的興味は學問的研究に何等の刺戟を與へないのみならず、之に對して捧げらるべき興趣と勢力と時間とを奪ひ去るものである。それ故に、品性の陶冶と學問の修得とを本務とする學生は此の如き政治に近づくべきではない。教育は、學生は、政治的黨爭の彼方に立つ中立不可侵の區域でなければならぬ、と彼等は主張するのであ

る。

四

そこで吾々は考へて見る必要がある。一體この學生と、從つてまた教育と政治との絶緣は、當局や多くの教育家たちが主張し且つ信じてゐる通りに、眞實に實行されてゐるものかどうか。又、實際上、これは實行のでき得ることであるかどうか、といふことを。

今日の學校教育が、例へば憲政會とか、政友會とかいふやうな、個々のブルジョア諸黨の黨爭に對して中立であることとは大體承認してよからう。これはさうして置く方が何時かは野に下らなければならぬ運命にある各政黨自身の立場から見ても、却つて利益なのである。それはともかく、この意味においては我國における今日の學校教育はたしかに政治的に中立であり、從つてまた非政治的であると云ひ得るであらう。

斯様にして、我國のこれまでの事情からすると、政治的中立と云へば、直ちに、ブルジョア諸黨間の政爭からの中立を意味するにほかならないやうに考へられがちであつたのである。併し、今日においては政治といふことはブルジョア諸黨間の政爭以上にもつと根本的な意味を持つて來てゐるのである。例へば、過般不完全ながらにも出來上つた無產政黨は成立後數時間にして、極めてあいまいなる抽象的理由によつて解散を命ぜられるに至つたのは人々の記憶に新なるところであるが、其際、有力なる既成政黨の領袖は、在野黨と政府黨とを問はず、異口同音に政府の處置に贊意を表したのであつた。中には、それを現政府の唯一のお手柄であると稱贊した反對黨の領袖さへもあつた。之によつて見れば、無產政黨の解散はブルジョア諸黨の政爭の重要問題とならないにきまつてゐる。併し、この問題がブルジョア諸黨

の政爭の對象とならぬといふことは、それが政治的でないといふことではない。否、此の如きブルジョア諸政黨の共同的戰線の故に、この問題は一層深刻な政治的意味を持つて來るのである。即ち、ブルジョア諸黨の黨派爭ひに對する態度の決定はもちろん政治的であるであらうが、これらブルジョア諸黨の共通の主張であるところのブルジョア政治組織に對する態度の決定も亦、ヨリ根本的な意味において、政治的である。ブルジョア制度を支持するか、之れに對して批評的な立場に立つか、これは一つの重要な政治的態度である。政治をかくの如き意味に解した場合に、我國の學校教育は果して政治的中立を守つてゐると言ひ得るか。

私の見る所を以てすれば、此の第二の意味に於いては、我國の學校教育は極端に政治的であり、學生を一定の政治的見解に結び付けやうとする組織的努力であるかの如くである。これ單なる私の一個人の私見ではなく、今日では當局者も亦さう考へてゐるらしい。何となれば、過般、解散せられた農民勞働黨の綱領中、當局の不穩當なものとして指摘した項目の一つに「資本主義教育の撤廢」といふのがあつたと思ふ。これから推すと、我當局者は我國の教育が資本主義的であることを頭から承認し、且つ之を正當なものとして擁護しようとしてゐるが如くである。けれども、この事實は我國の學校教育が久しく單一なる政治的見解の獨占的な舞臺であつたために、却つて多くの注意を惹かなかつたのである。ところが、一度、學校教育の何づれかの部分にこの公認の政治的見解と異る見解思想が發生するやその正體がまざ〱と暴露されざるを得なかつたである。

例へば、近頃、學生間の社會科學運動は、正當にか不當にか、ともかくこの公認された政治的見解と異なる見解を本ずるものと見做された。その結果はどうであつたかといふと、文部當局と一部の警察官權とは相呼應じて、正統的見解の擁護のために異端思想撲滅のために劃策し始めたのである。諸專門高等學校に於ける社會科學研究會の解散や某々校

に於ける異端文書の燒棄や、異端學生の處罰や放校やから、最近の京都事件に至るまでの一聯の事件を想起するがよい。これらは人をしてローマ舊教の異端糺問所や徳川幕府の切支丹の迫害の復興をさへ想はせるものがあるではないか。

それだけではない、動搖しようとする正統的政治見解の危急を救ふために一團の援軍が――文字通のサーベルを吊した援軍が派遣せられた。私は人々の熟知する軍事教育を意味するのである。軍事教育の强調する團體訓練の何物であるかは私は既に他の機會に【拙著『思想と鬪爭』】之を述べたことがあるから、再び此處に之を繰返す必要はないと思ふ。けれども、軍事教育は當局者の說明によると、『團體訓練』のほかになほ學生の『精神教育』にも資するといふことであつた。私は多くの人々と共に、特にこの『精神教育』の何物であるかに就いて多くの疑念を持つてゐた。さなくとも所謂「精神教育」の喰過ぎで中毒症にかゝつてゐる今日の學生に、またしても施される清新な「精神教育」は果して如何なるものであらうかと。吾々は好奇心を以てその正體を知りたがつたのである。丁度その矢先、甚だ率直な一軍事教官は、當然腹の底へ藏して置くべきで、精神教育の虎の卷を公然と社會に發表し了つたのである。吾々軍事教育の批判者は決してこの一教官を責めるものではない。むしろ、その大膽と率直とを喜ぶものである。吾々の敵とするものは軍人的に正直な一教官でなくて小樽事件によつて片鱗を曝はした軍事教育の魂であるところの「精神教育」其者である。それはともかく軍事教育によつて導き入れられた新しい「精神教育」が動搖しかけた公認政治觀に對する最後の援兵であることは疑ふべからざる事實であらう。

要するにこれらの事實的によつても明かであるやうに、今日の學校教育は一定の政治的見解を學生に鼓吹し、之れと異る一切の政治的見解から學生を遠ざけやうとするものであつて決して非政治的でもなく、政治的中立でもないのである。否、それは明白に政治的である。尤も、繰返し言ふやうに、學校教育は憲政會や政友會や本黨やの特殊的政見に對

しては中立的である。併し、これらブルジョア諸黨に共通する政治的見解、即ち、ブルジョアジイの政治的立場に對しては決して中立的ではない。明白に政治的であり、黨派的である。

吾々はブルジョア諸黨間の政爭に對する政治的中立を、階級對階級の闘爭における政治的中立と混同するの愚をなしてはならぬ。

五

かやうに考へて見ると、當局者や多數教育者によつて主張されてゐる教育と政治との分離は極めて皮相の見であり、また屢々瞞着でさへもあると云へよう。彼等は非政治的を標榜しつつ、或は信じつつ、學生に一定の政治的見地に導き入れつつあるのである。

併し、これらの人々の傍らに、彼等と違つて誠實に一切の政治的闘爭と絶縁した非政治的教育、黨爭の彼方に立つ人間的教育を主張するところの、少數ではあるが眞面目な尊敬すべき教育家のあることを、私は無視せんとするものではない。彼等の非政治的態度は決して中途半把や瞞着ではなくて、徹底的であり眞摯である。

そこで、吾々の考ふべきは次のことである。一體、現在のやうな階級社會の上で階級的ならざる、従つてまた根本的意味において政治的ならざる教育が行はれ得るであらうか。教育も亦社會の上層建築の一つである限り、それはその土台であるところの社會の階級的勢力關係によつて決定されずにゐることができるであらうか。

アプトン・シンクレーアは彼の米國教育制度論において、アメリカの教育が如何に經濟的に階級的に決定されてゐるかを、彼の才筆を以て――しかし確實なる事實に基づいて――巧みに描いてゐる。米國の教育制度が如何にモルガン財

閥の王國の一部を形成してゐるかを、彼は次のやうに書いてゐる。

「アメリカには現在モルガン自身が一生評議員であり、彼の養子、彼の代辯人及彼れの銀行家の數人のものが評議員である有力なる大學（コロンビア大學のこと）が經營にある。この大學の總長はモルガンの生命保險會社の一取締役であり、そして彼はモルガンの牧師、モルガンの醫者、モルガンの新聞と結托してゐる。若し、この大學總長が著述を公けにして、米國民に對して財閥の善良にして溫順なる被傭者たれと敎へるならば、此の書物はモルガン又はその仲間が取締役である出版屋によつて發刊され、その紙はモルガン取締役である國際製紙會社から購買せられる。若し、或人がその紙の製造せられる都市を訪づれるならば、同市の學校監督部の部長は該地方の銀行の一重役であることを發見するであらう。さうして其銀行はその基金を低利でモルガンのガランティイ信托會社に預け、モルガンは之を高利で他へ貸付ける。該地方における學校の視學はモルガン大學の卒業生であり、彼はモルガン大學の師範部長の推薦によるものである。學校監督部員、部長及、視學はいづれもモルガン大學總長が取締役である生命保險會社に加入し、學校の敎科書にはモルガン大學の師範部長の著したものを採用する。その書物はモルガンの大學總長の創設にかかる敎育雜誌やモルガンの新聞紙上に賞讃せられる。視學はモルガンの大學の夏期講習會に列席する敎員を昇進させ、その中學生に該大學に入學することを奬勵する。彼は一年に一回、全國敎育協會の總會に出席し、その役員にはモルガン大學の卒業生、モルガン敎會員、モルガンの新聞愛讀者、モルガンの大學總長の敎育雜誌關係者、若くは彼の生命保險加入者、モルガンの銀行預金者を選擧する。そして、若しモルガンが理事であるところの共和黨が彼の大學總長を副大統領として推薦すると、モルガンの牧師は之を祝福し、モルガンの新聞は之を應援し、モルガンの學校視學はモルガンの候補者の選擧演說を吹き込んだ蓄音機を聞くために學校の生徒のピクニックを開催し、モルガンの

大學總長が重役である生命保險會社の資金から支拂はれたレモン水を呑む。」【大原パンフレット北澤新次郎著社會批評家としてのアプトン・シンクレヤ五一—六頁】

かく、吾々は生徒の聽かされる餘興蓄音機の響きや、一杯のレモン水にまでもしかと喰ひ込んでゐる米國財閥の勢力を窺ひ知ることができるのであるが、しかし吾々は必ずしもシンクレアがコーラスのやうに繰返してゐるモルガンの名前に拘泥する必要はない。之れに幾らかの他の名前を置きかへることによつて、更に適切には、一個人の代りに一階級を置換へることによつて、これが他の國々の教育制度の批評としても、多かれ、少かれ妥當でないと誰が言ひ切ることが出來るであらうか。

今日の階級社會にあつては、社會の發展は壓迫と搾取との上に立つ現存制度を擁護しようとする運動と、之れを克服しようとする運動との間の爭鬪によつて行はれるのである。貧乏と悲慘と不正と暴力とを人類社會から絶滅又は抑止しようとする努力と、少數者と安樂と幸福とのために、いつでもこれらの諸害惡を民衆の間に維持して置かうとする努力とが、現に鬪爭してゐるのである。ブルジョアジイとプロレタリアートとの政治的鬪爭の歸趨は實にこの點に存してゐると言はれてゐる。ここに行はれてゐるものは、人類進歩を促進しようとする黨派と之を阻止しようとする黨派との間の黨爭である。新しき社會のために新しき人間を育て上げようとする眞實の教育者は、この鬪爭に對してよく無關心であり得るか。政治的中立の看板にかくれて、この鬪爭に超然たる態度を採り得るか。若しさうだとすれば、此の如き中立的人道教育は、その中立の名に捉はれて、自分の追求してゐる人道的目標を實現しようとする現實な努力から自ら逃避するものと云はねばならぬ。それは自ら自らを殺すことにほかならないのである。

要するに、政治を卑近な意味に解して之をブルジョア諸黨間の政爭と同視しない限り、換言すれば、政治を階級鬪爭

は斷職してもつと根本的意味に解する限り、教育の、從つて學生の、政治からの中立は惡意の虚僞でなければ善意のユートピアである。學生は彼等が之を意識してゐるか無意識でゐるかは別として、彼等は現實に、階級鬪爭の意味で考へられた政治と相面接して立つてゐるのである。

六

併し、この教育の階級性による學生と政治との接觸に對しては、當局者や多くの教育家は強いてその目を蔽うてゐる。さうして彼等はその注意を卑近なる實際政治と教育並に學生との關係に集中し、單にこの方面からのみ政治と學生との絕緣を高調してそれで滿足してゐる次第である。併し、私はこの點に關する彼等の主張に相當の理由の存することを承認するにやぶさかではない。

第一に、これらの論者が指摘してゐるやうに、現代の政治は屡々學生の純眞なる理想的努力を鈍ぶらせ濁らせ、彼等の所謂人格的陶冶に恐るべき影響を及ぼすことがあり得るのである。過般、大阪の新聞は數年間大阪市政の牛耳を執り、ザコバ大盡と歌はれて飛ぶ鳥も落す勢であつたといふ前市會議員のことに關して色々な記事を掲げてゐた。それらを綜合すると、彼は時の司法官權や警察官權の一部と巧みに連絡をとつて、傍若無人の横暴をやり來つたかの如くである。姑らく新聞記事を信頼すれば、嘗て或人が「夜の大阪」といふ雜誌に彼の醜惡暴狀を摘したところが、市内の某警察署の高等主任から下のやうな意味の注意的書狀を受取つたといふ。「冠略、兄の稿にたれる某氏の記事は餘り摘發せぬ方が却つて兄のためだと思ふ（中略）彼の暴狀は兄の想像する以上のものだが、不幸にしてこれは檢擧する職權を與へられながら、檢擧することができないのだ。よし萬難を排して檢擧

じたとて、司法において起訴しなければ、俺達の苦心は水の泡だからな（中略）誠を覺悟したところで、前記の次第なら致し方あるまい。（下略）」【大每夕刊　大正十四年十月十七日―二十六日】手紙の眞僞はともかく、新聞に傳へられた彼の行動は彼が警察及び司法官權の或者と何等かの關係に立つて居り、それを利用して存分な我儘を倆いたことを想像せしめるし、現にそれは或部分、實際上にも證據立てられてゐるのである。そして、更に吾々の聞かれる事實は、彼の降々たる勢力の主要な根源が湯水のやうに蕩盡した彼の數百萬の金に存してゐたことである。大阪の市政は數年間この金力によつて著しく影響されてゐたのである。幸か不幸か、彼の經濟的地盤に狂ひが來、剩さへ蕩盡した金に法律上の問題を惹起する底のものがあつたために、彼の勢力はもろくも蹉跌したのであるが、若し彼の經濟が行詰らず、また彼の金の出所が適法なものであつたならば、大阪の市政は引續き彼の金力獨裁によつて動かれてゐたかも知れないのである。

私がこのザコバ大盡の勢力の消長をここに引例したのは決して三面記事的興味からではない。大阪は資本主義的日本中で最も資本主義化した大都會である。從つて大阪市の政界の出來事は單なる一地方政界の出來事たに留まらず、實に、資本主義的日本の政治を象徵するものと考へ得る理由があるからである。勿論、この大阪における金權の横暴は、それが丁度夫の小樽事件におけるやうに、極めて露骨に、不用意な形で行はれたために、そのふしだらな醜態が吾々の眼前で展開されたのである。同時にこのために、それは比較的害毒の少ない種類のものでもあつたが。併し金權政治がいつもしかく粗朴な不用意な形で行はれるものと想像してはならない。それはもつと巧妙な、もつと複雜な形において行はれるものであり、そして我國の中央政治の中にも與深く喰込み、金權病の悪疾が既に膏肓に入つてゐるかの如くである。これは吾々の如き政治の門外漢にはその實否がわからぬのであるが、少くも政界の酸い甘いを十分經驗した二人の老政治家―その操守と清節とにおいて多くの人々の尊敬を受け來つたところの二人の政治家が吾々に之を確言して

ゐるのである。

尾崎學堂氏はその近業の「政治讀本」の本に次の如く書いてゐる、「武力の專橫に對して權利の要求が起り、遂に立憲制度を確立してその目的を達し得た。然るに…立憲政治は動もすれば財閥政治に墮落し易いのである。現に我國の如きは既にその大患に罹つてゐる。而して武力の專橫は外科的病患に類し、金力の專橫は內臟の病患に均しい。國民の疾苦は果して何づれが多いかはつきり分らないが、危險性はむしろ後者の方に多いやうだ。」尾崎氏は語を續けて言ふ「權利の要求に由つて僅かに武力の專橫を免れた所の普通人民は、忽ち金力專制時代に遭遇して、前門の豺狼未だ去らざるに獅虎を後門に迎ふるの悲劇を體驗するに至つた。見よ。內亂外寇ある度ごとに一般人民は屍を戰場に曝す上に、尙ほ租稅は增加の慘苦を甞めてゐるのに、所謂る實業家なるものは、國難に乘じて一攫千金の不當利得を壟斷してゐるではないか。凡そ本邦屈指の大富豪にして戰爭成金ならざるものはない。同胞の死屍と流血とを資本として巨利を博するほど、不仁不義な所業はないが、彼等は此の不仁不義を行つた結果として、多くは貴族に叙せられ、高く自ら標榜して皇室の藩屛萬民の儀表と稱してゐる。加之ならず、彼等は亦金力に由つて政黨を頤使し、新聞紙を惡用し、政治家を籠絡し、以て國家內外の大問題を擧げて悉く射利の具に供せんとする毒計をも施すのである」と。〔尾崎行雄、政治讀本、一三三―一三五頁〕これは勝手な惡罵や無責任な氣焰を擧げて快とするものと考へられてゐる所謂プロレタリア批評家の言ではない。數十年我政界を往來して政界の消息に通じた責任ある立憲政治家の言葉であることを記憶して貰ひたい。

更に、吾々は他の老政治家からヨリ悲壯な告白を聞くのである。今春における革新俱樂部前の政友會と、之に續く犬養木堂氏の引退は我國政界の一悲劇であつたが、その節、彼はその聲明書の中に次のやうに云うてゐる、

「現代において一黨の黨首となる第一の要件は金力なり。我輩の如き貧乏人の得て耐え得るところにあらず。吾人同

志が立候補をなすに難く、又た屢々最後の一戰において敗る事は、實に金力に乏しきためのみ。金力なくして黨首たる徒らに同志をして苦境に陷らしむるに過ぎず。今や我輩は之を忍ぶを得ざるに至れり。故に同志をして安堵せしむべく、政友會との合同に應ぜるなり。」

即ち、彼は政界に馳驅すること三十年、初めて政治の世界においては主義と清節とが遂に金權の敵でないことを確かめ得たのである。この聲明は主義と清節とに立つ一老政治家の白鳥の歌であるばかりではない、同時にそれは主義と清節に立たうとするブルジョア政治の白鳥の歌である。現代においてはいくら憲政の神様でも、貧乏神であつては、政界の詣者がなくなつたのである。之に反して、それが憲政の賊であらうと、官僚であらうと、軍閥であらうと、黄金の槌さへ持つてゐれば、其處に政界の勢力は自ら蝟集するのである。

若し現代の政界における雰圍氣が果して斯樣なものであつて見れば、純眞なる學徒をその渦中に引摺り込むことは、たしかに彼等の教養上寒心すべきことであるに違ひない。

第二に、現代の政治は殆んど學問と沒交渉である。政治家は彼の政治の原則を學問的に打ち建てようとせず、その政策や黨略を理論的に批判しようとしない。彼等にとつては政治は決して理論の適用ではなしに、駈引であり、手管である。彼等は政治を一貫した理論と關聯せしめ得ないがために、彼等の政治は常に一面的であり、其場凌ぎであり、從つてまた、御都合主義である。たしかに、それは學問的精神、學問的研究と相容れ難いものである。この點においてもまた學生は政治から遠ざかることを利益とするが如くである。

現代における實際政治の特質が、事實上述の如きものであるとすれば、若し出來ることならば、單に學生だけでなく全國民をも、この墮落した政治から遠ざけたいとさへ私は思ふ。尤も、私が茲で、この惡感化を恐れてゐるのは、現在

我國の實際政治、卽ち、反動化したところのブルジョアジイの政治のことであつて、凡ての政治に對して之を言はうとするのではない。

七

けれども、今日のブルジョア政治が斯樣な醜い有樣を呈してゐるのは、必ずしも個々の政治家が道德的頽廢してゐるがためではない。私は一部の道學者のやうに、かやうな個人的道德方面にのみ目をつけて、ここに現代政治の禍根を尋ねるものではない。その原因はもつと深い處にある。政治家個々人の欠陷ではなく、社會進化の過程が必然に彼等の政治をかやうに運命づけるのである。

ブルジョア政治と雖も、決して當初から今日の如きものであつたのではない。嘗て社會發展の或る時期において、ブルジョア階級が進歩的階級であつたときには、ブルジョア政治は人類的な社會理想に對する熱意によつて動かされてゐた。それはその現實的基礎を持つてゐなかつたために、結局、空想として留まらざるを得なかつたけれども、ブルジョア政治のスローガンであつたところの自由と平等と友愛とは封建的搾取と壓制とに對して高く掲げられた人類的理想であつた。その故にこそ彼等はよく大衆をその味方につけることができたのである。吾國においても明治維新より國會開設當時に到る時代の政治が、その多くの不純分子を交へてゐたにも拘らず、よく志ある青年大衆を捉へ得た所以は、革新的な時代の發展が自由民權の理想を標語として掲げしめ、この風潮の中にあつた彼等青年の純眞なる心に感激を起したがためであつたらう。

同時にまた前進的ブルジョアは、啓蒙哲學、自然法學、正統派經濟學の精神的武器を執つて思想闘爭をやつた。彼等

の政治はこれらの學問によつて基礎づけられてゐた。即ち、政治はこれらの諸學問の實社會への應用であつた。從つて彼等も亦、學問がその味方であることを意識して、學問を尊重し、學問の指示する所に從つてその政治を決定したのである。

然るに、封建社會の沒落の後に現はれた社會は、彼等の夢みた自由にして調和ある社會ではなくて、新なる階級對立を持つ社會であつた。封建階級對ブルジョア階級の社會に代つて現はれたものは、ブルジョア階級對プロレタリア階級の社會であつた。全人類のため全社會のために呼ばれたブルジョアジイの諸要求は、結局においては、主としてブルジョア階級自身の利益を增進する結果となり、多數の民衆は再び新なる搾取と壓迫との下に沈吟しなければならなくなつた。即ち、ブルジョアの政治は、も早、搾取と壓制とを撤廢して人類の解放を追求するためにではなくて、却つて、新なる壓制と搾取とを擁護し、階級的差別を維持し、人類を分裂と繋縛との下に留めるために向けられるやうになつた。彼等の間からは、人類解放の社會理想は全然その姿をかくして了つたのである。

彼等の政治は今日もなほ依然として天下國家を標榜し、國利民福を提唱するに日もこれ足らぬ有樣である。而もこの美しき名分にかくれて實際に彼等の追求するものは少數なる彼等自身の階級的利益である。ブルジョア政治の根本的矛盾は此處に存してゐる。そしてブルジョア政治における爾餘の矛盾はこの根本的矛盾に基づくのである。例へば、彼等は一方に勞働組合運動の自由を認める組合法を提案すれば、これと表裏して一種の罷業制限法、別名、勞働爭議調停法を提案しなければならぬし、又、民衆の政治的活動を誘致すべき普選法を通過させれば、同時に逸早く、民衆の政治的活動を制限・脅威するところの治安維持法を制定し、現に農民勞働黨の解散を敢てしなければならぬ如きである。今日のブルジョア政治はブルジョア國家と共に、その本質において根本的な矛盾を含んでゐる。從つてブルジョア政治は直截

なる一貫した原理に立つことができず、それ故にまた、それは常に僞善的美名によつて外觀を糊塗しなければならず、また、暴力又は金力の如き不自然な手段によつてその無理を押し通さなければならぬ破目にもなるのである。かくてブルジョア政治は必然に墮落頽廢せざるを得ないのである。

更に、ブルジョア階級は嘗ての盟友であつたところの學問からも絶縁するやうになつた。彼等が進歩的階級であつた間は、ブルジョア政治は社會進化の法則を反映する學問をその指針として之を尊重した。然るに一度彼等が保守的階級となるや、最早彼等は社會進化の事實を客觀的に反映する眞の社會科學を好まなくなつた。彼等はこの社會的進化の法則をゴマ化して彼等の階級的利益に奉仕せんとする御用科學の阿諛には聞くけれども、社會進化の法則を如實に指示する社會科學の忠言に對しては、丸るでその耳を蔽ふに至つた。それは彼等の政治が社會進化の方向に沿うて行はれずに、これと逆行して行はれるに至つた證據である。彼等の政治が眞の科學と絶縁したことは、同時にその政治が社會的進化を反映する學問的要求と背馳する無理なものとなつたことを表明するに外ならない。

かくの如くにして、保守的階級となつたところのブルジョアジイの政治は、最早吾々の道德的要求にも添ふことも出來ねば、學問的支持をも得難くなつて來たのである。それは寔に運命的な成行きである。然るに當局者や多くの教育家は現代の實際政治の墮落がこのブルジョア制度其者の根本的矛盾に胚胎してゐることを看破し得ない。從つて、彼等は全力を挙げて現實政治の墮落から教育と學生とを隔離しようと努力して教育の中立を絶叫し來つたにも拘らず、同時に、彼等は同じ熱心を以てこれらの墮落したるブルジョア政治の培養床であるところのブルジョア制度其者に教育と學生とを結び付けようと焦慮してゐるのである。彼等の努力は實體をしつかり捉へながら、その影を逐ひ拂はうとする寔に矛盾極まる努力と言はねばならぬ。これも亦ブルジョア政治から生れる矛盾の一つであらうか。

八

現代のブルジョア社會を反映するブルジョア政治はその本質において根本的な矛盾を持つてゐる。それがために此の政治は僞善と不條理とに墮落せざるを得ない。そして我國において、殊にこの墮落が事實となつてゐることを、吾々は政界の長老から聞かされるのである。私は此の如き政治の悪感化が一般青年に——單に學生のみではない——浸潤することを好まぬ點においては、當局者と全然見解を同じうするものである。

然るに、官邊並にブルジョア諸政黨は普選を機會にしてその從來の態度を一變せんとするが如き徴候を示して來た。彼等は競うて色々な名前の所謂政治教育運動を施設し、嘗つて彼等が極力青年から離隔しようと努力し來つたその政治の圏内に民衆を、特に青年を、引き摺り入れようと焦慮しつゝある。彼等は、年來、政治の病毒の感染を防ぐために、青年學生を之から隔離すべきことを主張して來た。今日ブルジョア政治の症狀は輕快に向ふどころか、むしろ益々昂進して、尾崎氏の言に從へば「既に大患に罹つてゐる」のである。それにも拘らず、嘗て政治の墮落を指摘して青年を之から絶緣させようと努力したその人々が今や、この症狀の益々昂進したブルジョア政治の危險區域内に青年學徒をも引き入れようとしてゐるのである。これはまた何たる矛盾であり、何たる御都合主義であるか。要するに現代の政治は、ブルジョア政治は彼等の年來主張し來つた如く、理想に對する熱意と學的精神とのいづれとも相容れない。從つて、青年學徒は此の如き政治から、ブルジョア政治から全然手を切らなければならぬのである。

九

併し、此の頽廢期にあるブルジョア政治は政治そのものではない。從つて、此の如き政治との絶緣は未だ必ずしも、學生のすべての政治よりの絶緣を意味するものではない。

吾々が政治學の敎科書で先づ出喰はすところの偉大なる古典的の哲人たちは政治に關して何と言うてゐるか。彼等に從へば、政治は共同社會全體に向けられ、そしてその全員の幸福のみを追求する努力である。從つて、それは全體又は多數の犧牲において、部分の少數者の幸福を追及するものであつてはならない。即ち、彼にとつては、政治は共同社會全體を最善の方法によつて管理することであつた。そして彼等の一人はこの理想政治が哲學者の支配によつて實現されると考へたのである。私は今ここで彼等の國家觀政治觀が現實の地盤にしつくり根を卸してゐない空想主義に累されてゐること、と同時にその空想主義にも拘らず、それが當時の社會的諸條件によつて如何に多く制約されてゐ、そして特に當時の民衆的傾向に對する貴族的反動の思想的御用を務めたかを說明する餘裕を持たない。併し、彼等はその凡ての欠點にも拘らず、政治が社會全體の幸福に向けらるべきこと、そしてそれが知慧により道理によつて導かるべきことを指摘することによつて、政治が如何にあるべきかについて、吾々に重大な警告を與へつつあるが如くである。

けれども、此の哲人政治の說から新官僚主義を演繹し、所謂超然政治、善政主義を導き出さうとするものがあるならば、それは非常な間違である。それは歷史が吾々に證明したところの彼等の見解の誤れるその部分を再び復活せんとする試みにほかならない。現代のやうな階級社會における現實政治が主として追求するところのものは、決して全體の幸福ではなくて、特殊階級の利益である。その政治を定めるところのものは、抽象的な知慧や道理でなくて、それぞれの階級的勢力關係である。從つて、斯樣な社會の唯中にあつて、階級的社會の現實的基礎の上に超然として、全體の幸福を追ひ求めるところの、そして純粹なる道理によつて導かれるところの政治を實現しようとするのは空想である。此の

如き政治は唯々無階級社會においてのみ求めることの出來る政治である。

この事情を考へに入れて、偉大なる哲人たちが吾々に指示したやうな政治を現代の社會の中に追求するとすれば、それは如何なることを意味するか。それは現實の階級社會の彼方の中空にかかるかゞやかな蜃氣樓に見入ることであるか。否、さうではない。この階級社會を變じて無階級社會を實現しようとする政治を追ひ求めることにほかならない。更に、具體的に言ふならば、その階級の勢力發展が社會進化の法則と人間の條理の要求とに合致するところの階級、その階級が解放されるためには、是非とも人類一般が解放されることを必要とする階級、即ち、プロレタリア階級と共に政治することに外ならないのである。吾々は空想を脱した哲人政治の理想が現代においてプロレタリア政治の現實と極めて近かしい關係にあることを知り得るのである。

「哲人」に對して「衆愚」を置換へやうとするのは餘りに白々しい詭辯ではないか、と反問する人があるかも知れぬ。併し、私は繰返して然りと答へる。どこの國の支配階級も民衆を俯瞰して「衆愚」とよび之を政治圏外に保たうと試みて來た。しかし實を云ふと、彼等は民衆の「愚」を恐れたのではなくて、その「知」を恐れたのである。所謂、衆愚が自己の利益を知らないことを恐れたのではない。反對に、所謂、衆愚が彼等自身の利益を知り、且つそれが支配階級の利益と相容れ難きものであることを知つてゐることがこわいのである。彼等はこの民衆の「知」を民衆の「愚」と呼んで、自らの疚しき良心を慰めたのである。プロレタリアは彼等が社會の恩澤と幸福とに充ちた優越した地位に立つ階級でないがために、彼等が社會の下敷になつてゐるがために、社會の不條理と悲慘との重荷が凡て彼等の肩上に落ち來るがために、丁度これらのことのために、彼等の解放は同時に人類の解放となり、またならざるを得ないのである。そして、その故にまた、彼等の被壓階級としての地位と利益とは、彼等をして支配階級がその階級的偏見のために到底理解

することのできない社會的眞理を理解し體得せしめるのである。哲人の知識は之れが如何にそれ自身として完全無缺なものであつても、それが單に少數哲人の頭腦の中に留まる間は社會的力とはならない、政治的に有効な手段とはなり得ない。理論はそれが民衆を攫む場合においてのみ、從つて民衆を攫み得る根據を持つてゐる場合においてのみ、物質的な力となるのである。プロレタリアは、まことに、自己を社會に實現しようとする哲學の武器である。故に、私は重ねて云ふ、若し資本家社會において古典的哲人の政治的理想の片影でもが求めらるべきであるとすれば、それはプロレタリアの政治であると。

十

古典的哲人たちによれば、國家の任務はその凡ての成員をしてその本性を完うさせ、その德の遂行を助成することに存してゐた。從つて、その政治は根本的には道德的であり、教育的である。哲人政治の治下における國家はむしろ一大學園であるとも見られるのである。政治が若し此の如き意味を有するものであるとすれば、政治は知と德との研修を任務とする學生と最も密接な關係に立つてゐる筈である。むしろ政治と學生とは不可離の關係においてさへある筈である。併し、現代の如き階級社會においては、此の如き國家も政治も共に生存しない。そして吾々は現在吾々の目前に展開してゐるブルジョア政治、この點において正に古典的哲人の期得したところと正反對な狀態にあることを吾々は知つてゐる。斯樣な事情から教育の政治的中立が主張され、學生の政治との絶緣が要求されつつあるのであり、それが現代のブルジョア政治に關する限り、この要求が相當に理由あるものであることは、私の繰返し說明し來つたことである。」

「ところで、ここに他の政治がある。それはブルジョア政治の對極をなすところのプロレタリア政治である。それは實

現を離れた哲人の脳裡の觀念や理想ではない。階級社會の實現に胚胎して生れ出でたる政治である。從つてプロレタリア政治も亦、それが現實の政治である限り、それは自己階級の利益の伸張と階級的勢力の增大を追求せざるを得ないであらう。そしてまた、それがブルジョア諸政黨とブルジョア國家とをその鬪爭の相手方としなければならぬ限り、屢々彼等と同じレベルに下つて爭はねばならぬ場合も出來て來るであらう。のみならず、現在のプロレタリアート自身が亦、その母胎であるところの資本主義社會の習慣や考へ方を過分に受け繼いでゐることをも考へなければならぬ。從つて現實のプロレタリア政治が、ブルジョア政治の色調から全然解放された理想的なものであると考へるのは、非常な早計である。併し、このあり得べき外形上の類似のためにプロレタリア政治はブルジョア政治と同じことに考へるべきであるか。それとも一般にプロレタリア政治はそして玆では特に教育、學問に關聯して、現代のブルジョア政治と根本的に對立する何者かを持つてゐるのではなからうか。少くとも私は此の問題を肯定せんとする者の一人である。

十一

先に說明したやうに、現代のブルジョア政治はそれが保守的階級の利益擁護を、即ち、賍制と搾取との制度の維持を任務とするに至つたがために、それから人類理想が失はれ、多くの美辭麗句にも拘らず、卑俗なるそして屢々唾棄すべき駈引政治にさへ墮し去つたのである。之に反して、プロレタリア政治は明確なる社會理想を持つてゐる。彼等は勿論、所謂理想主義者ではない。けれども一個の社會理想と之に對する熱意と鬪爭とによつてその目標を達成しやうとする固い決意とを持つてゐる。これがプロレタリア政治を動かしつつある主觀的推進力である。

プロレタリア政治の社會理想は階級對立なき社會である。「各人の自由なる發展が萬人の自由なる發展に對する條

作」とする社會である。故に、此の點においてはプロレタリアは凡ての偉大なる前代の社會理想の提唱者たち、即ち貧乏と悲慘と暴力と不正とによつて柰されない社會狀態を夢みた人たちとその見解を同じうするのであるが、此の社會理想に對するプロレタリアの考へ方は、彼等と根本的に違つてゐるのである。「勞働者階級は實現すべき何等の理想をも持たない彼等は唯、資本家社會の胎内で既に發展し來つたところの新社會の諸要素を解放するだけでよいのである」といふマルクスの言葉はまさにこのことを言うてゐるのである。

プロレタリアにとつては社會理想は吾々に都合のよい將來を描く夢でもなければ、來世の樂園を思慕する信仰でもない、現存社會の必要的なる發展傾向の結果であるところの將來の心象である。即ち、それは單なる願望や瞑想や啓示に基づいたものではなくて、合則的進化の豫見、即ち、社會とその發展法則に關する知識に基づくのである。

資本主義的生產方法の胎内に發展した巨大な生產力はやがてこの生產關係の中に包みきれなくなる。そこでこの生產力は計畫と統制とのない生產方法に反逆して社會生活の恐るべき矛盾に導く。そしてその結果、社會、就中、下層階級がその下に苦しみ悩むのである。が、同時に現存制度の下でこの矛盾を惹起した巨大なる生產力の發達は、他方において、この矛盾を取除くべき確實な手段をも吾々に與へるのである。もちろん、この歴史必然的に行はれるこの社會的矛盾とその止揚とは人間の行爲を拔きにして、機械的に行はれる底のものではない。人間はどこまでも歴史の立役者である。社會の必然的進化はこの人間を通してのみ行はれるのである。即ち、社會の矛盾は、この矛盾を取除かうとする決意と、此の如き矛盾のない經濟秩序の心象と、之を追求する熱意とを人間の心意に呼び起し、そしてこれらがまた社會の必然的進化の一因素となるのである。其際、この社會的矛盾は現存秩序の下においてこの矛盾の下に最も苦しみつつある大衆、即ちプロレタリアの意識の上に最も的確に且つ最も力強く作用し、彼等の思想と意思と行動とを決定的に規

定する。プロレタリアの政治運動における社會理想と、之に對する熱意とはその一態樣にほかならぬものである。

ブルジョア政治は正義と人道と文化との理想を提唱するであらう。併し、それがブルジョア制度の立場に立つ限り即ち搾取と壓制との制度の維持を追求する限り、彼等の理想は到底實現不能なる空想であり、偶像であるに過ぎない。然るに、現實の大地から離れて生氣を失うた社會理想は、プロレタリア政治において初めて之を實現するに必要なる知識と實力とを持ち又は持たうとするプロレタリア階級と結合することによつて、社會進化の現實の中に織込まれて、現實の大地にその根を卸すことができるのである。【以上、エム・アードラア、「新人」參照】

プロレタリア政治は斯樣な意味において、その理想を考へ、その理想を追求するのである。故に、彼等はその政治においては、空漠たる抽象的理想ではなく、明白に彼等の階級的利益をその目標として追求し得るのである。それはブルジョア政治の如く全國民全社會の名において少數特權者の利益を壟斷するが如き矛盾と僞善を必要としないであらう。プロレタリア階級を解放しないでは人類の解放が不可能であること、又、一切の社會的壓制と搾取との撤廢を行はないでは自分たちも亦完全に解放され得ないことを確信してゐるが故に、彼等は堂々として彼等の階級的利益を主張するのである。彼等にすれば、プロレタリア階級の解放は人類歴史の豫備時代から一歩を踏み出さうとする、「必然の王國」から『自由の王國』への第一歩を踏み入れようとする企圖である。故に、それは現實の泥中に青年を引摺り込む政治ではなくて、人類的理想に對する熱意と、之を拒否する現實諸勢力に對する闘爭とを鼓吹する政治である。眞に人類文化の行末について思を致す者は、此の如き政治に對しては決して無關心であり得ない筈である。以上、

十二

プロレタリア政治はその現實的であり階級的であることによつて、人類の理想的努力と不離の關係にあることを吾々は知り得た。そこで、私は次に、この同じ理由から、プロレタリア政治が科學、就中、社會科學に對して特殊な關係に立つてゐることを明かにしようと思ふ。

現在におけるブルジョア階級は、その治下における科學の進歩にも拘らず、社會進化の法則の客觀的認識であるところの、科學的眞理に基づいてその政治を行はうとしない。彼等はむしろ政治の根底たるべき社會科學を蔑視し又敵視しさへしてゐる。從つて、彼等の政治は陰謀であり、駈引であり、手管であり、苟合である。之に反して、プロレタリア政治は科學を重視する。それは確實なる社會科學的認識に準據して、政治の目標と手段とを定めやうとするのである。それはその本質において、權謀術數ではなくて、原理に基づく政治である。プロレタリア政治を以て實際化せられた社會的認識と呼び、應用社會科學と呼ぶ者のあるのは十分理由あることだと思ふ。プロレタリア政治の力は單に彼等の數と組織と經濟的重要とだけにあるのではない。彼等の政治的努力が客觀的な社會的認識の指示する社會進化の潮の上に乘つてゐるのだといふ確信がまた彼等の政治に希望と勇氣と最後の勝利に對する自信とを與へるのである。故に、社會とその進化法則とに關する知識はプロレタリア政治に最も大切な羅針盤たるのである。

私はさきにプロレタリア政治がその現實的見地によつて空想主義に陷ることを免れた次第を述べた。併し、空想主義の否定は往々にしてその正反對であるところの何等の原理のない平面的な經驗萬能の其日暮しの現實政治に墮する危險を伴ふものである。然るに、プロレタリア政治はその科學的見地のお陰で、目前の利益や部分的の利益のために久しきに亙る全體の利益を犧牲にするやうな日和見政治の弊害に累されない可能性を持つてゐるのである。プロレタリア政治は社會進化の法則に基づいてその方面を定め、階級間の勢力關係の實狀に照應してその戰術を定める。從つて、有効なる

プロレタリア政治は誤らざる客觀的な社會科學的認識の上に打建てられなければならぬ。であるから、プロレタリア政治の指導者の多くは、同時に社會的理論家であつた、彼等は實際的諸問題の解決に方つては、先づ以て理論家として、一理論的客觀的見地から之を考察してその態度を決定することを任務として來つたし、又現にさうしてゐるのである。實際においても、プロレタリア政黨の宣言、綱領や政策、戰術は常に科學的研究の成果であり、又之によつて基礎付けられ、又檢討せられてゐるのである。

斯樣にして、プロレタリア政治と社會科學とは相携へて進步し來つた。併し、この關係は單にプロレタリアの側からその解放の精神的武器として社會科學を必要として來つただけではない。社會科學はその妨げられざる發展のために、プロレタリアの勢力の增大を必要とし、又實際上にも、その勢力の增大に伴うて發展しつつあるのである。社會進化の法則がブルジョアジイの階級的利益に背反する傾向を示すに至つて以來、ブルジョア階級はこの社會法則を如實に確定しようとする社會科學の進步に種々の障害を置くに至つた。今や客觀的な社會科學の進步がブルジョア政治より期待し得るものは妨碍と迫害以外何者でもない。之に反して、その指示するところが自己の階級的利益と一致し、その眞理が自己の階級の解放運動を支持するところの社會科學の進步を、プロレタリア階級が歡迎するのは勿論のことである。眞實に學問の、就中、社會科學の發展を希ふ者は、またこれを促進する唯一の現實的條件であるプロレタリア階級の勢力增大と之を追求するプロレタリア政治とにその望を囑すべきであらう。

學生は理想に對する熱意を持たなければならず、又、研究と學問の進步とに專念しなければならぬ、と當局者は言ふ。そして更に、人類的理想の追求から黨利私慾の爭奪排擠にまで引下げられたところの、全然學問とかけ離れて陰謀や馴合や買收や利權の授受によつて決定されるに至つたところの、頽廢した政治から學生を隔離しなければならぬ、と

彼等は言ふ。實に然りである。此の如きブルジョア政治の悪弊から學生が遠ざかることは百の利あつて一の害なき所であらう。併し、このブルジョア政治の側らに他の政治がある。それは人類の準備時代の歴史を閉ぢて、新なる人間の歴史に導き入れやうとする努力であり、××しかも、それは單なる現實的基礎のない空想ではなくて、吾々の目前に之を實現すべき物的條件と人的要素とが既に準備されつゝあるのである。若し、青年學徒にして苟くも感激すべき合理的理想を持つべきであるとしたならばこれほどに魅惑的なものが他に求め得られやうか。と同時に、この政治はその健全なる成長のために社會科學を必要とするものである。ブルジョア政治によつて顧みられず、否、屢々妨害と迫害とによつてその發達を妨げられ來つた社會科學は、新なる政治の生成によつてのみその進歩が期せられるであらう。學的眞理のことを眞實に心にかけてゐる者はこの點からも亦、この新らしき政治に興味を持たざるを得ないであらう。この新らしき政治こそプロレタリア政治である。當局者がブルジョア政治と學生との絶縁を要求する理由と丁度同じ理由から、ブルジョア政治の對極たるプロレタリア政治に學生が結び付けらるべきであると、私は確信するものである。

十三

私は上來學生と政治との交渉を主として理論的に考察して來た。その結果によれば現代の學校教育はブルジョア諸黨間の政爭に對しては中立であるけれども、階級的意味に解せられた政治に對しては決して中立ではない。從つて、學生は、彼等が之を意識してゐるか否かは別として階級的意味で考へられた政治と直面して立つてゐるのである。當局者や多くの教育家は一方にブルジョア政治の悪害を認めて青年學徒をこれから絶縁しようと試みながら、他方では却つて

——ブルジョア政治の現實に直接彼等を引込まうとする新なる努力は姑らく度外視するも——この頽廢したるブルジョア政治の培養床であるところのブルジョア制度共者に教育と學生を結付けやうと懸命に努力してゐる。しかも、彼等は自分のこの明白なる矛盾に氣付かざるが如くである。ところで、この矛盾した階級的教育から學生は如何にして解放され得るか。それは少數の眞面目なる教育者の考へるやうに教育者から階級性を追ひ出すことによつてであるか。否、今日の階級社會において眞實の意味での教育の政治的中立を追求するのは明かに効果なき努力である。故に、殘る所の唯一の道は、支配階級的見地の絶對をなすところの階級的見地を教育に導き入れることによつて之に對抗することである。換言すれば、學校教育の世界に、思想的に階級鬪爭を導き入れることである。之れによつてのみ教育と學問とはその墮落と行詰りから救はれるであらう。さうして學生は今日この鬪爭の具體的事實の前に立つてゐるのである。

今日の學校教育と學問的研究における支配階級的偏見に對してプロレタリア的見地に立つてその謬妄を矯正して行かうとする學生の自助運動の重要なるものは『社會科學運動』として人々に知られる所のものである。この運動によつて現代における教育の墮落と學問の行詰りとが克服されるべき方向が指示されゐるかのやうである。もちろん、この運動においても他の人間のやる凡てのことと同じやうに、惡意を以て探し廻れば何等かの下心を以て伸縮自在な權力と法律との網を覗くならば、いくらかの缺點や過失を拾ひ上げることができるかも知れない。しかし、それは些々たる末葉の問題である、根本においてそれは正しい意圖と誤らざる認識とに立つてゐる。更に、彼等は當局者——彼等は幾百の博學なる教授や博士をその支配下に持つてゐる——が、若し之を好むならば、彼等と堂々その學問的見地を論爭する能力と用意とを持つてゐる。然るに、權力者は學問と思想との領域で彼等の見地を論破しようとせずして、權力を以て之を威嚇彈壓し去らうと考へるのである。之が教育者の——私は重ねて云ふ教育者の採るべき妥當な方法であるであらうか。皆

て、彼等は淺薄にも學生間における斯様な目醒めが一、二不良教師の使嗾煽動によるものと解した。從つて彼等は事を構へては數多の教授の地位をさへ奪へば、それで此の如き運動は影をひそめると信じて、左樣に行動したことがある。が、それは明かな見當違ひであり、實際にも失敗であつた。次には、同じ目的を以て、幾多の學校における研究會の解散を斷行した。併しそれも亦、何程の效果も齎らさなかつたらしい。そこで彼等は今、或は數名の學生を退學させ或は停學させることによつて、更には、芝居がかりの大檢擧に新聞への惡宣傳を行ふことによつて、彼等の最後の努力をクー・デタアをなしつつあるやうに見える。しかも、彼等のこの行動も亦私の見る所では、遂にその目的を達し得ぬであらう。蓋し、社會科學運動は此の如き脅威や妨害によつて消滅し去るべく、餘りに深い社會的基礎に根ざしてゐるからである。否、此の如き當局者の行動共者こそ却つて眞實なる教育と學問との世界において、この種の運動の存在を必要とする理由を天下に公示するものであらねばならぬ。多數の學生がこれらの官邊の措置に對して反對的態度を採りつつあるのは十分理解し得る事柄である。

學内における此の思想鬪爭において、支配階級見地の最も露骨なる表現として新に附加せられたところの施設は、世人の熟知する軍事教育である。從つて、社會科學運動のよつて立つところの見地と軍事教育のよつて立つところの見地とはまさに正反對の兩極を代表するものである。軍事教育が教育當局と警察官權の極端なる厭迫にも拘らず、都の學生から根強い反抗を受けつつあるのはこれがためである。今や、學内においては軍事教育の背景をなしつつある思想を中核とする一團の思想系統と、社會科學運動の基礎をなしつつある思想を中心とする他の一團の思想系統とが相對抗し鬪爭しつつあるのである。これが學内政治の諸問題中、思想上から見て最も重要なる問題である。そして眞面目に物を考へる學生の凡ては、之に對して一定の態度を採るべく要求せられるのである。

けれども、學內政治のこの重要問題に對して學生がその態度を決定しようとするならば、彼等は勢ひ學外における一般政治に對する態度を明かにしなければならぬ必要に迫られるに違ひない。そこで學生は根本的な意味での政治に對して意識的に直面するに至るのである。何となれば、屢々繰返すやうに教育は社會の上層建築であるのだから、そこに存する階級的對抗は、その根底を社會における階級的對抗に有してゐるからである。從つて、學生はブルジョアジイの側に立つか、プロレタリアートの側に立つかを、少くとも思想上に決定しなければならぬ。即ち、社會進化と人類解放の方向に沿うて進むところの階級的利益を追求するところの進歩的階級の味方となるか、社會進化、人類解放と相容れ難き階級的利益を追求するところの保守的反動的階級の味方となるかを少くとも思想的に、決定しなければならぬ。更に、換言すれば、壓制と搾取と暴力と貧乏との根源たる制度に對して鬪爭する黨派と共に進むべきか、これらの人生の諸害惡の根源なる制度を擁護維持せんとする黨派と共に進むべきかを、少くとも思想的に決定しなければならぬのである。

のみならず、この搾取と壓制とに對して抗爭せんとするプロレタリアの階級的黨派は我國においても亦方に現實に生れ出でやうとしてゐる。然るに、學內における社會科學運動を彈壓、撲滅しようとする同じ勢力が、また學外の政治に働いて、プロレタリアの政治的解放運動を壓殺蹂躪しようとしてゐるのを吾々は見る。東京において結黨したばかりの農民勞働黨が解散を命ぜられたのは本月の一日である。この同じ日に京都においては三十餘名の學生が突如として檢擧せられ、徹底的な家宅搜索と峻嚴なる訊問とを受けるに至つたのである。この時日の一致は或は偶然であつたかも知れぬ。併し、この二つの行動が思想が思想上離すべからざる關係に立つてゐることは何人も否定し得ぬ所であらう。もちろん、これら凡ての障害にも拘らずプロレタリアの運動はそれらの障害を突破して進むに違ひない。何となれば、歴史の吾々に教示する所に從へば、プロレタリアの政治運動が政府の保護と獎勵の下に永續的繁榮を得ためしは曾てな

い、その正反對に、彼等の運動はいづこにおいても權力者の壓制と迫害とに拘らず、繁榮し來つてゐるからである。まことに、權力者は現代の階級社會を改造するより以外に、プロレタリアの解放運動を撲滅する方法を持つてゐないのである。治安保持の名の下に、階級鬪爭緩和の名の下に、階級鬪爭を激成惡化する當局者の手並は、辨證法の用法においては所謂共產主義者よりも數枚見上げたものと云はなければならぬ。

かくの如くにして、我國の政治の舞臺に益々深刻に階級鬪爭が移入されるのである。さうして各人は之に對して一定の態度を採らなければならぬやうによぎなくされる。抽象的に考へて見れば、理想的熱意と學問的精神との擁護者であるべきところの青年學徒がこの鬪爭において何づれの側に自己の近緣者を見出すかは、私の既に述べたところによつても十分明かである。青年學徒はその純眞なる理想的情熱と獨立なる學問的精神とを代表してゐる限り、頹廢せるブルジヨア政治においてではなく、却つてプロレタリア政治において、自己と同じ精神と熱意とを發見するであらう。

けれども抽象的な考へはすぐそのままには實際に適用することはできない。ここにもまた社會的制約の力が働くのである。多くの青年學徒は有形無形の社會的繫縛によつて、單に、この理論を現實化し得ないのみならず、更に、この理論の十分なる理解をさへも不可能にされてゐるのである。此處に諸君の逡巡があり又諸君の煩悶がある。それは過渡期における時代の逡巡であり煩悶であり、そして特に中間的諸階級の逡巡であり煩悶である。」

此の如き多數學生の間にあつて、社會科學運動は、時代の逡巡の呪の圈を突破し、この時代の煩悶を正視して思想的に之を克服し、又は克服せんと志すところの少數者の集團である。彼等はこの見地に立つて、學內政治にあつては敎育の獨立と學問の自由のために鬪爭し、學外におけるプロレタリアの解放運動に對しては、變らざる同情的態度を持しつつ、省察と鬪爭との生活を續けつつあるのである。支配階級偏見に充ちた現度教育制度の下に此の如き團體の存在する

ことは、單にその會員の名譽であるのみならず、斯の如き會の存在してゐる學校と學生一般との名譽である。もちろん、從屬的過程的集團としての學生に社會更生の原動力を求めるのは誤りである。私の信ずるところによれば、それは新興階級たるプロレタリアにおいて求めらるべきものである。果して然らば、學生の擔うてゐる社會的任務は、このプロレタリア的見地に立つところの社會理想に對する熱意を養ひ、プロレタリア的見地に立つ學問の理解を深めることに外ならない。而もこの熱意と認識とはプロレタリアと共に思想し、プロレタリアと共に闘爭することによつて愈々强められ益々深められるであらう。さうして斯の如き資格において始めて學生は差迫りつつある社會の更生に參與し得るものといふことができる。この意味において、社會科學運動は嘗て前田氏が學生に訴へたところの『學生道』を、その空想的な衣を脱した現實の形において、體現するものと云ふことができると私は信ずるのである。

(本稿は一九二五年十二月六日東京帝國大學新人會第七週年紀念講演會において同じ題目の下になした講演の手控へに基づいたものである)

資本主義社會に於ける農業の展開傾向

河西太一郎

はしがき

農村疲弊の聲は高く、農村疲弊の事實は更に深刻である。果して農村はこの儘遂に滅びに向つて進まんとするか、それとも狂瀾を既倒に回し、潰れんとする農村を救ひ、農業を新たなる振興の途上に導くべき原動力がいづこにか潜んでゐはしないであらうか。

私は今こうゆふ視野に立つて問題を觀察せんとする。而して

此の問題は云ふ迄もなく之れを主觀的に解決し去ることは出來ぬ。學者は農村振興策として或は田舍工業の復活を叫び、或は營利本位の生産より必要本位の生産に移るべきを説く。言、可ならざるにあらず、唯それが事實上可能なりや否やが問題である。この點に關する科學的研究なくして種々の政策的主張を提唱する、有害にあらずとするも、無益に近いと云はねばならぬ。蓋し、若しそれらの主張が單に個人の主觀的見解乃至希望たるに止まり、現實の社會にその實現を裏付けるべき客觀的根據が存在せぬ限りは、その政策の建策は如何に壯麗であつても、それは畢竟空中の樓閣であつて、寸毫も問題の解決とはならぬからである。我々は去つて經濟的社會的事實の中に突き入り、そこに此の問題解決の因子を探擊して見なければならぬ。我々はこれを『人間の頭腦の中に求むべきではなくして、生産及び交換方法の變化の中に求めなければならぬ。これを時代のフイロソフイーに求むべきではなくして、これを時代のエコノミーに求めなければならない』のである。(Engels, Dühring's Umwälzung der Wissenschaft, 11. Aufl (1921) S. 236.)

こうゆう見地に立つ時我々の觀察は自ら『資本主義社會に於ける農業の展開傾向』に向はざるを得ない。資本主義の社會に於ては農業は果して如何なる方向に向つて進みつゝあるであらうか。この問題の闡明こそは當面の問題解決のアルフアであり、オメガアでなければならぬ。而してその研究の結果、若し農業に於ける經濟的社會的事實の展開傾向が悉く農業の衰亡、農村の滅亡に向つて進んでゐることが明かになるならば即ち萬事は休す、何者の力を以てしてもこれを如何ともすることが出來ぬ。けれども亦幸に、その滅亡的傾向を反撥する別種の展開傾向の萌芽をでもその中に發見することが出來るならば、前途は必らずしも悲觀的ではない譯である。農業は果して暗に面せるか、それとも光に面してゐるであらうか。これを要するに、資本主義社會に於ける農業の展開傾向を觀察し、それに基づいてその將來の運命をトせんとするのが即ち此の一文の目的とするところに外ならぬ。

一　資本主義の展開傾向

上述の如く問題は根本論である。即ち農業は此儘の趨勢を續けてその儘遂に滅び行かんとするか、それとも此の趨勢を反撥して新たなる振興の途上に向はんとするか、に關する觀察である。ところで私の觀るところによれば今日の農業の衰勢はその根本原因を今日我々の社會を支配せる資本主義制度そのものに有してゐるのであるから（此點の詳論は『社會思想』一月號に

於て試みたから參照を乞ふ）結局問題は一先づ資本主義の命脈如何と云ふことに歸着して來る。而もこゝまで問題を引き延ばすことは聊か當面の問題から逸脱するのであるが、しかしこの點は我々の研究の終極の目標と直接に關係するのみならず、問題觀察の方法を我々に與へる點に於て重要であるから、先づ始めに簡單に之れに觸れて置かなければならぬ。

今日農業の發達を抑壓し、農村の疲弊を惹起しつゝある資本主義の運命は果して如何。若しも資本主義制度が永久に存續するものとすれば、その必然の結果として農業は結局衰滅する外ないことになる。而も農業の衰滅は單なる農業の衰滅のみに止まるのでないことは云ふ迄もない。實に農業の衰滅は一切の食料品と原料品との杜絕を意味するものであるが故に、その結果は直ちに商工業の滅亡であり、全社會の滅亡に外ならぬ。之れをマルクス流に云ひ現はせば、『餘剩價値の凡ゆる生產、從つて又資本の凡ゆる發達は、農業勞働の生產力をその自然的基礎とする。……農業勞働の生產力がその勞働者の個人的欲望を充たす以上に發達すると云ふことは總ての社會の基礎であり、就中資本制生產の基礎である』（Marx, Kapital, III.2, S. 318, 319. 高畠氏譯『資本論』第三卷第四冊一二三七、一二三八頁）のであるから、農業の衰滅は即ち資本主義そのものの滅亡を伴はざれば置かぬ。此點に於て資本主義は明かにヂレンマに陷つてゐると云はなければならぬ。即ち資本主義は進めば農業を衰退せしめ、農業が衰退すれば資本主義の基礎も亦危くなる。而も退いて農業を眞に振興せんとすれば即ち自己の否定を措いて外にはない。」此進退兩難を思ふ者は何人も資本主義の萬歲を信ずることが出直せない譯である。がそんなことは抽象的の推論としてより以外に直ちに實際的の價値あるものではない。我々は去つて現實の資本主義の發展の中に立ち入り以て資本主義の運命の鍵鑰を摑みそれによつて農業の將來の運命の判斷に資しなければならぬ。

而して此點の考察に當つて最も參考となるのはマルクス主義の資本主義發展觀である。で便宜上先づ極く簡單に之れに觸れ、それに準據して進んで農業の展開傾向を檢討することにする。

マルクス主義によれば、資本主義社會の滅亡、社會主義社會の出現は歷史的必然であるとされるのであるが、その立論の根據としては、資本主義の發展に伴ふて生ずる次の三個の現象が擧げられてゐる。第一は、資本主義經濟に於ける無政府的生產の發展（wachsende Anarchie der kapitalistischen Wirtschaft）と云ふ現象であつて、その結果資本主義經濟の沒落的傾向は避け難いものとされる。即ち云はば資本主義の自壞作用である。第

二は、資本主義經濟の生産行程に於ける社會化の發展（fortschreitende Vergesellschaftung des Produktionsprozesses）と云ふ現象であつて、之は將來の社會秩序の經濟的基礎を積極的に準備し、創造しつゝあるものと看做される。即ち云はゞ資本主義による將來社會の準備作用である。之等二個の現象は、資本主義社會の滅亡、社會主義社會出現の經濟的基礎條件とされるものである。而して第三は、無産階級の組織と階級意識の發展（wachsende Organisation und Klassenerkenntnis des Proletariats）と云ふ現象であつて、之れに基いて、無産階級は上述二個の現象によつて經濟的にその基礎を與へられてゐる社會的變革を能動的に遂行する當事者であるとされる。即ち云はば資本主義の他壞作用である。（Rosa Luxemburg, Sozialreform oder Revolution?, 1919. s. 3.）

思ふに之等の諸條件は、工業の方面に於ては、その根本的傾向として實現しつゝあることは大體に於て疑ひがない。換言すれば、資本主義の高度に發達したる諸國の工業界に於ては、無政府生産に伴ふ恐慌の歷史は愈々深刻化して行くのみならず、大經營の勝利的進行は事實の上に明白であり、且つその結果、次第々々に無産階級の數を増加し行くと同時に、個々の無産者が獨立の工業經營者に向上せんとする努力を益々絶望的且つ無意味のものたらしめ、それによつて彼等の團結を進め、階級意識を高め、階級鬪爭を激甚ならしめる。而して彼等の階級鬪爭の出發點は勞働條件の改善であるが、その終極目標が社會による資本家の收用、換言すれば、××××××××のに向ひつゝあることは益々明白となりつゝあるのである。勿論以上の諸點については尚大いに議論の餘地はある。けれどもそれを細論することは本文の目的ではないから、こゝでは唯マルクス主義の資本主義發展觀が、工業の方面に於ては、その根本的傾向として大體に於て實現しつゝあることを指摘するに止めるのである。

然らば翻つて農業の方面に於ては如何。マルクス主義によれば以上の如き發展法則は大體に於て農業に於ても工業同樣に當てはまると云ふのであるが（その詳細は他の機會に讓る）それは果して誤りないであらうか。換言すれば、今日農業の發達を抑壓しつゝある資本主義制度を除いて農業に於ける偉大なる生産力を充分に發揮する可能性を作り出し、更に進んでは都會による農村の搾取を除いて眞の農村振興を招來するに足る經濟的基礎條件並に社會的要素の發展を農業自身の中にも認めることが出來るであらうか。之れがこゝに研究を要する問題である。若し農業自身の中にもマルクス主義の云ふが如き發展法則が實現しつゝあるならば、資本主義の前途は暗憺たるものである

が、農業の將來には光明がある譯であり、又反對に、農業の發展法則が工業のそれと異なつてゐるならば、問題は甚だ混沌たらざるを得ない譯である。果して如何。

此の問題に答ふる爲めには我々は先づ第一に、農業に於ける經營形態の推移を觀察し、農業の生産行程にも果して社會化の現象が發展しつゝありや否やを檢し、進んで第二に、農業に於ける階級構成の移動を觀察し、農業に於ても果して無産階級の組織と階級意識の現象が進展しつゝありや否やを檢覈して見なければならぬ。資本主義社會に於ける農業の展開傾向觀察の眼目は正に此の中に横はる。

二　農業經營形態の展開傾向

マルクス主義の所謂科學的根據の一たる、生産行程に於ける社會化の發展、と云ふ事實を我々は農業に於ても工業同樣に認めることが出來るであらうか。こゝに謂ふところの生産行程に於ける社會化の發展とは、之れを換言すれば、大經營の優勝と云ふことに外ならない。工業の方面に於ては、生産の技術關係に於ても、生産手段及び生産物の賣買關係に於ても、又資本調達に必要なる信用關係に於ても、小經營は到底大經營に匹敵し得ざるが故に、小經營の沒落、大經營の勝利的發展は、前にも述べたるが如く、大體に於て明瞭且つ決定的に進行し、その結果、資本の集中、集積が行はれて、一方に於ては生産行程を益益社會化せしめつゝあると共に、他方に於て無産階級の數を次第に增加せしめつゝある。此點については殆んど異論はないと云つてい〻。が之れと同樣の發展傾向は農業に於ても存在するであらうか。換言すれば、農業に於ても、マルクス主義の云へるが如く、大經營が小經營を必然的に壓倒する傾向を事實として認めることが出來るであらうか。

農業に於て大經營と小經營との何れが優越せるかの問題は、農政學史殊に社會主義農政學史上極めて重要なる論爭問題であつたのみならず、現在に於ても尙依然として甲論乙駁の狀態にある。がその學史的研究は、事實としての農業の展開傾向を觀察することを目的とする本論に於ては、不必要であるから、之れは他の機會に讓り、こゝでは農業に於ける大小經營形態の推移を考察するに必要なる限りに於て極めて簡單にその理論的方面に觸れるに止めて置く。

a、大小農經營優劣論

イ、小農經營優越論

上述の如く、農業に於ける大小經營形態の優劣如何の問題については議論甚だ區々であるが、大體に於て、農業に於ては工

業に於けると異なり、比較的多數の農業勞働者を使用して行ふ大經營よりも、自作農業者が自己及び家族の勞働を以て行ふ小經營（此外に尙我國の如き小作小經營があるけれどもこれは別の機會に述べたるが如く最劣惡なる農業經營形態である）を以てより優越なりと主張する非マルクス主義的見解の方が實的には遙かに優勢である。今之等の小農經營優越論を檢するに、その論點は實に多岐に分れてゐるけれども、その眼目を要約すれば結局次の三點に歸着するやうである。第一は、自作農業者及び其家族は、その勞働の結果が悉く自己に歸するが故に、大經營に於て使用せらるゝ賃銀勞働者よりも一層勤勉であると云ふ點である。第二は、同じ理由によつて、啻に勤勉なるのみならず、勞働に際しては、賃銀勞働者よりも遙かに注意が周到であると云ふ點である。以上の二點は要するに、「我がものと思へば輕し笠の雪」の心理が作用して、「砂礫を化して黃金となす」所有の魔力を力說する議論である。而して第三は、小自作農業者は一般に慾望が少なく、生活が儉素であると云ふ點である。思ふに之等の點は何れも自作小農業者を特色づける事實であることに疑ひはなく、又一應は農業小經營の優越點と看做し得るものであるが、それを以て直ちに小農經營の大農經營に對する優越を保證するものとは認め難きのみならず、更に現實の狀態を注意深く觀察する者には、之等の諸點が事實上却つて逆に小經營の不利なるを暴露する結果に到つてゐることを見逃すことが出來ないのである。蓋し先づ第一に、彼等は勤勉には相違ないが、その勤勉たるや實に過度の勤勉であり、その勞働たるや實に人間以上の過剩勞働たるは否定すべくもない。而してその然る所以は要するにかく過激なる勞働に服さなければ、その生計を立て、その小經營を維持することが出來ないが爲めではないか！　更に第三の點であるが、小農業者の慾望の稀少、生活の儉素を以て自作小經營の優越點と看做すが如きは餘りに勝手な搾取者的暴論である。彼等と雖もともと人間である。人間として慾望の充分なる滿足を望むにも拘らず尙且かくの如き低級なる生活を營んでゐるのは、勿論好んで人間以下の消費生活を經驗してゐる譯ではない。その然る所以は一にかく迄極端に慾望を節し、生活をきりつめなければ、其生活を續けて行くことが出來ないが爲めではないか！　從つて此點を以て小農經營の優越點となすが如きは、彼等小農經營擁護論者が、その自ら意識するとせざるとに拘らず、實は搾取制度擁護論者以外の何者でもないことを端的に證明するものに外ならない、と云はれても辯解の餘地はないであらう。唯上述の第二の點に至つては、その限りに小農經營の優越點と看做さるべきである。蓋し、

勞働する者が勞働に際して周到なる注意を用ふることの必要は特は農業に於て大であり、而して此點に於ては、普通の農業勞働者よりも自分自身の爲めに働らく自作農民の方が遙かに優越してゐることは確かであるからである。が此點も誇張して考へることは間違であると思ふ。何となれば、平素常に過大勞働と過小消費とに苦しんで殆んど何等教養を得る機會を有せざる彼等の所謂周到なる注意が幾何の價値を有するものなるかは敢て論ずるまでもないからである。かくの如く小農經營辯護論者の主張は大體に於て理論上は一應承認し得るものであるにも拘らず、實際に於て却つて小經營の不利を裏書する結果となつてゐるのは、實に小經營が農業に於ても事程左樣に不利なる經營形態たることを語るものであつて、その然る所以は、小農經營に於ては、その經營規模の過小なる點に於て、又その經營者の資力及び教養の欠如せる點に於て、近代的の科學及び技術を應用して合理的の耕作を行ふことが殆んど全く不可能なる上に、種々の資本主義的壓迫が彼等の上に加はるが爲めに外ならないのである。かやうにして飽食暖衣せるブルジョア學者は壯麗なる書齋裡に快よく小農經營の讃歌を歌ふことが出來やう。けれども極端なる粗衣粗食に堪えて身を粉にして働けど働けど尚その暮し樂にならざる實際の小農業者の間に一人の小農經營禮讃者を發見することは恐らくは困難ではなからうか。

ロ、大農經營優越論

然らば翻つて大農經營は如何。技術上に於て大衆經營が小農經營に優越せるものなることは疑ひない。即ち農業用機械、殊に小經營に於ては利用し得ない大機械を充分に利用し得ること（尤も此點に於ては近時技術の發達の結果小經營にも用ひ得るやうな小機械が發明されつゝあるのみならず、又小經營の協同組合的組織によつて大機械をも幾分小經營に利用し得る可能性が存するけれども、その充分有效なる利用の可能性は大經營を俟つて始めて存する）、科學と分業の應用を比較的大ならしめ得ること、土地、勞力、資本の浪費を節約し得ること等、之等の點に於て大經營の小經營に對する技術的優越の可能性は決定的である。勿論養畜、野菜又は果樹の栽培等の方面に於ては以上の如き大經營の優越性は餘程減殺されるけれども、兎に角一般的に云つて技術的進歩と合理的耕作とは大體大經營に於てのみ可能なのである。尚大經營はその商業的方面に於ても、又信用制度利用の點に於ても、小經營よりも有利なる位地にあることは明らかである。唯資本主義制下に於ける大農經營にとりて不利なる點は、最も能率の低きを原則とする農業賃銀勞働者の勞働に依倚せざるを得ない點にある。

以上は農業に於ける大經營と小經營との極めて概略的なる優劣比較論であり、加ふるに本質的には單に一般的なる抽象論に過ぎない。けれども此點は將來の農業經營の發展傾向を豫測する場合の參考となると云ふ意味に於て全く無用ではないが故に極めて簡單にその得失を玆に述べたのである。ところで翻つて實際の農業經營について大小兩經營の優劣に斷定を下すことは甚だ容易ではない。蓋し、先づ第一に、兩者の比較は嚴格に科學的方法に依據して行はなければ正確なる決定に到達し得ざることは云ふ迄もない。換言すれば、大小兩經營の比較は、地味、位地、氣候、風土等の全く同一なる二地域に於ける兩經營について之を行はなければその決定は公平ではあり得ない。次に、兩者の比較はその標準を異にするに從つて夫々異なりたる結論に達することは云ふ迄もない。即ち例へば收獲率を標準とすれば、他の事情にして同樣なる限り資本主義社會に於ては小農經營が大農經營に優越せることは疑ひない。蓋し、資本主義的大農經營者はその勞働者の勞働が餘剩價値を齎らす限りに於てのみ之れを雇傭するのであるからその勞働力の投下には一定の限度があるに反し、小農經營者は必らずしも利潤を目的とせす、否充分の勞働報酬をすら目的とせずして殆んど無限に勞働力を投ずるが故に、その結果一定面積當りの收穫高即ち所得收穫率なるものを比較すれば、他の事情にして同樣なる限り、小經營が大經營を凌駕すべきことは當然であるからである。反之、資本利潤を標準として兩者を比較すれば、大農經營はその生産手段を小經營に於けるよりもよりよく利用し得る上に、小農經營に於ては使用し得ざる機械をも使用し得るが故に、大農經營は小農經營よりもより大なる利潤を齎らし得ることゝなる。更に勞働の生産力を標準として兩者を比較すれば、技術的に優越せる大農經營が此點に於て決定的に小農經營に優越せることは評論する迄もない。而して之等の標準の中、人間を本位とする見地に於ては最後の標準こそ決定的のものであり、而して、此點に於て大農經營が決定的に小農經營に優越せることは社會を進化的に觀察する者にとつては頗る重大なる意義あるものと見なければならぬ。但し農業は自然の制約を受くること最も大なる産業なるが故に、大經營の小經營に對する此點の優越も、工業に於ける程顯著に實現し來らざることは斷るまでもないであらう。

とまれ、實際について、個別的に、兩者の優劣を正確に比較論證することは、上述の理由によつて殆んど不可能に近い。この意味に於て、從來爲されたる多くの此種の試みは、單なる參考たる以外に大した科學的價値を有するものではないのであ

る。そこで我々の爲し得ることは、實際の農業經營について其の大小經營の推移の狀態を歷史的に觀察すること即ち之れである。

b、大小農經營推移の實際狀態

イ、イギリス

先づ資本主義の祖國グレートブリテンについてその農業經營形態の推移を觀察するに次の如し。(農業の經營は國により、地方によりて種類、方法を異にするが故に、單に經營面積を標準として大小を區別することは甚だ危險であるが、統計の關係上之れによつて一班を窺ふの外はない。)

經營別	一八八〇年		一九一三年		一九二二年	
	經營數	百分比	經營數	百分比	經營數	百分比
一―五〇エーカー	三九一、四三九	七〇・七	三四四、〇六〇	六七・〇	三二三、八〇一	六六・〇
五〇―一〇〇	六四、〇九五	一一・五	六九、三五四	一三・五	七〇、八三八	一四・四
一〇〇―三〇〇	七八、七二一	一四・二	八二、五三七	一六・一	八〇、六二八	一六・四
三〇〇エーカー以上	一九、四九四	三・六	一七、一三四	三・四	一五、四四二	三・二
計	五五三、七三九	一〇〇・〇	五一三、〇八五	一〇〇・〇	四九〇、七〇九	一〇〇・〇

(Eugen Varga u. andere, Beiträge zur Agrarfrage Bd. 1. 1924. S. 303.)

我々が右の數字より知り得ることは、第一に、イギリスの農業經營はその總數に於て減少しつゝあると、第二に、五十エーカー(約二十町)以下の小經營の數が比較的急激に減少しつゝあること、三百エーカー(約百二十町)以上の大經營も亦徐々に減少しつゝあること、第三に、五十エーカー乃至百エーカーの中經營が僅かながら增加しつゝあること、之れである。尙經營數より見れば小經營は右の如く今尙比較的多數であるが、イギリスの農業全體の上には最早大なる意義を有しないことはその占むる面積より見れば明瞭である。即ち一九二二年度經營別面積を見るに次の如し。

經營面積別	全面積	耕地總面積に對する百分比
一―五エーカー	二八九、〇〇〇	〇・九
五―五〇	四五四四、〇〇〇	一四・八
五〇―一〇〇	五一七一、〇〇〇	一六・八
一〇〇―三〇〇	一三七〇六、〇〇〇	四四・六
三〇〇エーカー以上	七〇四一、〇〇〇	二二・九
耕地總面積	三〇七五一、〇〇〇	一〇〇・〇

(ibid., S.304.)

即ち五十エーカー以下の小經營は、其數より見れば全經營數の六六パーセントを占むるに拘らず、その占むる面積は四百八十三萬三千エーカーであつて、耕地總面積の僅かに一五・七パーセントに過ぎず、殘餘の二千五百九十一萬八千エーカーは五十エーカー以上の比較的大經營の占むるところとなつてゐるの

である。即ちイギリスの農業に於て大經營が優勢たる位地を占めてゐることは明かであり、且つ、五十エーカー以上の比較的大經營が、最大經營を除けば、漸增の傾向にあることを認めることが出來るのである。但しこれはイギリスの農業が、漸次穀作を止めて牧畜に移りたるため、右耕地中（これには牧場は包まれず）半分以上が牧草栽培地となつてゐる關係によるところが多いのである。

ロ、ドイツ

轉じてドイツを見るに次の如し。

經營別（單位ヘクタール）	經營數（單位一〇〇〇） 一八八二年	一八九五年	一九〇七年	經營面積（單位一〇〇〇ヘクタール） 一八八二年	一八九五年	一九〇七年
二以下	三〇六一、二	三二三六、四	三三七八、四	一八二五、九	一八〇八、四	一七三一、四
二―二〇	一九〇八、〇	二〇二五、一	二〇七一、八	一二三四八、六	一三〇〇七、九	一二七三六、五
二〇―一〇〇	二八一、五	二八一、八	二六二、二	九九〇八、二	九八六九、八	九三三二、一
一〇〇以上	二五、〇	二五、一	二三、六	七七八六、三	七八三一、八	七〇五五、〇
計	五二七六、三	五五五八、三	五七三六、一	三一八六九、〇	三二五一八、九	三一八三五、〇

即ちドイツに於ては、二ヘクタール（約二町）以下の過小經營は、その數に於ては漸增してゐるが、その面積に於ては漸減し、二乃至二十ヘクタール以下の小經營は、その數に於ても、その面積に於ても漸增してゐるに反し、二十乃至百ヘクタール以下の經營、並に百ヘクタール以上の大經營は、その數に於ても、その面積に於ても、一八九五年までは增加の傾向を示つたが、其後は漸減の傾向を示してゐる。而して全體としては、經營數は漸增の傾向を示してゐるが、經營面積は一八九五年以來減少を示してゐる。更に、二十ヘクタール（約二十町）を限界として大小經營を區別し、以て一九〇七年に於ける百分比をとつて見るに、二十ヘクタール以下の小經營は、その數に於ては總經營數の九四・二パーセントを占めてゐるが、その面積に於ては耕地總面積の四四・五パーセントに當り、反對に二十ヘクタール以上の大經營は、その數に於ては僅かに五・八パーセントに過ぎないが、その占むる面積は五五・五パーセントに達してゐるのである。而して前者はドイツの西部及び西南地方に優勢であり、後者は北西ドイツ、中部ドイツの北部、及び南東ドイツに主として行はれてゐる。」

ハ、フランス

更にフランスを觀るに之れ又別樣の發展傾向を示してゐる。即ち次の如し。

經營別（單位ヘクタール）	經營數 一八八二年	一八九二年	一九〇八年	經營面積 一八八二年	一八九二年	一九〇八年
一以下	二一六七、六六七	二二三五、四〇五	二〇八七、八五一	一〇八三、八二五	一三二七、二五三	一二一八、九九七
一―一〇	二六三五、〇三〇	二六一七、五五八	二五二三、七一三	一一三六六、三八四	一一二四四、七〇〇	一一五九九、三四三
一〇―四〇	七二七、二二二	七一一、一一八	八三五、二九八	一四八四五、六五〇	一四三一三、四一七	一四七四五、八六二

四〇以上	一四三〇八八	一六八、六七二	一八、四九七	一二、三九六、一〇五	一三、四九三、五九三	一六、七二〇、五五六

（一八八二年及び一八九二年の統計はKautsky, Agrarfrage, S. 132. に依り、一九〇八年の統計はVarga u. andere, Beiträge zur Agrarfrage, S. 217. に依る。一九〇八年度の數字については疑ひあれども暫らくこの儘にして置く。）

即ちフランスに於ては、一ヘクタール以下の過小經營は、その數に於ても、その面積に於ても、一八九二年までは漸增し、以後漸減の傾向を示してゐるに反し、十乃至四十ヘクタールの中經營は正にそれと正反對の傾向を示してゐる。而して四十ヘクタール以上の大經營は、その數に於ては漸減しつゝも、その面積に於ては漸增の傾向にあるやうである。」

ニ、其他の諸國

尙其他の諸國に於ける農業經營形態の現狀を見るに、ベルギーに於ては過小經營及び小經營が優勢であり、オランダに於ては中農經營及び大農經營が主として行はれてゐる。更にスカンヂナヴイア諸國に於ては、二百乃至二百五十ヘクタールの大農場が所々に存在するけれども、最も多數を占むるは五乃至五十ヘクタールの中經營である。轉じてアメリカ合衆國を見るに、「一九〇〇年の經營統計の示すところ次の如くである。

經營別	經營數 絕對數	經營數 百分比	經營總面積に對する百分比
二〇エーカー以下	六七五、四五八	一一・八	〇・九
二〇—一〇〇	二六二三、九五二	四五・七	一六・六
一〇〇—一〇〇〇	二三九二、九七一	四一・七	五八・七
一〇〇〇エーカー及び以上	四七、二七六	〇・八	二三・八
計	五七三九、六五七	一〇〇・〇	一〇〇・〇

即ち百エーカー（約四十町）を限界として區別すれば、百エーカー以下の經營は、その數に於ては全經營數の五七・五パーセントに達するが、その面積に於ては經營總面積の僅かに一七・五パーセントに過ぎず、反對に、百エーカー以上の大經營は、その數に於ては四二・五パーセントであるが、その面積に於ては實に八二・五パーセントを占めてゐるのである。（August Skalweit, Agrarpolitik, 2. Aufl. (1924.) S. 205, 207.）

ホ、日本

最後に我國であるが、我國の農業は、その經營形態から云へば殆んど全く小經營、否過小經營に屬するものであるから、此點については殆んど問題となり得ないのであるが、試みに農商務省發表の『耕作耕地廣狹別農家戶數』の推移を概觀するに次の如くである。

年次(年末現在)	五段未滿	五段以上一町未滿	一町以上二町未滿	二町以上三町未滿	三町以上五町未滿	五町以上	計
大正二年	二〇〇三、三三四戸	一八一六、二三七戸	一〇七九、四六八戸	三二八、五二九戸	一四九、八〇八戸	六七、一五三戸	五四四五、七二九
大正八年	一九三八、三八一	一八二八、六三三	一一三五、二二七	三四〇、一八〇	一五一、一〇七	九五、五九一	五四八一、一八七
大正十二年	一九一〇、一五〇	一八二七、五六二	一一六五、六二七	三二九、六一五	一五九、七八六	七七、三〇二	五四四〇、〇三〇
右百分比							
大正二年	三六・七九	三三・三六	一九・八三	六・〇四	二・七五	一・二三	100・00
大正八年	三五・三六	三三・一八	二〇・六八	六・二一	二・八三	一・七四	100・00
大正十二年	三五・一一	三三・五九	二一・四九	五・八八	二・七三	一・四六	100・00

(大正十二年農事統計表八頁)

右の數字によりて見るに、我國の農家中五反未滿を耕作せる者は比較的最多數であるが、絕對的にも相對的にも年々減少の傾向を示し、反之一町以上二町未滿のものは年々增加の傾向にあるが、其他のものには著しき變動はない。唯三町以上五町未滿のもの及び五町以上のものは大正五、六年頃より同八年迄は著しく增加したが、大正九年以降却つて漸減の傾向を示してゐる。而して試みに二町を限界として耕作農家を區別すれば、二町以下を耕作する農家が大正十二年末現在に於て總耕作農家の九〇、〇九パーセントを占め、二町以上の耕作農家は僅かに一割に過ぎない。日本が世界無比の小農國否過小農國たる知るべきのみである。(因に我國の農家戶數が耕地面積に比して過多なること、水田耕作を主とすること、及び地勢の傾斜の比較的激しいこと等は總て我國の農業に大農法を實施することを殆んど不可能ならしめてゐる點である。けれども若し經濟制度の變革が行はれ、文化が農村にも侵入し、進步したる技術が提供せらるゝに至れば、我國の農業も今日の如き原始的形態を脫して自然と技術の許す範圍內に於て相當に面目を一新するに至るであらうことは今より之れを豫想するに難くない。)

C、農業に獨特なる經營推移狀態の原因の考察

以上我々は主要國に於ける農業經營形態推移の實際狀態を概觀して來た。而してその結果結論的に云ひ得ることは、農業に於ける經營形態の推移が、工業に於けるそれとは甚しく異なつてゐると云ふこと、之れである。工業に於ては、少數の例外的なる生產部門を除けば、大經營の優勝は事實の上に明瞭であつて、所謂『大經營の時代』を現出せるに反し、農業に於ては、之れと同樣の發展傾向を認めることが出來ないのである。

勿論農業經營形態の推移は、國により、地方によりて夫々異なるが故に、工業の場合の如く一般論を試みることは出來ないけれども、極めて概括的に之れを云へば、過大經營と過小經營とは共に漸減し、而してその中間の經營が比較的變動なくその地歩を保持しつゝあるものと云へやう。而して之等の經營の中、その比較的大なるものは大經營の範疇に入り、その比較的小なるものは之れを小經營の範疇に屬せしめ得るのであるから、從つて農業に於ては、マルクス主義者の主張するが如く、大經營が小經營を壓倒しつゝあるに非ざることが明かなると同樣に、又非マルクス主義者の斷定するが如くに、小經營が大經營を驅逐しつゝあるに非ざることも亦明瞭であると云はなければならぬ。寧ろ、先進諸國の農業の展開傾向が我々に示すところによれば、農業は全體として資本主義の發展と共に漸次に衰微的傾向を採り、その中にあつて大小經營は共に顯著なる移動を示さず、一般には兩スクミ的狀態にあり、と云ふを以て適切とするであらう。

然らば農業は此點に於て工業に對して何故にかくも顯著なる對立を爲してゐるのであらうか。此點に於て何故に農業は工業とは異なりたる獨特の展開傾向を示すのであらうか。換言すれば、大經營の理論的優越が何故に農業に於ては工業同樣に事實の推移によつて實證せられないのであらうか。

この點に於いて先づ第一に、考へなければならないことは、農業の個々の經營間には、工業に於けるが如き價格競爭が存在せぬと云ふ事實である。極めて簡單に之れを云へば、工業に於て企業者間に激しい競爭の行はれるのは、要するに工業生產品が生產費を增加せずして數量を增加し得る財貨、否數量の增加が殆んど常に生產費の低下を齎らす傾向を有する財貨なるが爲めに外ならない。それ故に工業企業家は當時の市場價格以下にてその製品を賣却し、かくしてその販路を擴張し、その結果所謂薄利多賣主義によつて、假令生產品の單位當り利潤は減少しても、結局總利潤を增加せしめ得るのである。之れを逆に云へば、工業界の競爭に於て優勝せんとせば畢竟その競爭者よりもより安價にその商品を市場に提供しなければならぬ。而してより安價に商品を提供せんが爲めにはより安價にその商品を生產しなければならぬ。ところで生產費の低減を可能ならしむるものは云ふ迄もなく優良なる技術の應用であるが、その應用を可能ならしむるものは即ち大經營に外ならぬ。之れ工業に於て競爭が行はれ、而もその結果大經營が次第に小經營を壓倒し、驅逐し得る所以である。然るにかくの如き價格競爭は農業に於ては行はれないのである。蓋し、農產物は生產費を增加するに非

されば數量を增加し得ざる財貨であるが故に、その市場價格は、市場に供給せらるゝ農產物の中、最劣等地又は最遠隔地に於て生產せられたる農產物、換言すれば、最大の生產費を要したる部分の農產物の生產費に等しからんとする傾向を有するのであつて、その間に競爭の行はるゝ餘地は原則として無いのである。換言すれば、生產費の低き優等地に於て農產物を生產する農業者も、工業企業家の場合の如く、市場價格以下にて賣却することを敢てしないのである。蓋し、農業生產が季節的であつて隨意に再生產を行ひ得ざる上に、土地には收穫遞減の法則が作用するが故に、一定の技術の下に於ては、生產費を增加するに非ざればその數量を增加することが出來ないが爲めに、農業者には薄利多賣主義的競爭を、實行する餘地がないからである。かやうにして農業に於ては、工業に於けるとは異なり、個々の經營相互間に於ける競爭は存在せず、唯、自然條件及び勞働條件の甚だしく異なれる國々の間殊に新開國の農業と舊國の農業との間に世界市場裡の競爭の行はるゝことあるのみである。例へば前世紀末にアメリカの低廉なる農產物が歐洲の市場に侵入して、同地の農業を一時危殆に瀕せしめたが如き之れである。けれども例へばアメリカ各地の個々の農業者間にはかくの如き意味の競爭は決して存在せぬのである。從つて農業についてその大小經營の優劣を論ずることは出來る、けれども進んで、大農經營が小農經營を驅逐するとか、若くは逆に小農經營が大農經營を壓倒するとか云ふは即ち誤りである。何となれば兩者間には直接に競爭は行はれず、從つてかくの如き結果を惹起すことは事實上あり得ないことであるからである。若し假りに兩者間に工業に於けるが如き競爭が行はれて來たものとすれば、農業に於ける大小經營の優劣論は、事實の推移による裁斷を受けて恐らくは既に一決し、今日の如き紛亂を來たすことがなかつた筈である。

上述の如く農業に於ける大小個々の經營相互間には直接に競爭は行はれないのであるから、假りに事實上大農經營が漸減し、反之小農經營が漸增の傾向を示したりとしても、それを以て直ちに大農經營優越論は覆へされたり、若くは小農經營優越論は事實の確認を得たり、などと即斷することは出來ない譯である。寧ろ兩經營の推移は全く他の關係に基づいてゐるのであるから我々は進んで此點を檢覈して見なければならぬのである。

兎に角先づ第一に、農業に於ては、工業に於けるとは異なり、大小經營が殆んど顯著な移動を示してゐないのは、個々の經營間に直接に競爭が行はれないと云ふことが消極的にその重大なる原因を爲してゐることは疑ひない。

次に、農業に於ては、工業に於けるとは、異なり、大農經營がその理論的優越を出現し得ないのは、大農經營そのものに內在する理由に依るに非ずして、實は資本主義制度にその原因を有することを見逃がしてはならぬのである。何を以て然か云ふか。蓋し、大農經營は比較的大なる資本を要するものであるが、資本主義社會に於ては、資本は農業よりもより有利なる商工業に轉移し、集中する傾向を有するが故に、此點に於て大經營の發展が甚しく阻害せられること、之れその第一の理由である。次に、工業に於ける生產手段は自由に增加し得らるゝに反し、農業に於ける最も重要なる生產手段たる土地は自由に增加し得ず、經營地面の擴大、從つて大經營の創設は隣設せる他人の土地を併合することによりてのみ始めて可能となるのであるが、その可能性が土地私有制度の爲めに著しく制限せられてゐること、之れその第二の理由である。更に、現時の制度の下に於ては大經營は最も低能率なる農業賃銀勞働者の勞働に依存せざるを得ないのみならず、かくの如き勞働力すら現時の農村には欠乏し行く傾向を有するが爲め、大農經營はその必要とする勞働力を得るに困難を感ぜざるを得ざること、之れその第三の理由である。而して第四の理由は、資本主義制度の下に於ける相續制度の爲めに土地の細分を招くこと之れである。現時の社會に於て大農經營がよく發展し得ざるは要するにその發展を阻害する之等の原因あるが爲めに外ならないのである。而も之等の諸點は上述の如く何れも皆資本主義制度の產物であるから、若し資本主義制度にして撤廢せられんか、之等の障碍も自ら除却せらるゝこととなるが故に、その結果大經營は大體に於て農業に於ても優越なる地位を占め、以て農業の技術的發達を實現し、農業生產力の偉大なる增大を齎らすに至るべきものと想像せられる。但し地勢の關係上大農經營の不可能なる地方は勿論例外である。

最後に、小農經營が、工業に於ける小經營の如く顯著なる沒落を示さざるのみか、或地方に於ては却つてその數を增加しつゝあるの事實は、小農經營擁護論者をして凱歌を奏せしめつゝある所以であるが、その原因は、先に述べたるが如く價格競爭による大農經營の壓迫のないこと、その一であり、經營と家計とが密接に關聯せるが爲めに資本主義的壓迫に相當に堪え得ること、之れその二である。けれども更に深く小農經營の實情を觀察する者は直ちに先の小農經營謳歌論者の凱歌の甚だ皮相的なるを知るであらう。蓋し、小農經營の今日に於ける存在形式は、商工業的副業に依るか、大農經營の下に於ける賃銀勞働に從事して寄生的生活を營むか（今日大農經營の地方に却つて過小

農經營の増加する事實あるは實は大農經營がその必要とする賃銀勞働者を得んが爲めに自らその大土地の一片を細分、分讓して多くの小自作農を創設するが爲めに外ならないのである)、然らざれば先に述べたるが如く、過大勞働と過小消費とによつて辛じてその存在を繼續してゐるに過ぎないのである。而も彼等の抵當負債は一般に年と共に增加して共存在を脅かしつゝあるのであるから、マルクス主義の所謂『小農經營の必然的沒落』の傾向は實質的には必らずしも誣妄の見解ではないのである。けれども兎に角、大農經營の優勢なる地方を除けば、マルクス主義の第二の論據たる生產行程に於ける社會化の發展と云ふ事實は農業に於ては之れを認めることが出來ない。換言すれば、生產行程に於ける社會化の發展と云ふ事實は農業に於ては一般的には存在しない、と云ふ結論に到達せざるを得ないのである。

三　農業階級構成の展開傾向

玆に於てか我々は進んでマルクス主義の第三の論據たる無產階級の組織とその階級意識の發展と云ふ事實を農業に於ても認めることが出來るか否かを檢覈すべき順序となつた。果して農業に於ても資本主義制度破滅の能動的要素とさるゝ無產階級が增大し、その團結と鬪爭とを進めつゝあるであらうか。

此點に於て農業に於ける展開傾向が工業に於けるそれと異なるものあるべきは、上述の經營形態の推移が農業と工業と相違せると云ふ事實より生ずる當然の歸結である。即ち工業に於て、無產階級の數の增加と、その階級意識の生長とその團結の發展の頗る著しきものあるは、主として工業生產行程に於ける社會化の發展、換言すれば大經營の發展、と云ふ事實に根ざしてゐる。然るに農業に於ては、前述の如く、生產行程に於ける社會化の發展と云ふ事實は一般的ではないが故に、その無產階級の組織と階級意識の發展も亦當然工業に於けるが如く顯著ではあり得ず、農業に於ける階級構成とその展開傾向は工業に於けるとは異なりたる獨特の樣相を呈示することになるのである。

a、農業に於ける階級構成と階級對立關係

先づ農業に於ける階級の構成とその對立の關係を觀るに、工業に於けるとは甚しく異なつてゐる。工業に於ては階級は資本家、手工業者、勞働者の三個に過ぎず。而もその中間階級たる手工業者階級は資本主義の下に於ては大工業の壓迫によつて一般に沒落すべき運命を有する階級であつて、もとより大勢を左右し得べき數と實力とを有するものではないから、結局問題は資本家階級と勞働者階級との對立關係の推移に歸着するのであ

る。然るに農業に於ては問題は左様に簡單明瞭ではなく、寧ろ複雜と混沌とをその特色とするかの如くに見える。即ち先づ第一にその階級の構成を概觀するに、之れを、地主階級、資本家的借地農業者階級、自作農階級、自作兼小作人階級、小作人階級、及び農業勞働者階級に區別することが出來る。更に地主階級の中には、自らは全く農業經營には關與せず唯地代のみを收得する者と、多數の農業勞働者を雇傭して自ら資本家的に農業經營を行ふ者との二種あり、又自作農階級の中にも、比較的多數の農業勞働者を雇傭する大自作農と、自己及び家族の勞働を主とするけれども尙若干の農業勞働者を雇傭する中自作農と、全く他人を雇傭せざることを原則とする小自作農との三種を區別することが出來るのである。次に右の諸階級の對立關係を概觀するに、之等諸階級の中、本來の意味に於ける無産階級は農業勞働者階級あるのみである。而して此階級が多數集團的に存在せるは大農經營の地方に於てのみであり、此地方に於ては彼等が農業勞働者組合を組織して雇傭主に對する鬪爭を行つてゐる點に於ては、工業に於ける勞働組合運動と共關係に於て異なるところがないが、其他の地方に於ては農業勞働者は概ね孤立的なる雇傭關係及び勞働狀態の下にあるが故に、雇傭主に對して集團的鬪爭を行ふが如きことは殆んど不可能に近い。次に小作人階級及び自作兼小作人階級は、形式上から云へば小企業者たるを失はないけれども、彼等の經營規模は概ね過小であつて、他人を雇傭せざるのみか自ら他人の許に於ける賃銀勞働にも服する階級であるから、實質的には無産階級と少しも擇ぶところがないのである。が、唯前者と區別せんが爲めに之れを假りに半無産階級の範疇に入れることにする。此階級は小作料の關係に於て地主階級と對立し、小作人組合を組織して之れに對抗しつゝある。以上が即ち農業に於ける無産者的階級である。而して之れに對して、地主、資本家的借地農業者、及び大自作農の三階級が農業に於ける搾取階級として上述の無産者的階級に對立してゐる譯である。而して此の兩階級の中間に介在して、共間を動搖せるものが即ち中及び小自作農階級である。かくの如く農業に於ける階級構成は複雜なる上に、農業に於ては、工業に於けるとは異なり、一階級より他階級への向上が必ずしも不可能ではないと云ふことが彼等の階級意識を比較的稀薄ならしめ、その階級關係を益々混沌たらしめてゐるのである。

b、農業に於ける階級構成の移動と階級鬪爭の展開傾向

然らば實際に於て農業に於ける階級構成は如何に移動し、その階級關係は如何なる展開傾向を示しつゝあるであらうか。果してマルクス主義の云ふが如く、無産階級の組織と階級意識と

は農業に於ても次第に發展しつゝあるであらうか。

此點については筆者は、少くとも、前にその農業經營形態の推移の實際狀態を觀察したる主要なる諸國について之れが研究を試みたいのであるが、その一つ一つが夫々一個の論文に値する程の内容のものであるから、到底此の一論文に之れを拾收する譯にはゆかぬ。で止むを得ず、茲では極めて概略的なる結論だけを述べるに止め、唯我々に直接關係のある我が日本の農業に於ける階級構成の移動とその階級鬪爭の展開傾向とに關する概觀を附け加へることにしたいと思ふ。

農業階級移動の實際狀態は勿論國によつて異なるけれども、極めて概括的に之れを云へば、私の所謂農業に於ける搾取階級と中間階級とは稍々漸減し、反之、無産者的階級は漸增の傾向にあり、と云ひ得られる。而して多くの國に於ける現狀を見るに、農業に於ても、搾取階級は比較的少數であり、之れに對して無産者的階級は比較的多數であるが、工業と著しく異なる點は、農業に於ける中間階級即ち中、小自作農階級が尚相當に多數を占め、その向背が大勢を左右する程の狀態にあると云ふ點之れである。

之れを我國の農業について觀察して見やう。

我國の農業に於ける純粹の搾取階級は、耕作に從事せずして耕地を所有せる者之れである。「農事統計表」によれば大正十二年末現在に於てその數は九七四、六三一戸である。之等の地主は必らずしも大地主のみには限らず、寧ろ商工業を本業とする小地主が多數であつて、之れを特定の一社會階級に網羅することは勿論出來ないけれども、農業に對する關係のみから云へば、彼等は少しも農業生産には關與することなく唯小作料のみを收得する地主階級であるから、農業から云へば全く有害無益の純搾取階級である。其外に尚七九、三〇二戸の五町以上を耕作する農家（大正十二年末現在）は大體に於て私の所謂大自作農と認め、農業勞働者を搾取する意味に於て搾取階級の仲間に入れ得るけれども、その多くはそれ以下の中自作農階級と實質上殆んど區別し難きのみならず、その數も大したものではないから、特に之れを別にして考へる程の必要はないであらう。尚自作農階級の中にはその土地の一部を小作に附してゐる地主の數は頗る多い筈であるが我國の統計からは遺憾ながら之れを擇び出す術はない。そこで極めて大雜把に、耕作に從事せざる地主を搾取階級、自作農階級を中間階級、自作兼小作階級及び小作人階級を半無産階級、農業勞働者を無産階級に區別し、農商務省の統計を其儘に利用して唯大體の傾向だけを窺ふに止め

やう。

	搾取階級	中間階級	半無產階級 自作兼小作	半無產階級 小作	無產階級
大正二年	九七五、八六七戸	一七四四、八〇一戸	二一七、九九五戸	一五二〇、九三三戸	
大正十二年	九七四、六三一	一六六四、五一六	二二四九、七〇五	一五五五、七九九	五六〇、三八三人

右の中無產階級とは農業勞働者中大正九年十月一日現在定雇三八四、九三六人と僕婢一七五、四四七人との合算數を假りに用したのであるが、我國の如き小農制の所に於ては、先に述べたるが如く、彼等の階級的運動は殆んど不可能であるから之れは除外して考へて差支ない。さうすると我國の農業に於ける搾取階級と中間階級とは漸減し、半無產階級は漸增の傾向にあるを認めることが出來る。而して大正十二年末耕作農家數の百分比をとれば、自作農階級は三〇・六〇パーセントなるに對し、半無產階級中、自作兼小作階級四一・二七、小作人階級二八・一三、計六九・四〇パーセントに達する。ところで我國の自作農階級の中には、上にも述べたるが如く、地主の階級に片足を入れてゐる者が比較的多數であるから、外國の中間階級の如くその政治的態度は動搖的であるよりも、寧ろ保守的であると見るを當れりとするであらう。けれども實質上無產階級たる半無產階級が我國の農業に於て決定的の多數を占め、耕作農家總戸數の約七割に達し、而も尙增加し行く傾向にあることは頗る重大なる意義を有するものと見なければならぬ。

然らばかくの如く多數を占むる半無產階級の組織と階級意識とは如何に發展しつゝあるであらうか。昨十四年末に於て小作組合に組織せられてゐる者の數約三十萬と見られ、その中日本農民組合約七萬、日本農民總同盟約一萬五千、北日本農民組合約一萬五千、中部農民組合約二萬と概算されてゐる。而してその中心勢力たる日本農民組合を始めとして何れも皆大正十一年、十二年以後に成立したばかりであるから、其後の短期間に於ける發展は目醒ましいものがあつたと云はなければならぬ。而して彼等の現在の運動は小作條件の改善を中心として行はれてゐるけれども、昨秋無產政黨組織問題に際して彼等が極めて重要なる役割を演じたことによつても推察し得べきが如く、彼等の闘爭がやがて、今日彼等を被搾取と汚辱の境遇に沈淪せしめ今日農業を衰退せしめつゝある元兇たる現在の資本主義制度そのものゝ改廢に向ふべきは想像するに難くない。が兎に角、我國無產階級解放運動の運命の最後の鍵を握るべき位地にある農業の無產者的階級、即ち小作人階級及び自作兼小作階級合せて的三百七十八萬戸の中組織されてゐる者の數が僅かに三十萬に過ぎざる現狀を思ふ時前途遼遠の感は蓋し何人も免がれざるところであらう。

兎に角概括的に之れを論ずれば、農業勞働者の運動と小作人階級の運動とは農業に於ける階級鬪爭の二大態様として各國に於て次第に發展しつゝあることは事實である。此意味に於てマルクス主義の所謂無産階級の組織と階級意識の發展と云ふ事實は、兎に角も農業に於ても亦實現しつゝありと云はなければならぬ。唯工業に於けるとは異なり、農業に於ては中間階級が今尚甚だ重要なる意義を有することは先に述べたるが如くである。

四　都市及び農村兩無産階級の提携の能否

そこで問題は結局、都市及び農村の兩無産階級の提携が可能であるか否か、及び農業に於ける中間階級の無産階級運動に對する態度如何、と云ふ二個の問題に歸着する。換言すれば、都會と農村の兩無産階級が提携して共同一致事に當り、其上に農業に於ける中間階級をその味方とする、或は少くとも之れを中立せしむるとに成功すれば、恐らくは彼等は一定の時期の後に共所期の目的を到達し得ること丶なるであらうが、それが果して可能であるか否かと云ふとが結局最後の問題となる譯である。

その中、中間階級の問題は事實上は重要なる問題ではあるけれども、私の考ふるところによれば此問題は結局無産階級の成長の程度、即ちその實力の程度如何によつて如何様にも解決さるべき性質の問題である。換言すれば、此問題は實際政策の問題であつて、原則的の問題ではないから、玆に之れ以上論ずる必要はない。最も根本的なる問題は都會と農村の兩無産階級が果して提携し得るか否かの問題である。而して此問題について考へなければならない點は、一、兩無産階級の利害關係は一致するか否か、二、兩無産階級運動の終極目標が合致するか否か、の二點である。が玆には之れを詳論する餘白がないから、極めて簡單に之れに觸れるに止める。

a、兩無産階級の利害關係の不一致の存否

此點に於て最も問題となるのは農産物の價格に關する點である。農業無産階級は農産物の生産者としてその價格の高からんことを欲するに反し、都會の無産階級は農産物の消費者としてその價格の低からんことを希望するから、此點に於て兩無産階級の利害關係は一致しない、と云ふのが普通に考へらる丶ところである。（玆に謂ふ農業無産階級とは云ふ迄もなく農業に於ける半無産階級即ち小作人及び自作兼小作人階級のことであつて、本來の農業無産階級たる農業賃銀勞働者については、彼等も亦純然たる農産物の消費者であるから、此點に於ては始めから問題とはならない）。が私の結論を云へば、私は此點に於ては

兩無産階級の利害の相反關係は理論上は存在しないと考へる。蓋し、農産物の價格の騰貴によつて利する者は大いに賣るべき農産物を有するか、又はそれに伴ふて騰貴する地代又は地價を收得する地主階級及び大自作農階級のみである。中、小自作農階級にとつては此問題は大した問題ではない。と云ふのは、若干賣るべき餘剩農産物を有する彼等はその價格の騰貴によつて勿論一時は若干得るところあるけれども、結局それに伴ふ生産費の増加によつて可なり相殺される傾向を有するからである。然るに小作人階級に至つては、賣るよりもより多くを買はなければならない者が多いのである。換言すれば、彼等は農産物の眞の生産者でありながら、同時に賃銀勞働其他によりて得たる貨幣を以て農産物を買ひ足さなければならぬ消費者なのである。かくの如き皮肉にして不當なる位地に彼等は置かれてゐる上に、農産物の價格の騰貴は、原則として地代を高め、生産費の増加を來すのであるから、彼等にとつては損にはなつても、得にはたらないのである。けれども實際に於て彼等の多くは此點について明確な理解を持たないのみならず、農産物の生産者たる心理の上から矢張りその價格の騰貴を希望するかと考へらるゝから、その場合には此問題は矢張り一個の問題たるを失はない。けれども今日農産物の生産者はその價格の低きに苦しみ、而も農産物の消費者はその價格の高きに惱む傾向のあるのは、一中間商人、投機業者が其の間に介在して不當の利潤を貪るが爲めに外ならない。換言すれば、今日の商業制度が禍害の根源なのであるから、之れに改革を加へ、營利を目的とせざる國家的專賣制度の如きものを主要なる農産物について實施すれば、生産者も消費者も共に助かる譯である。從つて此問題は結局此種の新制度の提案乃至採用と云ふやうなことによつて解決を見るのではあるまいかと考へられるが、事實果して如何。

b、兩無産階級運動の終極目標の不一致の存否

先にも一寸述べた如く、工業に於ける無産階級運動の終極目標は恐らくは工業の社會化に向ふものと想像せられる。蓋し、そは要するに工業に於ては資本主義の下に於ける大經營の發達によつて、工業社會化の基礎が準備せらるゝと同時に、個々の無産者の獨立の企業者たり得る可能性が全く失はれてゐるが爲めに外ならない。然るに資本主義社會の農業に於ては大經營は必らずしも發展せず、小經營又必らずしも沒落せざるが故に、無産者の數は工業に於けるが如く顯著には増加しないのみならず、獨立の小經營を獲得せんとする努力も農業の無産者にとつては工業に於ける程には絕望的且つ無意味には見えないのである。そこで彼等の運動は現在に於てこそ搾取制度に對する反抗

と云ふ意味に於て工業無産階級の運動と一致してゐるが、彼等が抱持するに至るべき終極の目標は、工業無産階級のそれとは異なり、農業社會化の方面には向はずして、却つて大所有地を自分達の間に分配せんとする方向に向ふのではあるまいかと考へられるのである。此點は現にロシア革命の經驗したるところであるが、資本主義社會に於ける農業生産關係の特殊なる發展傾向から見れば之れは極めて當然であると云はなければならぬのである。因にヴアルガの如きは、歐洲に於ては中、小自農階級は何れも土地の欠乏に苦しんでゐるから、彼等に大所有地の分配を約束することによつて、之れを無産階級の味方たらしめ得ると見てゐる（E. Varga, Beiträge zur Agrarfrage, 1. Bd 1924. S. 43—44. 47—48.）が私は我國の如きに於ては此點は寧ろ小作人階級についてより多く當てはまりはしないかと思ふ。兎に角工業無産階級運動の終極目標が工業の社會化に向ふに反し、農業無産階級運動のそれが云はゞ農業の個人化に向ふものとすれば、將來の新社會の建設は此點に於て一の大なる障礙に出會はすものと見なければならない。此點が如何に解決さるゝであらうか。

五、結論——將來の展望

要之、資本主義社會に於ける農業の展開傾向如何、換言すれば、今日農業の發達を抑壓し農村の疲弊を惹起しつゝある資本主義制度を除去して、より高度なる新制度を創造せんとする方向に向ふ要素が農業自身の中に發達しつゝありやとの問題については、若し以上の考察にして誤りなしとすれば、にわかに樂觀を許さぬものがあり、前途は必らずしも坦々たる大道にあらざるものと結論せざるを得ない。蓋し先づ第一に、大農經營の優勢なる地方を除けば、農業社會化の基礎が準備せられてゐないのみならず、第二に、農業に於ける中間階級が今尚比較的多數であつて、その向背が大局に大なる影響を有する上に、第三に、農業無産階級の數は增加しつゝあるけれども、その多くは今尚依然として土地私有慾に囚はれてゐるものと見るべき理由があるからである。然るに大局の上に勝利を得んが爲めには無産階級は、先にも述べたるが如く、農業に於ける中間階級をその味方とし、或は少くとも之れを中立の位置に立たしむる必要があるのみならず、都市と農村の兩無産階級が緊密なる共同戰線に立つことを絕對に必要とするのである。ところで、兩無產階級の圓滿なる提携には、その提携成立の必須條件たる兩無產階級の利害關係の一致とその終極目標の合致と云ふことに就いて上述の如き問題がその途上の障礙として橫はつてゐるのであ

る。之等の問題の解決が結局一切の問題解決の鎖鑰となる譯である。無産階級は果して如何に此の難關を切り抜けんとするであらうか？

*　*　*

そこで最後に、一切の難關が首尾よく解決せられて、舊制度が撤廢せられ、それに代つて新制度が出現するものと假定して、その後に於ける狀勢を簡單に『夢想』して此稿を終ることにしたい。

新制度の下に於ては、營利主義の原則は撤廢せられて、必要主義の原則が世の中を支配するに至るであらう。然る時は「必要」の上より見て最も根本的に重要なる農業が最も重要視さるゝに至るであらう。資本と勞力とは、今とは反對に、都會より農村に逆流するに至るであらう。農業の生産力の增大のために一切の努力が拂はれるであらう。何となれば、『資本主義の發展は工業に於ては極度に完全なる經營を創つてゐるから、新たなる社會主義的社會は、工業に於ては、先づ第一に、新たな、より高度の經營を創成するよりも、舊式の經營を廢棄し、且つ勞働力を完全なる經營に集中することをより大なる任務とするであらうが、農業に於ては今日の技術及び知識の程度に於て可能なる最高限度に到達してゐる完全な經營と看做し得るものは極く僅かしかなく、且つ此の少數の經營では、農産物に對する社會の必要を充たすには遙かに不充分であるから、農業全體を新たに組織して一層高度の段階に高めることが必要になる』からである。（Kautsky, Sozialisierung der Landwirtschaft, 1921. S. 74—75. 拙譯『農業の社會化』一二二―一二三頁）。その結果農業の生産力は驚くべき程度に增大するに至るであらう。他方に於て工業は原料若くは動力に近き田園地方に分散さるゝに至るであらう。それに伴ふて都會と農村との關係も甚大なる變化を受くるに至るであらう。

かくして「數百年後」に於ける人類の樂園生活を想像して見る。そこには最早「肉體的荒廢」を齎らす都會もなければ、「精神的荒廢」を强ふる農村もない。農工業の調和と都會と農村との融合がその社會の特色である。そこに存在するものは云はゞ「農村的都會」或は「都會的農村」である。(Vgl. W. P. Miljutin, Sozialismus und Landwirtschaft, 1920. S. 99. 拙譯書『社會主義と農業問題』一四五頁參照)。

カウツキーをして之れを語らしめよ。『工業と農業との適當なる結合形式を經驗によつて發見するとが社會主義的制度の任務となるであらう。此結合形式の下に於ては、工業は田園に轉置

せられ、農業經營より工業勞働者を供給することとなるのみならず、工業勞働者は農業の非常に多忙なる時期殊に收穫期等には有效に之れに共働することが出來、又農業勞働者は農耕の閑なる時期殊に冬季には工業に於て甲斐々々しく働くことが出來るやうに總ての勞働者が教育せられ、組織せられるであらう。更により高度なる農工業の結合形式の下に於ては、各勞働者は毎日數時間は農場に於て、數時間は工場に於て働らき、かくして精神と肉體とをさいなむ一方的勞働の單調を廢棄し得るであらう。かやうにして、例へば八時間勞働の中、四時間は農業に於て働らき、四時間は工場に於て働らくと云ふやうなことになれば、勞働者の健康と勞働の悅びとは確かに驚くべく增大するに至るであらう。……………他方に於て都會制度は全然なくなりはしないであらう。都會は國家行政機關及び高級教育の中心地として存在を續けるであらう。けれども國家官僚組織の減縮と地方自治の伸張に伴ふて、中心都市に於ける役人の數が減少すると共に、工業の分散が益々計畫的に組織せられ、且つ益々市場の景況より獨立し、加ふるに田園に於ける交通機關の益々發達すると共に、愈々工業が地方的に分散さるゝこととなるから、その結果國家の中心都市は約十萬の人口を有するを以て足るに至るであらう。他方に於て農村は、工業の田園分散によつて、今日既にイタリーに於て見るが如く、小都會に發達するであらう。」

(K. Kautsky, Die proletarische Revolution und ihr Programm, 1922. S. 303—304.)

かくの如き時代に入つて始めて農村の振興は徹底し、農村の文化は始めて爛漫たる華を開くであらう。否その時代の文化こそ眞の意味に於ける人類的文化である！(完)

我國の經濟は如何に動くか

堀江歸一

我國經濟社會の推移

大正九年三月の恐慌以來、我國の經濟社會は常に不景氣に襲はれて、內外の兩方面から壓迫を蒙るもの甚だしく、何時に爲つて、果して能く此窮境を脫出するを得るか、世人をして其將來を豫想するに苦しましめたのである。此數年間を一貫する經濟的事相の重なるものは、輸入の超過であり、國際貸借に於ける受取勘定の減少であり、斯くて生ずる內外正貨に對する取付であり、內國金融の緊縮、金利步合の上進、有價證券市價の低落であつて、何れの方面から云つても、一として不景氣の徵候ならざるはなきの狀況であり、而して是等の事相を生ずる根本的原因としては、外に於ては歐米諸國を擧げての不景氣と內に於ては財政の異常なる膨脹、之に基いて、經濟社會に對して加へられる壓迫とが擧げられたのである。

元來一國の經濟社會に好景氣と不景氣との時代があり、前者に於ては、經濟的國力に大なる伸張を告げるが、後者に於ては、不景氣に相當の收縮を招くと云ふことは、經濟社會其ものが一の活動體である場合に、已むを得ざる所であると考へられる。不景氣時代に、國力の萎縮するのは、避け難き所に相違ないが、經濟社會には多くの場合に於て、自然的調節の法則が働き、不景氣の狀態が幾年か續く間には、自然に景氣の恢復を助成する事相の生ずるを常とし、斯くて一旦不景氣に襲はれた經濟社會も何時の間にか、景氣の復興を迎へるを難しとせざる次第と爲るのである。若しも此法則が一國に於て容易に働き出さず、不景氣が何時までも繼續して、國力全體に疲憊を來し、再起の餘裕なきに至らしめたとすれば、其國は經濟的亡國の窮境に陷らしめられたものであつて、斯の如き事實は例へば其國が諸外國から鎖國を强要されたとか、戰敗の際に、賠償金の負

擇、領土の割讓を強いられたとか、火災地震並び起つて、國の富源に重大なる損傷を蒙り然も一時之を補給する道を求めるを得なかつたとか云ふが如き場合に起るかも知れないが、是等は寧ろ稀れに見る例外的事實であつて、多くの場合を通じて云へば、不景氣の後に、好景氣が來り、好景氣が去つて、不景氣と爲るのは、恰も一日に晝夜の別あり、一年に四季の循あると異ならざるものと考へられたのである。

我國に於て、前記の如く大正九年に恐慌あり、爾來經濟社會は之を一回轉期として、不景氣に襲はれるや、一方に貿易は年々逆勢を告げ、貿易外の受取勘定は次第に減少し、他の一方に正貨の減少と共に、內國の金融は漸く緊縮を來し、世人をして經濟的反動期の事相の恐る可きものあることを感ぜしめたのである。當時政局に居れる原內閣や、之を繼いだ高橋內閣の如きは、政友會の傳統的方針である積極政策を以つて、當面の問題を處理するに終始した爲めに、固より右の如き反動期に臨んで、之に伴ふ困難を回避するを得なかつたのは勿論、却つて一層の深きを致した趣きを免かれなかつたのである。若しも當時に於て、政府が財政整理に從ひ、經費を縮小し、斯く政府に依つて、消極政策の行はれることを機會として、民間の當業者にも消極方針の下に、整理を行ふことを慫慂したならば、物價は漸を以つて低落し、貿易の逆勢亦矯制されて、次第に經濟社會の病弊を杜絕し、其順調と爲るを期し得た筈であるのに、政友會の多年に亘つて行ひ來つた財政經濟上の政策は盡く右の要訣に違背したのである。斯くて經濟社會の攪亂されるのは當然の數であつて、當時の政友會內閣に對しては勿論其後の政友會に對する我國經濟社會の不信の餘程根强きものと爲り、今日に至るまで、政友會の積極政策と云へば、心ある財界の人士に依つて、厄病神扱ひされるのも、要するに當時に於ける積極政策の濫行に依つて、齎された弊害の然らしめたものと云はざるを得ない。

斯くて高橋內閣の後を繼いだ加藤內閣は超然內閣の常として、確乎たる政黨の援護を受けず、地位の頗る微弱であるを免かれなかつたが、其れにしても如上の弊害は明に此內閣の認める所と爲り、銳意消極政策の下に、行政財政の整理に依つて、經費を節約することに勉め、斯くて大正十一、十二兩年に於ける外國貿易は之を前年來に比較して、或る程度まで其逆勢を抑止し、大正六年九月の金輸出禁止以來常に下落の趣きを免かれなかつた外國爲替相場も大正十二年七八月の頃には略ぼ平準點に恢復するを得たのである。斯る狀態を以つて、推移したならば、累年不景氣に苦しめられた我國の經濟社會も或は之から

ず、恢復の緒に就くに至りはしないであらうかと云ふ希望すら、一部の人士に依つて、懷かれ、金輸出禁止の如きも、當局者の決斷に依つて、解除の見込みあるに至つたのであるが、同年九月に於ける帝都其他の震災火難は斯る希望を一空に歸せしめ、爾來我國の經濟社會は一方に不景氣の事相を深くすると共に、他の一方に、輸入超過、正貨に對する取付、金融の緊縮等不景氣時代に特有なる幾多の經濟的現象に依つて苦しめられ、懊惱困憊するもの少なしとしなかつたのである。

消極政策の效果

斯の如き狀態の下に、必要なる措置は官民の一致協力に依つて、財政に國民經濟に共に消極政策を勵行するの外に、何等擧げらる可きものはないのである。多年積極政策を標榜し、地方に港灣を改修し、河川を修築し、學校を增設することに依つて、地方民心を蠱惑し、以つて黨勢擴張の武器に充てた政友會も憲政會と聯立內閣を組織するや、昨非今是の態度を以つて、何時か消極政策に豹變し、憲政會の爲す所に服從するの已むを得ざるに至つたのである。固より加藤內閣の消極政策と稱せられるものも、始め政友會との聯立時代に於ては勿論、其後の單獨時代に於ても、決して徹底したものではなく、動もすれば有名無實に終らんとする傾きの著しきは、世人の畢覺する所である。現に經費が實質的に節約されざるが如き、物價に對して、積極的調節策の講ぜられざるが如き、物價調節に至大の關係ある金輸出解禁の行はれざるが如き、即時解禁の實行は兎に角として、結局其解禁の行はれ得るに至る準備すら講ぜられざるが如き、經費節約の不充分である爲め、稅制整理を實行すると雖しても、毫も減稅に依つて、國民の負擔を緩和するに至らざるが如き、加藤內閣の所謂消極政策に對して、不滿足を感ずる所である。

然しながら社會の事物は見方に依つて、善惡の判斷に幾何かの相違を生ずる。加藤內閣の消極政策の不徹底なること、右の如くであるとしても、尙ほ之を常に積極政策の實現に忙はしかつた政友會內閣當時に比較して、功罪の差、如何なるものがあるとするを得るであらうか。第一、經費は充分に削減されなかつたとしても、尙ほ其無謀なる膨脹は之を抑止するを得たこと、第二、公債の公募は廢止され、財政上已むを得ざる公債は預金部に於て之を引受け、郵便局を通じて、之を發賣する結果、從來の如く金融市場に對して、財政の壓迫を加へざるに至つたこと、第三、政府が消極政策を株守する方針の明なるに至つた爲め、民間の當業者をして自ら各自の事業に緊縮整理を施

すの必要を覺悟するに至らしめたことの諸點は加藤内閣の消極政策に依つて、經濟社會に齎された效果の重なるものとしなければならない。財政上に於ける消極政策を以つて、必ずしも總ての點に於て、萎縮退嬰を事とするものと考へたならば、其れは大なる誤解である。一國には公共經濟に對して國民經濟あり、兩者の經濟相合して、始めて一國の經濟生活を完成するものであり、而して前者は次序的派生派的性質を有するに反して、後者は原始的基本的性質を備へ、前者は勢後者に寄生する關係に居るものである以上は、前者に緊縮の加へらるることは、自ら後者に發展の餘地を與へる所以と爲り、財政に行はれる消極政策は國民經濟に於ける積極政策を盛ならしめる基礎と爲るものと解される。財政上の積極政策に據り、國家をして膨脹した經費の下に、勞力に對し、物資に對して、大なる需要を致さしめ、以つて經濟社會に好景氣を誘導しようとするが如きは、國家萬能主義に根據を置く一個の財政學説であつて、要するに一國の經濟生活に於て、民力の如何に重んず可きものであるか、國民經濟に對する財政の壓迫の如何に經濟に對する重荷と爲るかを忘却したものと云はざるを得ない。殊に積極政策の實行に際して、增加する經費に對する財源は專ら公債の發行に求められ、積極政策と公債財源の調達とは離る可からざる關係を持つのである。一國に於ける遊資の供給頗る潤澤であつて、如何なる數額の公債も民間市場に於て、之に應募し、又之を消化するに就て、大なる支障を生じないとすれば、積極政策の弊害亦著しきものなきを得るかも知れないが、民間に充分の應募力なき時に、國家が强いて公債を發行したならば、第一其發行に依つて、民間市場の遊金を國庫に吸收し、民間諸事業に對して、資金の供給を乏しからしめること、第二斯くて發行される公債は勢高率の利子を付せられる爲めに、一般金利の標準點を高からしめること、第三斯く高利率の公債の發行される場合には、勢一般有價證券の市價を低落せしめることの三點を通じて、國民經濟に對して、大なる壓迫を加へざれば已まない。消極政策の下に、募債の必要なからしめることは、以上と正反對の理由に依つて、金融をして財政上の壓迫から、解放する所以と爲るのである。

消極政策と不景氣

故に私は憲政會の單獨内閣に依つて、同會の在野時代に呼號された通りの消極政策の少なくとも一時我國に行はれることを希望して、已まなかつた。固より斯る政策の行はれつゝある間に於ては、不景氣の勢の加重することは、免かれないとして

も、尙ほ此一時の困難を忍び、又之に堪へれば、軈て一陽來復の春を迎へ得るは、動かす可からざる事實を以つて、目されたのである。今日の政治家なるものが民衆の利害を念として、行動するは可なりと考へられるが、然も民衆の一時的利害に阿り、如何に國家の全體に取つて永久的利益を生ずる政策であつても、一時民衆に或る苦痛を及ぼすの故を以つて、彼等の反對を誘致する恐れのある場合には、此政策の實行を回避する趣きのあるは、吾人の常に物足らず感ずる所である。彼の多數黨と稱して、衆議院に勢力を占め、其勢力を通じて、貴族院を支配する政黨にした所で、其多數なるものが本來總選擧當時に於ける一時の人氣に依つて、獲得されたものであつて、政綱に對し、政策に對する國民眞實の理解に基いて發現したものでない以上は、其多數黨の政權を掌握した場合に行ふ政策が多く人氣取りを事とし、少なくとも一時の不景氣を誘致する消極政策の實行に躊躇するに至ることを免かれない。憲政會の在野時代に唱道した消極政策が在朝時代の憲政會內閣に依つて、動もすれば其徹底を缺くが如き、誠に我國政黨政治の病弊を語るものであつて、將來如何にし斯る病弊を除却するを得るものであるか、又同じく政黨政治の國である英吉利や、北米合衆國に於て、一旦消極政策の實行を必要とする國論の定まるや、猛然たる勢を以つて、財政を緊縮し、戰時と戰後とを比較して、英國に於ては經費を三分の一に、合衆國に於ては經費を五分の一に削減するを得たのは、何故であるか、共に吾人の攻究に値する所である。此問題に對する解決は之を他の機會に讓り、兎に角憲政會內閣の消極政策は一方に不徹底であつたゞけ、世間の反對を惹起すことも少なかつた如く、經濟社會の病根を一掃する效果も亦弱かつた。唯幾分の效果あつたとすれば、數年來の消勢に依つて、動もすれば膨脹增加の勢に制される經費を或る程度に抑制したこと、民間當業者の內に或は政府の政策の積極に復する日もないかと云ふ考へから、自家の事業に對する整理を手控へ、所謂首鼠兩端を持して居つた者もあつたが、是等の輩をして整理を敢行する態度に出でしめたことの二點に存するのである。

經濟社會昨今の緩和

消極政策に對する私の所見は以上に止め、當面の問題に對して議論を進める。當面の經濟問題として、吾人の注意を惹くことの大なるは、昨年下半季殊に年末に近づいて、經濟社會の窮迫した狀勢に對して、多少の緩和を示すに至つた一事であつて、世間に於ては早くも之を以つて景氣恢復の徵候であるとし、大正十

五年に於て、必ず好景氣の到來に接するを得べしとして、大に將來を樂觀するものすら、現はれるに至つたのである。我國民は大正九年來の不景氣に懊惱し、困憊し、一日も早く此厄病神を追拂ふの一念に切なるものである。隨つて多少不景氣の緩和される狀況に接すると、直に之を誇大視して、前途を樂觀する傾向に陷るのも、感情の上に於て、咎めるを難しとするが如くに思はれるが、嚴正なる批判は敢て斯る感情に左右せらるべきものでない。景氣恢復を翹望する國民の念願と景氣恢復の許される經濟上の事情との間に、果して幾何の距離の存するものがあるか、是れ吾人の攻究を要する所である。

昨年末に至つて經濟社會の多少の緩和を告げたと稱せられる事相の內、其重なるものは、

第一、下半季に於て、輸出の增加したこと、

第二、斯くて昨年中に於ける輸入超過をして當初世人の豫想したよりも、少額の程度に減縮せしめたこと、

第三、昨年下半季中、民間電氣事業關係の諸會社に於て、頻に外資輸入を企てた爲に、國際貸借の關係に於て、一時我國をして正貨取付けの虞れなきに至らしめたこと、

第四、右に述べた諸種の事情は爲替相場の上騰する勢を促し、金輸解禁を豫想する投機的買付も亦加はり一時三十八弗まで低落した相場をして四十三弗の高きに至らしめ、世人をして我國經濟社會の現狀に就て、好感を懷かしめたこと、

第五、是等諸種の事情に信賴を繫ぎ、銀行の或るものは、多少資金の融通を寬大にし、投機業者亦之に乘じて、東株其他に就て、投機取引を試み、其れ等の市價を昂騰せしめたこと、

の諸點を數へるを得るのである。

右の如き諸事情の一なり、二三なりが現はれたならば、爲めに經濟社會に刺戟を與へて、活氣を催ほさしめるに至ることは、論を待たざる所である。而して其活氣が消極政策の徹底した結果として生じたものであり、從來の積極政策に伴ふ變態が總て一掃され、經濟社會に充分の整理緊縮の行はれた後に次いで、起つたものであれば、能く其永續を望むを得、景氣の恢復から、好景氣の到來を期待するを得るであらうが、私の見る所を以つてすれば、上記五種の事情たる、何れも一時偶發の性質を備へること多く、將來に幾何の永續性を有するかに就て、疑を挾まざるを得ざるものがある。

金融の情勢

先づ金融に就て考へるに、昨年下半季に入つて、金融緊縮の

狀態に多少の緩和を告げたには相違ない。現に昨年の節季に於ける金融の難關も無事に踰越するを得た次第であるが、之を金利步合に就て見れば、著しき低落の跡の示されたものを認めるを得ない。試に本年八月から十二月中旬に至る東京市場の各種金利步合を擧げれば、左の如くである。(單位厘)

	翌日拂コール		商業手形		擔保付手形	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低
八月	一七、〇	一六、一	二四、〇	二〇、〇	二四、〇	二一、〇
九月	一七、二	一六、二	二四、〇	二〇、〇	二五、〇	二三、〇
十月	一七、三	一六、四	二四、〇	二〇、〇	二五、〇	二三、〇
十一月	一七、一	一六、二	二四、二	二一、一	二五、〇	二三、〇
十二月上旬	一九、五	一三、〇	二五、〇	二一、〇	二五、〇	二三、〇
十二月中旬	一五、〇	一四、〇	二五、〇	二一、五	二五、〇	二三、〇

而して十二月末に近づくに隨ひ、各種金利步合殊にコールに於て急劇の騰貴を告げた程の次第であつて、所謂金融緩和と稱されるものに就ても、大體の限度の存するものがあるのである。而して斯の如く金融緩和なるものが皮相的外見的事實に止まつて、實際に徹底するに至らない一の原因は日本銀行の金利步合の依然として高步に居ることに存するのである。固より日本銀行は市場に於ける金融の大勢を支配する力を持つものではない、市場の金融の緊縮しようとする場合には、如何に日本銀行が金利步合を引下げた所で、大勢の赴く所に反抗するを得ず、日本銀行自身營業上に攪亂を蒙るに終るに止まる。唯市場の金融の緩慢ならんとするときに、日本銀行が適宜利下を行ふことは、此緩慢の機會を促進し、緩慢の事實を確實にする効力を持つのであつて、日本銀行にして此擧に出でざるからには、金融緩慢の事實は到底確定的のものと爲る見込みはない　即ち金融緩慢の事相の世間に普遍するには、其先決條件として、日本銀行の金利の引下げられることを必要とするのである。

日銀利下問題

然らば日本銀行の金利步合は從來如何なる經過を辿つて、今日に至つたかと云ふに、大正七年九月經濟社會の順調に推移しつゝある狀況と政府自ら經濟的好景氣を刺戟しようとする政策と相結んで、金利步合の一錢六厘に引下げられたのを近年に於ける日銀金利の最低限とし、同年十一月市場の投機熱を抑制する目的を以つて、金利步合の一錢八厘に引上げられたのを第一步として、爾後大正八年十月並に同十一月に各一回の金利改正行ばれて二錢二厘に引上げられ、其後大正十四年四月に至るまで、五年半の久しきを通じて、金利步合は右の程度に据置かれたのである。而して大正十四年四月十五日を以つて、日

本銀行が各種の金利歩合に二厘方の引下を行ふや、一部の世人は之を以つて、日本銀行が金融の將來に對して其緩漫と爲る可きことの見込みを立て、之に順應する爲めに、先づ第一次の利下げを行つたものであつて、引續き第二次――次第に依つては、第三次の利下げも亦行はれて、斯くて金融緩和の先驅を成し、又其緩和す可き趨勢を確實にするものであるとして、大に前途を樂觀したようであつた。若しも日本銀行の爲す所にして、斯の如くであつたならば、論者の見解亦正しきを得たに相違ないのであるが、日本銀行の方針は彼等の豫期に反して、金融緩和の大勢を順致するの期待に副ふを得なかつたのである。

元來昨年四月に於ける日本銀行の利下げたる、突發的のものであつて、事前に之を爲す可き何等の準備のなかつたと共に、事後に之を次ぐ可き計畫もなかつたのである。當時不景氣の社會全體に浸潤する勢頗る強く、當業者の內に、金融梗塞から生ずる影響に堪へ難き者あり、既に高田商會の破綻に次いで、永樂銀行の支拂停止と爲つて、金融界並に事業界の一角に崩壞の端を現はし、此儘に放置して、顧みる所なかつたならば、他に如何なる不祥事の續出するものあるか、測り知る可からざる趣きのあつた爲め、政府も亦一時の急場を凌ぐ念に驅られ、日本銀行の利下げに依つて、市場に小康を保たしめる見地から、日本銀行に命令の下されることゝ爲つた次第であつて、斯る動機に依つて行はれた日銀の利下げである以上は、之を行ふに就て事前の準備なく、又事後の計畫なかりしものと評されるのも、亦已むを得ないのである。

右の如くして日本銀行が昨年四月突如として二厘方の利下げを行ひながら、其以後金融緩和の勢を促進す可き何等の手段に出でざる所以も自ら理解し得られるが、然らば今日殊に昨年末以來經濟社會の局面に多少の變化を來した今日は日本銀行をして金利引下げ――單に一面の偶發的利下げでなく、二回以上に連續する利下げを行はしめる時期であるかと云ふ問題を生ずる。日本銀行の利下げを行ふ適否を決定するには、經濟社會に於ける種々の狀況に就て顧みる所なければならないが、今日の我國に於て、特に考慮す可きは、外國貿易の順逆と國際貸借收支の成否とであつて、是等の二點こそ近き將來に於ける我國經濟界の運命を支配するに、最大の關係あるものと考へられる。現に日本銀行が最近の經濟社會に於ける好轉に接しながら、尙ほ金利歩合の引下げを敢てするに至らないのも、是等の二點に就て、成算の確乎たるものなきが故に出づるものではなからうかと思はれる。

貿易と國際貸借

先づ外國貿易に就て昨年一月以降十一月までの内容に徴して考へると、右期間に於ける輸出二十億九千七百六十七萬圓に對して、輸入二十三億八千六百八十三萬圓であつて、輸入超過の二億八千九百十六萬圓に止まつたことは、前年までの入超の年々數億圓を數へた事實に對して、我國の經濟社會を有利の方嚮に導いた一の資料たるを失はないが、斯る入超減少の原因は果して何れの邊に存するかと云へば、輸出の方に於て、(單位千圓)

	大正十四年	大正十三年
生絲	七九〇、四二九	六〇七、一七六
絹織物	一一四、〇八一	一〇三、三三六
綿織物	三九六、四四八	二九七、〇八一
陶磁器	三二、一一六	二二、九六三
屑絲眞綿	二七、四二八	一八、九四八
石炭	三〇、四九二	一九、二一七
莫大小製品	二八、五二六	一九、八六七

等の增加を來した一方に、輸入の方に於ては、

綿花	八七二、四七二	五五四、九七〇
羊毛	一一四、四九三	七八、三〇八
米	一二〇、〇九八	六八、七五二
油粕	一〇〇、七七六	九七、〇七九
生護謨	二八、五〇七	二一、三九八
砂糖	六四、五三三	五五、六〇二

等重要輸入品の輸入額は何れも前年に比較して、增加したに拘はらず、

石炭	二二、一五三	二六、九四〇
木材	七〇、三六六	一二一、三九四
毛織絲	五〇、二二六	六〇、五六五
銑(塊錠)	一七、〇七四	二三、一六三
同(條、竿、板)	七三、〇〇〇	一六〇、二九七
建築材料	六、〇三三	一六、二五三
自動車並に部分品	一〇、五七五	二〇、三五〇
機械並に部分品	八二、五四四	一二〇、五七三

等に於て、右の如き減少を呈した結果、輸入の增加する勢を相殺し、輸入の增加をして能く右の程度に止まらしめ、斯くて輸入超過をして二億數千萬圓に降下せしめるを得たものと解されるのである。然らば昨年中の貿易狀態の當初世人に依つて豫想されたよりも良好であるを得たのは、要するに(一)生絲其他重要輸出品の輸出高の增加したこと、(二)復興材料の輸入高の減少したこと、(三)奢侈的輸入品の輸入高にも亦減少を告げたことの諸點に基くのである。而して生絲を始め重要輸出品の輸出高增加は其販路たる米國の好景氣に刺戟されたものであつて、果して將來に亙つて幾何の持續性を持つかと云ふ問題に接

すると、確平たる判斷を下すに苦まざるを得ない。米國昨年中の好景氣は同國の金融市場が其金融政策の一端として、歐洲諸國や、南米諸國に向つて、募債の要求に應じ、諸國が之を決濟資金として、米國に就て、巨額の物資を需要したことに依るのであるとすれば、昨今の如く米國の金融市場に於て、將來の外國募債に向つて、應じない、少なくとも之に應ずるに自由なるを得ざる態度に出づる以上は、所謂米國の好景氣なるものに無限の希望を繫ぐの正しきものであるかどうか、吾人の一考を要する所である。唯昨年中に於て、棉花輸入の巨額に上つたことは、本年上半季に於ける棉花輸入高を或る程度に抑制し得る一原因として擧げられるが如くであるが、本來我國の貿易は上半季に於て、入超と爲るを常とするのであつて、隨つて棉花の輸入の抑制されることに依つて、果して貿易上の常套事に對する異色を呈するを得るかどうか。殊に昨年中の貿易に於て、奢侈的輸入品の減少したことは、誠に喜ぶ可き所に相違ないが、昨年末以來世間の一部に於て、景氣恢復の聲漸く盛であつて、日に月に世人の警戒心を緩うしつゝある一方に、爲替相場の恢復が輸入貿易に便利を與へつゝある以上は、果して昨年中に於ける如く、本年に於て奢侈的輸入品抑制の效果を見るを得るやの一點に就ても、亦疑なきを得ないのである。

昨年中の輸入超過が二億數千萬圓に止まつた一方に、國際貸借の受入勘定に民間會社の外資の輸入併に內地正貨の現送高を加へたものを以つて略ぼ右の入超額を決濟するを得たことは、「我國の經濟社會に小康を獵すを得る所以と爲つたのであつて、」年末兩三個月に於ける爲替相場の騰貴の如き、一に此偶發的事實を以つて、其重なる原因とするのである。我國經濟社會をして眞に安全なる地位に置かうとするからには、第一歐洲戰爭當時に於けるが如く、連年貿易上に輸出超過の勢を維持するを得ること、第二輸出超過は事實に於て望まれず、多少の輸入超過は已むを得ないとしても、其入超額が貿易外の受取勘定に依つて決濟されること、第三右の受取勘定は入超額を決濟して、尚ほ若干の剩餘あることを必要とする。然るに大正九年以來の我國に於ては、國際貸借上の受取勘定を以つて、輸入超過を決濟するに足らず、兩者の差額は勢我國の內外に存する正貨を以つて決濟しなければならず、而して金輸出の禁止は依然として勵行されて居る以上は、斯る場合に爲替相場に低落を來すのは、當然の勢とす可きである。而して昨年中貿易と國際貸借との關係は多少改善され、入超額と貿易外の受入勘定と略ぼ均衡を保つを得るに至つたことは、表面から云へば、我國經濟社會の態勢を安定せしめるに資するものゝあるやうに思はれるが其受入勘定

は國際經濟上に於ける自然の働きに依つて、生じたものでなく、外資輸入に依る所、多しとしたならば、借金を支拂ふに、借金を以つてするの非難は何としても免かれ難き所に屬する。斯の如くして得られた國際貸借の均衡の如き、將來に於て、吾人に安んずる所あらしめるを得ないのである。

然らば現時の我國經濟に於ける大局から考へて、我國の自力に依り、然も最も自然の方法に依つて、國際貸借に於ける受取勘定を增加せしめ、多少の入超はあつても、之を右の受取勘定に依つて、決濟せしめる道があるかと云ふに、私は此點に於て樂觀するに苦むものである。蓋し我國の受取勘定中、最も重要視されるのは、海運業の運賃倂に傭船料であつて、他に幾多の項目ありとしても、何れも些細のもののみである。而して海運業は昨今不景氣の爲めに沈衰し、特に我國に於ける斯業を刺戟する望みのあることが認められない。而して世界の經濟の活躍し來つた場合に、我國の海運業者が歐洲戰爭當時に於けると同樣の活躍を試みて、我國の國際貸借を有利ならしめる位に、運賃傭船料の收入を增加せしめるを得るかと云へば、私は我國當業者に果して此般の準備の講ぜられて居るもののあるや否やに就て、疑問を持つのである。隨つて國際貸借の改善と云ふことが現實の事實と爲るのは、遽に之を期待するを得ないこと丶爲る。

金利と物價

政府が公債財源の調達に就て、多少の制限を施し、公債の市場に於ける公募を廢止したことは、多少金融の趨勢を有利に導いたには、相違ないが、眞實金融の緩和を期するには、物價の調節を以つて、其出發點としなければならない。蓋し物價にして低落したならば、其騰貴時代に於けると同一規模の事業の經營されるに就て、當業者の需要する資金の分量は寡少と爲り、此點から自ら金融緩和の大勢を利導するに至るは勿論物價の低落が一時的事相たるに止まらず、引續いて行はれることの明瞭である場合には、債權者は價値の低き貨幣を貸出して、之を回收するに高價なる貨幣を以つてするの關係上、金利の引下を意とせず、反對の地位に居る債務者は金利の引下に依つて、負擔の輕減されざる限り、資金の借入れを敢てせず、斯くて自然に金利低落の勢を促し、金融の緩漫をして確定的事實たらしめるのである。

然らば今日の我國に於て金利引下げの見地から、物價低落の勢を馴致するには、如何なる政策を必要とするかと云へば、財政上に於ては、經費を節約して、勞力物資に對する需要を節減

することであり、經濟上に於ては、内地の金貨を外國に現送して、通貨幷に信用を收縮すると共に、爲替相場の上騰を促し、其上騰して平準點に接近した時に於て、金輸出解禁を爲すことである。然も今日まで第一策に就ては、消極政策を標榜する政府の下に、其實現の遲々たるものあり、第二案も亦殆ど顧みられないとすれば、物價問題から、根本的に金利問題の解決されるのは、殆ど望なしとするの外はないのである。

日銀利下問題

斯の如く考へ來つたならば、日本銀行が金利引下げに關する世間の要望あるに拘はらず、敢て之に同ぜざる所以も自ら理解されるであらう。固より日本銀行の金利政策に就ては、甚だ不祥の事ではあるが、純乎たる經濟上の關係のみに依つて、其方針を決定せず、政治上の着眼點から、掣肘を蒙り、支配を受けることのあるは、從來幾多の事例の證明する所であるから、今後も亦同樣の事情から、日本銀行の金利歩合に如何なる變動を生ずるか、測り知る可からざる次第であるが、經濟上の着眼點から云へば、日銀の利下けの行はれる機會は今日如何なる方面に於ても、成熟して居らない。此際に日本銀行が強いて利下げを行ふが如き輕擧に出でたならば、徒に中間景氣を煽揚し、經濟社會の整理の徹底せざる間に、輕燥なる空景氣を惹起して、國力を疲憊せしめるに過ぎないのである。

然らば市中諸銀行が率先して金利歩合を引下げ、貸出を寬大にし、日本銀行をして金利引下げの方針に出でしめることが果して實現されるであらうか。上記の事業も亦金融上に於ける一の作用たるを失はない、日本銀行の行動の餘りに遲鈍なる場合には、市中諸銀行が右の如き態度に出でゝ、金融緩和の大勢を馴致し、日本銀行をして之に盲從するの已むを得ざるに至らしめることも、行はれ得るのである。然しながら我國現時に於ける市中諸銀行の實力を以つてしては、到底斯る働きを金融上に現はすを得ない。而して其理由は第一、準備金比率の薄弱であること、第二營業上日本銀行に依賴する所の大であること、第三滯貨の大なる金額に上つて居ることの三點に存するのである。

市中銀行の缺陷

我國の銀行業に於て、諸銀行が極めて薄弱なる準備比率の下に、預金を維持し、信用の極度まで、之を膨張せしめて、營業に從つて居ることは、著明の事實であつて、試に大正十四年十二月中旬に於ける主要地組合銀行週報に據つて、諸預金中、當

座預金並に特別當座預金に對する金銀在高の割合を見ると、左の如くである。(單位千圓)

	預金合計	金銀在高	分釐
東京	一、八八四、八〇一	一一六、六九九	六二
大阪	一、三二二、四五七	五三、二六二	四〇
神戸	三四五、六〇五	一七、一六六	四九

我國銀行の預金には定期預金の多きを占めるもの、ある關係上、預金に對する支拂準備金率を右の如き低率に置いて、之を可なりとする事情があるかも知れないが、定期預金を預金總額中から除却して、計算しても、準備金比率は一割に當るを得ないのである。斯る低廉なる準備金比率を擁する諸銀行が比較的波瀾の多き我國に於て、安んじて營業を行ひ得る所以のものは一に日本銀行の掩護に依賴するからであるとすれば、市中諸銀行が日本銀行の意思に反して、金融市場を左右する力のないのは、怪むに足らない。啻に然るのみならず、今日我國の諸銀行の苦惱しつゝあるのは、如何にして滯貸しの整理を全う、財産上の缺陷を保全しようかと云ふ一事に外ならない。往年の好景氣時代から、投機熱の勃興時代に掛けて、大小の銀行が事業家の鉅利を貪りつゝある狀態に羨望措く能はず、銀行業者亦其利益の分配に與らうとして、放漫の貸出を爲したのは、蔽ふ可からざる事實である。好景氣が繼續したならば、此種の貸付と雖も、期限の到來するに隨つて、回收されるであらうが、大正九年の恐慌襲來と共に、回收不能と爲り、更に大正十二年の震災に依つて、更に固定して、滯貸と爲り、其れだけ銀行の資産を拘束し、貸出能力を損傷しつゝあるのである。朝鮮臺灣兩銀行が斯る滯貸の多きに拘はらず、之を彌縫して、一時を糊塗し、窮狀の堪へられざるに至つて、多額の固定貸付金の切棄てを行はざる可からざることゝ爲つたのは、世人の知る所である。市中諸銀行の滯貸は固より其金額に於て、朝鮮臺灣兩銀行の如き巨額のものではないとしても、尙ほ其回收の不能であり、又其れだけ銀行の融通能力を侵害して居ることは、毫も兩銀行に比較して、異なる所はないと思はれる。

大藏省の諸銀行に對する配當減少の勸告は一面から云へば、官權を以つて、民間事業に干渉を加へようとする嫌はあるが、他の一面から云へば、我國銀行業の時弊に適中した節のあることが認められる。蓋し銀行が滯貸の全部でなくとも、其内の回收の絕對不可能なる部分を鎖却し、其之を鎖却しつゝある間は、或は利益配當の減率に依り、或は配當の中止に依つて、資產負債の均衡を求めてこそ、始めて銀行營業上の基礎を鞏固ならしめ、將來の活躍に應ずるを得る道理であるのに、我國銀行業者の爲す所は之に反し、滯貸は其儘として、資金の一部に計

算し、他日好景氣と爲つて、回收可能の狀態を呈する時を待たうとするものである。斯る時が早く、又確實に到來するものとすれば、銀行に取つて好都合であるかも知れないが、其然らざる間は、銀行をして何時までも活躍不可能の窮狀に居らしめるの外はないであらう。即ち大藏省の銀行減配に關する勸告は斯る固定貸を帳簿上の財產として、何時までも其銷却を行はず、營業上に擧げ得た利益は之を配當金として分配し、斯くて銀行を薄弱なる地位に置くことに非難を加へたものである。故に斯る狀況に該當する銀行の如き、大藏省の勸告に聽從するのが當然であつて、斯くてこそ銀行は始めて經濟社會に於ける將來の活躍に順應するを得るのである。此缺陷の銀行に存する以上は、市中諸銀行の獨力を以つて、金融市場の大勢を左右するが如き、不可能としなければならない。

我國の經濟社會が近き將來に於て、如何に動くかと云ふ問題は最も解決に困難であるが、私は以上擧げた諸種の狀況こそ、此問題の解決に資するものであると考へられる。人力に依る所もあるが、人力殊に我國民の力のみに依つて、如何ともす可からざるものがあり、隨つて上半季に於て、必ず好景氣を迎へるを得ると云ふが如き意見も今日の所では、餘りに獨斷に失せずやと思はれる節の多きことを認めるのである。

根本的に改惡せられたる勞働組合法案

末弘嚴太郎

一

昨年八月社會局最後の勞働組合法案が公表されてより此方、各方面から之に向つて色々の批評が加へられた。而して、資本家の方面から與へられた批評は、程度の差こそあれ大體に於て、法案の骨子たる勞働組合保護の規定を削除すると同時に、之が取締的規定を嚴重にするの點に集中し居たること勿論であるが、勞働組合側の批評及び學者評論家の論評は大體に於て原案に贊成し又は少くとも之に對して同情的態度を示して居た。蓋し、今回の社會局案は――從來の諸組合法案に比べると――遙に能く勞働組合發生の社會的必然性を理解し、成るべく社會的に發生した組合ありのまゝの姿を以てそのまゝ之を法律的に承認し、之をして今後法律的範疇内に於て健全なる發達を遂げしむべく努力するの精神を示して居たからである。

然るに、同案は其後行政調査會の審議にかゝると共に、各省を代表する産業的・警察的・國防的等其他各種の見地から

種々手嚴しい批判を受けた結果、終には殆ど原案の骨子とし精神とする所を根本的に覆すが如き大修正を加へられて社會局に差し戻された。傳ふるが如くんば、社會局は今や右修正案の趣旨に從つて新に法案を起草中であり、而してそれが頓て法制局に廻はり又閣議に上つた上、近く議會に提出せらるゝの運びに至るであらうと云ふことである。

行政調査會の修正案は、新聞紙の傳ふる所によれば、其の名「修正」にして而かも實は「變造」である。原案の骨子とする組合保護の精神は殆どすべて取除かれて、跡に殘つたものは——一二の有名無實なる保護規定を除くの外——唯獨り取締の規定であるのみならず、其の規定の內容も原案に比して遙に苛酷のものとなり、法案は今や一變して『勞働組合取締法案』となりたるの感がある。恐らくは調査會委員諸公の意、之と治安維持法と又やがて制定せらるべき勞働爭議調停法との力によつて、行きがゝり上どうしても廢止せねばならない治安警察法第十七條の代物を作り、以て勞働組合と其の運動とを抑壓取締らむとするにあるのであらうか、果して然りとすば、そは實に勞働階級にとつての一大事であるのみならず、近時漸く順潮に進行すべく豫期された勞働法制完備の形勢をして一大蹉跌を遂げしむるもの、吾人の到底默過し能はざる重大事なりと云はねばならない。

行政調査會の修正案として新聞紙の傳ふ所は、其の內容甚だ多岐に亘つて居るけれども、私の稱して根本的改惡なりとする點を要約すれば即ち左の通りである。

第一　原案に於ては獨り個々の勞働組合のみならず其の聯合をも勞働組合と認め居たるに拘らず、修正案に於ては組合はすべて產業別に之を組織すべきものとし、異種の組合の聯合は全然勞働組合の定義中より之を除外して、之に對しては組合法の取締を加へざる代はり之を以て同法所定の合法的組合と認めず、唯あるがまゝに事實上之を放置默認するの態度をとれること。

第二　原案に於ては勞働組合中自ら希望するものには法人格を與ふる旨の規定を設け居たるに反し、修正案に於てはすべての勞働組合を當然に法人とするの主義をとれること

第三　原案に於ては一方「雇傭者又ハ其ノ代理人ハ勞働者ガ勞働組合ノ組合員タルノ故ヲ以テ之ヲ解雇スルコトヲ得ズ」「雇傭者又ハ其ノ代理人ハ勞働者ガ組合ニ加入セザルコト又ハ組合ヨリ脱退スルコトヲ雇傭條件ト爲スコトヲ得ズ」（第十一條）との規定を設くると同時に、他方「第十一條ノ規定ニ違反シタル者ハ五百圓以下ノ過料ニ處ス」（第二十一條）との規定を設け居たるに反し、修正案に於ては全然右の罰則規定を廢止して第十一條を骨抜きたらしめたること

私は以下此等の三點を順次に論評して、それが如何に勞働組合の健全なる發達にとつて有害であり、如何に甚しく現在の組合運動を抑壓するものであるかを明かにしたいと思ふ。

二

行政調査會の修正案は、勞働組合の聯合を組合の定義中より除外し、組合聯合に對しては今後も從來と同樣放任的態度をとり、事實上その存續を認むるも之を以て組合法上の合法的組合と認めざる旨を附言して居る。

修正案に於ても——社會局原案に於けると同樣——勿論同種乃至類似の産業に屬する勞働者は縱令同一企業に從事せざるものと雖も、提携して一個の組合を組織し得べきことは之を認めて居る。然るに、例へば日本勞働總同盟の如く多數異種の組合が聯合して一の組合聯合を成すものに向つては勞働組合としての法律的取扱を與へないと云ふのである。組合法案が一變して主として組合取締法たるが如き内容を有するに至つた以上、組合聯合に向つて勞働組合としての法律的取扱が拒否せられ、從前と同樣事實上の存在としてありのまゝに放置默認せらるゝことは、一見組合聯合に向つて

特に何等の不利益を加ふるものでないやうに見へる。しかしながら、組合法の實施せられたる將來同法の適用せらるべき實際的結果を仔細に豫測考慮するとき、私はどうしても此の結果組合聯合の爲めに忍ぶべからざる幾多の不便不利の生ずべきことを想像せざるを得ないのである。

先づ第一に、修正案は主として取締法的になつて居るとしても其中には尙多少組合が其の利益の爲めに利用し得べき規定も殘されて居る。然るに、總同盟の如き組合聯合は其の法律的利便に均霑することが出來ないのである。例へば、修正案によると、勞働組合はすべて法人となる。而して組合が法人であるときは、一方利便存すると同時に他方又不利も少からざること後に述ぶる通りであるが、其の利便とする方面を最も利用すべき可能性を有するものは總同盟其他組合聯合の如き大規模なる團體である。蓋し、大規模の團體にあつては之を組織する人員も極めて多數に上り財産も亦自ら相當多額となるべきが故に自ら個人的信任關係に依賴して其の組織を固めることが出來ない關係上、法人格を利用して其の諸關係を法律的に整頓する必要が最も大きいからである。然るに、修正案が一方些々たる小組合に向つてまですべて法人格を强制するの態度をとりつゝ、他方最も法人格を必要とすべきものに向つて之を拒否して居るのは、甚だ其の意を得ざるものであつて、かくの如きは暗に修正案の眞意、法人格の賦與によつて組合に利便を與ふるとを念とせず、專ら之によつて組合を抑壓せむとするものに利便を提供せむとするの點に存せざるやを疑はしむるものと云はねばならぬ。又次に上述の如く原案第十一條に附帶する罰則規定が削除された結果右第十一條の規定は甚しく其の威力を失つたけれども、それでも尙道德的に雇傭者を抑へるだけの無形的効果があり、又從來解雇を恐れて組合加入を躊躇した勞働者に向つて加盟の勇氣を與へるだけの精神的効果が尙大にあり得る。然るに、今若し修正案のまゝ組合法が制定されたとすれば、勞働者が個々の組合に加入するは差支なきも、其の組合が一度總同盟の如き組合聯合に加盟するとき、從來

家は互に之を理由として正々堂々と彼等を解雇することが出來る。又彼等を雇入るゝに際し正々堂々彼等をして聯合に加盟せる勞働組合に加入せざるべきことを誓はしめることが出來る。さうすれば從來此の點について何等の規定なかりし時代に比べて、組合聯合の受くべき損害は一層甚しくなるに違ひない。何故なれば、一方組合に加入するも之を以て解雇の理由とするに足らずと規定しつゝ、他方組合聯合は法律に所謂勞働組合にあらずと規定して居る以上、資本家は第十一條根本の精神を酌むことなく、直に其の文字を根據として組合聯合即ち勞働組合にあらざるものに加入したるものは何の遠慮もなく適法に之を解雇し得べしとの結論を發見して盛に之を振り舞はすべく、而して司法官憲も亦此の結論を認める虞れが甚だ多いからである。果して然りとせば、修正案は表面上總同盟の如き既存の組合聯合は事實上の存在として現在通り之を放置默認すと云つて居るけれども、實際上多數組合の聯盟加入は當然に少からざる妨害を蒙るべく、總同盟の如き既存の聯合が之によつて甚しき壓迫を受くべきは勿論、一般勞働運動今後の發展に向つて甚しき阻害を與へるに違ひない。かくの如きは果して勞働組合運動者の默過し得べき事柄であらうか？

第二に、組合聯合を勞働組合と認めざるの主義をとつて居ることゝ今や同時に制定されやうとして居る勞働爭議調停法案第十九條の規定とを合はせて考へると、吾々は其所に勞働組合にとつて甚しく不利益なるものゝ潜んで居ることを容易に發見することが出來る。目下確定して居る勞働爭議調停法案第十九條によると、交通機關其他所謂「公益企業」に於ける勞働爭議に際し爭議當事者たる勞働者自らは勿論彼等の加入して居る組合の幹部等はストライキ其他の鬪爭方法を組織する爲め勞働者の間に勸誘奬勵の行爲を爲すことが出來るけれども、其の以外の「第三者」は全く爭議行動に干與することを許されない。之を犯せば勿論嚴罰を蒙るのである。所が、例へば東京市の電車從業員がストライキを行つて居る場合において、彼等の組織して居る勞働組合の幹部役員等は勿論爭議行動に干與出來るけれども、其の勞働組合が例

へば總同盟の如き組合聯合に加盟して居るやうな場合、組合聯合の役員はすべて法律に所謂「第三者」として爭議に干與することを許されないこととならねばならぬ。何故なれば、修正案によると組合聯合は勞働組合ではない、從つて爭議勞働者の組織して居る組合が總同盟の類に加盟して居ても、それは法律上決して彼等の屬して居る「勞働組合」ではないから、自ら其の幹部役員の如きはすべて法律に所謂「第三者」として取扱はれるに違ひないからである。果して然らば、公益企業從業員の勞働組合は表面上組合聯合に加盟し得ることにはなつて居ても、實質上之によつて殆ど何等得る所なきが故に、彼等は實際他の一般勞働者と提携して其の地位を固めることが出來ない、其結果さなきだに事業の性質上爭議の際一般消費者乃至利用者の無理解なる包圍攻撃によつて孤立無援の立場に陷り易い公益企業勞働者をして頗る賴りなき不利益なる地位に立たしむることゝなると云はねばならない。

第三に又、政府は從來國際勞働會議に派遣すべき勞働者代表を選出するについて、一千人以上の組合員を有する勞働團體を以て選擧資格者と認め、組合員一千人毎に一票を與ふるの主義をとつて居た。さうして勞働總同盟の如き組合聯合をも亦選擧資格ある勞働團體と認め居たること勿論である。しかし、若しも今回の修正案の如く組合聯合は之を法律上の勞働組合と認めざるの主義をとるときは、今後或は組合聯合に向つては選擧資格を與へずして之を組織する個々の組合に對してのみ直接に選擧資格を與ふることゝなるべく、其結果例へば聯合を組織する個々の組合中組合員千人に充たざるものゝ如きはすべて選擧資格を失つて、それが爲め從來聯合に與へられた票數は今後甚しく減ずることとなるのではあるまいか？　私は此點についても亦一の疑問を抱かざるを得ないのである。

要之、修正案が組合聯合を單なる事實上の存在としてのみ默認するに止め、之に向つて何等法律上正式の地位を認めないことにしたことは、勞働總同盟の如く從來組合聯合の形式をとり來りたる勞働組合に對して少からざる不利不便を

與ふるものであつて、此種の組合が組合法制定の爲め從來よりも反つて不利益なる地位に立たしめらるゝことは吾々の到底默過し難き事實である。

從來資本家側の人々は、實際上勞働總同盟其他大規模なる組合聯合に對して甚しく敵意を表して居た。而して、彼等の使傭する勞働者が組合を組織することは之を認むるも總同盟に加盟することは之を認めずと云ふが如き態度を示したものも少くなかつた。又商工省系統の官僚中には、勞働組合は産業別に組織せらるるを當然とすとの獨斷に捉はれて、各種勞働者が集まつて單一の組合を組織することに對して前から引續き反對の意を表して來たものが少くない。而して、今回の修正案は正に此等の意見に動かされて出來上つたものと想像することが出來る。

成程、勞働組合は理論上産業別に組織せらるべき傾向を有するものであり、實際上吾國に於ても漸次其の方向に向ひつゝあるものと考へることが出來る。しかし、此故を以て直に各種勞働者が單一組合を組織し又は各種産業の勞働組合が同盟して一つの組合聯合を組織することに反對せむとするが如きは甚しく過つて居る。彼等は曰ふであらう。個々の産業別組合に向つて法律上勞働組合の取扱を與へ さへすれば、其の聯合に向つて重ねて特に同樣の取扱を與へる必要はない、と。しかし、かくの如きは實に現在尙發達の道程を辿りつゝある吾國組合運動の現實を無視した意見である。例へば、勞働總同盟の如きも當初友愛會時代に於ては寧ろ單なる勞働運動指導者の團體と見るべきものであつて、主として各方面に於ける勞働爭議に應援を與へ又は勞働者の組織化を助ける働きをして居たに過ぎなかつた。それが漸次各種勞働者の加入を以て純粹なる勞働者の組合と變じ、頓て又發達して今日の如く各種産業別組合の同盟體と變じたのである。しかし、それは單に總同盟の膨脹發達に伴つて內部的組織が中央集權主義より移つて漸次合議主義分權主義に變じつゝあることを示すに過ぎないのであつて、現在の如く今尙組織化せられざる勞働者が多數に存在し、又組織化せら

れたるも其の實力微小にして到底獨力重きを爲し得ざる組合少からざる狀態の下に於ては、其等の者に向つて組織を與へ應援を與ふべき團體の存在することは組合運動の發達上極めて必要であり、發達の傾向としても亦極めて自然なりと云はねばならぬ。資本家側の人々が今尙特に總同盟を嫌惡する所以のものは、實に總同盟が未だ組織化せられざる勞働者に向つて組織を與へ又は實力微小にして獨力能く事を爲し遂げ得ざる組合に對して應援を與へ、以て勞働者團結行動の目的を達せしむべき働きがあるからであつて、勞働者の團體交渉を拒否せむとする資本家側の人々が極力總同盟に敵意を表しつゝあることは、反つて總同盟の如きまだ純粹なる産業別組合の合議機關たるに至らず、一般勞働者に向つて組織化的傾向を指導奬勵することをも同時に職分とする團體の必要にして其の社會的職能の未だ輕視すべからざることを物語るものと云はねばならない。又商工省系統の官僚中組合聯合を排斥せむとするする人々は、眞に英國の如く産業別組合主義の完全に發達した國々を範として組合の問題を考へ、個々の産業別組合に向つて勞働組合の取扱を與へさへすれば、其の地方的乃至全國的聯合の如きは單に事實上合議的機關として之を默認するを以て足るが如くに考へて居るけれども、現在吾國勞働者の組織化は實際上未だ其所まで發達して居ないのであつて、今尙吾國勞働者は現に總同盟の如き働きを爲すべき特殊團體の存在を必要とするのである。即ち、内部的組織こそ産業別の聯合的形式をとつて居るとしても、今尙完全なる組合聯合にあらず、從つて獨り加盟組合相互間の連絡を議するに止らずして、一般勞働者の爲めに指導的組織化的應援的作用を爲す所の團體は、尙吾國の現狀に適合した特殊の勞働組合として之を必要とするのである。然るに、今日勞働組合法を制定せむとするに際し、現在勞働者集團運動の爲め最も重要なる働きを爲しつゝある總同盟の如きを「勞働組合」の定義より除外せむとするが如きは甚だ不合理であつて、私は到底其の是なる所以を發見することが出來ないのである。

三

次に、修正案は總ての勞働組合に對し當然に法人格を與ふべき旨を規定して居る。是れ嘗て農商務省職業組合法案が初めより採つて以て其の主義と爲したる所であり、又此點について佛蘭西勞働組合法の規定する所と其の趣きを一にするものである。

元來一定の團體が法人格を有することは、一方其の團體の利益となるの方面あると同時に、他方又其の不利益となるべき方面も少くない。この故に、一般公益事業を目的とする團體に就ても、現行民法は其の團體若し希望するならば民法の規定に從ひ主務官廳の許可を得て法人格を取得し得べきこととして居るけれども、同時に法律は決して其の團體が法人格を取得せずしてそのまゝ同樣の事業を行ふことを禁じて居ない。而して同じことは營利企業を目的とする團體に就いても亦之れを認めることが出來る。即ち、若しも其團體が法人格を欲するに於ては商法所定の會社形式の一に從ひ之れに依つて當然に法人となり得るけれども、同時に法人とならずして營利企業を營むことは苟も法律の禁止する所ではない。すべては原則として團體夫れ自身の希望する所に放置されて居るのである。

元來勞働組合は、私の從來屢々論じたるが如く、個人主義的資本主義經濟組織の下に於ける勞働者自衛の手段として自然に生れ出た社會的產物であつて其組織等もすべて其の自然の必要に應じて自ら適當に定まつて居る。從つて之れをして法人格を有せしむべきや否やの如きも組合自らの自由選擇に放任するを最も至當とすべきであつて、法律を以て特に法人格を强制すべき理由は少しもない。組合自らが諸般の關係上組合其れ自身の名義を以て財產を有し又は各種の行爲を爲すことを必要とするに於ては必ずや自ら法人たらむことを希望するに違ひない。而して其の場合に於ては他方又同

時に法人一般の原則に依り組合自らの名に於て義務を負はねばならないのは素より當然である。併し、例へば組合が僅少なる組合員より成り且つ其の財産も少き場合に於ては自ら毫も法人格を取得する必要を認めないのであらう。而して社會自然の産物たる勞働組合中には其の規模組織に甚しき差等あるもの少からず、各個の組合の各々自己に便なりとして採用して居る組織形式は甚だ多樣である。果して然らば、彼等に向つて法人格を與ふるや否やも其れ〲彼等自らの選擇に一任して然るべき事柄なりと云はねばならない。然るに修正案が社會局原案の自由選擇主義を改めて法人格强制の主義を採りたることは甚だ所謂れなきことゝ言はねばならない。

組合が法人になつた以上彼等は必然に法人登記を强制されるであらう。而して些々たる登記事項の變動も一々裁判所に申請して其登記を經ねばならないことは、幾多小組合の煩にして到底堪え得る所でない。元來法人登記の制度は法人と財産的交渉を有する者のために法人の組織内容を公示する目的を以て設けられたものである。僅かに五十・百の組合員を擁するに過ぎざる小組合に對し、一方行政廳への届出を强制すると同時に、他方又この煩雜なる登記手續を强制するが如き全く不必要なる事柄を要求して組合を苦しむるものであつて之れを官僚的煩瑣と呼ばずして何であるか？

傳ふるが如くんば修正案が好んで斯くの如き愚劣の改惡を敢てしたる所以のものは資本家方面よりの熱心なる希望に基くといふ噂さである。某々資本家は、勞働組合の總てを法人にして呉れさへすれば他の點は如何にならうとも差支ない、と言つたと噂されて居る。其の意果して何れにあるのであらうか。之れを憶測するに、恐らく彼等は、將來治安警察第十七條が廢止せられ、最早官憲の手を借りて勞働組合を脅迫し得ざるに至るべき曉に於て、歐米諸國の資本家の現になしつゝあるが如く、自ら損害賠償の訴に依り又は罷業禁止の假處分申請等に依つて勞働組合と闘はねばならない。其場合組合が法人格を有せざるときは訴訟上之れを訴ふるに付ても不便であり又組合財産に對して差押を行ふに付ても不

便である。この故に、法人格の取得を組合自らの選擇に一任せず總て之れに向つて法人格を強制することは總て彼等を攻擊する場合の爲めに絶對的に必要である。是れ恐らく彼等資本家がこの修正を要望したる所以であらう。

元來社團の法律的性質に關する私見を以てすれば、社團は人格を有せずと雖も尚社團名義に於て訴へられ又社團名義に於て財産を保有し得べきものと考へることも出來るのであるから、社團的性質を有する組合のすべてをして法人格を取得せしめずとも、之れを被告として訴へ又は之に向つて法律的強制處分を行ふに付いて必ずしも甚しき法律的障害を生ぜしむるものではない。さり乍ら、人格なき社團の法律的性質に關して現在裁判所及び一般學者の理解する所は今日尚未だ必ずしもこの私見と一致せざるが故に、今後組合の總てをして法人格を有せしむることは、彼等を被告として、法律的手段を執るべき場合あることを豫期する資本家の必然其利として要望する所であるに違いない。又私の曾て詳論したるが如く、同盟罷業其の他各種の勞働戰術は濫用の制度に至らざる限り適法の行爲である。從つて縱令組合を法人たらしめても濫りにストライキ其の他を理由として損害賠償の訴を起し得べきではない。併し勞働戰術の適法性に關する現在裁判所及び多數法律學者の見解は今日尚未だ必ずしもこの私見と一致して居ない。この故に組合をして總て法人たらしめ、以て之れに對して賠償請求其の他法律的強制處分を執るべき場合に備へやうとする資本家の用意は彼等として當に賢明なる策といふことが出來るのであらう。

併し、公平なる第三者の立場よりすれば、一方治安警察法の廢止に依り國家的刑罰手段に依つて勞働組合を壓迫するの主義を捨てつゝ、他方之れに代ふるに資本家自らの私的制裁を便ならしむべき法律を設けむとするが如きは事其れ自身甚だ矛盾であると云はねばならない。私は理想として決して勞働爭議を奬勵するものではない。併し現在の如く勞動と資本とが勞働者及び資本家に依つて各々獨占せられ、而して勞資兩者の結合關係が總て原則として契約の自由に放任

されて居る以上、彼等の間に取引の懸引上各種の手段が行はれるのは蓋し當然であつて、濫用の程度に至らざる限り原則として其れ等の手段は總て適法であらねばならぬ。然るに、今一方其れ等懸引手段の適法性を是認して治安警察法第十七條を廢止せんとするに際し、同時に他方從來の公刑に代ふるに私刑を以てせんとする資本家側の謀略を知りつゝ、容易に其の要望に聽從せむとするが如き、甚しき矛盾に非らずして何であるか。斯くの如きは從來國家公權の自發的活動に依つて制裁を加へたる制度に代ふるに、資本家の訴を俟つて他動的に國家公權を發動せしめ以て制裁の目的を達するの主義を以てせんとするものである。斯くの如くにして公刑に代ふるに私刑を以てし、其結果從來國家に對して向けられたる勞働者の憎しみを今後移して私刑の申請者たる資本家自らの上に加へむとするとき、勞資の關係は今後果して如何に成りゆくであらうか？私は此點について甚しく將來を憂へざるを得ないのである。

四

社會局原案が、其の第十一條に於て勞働組合員たるの故を以て解雇すべからざる旨を規定し、同時に其趣旨を徹底せんが爲め別に罰則規定を設け居たるにも拘らず、修正案が資本家の要求を容れて其の罰則規定を削除したることは、修正案の大に非難せらるべき第三の點である。

成程修正案に於ても「雇傭者又は其の代理人が勞働者に對し其の勞働組合の組合員たるの故を以て爲したる解雇の意思表示は之を無效とす」「雇傭者又は其の代理人が勞働者に對し其の勞働組合に加入せざること又は組合より脫退することを雇傭條件となしたる契約亦前項に同じ」と云ふ趣旨の規定は尙之を存置すると云ふのであるから、之によつて資本が組織勞働者の排斥を企てることを防止し又勞働者をして組織化の勇氣を揮ひ起さしむべき多少の道德的精神的の效

果あることは勿論之を否認し難い。しかしながら、單に「解雇の意思表示は之を無效とす」と云ふが如き規定を設くるに過ぎずして、違反行爲に對して何等の制裁を設けざるが如き法律が、實際上如何に無力なるかは多少とも法律生活の實際を知る人々の一般に周知する事實である。蓋し、資本家の爲したる「解雇の意思表示」が實際上右規定の趣旨に該當し、從つて法律上「無效」たるべきものであつても、勞働者が實際上其の無效を主張して其の地位の復活を計らむが爲めには、自ら原告となつて裁判所に訴へる必要がある。然るに、現在の如く訴訟が少からざる費用と時間とを要求する以上、貧困なる勞働者は事實上到底容易に訴訟するを得ない。原告が「解雇の意思表示」の無效なることを主張する爲めには、それが「勞働組合の組合員たるの故を以て」爲されたることを立證する責任がある。而して、事の性質上其の立證の困難なることは必ずや多數の場合勞働者をして出訴の勇氣を失はしむるに違ひない。其結果、法律に於て縱令一定の行爲を無效とする者を定め置くも、其の實際的效果を恐れざる人々が實際上平然其の無效行爲を敢てすることは吾人の日常多く發見する所であつて、私は第十一條が資本家側の反對意見を容れて此種有名無實の規定に化し去りたることを甚だ遺憾とするものである。而して、かくの如き有名無實の規定が訴訟上實際に其の有名無實なる所以を曝露するとき、其の勞働者に向つて與ふべき印象の如何なるべきかを想像するとき、私は其の結果の甚だ忌むべきものあるを恐れざるを得ないのである。

五

修正案改惡の主なる諸點は上述の通りである。

この改惡を敢てしたる行政調査會委員諸公及びこの改惡を要求したる資本家諸君をして言はしむるならば又其れ〴〵

理由はあるのであらう。必ずや或は產業的見地より、或は治安警察の立場より、又或は國防的必要から各種の意見が編み出されたに違ひない。殊に、勞働組合法に依つて組合の健全なる發達を助成するが如きは國家產業の將來にとつて甚だ憂ふべきであるとする見解は、恐らく最も彼等を力強く動かしたものであるに違ひない。

成程組合の發達は或意味に於て勞働者の爲めに同盟罷業其の他の集團的勞働戰術を容易ならしむるものである。從つて、或意味に於ては當に爭議を頻發せしむべき原因をなすものと言ふことが出來るであらう。さり乍ら、勞働組合に依つて勞働者が統制せられ、之れに依つて資本家と團體的取引を營むに至ることは、反つて勞資相互間の關係を圓滑ならしめ、兩者の間に繼續的平和の關係を成立せしむるの效果あることと歐米先進諸國の實例の常に我々に教ふる所である。成程、一度組合の成立を來すとき、最早資本家は從來の如く唯自己の立場のみから一方的に勞働條件を決定して之を勞働者に言ひ渡すが如き專制的態度を維持することは出來なくなるであらう。併し、現行法は決して資本家專制せよ資本家命令せよと規定して居るのではない。彼等も亦勞働者と平等の立場に立ちつゝ、之れと平等に契約すべきことを規定して居るのである。然るに、資本家が形式上契約の美名を裝ひつゝ永く其の專制的命令の地位を保持せんが爲め極力勞働者の組織化を妨げむとするが如きは抑々甚だ利己的である。今日資本家は自ら資本を獨占し之れに依つて自ら企業の主體と僞り居るが故に、國家產業の主體たり責任者たるものは當に彼等自らである、と自負して居る。併し、「勞働」の協力なき「資本」に何の生產が出來るのか。彼等は工場其の他資本を自ら所有するが故に、之れに依つて行ふ企業も亦彼等自らのものであり、從つて其の興廢亦彼等自らの責任なりと考へて居る。併し、資本家が資本を所有すると同樣、勞働者も亦勞働力を所有し獨占するのである。生產に貢獻すといふの點より見れば、勞働の功績毫も資本に劣るべき理由はないのである。果して然らば、國家產業の興廢を獨り資本家の責任と考へ、資本家の利益打算の立場のみより

國家産業の事を論ずるが如きは抑々誤りである。今日の經濟組織に於ては企業の經營は兎も角資本家の手に在る。併し、彼等にして若しも、其の自ら揚言するが如く、産業に依つて國家に貢獻するの意があるならば、自ら其の利益を打算すると同時に、彼等生産の欠くべからざる提携者――勞働――の爲めにも同じく合理且公正なる取扱を與へ、彼等も亦滿足して國家産業の爲めに共に努力せしむべく、萬全の策を講ぜねばならぬ譯である。今日法律は勞資の關係を平等關係なりとするの主義を採つて居る。而して勞働者は其の平等の立場に立ちつゝ資本家と契約せむことを希望して居るのである。この故に、彼等に向つて與ふべきは契約の自由である。自由の契約與へらるゝとき、彼等は初めて眞に契約を爲したるの信念を得、從つて又眞に契約を守らんとするの精神を感得することが出來る。資本家は屢々、今日の勞働者が徒らに自ら求むる所多くして、其の約したる所を守らざるの罪を責めやうとする。併し乍ら、約束の守らるべきことを要求せむと欲する者は、先づ相手方に向つて約束を與へねばならない。契約の美名の下に契約の實を與へず、而して唯契約の履行を求むるが如きは抑々自家撞着にあらずして何であるか。私は資本家が一日も速かに唯自己のみが生産の主體であり、國家産業の責任者であるといふ迷夢から目醒めんことを要求する。而して少くとも勞働者も亦彼等に劣らざる生産の要素であり、主體であることを認め、彼等をして勞働の喜びに燃えつゝ其生産者たるの責任を果さしむることが出來るやう努力せむことを希望して已まない。而して、現行法制上勞資の關係が契約の自由に任されて居る以上、資本の獨占者たる資本家に對し、勞働の獨占者たる勞働者が其獨占者たるの威力を發揮すべき唯一の方法として團結を結び、之れに依つて初めて資本家と平等の地位に立ちつゝ、思ふが儘の契約を爲さんとする彼等勞働者の希望は、國家産業の隆盛を念とする資本家の寧ろ心より喜びて迎ふる所でなければならない。然るに、今社會局勞働組合法案に對して資本家側より加へられたる修正意見及び之れを容れて成立したる行政調査會修正案を見るとき私は實に彼等の迷夢未だ醒めざるを心より惜まざるを得ないのである。

傳ふる所によれば、資本家の或るものは、社會局原案を支持せんとしたる或人に向つて、君若し斯くの如く國家産業の將來を輕視するに於ては我々資本家は速かに資本を內地より移してそれを外國に投資すべし、と言つたといふことである。而して是れ實に右資本家一人のみならず多數資本家の屢々口にする言葉であつて、彼等の言として特に異とすべきものでないかも知れない。成程金融市場が世界的に擴大流通して居る以上、資本は自ら最も利潤多き所に向つて流れ集まるべきは極めて當然である。併し、今日に於ては斯くの如き資本の流れは今尙我國に向つて流れて居る現狀である。資本家は、今日以上吾國勞働者の要求する所が多くなれば、明日にも直にこの流れは逆流して外に向ふべし、と威嚇するけれども、其は畢竟一の空想假說に外ならない。殊に彼等が一方自ら國家産業の責任者なりと自負し、産業保護の美名に依つて感傷的愛國心に訴へつゝ自己の主張を貫かんと欲すると同時に、若し自己の主張聽かれずんば資本は直ちに外に向つて之を投資すべしといふが如きは、事の能否は別問題として、彼自らの標榜する愛國心彼等自らの主張する産業立國の精神と根本的に矛盾するものであつて、斯くの如きは實に言はず語らずの中に資本家的利己心を暴露したものと言はねばならない。

私は、一方勞働者に向つて正に與ふべきものを與ふることなく、而かも他方資本の立場のみから國家産業の將來を考慮せむとするが如き人々に對して、絕對的に反對の意を表せざるを得ない。此の意味に於て資本家的産業立國論を基礎として勞働問題を論じ勞働組合を批議するが如き人々に向つて到底贊同の意を表することが出來ない。彼等にして若しも現在吾國の勞働者が一般に怠業的氣分にあることを憂ふるのであれば、之を憂ふるの前先づ勞働者に與ふるに正に與ふべきものを以てするがよい。何人か自ら眞に心より約したる所のものを守らないものがあらう。約束の守らるべきことを要求せむとせば、先づ眞に約束を與へよ。さうして彼等をして約を守るの喜びに燃えしめ、心より喜びて勞働に從事せしめよ。其時こそ眞に吾國産業の隆興すべき時でなければならない。徒らに、國家産業に口を藉りて勞働の組織化を妨げむとするが如きは、畢竟資本家的利己心に外ならない。私はかくの如き人々によつて公正なる勞働組合法の制定が著しき妨害を加へられつゝあることを國家將來の爲めに痛嘆するものである。（終）

消費組合展覽會開催に就て

無產者解放の原理としての消費組合の必要は既に認められてゐる。たゞ殘されてゐるのはその實現にある。

英國に於ては四百五十万人の消費組合會員と一年十六億万圓の賣上高を持つてゐる。ロシアに於ける消費組合の驚く可き發達と組織に就ては多く云ふ可き必要をみない。ラテン民族の間には消費組合は發達しないとジード教授をして悲觀せしめたのも今日は殆ど昔物語となつた。ベルヂアムに於ては勞働組合が計劃することを消費組合が實現して行くと云つた形で、その驚く可き發達は全く私等の想像以上である。ブラッセルの『人民館』に於ては勞働組合本部と、消費組合本部と、勞働黨本部と共濟組合本部の四大本部が共同生活をなし、ベルヂアムに於ける無產階級の解放の作戰計劃を此處で建てそれと同時に、新時代の社會樣式がどんなものであるかをそれによつて具體的に示してゐる。

長く消費組合の發達しなかつたフランスに於てすら最近の進步は實に著しいものであつて、とても言葉で盡し得ないものがある。

消費組合は今日の搾取本位の商業組織を『生活本位』の經濟組織に轉換せしめ、需要の傾向と數量を組織的に知覺し、それに對して、生產者階級に對する搾取を敢てしても競爭と獨占を以つて、社會を冒瀆する無政府狀態を秩序と叡智の支配

する世界に纒めんとする唯一つの實際的手段である。
日本に於ては勞働組合の普及は一般的であるにかゝわらず、無產者階級の解放の手段としての消費組合の成立は殆ど顧みられないでゐる。明治三十三年に與へられたる天降り的な產業組合法は殆ど無力な地方的購買組合と、地方資產家の橫暴を助長せしめた信用組合を無數に成立せしめた。然し、無產者を中心とする購買組合は殆ど一つとして完全な成功を收め得ずにゐる。
玆に吾社は日本に於ける消費組合發達の一助にもと歐米に於ける消費組合發達の現況を示せる宣傳ビラと幻燈のスライド等を廣く蒐集し、展覽會を開き新時代への改造の一步を指示したいと思ふてゐる。
シドニー・ウエブ敎授は云ふてゐる、『資本主義崩壞の速度は消費組合の發達の速度と正比例する』と。我等はこの意義ある消費組合の展覽會を開き得ることを衷心より喜ぶものである。

場所　芝公園協調會館
時日　二月十六日より
期間　二月十八日まで三日間

改　造　社

再擧せんとする無産政黨

麻生久

一 無産政黨の再擧

多くの難關に逢着し、幾多困難の問題を後に殘して辛じて成立を遂げた農民勞働黨が、誕生後幾時間ならずして解散命令を受けたのは昨年十二月一日の事であつた。成立直前に當つて勞働總同盟並びに評議會の脫退があり、その目まぐるしい變轉の後を受けて突如思ひ設けなかつた解散命令が下つたがため、無産政黨問題は一時混亂の渦中に投ぜられ、暗雲低迷して近かき將來に光明を見出す事は困難の如く思はれたのであつた。何故たらば、解散に至るまでに展開された複雜した諸種の事情は、各團體間の感情を阻隔して、再び主要な團體を結合の上、一大政黨を結成すべき可能性を妨げ、或ひは小黨分立の危機を生みはしないかと懸念されたからである。若しも農民と勞働者とが分離する如き事があるならば將來の無産階級運動の上に至大の惡影響を來すべきは論を俟たない。而して各團體が小黨に分立するならばこれ亦將來政黨の勢力を委縮せしめて順當なる發展を期しがたき所以である。

併しながら懸念された暗雲は忽ちにして一掃せられた。農民組合は解散直後に於て、一つの宣言を發し、再び單一政黨組織に向つて努進すべき意のある事を明かにし、又特殊の地位に置かれた八團體の諸君も何等かの申し合せの下に、暗に再起の意圖あることをほのめかして、時局の混亂を防止し、將來に向つて一道の光明を與へたのであつた。人々は自己の前に落下し來つた災厄に對して、冷靜なる反省と不屈の勇氣とを以て、之れに對抗し、最惡の事態の上に最上の再擧をはかる決意を示したのである。査然思想を異にするか或ひはその方法を異にするものはしばらく別として各自が出來得る限り各組合の小我を棄て感情を去つて、大同團結をはかる事は無産階級運動の必然の義務である。

解散以後に於て農民組合並に八團體の諸君に依つて投げられ

た一道の光明は其後漸次にその光りを増し、昨年の暮れ、農民組合と八團體の諸君との間に良好なる聯絡がとらるゝに至り、今年に入つて更に再起の計畫は急速に進捗して、來る一月十三日、先づ九團體の諸君が大阪に會合の上、再擧の計畫を具體的に進めんとするに至つたとの事である。そこで『改造』が讀者諸君の手に渡る頃には既に此計畫は具體的に進行しつゝあると思はれる。

二　解散に依つて展開された新場面

前回、無産政黨の組織が企てられるに際しては、各團體間の主張の相違に依つて惹起せらるゝ束縛が存在した他には、準備會議を進行せしめて行く上に何等の束縛もなかつたのである。併しながら農民勞働黨禁止の一事件は、新らしく企圖せらるゝ無産政黨組織の上に、一つの絶對的條件を附するに至つた。黨が秘密結社であるならば自から別個の問題であるが、公然たる政黨である以上、農民勞働黨が禁止となつた理由を度外して新らしき計畫を進むる事は今日に於て不可能事である。そこで我々は新らしき計畫を進むるに當つては再び解散の危險を避くるために深甚の考慮を必要とすると思はれる。

政府が農民勞働黨を禁止するに至つた理由として發表したところは左の如くである。

一、無産政黨創立準備の經過。

二、外部に發表した行動綱領の背後に別に原則綱領あること。

三、無産政黨創立準備に從事したる人物の經歴思想及び性行

右三點を綜合して今回の無産政黨結成は名を政黨にかり、實は我が國體と相容れない共産主義の實行を企圖するものである。

四、規約に於て勞働組合の團體加入主義をとる事。

右は治警第五條第五項及び第六項に於て女子及び未成年者の政治結社加入を禁止する條規に反して組合の包含する女子及び未成年者を一括して政黨に加盟させる事となるものである。

右四項の理由を更に詳説すれば、

イ、綱領中最初の綱領委員會で決定し後削除された條項の大部分は明かに共産主義を表示してゐる。

ロ、創立計畫中に現はれた一部の者の言動に於て共産主義の主張をなしてゐる。

ハ、最後に可決した綱領の條項中、(一)無産者住宅の公給並びにその管理權の獲得(二)肥料農具の生産配給に對する

耕作者監督權の獲得の如きは共産主義實現の片鱗を示すものなる事。

ニ、一日の創立大會の際、綱領案説明に當り今回の綱領は要求の一部に過ぎずとて、背後に原則綱領の存する事實を暗に示してゐる事。

ホ、決定綱領中、階級意識を激成すると認められる條項は、（一）治安維持法、治安警察法その他一切の無産階級運動防壓法令の撤廢（二）義務教育に於ける資本主義的教育撤廢、（三）弱小民族に對する不平等條約その他一切の侵略主義的防壓の撤廢（四）軍備の徹底的縮少などである。

更に農民勞働黨の代表者が内務省警保局長に面會して禁止の理由を確かめたるに際して警保局長は左の如く言明してゐるのである。

問、將來の參考とするから今回の結黨禁止の理由を明示されたい。

答、新聞に發表した理由書に盡きてゐるが創立の經過を全體から見て不穩當と思ふ。

問、經過及構成分子中何れの點がいけないか具體的に指示されたい。

答、構成分子には餘り重きを置かないが創立に加はつてゐた政治研究會、組合評議會、無産者同盟等の前からの言動等から綜合して表面の綱領の背後に捨て置き難き不穩の精神があると解したのである。

問、右團體の何れの點が惡いか。

答、政治研究會、評議會等の諸君がその胸奥に抱く思想をその儘言つて見れゝば何時でもその不可なる點を指示する。

問、評議會は脱退し、政治研究會は解體に決してゐるではないか。

答、現に政治研究會は結黨式に參加した。又黨は決議を以て評議會の參加を希望してゐる處から見ても、それ等の團體の思想が結黨後陰に陽に加はり來る事は明かである。

問、何故に將來の行動或ひは綱領に不穩な點の現はれるのを待つて禁止しないか。

答、我が國體と相容れない事情が黨の行動に現はれる時まで待つ譯けには行かない。そんな事があつたり出來たりした時には結黨禁止ぐらいではすまない。

以上揭ぐる處の禁止理由を綜合して見ると次ぎの三點に要約する事が出來るであらう。

第一に、法律上の點に關しては、團體加入の不可なる事、第二に、思想上の點に關しては、その行動綱領原則綱領を通じて

共產主義的色彩を有する事の不可なる事、第三に、構成分子に關しては、共產主義的色彩の明かなる團體、例へば組合評議會、政治研究會、無產者同盟、及びその經歷に於て明かに共產主義者と目せらるゝ個人の加入の不可なる事である。

農民勞働黨禁止の理由となつた此三點は、新らしく公然たる無產政黨を組織せんとするに當つて無視する事の出來ない束縛である。此三點を無視して新らしき政黨を作るも夫れは要するに再び解散の厄に遭遇する事を避け難いであらう。

そこで無產政黨の再擧を可能ならしむるためには禁止の理由となつた此三點を排除して計畫を進行せしむる事が絕對に必要事とされるのである。

斯くの如きは再擧をはからんとする各團體が好むと好まざるとに拘らず、遠き將來は別として當面、無產階級の政黨を組織せんとするに當つては、之れを無視する事の出來ない冷やかな現實である。

三　無產政黨最初の出發點

さきに農民勞働黨を組織せんとするに當つて舐めた幾多の苦がき經驗と、解散に依つて展開された新らしき幾多の事情とは、これに參加した團體に對して多くの經驗を與へ、今回再擧をはかるに當つては一定の方針を具體的に考へしめつゝある事は疑ひをさしはさむに餘地ない事である。今回再擧をはかりつゝある諸君は共構成分子の中には、組合評議會、政府研究會、無產者同盟を加へざる決意を有するばかりでなく、共綱領も亦出來得る限り穩和のものたらしめ、議會に對しては最も積極的行動をとらんとする意向を有すると傳へられてゐる。

私は我が國に於ける無產階級の政治行動が今初めて開始されんとするに當つて、その生れんとする政黨が斯くの如き出發點をとらんとするを寧ろ衷心から慶賀するものである。誕生せんとする政黨が右翼的色彩の濃厚なるの故を以て寧ろ悲観すべしとなさないのである。唯に悲観すべしとなさないばかりでなく我が國の無產階級運動を眞に大衆的のものたらしめ、眞に強力なるものたらしむるためには寧ろ斯くの如き出發點こそ絕對に必要事と思惟されるのである。

何故にしか云ふのであるか。

然らば何故に我々は數年前、社會運動に對する方向轉換を叫んだのであるか。日本の社會運動の上に叫ばれた方向轉換の意義は、單にサンヂカリズム流の政治行動否定をボルシエビズム流の政治行動肯定に向け代へるためばかりではなかつた。少數者の運動を大衆獲得の運動に向け代へることこそ眞に方向轉換の意

義であつたのである。

政治行動の否定が肯定に移る事によつて直ちに運動が大衆的になると考へるのは大間違いである。曾て勞働組合運動がその調子の高かりしために遂に少數者の運動に陷つた如く、若しも開始せられんとする政治行動が、其調子を高度なるものとし、共産主義的色彩を濃厚なるものたらしむるならば、假令政府に依つて禁止せられずとも、その運動は等しく少數者の運動となつて、近かき將來に再び方向轉換の余儀なきに至るは火を睹るよりも明かな事である。斯くの如きは過去に嘗めた我等の過ちを好んで再びなさんとする愚劣事である。

所謂極左派に屬する人々は日本に於ける資本主義が既に最後の段階に達せるとなし、頻りに高度の革命的政治行動が直ちに大衆的運動となり得るの可能性を力説するけれ共、斯くの如きは日本の現狀を誤認せる狂燥者の見解たるを免れない。今日果して幾何の無産階級が階級意識にめざめて鬪爭的團體を結成してゐるであらうか。兎にも角にも勞働組合に加入せる者僅かに二十萬、農民組合に加入せる者僅かに十萬弱、是等の數字は全體に比例して殆んど云ふに足らざる數であるが、而かも此僅かの數字中の大部分は未だ眞に階級意識にめざめた鬪爭的分子と云ふ事は出來ないのである。

我が國に於ける無産階級の力が未だ極めて微弱にして底力を有しない事は、初めて誕生した農民勞働黨が無殘に解散せられたに拘らず、此解散に對して眞に有力なる何等の對抗をもなし得ずして泣き寢入りとなつた一事を以て見ても之れを察するに余りあるではないか。

斯くの如き事情の下に於て、如何にして極左的指導精神を以て大衆を動かし得るとなすのであるか。彼等が眞に現實を認識せずしてその狂燥なる誤認の下に强いて極左的指導精神を以て大衆的運動を進めんとする結果、そこに惹起さるゝものは無産階級運動にとつての不幸事のみである。勞働總同盟の不幸なる分裂は如何にしてなされたか。農民勞働黨は如何にして解散の災厄に逢着したのであるか。

彼等の揭ぐる指導精神、彼等のとりつゝある方法を以てしては、階級鬪爭の陣列に加はりつゝある無産階級團體をさへ指導し得ないのである。日和見主義、墮落幹部の惡罵を以て今日存在する團體を自己の傘下に集めんとする如きは愚も甚しいと云はざるを得ない。彼等の斯くの如き態度は彼等自身を一歩〳〵多くの團體から引きはなしつゝあるではないか。況んや工場の中に、農村の奥に深かき眠りにとざされつゝある大衆に於てをやである。

今日我が國の無產階級運動にとつて絕對の必要事は、未だ我等の陣列の外に遺棄されてゐる無產大衆を如何なる方法を以てしても先づ第一にその深かき眠りより呼びさまして、我等の組織的陣列の中に誘ふ事である。複雜にして巧妙なる組織を有する資本主義社會の現狀に於て、是等の大衆をその眠りよりさまさしめて、我等の陣營に獲得する事はしかく簡單な事ではない。絕對の權力を有する支配階級はあらゆる手段を以て我等の運動を妨げずには居らない。解散の命令は一枚の紙片に依つて下されるのである。『黨の內部に出來得る限りの大衆、婦人も子供も包含せよ。併しながら日和見主義者は直ちに排斥せよ』と云ふ如き現實を無視せる坊ちやん的空論を以てしては現實は寸毫も動かないのである。動くと見えるのは社會の表皮に散らばつてゐる、云ふに足らざる微分子が線香花火の如くに火華を散らすに過ぎない。

私は再び新らしく企畫せられんとする政黨が、充分に日本の現狀を洞察し、飽くまで現實の上に足して無產大衆を可及的容易にその黨の中に誘ひ得る如き方針を以て組織せられん事を希望する者である。センチメンタルな左傾的色彩を脫し得ざるに於ては、生るゝ黨は畸形となり、近かき將來に於て、再び方向轉換をなさゞるを得ざるの愚に陷るであらう。單に然かるばかりではない。既成のブルジョア政黨はその間隙に乘じて巧みに無自覺なる大衆をその陣營に誘ふの危險を保しがたいのである。今日、我等の政黨が當面に狙ふべきところは、如何にしてその黨を左傾化すべきかの問題ではなくして、殘されたる大衆を如何にして我等の陣營に誘ふべきかの問題である。

大衆的本隊、換言すれば强力なる大衆的右派の確立なきところに、眞に强力深刻なる左派はあり得ない。今日の日本の現狀を見よ。明かに此事實を物語つてゐるではないか。左派を以て任ずる者の行動を見よ。彼等は薄すつぺらな世間の評判の上に乘つてゐる。彼等は室咲きの左派である。口舌の左派である。事大主義的左派である。小手先きの左派である。小利口な左派である。てれんてくだの左派である。彼等の頭上に壓迫が來た時は、おとなしく泣き寢入る左派である。口舌の上に革命的精神を高調するも、行動の上に於ては羊よりもおとなしい左派である。少數派の任務と云ふ事の意義さへ知らない左派である。眞に小悧巧な左派である。要するに觀念上の左派である眞にどうでもよい左派である。

日本の現狀に於て、所謂運動の右翼化を恐るゝ必要はない。その右翼化に依つて展開せらるゝ底力ある大衆的運動の中にこそ眞に威力ある左翼が生まるゝは必然である。その左翼は觀念

上のつけやき刄の左翼ではなくして、組織ある大衆の腹中から現實に足して生れ出る左派である。その左派こそは壓迫が來た場合にしやあ〱して泣き寢入りなどせざる眞正直な左派である。口舌の左派ではなくして行動の左派である。私は眞に資本主義の沒落を信ずるが故に、大衆それ自身の中に眞に強力なる革命的左派の生れ出づる事を信じて疑はない者である。

私は生れんとする政黨がその出發點に於て殘されたる大衆を出來得る限り容易に包擁し得る如き政黨たらん事を衷心から希望する者である、

四　勞働總同盟の立場

九團體の諸君が一月十三日大阪に第一回の會合をなすに當つて、劈頭、勞働總同盟を誘ふ事の相談をなすとの事である。

總同盟は昨年十一月廿九日、準備委員會を脫退して以來、種々なる憶測の標的となさるゝ感があつた。總同盟は自己の組合を中心として獨自の政黨を組織する心算りであると云ふのは其一つである。總同盟は他の團體と行動を共にせず、從來組織し來つた地方政黨を充實して代議士を出す運動のみに熱中するつもりであると云ふのは其二つである。

總同盟が過ぐる日に準備委員會を脫退したのは、今回再擧をはかりつゝある九團體の諸君とその意見を異にしたからでは結末もない。只だ所謂極左派の諸君が準備委員會創立以來執り來れる態度は、到底總同盟の方針と一致しがたく、假令忍んで結黨に至るも、その翌日より運動の方法を異にする二つの潮流は内部に激烈なる鬪爭を惹起して、生れたる黨は健全なる發達をなし得ず、近かき將來に於て分裂に導かるゝ事の必至なるべきを確信したが故に外ならない。

併しながら今日に於ては既に事情は一變してゐる。生れたる黨は解散せられて、再び生れんとするものに對しては一個強制的な標準が示された。公然たる無產政黨を生れしめんがためには此標準を無視する事は現實上不可能である。

そこで、九團體の諸君が總同盟を誘つて新らしき黨の再擧をはからんとする場合、總同盟をして之れに不參加せしむる如き理由は毫末もないのである。

然らざるも未だ勢力の微々たる日本の現狀に於て、各自が一城一廓に籠居して小山の大將をきめ込む如きは愚劣至極の事である。各自相ゆづり出來得る限りの協同戰線を形成して其力を一つに集中するは目下の急務である。徒らに組合利己心にとらへられて小黨分立する如きは嚴に戒むべき事と云はねばならぬ。

九團體の諸君にして總同盟を誘ふならば、悦んで共協同戰線につらなり力を共にする意思を有するものである。

私は今回の再擧の企てが必ずや圓滿に進行して近かき將來に出來得べき無産政黨の誕生を見るに至るべきを信じて疑はないものであると同時に、各自が前車の覆がへりし事に充分の注意を拂つて、内には各團體の諒解をこまやかにし、外には再び官憲の乘ずべき餘地なからしむるために努力せん事を切望する者である。

五　左派の立場

農民勞働黨の禁止以後に於て、組合評議會を中心とする左派の團體は、一個の苦境に逢着しつゝあるは明かなる事實である。更に今回無産政黨の再擧が企てらるゝに當つては、完全なる孤立に陷るべきは之れ亦否定しがたい事實である。

若しも左派の諸君が大衆を目前に獲得すると否とは之れを度外して、眞に尖鋭なる革命的思想を標傍して、眞に勇敢なる犧牲的行動を以て、一貫せんとする意圖を有する如き場合は假令その運動が孤立するも問題ではない。否問題でないばかりでなくそれは覺悟の前の事である。

併しながらその左派が目前の仕事として、大衆それ自身に密着し、大衆夫れ自身を自己の陣營内に誘はんとする意圖を有する場合に於て、共運動が大衆より孤立するに立ち至るならばその左派の運動は明かに失敗たるを免かれない。

過去數年間に於て、所謂日本の共産主義的色彩を有する左派の諸君は明かにその失敗を累積し來つて今日に至つたのは爭ひがたき事實である。

二兎を追ふものは遂に一兎を得ずとは古言であるが、左派の諸君は、この數年來、一方殆んど狂氣と思はるゝ位い公然自己を赤色化するに汲々として日も尙ほ足らざる有樣であると同時に、他方大衆の獲得を叫び つづけて來たのである。是等の諸君が公然此二兎を追ひ其可能を信ずるに至つた理論的根據は、所謂資本主義の極度の行きつまりが目前に迫つてゐるとの確信に基いたのである事に疑ふ余地はない。此確信の下に焦り拔いた是等の諸君は、先づ第一に勞働總同盟より分裂して之れに離れ、更に焦り拔いた是等の諸君は、新らしく開展し來つた政治運動の舞臺に於て、その全部を赤色化せんとして内部を紛亂に導き、遂に生れたる農民勞働黨を解散に到達せしめて、急角度を以て、各團體から、そして又大衆から離れ去つた。眞に孤立に陷つたのである。併しながら若しも同時に此二兎を追ひ得るとするならば如何ぞ我等に方向轉換の必要があつた

あらうか！」

こゝに於て是等の諸君に目前殘されてゐる道は二者の内何れかの一つである。即ち是等の諸君が眞に少數者として大衆を度外した革命的運動に猛進するか、然らざれば、その着色したる共產主義の色彩を再び拭ひ去つて大衆の中に沒入し來るかである。

併しながら、第一の場合を具體的に考ふる場合、所謂左派を以て目せらるゝ組合評議會政治研究會の如き、眞に革命的少數者として猛進するためには、全體として余りに雜多であり多數である。その幹部が敢然斯くの如き方針をとるならば、その內部は分裂するか、その多數が離脫するかの結果を見るに至るは必然である。更に第二の場合を考ふるに、是等の團體が全體として大衆の中に沒入するためには、その幹部は余り着色され過ぎてゐる。之れを決行せんがためには等しく組合評議會も政治研究會も是等の余りに着色され過ぎたものと袂を分つ事なしには不可能である。左派の幹部諸君は、近來餘りに勇敢に自己の衣を赤色に染め過ぎたではないか！今更如何に表面をごまかして臭室中心主義を標榜するも相手は笑つて云ふだらう。『君のお腹の中は！』と。

私は今や再び無產政黨の生れ出でんとするに當つて、切に左派の諸君の冷やかなる熟慮を衷心から希望せざるを得ないものである。私は、無產階級の運動者に對して絕對に要求される事は不屈の勇氣と、冷靜なる反省とを以て自己の前に落下し來つた最惡の事態を凝視し、感情にとらへらるゝ事なく、その最惡の事態の上に冷やかに最上の再上の再擧をはかる事であると云ふ事を。

眞の左派の任務は寧ろ眼前に焦る事でなくして、常に革命的精神を把持してその勇敢なる行動の上に大衆の渴仰の的となる事である。小細工や小悧巧な政策を弄して眼前の勢力を少しでも自己に導かんとする如きは斷じて左派の成功すべき所以でない。斯くの如くんば結極輕蔑と反目とあるのみである。近頃流行の所謂共產黨的利用政策の如きは斷じて邪道たるを免かれない。

へたな左傾政策は、大衆的運動を反動化せしむるの結果に終るに過ぎない。かくの如きは無產階級の運動の上に百害あつて一利なき事である。私は誠心を以て今後の運動に對し左派の諸君の冷靜なる判斷を期待して止まざるものである。（大正十五年一月九日）

第五十一議會の政治的潮流

馬場恒吾

政治が觀念の殿堂から出でゝ、現實の懷勘定と利害の打算のみに、即して來た事が近時の著しき傾向である。だから政界を批評するにしても概念的な政策や傳統的な愛國心を物差しにして論じては、現在の政治的潮流を見る上には殆んど何の役にも立たぬ。社會科學が唯物史觀を根據として進歩した如く、或は今少しく廣く云へば、人間の知識が歸納的に事實を根據として研究されるに至つて初めて、科學的に進歩した如く、政治に對しても亦政治的な見方もせずに、經濟的な見方をするに余儀なきに至る。

此見方からすれば現在の政界を支配する一種の空氣、即ち議會の解散を恐れると云ふ空氣の根據がハツキリと了解される。政治家が解散を嫌ふ理由として、政界を混亂せしめるからだ、國務を澁滯せしめるからだ、社會を不安ならしめるからだなど云ふのは、これは全部嘘ではないとしても、大抵は付たりの口實であつて、眞實の理由は選擧費を作る困難を第一に思ひ浮べるからである。

代議士が選擧費を作るとに四苦八苦する事は誰でも之を目擊した經驗を有つてゐる。併し四苦八苦しても、どうにか、かうにか、三四萬の軍資金が出來る見込のある内はまだよい部類としなければならぬ。今日の状態はそれ所でない。如何に運動をしても、選擧費が出來る見込がないのみならず、運動費を出す習慣になつてゐる資本家の方から、今解散になつても、俺の方からは今度は運動費は出さないぞと已に豫防線を張られてゐる方面が少からず存在する。それは何と云つても大正九年以來の財界の不景氣、大正十二年の大震災の打擊が影響してゐるのである。今日は震災後已に滿二ヶ年以上を經過してゐるが、然かも震災に依つて受けた損害は大會社、大銀行に於ても、多くは懷勘定でグツトこらへて、恰も損害を受けてゐないかの如き顔

をしてゐた。若しそれを露骨にこれ丈の損害を受けたと世間に發表すれば其會社或は其銀行は忽ち物質的信用を失つて、破産する外はなかつたからである。尤も中には此損害をつゝみきれずして、内狀を暴露し、沒落の悲運に陷つた銀行會社のあることは人の知る通りである。然るにさうした沒落を見ない銀行會社にしても政黨に金を出し或は代議士に選擧運動費を與れると云ふのんきな狀態にゐるものは稀れである。稀であると云ふよりは寧ろ皆無と云つてよい。

昨年七月三派聯立内閣の三派協調が破れて、憲政會單獨内閣が成立して以來、理論上議會は當然解散さるべきものとして、政界何處となしに解散の空氣が漂つた。それで平生解散の軍資金を支出する習慣になつてゐる所の、會社銀行は豫防線を張る必要を見出したのである。今の不景氣から漸く恢復せんとする時に際して、莫大な政治資金を引出されてたまるものか。又引出さうとしても實際引出されるものでない。解散になつた後になつて金が出來ないと云はれては代議士も困るだらう。だから今の内に解散になつても、金は出さない事と豫告して置く方が、代議士其人に採つても親切であると云ふ理由の下に、かうした豫告は發せられたのである。

此豫告を受ける迄もなく、平生から金を借り、若しくは貰う爲めに、富豪の門に出入を怠らぬ代議士は、大底其富豪の懷工合を側量するに一種の透視的技倆を有つてゐる。少くとも彼等は次ぎの選擧に金を出して與れさうか否かを推測する事を怠らぬ。そして彼等の結論は例外なく悲觀論である。政黨本部は何れも現に金のない事をこぼしてゐる。自分等の縁故のある金持ちも金を出し相にない。さうすれば議會の解散は代議士自から首を縊る事になる。それは何時の年でも代議士は解散を恐れる。併し今年は殊に之を虎の如く恐れる。それは唯物史觀的に云へば日本の特種の經濟狀態から必然的に生れる代議士の心理狀態である。

マモンが握る解散の鍵

此解散を回避する心理狀態が今期議會の諸問題の取扱ひ方を決定する鍵である。昨年の秋加藤首相は此議會を解散するか否かかは政友本黨の態度に依つて決定する、即ち解散の鍵は本黨が握つてゐると云つた。之に對して、政友本黨は昨年の暮に推しつまつて、本黨は政策本位で眞實の是々非々主義で進む。解散すると否とは政府の腹で決まる。即解散の鍵は政府が握つてゐると云ふ意味の事を云つた。吾々から見れば、これはどちらも世間態のよい事を云つてゐるに過ぎない。解散の鍵を眞實に

握つてゐるものは日本の財界を支配する資本家である。若し茲に資本家が居つて、金は幾らでも出すから、解散を恐れずに猛進せよと云つたならば、それこそ代議士は一人殘らず雀躍して猛進する。其所には反對黨も政府黨もあつたものではない。運動費の札束が山の如く積まれると狀況を想像して見れば、代議士は必ず勇氣勃々として振ひ立つ。代議士が振ひ立たなくても、選擧には必ず付き者である所の運動員、地方有志者などが先づ振ひ立つ。それは淺間しいやうであるが、選擧の實狀を知つてゐるものは、何人も私の此語を否定出來まい。解散の鍵は政友本黨が握つてゐるのでもなく、政府が握つてゐるのでもなく、選擧費を支出しうるマモンが握つてゐる。さうでないやうに云ふのは、政治を觀念の殿堂に祭り上る習慣を有つてゐるものが、只空虛な美辭麗句を弄んでゐるばかりだ。

政府と本黨の情意投合

然るに政黨の現狀はどうであるかと云ふに、其經濟狀態から云へば、何所も同じ秋の夕暮れである。運動費を山と積んで、さあ幾何でも費へと云ふ事態は少くとも過去五年間は夢に見るばかりで、現實には存在しない。政府黨である所の憲政會には金がありさうなものであるが、其實際は補欠選擧の費用に追はれると云ふ有樣ではない乎。政友會の田中總裁に關しては金が出來たと云ふ噂がある。それが果して現金を握つたのである乎。又出或は出來る見込が付いたのであるか。其所が判明しない。又出來たにしても、一度の總選擧に足りるか、否かゞ疑はれる。最近に政友本黨の總裁床次氏の所に大金が這入つた、そして一昨年の總選擧の借金が整理されたと云ふ事が誠しやかに宣傳された。但しそれを本黨の人に聞くと事實でないと云ふ。又若し之が事實とすれば、最近の本黨分裂は起り得なかつたであらう。金の山を後ろに見捨てゝ、脫黨して行くと云ふ清廉潔白の士ばかりが代議士となつてゐる譯でもないからである。何所も秋の夕暮よ。それは現に大臣となつてゐる人ですら口にした語である。

このやうな財政狀態にある各政黨はどの政黨も解散を厭やがる事に於て大差ない。但し其中に最も解散を恐がつてゐるものは本黨だと思はれてゐる。本黨分裂後に本黨々員六十名ばかりの聯盟が出來て、極力解散を回避して呉れよと云ふ進言を床次總裁に向つてなしたと新聞に出たが。これは事實らしい。現に再選の確信なき者が最も解散を恐れる。そして清浦內閣の御用黨として生れた政友本黨の代議士が最も此確信に於て稀薄である。

併し黨員に斯く云はれる迄もなく、床次總裁自身にしても、解散を好まぬ理由を有つてゐる。それは床次氏は現在の加藤憲政會内閣に向つて相當の好意を表する事に依つて、次ぎの内閣組織者たる希望がある事を匂はせられてゐるからである。此希望の根據としては一方には内閣組織者を推薦する元老西園寺公の意向を忖度しての話もあり、他方には現内閣との間に以心傳心の默契があると云ふ者もあるが、兎に角、床次氏がかゝる希望を懷いてゐることは爭はれない。そして憲政會は床次氏にさうした希望を抱かしむる事に依つて政局の安定を計らんとする。憲政會の人々は云ふ。加藤現總理が辭職するとき、次ぎの内閣組織者として床次氏を推せば、其進言は之を誰れに向つてするにしても、相當有力なるものである。何となれば、憲政會が床次氏を推薦するときは、必要の場合には憲政會の多數が、議會に於て床次内閣を後援すると云ふ事を意味する。その形勢は如何なる元老でも無視出來ぬ事柄であると。若し此プログラムが行はれるならば、今より十五六年前、桂と西園寺が情意投合して、代り番に内閣を組織した當時を繰り返へす事になる。それは憲政會と政友本黨に採つては甘き夢たるを失はない。併しそれは今日實現するには余りに時代離れをしたる舊劇の如く思はれる。

政友本黨分裂の原因はかうした床次總裁の政權慾と、政友本黨員の自己生存慾から出た解散恐怖心が原因をなして居る。と云つて、床次氏の政權慾、本黨員の解散恐怖心が今の政界に於て、特別なものではない。何となれば今日苟くも政界に志すもの、一人として代議士になりたがらないものはなく、又苟くも代議士となつたもの、一人として大臣になりたがらないものはない。それが彼等の常識であり、身上であり、財産であるからだ。

本黨分裂の影響する所

政友本黨の分裂は昨年の暮れ、第五十一議會の劈頭に、衆議員の常任委員長選擧を動機として起つた。尤も分裂した中橋德五郎氏は以前から所謂政本合同論者であつて、早晩分裂する素質を有つてゐたものだが、實際の分裂は委員長選擧の機會を捉らへて行はれた。其事情は當時の新聞に出てゐる通りであるが、初め政友會は政本提携の約束あるを楯として、委員長を政本で獨占せんと申出た。本黨は野黨獨占に明らさまに反對だと云はず、先づ豫算委員長を本黨に寄こせ。そしてそれと重要の程度に於て、優るとも劣る事のない税制委員長の事は、其委員長選擧の時になつて改めて相談せうと云ふ事であつた。此返事を受取つた政友會は、これは本黨に於て政本提携に誠意のない

ものと、斷定して、委員長選擧の交渉を破裂せしめた。本黨内の政本合同論者は之を以て、本黨幹部は政友會を袖にして、却つて憲政會と握手してゐるものだと斷定し、そして、彼等の旗頭中橋徳五郎氏を擁して、二十一名の代議士が脱黨した、脱黨組は同交會と云ふ名を付け、年が明けたならまた多數の同志代議士を得ると云つてゐた。今日では其所謂多數は五六名になるか、ならぬと云はれてゐる。

政友本黨は解散を忌避する、それに反對して脱黨したる同交會は解散を歡迎するのであるかと云へば、それは決してさうではない。同交會二十一名、それが政友會百三十六名と結んだ所で、僅かに百五十七名、憲政會の百六十三名にも足りない。同交會の去就は議會の解散を決定するものでない。否寧ろ、彼等は政友本黨の態度から推察して、此議會は解散されないものとの見据えを付け、そして同じく解散の心配がないものとすれば、政府反對黨として暴ばれる丈け暴ばれる事が、彼等自身の人氣をよくする利益がある。此打算の上に立つて彼等は脱黨したのだとも云ふものがある。併し私はそれは穿ちすぎた批評だといふ氣がする。

只同交會が余りに聲を大にして、政友本黨は政府と妥協してゐると叫ぶが爲めに、床次總裁以下幹部の者が單なる意地張りからして、心にもなき衝突を政府に向つて試みはせずやと云ふものがある。併し本黨幹部が不用意に云ふ語の中には、解散はあるまいと云ふ安心を漏らしてゐる。元より政治は勢である。議會は群衆心理に支配される。故に解散の有無は何人も豫言する事の出來ぬ事であるが、現代に於て解散が政府及本黨の豫定計畫の中に含まれないこと丈けは事實である。

本黨分裂以來、床次總裁及び幹部は頻りに本黨は政策本位で進むものだと云ふ。然るに奇妙な廻り合せと云ふべきは、政策本位を高調すれば高調する丈け、本黨は政友會から遠ざかり、憲政會に近づく運命を有つ事である。何となれば、今期議會に於ける重要なる政策問題と云へば税制整理案を以て筆頭とする。其税制整理案に於ては、本黨案は地租の地方への委讓することに反對なる點で、政友案とは原則的に相違があり、却つて政府案と同じ立場に立つてゐる。尤も政府案とも相違の點はある。例へば政府は地租一分減を主張する。本黨は主張しない。政府は地價二百圓以下を免税する。本黨は自作農を免税する(へ自作農全部を免税する事は不可能であるから、矢張地價若しくは反別で免税點を設けねばならぬ。結局政府案と大同小異だと云へる)、此税制案と關聯して、豫算案に於ける義務教育費國庫補助の問題がある。本黨は現在の補助額四千萬圓を倍加する爲

めに、四千萬圓を増加せんとする。政府は義務教育費總額一億二千萬圓の半額を國庫から補助すべきものとして補助費増額を二千萬圓に止めんとする。茲に四千萬と二千萬の爭ひがある。此等の相違の點に於て、政府と本黨が各々其相違の點を固執し、そして政友會が惡戲半分に本黨案に贊成したならば、其所に議會解散の危機がある。

所で其所迄行くには前途遼遠なるのみならず、已に政府案と本黨案を折衷して妥協案が世間の噂に上つてゐる。其案は政府が地租一分減を中止する。そしてそれから浮ぶ金が九百萬圓、それを一千萬圓に拵らへて、教育費の方を三千萬圓にする。これは政府案の二千萬と本黨案の四千萬を折衷したものである。これで折り合ひは不可能かと云ふ者がある。現在の狀態では政府は勿論、本黨と雖も此妥協案などは顧みても見ない。併し內閣では頻りに密談をしてゐる。濱口藏相は自說を固執してゐる。他の閣僚はまた意見を述べる事を留保してゐる。妥協成立も不成立も、其所迄到着するには今後尚幾多の波瀾があるだらう。併し大局から見て、本黨か政府が故らに衝突する意志さへなくば、此妥協案は出來るだらう。

政友會の一般方略

茲で問題とすべきは、本黨の分裂に對して政友會はどの程度迄手を出したか、そして其手を出した理由は何所にあるかと云ふ事である。事實として政友會の策士が本黨の脫黨と策應してゐた事は爭はれない。現に政友會の策士と云はれる小泉策太郎氏が脫黨組の鳩山一郎氏と連絡を取つてゐた事は人の知る通りである。政友會總裁田中男が脫黨組を賞揚した談話は新聞に出てゐる。本黨でも脫黨者が二十一名に上ることは豫想しなかつた。殊に井上孝哉氏が脫黨者の中にある事は皆んなの意外とした處である。これは貴族院四人組と云はれる水野錬太郎氏、鈴木喜三郎氏が斡旋した爲めに此れ丈の脫黨者があつたのだと思はれてゐる。其水野氏は去年一時は政友會へ入黨すべく決心して、僅かに床次氏に說かれて入黨を思ひ止まつたと云はれる。だから此等の事情を綜合して、脫黨組の背後には政友會があると思はれてゐる。

然らば政友會は何の爲めに本黨を分裂せしめた乎。それには政友會の素志は何うであるかと見る必要がある。政友會は昨年四月から七月頃迄に政本合同を企てた。そして三派聯立內閣をこはして、政本合同したる多數黨にて政權を取らんと企てた。然るに八月劈頭に憲政會單獨內閣が成立すると共に、政友會內の政本合同熱は頓みに冷却して、其代りに本黨切崩しの作戰の

噂されるやうになつた。憲政會と本黨が情意投合して互に政權授受をやるのだと云ふ話しが出るにつけて、政友會は益々焦り出した。それは加藤內閣の次ぎが床次內閣になつて、政友會が萬年在野黨になる惧れがあるからだ。其所で、加藤內閣が辭職する時、如何に西園寺公が床次氏を推薦し度くとも、或は加藤子が政權を床次氏に讓り度くとも、それが出來ないやうにする必要がある。それには本黨を分裂せしめて、床次配下を百名以下の少數に墮して置けば、なんぼう何んでも之に內閣を組織さすとは云はれぬと考へた。だから政友會が本黨分裂を獎勵したのは政友會が政權を取らんが爲めの作戰であつて、決して脫黨組と合同する目的を以てゐるのでなく、又これで議會解散を招來せん爲めでない。解散が目的ならば、豫算委員長でも、稅制委員長でも汎べて本黨に讓つて、政友會から本黨に追從して、政府と正面衝突をやらしむれば、議會は否應なしに解散される。それを敢てしない所を見れば、解散を嫌ふ點に於て、政友會は敢て人後に落ちないと云へる。又脫黨組との合同は合同を申込まるれば政友會も之に應じない譯には行くまいが、同交會に四人組を加へたものとの合同、即ち陣笠少なくして、大臣級の人數多き團體との合同は、どの政黨にしても餘り歡迎しない。結局本黨分裂に依つて、政友會の利益とする所は、政友會が次ぎの內閣組織者としての可能性が多くなつたと見える事、及び今後政府と政友本黨の情意投合が成立して、愈々解散の危險にないと保證されるときは、政友會は安心して大に反對黨振りを發揮して、それで世間の人氣を博する機會を與へられた事である。

解散回避の潛在意識

憲政會は云ふ。黨略から云つて、憲政會の代議士を增加する爲めには、今が解散すべき絕好の機會である。しかし原敬がなした如き、黨略の爲めの解散は憲政會の敢てしない所である。出來るものならば、各種の政策を實行する爲めに議會の無事を祈ると。蓋し十年在野の後、漸くして政策を行ふべき地位に就いた加藤子として蓋しこれが本音であらう。併しさうは云ふものゝ、憲政會にしても若し茲に數千萬圓の軍資金がごろ〳〵してゐたならば、さう云ふ穩健着實な意見は吐かないであらう。其穩健振りは矢張何所も同じ秋の夕暮れの感化と見る外はない。憲政會は三菱の財閥を控へて、無盡藏の金庫を有するかの如く見へるが、實際はさうでない。三菱若しくは三井の如き全國的な財閥は政治的冒險をしない。或る一の政府と特別の關係を結んで、其の政府と浮沈を共にすることは近代的資本家の忍ぶ所でない。彼等はどの政派にも相當の好意を示して、どの政府の時

でも、自分達の財産の利殖が安全に出來るやうにせんとする。富豪擁護法である所の治安維持法が衆議院の凡べての政黨に依つて贊成せられる事が此間の消息を語るものではない乎。

殊に加藤内閣の財政上に於ける緊縮方針は幾分か日本の經濟的繁榮を恢復する効果があつた。關西では殊に受けがよい。故に財界の壓迫が政界に加はるとすれば、それは現在の財政方針を今少しく繼續して貰ひ度いと云ふ希望となつて現はれ、だから議會解散などは止せ、選擧費は出さないぞと、露骨な言明になるのである。總選擧となれば、泡沫候補者でない所の、眞劍の候補者のみで其數七百に上る。それが平均五萬圓を費うとして、總計三千五百萬圓が財界の頭目から絞ぼられる。其負擔は今日の財界の苦痛とする所であるが故に、財閥の議會解散を忌む心は一層深刻になる。昨年暮れの株式奔騰の景氣が、今後非常な好景氣に發展するときは、財界よりする解散抑壓の手が緩められるかもしれぬ。併し現在の處ではさう云ふ氣振りは見へぬ。從つて第五十一議會の基調をなすものは解散回避の潛在意識であらう。

背後の傀儡師

素より此議會にも相當の渦卷きは起るだらう。衆議院に於ける重要問題としては前に述べた税制案、豫算案の外に幾多の案件がある。鐵道敷設計畫を政府が變更せんとするに對して政友本黨の元田氏などは頑強に反對せんと云ふ。之が惡化すれば本黨二度目の分裂が起る。海軍の補助艦建造計畫も問題となる。三億圓以上の大計畫が二千萬圓許りの驅逐艦四隻に變つた經緯に關して、大藏大臣の方はそんな大計畫は知らぬと云ひ、海軍大臣の方がそれは來年から初めるのだと云へば其間の矛盾が指摘される。海軍に關した事では數年前八八艦隊の建造が中止された結果として、政府は各造船所に二千二百萬圓の賠償金を拂はんとしてゐる。そんな金を拂ふ必要があるか、否かは問題にされる可能性がある。吾々から見て重大と見へる勞働組合法などは議會に於ては却つて爭論の種とならぬかもしれぬ。それは社會局の原案を變更したる所の政府案は大體に於て資本家の意見を容れたものであり、而して、資本家の意見を尊重する點に於ては、既成政黨の間には甲乙はないからである。

兎も角も、憲政會は政府與黨として、政友會同交會は正面の反對黨とし、政友本黨は政策本位で行き、此三角關係の渦卷は相當活氣を呈するであらう。併し基調は解散回避である。代議士が如何に雄辯を振ふとも、或は又頗る非常識な活劇を演じるとも、彼等の腹には解散回避があり、其奥には解散になつた

時、選擧運動費が作れるか否かと云ふ胸算用があり、其又奥には運動費を出して呉れさうな資本家の渋い顔が描かれてゐる。それを思ひ合はすと、代議士の議場に於ける花々しき活動も、孔雀の羽を借着してゐる烏の滑稽と悲哀を連想せしめる。凡べての代議士がさうであるとは云はぬが、總選擧毎に四五萬の運動費を他人から借りるか、貰うかせねばたらぬ處の代議士は、形式は何うあらうとも、實質に於ては此滑稽と悲哀を身に帶びてゐる事を否定出來ない立場に居る。此内情が世間一般に察せられてゐるが故に、代議士の言論に權威がなく、政治其物に國民を指導する力が欠けて來たのである。

併しかうした假裝的の狀態は永久に續くものでない。既成政黨の堂々たる陣容も、實際に於ては選擧費を出す資本家なくては維持する事は出來ないのである。今日の如き財界沈滞の時期に於てはどの政黨も解散を避けさるを得ない。代議士が避けるのではない。背後の資本家が避けるのである。代議士が踊るのでない。背後の資本家が踊るのである。吾々は最早衆議院に出て來る代議士に注目を拂ふの必要を見ない。彼等に選擧費を供給して、彼等を代議士として活躍せしめる資本家が誰れであるかを發見する必要がある。さうする事に依つて、議會に現はれる各種の法案が、何を目的として提出されたのであるかを諒解し得るのである。

資本家が黒幕の中にかくれて、代議士をして自分の代辯たらしめる所に、現代の政治の不徹底さ、不鮮明さがある。其中から僞善と欺瞞が生れる。貴族院では老朽淘汰の意味で議員資格審査委員なるものが生れた。吾々は眞實の衆議院議員が誰れであるかを知らんことを要求する。資本家が議員の守り本尊ならば、守り本尊が出て來て、自分で陣頭に立つことを要求する。少くとも何の議員は誰れの金で議員になつたかを知ることを要求する。それは只吾々の好奇心を滿足せしめる爲めの要求ではない。さうしなければ、議會が眞面目に受け取れぬからである。議員が假裝してゐるとしか思はれないからである。政治が操人形の芝居に過ぎないとの印象を除く事が出來ないからである。貴族院で資格審査が行はれる如く、衆議院にも、議員の選擧運動費の出所を審査し公表する委員を作るべきものだ。勿論現在の代議士がそれに贊成しやうとは思はれない。併し國民の前に議會の信用を維持する爲めに、それは絶對に必要な事である。而して今後此方針に依つて議員の假面が剝がれ、資本家の代辯は資本家の代辯たる名札をぶら下げて議場に出て來るとき、其所に初めて議會が正しく評價されるのである。

日本の政治の不振は總べて此根本のごまかしに原因してゐ

る。議員は彼等が議員となり得た運動者の出所を隠くす、それだから、其後の行動がすべて曖昧で、不思議に曲線的になる。今期の議會で、政府と政黨は衝突するが如くせざるが如く、解散するが如くせざるが如く、變幻窮りなき曲藝を演ずるであらう。その曲藝のからくりには、背後の資本家が糸を引いてゐると云ふ事實を知つて、吾々の眼にも始めて曲藝の理由が成程と讀めるのである。

言ふ迄もなく斯の如くして行はれる政治は一種の僞瞞である。それがブルジョア政治の特徴であるとは云へ、そんな不合理な狀態が永續する筈がない。漸次に聰明になつて來る所の民衆の眼が、操人形のからくりの所を一心に見詰める。そして資本家に操られてゐる政治家の滑稽さを嘲笑し、黑幕の傀儡師に向つて顔を見せろと叫ぶ。さう云ふ事態になれば、最早人形芝居は打てなくなる。政治の舞台から、さうしたいかさまものが一掃されて、其所に正直正銘な國民各階級の代表者が出て來るとき、政治が初めて眞劍勝負になる。其時善い政治が行はれるか、悪い政治が行はれるかは、それは別問題である。只愚にもつかぬ人形芝居を止めさして、資本家や、勞働者や、其他國民各階級の利害を代表する者をして、赤裸々の奮鬪をさして見る。其變化を待ち來たす事が政治の進歩を希望するものゝ、最初になさなければならぬ仕事である。(一五、一、一〇)

レオトオ綺語

堀口大學

或は本名のポオル・レオトオよりも、匿名のモオリス・ボアッサアルで著名であるかも知れぬのだが、これは現代佛蘭西奇人番附中での横綱である。十余年の間、彼はモオリス・ボアッサアルの名で雜誌メルキユウル・ド・フランスに劇評を書いてゐたのであつたが、あんまりその批評が辛辣で、役者も作者も興行主も皆が怒つてしまつて、はてはどの芝居もメルキユウル誌へは招待狀をよこさなくなつたので、三四年前から劇評の筆をおさめて今では時々、回想錄風な味な文章を書いてゐる。自分では思ふ通りを文字に綴るだけだと云つてゐるが素晴らしい名文家である。ことに誰かの惡口を云ふ時に彼は名文家になるのである。明治の緑雨を思はせるやうな皮肉な爺さんである。

或る芝居の初演の晩に、彼はある貴婦人に紹介された。この貴婦人は彼がボアッサアルの名で書くメルキユウル誌の劇評の愛讀者なのだが、然も彼にこの二つの同じほど有名な名があるとは知らなかつた。一とほりの挨拶が濟んだあとで、かの女はレオトオにたづねて云つた。「あなたはボオアッサアルさんと大さうお心易いと云ふではありませんか？」と。するとレオトオは、先づあたりに注意して、だれも聞いてゐないと見とどけた上で、いきなり貴婦人の耳元に口をよせて云つたものだ。「私たち二人は毎晩一緒にねる仲です。」と。

フイガロ紙の紙上で、ある著名な詩人が主催して、その當時佛國の文壇で問題になつてゐた「文士は他に職業を持つ可きや否や」と云ふ題で多數知名の士の答案をかかげて居つたことがあつた。その時、わがレオトオは何と云つたか？彼は云つた。「今度のアンケイトを主催してゐるあの詩人の書いたものを讀んで見ると、私は斯うよりほかに返事の仕やうがない。即ち、どうやら文人と云ふ奴は、何でもよいから文筆以外の職業を持つ可きものだと。」

お金持ちで、美人で、一寸と筆が動くので、サロン、リテレエルを持つて巴里の社交界にはばをきかせてゐるマダム・オオレルをレオトオは大嫌ひだ。折さへあれば彼はかの女の惡口を書く。ある時マダム・オオレルが立腹してレオトオを「蟇野郎！」とののしつた。それにレオトオが答へて云ふやう。「奥さん、私は蟇野郎と呼ばれて本望です。字書を開いて見ると書いてあります。蟇は害蟲を殺す有用な動物です。」と。●

回顧的風潮に就いて

村松正俊

近來、今迄の欧化的風潮の盛んであつたのに對して、一種の保守的な、又回顧的な風潮が、一般に擴がつて來た。此の傾向は、最初單に、最も保守的な社會的部分である所の、一般民衆の間に潜んでゐたのであつて、講談や、所謂大衆文藝の流行、劍劇の歡迎等に現はれてゐたのみであつた。然るに、此の風は今や漸く思想界の中にも見られるやうになつた。國粹主義、日本主義、或ひは東洋主義戰等と號するものが之れである。

かういふ傾向は、果して如何なものであらうか。それは矢張一時的なヒステリー的な發作ではないかと思はれる。若し、日本主義にして、眞に日本的なものから出來たものだとすれば未だしもであるが、事實はさうでなく、同じく西洋の風潮を意識的にか、或ひは無意識的にか模倣してゐるものと思はれる。國粹主義は云ふ迄もなく、伊太利亞のフハシスモの模倣であるが、東洋主義といふやうなものは西洋人のエギゾチシズムの模倣である。浮世繪が好いなどといふのも、西洋人が好いといふからその眞似をしたのみであるが、一般的な回顧的風潮もそれと同じ心理から出てゐる。

國粹主義、日本主義などを唱へゐ人々は定つて、それが固陋な守舊的なものでない事を先づ斷るが、然しさうでない國粹主義なるものが果して何處にあるだらうか。之れは明白に一つの誤謬に陥入つてゐるのである。誤謬とは何であらうか。それは價値の標準の取り方が誤まつてゐると云ふ事である。

一時新らしい見方で、日本の物を見るといふ事が流行であつた。新らしい見方とは即ち西洋人の見方である。即ち日本人として日本を見るに非ずして、日本人の癖に西洋人の目丈借りやうと云ふのである。其處に評價の錯誤がある事はいふ迄もない。それと同じ錯誤を所謂新日本主義とか、新亞細亞主義とかいふ連中が犯してゐるのである。

現實に如何に動くかは、現在の人間のみ關する所である。如何に日本主義だと云つた所で、銀座通りを藁葺小屋の陳列場とする譯にはゆくまい。過去の日本は、そんな日本主義には關係なく、日本主義なんぞは知らなかつた。過去の日本の好い所は當然現在の日本が持つてゐるのである。事々しく主義といふ必要はない。

からだの事

平林初之輔

自分は身體の具合がノーマルな狀態にある時は一年のうちで半分かせいぐ〳〵三分の二位しかない。肉體的に愉快なことなどはたゞの一日も近頃ではない。あとの日は大抵どこかに故障があつて、何をして見ても、肉體的に十分氣乘りがしないのである。

父の血統には中風で死んだものが多い。父もさうだつた。私も四十になつたらあぶないと覺悟してゐる。こどもの自分に腦がわるくて、寢入りばなに、そのまゝ人事不省になつたことが三度程あり、催眠術の治療を受けたことがある。もつとも施術者がまづかつたのか、自分が暗示にかゝりにくい性質であつた爲か、一度も眠つたことはなく、たゞ眠つたやうなふりをしてごまかしてゐた。この病氣は不思議にも眠らうとするときに襲つて來るので、その後、意識的にこれに抵抗できるやうになつた。はげしい時は毎日眠らうとするとその度びにこの發作になやまされたものであるが、成長するにつれて、漸次あとをたつて來た。けれども、今でも一年に二三度は、それを豫感することがある。その後數人の醫者に症狀を話したが、誰も病名をはつきり言つてくれた人はない。いづれにしても腦髓か、ことによると心臟の病氣で、中風や腦溢血に關係の深いものだと思つてゐる。兎にかく滅多にない病氣と見えて、同病相憐れむ相手にまだ一人も私は出あはない。

滅多にない病氣といへば、京都の大學病院で鼻を診て貰つたときに、ひどい蓄膿症だつたので、病院の助手やことによると學生もまじつてゐたかも知れぬ。珍らしがられて、七八人の者にかはる〴〵みせられ、實物示教の材料にされたことがある。しまひには氣もちが惡くなつて腦貧血をおこして葡萄酒をのんで歸つて來た。これは十二三年前のことである。

窒扶斯をやつた時には、近所の醫者が氣管支加答兒と誤診して一ヶ月ほども氣管支加答兒の療法をつゞけてゐた。よく、硬飯などを平氣で食つてゐて助かつたものだと、あとからみてくれた醫者もあきれてゐた。ついでに肺尖を病んだときも、大分病氣は進行してゐたのに、一二三の醫者にはどうしてもわからなかつたが、窒扶斯を發見してくれた醫者にみて貰つたらすぐにわかつた。その醫者は、今でも女子大學の校醫をしてをられる[illegible]女史である。私は今だにこの[illegible]と信じてゐる。

十二月八日

高畠素之

十二月八日、安成二郎君の本の會で、廣津和郎といふ人に會つた。この人の書いたものは時々面白く讀んでゐるが、現物を見るのはこれが初めてだ。みた目をいふと、デレリ、シアナリとした色男振りで、物を言ふさへ退儀だといつた調子の人生疲勞を氣取りに見せてゐる。私は三四年前、改造社主催の賀川豐彥氏の會で、厨川白村といふ人の前に着座させられて、とても耐られなくなつて小便でも引つかけずには居られなくなつたことを憶えてゐるが、廣津氏から受けた印象はそれ程ではなく、また種類も幾分ちがつてはゐたやうであつたが、然し餘りぞつとしない印象であつたことだけは蔽ひ隱すことが出來ない。

然し、小便を引つかけるなどといふ不遜な了簡は、もう起らなかつた。高橋是清氏に依れば、三つ兒も三年たてば六つになる。三年前の僕であつたなら、『この男は、毎日毎日あんな風に色男氣取りで、枕草紙と首引きでもして生きてゐるのかも知れない』などと、或は想像したであらうが、今は三年たつてゐる。『人は上つらの一面的な印象だけで、その儘に全豹を推知し得るものではない。上べ通りの中身もあれば、上べで中身を埋合はすといふ補償原理もしば〳〵作用する。陰氣で希望のない性格だけに、時々人前で調子はづれにはしやいだりする場合もある。おとなしい人だけに酒癖が悪いといふ心理も考へなければならない。廣津氏にしたところで、あの風貌や擧措から刺戟される、男妾的乃至はマクトノ式な實感だつて、それが果して廣津氏の全人格その儘の反射であるかどうかは解らない。あんな風貌をしてゐるだけに、中身は却つて氣骨があり、頭もなか〳〵鋭く冴えてゐるのかも知れない。それでなければ、彼れの筆に示される程の觀察や批評眼は生れて來ない筈だ。』

私はかう考へて、廣津氏のやうな風貌の人物も一概に馬鹿にしたものではなく、寧ろそれだけ益々多面立體的に鑑賞して見ることが必要であるやうにも感じた。これも時間が三年たつたお蔭であらうか、まんざら時間のせいばかりでもなく、その間、こんな風な人間觀察態度を、廣津氏始め藝術家諸氏の作品や感想に依つて啓發されたところが少なくないことを涙の出るほど有り難く思はない譯には行かない。全く、戯談でなく。

藝術の内容

佐藤春夫

藝術の内容と題目とを、人々はよく混同してしまつてゐる。

さういふ混同を基にして「内容至上」などといふデタラメの俗説が出てくるのだ。さういふ論者が、そのくせ、藝術の内容を最も知らないのだからをかしい。「内容至上」などといふくらゐなら、まだしも「表現至上」と言つた方がいいのだ。その方が本當の意味に於て内容を重んじた說だ。

それでは僕が藝術の内容と呼ぶものは何であるか。それは決して題目ではない。その題目に對して作家が傾注したところの熱情そのもの、これが即ち藝術の内容だ。どれだけ深い感興をもつてその制作に從事したかといふことだけが、藝術の内容だと僕はいふのだ。さうしてそれを見究めるためには、それの表現を通つて窺ふ以外には、方法がないのだ。それを通してだけ讀者は、作者の制作當時の心臟鼓動を知るのだ。

たとひ作家がどんな好個の題目を選んでゐても、その題目に對して大した熱情を示さないで、ただ職業的賃仕事のやうな態度をしか現はさないやうな場合、この藝術品は價値のないものであることは論を待たない。さうしてこのやうな氣の毒な作品も往々にしてあるものだ。詩才なく、唯、世才や學才や商才によつて組立てられた制作は悉くこの種の作品である。それはたとひ題目だけは持つてゐても、藝術としては全く内容無きものである。藝術品としての眞價は一にここにある。充實した作品とは、即ち必ずしも問題を多分に含んだ作品では無く、作者の制作的視覺が多量に籠められた作品の謂である。若しさうでなかつたならば、抒情詩の内容はどこに在るか

それほどの深い藝術的熱情を、創作的精神を、果してどのやうな題目に注いだかを詮議するのは、自ら別の問題である。それは作家的素質を知る以外に作家の人間的素質を覗ふ上には見逃すべからざる點ではある。そのやうな熱情を、美しい事に、正しい物に注いだか。この點を批評家が一個の重大な問題にすることに就ては、僕、別に異議のありやう筈はない。

要は、ただ藝術の内容が何であるかを知らない連中――藝術の眞諦を覗くことも出きない徒輩が、單なる題目そのものを内容と心得てゐることを啓蒙しようとするに過ぎない

演劇に對する二十萬圓の補助金

松居松翁

墺太利議會の決議にかゝる、千九百二十六年度の同國維也納にある國立オペラ座と、同じ劇場の豫算が、近ごろ發表せられた。歐洲戰爭の爲め、殆ど滅亡に瀕した此國ですら、どの位舞台藝術の爲めに、國幣を費やして居るかといふ事が分つたら、政黨の操縱以外には何事にも目を吳れぬらしい日本の爲政者たちにも、ちつとは國民の爲めに考慮すべき問題が、其以外にもある事が發見されるのであらう。

斯道に心を寄する人々は、誰でも知つて居るやうに、維也納には二つの大國立劇場がある。舊宮城の近くの目ぬきの場所に並び立つて居て、劇場の方は五百五十萬圓、オペラの方は五百萬圓の建築費がかゝつた。つまり巴里のグラン・オペラを除いては、世界でもつともすぐれた劇場であり、オペラ座であるのだ。

近ごろあの國を漫遊して來た人々からの話によると、維也納の劇界はひどく落寞を極めて居るやうな話であつたが、今度發表された豫算によると、春來非常な好況だといふ日本などでは、考へも及ばぬ程な多額の金が、此二劇場だけの爲めに、國家から支出されて居るのである。

先づ當座の豫定收入は全體で、

千百萬三千六百三十三シユルリング

（即ち三百十六萬六千四百七十萬圓餘）

で、その中經營費に對する豫算は、驚くばかり少額なのである。その額は

九萬四千貳百五十二シユルリング

といふ即ち二萬七千七百二十圓餘といふ全體の收入の一分にもつかぬ少額である。今詳細に渡つて研究して見るに

給料	二百十九萬二百九十圓
年給	三十萬二千四百四十圓
暖氣、光、報告費など	四十萬四百四十圓
娛樂稅	十八萬千百七十圓
新狂言演出費	九萬四千百十圓
總計	三百十六萬四百七十圓

此中百九十二萬四千百九十圓は、劇場の收入と豫測せられ、差引百貳十四萬四千五百六十圓だけ、國家から支出といふ事になるのである。

さて前記の貳百十九萬圓といふ多額の給料を受取る人員を調べて見ると、左の如き多數になるので、日本の俳優の事など思ふと、却つてぐつと安くなるのである。

オペラ

獨唱――男三十四人、女二十四人　小供十四人
バレー獨唱――男十三人　女十三人
踊り子――男二十二人　女七十五人
オーケストラ　百二十人

演劇

主要俳優――男四十三人　女三十四人
コーラス――男二十一人　女二十三人

これに衣裳、大道具、小道具、電氣其他の人々を算へると、どの位の人數になるか知れぬ。今日の窮乏時代に尙これ丈の負擔を、國家が平氣でやつてくれる維也納は。まことに惠まれたものである。ホフマンスタールの出たのにも、シユニツラアの出たのにも、カインツの出たのにも不思議は無い。日本の國家が演劇に與へる恩惠は、曰く興行時間の短縮、曰く脚本檢閱の嚴刻、曰く觀覽稅の誅求。それで文學者先生方からは、よい演劇が要求される。あゝ憐れなる日本の興行師よ！

藝術と革命

嘉治隆一

勞農ロシアの文相ルナチャルスキイの論文集「藝術と革命」が近頃茂森氏によつて譯出せられた。一本を贈られて卒讀して見たが、原書は一昨年モスカウで出版せられたものであるといふから、恐らくは無産階級革命完成の仕事に最も繁忙を極めてゐる間に書かれたものに相違ない。傳統的教育制度の打破と文盲退治とプロレトクルトとに殆ど粉骨碎身しつゝも、尙且之だけの勞作を物した彼の努力もさること乍ら、一面に於て彼の樣な人を文相に擧げて革命以來今日迄之を支持し續けて來たロシア共産黨幹部の態度は實に見上げたものである。

由來ルナチャルスキイはロシア共産黨内に於ては最も精神主義的色彩の勝つた人である。その事は彼の過去の行動を見ても、此「藝術と革命」を讀んでも分るし、又かの一九二三年にマグナス及びウオルターの兩人によつて英譯せられた「ファウストと都會」以下の三戯曲などには特にこの傾向が明瞭に現れて居る。それにも拘はらず、あの惡口屋揃ひの共産黨の連中が、どうして長い間大切な教育事業を全然彼に任せ切りにして居るのであらうか。之は一寸不思議な樣でもあるが實は當り前の事の樣でもある。

階級的敵愾心の強いロシア共産黨員は又同時に戰友を信賴する氣持が人一倍強いのであるが、絕えざる反革命の危險と國外諸國の壓迫とは益々彼等の結束を強固にした。仲間の割れる時は則ち全部の首の飛ぶ時である。命がけの緊張の前には多少の傾向の相違なんか問題ではない。苟くも無産階級獨裁支持の目的に反しないならば全て之を包容して適所に用ゐるだけの雅量乃至戰術を心得てゐる。さればこそゴルキイもコロンタイもリヤザノフも共産黨治下に働く事が出來たのである。曾てザーリズムと資本との攻勢を前にした戰の際に、戰友に對して日和見主義者とか反動主義者とかいふ汚名をおつかぶせて自らを誇る事をしなかつた者は、彼等共産黨員ではなくして左翼小兒病者たるバクーニン主義者であつた。

バクーニン主義者がロシアの政權を握つて居たらルナチャルスキイの地位も「藝術と革命」の著述も無論フイになつてゐたであらう。

冬の散歩

山内義雄

シヨオン(SCHONE)の書いた「思ひ出」のなかにボオドレエルについてのこんな姿が描き出されてゐる。

「悪の華」の詩人から食事に誘はれてサン・トノレの一旗亭に出かけて行つたシヨオンのまへに、やがて運び出されたものはといふと、琥珀色をして滋味如何にも豊かさうに見うけられる素晴らしいブリイの乾酪、そのあとからは生一本の葡萄酒が一本。食事といふのはそれだけ。ボオドレエルは悠然として象牙の柄のついた小刀をとつて乾酪を切り、やがて美酒を注ぐ。

シヨオム「さてはデザアトから逆に行かうといふ寸法だな。」

これに答へた詩人の返事といふのが、

「さにあらず。君も知るごとく己は一代の食通だ。ところでわが口に適ふ美食を得るに途なきときは(しかも兎角さうしたときの方が多くなつてな)かうすることに定めてゐるのだ。一寸頭を働かす。つまり素張らしい大饗宴のお終ひちかくに駆けつけたものと想像するんだ。恰度出るのがこの乾酪と、それ、この葡萄酒と。いや、この切子の杯に揺らぐ酒の色としたことは。見る眼、嗅ぐ鼻、舌の味、と。歸命頂禮、これわが佛、しかもわずかに三法さ。」

クレパ鈔行「ボ氏拾遺」に曰く「伊達者はよろしく不断の意氣をもつて崇高にむかつて精進すべし。飲食睡眠、ともに須らく前に鏡を懸けたるの心をもつてせざるべからず。」

敢て深くその意味をたづねることをしまい。そこに見はれたボオドレエルのある種の潔癖さこそ心を打つ。「赤と黒」の作者が雪に悩む莫斯科退軍のみぎり、朝ごとに髯を剃つた風懐がこれに類する。啻に風懐と、のみは云ふまい。むしろその潔癖さだ。

冬。いつか友人からおくられた龔半千の畫譜を手にしてあの鬱々たる支那山水のなかに心を漂はす。そこに見られる怪奇跌宕な樹石の布置を透して、澄みきつたあの畫家の魂が迫る。「自由の人よ、卿はつねに海を愛せん」とうたつたボオドレエルと、これはまた何といふちがつた世界であらう。こゝにあるのは燃えつくしたボオドレエルの灰であるか。ただその線と格調の潔癖さこそ互に相撃つ。この頃の私はボオドレエルの詩句を誦んで、龔半千の小徑に孤寂な冬の散歩をこころみる。

呉俊陞とイワンの馬鹿

豊島與志雄

昨年末行はれた、張作霖軍と郭松齢軍との遼河の決戦は、いろんな意味に於て非常に面白かつた。そしてその戦で殊に際立つてゐるのは、呉俊陞将軍の雄姿である。張作霖の運命危しと見て、六十の老軀を投げ出す覺悟を定めて出陣し、大部分の軍隊は御曹子張學良の指揮に委ね、二千の騎兵より成る手兵を提げて、敵陣の後方深く進出し、天晴戦勝の機運を作つた。そして敵軍の退路を遮斷しながら、敵の總司令たる叛将郭松齢を生擒し、機を失しては事面倒なりと看て、これを銃殺してしまつた。……宛然、三國誌的繪卷物である。

支那の戦争に呉俊陞あることは、まさに鶏群の一鶴である。由來支那の戦争は、文明的なるを以て聞えてゐる。戦争の目的が、殺人に非ずして勝利にあるとすれば、買收妥協などあらゆる手段によつて、一兵に血塗らず一彈を發せずして勝を得るのは、最も文明的なわけである。生命は金錢よりも貴しといふ眞理(?)を最も實行してゐるわけである。そして、かゝる戦争に於て、老将軍呉俊陞は、不似合であると共にまた光輝を放つてゐる。

然るにトルストイに「イワンの馬鹿」といふ物語がある。その一節に、イワンの國の戦争のことがある。隣國の軍隊がイワンの國に侵入してきた。然しイワンの國には一人の兵士もゐない。隣國の軍隊は何等の抵抗も受くることなく、村から村へと占領していつた。イワンの國の人々は、たゞ不思議さうに敵軍を眺めた。穀物牛馬を掠奪されても、善良な眼で迎へるばかり、お前の國では生活が困難ならこの國へ移住して來いと勸めるのである。家屋食料を燒き拂はれても、物を駄目にしないで入用なら取つて使ふがよいと云ふのである。遂に兵士等は堪へ難くなつて、思ひ思ひに四散してしまつた。

勿論これは物語である。物語ではあるが、こゝまでになると、戦争そのものも軍隊その物が否定される。戦つて勝つ、次には買收して勝つ、次には否定して勝つ、その最後の最も文明的なるものである。

もし呉俊陞将軍にして、イワンの國への侵入軍の司令官たらしめたならば、最も馬鹿げた姿となるであらう。不思議なものである。

勞働組合法案要綱を讀んで

平野義太郎

○

生活事實からますますはなれ、かへつてそのやうに實生活から遊離したイデオロギーたる法律によつて、生活事實を自分ののぞむ鑄型にはめ込み、つくりかへ、はてはそれによつて成長してゆく生命を壓迫し束縛し撲殺せんとすることは、近頃の法律制定者の僞りのない眞面目となつて來ました。それが法律制定者のごまかしのない眞面目だとすれば、今議會に提出されんとする勞働組合法案の如きは、まさに最もその眞面目を發揮するものだといはねばなりますまい。

○

組合の組織を同一又は類似の「職業」に限らうとするのは、鑄型に無理にはめ込まんとすることです。組合の「聯合」を法律上みとめぬことは、現存する聯合を御用組合黄色組合につくりかへんとすることです。組合の重要な事項を必ず會議にかけ、罷業基金の供給を面倒な手續にかけさせんとすることは、組合の鬪爭的職能を束縛することです。この法案のいふ組合に入らぬものを、組合としてはみとめぬことは、現存の組合（例へば合同勞働組合、組合聯合、サラリーメンス・ユニオン）を撲殺することです。

元來、勞働組合は生きた社會的實在ですから、立法者がそれを公認するの、制限するのといふことは問題にならないはづです。立法者はただこの生きた社會的實在をあるがままにみとめ、その必然の成長をば意識し、かう意識することによつて、その進化に一定の進路を附與するよりほかに途のあるはづはないのです。けれど、組合法が社會組織全體のうちにどんな位置を占めるか、いかやうな任務を以て組合法がわれわれの社會のなかに發達を遂げて來、又、將來遂げるだらうかなどといふことを意識せずにゐる點に權力的支配者の特徴が横るものと考へられるとすれば、今次の法案に僞りのない權力的支配者の意圖を曝露してゐます。しかし、もしも、現前の社會的事實を知りながら、みてみぬ振りをするのであれば、そこには、謀策が存することが觀察せられる。

現在、日本の工場鑛山で勞働者の雇入れをするときに、組合員でないことを宣誓させたり、組合の前衞分子を組合員だとの故で解雇したりなどするやうな狀況の下にある場合に、組合員の保護を「强行」しないことは、明かに、法案が組合運動の切りくづしに助勢する謀策である。勞働協約に對して、法律上の保護をあたへぬことにしたことも亦同樣に、組合（殊に小組合）の社會的機能を根本から根こぞきにせんとする謀策であるにちがひありません。

○

法案のどれ一つとして、資本側の猛烈な反對運動によつて、資本側の要求どほりにならなかつたものはないなかに、組合の一切ことごとくを「法人」にしてし

きふ如きは、その最も顯著なものです。組合に對して（殊に罷業にもとづく）損害賠償の責任を問ふことが許されんとするわが裁判所の情勢の下で、資本主がこの經濟的勢力を以て組合をたたき伏せんとすることは、誰がみても必しも遠くない將來の事實です。このときにあたつて、組合を一切ことごとく法人たらしめてしまふことは、この損害賠償の訴求を最も便宜ならしめるものです。だから、法案は著しく資本側のためにはかつて有利です。かうして、組合が經濟的權力で破滅せしめられるやうに仕組まれてゐる法案は、同時に、組合を官憲が取締上必要ある場合にはいつでも解散を命じうるやうにしてあるから、組合は政治的權力によつても破滅せしめられるやうになつてゐる。

これでも、法案は、組合を取締る目的法にちがひありません。が、官僚政治の強い組合がそんなことで屈服するわけにはいかないから、かへつて急進的戰鬪的になつてゆき積樹に富と權力とに戰はんとするとき、わが國に治安維持法が動き出す。この點をはつきり見破る必要があります。

智能心理學 （松本亦太郎著）

現時の智能研究の著しい特色は智能その物及び智能の成果を量的に表示する事に努めつゝある事であらう。智能の量的表示には絶えず反對の存在するに拘はらずその企圖と遂行とはむしろ成功しつゝある今日、本著のなされた事はたゞに著者のみのよろこびではあるまい。年齢の相違に從い容積溫度濕度等の環境的諸條件に從ひ、智的機能の發現が影響するところを明らかにし、また智的作業の繼續遂行から作業そのものが如何に影響せらるゝかを見るこれ等の智能探求の最近の業績と、從來の心理學が概ね不問に付した領域から産まれたものを、該博に例證し論ぜられてある十六編からなる大冊であつて、特にわが國人の生命の消長に關する考察と、東西の心理學界の現状に就ての論文は、智能心理學が現代の心理學中に如何なる地位を占むるかを明かにしてゐる興味あるものである（東京日々）。（菊版、九七三頁、九圓、芝愛宕下町一の一、改造社）

森戸辰男著

思想と闘爭

定價貳圓
送料廿一錢

新刊

思想混亂に脅えつゝ、皮肉にも自ら其の種子を蒔く當局者、國家擁護の大旆を押立てつゝ國家の正體に盲目なる反動團體、彼等近來の愚劣慘忍なる政策と運動に對し、奮然起つて熱烈なる言論に一世を覺醒しつゝある吾が森戸氏の近著である。

【目次】一、震災と「主義者」と反動勢力。二、國粹主義者の政治的殺人。三、大杉榮君の追憶。四、關西に於ける「交通不安」の社會的意義。五、富田碎花君の印象を通じて。六、思想と闘爭。七、治安維持法と社會主義。

森戸辰男著

社會科學研究の自由に關し

青年に訴ふ

（十六版）

定價參拾錢
送料七錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

—發行所—
東京市下谷區
清水町一番地

エルノス

振替東京
七二九一三

（エルノス冊子
申込次第進呈）

エルノスシリーズ

海外文藝の寶玉集にして古代より現代への一大鳥瞰圖たり。

四六判コットン紙
特美上製百數十頁
金八拾錢
送料四錢

ゾラ作

野へ

發賣禁止

椎名其二譯

下旬改版發行三版出來

代表的中篇野へ三部作の他五篇を蒐む。總て彼を窺ひ知るに十二分なるべくその一點の搖ぎなき描寫は悲壯なる物語洪水の一篇に絶すると云はれる。

アルツイバアセフ作

女奴隷

梅田寛譯

中篇二作倶に哀婉のリズム切々として、果敢なげな舊き女と國立大學の講義を夢む新しき女と、弱氣の醫者と親切一圖の女とが流轉の物語、作者が深刻なる解剖と暖き涙！

トロツキー著
勢田洋譯

レーニン回想記

重版出來

四六判コットン紙
箱入二百六十六頁
壹円六拾錢送料八錢

笑へぬ光秀

國枝史郎

(一)

『偉い御方なのでございます。』
年取つた僧は斯う云つた。詠嘆するやうな聲であつた。
『うん、然うか、そんなに偉い人か。もつと詳しく話してくれ。』
見知らぬ武士は斯う云つた。ぼんやりとした聲であつた。
『道を說かれたのでございます。人間の通る可き誠の道を。さうして其爲其御方は、十字架に懸けられたのでございます。』
『十字架？成程、磔刑だな。』
『はい磔刑でございます。』
『あゝ此俺によく似てゐる。』
見知らぬ武士は呻くやうに云つた。何んとなくぼんやりした聲であつた。
『もつと詳しく話してくれ。』
『その御方の名は耶蘇基督、遠い〳〵猶太の國の、昔の話でございます。』
『うん然うか、猶太だな。で、その國はよい國なのか？』
『選らばれた國でございます。諸々の小川には乳が流れ、木々の枝には葡萄が實り、野の草間には蜂蜜が醸され、よい國なのでございます。』
『さうか、まるで極樂のやうだな。どうぞもつと話してくれ。』
『神樣の使命を受けまして、其國へ産れたのでございます。』
『まあ少し待つてくれ。』
見知らぬ武士は手で止めた。『神？そんなものが本當にあるのか？』
『神は實在でございます。父と申してもよろしいので。』
『俺は父とは早く別れた。これが不幸の一歩だつた。うん、そ

れから何うしたのだ？』

『はい、すこやかに耶蘇様は、生ひ立ちましてございます。』

『俺もたつしやに成長したよ。』

『家は豊ではございませんでした。でも清潔でございました。』

『あゝ、そつくりだ、俺の家庭と。』

『商賣は大工でございました。』

『俺の方が少し可い。俺は城主の倅だつた。』

『よい年頃になりました時、洗禮を受けましてございます。』

『まあ待つてくれ、洗禮と云つたな？どういふ意味だ？解らない。』

　矢張り見知らぬ武士の答は、底力が無くてぼんやりしてゐた。放心したやうな聲であつた。

『清められることでございます。神に附くことでございます。』

『あゝ然うか、少し解つた。』

『その頃猶太の荒れた野で、叫んでゐる人がございました。御前達よ悔改めよ。天國は近付けりと。』

『それは誰だ？何んといふ者だ？』

『體に駱駝の毛衣を纏ひ、腰に革の帶を締め、蝗蟲と蜂蜜とで命をつなひだ、洗禮の約翰でございます。』

『偉い人なのかな、その人も？』

『はい左様でございます。偉い人なのでございます。喇叭を吹く人でございました。地ならしをする人でございました。先ぶれをする人でございました。』

『たとへば陳勝呉廣だな。』

　見知らぬ武士は頷いた。だが矢張りぼんやりしてゐた。

『で、それから何うしたのだ？』

『それから耶蘇様は其御方に、洗禮を受けられたのでございます。さうして山へ登られました。最初の說教をなされました。不幸な人は幸福だ、その人は慰を得られるだらう。義を慕ふ人は幸福だ、その人は滿足させられるだらう。同情ある人は幸福だ、その人は同情されるだらう。正義の爲に責られる人は、軈て幸福になるだらう。人がお前の右の頰を打つたら、左の頰をも打たせるがいゝ。人が下着を取らうとしたら、その上着まで呉れてやれ。お前の敵を愛するがいゝ。人前で公然と施しをするな。施しをするならこつそりやれ。人前で大袈裟に御祈をするな。御祈をするならこつそりやれ。……から說かれたのでございます。』

『身に沁みる言葉だ、いゝ說教だ、俺の心へぴつたりと來る。』

　見知らぬ武士は驚いたやうに云つた。

『それから其人はどうなされたな？』

『山をお下りになりました。諸方を遊説なされました。病人を御癒しなされました。』

『では其人は賢者なのか？』

『いゝえ豫言者でございます。』

『病人を癒したといふではないか。』

『それは奇蹟でございます。』

『奇蹟？奇蹟？なんのことだ？』

『それは奇蹟なのでございます。はい、それは奇蹟なので。』

年取つた僧は繰り返した。

『はい奇蹟なのでございます。さういふことが出來ましたので。信仰の力でございます。』

（二）

『もつと詳しく話してくれ。』見知らぬ武士はせがむやうに云つた。

『癩病を御癒しになりました。手を觸れたゞけでございます。』跛者を御立たゝせなさいました。立てと云つたゞけでございます。盲人の眼を開けました。信ぜよと云つたゞけでございます。唖に物を云はせました。祈れと云つたゞけでございます。死人を蘇生させました。復活と云つたゞけでございます。鬼に憑かれた病人から、鬼を追ひ出して了ひました。去れと云つたゞけでございます。』

『どうしてそんなことが出來たのだ？』

『豫言者だからでございます。』

『もつと詳しく話してくれ。』

『舟に御乘りになりました。嵐が吹いて參りました。浪が高く上りました。靜まれと其人が有仰いました。すると靜になりました。』

『では其人は魔法使だな。』

『いゝえ豫言者でございます。』

『もつと詳しく話してくれ。』

『海を踏んで渡りました。』

『溺れなければならない筈だ。』

『七つの麵麭と三尾の魚とで、千人の人を養ひました。』

『何が其人の目的なのだ？』

見知らぬ人は不思議さうに訊いた。

『王になることでございます。』

『では其人は野心家なのか？』

『人界の王ではございません。神國の王なのでございます。』

『そんな國は何處にある？』

『作らうとしたのでございます。はい地上へ神の國を。』
『では其人は義人だと見える。』
『はい預言者でございます。』
『さぞ尊敬されたらうな？』
『棘の冠をかぶせられました。』
『では夫れが王冠か？』
『十字架を肩へ背負はされました。』
『それは何かの褒美なのか？』
『鞭で思ふ態撲られました』
『悪いこともしないのに。』
『さうして殺されて了ひました。』
『何故だ？』
と武士は反問した。
『誰が一體殺したのだ？』
『パリサイ人でございます。』
『それは何ういふ人間だ？』
『國の權力者でございます。』
『言ひ換へると搾取者だな。』
『千前年の物語……』
僧は恰も歌ふやうに云つた。

見知らぬ武士は默然とした。
彼は四邊を見廻はした。
『一體此處は何處なのだ？』
『はい、南蠻寺でございます。』
『何時こんな處へ來たんだらう？』
『先刻おいでゞございます。』
『何んのためにこんな處へ來たんだらう？』
『惱んで居られたやうでございました。苦んで居られたやうでございました。夢中のやうでございました。フラ〳〵と這入つて參られました。』
『俺は今でも惱んで居る。』
『で私は背を折つて、御慰めしたのでございます。』
『さうか、有難う、お前の名は？』
『番僧ヨハンでございます。』
『この國の人間とは見えないが？』
『阿蘭陀の者でございます。』
『さうして此寺の僧なのだな？』
『サビエル長老末座の弟子、南蠻寺の番僧でございます。』
『南蠻寺か、この寺か。』
見知らぬ武士は頭を廻はし、改めて寺内を見廻はした。

天井は高かつた。白堊の壁は淸らかであつた。一所に燈明が燈つてゐた。香爐から烟が昇つてゐた。幡が天井から下つてゐた。畫像が壁にかけられてゐた。

見知らぬ武士は夫れを見た。

裸體の人間が十字架の上で、手足から血汐を流してゐた。もう息絶えてゐるらしい。大變悲しさうな顏であつた。

『ヨハン殿』と武士は云つた。『私の顏に似てゐませうがな？』

年取つた僧は默つてゐた。

もう一つの畫像の前まで行つた。

耶蘇と想はれる人物が、數人の者を相手にして、議論をしてゐる繪であつた。

『これは誰だ？』と武士は訊いた。

『パリサイ人でございます。』

『厭らしくむく〳〵と肥えてゐる。厭らしくテカ〳〵と脂ぎつてゐる。傲慢な唇、慘忍な眼、俺の主人そつくりだ！』

見知らぬ武士は步を移した。

もう一つの畫像の前まで來た。

耶蘇と想はれる人物が、雲の上に昇つてゐた。

『ヨハン殿、この意味は？』

見知らぬ武士は不思議さうに訊いた。

『はい復活でございます。』

『では其人は活き返つたのか？』

『活き返つたのでございます。』

すると見知らぬ武士の顏は、俄に活々と輝いた。

『では復讐したどらうな？』

『は、復讐と有仰いますと？』

『自分を苦しめた憎い奴へ！』

『とんでもないことでございます。』年取つた僧は手を揮つた。『みんなを許したのでございます。』

見知らぬ武士は眼を見張つた。

『では、其人は人間では無い！』

『はい、神の子でございました。』

『では俺とは關係は無い。』見知らぬ武士は冷淡に云つた。『俺は人間を見付けてゐるのだ。虐げられた人間をな。』

『矢張り人間でございました。』

『人間なら復讐する。』

『併し、併し。』

（三）

と年取つた僧は、どう云つてよいか解らなくなつた。
『併し復讐を致しましたら、耶蘇様は無くなつてしまひます。』
『何故な？』
と武士は反問した。
『復讐の鬼として存在するよ。』
『併し。』と僧は云ひ淀んだ。『おゝ貴郎は恐ろしい御方だ！』
『忍従だけを教へるなら、お前の宗教は虚構術だ。』
遠くの方から男女の歌ふ、讚美歌の聲が聞えて來た。

彼は侮られて人に捨てられ
悲みの人にして悩みを知れり

聲はだん〳〵近寄つて來た。
廊下へ尼達が現はれた。頭に白布を冠つてゐた。みんな首を垂れてゐた。恰度重荷でも背負つてるやうに見えた。みんな影を曳いてゐた。廊下の燈火は暗かつた。で尼達が影のやうに見えた。長い廊下を列をなして、よろめくやうに歩いて行つた。
廊下の外れに戸口があつた。塔へ通ふ口らしい。塔の口は暗かつた。一人一人呑まれるやうに、尼達はみんな消えて了つた。
『復讐はいゝ事だ。私には怨を晴らし、公には權力者を斃す！復讐はいゝ事だ。』
見知らぬ武士は背延びをした。突然人間が變つたやうに見えた。
年取つた僧は恐る〳〵訊いた。
『失禮乍ら貴郎様は？』
『俺は丹波の領主だつた者だ。』
僧は俄に背を丸めた。
『では貴郎様は御大名衆で。』
『背を延ばせ！何を恐れる。五十四萬石の主人だつた者だ。』
『それでは若しや貴郎様は、明智の殿様ではございませんか？』
僧は床の上へ跪かうとした。
『しつかりと立て！なんといふ態だ！俺に説教したお前では無いか。俺は如何にも光秀だ。』
僧はブル〳〵顫え出した。
光秀は刺すやうに凝視した。大きな聲で笑はうとした。だが笑ふことは出來なかつた。
ほんの先刻まで光秀自身が、顫えなければならないやうな、追ひ詰められた境地にゐたからであつた。
『だが是が本當かもしれない。』から光秀は考へた。『坊主から見れば此俺は、素晴らしい權力者に見えるだらう。それでこんなに顫えるのだらう。恰も俺が信長の前で、殆ど手も足も出ない

やうに。……俺には坊主がみぢめに見える。それとおんなじに信長の眼には、俺がみぢめに見えるだらう。』――信長に對する憎惡の心が、忽然此時倍加された。

（四）

『殿、お笑ひなさりませ。笑ふのは可いものでございます。時時お笑ひなさりませ。』光秀の重臣安田作兵衛が、斯う或時光秀へ云つた。

『いや、俺は笑へない。』これが光秀の返辭であつた。

羽柴筑前守秀吉が、或時光秀へ忠告した。

『十兵衛々々々どうしたものだ。呆れ返つて物が云へない。人もあらうに右府様へ、青表紙を突き付けたといふではないか。向ふ見ずも大概にしな。道徳嫌いは通り相場、その右府様へ青表紙、度胸にしては天井抜け、馬鹿にしては底無しだ。まづ寐つても見るがいゝ、右府様是迄の行状だが、尾張一國を手にするためには、肉身の御舍弟信行様を、大政所の名で呼んで、池田勝入奴に殺させた。美濃を手中に収めるためには、齋藤道三奴の娘を娶り、唆かして敵方を反間させた。次に江州を奪ふためには、實の御妹の小谷の方を、淺井長政に呉れてやり、油斷をさせて討ち取つた。さて云ふことを聞かないと云つては、延暦寺を燒打に掛け、根來の一黨を鏖殺した。權勢欲の其前には、どんな權威も人情も、認めないといふ遣り口だ。その右府様の御前へ出て、不器用に青表紙を捻り廻はし、人倫五常の道を説く、アッハハハ惡い洒落だなあ。』此處でがさつな笑ひ方をしたが『おい十兵衛、どう思ふな、木下藤吉郎の木下を捨て、羽柴の姓を宣つたのを?』

『さあ。』と光秀は首を傾げた。『俺には解らないなんのためだ。』

『迂濶々々話せねえなあ。』下等の言葉でまくし立てた。『御前を任官させやうと思ふ、だが木下では名が小さい、好みの姓を選ぶがよい、から右府様が仰有つた。そこで早速云つたものさ、御家の重臣柴田様、同く丹羽五郎左衛門様、その御武勇にあやかるため、各の苗字の一字を戴き、羽柴と宣り度う存じますとな。すると大將大喜びだ、御前程の武功者、上見ぬ鷲の振舞ひ有つても、敢て不都合とは思はぬが、其處を謙遜に身をへりくだり、當家譜代の二重臣に、あやかり度いとは可い心掛け、忘れるなよ、その心を。…で早速拜領と來た。尤も勝相撲の力士達へ、燒栗二つを褒美にする、吝嗇で名高い右府様のことだ、拜領させられた品物と來ては、烏帽子の締紐一掛だつたが、首尾の方は上々吉、御前、この呼吸をどう思ふな?』

光秀は返辭をしなかつた。

『よし夫れでは最う一つ、御前へ聞かせることがある。』秀吉は復も喋り出した。『長濱の地領十萬石、こいつを俺が戴いた時、早速言上したものだ。かやうな高祿を戴きましても、不幸、子として育てる者無く、心寂しく存じます。仰ぎ願はくば右府樣の御身內、御次樣なりと頂戴して、永く知行を受け繼がせたく。如何のものにございませうやとな。すると例によつて御滿悅だ。下されたのが秀勝よ。尤も此奴馬鹿だがな。』ヘラ〳〵秀吉は笑つたものである『十兵衞、この呼吸をどう思ふな？』

　すると光秀は咎めるやうに云つた。

『まづ訊き度いことがある。御前は丹羽や柴田より、自分の方が劣つてゐると、から本當に思ふのか？』

『ふん。』と秀吉はせゝら笑つた。『織田家々中で手强い奴は、おい十兵衞、御前だけだぞ。』

『藤吉、俺も御前だけだ。』光秀は形を改めた。

『では何故丹羽や柴田奴を、右府樣御前で持ち上げたのだ。』

『右府樣が夫れを好むからよ。疑猜深い右府樣は、何より下克上を恐れて居られる。』

『では少し突つ込んで云ふ。御前の遣り口は諂ひだ。蘭丸の遣り口と差別がない。藤吉郎程の偉者が、諂ひをするとは何事だ。』

『馬鹿だなあ。』と秀吉は云つた。『だからよ、御前は當世でねえ。諂ふものか、利用してゐるのよ。』

『愈々蘭丸奴とおんなじだ。過ぐる日紀州から土豪共が、蜜柑を山と盛つて獻上した。蘭丸奴が其奴を次の間へ運んだ。と右府樣が仰せられた。蘭丸あぶない轉ぶぞよと。聲の下から蘭丸奴、足を辷らせて顚倒した。さうして御前を蜜柑だらけにした。まづ夫れは可いとして、後での蘭丸の云ひ草が惡い。右府樣が轉ぶと仰せられた、その御心に適はせやうため、故意で轉んで見せたのだとな。』

『偉い。』と秀吉は手を拍つた。『さすがは蘭丸、味をやりをる。』

　光秀は憮然として眼を垂れた。

『十兵衞。』と秀吉は肩を叩いた。『御前は學者だ、人格者だ、一が少し淸すぎる、さうしてひどく一本調子だ。氣を附けろよ、危險だぞ。だが少し變だなあ。滄浪の水淸まば、以て吾纓を濯ふ可く、滄浪の水濁らば、以て吾足を濯ふ可し、御前の好きな漁夫の辭だが、何故この呼吸でやらないのだ。』

『いや。』と光秀は冷靜に云つた。『俺の好きなは其處では無い。世を擧げて皆濁り我獨淸む、衆人皆醉い我獨醒む、俺の好きなは此處なのだ。』

『御前の望む境地はえ？』

『君子にして豪傑なるもの。』

『君子だけが餘計だなあ。』秀吉は素晴らしく哄笑した。

『藤吉、御前の處世はえ？』今度は光秀が反問した。

『俺か、俺は機會主義だ。』

『人生最も下劣なるものよ。』

『だが間違い無く成功するものよ。』烏帽子を背後へ退け反らせ、秀吉は再度哄笑した。

（五）

明智日向守光秀が、笑へなくなつたには理由がある。餘りに慘苦の生活をした。これが理由の一つであつた。光秀は本來土岐氏であつた。土岐は源氏の名門で、そこへ産れた光秀は、優遇されなければならないのに、土岐家が齋藤家に滅されて以來、家臣の筋目のその齋藤家に、臣事しなければならなかつた。だがまだ此頃は可い方で、眞に慘苦の生活をし、人生の悲哀を知つたのは、その齋藤家に内訌が起り、彼の囑してゐた道三方が、義龍方に打ち破られ、昨日迄は御曹司、それが住む可き家も無い、無祿の浪人となつたからであつた。母の某、妻の妻木氏、甥の光春、同く光忠、肉親四人を引き連れて、とりあへず越前稱念寺へ、食客として身を寄せてからの、轗軻不遇の生活は、漫に荒涼たるものであつた。彼は先づ仕を求めやうとして、東北地方を漫遊した。後世光秀の武者修行と稱して、詩的な解釋を下してゐるが、これは、贔負の引き仆しで、そんな暢氣な旅では無かつた。可き主人の有れよかし、いやいやどんな主人でも可い、只食を得さしめよ、かういふ可哀さうな心を抱いて、城下々々を彷徨つたのであつた。仕官は愚か諸大名は、引見しやうとさへしなかつた。越後の長尾輝虎は、不在と稱して會はなかつた。會津の蘆名盛高は、浪人無用と退けた。伊達兵部輝宗は、合戰最中で夫れ所ではなかつた。宮城野を過ぎ平泉へ出、王の關を經て盛岡へ現はれ、南部左衛門尉を訪れたが、みすぼらしい光秀の姿を見ると、扇で鼻を蔽うたさうである。路を轉じて勿來を越し、佐竹右大夫義照を、常陸の城に訪問した。無用の一言で斷はられた。結城七郎右衛門、下總酒々井の千葉ノ介親胤、安房の里見右馬之助、いづれも會ふことが出來なかつた。武藏野を過ぎ、小田原に入り、北條氏康に仕へやうとした。惜しい武士だが頬骨が高い、かう云つて氏康は一蹴した。武田信玄を訪ねやうと、甲斐の國へ這入つて行つた。見所ある武士には相違無いが、叛の色が顯すぎる。信玄はかう云つて斷はつた。

この時一つの逸話がある。絶望をした光秀は、惠林寺といふ寺の前で、茫然として立つてゐた。巨大な僧が現はれた。僧は鐵如意を振り廻つた。さうして突然一喝した。

『正當恁麼の時如何。』

光秀は即座に從容として云つた。『紅爐上一點雪。』

『善哉。』と僧は微笑した。『あなたは大變悲しさうだ。笑ひを封じられてゐるやうだ。さうして大變隱忍に見える。私はあなたに殺されさうだ。』そのまゝ僧は行き過ぎた。有名な快川和尚であつた。和尚の豫言は的中した。信長が勝頼を滅して、甲府城下へ還入つた時、惠林寺の伽藍へ火を放した。それをしたのは光秀であつた。快川和尚は焚死した。『安禪必ずしも山水を願ず、心頭を滅却すれば火も自ら涼し』これが最後の偈であつた。

全く光秀は此時分から、笑ふことの出來ない性質となつた。旅をしなければならなかつた。仕を求めねばならなかつた。富士川を下つて駿河へ出、今川義元を訪れた。だが懇請は入れられなかつた。江州觀音寺の佐々木義賢、京に還入つて義輝將軍、旗下の三好松永の徒も、彼を抱へやうとはしなかつた。かうして彼は據る所も無く、三年目に稱念寺へ歸つて來た。『俺は疲勞れた。眠らせてくれ。』これが家族への挨拶であつた。

仕官しなければ食へなかつた。今度は妻の妻木氏を連れ、西南へ向かつて發足した。困苦そのものゝやうな旅であつた。妻木氏が黑髮を切り、饗應の費にあてたのも、僞ならぬ事實であつた。和泉堺の三好義永、播磨三木の別所友治、備前岡山の宇喜多直家、美作高田の三浦元兼、出雲富田の尼子晴久、安藝廣島の毛利隆元、殆ど軒別に尋ね廻り、いくらかの知行にあり付かうとした。思ふやうにはならなかつた。光秀は次第に憔悴した。三十未滿の若盛、それで鬢には白髮が見えた若白髮といふやうなものでは無く、衰へから來た白髮であつた。夫妻は九州へ渡つて行つた。豐後府内の大友義鎭、肥前龍造寺の龍造寺隆信、肥後宇土の菊地義武、薩摩の島津修理太夫、またも軒別に訪れた。多くは會ふことさへ出來なかつた。四國へ還入つて長曾我部、矢張り相手にされなかつた。四季が三度推移した。雁風呂に故郷を想ふ頃、ふたゝび安藝へ還入つて行つた。毛利の重臣桂能登守が、元就へ推薦しやうとした。しかし元就はかう云つた。『彼の頭骨は突き出てゐる。叛心あるものと思はれる。』で、立ち去らなければならなかつた。

九州の名族角隈石宗、僅にこの人に認められ、築城術と鐵砲術、二つの奧義を讓られたのを、乏しい唯一の土産として、越前へ歸らなければならなかつた。三十一歲の年であつた。

（六）

惠まれない芽ではあつたけれど、彼にも芽の吹く時が來た。越前の朝倉義景が、兎も角も登用したのであつた。それとて大將の器として、決して登用したのでは無く、砲術に達した武人として、雇ひ入れたに過ぎなかつた。
『砲術の妙技、見せてくれ。』或日義景は斯う云つた。
『かしこまりましてございます。』
二十五間の射垜に向かひ、一百發の彈を打つた。星入の數六十八、殘る三十二は角を擦つた。空彈に至つては一發も無かつた。
『ところで城を築くとして、當國では何處が可からうな？』或日義景は斯う云て訊いた。
『平城ならば北庄、山城ならば長泉寺、然る可きかと存じます。』これが光秀の答であつた。
『うん然うか。で、加賀では？』
『小松寺かと存じます。』
『うん然うか。上方では？』
『京師迄には是と申して、然る可き土地も見當りませぬ。攝津では大阪の本願寺こそ、絶好の地勢かと存ぜられます。』
すると義景はゲタ〱笑ひ、揶揄するやうに斯う云つた。『長泉寺、小松寺、本願寺、よく寺ばかり數へたものだな。』
『これは賴む可き大將で無い。』義景を疎む心持が、光秀の心に動いたのは、この一言があつたからであつた。
彼の心は樂まなかつた。去る可き機會を待つてゐた。その時誘ひの手紙が來た。織田上總介信長の使者が、秘密に持つて來たのであつた。仕官せよといふ手紙であつた。
五荷の菊酒、二十卷の鮭、三十帖の彩結、千枚の雲紙、一個の硯箱、他五十點、これを祝儀の品として、彼は信長に仕へることになつた。
はじめて蛟龍は池中を出た。雲を卷き昇天しなければならない。
彼は續々獻策した。
『淺井を討つにはどうしたら可いか？』かう信長に訊かれた時、光秀は即座にかう答へた。『先づ虎御前山へ附城を築き、智刃の兵を多く籠め、日々に攻擊遊ばすのが、最初の手段かと存ぜられます。その上にて大擧擧擊し、もし朝倉勢淺井に味方し、小谷へ後詰め致すやうなら、輕く引揚げて兵を休め、朝倉勢の引取るを待つて、再度擧擊遊ばすやう。朝倉の居城一乘より、淺井の居城小谷までは、險路三十里もございませうか、疲

勞多からうかと存ぜられます。然るに岐阜より小谷迄は、平坦一日路にございます。人馬共に疲勞少く、何より好都合にございます。朝倉勢來れば兵を納め、朝倉勢去れば取詰める、これを根氣よく繰り返しましたら、敵方悉く疲勞致し、枝城降伏致すこと、火を見るより明でございます。其後よき圖を見計らい、急にとり挫ぎ遊ばしたなら、勝利疑無しと存ぜられます。』

洵に理詰めの兵法であつた。

『河内若江の三好修理太夫、將軍義輝公を弑した人物、これを取つて押へやうと思ふ。考へは無いか、可い考へは？』から信長に訊かれた時、復も光秀は即座に答へた。『往年河内の守護職たる、畠山右衛門佐義英が子息、次郎左衛門英就は、舊領を三好に押領せられ、詮方なくて國を去り、邊鄙に隱居まかり居ります。これを御取立て遊ばしたなら、彼の國の侍共、歸服致すことゝ存ぜられます。私事先年遊歷の際、攝津國住吉の社家、松本右京亮國守が宅にて、その畠山次郎左衛門の一族、畠山四郎兵衛就英と、懇親を結びましてございます、今回御當家に仕官致し、高祿を頂戴致しましたに就いては、その四郎兵衛を家に呼び、客分と致しましてございます。何卒御利用下さいますやう。』

洵に理詰めの兵法であつた。

信長は早速是を用ひた。さうして兩家とも征服した。

『安土に大城を築かうと思ふ。何か面白い考へは無いか？』かう信長に訊かれた時にも、光秀は即座に意見を述べた。『天下を知召す大城として、五常五行の面に則り、五重の天主を設けましたら、よろしからうかと存ぜられます。』

角隈越前石宗に由つて、奧義を極はめた築城術を、此處で應用したのであつた。

『よし。』と信長は喜んだ。さうして五重の天主を作つた。日本の天主の濫觴であつた。

『甲斐の武田を滅すには、どんな手段がよからうな？』から信長に訊かれた時にも、光秀は、言下に意見を述べた。『馬場、山縣、高坂、眞田、甲州には智勇の武士多く、尋常の手段を用ひましては、打勝ちがたく存ぜられます。鐵砲の兵制を設けられ、飛道具を以て擊ちすくめましたら、勝利を得ること出來ませうか。』

『成程。』と信長は頷いた。『鐵砲兵制御前に任せる。骨を折つてやつてくれ。』

『かしこまりましてございます。』

此處でも角隈石宗讓りの、鐵砲術を應用した。精銳の砲兵を編制し、長篠の役に是を用ひ、甲州勢を退けた。

(七)

献策は全部用ひられた。光秀はめき〳〵と登用された。非常な大身に成り上つて了つた。感激せざるを得なかつた。信長公の御爲ならどんな苦勞も辭す所で無い。かう彼は決心した。嬉しくて嬉しくてならなかつた。彼は無宙で忠を盡くした。彼は信長に嘱せられてゐた。彼は目茶々々に戰場へ出た。さうしてウンと働いた。鎌城に榊原準守を攻め、高岡城に山路岡安を攻め、池田城に池田勝政を攻め、みんな素晴らしく大勝した。和爾城に和爾氏條を攻め、功を以て滋賀郡十萬石を得、坂本へ城を築いた時には、有頂天にならざるを得なかつた。彼は尚も奮戰した。木戸城、田中城を落城させた。さうして兩城を賜はつた。天正二年三月十日、日向守に任ぜられ、さうして從一位下に叙せられた。さうして丹波に封ぜられ、五十四萬石を食むことになつた。

この頃から彼と信長とは、軋轢せざるを得なくなつた。多くは性格の相違からであつた。

光秀は一面詩人であつた。坂本へ城を築いた時『波間よりかさねあげてや矣の峯磯山づたいしげる杉村』その模樣を吟詠し、唐崎に松を植えた時にも『我ならで誰かは植えむ一つ松こころし

て吹け淡雪の浦風』哀調ある歌を披瀝した。『順逆無二門、大道徹心源、五十五年夢、覺來歸一元』辭世の此詩も惡くは無い。『師鳥須飼鸞與鳳、扁舟撑起上蓬臺、漫道休向外尋去、滿溪作レ堆豈勿論』上手な詩では無いが、應仁以降海内亂れ、文教の擧泥土に委し、僅に五山の僧徒によつて、保たれてゐた戰國時代に、これだけの物を作り得る者はさう澤山には無い筈であつた。嵯峨天龍寺に流寓し、彼は禪をさへ研究した。彼は相當の學者でもあつた。

然るに一方信長は、天才的武人ではあつたけれど、さういふ方面には門外漢であつた。ソリの合ふ可き道理が無かつた。なまじ學問をした爲に、物の道理がよく解り、殺伐な事や無慈悲な事が、どうにも光秀には出來なかつた。例へば細川一益と共に、北伊勢攻略に向かつた時も、一益の意見を退けて、禪僧の隆恵和尚を以て、中上、木股、持福の諸豪を、談笑の裡に歸順させた。また有名な八上城事件では、波多野兄弟を歸順させる爲には、實の母をさへ人質として、兄弟を安土へ參候させた。それを信長が約に背き、兄弟に詰腹を切らせた爲、光秀の母は波多野の將士に、逆磔刑に處せられた。

一方信長に至つては、慘忍嗜殺の極はまつたもので、自分の勢力を張るためには、どんな犧牲をも惜まなかつた。寧ろ慘酷

な手段を執つて、世人の心腑を寒からしめ、以て自分を畏怖せしめやうとした。

で、光秀の謹口の如きは、信長の眼から見る時は、似而非仁義の甚しいので、歯搔く思はざる得をなかつた。

信長の顔色は薄紅く、その脣は桃色であつた。光秀の顔色は蒼白く、その脣は薄紫色であつた。信長の指は細く長く、爪は短く嚙み切られてゐた。光秀の指は太く短く、爪は長く延ばされてゐた。信長は萬事に不作法であつた。光秀は慇懃叮嚀であつた。信長は功利的の意味を以て、有能の士を使用した。光秀は情誼にほだされて、手頼つて來る武士を扶養した。信長は陽氣で短氣であつた。光秀は深沈で悠暢であつた。

こんなにも二人は異つてゐた。

光秀はふだん厳めしく構へた。それが信長を煙たがらせた。漸時信長は光秀に對し、無禮の振舞をするやうになつた。それを案じたのが秀吉で、漸時光秀へ注意した。

『右府様の執念は恐ろしい。此奴と一度睨んだが最後、安穏で置いた例が無い。水野信元、林通勝、荒木村重、佐久間信盛、一人殘らず斃されて了つた。岡崎三郎秀康さへ、遁れることが出來なかつた。つまり右府様はむごひ人なのだ。俺達が命を的にして、苦戰して取つた大國の、ほんの一部を呉れて置いて、何機會を目付けては、夫れをさへ奪はうとなさるのだ。忠義も糞もいゝ加減にしろよ。仁義道徳は蔵つて置くがいゝ。とまれ御前は睨まれてゐる。注意をしなよ。酷い目に會ふぞ。』

月日が經つに從つて、光秀虐めの信長の手は、次第に苛察になつて行つた。丹波の大領五十四萬石、五十歳を過ごした光秀を、信長は衆人環視の前で、馬乘りにして撲つたりした。見兼ねて復も秀吉が云つた。

『馬鹿奴、十兵衛、なんといふ態だ。氣が利かねえつたら有りやあしない。笑ふがいゝんだ、あんな時にはな。それを御前は歯を食ひしばり、蒼い顏をしてこらえてゐる。ふだん生眞面目に威嚴を作り、玄關を張つてゐるだけに、あゝなつては一層悲慘だ。一重に搦んでみぢめに見える。笑ふがいゝのだ、あんな時にはな。御前ばかりの爲ぢやあねえ。見てゐる俺達から助かるんだ。第一右府様が大助かりだ。御前が笑つた其瞬間、右府様の心はひらくだらう。さうなつたら冗談に紛らせ、いよう光秀濟まなかつた、などゝ有仰らないものでもない。ところが御前は笑はない。眞蒼になつて控へてゐる。右府様にしても引つ込みがつかない。短氣が本當の怒になり、右府様の方でも眞蒼になり、打つて打つて打ち据えるといふものだ。俺は見てゐて、淒くなつた。此奴あ今におつぱじまるぞ、何んだか知らねえが恐

ろしいことが、ゾッとして俺は斯う思つたものだ。不可ねえく笑つてくれ。だが笑ふにも細工がいる。ワッハハハといふやうな、豪傑笑は禁物だ。それ、こんなやうに笑ふのだ。い丶か唇を引つ張つてよ、うん、左右へ引つ張るんだ、それから顋を突き出すのだ、齒の先から聲を出す、ヘラ、ヘラ、ヘラ、ヘラと斯う笑ふのだ。稽古だ稽古だ稽古するがい丶。なにも活きる爲の方便だ。恥かしいのも洒落てらあ。ヘラ、ヘラ、ヘラ、ヘラ、ヘラと斯う笑ふのよ。』

だが光秀には笑へなかつた。

（八）

忍べるだけ光秀は忍んだのであつた。彼は信長を徳としてゐた。寧ろ信長を愛してゐた。さうして隨分敬つてもゐた。食ふにも困つた浪人から、五十四萬石の大大名に、取り立て丶くれた鴻恩は、容易に忘却出來なかつた。

忍べるだけ光秀は忍んだのであつた。

しかし、どうしても忍べないやうな、恐ろしい、迫害が落ちか丶つて來た。つづいて二つまで落ちか丶つて來た。

それは天正十年の夏、梅雨月のことであつたが、饗應役を命ぜられた。徳川家康と穴山梅雪、二人をもてなせといふのであつた。光秀は喜んで準備をした。大寶坊を客館とし、珍器珍玩を京師から取り寄せ、山海の珍味を用意した。そこへ突然這入つて來たのが、鷹狩歸りの信長で、『魚鳥の腐ひ臭がする。』かう云つて器具を蹂躙した。光秀はすつかり恐縮し、新に器具を調へた。復も信長は難題を出した。

『俺は今や三臺を踏み、一天四海を掌握してゐる。天下の群牧は俺の旗下だ。家康梅雪みな家臣だ。二人の饗應厚きに過ぎる。後日此俺を饗應するに、どんな設けをしやうとするのか。』光春、光忠、光近の衆を、勝手に家康にひきあはせたといふが、臣下の禮を執るものだ。貴様は家康の家來なのか。誰かある、打ち据えろ！』

蘭丸が鐵扇で打擲した。額が破れて血が流れた。

『これもどうも仕方が無い。』かう光秀は諦めやうとした。信長の使者がやつて來た。

『饗應の役は餘人に命ずる。御前は急いで兵を督し、中國さして出陣しろ。さうして秀吉の指揮の下に、毛利の軍と戰ふがい丶。』

かういふ信長の命であつた。

『どうもこれも仕方が無い。』かう諦めた光秀は、まづ坂本の城へ入り、更に本城龜山へ入つた。さうして出陣の用意をした。

またも信長の使者が來た。

『丹波近江五十四萬石、これは取り上げることにする。その代り毛利と戰つて、切り取つた土地は與れてやる。』これが使者の口上であつた。

光秀は茫然自失した。

家來達は切齒した。

「これは搾取だ!」と光秀は思つた。「藤吉郎の言葉を思ひ出す。つまり右府樣はむごい人なのだ。俺達が命を的にして、苦戰して取つた大國の、ほんの一部を與れて置いて、倘機會を日付けては、夫れをさへ奪はうとなさるのだ。この言葉を思ひ出す。獅子の分け前をさへ奪はうとする! 搾取以上の惡戾だ!」

『謀反! 謀反! 謀反なさいませ!』

家來達は絶叫した。

『しかも豫め計つたことだ。俺は本年五十七歳、武士としては下り坂だ。そこを目掛けてやつて來たことだ! 働ける間だけ香餌を以て、思ふ存分働かせ、搾れるだけ搾り取り、もう駄目だと見きはめを付けるや、牙を返して嚙み付いて來る。さうして何も彼も取り上げて了ふ! これが彼奴の遣り口だ。そいつが今や遣つて來たのだ!』

光秀はフラリと城を出た。

どこをどんなやうに歩いたものか、自分で自分に解らなかつた。

這入つた所が南蠻寺であつた。

其處で彼は耶蘇を知つた。

『耶蘇の忍從は俺には出來ない。それは彼奴を太らせるだけだ。耶蘇の復讐なら俺にも出來る。それは世の中の虐げられた者が、虐げた者への反逆だ。』

彼は自分へ云ひ聞かせた。

『斷じて彼奴をのさばらせるな! いや〳〵これは理屈では無い。……俺は一度だけ哄笑したい。思ふ存分笑つて見たい! 彼奴の首を取つた時、俺は笑ふことが出來るだらう。』

急に龜山へ歸つて來た。

すでに準備は出來てゐた。四千五百の大軍は、龜山の城を發足した。水色桔梗の大旗が、五月雨の空へ揚げられた。紺糸威の大鎧、鍬形打つたる星兜、光秀は駿馬に跨つてゐた。上下の齒をかち合はせた。それがガチ〳〵音を立てた。桂川を押し渡つた。その時光秀が鞭を上げた。

『進れ、京都へ、本能寺へ!』

全軍悉く聲を呑んだ。馬さへ嘶かうとはしなかつた。突然嵐

が吹いて來た。雨が斜になぐられた。旗がグルグルと渦を卷いた。

ガチガチと齒が鳴つた。何時迄も何時迄も鳴り止まなかつた。光秀の鳴らす齒であつた。」

×

秀吉は高松を攻めてゐた。そこで本能寺の兇變を聞いた。『ワーッ』と云つて飛び上つた。

『遂々やつたな十兵衞奴！屹度やるだらうと思つてゐた。彼奴が若しもやらなかつたら、俺がやつたに相違無い。もしも俺がやらなかつたら、柴田か仁羽か前田かゞ、さうだ誰かがやつたらう。だが若し誰もやらなかつたら、みんな右府樣に殺されたらう。ワーッ、素敵だ十兵衞奴、遂々邪魔者を殺しやあがつた。芽出度い芽出度い御芽出度い！だが待て待てはしやいぢやお不可ねえ。空涙を流す時だ。おゝ悲しいおゝ悲しい。大事な右府樣が無くなられた。かう云つて泣く眞似をする時だ。さうしてウンと正義がる時だ。逆賊を討て！弔合戰！なあアんてウンと正義がる時だ。さうして將士の士氣をそゝり、天下の同情を集める時だ。だが何うにも愉快だなあ。ヒョイヒョイ體が飛び上つてならねえ。おやガチガチ齒が鳴るぞ。嬉しくてガチガチ鳴りやあがる。ワーッ、遂々來やがつた。機會々々好機會が―俺と光秀との一騎討だ！勝つた方が天下を取る。だが畜生光秀奴、あいつ隨分强いからなあ。いや大丈夫だ味方がある。正義の戰つていふ奴よ。ワッハハハ俺の物だあ。六十餘州は俺の物だあ。所で……』と秀吉は考へ込んだ。『あの陰氣な十兵衞も、今度こそ口を開ひて笑つたらうなあ。』

天下分目の戰たる、山崎の合戰の行はれたのは、それから數日の後であつた。（終）

鐵窓秘錄

—ハワイの囚人生活—

堤 隆

一

此處はアメリカ合衆國領ハワイの縣監獄、私はこの獄舍に四年以上十年の刑期を過さなければならない一囚人である。

玆にハワイといふのは日本から三千浬米國から二千浬の海上、亞濠米三大陸の中點に位置する太平洋上の一群島で、前世紀末までは洋上唯一の獨立國であつたが、在留白人の內亂に乘ぜられて遂に米國の一屬領となり、今では米國太平洋防備の前哨地として軍港・飛行機・無線電信・駐屯軍など世界に誇るべき一大要塞地である。人口は全島（四大島五小島）を通算して約三十萬、內日本人約十二萬人（在米邦人の半數）比島人・布哇土人及土人系混血種各四萬內外、支那人・葡萄牙人各二萬五千、米・英・獨・露等北歐系白人約三萬四千を算するも之の中約二萬人は駐屯軍人なるが故に土着白人は一萬數千を越えず、其他は西班牙人・ポートリカン・黑人・アメリカインデアン等世界各地の人種並にこの混血兒を集めて「人種の坩堝（メルチングポット）」と稱するも實は「世界人種展覽會」の觀がある。面積は全島を併せて我が四國と匹敵すべく産業は砂糖の約七十萬噸（臺灣の約二倍）に次で鳳梨罐詰の五千二百萬箱を主とし、珈琲熱帶産果實・木材を加へて年額一億弗以上の輸出額に達する。

二

布哇の砂糖？　砂糖の布哇？　熱帶地とは言へ氣溫は常に八十度內外で四時暑からず寒からぬ常夏の國に最も早くから開けた砂糖の栽培は今や全島沿岸の肥沃地を掩ふて耕地會社の數五十有四、製糖工場三十八、就業勞働者約四萬二千家族、土地・人

口・納稅額何れの方面より見るも全島の三分の二以上を占むる點に於て砂糖王國の稱決して誇大ではない。

更に布哇に於て注目すべきは、砂糖といはず鳳梨といはず殆んど凡ての產業に於てその資本が大部分米人に屬し、勞力の全部が日比人を中心とする東洋人系有色人種によつて提供せられつゝある一事である。現に砂糖耕地に於ても米人（英獨を含む）一千二百人に對して日本人一萬三千五百人、比島人二萬一千人、支那朝鮮人併せて二千五百、葡萄牙人二千、其他は西班牙人・ポートリカン・布哇人を合せて二千足らずの實數を示してゐる。從つて若し勞働爭議等の起る場合は常に國家的權力を專有せる白人資本家に對して全然政治的能力なき日比人勞働者が唯人口的優越を背景として對峙するの止むなき狀態である。

資本主義時代に於ける資本家の勢力が能く國務を左右する事は別に不思議ではないが、布哇の如く極めて少數の白人資本家によつて政治・宗敎・敎育・產業・經濟・言論・社會の凡てが直接支配される所も稀だらう。布哇の砂糖會社はその所屬耕地內に勞働者の住宅は勿論耕地直營の商店、直屬の寺院敎會堂までも建設し、納稅は耕地事務所で取扱ひ、警察事務は耕地巡査が處理し、牧師開敎師にして給料を受くるあり、中には通譯兼務として帝と神とに兼ね仕へる者も少くはない。而して斯くの如きは未開の產業地としては當然の事だらう。玆に驚くべきは斯かる砂糖會社の殆んど全部が布哇耕主組合と稱する一大資本組合を組織し、糖業の革新・製產品の賣捌き・勞働者の移入は勿論、基本勞銀の協定・新米勞働者の配屬・勞働爭議の處理まで細大洩さず之を行ひ、而も法律上何等責任なき無個結社として終始している一事である。誠に布哇耕主組合は全布哇の專制君主である。彼はその爲さんと欲する凡てを成す事が出來る。嘗て彼を批評した大學敎授は逐はれ、彼を批議した新聞は潰され、彼と容れなかつた牧師は失脚し、現に全米共和黨は十萬弗の獻金に彼を愛撫し、布哇縣會は支那苦力輸入法・外字新聞取締法・反復業防止法・產業革命法等を制定して百方彼を擁護し、全島の英字新聞は彼を謳歌し、布哇大學委員・布哇傳道組合委員・商業會議所委員は勿論敎育・衞生・監獄・慈善等凡ゆる事業は耕主組合關係者を幹部としてその意に雒れ從うてゐる。

三

斯く政權・資本・社會の絕對權力下に移民・有色人・無產者の悲痛を身にしめて孜々と働く東洋人勞働者の生活は、日本內地に於て想像されるやうな所謂「金のなる木の米國」とは違ひ實に悲慘なものである。成程現在の耕地社宅はホノルル市中に

於て二十五弗の屋賃を拂ふ家屋に優るとも劣らないから、水道・醫療・薪炭の給與は勞働者生活の安定を確保するものだらう而し今も尚熱帶の炎天に一日十時間の就働を敢てして僅かに一弗の勞銀を給せられる彼等の生活が安泰だらうか。更にこの一日一弗(ダラーデイ)の勞銀を得るまでに如何に慘憺たる勞資爭議を餘儀なくされたか、月給三弗の官約移民時代、オイルとギヤソリンを間違へて頭から揮發油をぶつかけられ、生き乍ら燒き殺された昔は暫く措き、西暦千九百十年迄は一日十時間一ケ月二十六日就働の男子給料月額十八弗、女子はその四分の三であつた。當時の耕地勞力は殆んど全部が日本人であつたが、この薄給に對して始めて組織的增給運動を起し、耕主組合に容れられずして大規模のストライキとなり悪戰苦鬪の末遂に幹部の凡てを牢獄に繋いだ後、漸く男子二十弗女子十五弗の基本賃銀制度と物價に準ずる遞進獎勵金(スライディングスケールボーナスシステム)制度の實施を贏ち得たが、この大戰によつて前途を慮るに敏なる耕主組合は一面小作制度請負制度を奬勵すると共に他面勞力の人種的分割を計劃し、極力比島人勞働者を移入して「再び罷業なし」と豪語しつゝ十年の久しき間一度の增給をも試みなかつた。

故に一九一九年の末、戰後の物價騰貴に生活に脅かされた勞働者は增給要求の止むなきに立ち至り、先づ比島人勞働協會起ち、次で日本人勞働組合の組織成り、相率ひて日給一弗二十五仙を基準として勞働條件の改正を要求したが、前後三回事理を盡した文書の提議は無下に却けられ、幾多調停者の努力も顧みられず、最後に勞資代表者の會談迄も「共用なし」と辱められて七十日の交渉も施すに術なく、遂に一九二〇年（大正九年）二月一日オハフー島六大耕地の日比人勞働者九千餘人は布哇耕主組合に對してストライキを斷行し、他の三島勞働者約三萬は共同責任を宣して罷業費用の分擔を決議した。

斯くてこの罷業は前後半歳、一百五拾餘日の久しきに亘り、資本家側の損害は優に五千萬弗を越え、勞働者側も受くべかりし總收入を通算すれば一千萬弗以上の犧牲を拂ひ、直接罷業費のみにても六十五萬餘弗を支出して同年七月一日布哇耕主組合長ジョン・ワーターハウス氏と勞働代表者との間に理解ある協定を遂げ、中途復業者僅かに百四十名と死亡者五拾餘名を除いた八千餘名の勞働者は家族を併せて一萬三千餘名が堂々と復耕してこの大運動の局を結んだ。勿論この間には比島人勞働協會の脱退あり、[illegible]の[illegible]あり、加ふるに一萬數千の全罷業者は住みなれた耕地を追ひ出されて住むに家なき悲慘もあつたが、日比人勞働者の融和提携と在留邦人を始め全勞働階級の熱烈なる援助は就働勞働者の責任感と相俟つて能く大局を

維持し、名實伴へる合法的罷業の實蹟を擧げ得た事は獨り在布勞働者の滿足のみならず聊か全勞働階級の誇とするに足らう。更に復耕に際して罷業勞働者の凡てに一ケ月分の食糧を携帶せしめ、次で一人二十五弗宛の慰勞金を送り、爭議犠牲の解雇者には、能く半ケ年間の生活を保證して尙布哇勞働聯盟會本部に三萬餘弗、各地方組合に多きは一萬餘弗少きも二三千弗の基金を殘してその長期罷業を終結した事は、何人の如何なる批議の前にも本運動の實際を物語る最上の雄辯でなからうか。

抑布哇耕主組合は組合長ワーターハウス氏の議を容れて同年末の年會に給料月額三十弗制を定め、獎勵金制度を整理して比較的糖價下落の際に於ける勞働者の收入を增加するにつとめ、各耕地會社は競ふて住宅を改築し、倶樂部を設け、運動場を設備し、浴場に、病院に、今は昔の面影も止めない程の改良を加へ、勞働者の待遇も變へ、監督、婦人監督の横暴も影をひそめ、比較的居心地のよい耕地村となつた事は爭はれぬ事實である。而して賢明なる資本家、絕對勢力を誇つた布哇耕主組合が如何で此の儘に默止しよう、彼等は勞働者を優遇する事が直ちにこの能率を上げる所以であるを熟知すると同時に勞働組合の發達が資本主義專制の障碍である事を知悉しているのみならず、如何程獎勵金制度を强辯しても月三十弗一日一弗十五仙の勞銀が世界の何れに比較しても高くない事が直ちに第二次第三次のより組織的な大同盟罷業の因となるべきを明察して、先づ勞働組合の破壞に全力を注ぎ、更に布哇縣會をして外字新聞取締法案、反復業防止法案、產業革命法案を通過せしめ、進んで勞働界に徹底的混亂を來すべく支那苦力六萬人の輸入を企て緊急勞働法案の名によりて一擧布哇の兩院を通過し、縣の必須動議としてこれを聯邦議會に提出した。

四

米國は廣い、大陸の米人にはハワイといふ所が米領である事さへ知らない者が澤山あるから、堂々たる大商會から知事宛に來る紹介文の封筒に「南洋ボリネシヤ布哇米國總領事殿」と宛名してあるのも珍らしくない位だ、斯ゝる米本國に乘込んだ緊急勞働委員の一行は、布哇でこそ大耕主組合の重役であり、知事閣下であり、議員樣であるが實は何れを見ても田舍育ち、太い金鎖りと天日に焦げた砂糖成金面、これが米國の憲法を動かして支那苦力の輸入などとは一寸受取られなかつたのも無理はない。茲に一同額を集めて「何か本國議會をアツと言はせる題目がな」と案じた結果「これなら大當り」と膝を打つたのが例の排日宣傳「布哇は日本人に占領されんとす」と冒頭して「や

れ白人教會に比して日本人寺院が何ケ寺多いの」「それ漁業と風呂屋は日本人が獨占した」「いや白人商店一に對して日本人商店六の割合だ」など、ある事無い事取り交ぜて大袈裟に演じ上げたので喜んだのは沿岸加州あたりの排日の議員、恰も自分の政見に裏書されたかの如くに喋ぎ出し、「だから俺が言はぬ事ぢやない布哇は既に日本人の有に歸したも同様だ」と合槌を打つたのを機會としてァンマと大問題化し、苦力を附錄にして移民委員會の議題となし終つた。」

この形勢に對して勞働組合は如何なる處置をなしたか、利害を等しくする布哇の勞働者は「排日問題化したが故に」とて決して默つては居なかつた。即ち罷業終結後日ならずして白、土、比、日、各勞働組合を統轄して布哇中央勞働評議會を組織し、布哇の實情を詳細に米國勞働總同盟會長ゴムバース氏に致し、更に縣の緊急勞働委員の出府と前後して二名の勞働代表を大陸に送つて一切の事情を闡明したので、ゴムバース會長は勞働總同盟を率ひて「奴隷制度の復活に等しき支那苦力輸入法案反對」を聲明し、遂に議會をして實情精査の必要を感ぜしめた。それで千九百二十一年から二年の始めにかけての布哇は勞働卿を首席とする政府側調査委員、シヤレンバーグ氏一行の總同盟調査委員以下、公私の調査員視察者を迎えた事數ふるに追ない程である。而して耕主組合の萬遺漏なき歡待と説明とに對し、勞働組合側の不自由勝ちなる調査書類の提出が如何なる程度に來布者の注意を惹き得たか、唯一の身方と力にしたシヤレンバーグ氏さへ人も知る加州勞働組合の首領で排日の巨頭なれば、「苦力輸入の必要は認められないが日本人の優勢に對しては特別立法の必要がある」と報告したのも止むを得ないだらう。

布哇駐剳の日本總領事はこの問題に關して唯一度聲明して曰く、「勞働者の缺乏に對しては同情する、この不足せる勞力を何處より補充するかは米國當路者の隨意であるが、唯徒らに日本人禍の高調さるゝを遺憾とす」と、蓋し日本移民の足踏み得ざる米國に支那苦力を歡迎されても「それは米國の隨意」と傍觀するの意か。

形勢は刻々に進展し、資本家の期待は漸く確實となり、支那苦力輸入の請願は布哇の各地から幾百市民の連署を以て議會に送られ、勞働組合に對する壓迫は愈々露骨になつて來た。然し苦境にのみ立つ勞働組合は飽まで凡ゆる運動に抗して事實の闡明に努力し、「先達ては水道布設の請願だといふので言はるる儘に署名したが、支那苦力輸入などゝは思ひもよらぬ」といふような實情具申書に、これ又數百名の連署を得て議會に送る

のみならず、一般市民に對して本問題の實相を理解せしむべく懸命の奔走を續けた、それは近く一九二二年に行はれる代議士選擧に際して、幸に縣民の自覺だにあれば萬代不易と誇つた共和黨の地盤の上に、縣會と縣政府の全力を擧げつゝある苦力輸入を標榜して立つ共和黨候補に對して、孤軍能く民意を代表し得る民主黨候補に貴き一票を投じ得ると確信したからである。

資本家は愈々最後の手段に訴へた。先づ一九二二年の八月日本人勞働組合の幹部二十一名に逮捕狀を發したのを手始めに、一引續いて第二第三の事件を檢擧し、同年十月には糖價下落を理由として給料の削減を發表し、現在の一日一弗制を定め、翌二十二年三月には第一審有罪と決して四年以上十年の苦役を宣し、捕繩と苦力を兩手に擁して大耕主組合の偉力を誇示した。

此の勢に勞働者は殺氣立ち、社會は驚きの眼を睜り、「やつぱり耕主組合には勝てぬ」と嘲つた。而し冷い鐵窓裡で「若し支那苦力が輸入されたら俺達は犬死だ」と血を吐く思ひの勞働首領、「君達に犬死はさせぬ」と東奔西走する同僚幹部、「市民は義憤に燃えている」と勢ひづく勞働組合の當事者は、米布合件以來久しく不遇の民主黨をして豫選結果の絕望的であつたにも拘らず本選擧最後の一擧に絕對的の勝利を得せしめた。

玆に三年錦を飾つた支那苦力輸入問題にも愈最後の日が來た、縣の上下兩院民主黨候補が全部落選したにも拘らず民主黨萬歳の聲に迎へられた代議士候補前典獄チャレット氏は當選確定と同時に聲明して曰く「支那苦力問題は特別委員諸氏に一任せん」と、更に華府に到着するや否や「布哇に日本人禍なし」と、玆に流石の剛腹な耕主組合も聯邦議會に原案提出の代議士を失うて施すに術なく、遂に本案を斷念するの餘儀なきに立到つた。

五

以上は勞働界を中心として見る布哇最近の推移である。そして私は一九一九年の末、比島人勞働協會が增給の叫びを上げた當初から同協會長マンランピット氏と轡を並べて各耕地を驅け廻り、日本人勞働組合の組織なるや、前日布時事記者後藤一二氏、布哇農業組合書記宮澤寬氏と共に入りて書記の任に就き、一地方組合選出の純勞働者代表たる理事諸氏の下に布哇勞働聯明會本部の一切を處理した。從つて理事は時に交迭增減しても書記は動かず、文書に、口舌に、常に矢面に立つたので內外各方面から「理事よりも書記」と目指されたのも當然であり、且は罷業終結後も後藤君が勞働組合の經營する布哇新報の編輯局に入り、宮澤君は法律事務所を開いて本部と同じ階上に留り、私

は勞働運動の幹部として本部に殘つたのみならず、常に各島耕地を訪れては勞働組合の相談に與つたのだから、何れの場合にも三書記が中心視されたのに異存はない。然らば勞働組合幹部二十餘名が逮捕された時にイの一番に拘引された事も、有罪の宣告當初に下獄した事も、寧ろ當然過ぎる程の當然だが、扨靜かに自分達の過去を振りかへつて見ると逮捕さるべき何等の犯罪事實が無いのである。緊急勞働委員が議會の移民委員會で問ひ詰められ、排日の種に行詰つたからつて、華府三界から知事の名によつて特電を發し、人もあらうに耕主組合の顧問辯護士を副檢事總長に任命して特別求刑官たらしめ、當然罪に服、すべき犯罪人の刑を許すことを條件として勝手氣儘な證言をさせ、陪審官を強制して有罪を審決せしめ、その意志に反して極、刑の宣告をしたなど全々非士芝居の裁判劇に過ぎないのに本屋計りが本物とは冗談にも程がある、と言つて見ても事實に於てその分り切つた嘘八百が公々然と通用して罪も科もない十五人が四年以上十年の刑を受けさせられているのだから仕方がない、そこで私は所謂巨魁として明言した。

「罪された我々が恥づべきか、罪した資本主義專制が責を負ふべきか、今度こそ私が原告となつて眞人間の法廷で眞理と事實の審判を受けるのだ」

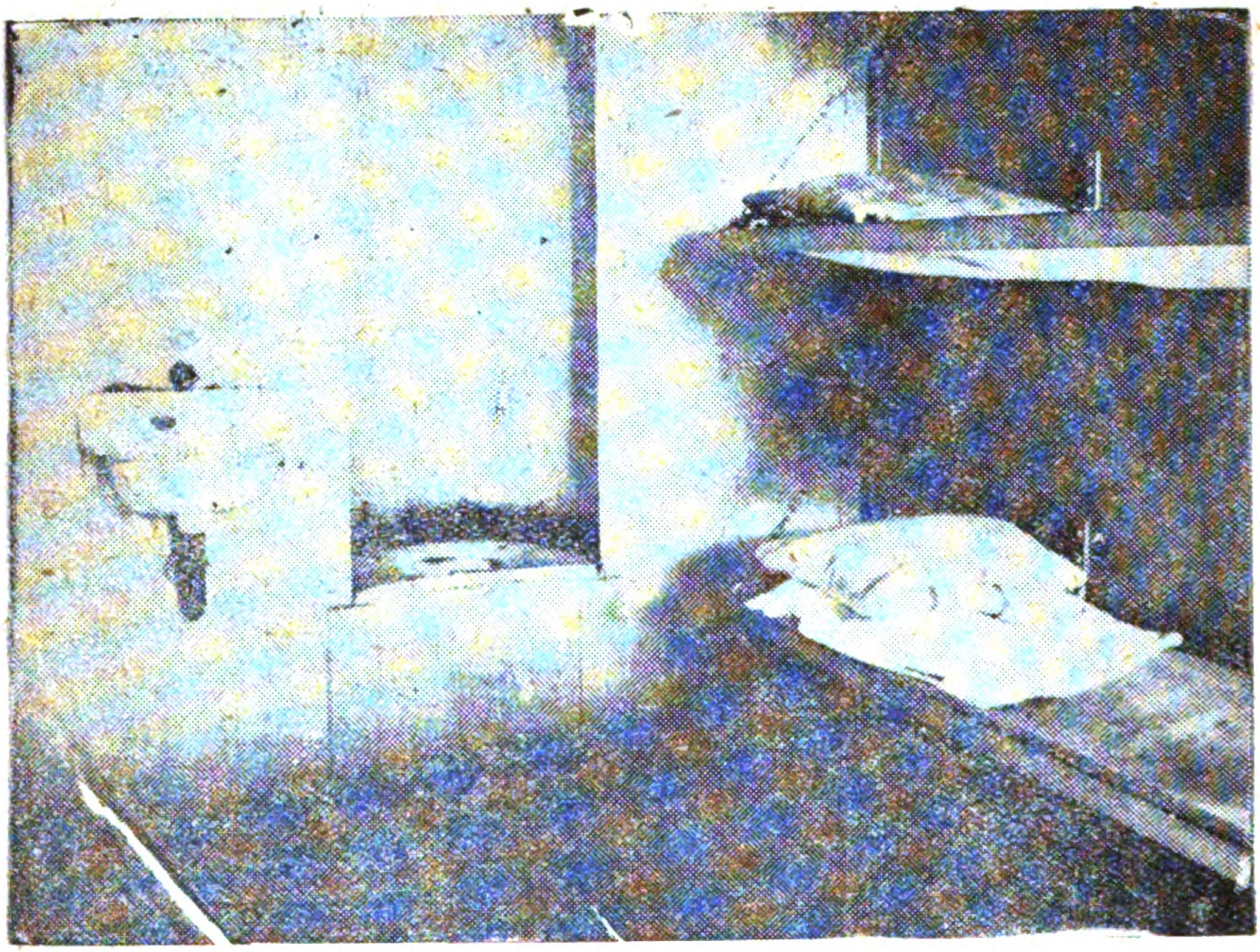
と。したら彼等は嘲笑し乍ら

「お前は收監されているのだ、お前には口と筆との自由はないのだ」

と、噫、私は本監へ護送された當日「私信と雖も悉く監獄事務室の檢閲を受くべく、苟くも政治・教育・司法・監獄・耕主組合、勞働組合に關する事項は勿論、時事問題に就いては一切筆にする事を許さぬ」と嚴命された、而してこの中で事件の眞相と獄舍の實際を書きつける事は首領としての義務、囚人としての特權にして、又私にのみ許された特殊の課題でなからうか。これ鐵窓秘錄と題して囚人の日常生活から犯罪の經路、扨は陪審法廷のよい頃加減さ迄事實の儘を書きつける所以である。

六

忘れもやらぬ大正十二年四月三十日、縣大審院に敗訴した十有五名は聯邦法院上告の希望を有し乍らも四年以上十年の宣告のまゝに縣監獄へ護送された。既に十三ヶ月を未決監に過して監獄生活になれきつてしまつた私さへ本監の嚴かしさには氣味惡く感じたのに、保釋出獄中であつた同僚諸氏は如何程心元なかつたらう？只見る鐵筋コンクリート三階建の本館を正面として石壁高く圍まれた一城廓、圍所にしては月影さゝぬこの獄



寫眞第一圖　監房內部　横の二棚が寢台　奧の門所が便所　この傍に洗面所

丈さが身にしみわたる、昔から丸太柱に萱の屋根など、流竄のあらはれを形容したが、今四六時中鐵扉コンクリートの石室內に監禁されてゐると、見て色があり踏んで柔味のある木造建築が如何程なつかしいか、など思ふうちに一度入れば刑期が終る迄斷じて社會と絕緣さるゝ重い鐵の構子戶をくゞるや否や「ガチャリ」と鍵の音がして愈々囚人生活の第一日を迎へることになつた。

命のまゝに身體檢査室に入れば身長體重は勿論眼の大小色から髮の毛色、陰の痣から傷跡一つまで苟しくも身體上の特質は悉く書き上げられる「成程再犯の場合にはこの記錄が物言ふのだな」と思ふとよい氣持はせぬ。

次に寫眞室へ行くと臍の緒切つてから一日だつて離れたことのない私と私の名前を一言の挨拶もなしに切り離し、無恰好極まる厚紙の番號札を胸に貼りつけて眞正面からの撮影「かうすれば立派な罪人面だらうよ」と言ふ中に遠慮なく指紋が取られる、いや應なしに被服室へ連れられて帽子、被服、靴などが官給品と取替させられる。囚衣は話に聞く日本の靑や赤の色服と異つて黑色木綿詰襟の勞働服、曾て私が縣師範時代に着たものと恰好はよく似てゐるが唯ズボンにポツケツトがないのが違ふ。

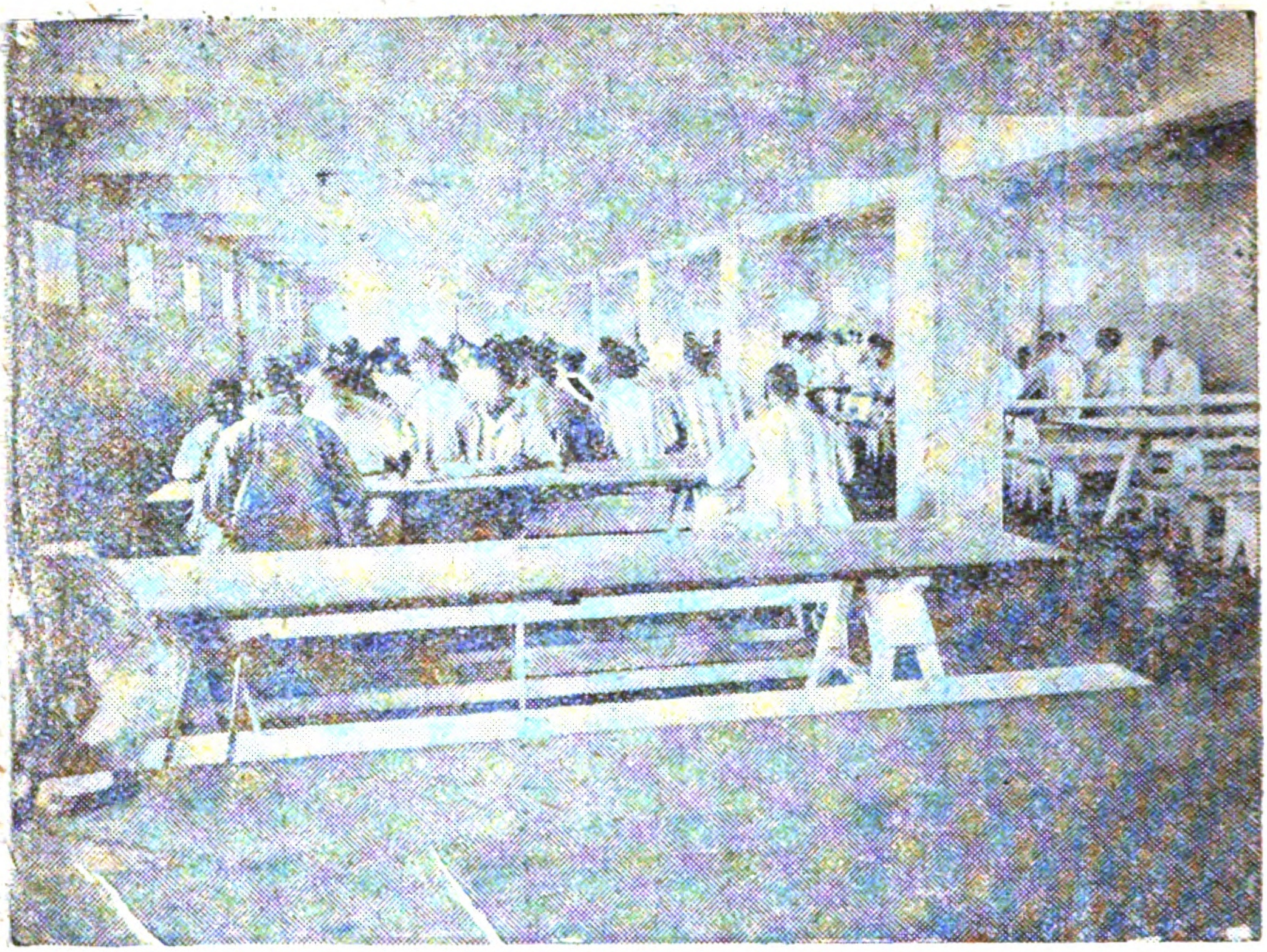
「これでどうやら一人前の囚人になつたやうだ」と思ふと今度は



監房外部、十六室一時に開閉する構子戸、上下を見透す鐵の簀の子廊下

極めて簡單な所持品の檢査が行はれ、大抵の書籍日用品寢着襯衣毛布位までは携帶が許されて看守長室に導かれると間もなく監房が指定される。

監房といふのは看守長室を中央に×放射狀に建てられた二階建コンクリートの大建築で、東北二翼は上下共五十人入りの大部屋、西翼二階は教會、階下は食堂、南翼が上下共二列の所謂監房で一列十六室、一室二人入り、各室は三方鐵板を張りつめ、便所、洗面器の設備も完全に、鐵鎖で吊りつけた鐵枠のベッドが上下二個、敷布の上に綿毛布二枚が正規の寢具である。（寫眞第一參照）戸は立派な鐵の構子で、開閉は看守長事務室の廊下にある槓杆一つで「ガラガラガラピッシャン」と十六室一齊だから是處へ監禁されたら破獄や脱獄は殆ど絶望、廊下は鐵の簀の子だから上から見ても下から見ても一目瞭然である。（寫眞第二參照）携帶品を自分の室へ殘して身輕になると「先づ飯を食へ」といふから指圖のまゝに食堂へ入ると天井が低うて窓が小さいので丁度船艙のやうな氣分がするが、ナイフとフオークが規丁面に並べられて白木の長卓に六人宛向ひ合つた囚人が嘻々として食事する有樣は一寸監獄離れがしてゐる。（寫眞第三）其處へ十五人の珍客がズラリと顏を並べたのだから騷ぎは小さくない「ハローツツミ」「ハローストライキメン」「ツーマッチ



寫眞第三　食堂、縞の着物は累犯囚、黒色衣は普通囚

ちやないか」「ノーピリケヤ」「やお久しう」などと各人種から各國語で各自に挨拶される「囚人に歡迎された」と言へばそれ迄だが、恐ろしからうと豫期した獄舍の中で突然受けた優しい人間の心持には涙組ましい感激が湧く。

食事が終れば他の一般囚と共に獄舍後庭の囚人控所へ雪崩れ込む。抑もこの控所といふのは天下の奇觀で、獄屋南西兩翼の間に建てられた扇面形の木造バラック一棟、兩側の步道に木煉瓦を敷きつめた外は一面砂地の所へ、長椅子に物入箱、自作の腰掛に莨蔵・座敷淸掃・ミルク瓶から小鍋まで、苟くも監獄生活に役立つものなら何でも保存しておくといふのだから、この複雜多樣さは先づ橋下に比較するのが最も近からう。三ケ月に一度位は看守長自ら大斧鐵を提げて箱破りに歩くが、御日にとまる箱よりその日だけ遠慮するのが多いから事實に於て變化はない。兎も角三百以上の囚人がこの控所に雜然として生きていると思へば大抵の事は大目に見逃さなければなるまい。

控所と芝生一つ隔てゝ賣店・理髮室・靴工場・縫工場・洗濯場ペインター工場の一棟があり、之れと道一つ隔てゝ便所・水浴場の一棟がある、共に鐵筋コンクリートだが各室共天井も高く窓も大きいから厭氣がせぬ。

以上は獄壁內だが後庭から鐵門を一つ出るともう監獄氣分は

全く無いといつてもよからう、四尺に足らぬ木柵を繞したとは名計りの廣い運動場から監獄附屬の水田・野菜園・バナナ畑・豚飼場・極めて簡單な木造バラックの大工々場・鐵工場等へは外部から柵一つ越えずに來る事が出來る。だから「獄壁内の完全に比して外庭の寛大さは寧ろ驚くべきものがある」とは囚人第一日の私に先づ大なる慰安であつた。

七

扨一口に囚人と言つては居るが「泥蛙にも上下」があるように、同じ囚人にも色々な差別や階段がある。即ち性の上から男囚と女囚、法の上から合衆國囚と縣の囚人などは當然の區別である。女囚は常に本區二階の監房に女看守の監督を受け、遊步地としては本監と獄舍との間の芝生(前庭)に限り、斷じて男囚と言語を交す事を許さないとは法規の示す通り、但し澤山の人數の事ではあり、又監獄さへ出てしまへば完全に自由な人間なんだから、女看守と前の男囚が結婚しようと、前の囚人同志がスキートホームを作らうとそれは監獄そのものゝ關係すべき事柄ではない。尚世間では箱入娘にも虫のつく今の世に、世間並外れて氣儘な横着な若者共を顔の見へる範圍に押し込めて「知らぬ顔をして暮せ」とは餘りに酷慾な話だが、庶には庶で可愛らしい女囚に戀人の林檎を一つ裾分をしたつて、又女囚に送る食事に肉が一切多かつたつてこれを表向きにして文句言ふ程野暮な手合はゐないのみならず、先達つても或男囚が女囚部屋の合鍵とかを作つて夜中密かに忍び込んだとか何とかいふ噂があつたので「どうなる事やら」と心配してやつたが、粋な典獄サンは本人の仕事を變更したゞけで放つておかれるといふ有様、思ふに男女別あつて而も嚴に過ぎない所が兩者の狀態を調和してるのかも知れぬ。活動寫眞の夜は女囚は勿論典獄副典獄の家族も一しよに見物するのだが未だ嘗て變態性慾の症狀もなく、又獄庭の話題にも女囚なんどは極めて稀にしか引合に出されないのを見ると、性的飢渇は隨分甚だしいがまだ狂態には至らないようだ。但し他の監獄で行はれるような鷄姦獸姦が全々此處に行はれないとは言はぬ。

次に合衆國の囚人と縣の囚人とは制度經濟の上で全々異つている。即ち前者は合衆國法により合衆國法廷で刑の宣告を受けた者を唯刑の執行の便宜上縣監獄に委託したに過ぎないので一人一日一弗づゝの囚人賄料が合衆國から縣へ支拂はれる事になつてある。從つて縣の囚人は命のまゝに苦役に服さなければならないが、合衆國の囚人は縣の獄規に從はないからとて直ちに處分する事が出來ず、一應合衆國檢事の指令を仰がなくてはならない

點だ違ふが、事實は同じ様に取扱はれている。

扨この囚人を大別して信用囚・普通囚・特別囚とし、更にそれを各第一第二に別つているようである。普通囚とは何人によらず初犯入獄の當初六ケ月はその取扱ひを受けるので、服裝は木綿結襟の上着にポケットなしの紺洋袴、監房は二人詰、食事も何も普通一般で俗にいふ新入囚である。この半年の新囚期がすむと今度は五十人入りの雜居部屋へ移される、食事や服裝に變化はないが、仕事は道普請か公園掃除だし、獄舍にはなれるし、責任はなし、大平樂を並べて日さへ過せばよい境遇、時には雜居部屋の奥の方へ毛布を敷いて寢を擧げても看守が入口から入つて來るまでには狸寢入りをするといふ手合。浮世三分五厘の生活を文字通りに實行して行く連中の集りだから平凡ではあるが獄舍の妙味？はこの邊にある。

信用囚といふのは主として仕事の上に特別の位置を有する者で、典獄副典獄等の家庭に働く料理人・給仕・園丁、事務所に働く助手・圖書館係・病院係・倉庫係から炊事・賣店・理髮・靴工・縫工・洗濯・大工・鐵工等の職人、米田・菜園・豚飼等の主任、各外役場の監督等、一口に言へば或特定の仕事に就て責任を有する者である。その中特に長期の間過誤なく務めたものは第一信用囚として本監の階上の立派なベッドのある一室に二十人計りが收容され食事までが特別である。普通信用囚は獄舍の北側二階の共同室に五十人が雜居しているが、比較的自由な生活で、夜の入室に人員點呼はなく、電燈は終夜、出入も寛大、その上集つた連中が囚人乍らに一癖も二癖もある者共だから話が面白い、現にこの室には殺人囚が十七人、羅府關係の共濟組は別として贋造紙幣の親分株から日支米三國にかけての密輸密航團長、淫賣の頭梁も居れば、强盜・强姦・詐欺の上席、何れを見ても新聞の三面種に不足言はれるような面々ではないが「監獄へ來てからジタバタせぬ」といふ俠氣と「仕事なら一人前」といふ腕の持主、娑婆に置いても何不足なく暮して行ける身をつひ人間味が多過ぎて握り損ねた機會の綱の物語りに獄舍の夜は更けて行く。因に信用囚の服裝は黑木綿ではあるが襟が折返し、洋袴は普通の勞働服と少しも變りがないからその儘大道を歩いても囚人と氣付かれる事はない。

特別囚には再犯重犯者の歸獄當時、及び獄內の犯則者、並に精神に異狀ある囚人を數へている。服裝は白と黑の棒縞で、監房は獨房中に收容され、仕事をするといふよりも寧ろ無事に日を送るべく特に監視されるのである。

茲に獄內の懲罰として怠けて仕事を休むといふ位の程度だと自室に監禁をされる。大抵期限は定められず、看守長が笑ひ

乍ら「ウーどうも犬病らしい到底食事は進むまい」と言つて室を鎖し、炊事係の食事運搬を禁止めるから長くて二日、大抵の者は一日經れば「必ず出働」を約して叩頭する。次に賭博、喧嘩、就働拒否、位になると監房監禁を申渡される、常習者でなければ十日か二週間で許されるが一度監房へ下げられる再び新入囚からの順序を踏まねばならぬのが骨だ。而し常習者になると又趣味のあるものらしい、晝は東南兩翼の中庭に身を横へ、夜は監房の中で騒いで居る、「何に賭博は監房内が一番安全だよハハハ……」とは徹底したもの。最後に刃傷・泥醉・獄吏に反抗脱獄、並に脱獄計劃等をやると暗室監禁の處分がある。これは獄舍地下室に特別に装置した暗室内へ監禁されるので二十四時間單位として四十八時間も經過すれば大概の者は靑ざめてしまふ、だからそれ以上の監禁には二十四時間毎に醫師の診斷を必要とする、私が入監してから最も長い暗室監禁は通稱岩見重太郎といつた布哇一の剛の者ウイリー、コケットが再度の脱獄をした時に百〇八時間、馬と競走しても負けないといふ逃亡の名人ジョー、カイアカイが四日だつた他に四十八時間以上を耐え得た者はない。聞けば立つて居る事さへ出來ぬ粗セメント床の上に便器用のバケツを逆にして腰をかけ、晝となく夜となく暗と寒さに攻めつけられ、食事といつても堅パン二片に水一杯で生きた心地はせないとやら。扨泥醉や喧嘩は大概暗室だけで許されるが、罪狀によつては暗室から監房監禁へ廻される者もある、最も重いのは暗室から獨房へ廻される者で脱獄、逃亡等の場合には當然の處罰である。獨房は本監二階死刑執行室の近くにあり、室の構造は大略監房と同じだが、食事が一日一回に限られ、人間の顏を見るのが唯食物給與の時だけだからその淋しさと餓しさは一通りでない、だから看守の叱聲でも聞き度くて大騒ぎをし、古新聞を水につけてでも食ふといふ。「若しそれ毛布を解ひて窓から垂らした釣糸へ誰か煙草の一本も縛つてくれたら生々世々恩に被る」とは僞らぬ告白、「何をしている」と問へば「××と泥棒の計劃」とは共通の返事、「囚人もこの試錬を受けない間は一人前に通らぬ」と聞いては獄舍二年もまだ新揩ぎの氣がする……

八

簡易生活といつても世に囚人の食事位單調なものはあるまい、一年を三百六十日まで判で押したように朝は赤砂糖入の珈琲一椀に堅パン二つかパン二片、晝と夕とは東洋人なら飯一皿に牛骨（肉少々附着せるもの）の鹽煮汁かけ、布哇土人ならポイ（芋汁）牛骨汁、白人ならパン半片牛骨シチュー、一週間に二

日だけはこの牛骨汁に代ふるにアラスカ名産鮭の鹽切に變化はなく、炊事囚の氣まぐれで鹽氣の多少はあつても骨のない牛肉にありつくような心配はない。

私は最初東洋人として米飯組へ廻されたが、半時間も前にぶつかけられた肉汁かけの香と味とは又格別、隣の犬も舌を出さない珍味だから特に乞ふてボイ組へ廻してもらつたのに「堤さんは米の飯がお厭やゝ」などゝの皮肉は許して頂きたい、今の私は白飯に味噌汁と醤油をかけた漬物さへあつたら半年が一年でも文句は言ふまいものを。實際こうした境涯に入ると美酒佳肴といふようなものに對する欲求は起つても來ないが、米の飯・味噌・醤油の三種に對する執着は制せんとして制し切れないものがある、だから機會さへあれば如何程の犧牲を拂つてもこれを得る事に努力する。勿論以前は殆んど無制限に差入が許され、今でも大祭祝日だけは食物の差入が公認され、且構内の賣店部に諸日用品は勿論醤油・砂糖・鑵詰・煙草・曹達水位はあるので生きて行くのに不自由はないが、其處が人間の悲しさ、時には温い味噌汁も汲うて見たいものだ。「監獄の中でそんな事」とは娑婆の人達は驚くかも知れぬが、元來が天下の賢者の智慧をしぼつて作つた法律の裏を行かうといふ連中の集りだもの、如何程獄壁を高くしておいても味噌の一袋や生肴の一匹位が通り得ないといつたら嘘だ。「持ち込んでも食ふに困るだらう」とは大きな心配。「來る」と見えたら古鍋古釜は必要なだけ集つて來る、靴の皮切ナイフが刺身庖丁に代れば、洗濯屋の殘火に味噌汁が煮え立ち、床屋の石鹸入れや仕立屋の霧吹きが汁椀に早變りしたつて文句を言ふ者はない、勿論看守の眼は光つてゐるが、それよりも鋭い囚人の眼、物騒と見えたら其處は囚人道徳でお互様だ、御巡視の時分には皆が口許を拭ふて知らぬ顔している。と言へば如何にも當路者を馬鹿にしたようだが、抑も食物の差入を制限とか禁止とか言ひ出した當局の量見が間違つているのだ。役人様とやら申すお豪い方らは囚人を苦しめたら善人になるように思召すらしいがそれは大きな間違ひ、親兄弟の血を吐くような意見も、牧師や開教使さん方の涙ににじむ御説教も、暗室監禁の苦しさも、勞役の辛さも、其場限りの感激に止り、再び獄庭に歸れば頑たる石壁の蠻勝に無限の反感禁じ難い囚人の生活に何この上の制限や束縛は苦痛といふよりも苦笑の種に過ぎない。元來世間では囚人に差入物するのを贅澤な様に思つて居るが實際犬も喰はない食事に不斷の空腹を痛感する囚人の身になると、外部から送られた人間の食物は直ちに血となり肉となる計りでなく、身も心も悉く呪咀の炎に燃えているのに心盡しの差入物に對してのみは心の底から感謝が湧く、而

もこの感謝の一念のみが罪囚を眞人間に導く光ではないか、錢の救濟！ 魂の入替え！ それも結構だ、而し錢と肉とが併せ救はれなければ眞の人間生活には入れぬ。茲に監獄への差入物が如實に錢と肉との貰い糧である事を立證する私は世の司獄者に對して直ちにその禁を解けと言ふ。但し所謂差入屋の營利事業は斷じて禁止すべきだらう。好意は直示されなければ内感應がない。骨肉親近が愛と涙で送る漬物の一片は能く罪囚の魂を呼び醒すが、折角の親切も冷い金錢に換算され、差入屋の算盤玉にはじかれて、通り一遍の辨當になつてしまへば肉の肥料にはなるが魂の糧には餘りに縁が遠過ぎるだらう。

九

今を去る十餘年前本監獄の制度を改定した前典獄ジヤレツト氏は監獄を罪人の教化所として完成せんと努力し、看守の武器を悉く廢し、監督の手から鞭を離し、捕繩と鐵鎖はこれを倉庫に藏し、唯脫獄の常習者に對してのみ鐵丸若くはオレゴンブーツを極めて稀に使用するに止め、競技を奬勵し、遊戲を許し、手工・音樂は勿論二週間一度の活動寫眞の外に時宜によつては演藝會迄も許可したが、寛嚴度ありて教化能く徹底したから囚人からは「パパア」と親しみ敬はれ、外部からは模範典獄と推稱され、米國獄制の一新例と重要視された。其後を嗣いだ現典獄レーン氏は嘗て王朝時代に一時囚はれの身として獄舍の體驗もある事とて囚人に對する親切と注意は到れり盡せりである、—唯氏が餘りに政治的で兎角に外部の意嚮を斟酌し過ぎるから一貫し得ない點のあるのは惜しむべき事だが、何れにせよ囚人の凡てが監獄の當事者に心からの親しみを感じて日を送つているのは本監獄の一大特質だらう。

獄吏としては典獄・副典獄・書記の三名が本館に事務室を持ちて一切を管理し、看守長は一日交代で二人、部長が八時間交代で三人、看守が八時間交代で十三四名と女看守二名、其他は外役普通囚監督が五六名で兎も角四萬人の囚徒を處理しているのだから、若し獄吏と囚人との間に眞の親しさがなければ殆んど統制は出來ないと言ても過言はなからう。先づ書記室で監獄の帳簿を記入している者からタイプライター係・倉庫係・圖書館係・寫眞係・病院係・藥局係・獄吏用自動車運轉手・炊事・賣店・各工場には一人の獄吏も居ず悉く囚人が處理して別に間違ひもなく、外役囚にも囚人の監督が附いた方が却つて仕事が進み、一日交代の看守長より每日詰の看守長代理囚が裁きが早いのが實際だ。

かくて監獄自治は遺憾なく行はれ、近くは監獄自給策と米

田・ボイ畑・野菜園等の擴張も行はれ、薪木の切出しから草花の栽培まで囚人の手でやつて居るが、獄囚の勞役として主要なものは縣の道路工事と公園掃除である。太平洋を航行する多くの旅客は布哇の道路を褒めて行くが、あの全島到る所坦々たる大路が殆んど悉く囚人の手によつて造られたのを知る人は少からう、更に公園に共進會場に默々として働く勞働者を囚人と見る人は稀だらうが、縣の會計報告に年額十萬弗以上の囚人勞力評價を否定する者はない。

斯くの如く仕事の種類が多種多様であるから囚人の日課は必ずしも一様ではないが一般に起床が午前五時、朝食が五時半で、六時から十一時迄が午前の勞働、晝食休憩が一時間で午後〇時から三時迄が午後の就働、正味八時間の勞役さへ終れば後は控所で話さうと芝生の上で横にならうと隨意だ、夕食は午後四時で同四時半から五時半迄は特別囚でない限り運動場の遊歩が許され、七時半になると監房へ閉ぢ込められる。だから自由の時間として夕食後の三時間を無意味に過すまいと同僚一同は日本人囚を語らうて英語の學習を續け、土曜と日曜には私の思想史講演に集つて來る人も少くない。聞けば私達の入獄前には本を讀む者と教會へ行く者は冷笑されたとやら、それに今では人種の如何を問はず讀書と學習に相率ひて勵精するやうになつたのは愉快である。勿論この時間は全々自由なので運動場へ出ては好むまゝに遊戯に耽り、構内に居つては思ひのまゝに手内職をしたつて叱る者はない、だから午後四時以後の獄庭は不良青年の寄せ場に小細工店の工場と夜學校とを持ち寄り安物の氷店と橋下を招待したやうな復雜さ、喧嘩と口論・摘み喰ひと馬鹿話は天下御免の有様、殊勝氣に座り込んで居るのは將棋に熱中している連中だらう。私はツラスローといふ元人民銀行支配人と二人が日英交換教授を一時間、土曜と日曜には生涯の最初にして最終だと思ひ乍ら西洋・印度・支那の三哲學史を中心に現代思想への推移を通俗講演する以外は碁も打てば遊戯もやる、筆を執るには監房へ入つてから十一時まで約三時間は大丈夫あるから外に居る間は出來るだけ遊ばうと思つて居る。

○

陪審裁判は隨分よい加減のものだが、米國の獄制では刑の輕減が又思ひ切つて行はれるので監獄當事者の胸一つで機宜の處置は遺憾なく出來る。勿論米國獄制は必ずしも州縣獄制と一様ではないが、大體に於て「性行善良なる囚徒には刑期の三分の一迄を輕減することを得」といふ本文によつて刑期に應じて定期減刑制が設けられてゐるのは共通だ。普通これをグッドタイ

と言ひ獄則違犯によつて罰せられるとこの恩惠に浴せられないものとしてゐる。今その大體を表示すると

刑期、	減刑率	標準在監期、
五ケ月以下、	ナシ	宣告刑期、
六ケ月以上、	月五日	五ケ月以上
一ケ年以下、	月五日	十ケ月以下
一ケ年一日以上、	月六日	九ケ月十四日以上
二ケ年以上	月六日	十九ケ月八日以上
三ケ年以上	月七日	二ケ年三ケ月二十三日以上
四ケ年以上	月七日	三ケ年二十九日以上
五ケ年以上	月八日	三ケ年六ケ月以上
七ケ年以上	月九日	四ケ年十一ケ月以上
十ケ年以上	月十日	六ケ年八ケ月以上
十二ケ年	月十日	八ケ年
十五年	月十日	十ケ年
二十年以上		約十ケ年にて特赦
終身		

之より外に合衆國法では刑期の三分の一以上を經過した者は假出獄を出願する事も出來、更に大統領並に州縣知事は特赦減刑の大權を有する事は勿論である。尙殺人罪以外は初犯五年以上を宣告しないといふような慣例もあるので大抵の事なら二三年で話がつき、少々やり過ぎた所で死刑にさへ處せられなければ普通十年で再び娑婆の風に當れるといふ勘定だのに私達は共謀罪とやらで滿三年以上の在獄、扨々アメリカといふ國は罪人には寬大で無罪の者には慘酷な所だ……、

扨兎も角も以上の刑期を獄內で過す事になると先づ必要を痛感するのは小使錢である。朝のコーヒーに入れるミルク、晝飯の菜に味をつける醬油位は誰だつて買つて行くのだもの、それに日用品・端書・曹達水・時には寄附もせなくてはならないから最底月額二三弗、煙草を喫めば五六弗、一寸氣樂に暮すのには十弗位の小使錢が入る、所が囚人の勞銀は普通囚が一日三仙、信用囚が七仙五厘から十仙・十二仙・十五仙が最高で、これも半額は出獄迄捨置きで月末に渡されるのは僅かにその半額だから殆んど勘定には入らない、と言つて親兄弟のある者計りでもないから手內職は必然の要求である。獄吏もこの實情を能く知つて居るので出來るだけの便宜は與へてくれる、だから象牙細工・樂器製作・堅果細工・角細工・帶皮編み等で月に四五弗から拾弗位得る事は左程困難でもなく、又材料や製品の賣買を仲繼しても小使錢位は不自由でない計りでなく中にはこれによつて相當の蓄財をする者も少くない、これは特例ではあるが一商人は

一ヶ年の在獄中に諸細工品の取扱高一千五百弗を越え、利益も五百弗近いものがあつたといひ、一彫刻師は月額二十弗以上を自分の子供の養育費に仕送つている、又去年出獄した終身囚には十年在監で勞銀を併せて約二千弗の現金を得て早速歸國したといふのもある。其他に十年近い在監囚で五六百弗から千弗近い貯金を持つているものは左程珍らしくもないから囚人の內職も馬鹿には出來ない。

一二

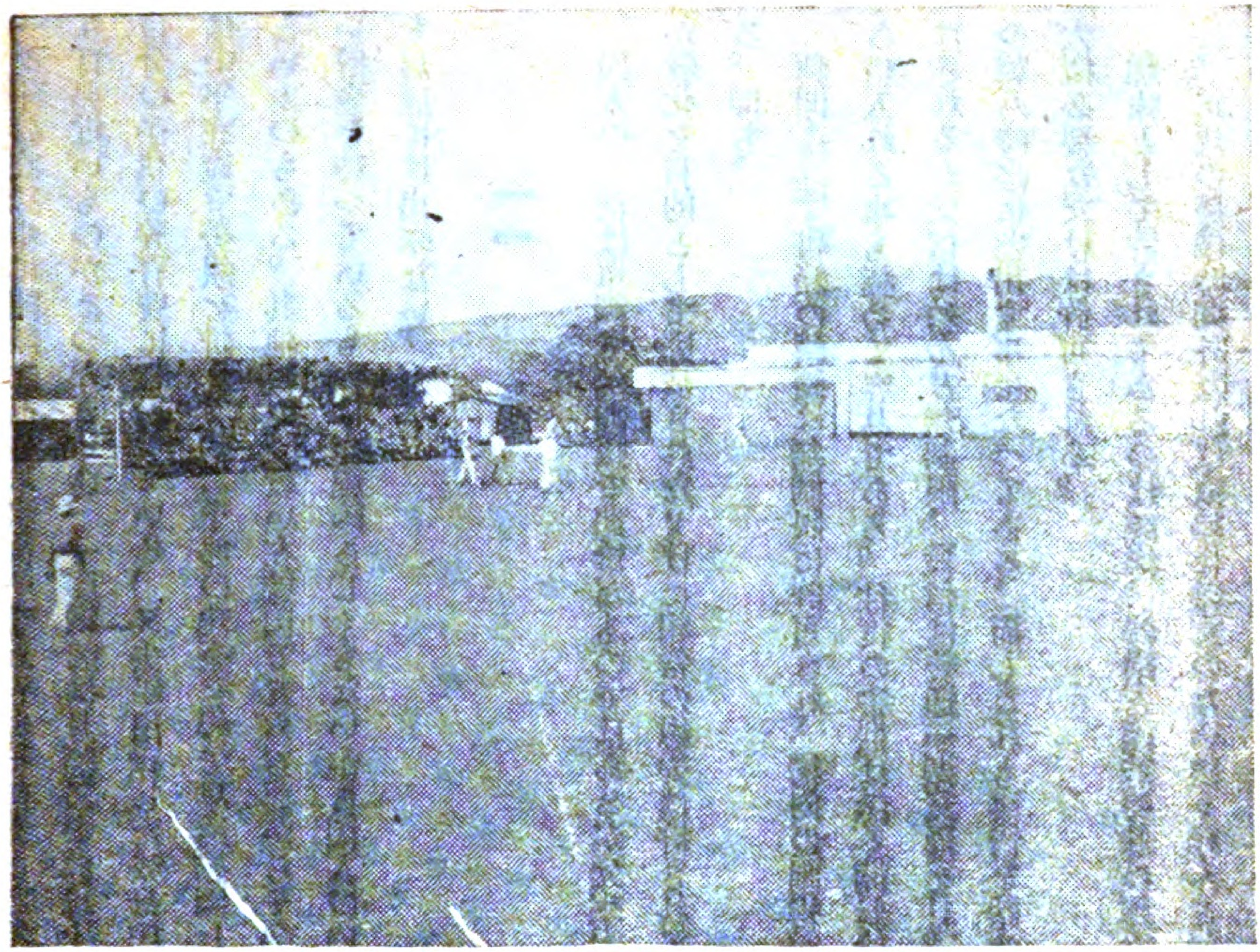
囚人の生活は單調で無趣味で悲慘なものではあるが元來本監か敎化を目的として完成されたゞけに相當の慰安は許されてある。即ち、

新聞・雜誌・書籍の講讀は無制限に許可され、構內の圖書館から借入れる事も極めて容易である。往復の書狀は悉く開封檢閱はされるが受信は殆んど無制限、發信は普通一週三通を日曜日の朝八時迄に差出す事になつてある、而しこれも事情を話せば大概必要なだけは許可される。

趣味として許されてあるのは聲樂、器樂と圍碁將碁の類である、正規の勞働時間外なれば取締に差支のない限り殆んど無制限だからギター・ウクレレを中心としてコーラス・ヴイオリン・タラリオネツト等相當賑かに技倆に於ても又優秀なものがある。恒例として日曜の敎會には一演奏やるが大概の御客様は褒めるよりも驚く位。

圍碁に限つては日本人の特技だが、近頃聯珠競技をやる外人囚もポツ／＼出來て來た。近頃は布哇第一の碁客を迎えたから一二年の間には監獄碁界も面目を一新するだらう。將碁は日・韓・支・比・西洋各國のが流行して其道の天狗連も少くはない。但し碁と將棋とは若し喧嘩ともなれば速時禁止との條件附である。

運動競技時間は毎日午後四時半から五時半までの一時間で野球・蹴球・インドアボール・ヴアーレーボール・徒歩競爭・散歩、何でも運動場でやれる事なら差支ないから色々と考へて毎日遊び續けている。更に土曜日と日曜日の午後は一時過から四時迄開放されるので曹達水を懸賞して野球の競爭が行はれるのみならず、野球季節となれば市中のチームが大抵日曜毎にやつて來て監獄チーム相手に面白い競技を見せてくれる。實力は懸値のない所二流の甲だが常にホームグラウンドで仕合するのと、副典獄が嘗て渡日した事もあるといふ老將だから、形勢非と見れば上着をぬいで野次兼參謀で活躍するので敗知らずといふ勢である。(寫眞第四) 故に監獄のユニホームを着けて奮戰する中に



寫眞第四 運動場、競技中の囚人選手、見物席は全部囚人

極めて快活な十七八の青年三壘手と時に外野を遊ぶ肥つた青年とがあるが、この二人は囚人ではなくて實は二副典獄の大切な御長男だ。「今日は大勝ちだから親爺が小使錢をくれるよ」とは僞らぬ話。因に「副典獄に物を頼むのは野球が勝つた時に限る」とは獄内の通則である。

斯く競技に熱中する際に柵のない運動場から脱獄をする者がないかとは能く聞かれることだが、實はホヤ〳〵の新入囚か或は特殊の場合でない限り運動場からは逃げない事にして居る。それは若し脱獄逃亡者が運動場から抜け出したといふ事になれば一事件約二ケ月の外庭禁止を命ぜられるからである。義理も、人情も辨へない罪囚ではあるが、自分一人の逃亡によつて四百の兄弟共に二ケ月の憂目を見せると思へば其處には囚人道德もあり、又何も監視の行屆かぬ柵のない運動場から逃げなくとも立派に壁も乗越へ監視も破つて見せるといふ名譽心も手傳ふから、運動時間に監守の有無は囚人取締上大した問題にならないのである。

面會と差入は土曜日の午後から四時迄、日曜祭日は八時から四時迄、面會時間は三十分、差入物は破獄逃亡用具でない限り差支ないが飲食物に限つて大祭祝日以外は許さぬといふのが現行規定である。面會室は本館入口の一室で長椅子が十脚計りあ

るから五十人位の面會は差支ない。獄吏は玄關入口で面會囚人の呼出しをするのと面會時間を注意する以外に斷じて干渉がましい事をせないから土曜日曜日の面會室には戀と涙のぬれ場も見られる。可愛らしい青年少女が罪の父を訪ねて涙の會談。年老いた親達が囚れの子を前にして血を吐く繰言、扨は受刑の夫に盡す妻の貞節。戀に狂ふた愛人と暫しの抱擁に燒ける如き接吻を交す情人、慰める友、いたはる先輩。一見混雜極まりないようではあるが當の本人にはこれ位心うれしい事はない。實際面會日には「誰か來てくれるだらう」と氣が落つかず、「ツツミ」と大聲に呼び出された時のうれしさ。之に反して豫期した面會人が來てくれなかつた時の淋しさと切なさ、次の一週間をどれ位味氣なく過すかは娑婆の人達の想像も及ばない事であらう。尙この定期面會及差入日以外でも特殊の事情があれば時間と時日の制限なく許される。

更に親子夫婦の重態並に死亡の場合には事情によつて一日二日の歸宅が許され、病氣其他家事上止むを得ない場合には看守同行ではあるが外出も許される。但し獄則を犯して懲罰を受けている場合には面會と差入の特點は停止される。

活動寫眞は二週間目の土曜晩に約二時間六卷位宛映寫される。器械は本監の備品、技手は囚人だが、フヰールムは所謂一（ワン）弗寫眞（ダラーフイールム）として市中の映畫會社から送られるもので不相變のカウボーイ劇である。囚人に取つては自分達の生活そのまゝの映畫だから力瘤の入る事夥しいが、敎化としては如何か、賣店部の利益から費用を支辨するのだから贅澤も言へないがフヰールム選擇に今少し注意を拂つてほしいと思ふ。

以上は監獄の月並行事だが玆に囚人生活の單調を破る大年中行事が五回ある、即ち正月、獨立祭（七月四日）感謝祭（十一月第三木曜）降誕祭（十二月廿五日）及び日本人には天長節これである。この四公定大祭日には朝のコーヒにミルクが入り、晝食は豚料理に曹達水二本、果物、菓子など五獻、時に七獻の大晩餐會。午後二時過になるとアイスクリームに袋入菓子、果物等の接待、時には葉卷煙草迄も分配され、運動場では色々の競技をやつて終日樂しむなど全く囚人氣分を離れる事が出來るから嬉しい。

更に天長節の祝賀は素敵である。これは各國人種に年一日だけこの國祭日を許すので支那人が舊正月、比島人が獨立志士祭、朝鮮人が獨立祭を祝ひ、日本人には天長祝日が公認されるのである。例年の例によればこの日特に祝賀の大會食が許されるのを私達の入獄した大正十二年度は例の震災の義金に全部を贈つたので中止したが、十三年度には本願寺から佛教青年會館

新築祝賀として慰問金弐十五弗を貰つたのに勢づき、日本人囚全部が應分の寄附をしたので約百弗を得、更に魚市場邦字新聞社等からの金品寄附を併せて思ひ切つた祝賀會をやつた。即ち午前九時會堂で堀牧師司會の遥拜式を擧げ、式後約一時間半は田坂法學士の經濟學講演を聞き、終つて典獄以下の獄吏に當日の祝賀品を贈り、これより木工場に準備して會食場で刺身から組肴まで揃へた日本料理の馳走に入獄以來の渇望を滿足し、引續いて幼稚園の兒童がやるような競爭遊戲に腹を抱へて笑ひ、相撲、鐵丸投げ、野球、インドアボールなどに腹を減らして再び夕食を喫し、更に其晩七時からは特別活動寫眞を映寫して一般囚人に喜びを分つなど、實を言へば來布以來の天長節祝賀であつた。

三

今一つ囚人生活を異常にするものは教會である。本監には特に教誨師を專任せず、日曜日の午前中を教會時間として希望の教師に割當てゝおく、現在では羅馬舊教。朝鮮人教會。支那人教會。布哇人教會。日本人美以教會。白人教會。救世軍等が半時間乃至一時間宛集りを持つてゐる。と言つて囚人は別に教會列席を強制されないのだから折角の集會に極めて少人數の事もあるが、底には底のあるもので監獄教會へは能く婦人方が來て下さるものだから中々繁昌だ。「おい來たぞ、參らうぜ……」「有難いのう、文句は分らなくつても歌の聲と美しい顏が……」などゝは正直な話。但し囚人必ずしも浮いた根性のみで教會に列するのではない、若しこれ眞に熱心に信仰を說いてくれる人があれば感激の淚を以て拜聽するのである。嘗て賀川氏が來られた時には呼ばないのに殆んど全囚人が集つて日英兩語の說教を謹聽したが、最後の祈りに泣かなかつた者は一人もなかつた。曰く「俺は英語も日本語も知らないがあの人の顏を見ているに神樣が有難くなつたので思はず泣いた」と、又曰く「あんな牧師さんがせめて十回續けて來てくれたら皆が洗禮を受けるのだに……」と。更に前年エドワード氏が來教の當時は常に朝寢する連中が日曜の朝に限つて早起きしたのも事實である、曰く「有難い說教の事を思ふと寢ては居られぬ」と。

日本人教會は小宗牧師の司る所だが一時は來會者も少く、加之日本人は天性音樂が下手だから一人の外人來會者を加へ得ない狀態だつたが教會當事者の熱心は遂に數人の受洗者までも出し、今では獄內唯一の女を加へない教會として眞生命を發揮している。

英語聖書研究會は毎水曜日の夜開會、囚徒の出席者は八十名

内外に達する。」

日本人聖書研究會は各週土曜の晩に小室牧師立つて開會される。丁度活動寫眞と重なるけれども出席者は常に二十以上に達し何れも一生懸命である。人は言ふ「稀に見る緊張した聖書研究會」と、噫獄舍の地下室で暗窓を見乍ら心讀する聖書に光がなくて何としよう。

終りに教化を主とした本監に何等統一的教養施設のないのは遺憾だが、人種と言語の錯綜せる現狀に對しては又如何とも仕方がないのだらう。參考に迄或日の實數を表示すれば次の通りである。

人種	在監者數	人口に對する比率
支那人	五六	〇、〇〇二三八二
比島人	一二一	〇、〇〇五七五三
布哇人	九二	〇、〇〇二二〇四
日本人	七三	〇、〇〇〇六六八
朝鮮人	二七	〇、〇〇五四五四
葡萄牙人	二九	〇、〇〇一、七四
ポートリカン	二〇	〇、〇〇三五七〇
米人	二七	
露人	三	
西班人	三	
其他	三	
計	四五四	〇、〇〇一三〇〇

南嶋の歌謡に現はれた　爲朝の琉球落

伊波普猷

慶安三年（西暦一六五〇）羽地王子向象賢によつて編纂された琉球の正史『中山世鑑』に「鎭西八郎爲朝は、保元の軍に敗れて近江國輪田に隱れて傷の療中、搦捕られて伊豆の大島に流された。然るに間もなく附近の五島を切從へて所領した。永萬元年附近の島嶼を征伐する時に、風に遭ひて吹流されて流虬に至り、大里按司の妹を妻つて、その翌年仁安元年一子を生んだ。是れ即ち尊敦後の舜天王である。爲朝は、其の後妻子を引具して歸らうとしたが、再び風浪に妨げられて、舟を引返し、妻子を牧港の浦に殘して、一人歸國した。夫人は一子尊敦を携へて、浦添に行き、此の地に、草庵を營んで住んで居たが、此の子の器量尋常に優れて居るが爲に、文治三年、彼が十五の歳に、推されて浦添按司となつたが、恰度此の時分、天孫氏二十五世の子孫衰へて、逆臣利勇といふ者に弑せられ、利勇自ら王位を簒奪して居た際であつたから、義兵を催して之を誅し、諸侯に推されて王位に上つた。」（雜誌沖繩教育七月號所載東恩納文學士稿琉球史講話の一節）といつたやうな事が見えてゐる。」

東恩納文學士の説によると、爲朝の琉球落に關しては、古くから傳へられたものであつて、白石の南嶋志以下の史書、徐葆光の中山傳信錄以下の使錄、何れも之を記載してゐるが南島志は傳信錄に依り、傳信錄は中山世鑑に據つたのであるから、その根本となつて種本は、中山世鑑であるとのことである。そして文體及び內容から判斷して見ると、向象賢は保元物語や南浦の詩文に材料を取つたのは明白であるが、島津氏の琉球征伐の前年まで琉球にゐて琉球の事情に通じてゐた淨土宗の碩學僧袋中の二著琉球神道記及び琉球往來記やその頃まで遺つてゐた口碑などを參照したことは、疑ふ餘地がないとのことである。

然るに、舊琉球政府で編纂した勅使應答訓令に、日本にいつた時、「舜天王の御由來御尋も候はゞ」「爲朝公之一男名は尊敦云

々と答へろ、といふ事があつたり、中山世鑑に、尙家の太祖尙圓を神聖にする爲に、「父母ハ素ヨリ島ノ百姓タリ、其先ハ今ニ不可知ト云ヘドモ、疑フラクハ先王ノ後胤ニシテ、故有テ彼地ニ渡り、世々島ノ百姓ニハ成リヌラン不然則如何ゾ俄ニ此大福有ヲンヤ」とあるところから、先王には舜天の王統ばかりでなく、英祖の統も察度の統もあつて、何れか判明しないのに、其の後一族の者が、之を舜天と速斷して、自分等は爲朝の子孫だと稱したりしたので、爲朝の琉球落の傳說は、向象賢の如き政治家が薩摩の歡心を買ふ爲に捏造したのではないかと疑ふ人が出て來るやうになつた。東恩納君の中學時代の歷史の先生の加藤三吾氏もその琉球の研究の中に、同樣の說を立てられたが、この說は其の後東恩納君の研究によつて訂正されなければならないやうになつた。今これをかいつまんで紹介して見よう。

向象賢が中山世鑑を書いたのは慶安三年であるが、それから四十五年前即ち慶長十年に、入唐の目的で琉球に渡つて三年間滯在した僧袋中は、琉球神道記を著はして、其の中に爲朝の琉球落のことを書いてゐる。これは元和三年向象賢の誕生に先立つこと十三年であるから、これ一つでも加藤氏の說は成立しなくなるが、琉球に長らくゐて國王の侍講となつた屋久島の如竹の先生の文之和尙も、慶長十三年に南浦文集を書いて、やはり爲朝のことを述べてゐる。元和の頃に日下部景衡は入唐の目的で琉球へ渡つて九ケ年ほど滯在した西定法師傳を著して、同じことを記してゐるから、爲朝渡來說は琉球の政治家が政策の爲に捏造したのでないことは明白である。以上は直接間接に琉球を研究した人々であるが、このことは五山の僧玄蘇長老が家康に献じた八島記の中にも見へてゐるのである。それから神道記の中に、爲朝の名が二ケ所に出てゐて其の一は波上權現の條に「中頃鎭西八郎爲朝此國ニ來リ、逆賊ヲ威シテ、今鬼神ヨリ飛礫ヲナス、其長人形許、其石亦此ニ留リヌ云々」とあり、其の二は洋權現の條に、「建立時代靈異等ノコト明ナラズ、熊野神ト見ヘタリ、愚案スルニ、爲友此國ヲ治メラル、時鬼神降伏ノ神タル故ニ念願アリテ立願云々」とあるが、かういふやうに爲朝の名は爲伴、爲友と二度まで間違つて書いたのは、袋中が不用意の間に筆を執つたといふ證據で、萬一彼が何か爲にする所があつて書いたとしたら、誤字なども書かずに、もつと小說的のものを書いたに相違ない。それから神道記の五の卷は慶長十年に出來たのであるが、慶長八年に袋中が書いた琉球往來記の中にそのことが見えてゐるから、この爲朝のことの書いてある五の卷の腹案が慶長八年以前に一通り出來上つてゐたやうにも見える。これで坪井九馬三博士が、爲朝傳說の捏造說とし

て、慶長十三年の南浦の文を引用されたのゝ誤りであることもわかる。云々。

神道記の記事は至つて簡單ではあるが、爲朝が今歸仁にゐたといふことなどは、彼が運天に上陸して、一時寺原（てらばる）の洞窟の中にゐたといふ今歸仁邊の口碑と一致するところがある。して見ると今から三百三十年前には爲朝に關する口碑は、比較的完全に遺つてゐたに相違ない。そして記錄なども或は遺つてゐたかも知れない。私の知つてゐる範圍內では、德川時代の史籍中で、爲朝の琉球落について書いたのは、大日本史、南島志、南聘紀考、中外經緯傳等であつて、明治時代の學者中で之を肯定したのは、重野、久米、星野、幣原の四博士であるが、就中重野博士は、其の薩藩史談集の中に、爲朝は薩摩の豪傑阿多の女婿であつて、鹿兒島城即ち今の城山邊にゐたから、彼が琉球の地理に明るくて、彼地へ渡つたといふとは、有り得べきことで、義經の蝦夷落とは比較にならないといふことを述べて居られる。當時日本々土と南島との交通が可なり開けてゐた史實を照らし合せて考へると、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

然らば爲朝琉球落の傳說は、如何なる形式で遺つてゐたかといふと、『おもろさうし』の十四の卷いろ／＼のゑさおもろさうしの四十六章に、それらしいオモロがある。

「（一）ぜりかくの、（二）のろの、
（三）あけしの、のろの、—
（四）あまぐれ、おろちへ、」
（五）よるい、（六）ぬらちへ、—
（七）うんてん、（八）つけて、
（九）こみなと、つけて
かつおうだけ、（一〇）さがゝ
あまぐれ、おろちへ、」
よろい、ぬらちへ、
（一一）やまとの、いくさ
（一二）やしろの、いくさ

私は之を爲朝の運天港上陸を呪つたオモロと思つてゐる。—

（釋）（一）ぜりかくは勢理客今歸仁の地名、今はジッチヤクと發音する。（二）のろは祝女、祈る人又は呪ふ人の義。（三）あけしはぜりかくの對語。（四）あまぐれは雨。琉球語で夕立のことをなつぐれ（夏雨）といつてゐる、このぐれはしぐれ（時雨）のぐれと同義の言葉であらう。（五）よるいは鎧。（六）ぬらちへは濡らして。（七）うむてんは運天、地名。（八）つけては着けて。（九）こみなとは小港、港內にある入江で、船舶の碇

泊するところ、俗にコンミヤトといつて、もと那覇港内にもあつたが、ふだんは唐船をつないでおいた。唐船小堀ともいつた。(一〇) さがるは下る、雨が降らうとする前に、雲が低くなること。(一一) やまとのいくさは大和の軍勢。(一二) やしろのいくさは、山城の軍勢。

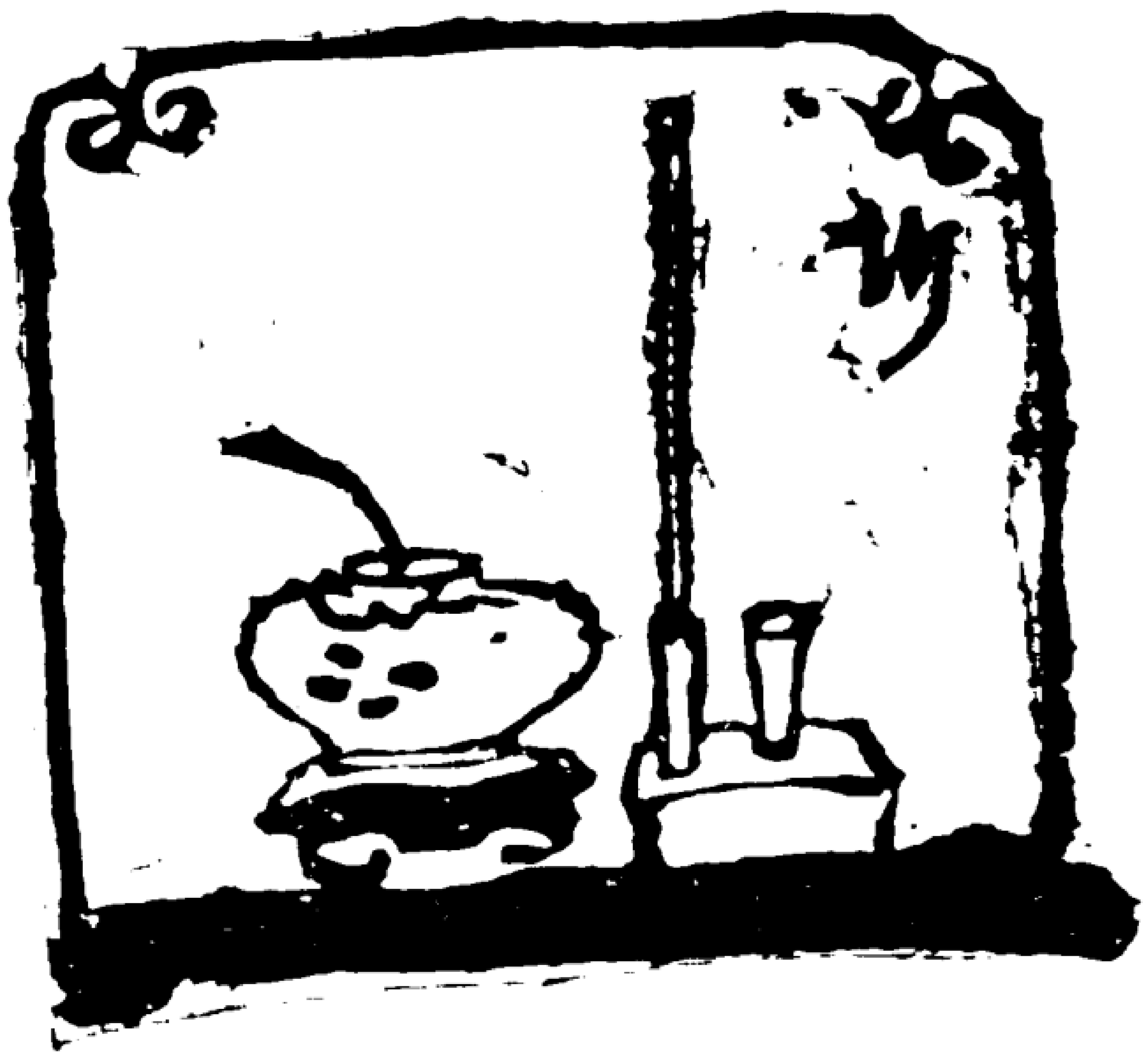
これを譯して見ると、勢理客の祝女が、アケシの祝女が、篩りを捧げて、雨雲を呼び下し、武士の鎧を濡らした。武士は運天に上陸したばかりであるのに、祝女は嘉津宇嶽にかゝつた雨雲を呼び下して、その鎧を濡らした。この人々は大和勢である、山城勢である。といふことになる。このオモロは暴風雨の日に、爲朝が運天港に漂着したといふ在來の口碑とも一致してゐる。が、單にそれだけではそれらの日本勢が果して爲朝であるかどうかは判然しない。けれども琉球史上で日本の鎧武者が運天に上陸したのは、慶長役の時と、もし他にありとすれば、爲朝の時とである。當時の琉球側の喜安日記や薩軍の陣中日記を見ると、當日は雨が降つてゐないから、このオモロが薩軍の運天上陸を呪つたものでないことだけは明白である。ところが偶にこれは倭寇の運天上陸を呪つたオモロではないかと推測する人がある。けれどもこれは强ひて倭寇などに結びつけるよりも、古來の傳說にある爲朝の事に結びつけた方が、むしろ無難のやうな氣がする。人或はこのオモロが呪ひのオモロであるのを見て、それは當時爲朝を歡迎したといふ口碑と合はないから、やはり倭寇を呪つたものに相違ないといふかも知れない。けれども考へて見るがいゝ。琉球側から見ると、爲朝にしろ、薩軍にしろ、一種の倭寇ではないか。歡迎云々といふ口碑は爲朝の子孫が勢力を得た後に出來たもので、爲朝も最初はきつと薩軍と同樣に呪はれたに相違ない。『おもろさうし』の一の卷の五章に西曆十五世紀の初葉に琉球を統一した英傑尙巴志の進軍を謳つたオモロがあるが、當時は魔術が武力に劣らないものと信ぜられてゐたから、その中に巫覡を戰の魁として、惡鬼を拂はせながら、進軍したといつたやうなことが見えてゐる。琉球の俚諺に「女は戰の魁」といふのがあるが、これはとりもなほさず、上古は女子が外交官であつたことをほのめかしてゐる。恐らくかういふ時の交渉員としては、男子よりも女子が一入適任であつたらう。女子の地位が今日よりもずつと高かつた上古に於ては、尙更さうであつたに相違ない。祭政一致時代には、どこの國でも、女子は神によつて一種不可思議な力を附與されて、豫言する力や魔術を行ふ力を持つてゐると考へられてゐた。かういふ例は日本の古史神話にも求めることが出來る。他の神々は猿田彦神の眼光の鋭いのに辟易して逡巡してゐたの

ども伴信友が、中外經緯傳の中に、「但し保元物語に爲朝十三にて筑紫へ下り九國を三年に討從へ六年初めて十八歳にて都に上り保元の亂に逢ひたる由見えたればはやく琉球へ渡りたることのあるまじきにもあらずさらでもその島のありさまをばかねて知りたるべく又その島に爲朝の渡り來れるは阿多が琉球に在る事を聞及びて渡りたるにてもあるべし云々」といつてゐるのは、耳を傾ける價値があると思ふ。

一寸横道に這入るが、私は時々、琉球には行つて見たいが、七島灘を越えなければならないから、いやだといふ聲を聞く。けれども南の海は年百年中しけてゐるのではない。勇敢な糸滿の漁夫は、小舟（さばに）と稱する獨木舟（くりぶね）に乘つて、那覇鹿兒島を往復することがある。私も數年前沖永良部島に、講演しにいつたとき、二百十日前後であつたので、五日の豫定でいつたのが、二十日間もあんな孤島にぶち込まれて、已むを得ずこの小舟（さばに）に乘つて沖繩へ歸つたことがある。和泊港から國頭郡の久志村の大浦港まで十五時間かゝつてゐたが非常に壯快な航海であつた。が、この時私は推古朝に島傳ひ浦傳ひに、大和の朝廷にいつたといふ南島人の氣持を十分に味はふことが出來て嬉しかつた。「御曹司は西國にて船には能く訓練せられたり云々」の保元物語の記事は、どこに據り所があつて書いたのかわからないが、この保元の勇將が、その青年時代に、島傳ひ浦傳ひに奄美大島諸島の探驗に出かけたことは、想像するに難くはない。他日彼が伊豆の大島から琉球へ渡つたのは、決して偶然ではないと思ふ。

終りに、私は平家一族の南島落のことを略述して、この稿を結ばう。壇の浦の一敗に、平家の一族が沒落して、南島に赴いたことは、國史の傳ふる所であるが、その蹤跡が、北は對馬から南は與那國（ユノーン）島に至るまで、點々相連つて、南海諸島に散布されるのを見る。幣原博士の南島沿革史論によると、彼等は（一）竹島（二）硫黄島、（三）黑島、（四）口之永良部島、（五）口之島、（六）中之島、（七）臥蛇島、（八）平島、（九）寶島、（十）大島本島、（十一）八重山島、（十二）與那國島等にその遺跡を止めてゐるが、沖繩本島内には何等の跟跡も止めてゐない。これは當時沖繩本島では爲朝の子孫が君臨して、勢を得てゐたから、平族は沒落の際、多くは茲を避けたのであらうと、幣原博士はいつて居られるが、これなども亦爲朝の琉球落の傍證とすることが出來よう。

要するに、今日では、爲朝の琉球落の史傳が、慶長十年以前（即ち琉球がまだ島津氏の附庸にならなかつた以前）に、琉球で信ぜられてゐたといふことは確事である。それ故に反證の擧らない限り、此の傳說を否定することは出來ないのである。（完）



狼へ

わが勞働（四）

藤森成吉

五　鐵工場勞働

いよいよ濃くなつて來た不景氣の爲め、遠州から歸つても容易に鐵工場の口が見つからない。困つてゐると、細井君から話を受けた。今自分の友人H君の行つてゐる處は、小さな鑄物工場だが、旋盤やボール盤の設備もある。まだ人を入れてもいいとか云つてゐるさうだから、もし外に口がなかつたら、當分そこへ行つて見ないか……。

H君と云ふのは、私もかねて見知り越しだ。出來るなら近代的大工場で働きたいのが、初めからの希望だつたが、小工場も又ちがつた勉強になるかも知れない、——さう考へて、私は世話を頼んだ。

四月初めの日、春信やうやく繁からうとする頃、私は同君に連れられて、再び龜戸の片はづれへ出かけた。

實は去年石鹼工場勞働後、東奔西走と云ふか南船北馬と云ふか、勞働を追つて碌々家にも落ちつかない、日月を閲しつづけて來た。僚勞の地はやつぱりなつかしく、一度龜戸の方へも行つて見たい、見たいと思ひながら、その多事な身邊の爲め、とうとう足踏みをせずにくらして來た。今再びその地を踏むと、「一年足らず前の記憶が泉のやうに湧きあがつて來る。くすぶれた工場のたたずまひ、眞ッ黒な水のただよひ、わびしい煙突の聳立、……依然として泥濕地の風景は少しも變つてゐない。」

見覺えのまがりくねつた道を辿つて、やがて私達は鐵工場へ着いた。見たところ實に汚ない小さな小屋だ。持主の住居も何も、工場へくツついてゐる。聞いて見ると、今日はH君は休んでゐると云ふので、直接持主の「親方」に工場で會つて、口を

頼み込んだ。

親方は不精ひげの濃い、色の赭黒い、五十恰好の人物だ。私の口は早速承諾してくれた。ところが、細井君の言葉がうますぎた。

「私も入れて頂ければそれほど結構なことはありませんが、この従兄弟(いとこ)がもう長らく口が無くて困つてゐますから、私は働かせて貰へなくも……」

と親方は、「ぢやアお二人で明日から來て下さい。」と云ふ承知ツぷりだ。

有難迷惑とはこの事だ。なるほど、細井君も失職して弱つてゐるには相違ない。が、私などとはちがつた熟練工だけ、同じ働くなら別の口へ入りたがつてゐたのだ。然しのつぴきならず、では二人共働かせて貰ふ、と云ふことになつた。私も面喰つた。明日からでは、こつちの方へ引き移つて來る暇さへない。で私だけ明後日からにして貰つた。

「飛んだ事になつちまつたもんですね」。

歸りみち氣の毒でならなくて云ふと、

「いや僕も働きますよ」と笑ひながら、「不思議なもんで、やつはりうれしい氣がしますね。どんな口でも、働かせて貰へると定(き)まつた時は、何だかかう有り難くなるから妙だ」。

これは恐らくすべての勞働者の氣もちだらう。それほど、彼等は常住の失職に惱まされてゐるのだ。

その歸り道、二人で早速あき間(ま)やら貸家やらを探し廻つた。この場合特筆しておきたいのは、龜戸邊の貸家は、大抵造作が附いてゐないと云ふことだ。家を借りたところで、疊もなければ、障子もない。借りた者は、そんなものを一切自分で買つて來て、自分で敷き又嵌めて住むのさ。そして引ッ越す時は、又取りはずして持つて行くのだ。何と云ふ特殊な。同じ東京でも、山の手邊の借家人なぞは、そんな借家があらうとは夢にも知るまい――。

どれもこれも陰濕な感じの、そのくせ割合安くない室や家ばかりなので――もつとも、去年などと比べて「貸家、貸間札(ふだ)」が著るしく眼につくが、――此の前泊つてゐたK館へ廻つて見た。と、ここにも幾つも空間(あきま)がある。一度住み馴れて勝手を知つた家でもあり、で、私は再びそこの三疊の一室を借りることに定めた。去年ゐた室は生憎ふさがつてゐるので、その隣りを。約束して、早速手廻りの道具やら夜具やらを運び込んだ。わづか一年にも足りないのに、もうひどく住み荒して、どこもかも傷やら汚れ跡やら、これがあの時分の室の一つかと見ちがへるばかりだ。

今度は女房の一緒に來るのをことはつたので、食事は自分で毎日こしらへるのも面倒くさく、一切近所の飯屋で濟ますことにした。つまり朝出勤前に行つて食ひ、辨當をつめて貰つて工場へ持つて行つて午を濟ませ、夜歸つて來ると、又出かけて行つて食ふ、と云ふ寸法だ。その一日の食費總計四十五錢だ。

と云へば、一たいどんな物を食はせるかと讀者はききたがるかも知れない。が、例の織物工場の飯なぞよりずつと贅澤だ。まづ麥半々なぞではなく、正銘の白飯だ。朝はちやんと味噌汁がつく。晝の菜は、雜魚の佃煮だの、がんもどきの切つたのだの、香々だの。夜は概ね魚が出る。その魚は、にしんいわしの半身だの、鰈の片身だの、みがき鰊だの――。

云ふ勿れ、選りに選つた安い魚だと。身體にはこれらはみんないい物で、又たしかに魚の匂ひと味がして、飯の分量も私なぞには食ひ足りる程度だ。然もこれで商賣の利得を見越してゐるところを見ると、例の織物工場なぞ、一體一日何錢の食代だつたか、改めてききたくなる。

とにかく用意は一切出來た。仕事着その他に至つては、去年からの物が引きつづきそツくりある。ただし手袋や鳥打ちなぞはひどく傷み、堅固な勞働服も、織物工場の釘であつちこつち鉤裂きが出來てゐるが。

では、工場の仕事はどんなことか、例によつて、一とほりの説明を試みやう。

働くことになつて初めて知つたが、鑄物業なぞと馬鹿にしてゐたのは大了簡ちがひで、木型、鍛工、仕上げ、等と共に、鐵工業のなかの重大な分野を形づくる仕事だつた。その製品や用途は隨分ひろく、從つて工場の大きさにもピンからキリまであるが、この工場では、自轉車の要部の金具一式、たとへばハンガア、ホーク、ヘツト、シイト、寄せかへし、バンドウその他を作るので、材料は鑄鐵ではなく、すべて練鐵だ。

第一に、型箱の仕事がある。それはいろんな木型を使ふ手仕事で、黒鉛の砂だの、河砂だの、鏝だの、筆だの、水だのを使つて、まづ「組み出し」をつくる。これは製品の型の外側に外ならない。他の連中は、同じく砂や鏝や芯金を使つて、型の中の部分「中子」をつくつて天日でかはかす。その二つを取り、組み出しのなかへうまく中子を入れて組み合はせて、型箱が出來あがる。

そんな箱が澤山出來あがると、一列十四個ばかり、閂い注ぎ口を上にして縦に並べ、繩や棒でしばりつけて、土間に七八列も寢かす。

一方、地金を「吹き」の爐の中の素焼きの鍋へ入れて、鎔

とのあひだへ初め木炭を燃やして投げ込み、あとスコップで一杯コークスをつめる。そして盛んにフイゴで風を送つて、上から蓋をかぶせて、炎々たる赤火の中に熱し融かす。何時間か掛つて融けた頃を見計らつて、親方ともう一人の古参とが相棒で、長い鐵の鋏に小さな黒鉛の壺を狹んでその地金の液體をすくい取り、例の砂箱の穴の中へ片端から注いで廻る。高度の熱に遭つて、黒鉛の壺も何も目のさめるやうな眞ツ紅な色に輝いてゐる。ドロドロの液が時々こぼれたり、又注ぎ損ふと、パシパシと焦げくさい青煙を立てゝ木箱が燃え出す。火の玉が眞ツ赤にころがる。と、傍から水注しの水をぶつかけて、一人が消してゆく。

やがてドシドシ繩を解いて、箱を五つ六つづゝ一緒に起して、一場所へ積みあげ、一づゝ中味の鑄物を砂山の中へ振り落す。兩手の指で箱の眞ん中をおさへて押し出すのだが、その指腹の熱さ、まるで火傷するかと思ふばかりだ。と、一人が濛々たる水蒸氣の中から鐵鋏で鑄物を拾ひ出して、傍のべつの砂山の上へ置き、他の一人が上へ輕く砂をふりかける。外の者は、又鑄物を拔いたあとの砂箱の砂を、端からトントン叩いて拂ひ落して、カタカタとあちこちに積みかさねて、やがて工場の片隅へ集めて何列かに高々と積みあげる。又繩なぞは一本一本束ねて、棒と一緒に型仕事の板台の下へ收ひ込む片方。親方は、全部注ぎ終ると鋏で筒を爐の中から引き出して、その眞ツ赤な奴を濕つた砂の中へうづめる。筒は大抵相次いで二つ使ふ。

これで「吹き」の仕事は濟んだのだ。やがて鑄物の冷えるのを待つて、砂の中からとり出してハンマアでセキを叩き落す。セキと云ふのは、鑄物へくついてゐる餘計な鐵の部分だ。そうやつて見ると、出來損ひの鑄物所謂「頑張り」も澤山見つかる。

そのあとで、滿足ないろんな形の鑄物を一つゞゝ取り、ピツシリ針金を植ゑつけたブラシで、まづ外側へくツついてゐる砂落しをやる。このブラシは、紡績の選毛機か何かのこはれを利用したものだそうで、一列に針金の植わつた太い奴と、一列に植わつたほそい奴とある。そいつを使ひ分けるのだ。

その外部の「砂拂ひ」が濟むと、今度はいろんな形のヤスリを使つて、内部の砂拂ひをする。それぞれの鑄物の恰好、又部分に依つて、ヤスリを取り換えては、こすりながら廻したり、芯金を引き拔いたり、尖つた先きで砂をつつき落したりするのだ。

簡單な仕事だが、やつぱりいろんな小熟練と、手早さを心要とする。仕事としては、前述の一切の過程も。この仕事も、決してそんなに苦勞ではない。べつに大した力も要らず、身體の鍛錬されて來た爲もあるだらうが、今までの勞働のどれよりも

らくだ。が、よごれるのと根氣の要るのが困る。
　何しろ細かい眞ツ黒な砂ばかり扱ふ。だから一日、いな半日砂拂ひをやれば、手ばかりか、顔も鼻の穴も足も眞ツ黒になる。帽子の大嫌ひな私が、前の勞働と同じに今度も始終鳥打ちをかぶつてゐたが、地が薄い爲め、布をしみとほして髪がよごれ、襟がよごれる。昨は眞ツ白な綿ぼこり、今日は黒い砂煙、まさに雪と炭との相違だが、ほこりだらけになることは全く同じだ。眼さへ澁くなり、痰も氣味わるく眞ツ黒になる。
　砂拂ひをする時には、又坐業で、小さな板箱か何かの上へ切れかかつたよごれた布の一枚も敷いて、一日腰かけてかがんでゐる。だからその尻の痛さ。時々しびれて來ては立ちあがる——。
　さて砂拂ひが終ると、今度はナマシにかける。鑄物をみんな鐵の長い大きな圓筒に入れて、そのあいだへギツシリ金くそをくだいた小粒を詰め、ナマシの高い大かまどの眞ン中へ据ゑつけて、煉瓦を積んで扉代りに前の口を密閉する。それから頂邊の四角の穴から、コークスを一杯つめて、二晝夜足らず熱しつづける。やがて冷えた時分を見計らつて、圓筒をころがし落して、中に金くそと一緒にかたまりついてゐる鑄物を、棒やハンマアで蓆の上へだんだん叩きだす。
　一方では、そいつを端からハンマアで叩いて金くそを落す。
　ところがその金くその、時々頑丈にくツついてゐる事ツたらない。どれが鑄物やら金くそやら、まるで鍍のやうに黒紫色にこごツてゐる。その無數の尖端の、手へ突き刺さる痛さ。然も、いくら手を變へ品を變へて叩いても、鑄物の内部へ燒けついた金くそなぞ、どうしても取れないことがあつて、又泣きたい時がある。
　どうにかあらまし取ると、工場の片隅の、ガラと稱する六角の長い鐵筒の中へ入れて、いろんな鐵の切り拔き型を混ぜて、ガラガラ、ガラガラ、動力で三十分間以上も廻轉させる。その騷々しい音樂につれて、摩擦によつて奇麗に金くそが除かれる。と、みんな仕上げ部へ廻して、ボール盤や旋盤で仕上げて油をつける。それでやつと完全な製品になる。
　が、その工程のあひだにも、ナマシ足りなくてもう一遍ナマシなほしたり、地金が惡い爲め「吹き」のあとしらべるとスが入つたやうに鐵の中に空洞があつて、又潰して鑄なほしたり、「酸素屋」へ持つていつて、少しばかり穴のあいてゐる製品なぞは、一つ五錢づゝで穴を塞いで貰つたり、いろんな面倒な手數がかゝる。
　一體ナマスのは、鑄物を柔かくする爲めだ。吹いたゞけでは、鐵が硬くもろく、じきかけ易いのが、ナマシにかけると柔

級にしてこはれなくなるのだ。

その時叩き落した金くその塊りは、みんな金網の篩でふるつて、ガラの傍の箱へ收つておいて使ふ。殘りの大きな塊りは、ハンマアで丹念に突き砕いて、ふるいなほすのだ。砂もさうだ。使つたあとでは又みんな集き集めて、篩でふるつて、何遍でも繰り返して使ふのだ。

以上で工程の大略を書いた。次に、私のやつた仕事を掻いつまもう。

一言にすれば、あらゆる雑用をさせられたのだ。細井君などは例の砂型の方だつたが（もつとも、三日に一遍位の「吹き」の時には、十人ばかりの全職工が協力しなければいけない）。私はおもに砂拂ひの役だつた。そのほか金くそ落しや、炭起しも、水拔みも、何でもやる。「吹き」やナマシの竈や筒を修繕する爲めの、土捏ねの仕事も手傳ふ。コークス割りもやれば、地金の選り分けもやる。

このコークス割りには、特別の鐵鎚と鐵砧と手袋――と居つてもボロ〳〵の――が備はつてゐる。手袋は、手が荒れるからだ。が、實際は前の金くそ落しのほうがはるかに手をいためる。慣れない者なぞ、とても裸手で持てるものではない。然もそつちには手袋も何も貸してくれないので、自分の奴を使ふと、一日ですつかり穴があく。

總體、私のやつた仕事は手をいたくするものばかりだ。第一の砂拂ひからが、ヤスリや砂で手をこすりどほしだ。それから地金の選り分けと云ふのは、「吹き」やナマシの爐の底からすくひ出した土丼を、工場のそとへ山と積みあげてあるのを、端から金網の篩に入れて傍の池の水で洗ひ、中からコークスや地金を選り取る仕事だが、實は後者より前者のほうがずつと多い。その焼け殘りのコークスをつまむ爲め、指の腹の荒れかたと云つたらない。

あれやこれやが重なつて、兩手の指はいつも傷だらけ。ほとんど指紋さへ消滅してわからない。痛くもあり、私は毎日仕事のあとメンソレータムを塗りとほしてゐたが、なほらばこそ、勞働終了後半月を經てもまだ傷んで、皮がむけつゞけてゐた。

そのほか火傷したり、ハンマアで打ち損つたり、怪我を擧げればキリがない。

さてそんな仕事を、毎朝七時から夕方の六時まで十一時間づつ續けて、賃銀はと云へば初給一圓十錢、乃至二十錢だ。乃至とは、老人なぞだと十錢、働き盛りなら二十錢のことだ。ところが、「吹き」のある日には、時々とてつもなく仕事がおそくまで掛る。或る晩なぞ、實に八時半まで働かせられたことがあ

つた。いくら「吹き」でも、そのつもりで手廻しをよくさへすれば、決してそんなに長くかける必要はない。云はば、殘業に名を借りての時間の延長だ。もつとも、殘業手當を出さないことはないが、一時間十二錢位の割增しに過ぎない。

でも私達普通の職工はいい方だ。工場には、ほかに二人ばかり年期奉公的に住み込んでゐる仲間がゐたが、彼等は時々、夜十二時頃まで働かせられることがあつた。そして手當と云へば、今年七年もつづけて勤めてゐる一人の十九歲の若者なぞ、食糧以外、半月ごとわづか五圓の小遣ひを貰ふだけ。然も一月二回第一第三日曜の定休日でも、何だ彼だと云つて一家の雜用をさせられる。云はば奴隸生活だ。

勘定日は、今云つたやうに半月ごとだ。ところが、仲々當日賃金を呉れない。いつでも二三日はおそくなる。それ位なら我慢するとしても、或る時なぞ一週間あまりも、ズルズルに長延かされたことがあつた。そいつをやつと催促してみんな受け取つたが、その亂暴さ加減はあきれかへるばかりだ。

一體大工場とちがつて、こんな私人の小工場では、支拂ひばかりでなく萬事がだらしない。工場の設備なども、どこからどこまでが工場か、親方達一家の住居の部類か、ハツキリわからなければ、就業時間なども、朝少しおくれて云つてもいい代り、夕方は默つてゐればいつまでもやらせたり、一時間の午休みも、てんで有名無實だ。細井君とH君と私とは、わざと決して一時間以内には仕事しないやうにしてゐたが、ほかの仲間達は、飯を食つて了つたかと思ふと、もういつか又仕事に取りかかる。

そんなことは當然の權利でもあり、みんなで團結すれば何でもなくとほることだのに、……だから、いつまで經つても勞働者は頭があがらない。自業自得だ、——と云つて、細井君達は憤慨してゐたが、今までのかなり大きな會社その他の勞働に對照して、この小工場の雰圍氣は、一面私に取つてはいい經驗だつた。各種各態の勞働樣式や、勞働者の氣質の私達や、生活狀態と共に、又經營の大小に依る差違の大體がわかつた。

その外のだらしなさについて、一々くどくは書かないが、昔の手工業時代なら知らず、今のやうな時代では、他のいろんな非人間的態度や條件にもかかはらず、やつぱり一般勞働者が、なるべく大きな工場へ工場へと走る理由が、如何にも肯ける。工場が小さければ、概ねそれだけ生活の不安も強く、周圍へ對してのひけ目も感じさせられるのだ。その傾向からも、ますます大工業的時代が進み、資本主義は發達するところまで發達してゆくだらう。

興味のあつたのは、この再度の亀戸住居と工場通ひとで、去年の工場仲間に時々出會つたことだ。鐵工場へ行くには、例のK石鹼工場の横をとほつて行かなければいけない。朝は少しこちらがおそく、歸る時刻も一時間あまり遅れるので、あまり行き歸りに顏の合ふやうなこともなかつたが、でも時々はぶつつかる。向ふでは、一時ゐたに過ぎなく、顏もその時とは少し變つてゐるだらう私を、恐らく通りすがりに感じることも尠かつたらうが、私のほうは大抵の顏に見覺えがある。女工から女事務員から給仕まで。――年若な男工達を見ると、あの先きに希望の尠い會社で、今もまだ働いてゐるのか、と、いつもおどろかせられる。が、この頃は不景氣で、さつぱり例の名物の「職工募集」の板のかかつてゐるのを見たことがない、とは細井君の言葉だ。

これで大體の記錄を濟ませた。ただ最後に一つ憶ひ出を書けば、今年ほど私は變つた春の經驗をしたことはない。實際、生れてはじめての不思議な春だつた。去年は夏にかかつてゐたので、綠色の見られない周圍の陰慘さばかりを感じたが、今度は艶陽四月の候、どこにもほとんど花を見ないおどろきに打たれた。

と云つてもやつぱり春だ。昔葛飾の平野の名殘をとどめた沼の一つ、――私達の働いてゐた工場の傍のそれの、相變らず眞ッ黑に腐つてゐる水の中にも、綠色の葦の芽が少しづつ萠え出して、煤煙くさい春風にナヨナヨと柔い頭をゆすつてゐる。例の地金拾ひの仕事で、ごみ土の篩を沼の中でザブザブゆすると、魚一つゐない水の一種特別な匂ひがプンと匂つて來る。

それは獨特の春だつた。又、ほんとうに春を知つた春だつた。

六　製絲工場

これは、信州の大製絲業地の勞働だ。あの天龍川の水上に遡れば、日本の生絲生産の最大中心が存在してゐる。そう云へば讀者はすでにそのどこかを容易に了解するだらう。

日本の産物として又外國輸出品として、生糸がどんな地位を占めてゐるかも、夙に聰明な讀者の知り拔いてゐることだらう。このことは、そこに働く職工の大部分が女である事實と相待つて、ともすれば長いあいだかなり世間へひびいてゐるその工場内の野蠻な風習を、默認、又は默過する傾向のもとをなしてゐる。現に土地の人々の間にも、そう云ふ口吻乃至考へを持つた者がドッサリある。

が、そんな考への誤りは、無論指摘するまでもない。その工場の事實については、土地に生れた一人として、小さな時分か

らいろんなことを澤山見聞きしてゐる。讀者の中にも、或は私の舊作「娘」又は「湖水の彼方」等をよまれた人があるかも知れない。このことについては出來るだけ詳しく書きたいが、今書けない事情がある。主として、自分の勞働の爲めに盡力してくれた人達その他の迷惑の爲めに。

それに、私が働きに行つた時は、丁度春挽きと夏挽きのあいだだつた。念を入れながらついうつかりして了つたのだ。もつとも、私としてはいろいろな都合もあつた。本來の計畫では、これらの勞働はもつとゆつくり時間をかけて、早くとも今年の今ごろまではやるつもりだつた。それが、實際して見るとだんだんに切りつまり、おまけに不景氣その他が手傳つて短くなつたのだ。

殊に今年は、例年より春挽きが早く濟んだ。いろんな理由で、一般製絲家達の去年の繭の買入れが尠かつたのだ。もし澤山貯繭のある年には、間挽きと云つて、五月から六月へかけて一月ばかりのあひまも休まずに、ぶッつゞけに取りさへするのだ。それが、今年は五月の半ばには、もうどこの工場でもドンドン工女の歸鄕輸送を開始してゐた。そこへ持つて來て……それは書けない。で、甚だ讀者に取つても、又私に取つても不滿足だが、どんな種類の仕事をしたかも一切抛擲して、ただ一般的の見聞を記すにとどめたい。

製糸工場と云つても、——土地の人達は、一口にキカイと呼び慣はしてゐる——中にはいろんな部がある。所謂製絲部もあり、倉庫部もあり、又蛹工場なぞまで含めてゐる。

製絲部のホンの大略を云へば、まづ選繭部で選び取つた繭を、煮繭機へかけて煮る。これは、もと各製絲工女が、自分の台の片側の小さな煮繭器で、糸を取る傍自分で煮たものだ。今でも、小さな工場ではみんなそうやつてゐる。それは、仕事のうへからは手間も取れず經濟にちがひないが、かうして別に煮繭部が獨立するとなると、以前より反つて工女の操糸勞働そのものは激しく、忙しくならざるを得ない。

仕事場のこまかい事なぞは書かない。が、工女——この地方では決して女工と云はない、——の一番心を使ふのは、澤山糸口を立てる事と、ガラを揃へる事だ。つまり、糸の分量を多く引くのと、太さ細さのムラのない糸を取るのだ。明けても暮れても、工女の關心事はそのことだけだ。話し合ふこともそれなら寢て夢に見ることとさへそれだ。まるで脅迫觀念だ。それもその筈、工場にはその爲めのあらゆる賞と罰が備はつてゐ、てきめん賃金に影響し、又たとへどれだけ知識や學問があつたところで、糸を操ることの下手な者は誰にも顧られない」

だから、もしうまく糸目でも立ちはじめたら、工女は夢中になつて、飯さへ碌々食はずに操る。食事時間が來ても、飯を飲み込むか飲み込まないで、又あはてて糸のところへ驅けつける。てきめん彼女等の食量は減退し、消化器管は害される。工女達の病氣として、第一に消化器病（その次は呼吸器病、婦人病、脚氣等の順序）が多數を占めてゐるのは、實に主にその理由にもとづく。

が、操糸の巧拙は、熟練にもよるが、一つは他のすべての事と同じく、その人間の、素質にある。いくら努めても、下手な者はやつぱり下手だ。然し、あのほそい糸を間斷なくたぐりあげるすばやさ、……どんな工女でも、すくなくとも三ケ月經たなければ一人前の仕事は出來ないと云はれてゐる。

その次に再操部の仕事へ移る。これは「揚げ返し」と呼ばれて、さきの小枠へ巻きつけた絹糸を、もう一遍大枠へ巻きなほす仕事だ。ここの工女は、一人が十七枠位づつ受け持つて、巻きついてゆく途中で糸の切れるのを立番する役目だ。もし切れれば、貼りつけてある小さな紙片へ、端から鉛筆で印しをつけて行く。あとでそれが計算され、その小枠を巻いた工女はそれだけの罰を受けて、日給から差し引かれるのだ。何しろほそい糸だ。大抵四本の原糸がよれ合つて一本になつてゐるのだが、私なぞが見たのでは、てんで糸の存在さへわからない位だ。

その次に大枠の糸をより合はせて、その一束づつを三十本、木の道具へ入れて紐でしばる。その十六集つたのを一梱と云ふ。去年秋あたりの相場は、百斤につき千四百と云はれたが、一梱は五十何斤に當るのだ。が、この仕事はすでに工女の手をはなれて、光線の調子を工夫した室で男がやる。

男工達の仕事は、そのほかに工女の手傳もあれば、監督もある。監督、即ち「見番」と稱せられる男達が、如何に威張つてゐ、妙な權力を持ち、然も無知で、或は勝手に、或は暗々裏に工場幹部の工女惹引策の手先きとなつて工女達と關係を結んで、所謂風紀を紊し、墮胎その他の公然の秘密をおこなつてゐるかは、知る人はよく知つてゐるだらう。私が働いてゐる最中聞いたストトン節にも、こんなのがあつた。

工場廻りの見番さん、
すきなねエさんの傍に行き、
糸目切らすな、觸出すな、
どうして妬かずにゐられやうか、
　ア、スツトントン、スツトントン。

この短い唄の一節によつても、見番の位地と工女の心理が、大體了解されるだらう。工女募集手段の激烈さと惡辣さに至つ

ても、又天下に著聞してゐる。昔に較べれば随分改善されたと云はれながら、なほ且つ不足勝ちな工女の頭を強ゐて揃へる爲めに、あまねく近縣に派遣される募集人達の人間の程度を見れば、それもほんの外面的進歩にすぎまい。

一體監督なぞ云ふものは、ほかの工場でも職工長が純粋勞働者の仲間に入つてゐないやうに、勞働者とは云へない人間だ。彼等は、ほとんどすべて、小僧時代からキカイの中で育つてゐる。從つて、キカイの中のことは實に詳しいが、一歩そとの世界に關してはまるで無知だ。新聞さへ碌々よめない者が今でもザラだ――。

倉庫部なぞの純粋な男工達は、繭の乾燥、搬入搬出、その他一切の雜用をさせられる。殊に、毎年十二月半ばすぎから翌年二月末までの操糸休止期間、又例の春挽きと夏挽きの合間なぞは、實に千態萬様の手傳ひをつとめさせられる。勞働者とは云つても、とても男工なぞとは云へない仕事だ。

滑稽なことは、どこのキカイでも、例の工場法は彼等には一切適用されてゐない。それは、ただ工女だけに當てはめられるのだ。たとへば、一ケ月に十五日と三十日の二回の定休も、毎朝六時から夜六時までの勞働時間も、(實は、もつと晩くまで幾らでも働かせられるが)。食事休みその他全部一時間の規定も、工女だけの權利で、男工はあづからない

私が働いてゐた時なぞ、實に朝四時半に起されて、五時から夕方の七時まで、つまり日が出てから日が入るまでと云ふ古風なモツトオのもとに、十四時間も働かせられた。あまり日が長いので、そのあいだ四度(六時、十時、二時半、終業後)飯を食ふ始末だ。仕事の程度はそれほど苛酷ではない。が、休憩時間もなければ定休日もない。もし休みたければ、缺勤するより仕方がない。

初給二十錢から六十錢程度の日給も、(食事等は勿論工場持ちだが)。ただみんな日勤簿へ捺印して貰つておくだけで、請求しない限り何年經つても拂つて貰へない。だから、要るだけ時々小遣ひとして出して貰ふのだ。あんまり一度に多く、又はたびたび引き出そうとすると、文句を云はれる。工女のほうは、とにかく十二月には一とほりの勘定を貰へるが。

ついでに一言云つておきたいのは、例の過酷な罰金制度なぞは、一面工女達のズボラを防ぐ手段だと共に、一面、明かに工場經營者の私腹をこやす一收入とされてゐることだ。そもそも工女の賃金計算法からが、非常にこみ入つた、又公明を缺いたものだ。そのほんとうの計算を知つてゐる者は、どの工場にも二三人きりゐないと云はれてゐる。一方總監督達は、給金は

安くてゐながら、その工女達の賃金の頭をはねたり、出入り商人からコンミツションを取つたりする爲め、工場主を凌ぐ收入だと稱せられてゐる――。

所謂紡工場などの勞働者に至つては、更にひどい。もツとも、これは小さな工場の話だが、みんな毎朝四時頃から、夜の六時、七時、乃至八時位までも働かせられる。それは、一遍糸を取つたあとの繭を、湯や水のなかでヨロゲたり洗つたりして、振り綿（絹紡績の材料）をつくつたり、又あとの繭を搾め木にかけて、工業用や食用の油を取つたりする仕事だが、その過勞に對して、やつぱり無定休、無休憩、食費先方持ちの、一日一圓位の日給にしか當らない。

この勞働で、私ははじめて男工の寄宿舍へ入つて仲間達と一緒に寢起きしたが、その大體を書いて見やう。

勞働時間と食事時間は前に記した。晩飯のあと、すぐみんな二階の自分の室へ引きあげるが、それは丁度芝居の大部屋のやうな物のいくつかのつらなりで、眞ん中に板の間がとほり、兩側の縁無し疊が一室二十二疊敷。一疊につき一人位の割合だ。工女の方も今は大抵さうらしいが、これは昔から見れば非常な進歩で、もとは一疊に二人乃至三人と云はれたものだ。

天井は梁木がまる出しで、天井板は一切張つてない。その室の兩側に、一列位棚が打ちつけてあつて、下の棚へは貸して貰つた夜具を、上へは行李だのバスケツトだの風呂敷包みだのをのせておく。夜具と云つても、會社の名入りの紺の掛布團二枚と、下敷き一枚だが、狹くて短くて、寢れば足首から先き疊の上へハミ出す。おまけに前の人間の使つた古いのをそのまま貸すので、洗つたり消毒なぞしてくれるのではない。

それでも唯一の休息の場所だ。室へ戻つて來ると、みんな大抵すぐ夜具を敷いて、どてらなぞを着込んで、或は腹這ひになりながら、或は胡坐を掻きながら、髮の手入れをしたり、雜談したり、ハガキを書いたり、古い講談雜誌をよんだりする。特筆するに足ることは、新聞をよむ者のほとんどないことだ。稀に見てゐる者があるかと思へば、五六日も前の古新聞をどこかから借りて來てひろげてゐるさわぎだ。

そこへ、よその室から話しに押しかけて來る連中もある。どうかすると、思想惡化問題などについて話し初める こともある。「かう世の中がセチ辛くなつて來りやア、どうしても思想が惡化して來るだな。社會主義者なんちう者が出るのも、無理アねえだ」。と云つたやうに。

又滑稽なことは、時々隣りの女工寄宿舍から、女房が亭主をたづねて來ることだ。

いくら夫婦でも、寄宿舍へ入つて了へば截然と男と女に分たれるので、仕事のあとで會ひに來るのだ。勿論「夫婦室」と云ふ、別の長屋建てもあつて、家賃も少ければ、購買組合によつて日用品も安く買へるやうな設備がないことはない。が、その數が尠く、又故參にならなければ入れないので、とても空きがないのだ。悲慘な滑稽と云ふか、滑稽な悲慘と云ふか、見てゐて氣の毒になる。

晩飯後風呂に入ることもある。三日目ごとに、炊事場に隣り合つた風呂がわくのだ。その時は、最初男工が入つて、その濟んだあとで女工が入る、と云ふ規定になつてゐる。が、實際は、そんなことをしてゐれば、何しろ大勢でもあり、どんどん手間取つて、寢る時間にまで差し支へて來る。そこで、まだ男工達が入つてゐるうちから、もうゾロゾロ工女達がつめかけて、湯槽のなかで一緒になる。

この事ばかりではない。すべてのことに規定の裏がある。そしてそれは、或る點まで必然的要求に依つてゐる。もしそれがいけないと云ふなら、工場當事者自身、そう云ふ結果に導かなければやまないところの勞働時間、その他一切の不合理をなほせ。

就寢時間は夜の九時ときめられてゐる。が、ただ合圖の拍子木が鳴るだけで、一室一燈の十燭位の暗い電氣は一晩ぢう點きツきり、時間後も起きてゐる連中がドッサリゐる。

工女のほうの寄宿舍の構造も、男のほうと少しも變らない。ただ階下の、階子段の脇あたりの板の間に「結髮所」と稱して、小さな鏡台の二つも置いてあるのと、裁縫室が一つ位くツついてゐるのが、ちがふと云へばちがふだけだ。

その寄宿舍全體の掃除は、小使がゐて、毎朝みんなが出かけると一緒に、箒で掃き出したり板の間の雜巾を掛けたりする。だから、どこもかしこも割合きれいだ。(ただし、これらのことは、すべて私のゐた有名な大キカイのことで、他の設備の不完全な小さなキカイに至ては、實に千差萬別なことを承知して貰ひたい)。が、それでも、涼しい山國の五月なのにすでに何疋となく蚤がゐて、毎晩身體ぢう痒くて眠られなくて、私は閉口した。しらみなぞに至つては、夏冬とも絶えないらしい。蚊もそろそろ出はじめてゐた。眞夏になれば、大きなボロ蚊帳を釣つてその中へ工男工女を收容する工場もなくはないが普通はただ窓や入口へ蚊帳の布を張つて、ホンの云ひわけだけ蚊軍防止の設備をする。まあ大きな營舘を思へばまちがひはない。

ついでに食事のことを書くと、四度とも食堂へ集つてやるのだが、飯は、前の織物工場とちがつて白飯だ。それへいつも、

大根、茄子、菜ツ葉などの漬物がつき、又朝晩、味噌汁を飲みたい放題飲める。その味噌は、みんな會社が男工を使つて作つて貯藏しておくもので、なかへウンと甘酒を入れた、晉にひびく信州味噌だ。これは、私なぞに取つては何よりありがたいことだ。實には菜ツ葉だの氷豆腐だの（他地方では高野豆腐と云ふ奴だ。）が入り、時には味つけにチョツピリ煮干しが入る。そのほかの菜は、煮めだの、昆布の煮つけだの、豆だの、牛蒡だので、時には副皿に、鯖の煮たのやミガキ鰊なぞが出ることもある。

それらの茶碗（同じく會社名入りの）や皿と一緒に、低い赤塗りの膳を一ぜんづつ借りて、濟めばフキンで拭いて、片側の棚へのせておくのだ。

そのほかに、一月一度か二度、落花生だの菓子だのを少しづつくれる。製絲部の工女達には、そう云ふ間食に「地梨」の鹽漬けにしたのを食べさせることは、私なぞの子供時分から耳慣れた話柄だ。

ここで一言附け加へておきたいのは、この地方の職工仲間の言葉の丁寧さだ。一體私の故郷には、ほかの地方へ行つては一寸聞けない丁寧な言葉の存在してゐることを、私は前から氣づいてゐた。が、今度勞働して見て、勞働仲間のあいだにも、到底他では見つけられない一種の禮儀ぶかさがあることをハッキリ知つた。

たとへば、瀬戸あたりの工場では、少し故參になれば格別、新米のうちは、たとへ朝工場へ入つて行つて挨拶をしても、返事をしてくれる者はたんとない。甚しいのに到つては、その人間の前で頭をさげても、まるで聞えなかつたやうに、どこを風が吹くと云つた濟ました顔つきをしてゐる。ほかの時には決して不愛想でない人間でゐながらそうだ。これは、私に取つて著るしく印象ぶかい特質だつた。ところが、今度ここへ來て挨拶などすると、ちやんと返事をかへさない者はない。いな、私のやうな新參者にさへ、中には向ふから「お早う御座ゐます」「おつかれさま」（これは晩の挨拶）などと聲をかける者がある。

それだけならいい。時には丁寧すぎておどろくやうなことがある。たとへば、食堂で搔ッ込んでゐる時など、あとから來て傍へ腰かける者は、大抵「おしづかに」と云ふ。それから先きへ立つ時は、又みんな「おしづかに」とか「御ゆつくり」とか云ひ殘す。

これには面喰つてしまつた。何も、そんなことまでいはなくてもいいぢやアないか、と、云はれて恐縮し、云つて面倒くさ

くて困る氣がした。何しろ慣れないので、つい云ひ忘れてばかりゐる。すると或る晩のこと、寄宿舍の二階で、私の向ふ側に寢る、少し私より先きへ入社してゐた若者が、その隣りの先輩の若者から、

「おめえ、なぜ朝、お早う御座ゐますッて云はずに、知らん顏をしてゐるだ？　みんな、陰ぢやアよく云つてねえぞ。」

と、たしなめられてゐる言葉を、ふと耳にした。こいつはいけない、と思つて、その後は私も、せいぜい「おしづかに」を忘れないやうに氣をつけた。

この挿話でわかるやうに、少し慣れないと面倒くさい點もあるが、まるで地の底へしみ込んでゐるやうな一般勞働者仲間の禮儀深さ、その邊の言葉で云へば「まていさ」には、私はかなりなつかしさを覺えた。最後にこの故郷へ來て、又その地方の勞働者のなかへ入つて、初めてほんとうに生れた土地の氣風に、シツカリ觸れた氣がした。これは、眞に故郷に惹かれる人間の心だらうか。

その外、まだ病氣の工女の待遇やら、資本の大規模にも似ず、バラツク建て見たやうな工場の設備やら、又キカイから戻つてゆく工女達によつて、農村の青年のあひだに惹起されゐる恐慌やら、書かなければならない問題はいくらでもある、が、」

以上で簡略な記事を打ち切る。

最後の日の朝、私は工場を出て、天龍川の源へかかつた長い橋を渡つて、その向ふ岸にそびえた小山の公園へのぼつて行つた。その黒い釣橋を渡るのも、青々と樹の繁つた公園へあがるのも、實に足かけ十年餘りのことだつた。その當時――いな、子供時分からのことを憶ひ、どうにか無事に最後の仕事を終つた自分を思ひ、又うらゝかに晴れ渡つた夏の日の下に、一方には鏡のやうに凪ぎわたつた湖水のおもてを、一方には、一面起伏した大小の工場やら倉庫やら煙突やらを見おろして、私は一種感慨の胸に滿つるのを禁じ得なかつた。」

結末に

冗たらしい、一般讀者に取つては或は面白くもなかつたらう勞働輪廓の記錄を終つて、讀者に謝すると一緒に、もう一言云ふを許さしめよ。

私のこの計畫は、最も値踏みしても、私一個の內部的成長として殘るのみで、くどくどしく他の問題に渡るべき性質のものではないかも知れない。が、理屈はとにかく、是非一般日本の識者に訴えたいことがある。

自分で勞働して見て第一に感じたことは、日本の勞働者の自

由が實にまだ認められてゐないことだ。封建の名殘りが、依然到るところに匂つてゐることだ。

これを、現代英國その他の勞働者の狀態に較べて見、又兩資本家乃至一般社會の氣もちや考へかたに對照して見ると、そのあひだに著るしい遲延がある。歐洲の資本家達は、とにかく、一遍個人主義乃至自由主義の時代を經て來てゐる。が、日本のそれは、あれほど一時自由民權の聲のなかをくぐりながら、又ヨリ根抵的自由思想を一方の知識階級に聞きながら、實は封建時代から一足飛びに、現代資本主義へ移つてゐる氣がする。所謂個人主義乃至自由主義の是非論は措く。一度資本家階級がその洗禮を受けてゐることは、事實に於いてたしかに勞働者の爲めに幸福だ。日本の勞働者は、その點で著るしく不幸だ。資本家達は、今でもなほ且つあまりにわからなすぎる。勞働問題の根抵すら、一般にわかつてゐるだらうかと疑はれる。

資本家達のその頭腦の程度は、てきめん事實に現はれてゐる。日本に、今なほ徒弟制度が大きな勢力を持ち、又所謂勞働者の世界に於いてすら「住み込み」制が、殊に地方にあつては到るところに行はれてゐるのは、その明かな例證だ。

この事は、勞働問題又は社會問題を云々する人々に取つて、よく考へて見なければならないことではないか。抛るなら抛つておいてもいい。封建から一足飛びに資本主義へ移つた日本は、もう一遍、××××××××××××××××××××××どこにでも見よ。ただ私は、現實の勞働者の苦楚を見るに忍びずして云ふばかりだ。

第二に關連して云ひたいことは、勞働時間だ。乏しい私の記錄を以てしても、この事については一々明確に記し、又一部の感想も述べて來たから、日本の一般勞働時間の恐るべき長さと不合理については、識者はわかりすぎるほどわかつてゐるだらう。が、これはいくらすぎてもいい。現實の勞働時間の短縮が實現されるまでは。

小工場の、朝四時から夜九時までの勞働等に至つては、もう云ふべき勇氣さへない。が、工場法規定を受けてゐる工場でさへ、充分長すぎ、又事實に於いてヨリ以上長すぎる。勞働能率の醫學的限界などと云ふ、鹿つめらしい勿體ぶつた議論は不必要だ。實際勞働して見よ。さうすれば、標準八時間で、然も充分長すぎることが、身に徹して了解されるだらう。ただ身體がつづくか、つづかないかの問題ではない。人間としての生存權の問題だ。それ以上働かせて、果して人間の生存權が認められてゐると云へるか？　罪惡の匂ひがないと云へるか？　私は、自分で經驗した六回のうちの最短の十時間勞働で、なほかつ身の

廻りの用事の何一つ出來ないことを痛感した。そんなことは、すべて人間として贅澤であるか。云ひ得られる勇者は云つて見よ。

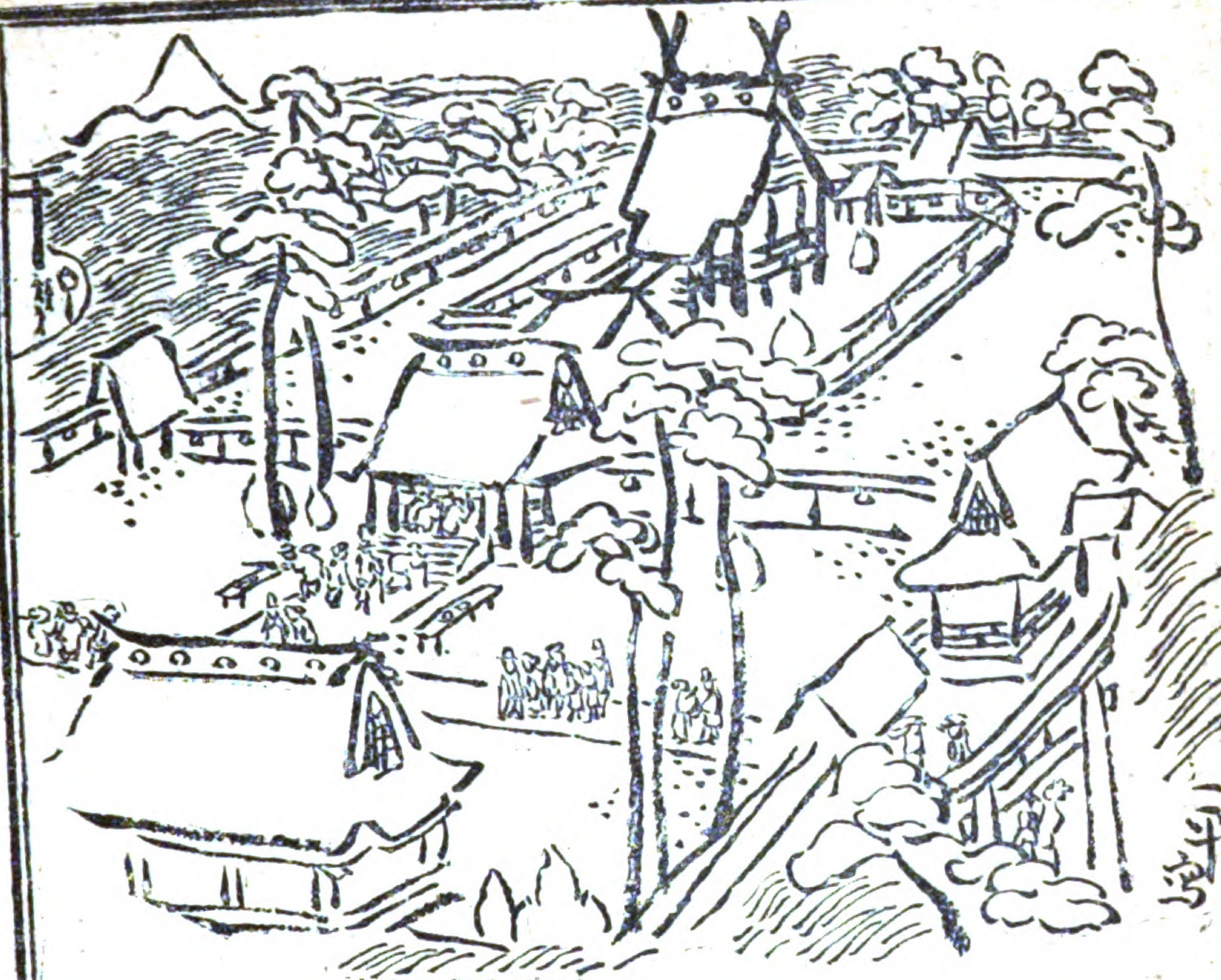
この勞働時間の問題は、實に何にも增して勞働問題の核心を形づくる。賃銀問題も、勞働者の自覺乃至向上問題も、これを度外視しては一の實効もない。所謂搾取と云ふ言葉を、人々は今まであまりに、單に經濟學的に、賃銀をとほしての意味に使ひすぎて來た。外國は措き、現在の日本では、「時間の搾取」と云ふ言葉こそ、勞働狀態の全豹を一言に現はすに最も適してゐると信じる。

時間の搾取！……この重大な、然も炳然として火よりも瞭かな事實を、何故日本の學者や識者は、今まで第一に强調してゐなかつたか？ 英國の勞働運動史を見よ。先覺者達は、惡法令の改廢と一緒に、まづ時間短縮を第一のモットオとして掲げ、然も熱意の燃えるところ着々効を奏して、現在八時間どころか、七時間制にまで踏み込んでゐるではないか。そうだ。勞働時間なぞいくら尠くてもいい。これでいいと云ふキリはない。勞働は必要にして神聖だと云ふか、まことに、それは人生に於いて尠ければ尠いほど必要で、從つて高貴で、神聖だ。英國なぞのことは、果してこの世のことであるか。それが此の世のことなら、日本はこの世のものではないか。この勞働時間短縮の必要を、心魂に徹して感じ得ただけでも、私は自分の不完全な勞働實行に効果を信じてゐる者だ。

所謂知識階級よ、識者よ。諸君が勞働階級から「有閑階級」の憎惡を買ふとすれば、たしかにここに一根本がある。有閑ではないと云ふか。然も諸君は、諸君の生活と、性質或は態度を異にした、他の不合理な「無閑」に苦しめられてゐる同胞を、むざむざと見殺しにしてゐるではないか。

諸君の立場を深める爲めに、まづ一齊にこの問題の爲めに立て！

（完）



東京景物詩その一
明治神宮　つゆかの子
新しき下駄をみまゐらせんとぞや
踏みのしみみ砂利を行く
ねんごろに詣づる民は日の本の
人みなし三六〇年以後
日本のきみたちの愛敬の具はさらに
交はし詣づる女房の御翻
明治神宮の御殿のみ前はこそ
拝きあげられし気をば
早春の束の風に御鏡に
我を見る東織ろうなおびきれし


一平寫

勞働首相マグドナルドの印象

賀川豊彦

その日は、例のロンドン日和の曇の日であつた。

米國ワシントンの全米外國傳道大會で親しくなつた前英國軍需局長マクレナン氏が十二時に『議會勞働クラブに行かうそこで、マクドナルド氏と三人で一緒に晝飯を食ふことになつてゐるからと云はれるので、私は、ヴヰクトリア停車場に近い萬國外國傳道同盟本部エヂンバラ・ハウスに十二時一寸と前に出かけた。そして、そこから地下鐵道で、ウエストミンスターまで行き、ウエストミンスターから二人で少し歩くこととなつた。八百年前に建てられたゴシツク建築の美しい尖塔が相變らず輝いて居る。そこからファビアン協會の前を通つて、半町位も行くと、美しい盲人學校々舍の前にある貧弱な事務所風の家がある。此處が勞働黨の議員連中の集るクラブである。案内もなく二階に昇つて行くと、梯子段の正面に、廣告のビラが貼つてある。よく注意して視ると、ウエストミンスター寺院で毎土曜日に基督教の立場から見た社會問題の講演があると云ふことである。講演者はカノン・ドウナルドソンとなつてゐる。

『フゝム、さすがは英國だわい。ウエスミンスターで、牧師が社會問題の講演をやるかな？』

感心しながら、そこに立つてゐると、マクレナン氏は事務所に這入る。そして何か話をしてゐる。やがて、女事務員と二人で出て來た。そして私を彼女に紹介してくれる。なんでも此婦人が、このクラブの萬事を引受けてゐる女主人公であると云ふことである。

『ミスター・マクドナルドはまだ見えませんよ……風邪をひいてゐるとか云ふことでした……室は三階にしておきました。靜かなところが善いだらうと思つて……』

そう云ふて、その婦人は先に立つて、三階に昇つて行く。

その室と云ふのは敷物も何にもない。至極簡素な室で、隅に

ガス・ストーブが一つあるきり、殆ど裝飾らしいものは一つも附いてゐない。

その中に女給仕が出て來て、食卓の準備をする。十五分か二十分位待つてゐたと思つたその時、大きな體格をした赤ら顔のスコットランド人が粗末な服裝をして這入つて來た。それは間違もなく前首相マクドナルド氏である。マクレナン氏は親しく手を握つて、時候の挨拶をし、私をマクドナルド氏に紹介してくれる。

マクドナルド氏は風邪をひいてゐるとみえて、

『寒い、寒い、窓をしめさせて貰ふかな』

と云ひつゝ自ら街路に面した硝子窓をしめ、ストーブを背後にしてドッカと粗末な椅子に腰をおろし、紺紫に染められた絹の幅廣のハンカチーフを胸のポケットから取り出して鼻を拭く。

打見たところ横顔の幅の方が、正面から見るよりも著しく廣く大きい、奇妙な格好をした頭の持主だ、と彼の頭部を熟視してゐると、彼の骨相が色々と頭に印象される。頸の赤いこと、眼の凹んでゐること、然し、鷲鼻のようには険悪な顔はして居らぬこと、言語動作が何處となしにゴツ〳〵してゐること。

鼻をふいて、絹のハンカチを胸のポケットにつき込んでおいて、彼は直に私の方に向き直つて尋ねた。

『日本の勞働運動はどうだね？』

女給仕がスープを運んで來た。マクレナン氏も外から歸つて來た。私が返事をしない中に、マクドナルド氏はマクレナン君を顧みて、

『今日は二時から議會の小委員會があるのでね、誠に濟まないが、食事を急がして下さいね』

彼はさう云ひ乍ら、すぐ、スプーンを取りあげて、食事を取り始めた。

英國には勿論のこと、世界の英語國民に對して、日本の社會事情の進歩は少しもわかつて居りはしない。私は日本語と英語の距離があまりあり過ぎるとは思ふが、かほどまでに英國民が日本人を知らないとは思はなかつた。それで私はマクドナルド氏にほどさつと日本の事情を説明した。

マクドナルド氏のスプーンの運び方の早いこと！　あまりに手に煮た御馳走ではないが、急行で彼は食事をしてゐる。

『君はシンガポールの海軍要港問題に就て、どう思ひますか？　君の忌憚なき意見を聞かして下さい、明後日、私はその問題に就て演説することになつてゐるんですよ』

マクドナルド氏は牛のような温順な眼を私に向けて尋ねた

――寫眞で見るとマクドナルドの眼は如何にも與目で犯罪者の如く恐ろしく光つてゐるが、實際會つて見ると、實に柔和な眼付をしてゐるに、私も驚いたのであつた。日本では武藤山治氏が柔和な顏の持主であるが、マクドナルド氏はその柔和さに於て武藤山治氏に似通ふところがある。

彼の質問に對して私はすぐ答へた。

『あれは實につまらない保守黨內閣の惡戲ですね。あの爲めに世界の平和は威嚇されますよ。第一ワシントン會議で軍備の縮少を唱へた、その舌の根がまだ乾かない中に海軍根據地を新設するなんか全く馬鹿らしいぢやありませんか？

それに、日本では軍備縮少を斷行してゐるに、英國が擴張をやると云ふのはどうしたことなんですか：シンガポールの根據地は日本を假想敵國と見なければならないでせうが、昨日まで同盟國であつたものが、今日は互に相疑ひ、相かまへて戰鬪準備をすると云ふのはおかしなことですね。どうも、英國の帝國主義がいやになりますねえ』

さういふと、マクドナルド氏は至極眞面目になつて、

『實際、君の云ふ通りだ、保守黨內閣は實にけしからぬ人々だ。今日、我々の時代がくれば必ずあんなものを打消してやるかし、ホア、英國民の凡てが帝國主義でないと云ふことだけは、貴國民に傳へてくれ給へ。必度我々の時代がくれば、根據地を根底から打消して了ふから少しの間辛抱してゐてくれ給へ。』と確信を以つて云つた。

私はマクドナルド氏が再び宰相になれると云ふ自信を以つてゐることは、この一言でよく讀めた。

彼はさう云ふたものゝ何だか淋しい曇つた顏をしてゐる。彼の世界平和プロリユール强制運動は見事保守黨內閣の爲めに踏み潰され、スノーデン以下は勞働黨の內部にも、マクドナルドに對して相當に反感を持つてゐるものもあるので、彼の淋しさがこの頃が最も甚しかつたであらう。

私は、何故彼の內閣が、そんなに脆く倒れたかと、私は聞きたかつたが、あまり氣の毒で尋ぬる氣がしなかつた。

それに就て、私はあまり多く知つてゐた。私はエクレクトン・スクエアーの勞働黨本部に居る勞働組合議會と勞働黨の聯絡委員をしてゐるウイリアム・ギリス君が凡ての內證話をしてくれたのであつた。

ギリス君の意見は恐らく、批判を要しないほんとの話であらう。或日の午後ギリス君は急がしい仕事の手をとめて、机の上に腰をかけ乍ら私にこんな話をした。

『今程根底に於て勞働黨の結束の固い時は無く、今程最高幹部

の間で混亂してゐる時は無いだらう。あの事件（勞働黨內閣の倒れた過激派宣傳書問題のこと）の如きは、たまたま最高幹部不統一のことを、あの事件によつて、曝露したやうなものですよ。あの宣傳文は木曜日の朝、或新聞記者が下町から、印刷物を手に入れて、外務省に持つて來て、訊問した人ですよ。

『こんなものがロシヤから來てゐるが、君等は之を知つてゐるかつて。それを外務省で調査してゐる中に、新聞記者は他の閣僚に聞いて廻つたのだね、『あなたは、ロシヤから革命宣傳書がきてゐるのを知つてゐるか』と云つて。ところが、他の大臣連はそれを少しも知らないものだから『知らぬ、』『そんなことはない』と否定してゐる中に、日曜日が來る。首相はそれをあまり重大事件と考へないで、みんなに相談しないで皮嚢の中に入れた儘、月曜日を迎へる。月曜日の朝には、反對黨の新聞が一ページ大の紙面を費つて、書きたて、外務省がロシヤへ問合せの電報を發した電文まですつくり載せてゐるので、閣僚は全く面喰ひ、勞働黨內閣は不用意の中に打潰されて了つたのですよ。』

ギリス君はそのあたりの光景をドラマチツクに話してくれた。

そんなことを考へ乍らマクドナルド氏を見ると、彼の淋しい顏が如何にも哀調を帶びて居る。スノーデンがマクドナルド氏の專斷に對して隨分反感を持つてゐると云ふことも聞いたが、彼の片腕に背かれては困るであらうと、同情してやりたくもなる。

マクドナルド氏はまた紺紫のハンカチーフを出して鼻を拭く、それが如何にも田舍者らしくつて、ほんとにいゝところがある。

彼が沈默したので、私は更に、支那に於ける米國の帝國主義的行動に就て、彼に話した。

『數年前に私が揚子江を遡つた時に、私の見たところによると、日本の砲艦よりも、英國砲艦よりも、米國の砲艦の數の方が遙かに多いように見受けたものですから、調べてみると、やはり、米國の砲艦の數が實際に於て、日本よりも多いのでした。私は、何故支那のような遠いところに、揚子江だけにしか使はない砲艦を米國が造る必要があるか、それを私は疑ふものです。世界の軍國主義にはいやになりますね。』

さう私が云ふや、マクドナルド氏は直に答へた。

『揚子江にある、英國の砲艦はみな舊式のものばかりで、役には立たないものばかりです。』

さう云ふマクドナルド氏は、獨り言のやうに……

つおれらは早晩新式のものに取り換へなくてはいかない。」と云ふた。

その言葉を私はマクドナルド氏の無戰主義と照し合せて考へてみて、妙な氣がした。

それは保守黨が、新式の砲艦を揚子江に入れる必要があると云ふたのか、自分が首相になつた日にでも、揚子江に新式の砲艦を入れると云ふたのか、その邊はつきりしなかつた。兎に角、マクドナルド氏は無戰主義者であるけれどもトルストイアンで無いことだけは事實である。彼は失業者救濟の目的を以つて、軍艦五隻を建造することを提議した人であることも善く覺えておかねばならない。

私は實際政治家と理論的批評家との間には余程の距離があると云ふことをつくづくと考へたのであつた。マクドナルド氏も理想の世界がどんな世界であるかをよく知つてゐよう。然し、彼は現實の世界に處して、揚子江に新式の砲艦のいることを考へてゐるのであつた。

マクドナルドは相變らず淋しい顔をしてゐる。私はその理由が後になつてわかつた。それは彼の愛妻の死である。彼の夫人は賢夫人で聞こえてゐたが、彼はその賢夫人と別れて今獨身生活をしてゐるのであつた。

マクドナルド氏は出してくるどの皿もこの皿をみんな平げて了ふ。そして、

『腹が減つてゐるので、よくゆける！』

と云ふ。二十四五貫もあらうと思はれる大雜兵だから、私のような小雜兵と違つて、大に食慾が進むらしい。

私は、ロシアの共産主義に就てどう思ふかと質問した。

『ロシアに取つて、あれは美いものであるかも知れないが、英國のように民主々義の進んだ國では、あんなやりかたは全く不可能だね。あんなに言論を壓迫し、少數派や反對派の意見を武力で抑壓しちや正純なる政治は行はれないですね。』

私はマクドナルド氏が歐洲大戰中、非戰論の驍將として戰ひ、少數派を代表し、不名譽と不人望の中に惡戰苦鬪して來たことを思ひ出した。彼が、ボルセキキが少數派を尊敬しないと云ふたことを誠に意味の深いものだと思ふた。

私は更に社會民主黨（ソシアル・デモクラット）と獨立勞働黨（インデペンデント・レーバーパーティ）の關係に就て尋ねてみた。

それに對するマクドナルド氏の答は面白いものであつた。

『社會民主黨の非常な誤謬は、人間を凡て經濟的にのみ考へることです。然し、人間は經濟的方面ばかりでなく、社會的方面もあるから、我等はあまり狹苦しく人間を解しない方が善いと思ふ。どうも唯物史觀的に見るのはあまりに窮屈な見方です

よ。どうも『大陸社會主義（コンチネンタルソシアリズム）』は經濟的に偏していかんですよ。英國社會主義（ブリチッシュ）は飽迄人間本位ですから、社會運動をたゞパンだけの問題と考へることをしないのですよ。もし、我々が大陸社會主義の行き方をして、唯物史觀を基調にして、宗教に反對したり、唯物論と暴力革命だけを叫んで居れば今頃は議會に五十の席を占め得たか否かは疑問ですよ。大陸社會主義者もこの點に段々氣が附いて來て、英國流に行かうとするものが段々殖えて來たやうです。』

そこへ、最初から遠慮勝ちであつたマクレナン氏が一寸と言葉を挿しはさんだ。

『君はどう思ひますか、マクドナルドさん、近頃、大分八釜敷いあの比例代表の問題を？今度のグロスターの獨立勞働黨の大會に、クライドの連中が問題にすると云ふてゐますが、』

『それは問題にならんと思ふね、英國社會主義の運動は矢張り人間運動だから、知らない人間を選出すると云ふのは實に變なことになりますからな。やはり、知つて居る人間を出して、多少主義や、主張が變ることがあつても、たしかな人間を送るといふのが政治らしい政治と云ふのでせうな。そりや、比例代表にすれば、勞働黨に取つて、大に利益であるかも知れないが、矢張り、主義主張と云ふことよりか、人格中心にした方が善いやうですね』

私はこの言葉を聞いて、マクドナルド氏の思想が一層よく判つたやうな氣がした。彼は飽迄の人間本位の社會主義者であるのだ。そこに英國流の保守主義と、神秘性があるのかも知れない。兎に角社會主義を經濟運動以上の倫理運動であるとするところに、マクドナルドの面目が躍如としてゐる。

『共産主義は議席を占めてゐますか？』

と私はマクドナルド氏に訊いてゐた。

『一人もありません、たゞ一人、印度系統の人にその傾向を持つ人がありますが、その人もあまり無茶は云ひませんよ』

『何人位共産主義とも云ふ可き人々が、勞働組合の中にありますか？』

『二萬五千人位でせうね』

『勢力はありますか？』

『いや、あまり勢力はありません、ただグラスゴー附近のクライドで造船業に從事してゐて失業者の群の中には、相當に共産主義が宣傳されてゐますが、それも段々下火になつてゐます。西ヨーロッパでは過激派の主張が採用されるには人民があまりに開け過ぎてゐます』議員クラブと云ふても、あまり御馳走は無い。スープに、肉の皿に、野菜とデザートが出て、コーヒと

果物が出ると、あとは何にも無い。

前首相はそのコースを全部奇麗薩張殘らず平げて、ハンカチーで胡麻鹽色の髯を拭いてゐる。髯の曲線は寫眞で見たものと少しも變らない。髯でもなければ途中で會つても彼と見判ることは困難であらう。

マクレナン氏は、私の主張である勞働組合を通じて、日英親交を一層堅くする方法に就て、前首相に語つてゐる。それをマクドナルド氏は一々頷いて聞いてゐる。

『さう出來ると、善いね、實際勞働組合を通じて世界平和の運動をやらなければならないね……勞働組合の幹部連はその意見を聞かされてゐますか？』

『二三日前、アモンズ君の組と賀川氏が會つた時に、凡ての人が贊成して、それをもう少し具體的にする爲めに、考へようではないかと、云ふことに一決したのですよ。』

と、マクレナン氏は私の代りに云ふてくれた。アモンズ氏は勞働內閣の農務大臣であつた人であるが、私を英國議會の勞働黨の委員會に紹介してくれたので、私は色々のことを說明した後にシンガポール海軍要港問題から世界平和の問題を論じて、日英兩國の平和は勞働組合を通じて結ぶ可きであつて、その爲めに、平和使節を兩方から週期律的に送つて親交を續けて行く可きことを提議したのであつた。それに凡てのものが贊成したのである。マクレナン氏の云ふて居るのはこのことであつた。

マクドナルド氏は更に、支那問題に就て私の意見を聞かれた。それで私は知つてゐるだけのことを述べて說明した。

話してゐる中に二時十五分前になつた。マクドナルド氏はマクレナン氏を顧みて、

『日本の兄弟は、ＩＬＰの大會に行くことになつてゐるか？本部から招待券が出てゐるかしら！』

と尋ねてゐられる。それに對してマクレナン氏は

『もうちやんと、招待券がピート君から廻つてゐる筈です』と答へた。

『私はもう行から。委員會で私が話することになつてゐるから』

から云ふて、マクドナルド氏は立ちかけた。それから、私達の間にはランズベリー氏の話、日本に於ける勞働黨の將來、私の滯英中のプログラムなどに就て話が次から次へ花が咲いた。

マクドナルド氏の日本の勞働黨に對する將來は矢張りマクドナルド式のものであつた。即ち、あまり經濟的方面だけを八釜敷云はないで、廣く一般的にかたまり、團體を中心として、それに個人加入の人々が支部單位で這入つて行くが善いと云ふ意

見であつた。

彼は獨乙あたりの社會民主黨の勢力の無いのは勞働組合が中心にならないからだと云ひ、あまり個人會員だけを中心にしてゐると訓練が無いものになると云ふてゐた。

今、私は、日本に歸つて來て、日本に於ける最初の無産政黨の發會式に臨み、その解散の命令を受け取つた幹部連の顏色を見、政府が、團體加入を許可しないのを見て日本では當分の中、英國のような組織ある勞働黨の出來ないことを思ふてゐる。

背の高いマクドナルド氏は立ち上つた。そして、私と握手をして、急いで立ち去つた。

マクレナン氏と私はまた地下鐵道のウエストミンスター停車場まで歩いて、イートン・ゲートまで歸つて來た。途中マクレナン氏はマクドナルド氏に就て彼の知つてゐる範圍内の凡ての話を私にしてくれた。彼の質素な生活振、自動車も寄附されたので問題になつたこと、英國の勞働組合の會費の大部分が今日は政治的方面に使用せられてゐること、マクドナルドの時代が必ず再びくることなど彼はマクドナルドの友人の一人として又マクドナルドと故郷を同じくしてゐると云ふ理由によつて、「明日の人」マクドナルドを大に賞讃した言葉を多く私に述べた。

その中で、特に私の興味をひいたことは、マクドナルド氏が首相になつた時に各省の下級官吏の一人だに動かさなかつたと云ふことであつた。

『なるほど英國と云ふところは保守的な國だ、保守黨内閣が倒れて勞働黨内閣がその跡に座つても下級官吏を一人だに動かさないと云ふのは日本などではとても考へ及ばぬことであらう』と、私は多少吃驚したのであつた。

その後私はこの問題に就てまた例の勞働黨聯絡委員ギリスに會つて聞いてみた。それに就てはギリス氏は贊成派と反對派と二派あると云ふことを私に告げた。然しギリス氏自身はマクドナルドの保守的傾向に贊成する口振であつた。

それから間もないことであつた。私はグロスターの獨立勞働黨の大會に東京帝國大學助教授蠟山政道氏と二人で出かけた。グロスターはアーサー物語にも出てくるような舊い英國の伽藍都市である。人口は四五萬しか無いが、十字軍に參加した皇太子の棺や、中世紀には偶像の如く崇められて巡禮の群を引附けエドワード二世の棺の納まつてゐるグロスターの美しい大教會堂が市の中央に榮えて如何にも英國らしい氣分のする街であつた。

大會は市の公會堂に開かれたのであつたが、公會堂のすぐ前に大伽藍が立つてゐるので私は暇があると、伽藍に這入つて瞑想をした。

獨立勞働黨とグロスターの大伽藍との間に何の交渉もないようだが、英國では少しもそれが背反的のものであると考へられないところに面白味がある。

私の着いた翌日獨立勞働黨青年部の發會式が公會堂の小會堂で擧げられた。私は青年部の活動を見たいと思つたのでそれに出席した。朝から午後四時頃まで各方面からやつて來た青年達が口角泡を飛ばして社會主義の問題に就て論じてゐた。

然しその間に私が感心したのは、彼等の間に少しも過激な暴動的な思想の見えないことと、マルクス的な口調の少ないことであつた。彼等の多くは勞働青年であつたが、まるで貴公子のような態度で、堂々たる態度で議事を進めて行くには私も羨しくなつた。日本であれば二口目に「革命」とか「暴力」とか云はなければ氣がすまないのであらうが、英國の青年には少しもそうしたところが見えなかつた。彼等は名譽會長として、ラムゼー・マクドナルド氏を選擧した。この邊も私は日本の青年には見られないところだと思つた。日本であればすぐ『先輩崇拜なんか駄目だ』と來るところであらうが、此處は英國の保守主義と云ふのであらうか、ちやんと尊敬と秩序を以つて美しく事を運んで行く。

午後四時頃になつて、マクドナルド氏は遊説先から廻つて來た。狭い小講堂には身動きの出來ぬほど人が這入つて、苦しい位であつた。そこは大會の宣傳部の小委員の席上であつたが、マクドナルド氏が這入つて來るや否や、とても日本人が大隈侯爵に示した以上の感情を示してマクドナルド氏を歡迎するのであつた。座にあるものはみな立ち上り、拍手は長く長く續き、帽子を振り、フラーを叫び實に八釜敷い位であつた。

然し例のブツキラ棒のマクドナルド氏は素知らぬ顏をしてゐる。司會者が彼に感想を要求する。すると、彼は司會者の机の側に立ち右の肱を机にもたせて、座談的に小さい聲で宣傳部の功績が全くその主任者の人格にあることを賞讃し、あまり我々の知らない人の名を指して、感想的にその人を激賞してゐた。そこらあたり、マクドナルド氏は好々爺だと云ふ形である。小集會の濟んだ後、私は先日長時間に渡る意見を聞せてくれたことを感謝し、併せて蠟山君をマクドナルド氏に紹介した。あの小さい蠟山君と大きなマクドナルド氏が握手してゐる光景は誠に面白いものであつた。其晩、またマクドナルドの演説が公會堂であつた。それは發會式の際に挨拶を兼ねて、前首相が語つ

たのである。マクドナルドが演壇に現るゝや、二千人位居た會衆は總立ちになつて、彼に歡呼した。そして誰が歌ひ始めるとなく、

『彼は　美き男子
彼は　美き男子
その名をラムゼー・マクドナルドと云ふ』

と云ふ文句がよく英米の大學で歡迎歌として歌はれる節で會衆の唇に上つた。かうなると會衆はまるで兒供である。そして民主的な英國に不思議なほど英雄崇拜的分子のあることを我等に示した。會衆は歌が上手であるそして一度歌つて氣に入らないでも一度それを繰返して歌ふところなどは、まるで學生のやうである。演壇の人々は支部から持つて來た支部旗を手に持つて、それを大きく振つて、歌に合せる、私は會衆の昂奮を色々な形で見たことがあるが、グロスター大會でマクドナルドに示した昂奮ほど突發的な、而も組織的昂奮を生れてみたことがなかつた。私はまだマクドナルドの壽命はあがつてゐないなと思つた。日本でも犬養氏や尾崎氏に對して、色々と昂奮した感情が群衆から示されるが、英國のそれの如く組織的で無くまた藝術的でない。その昂奮の時間も遙かに短かい。

然しマクドナルドがその會衆に示した態度は例の態度である。つくねんと壇の右の端に立つて、ゼスチユアーも何にも使はないで仲間に話すやうな句調で、「面白くもない」と云つたような調子で「明日」のことを話してゐた。

翌日の朝、マクドナルドは正式に討議に加はつた。その時も會衆は彼に歡呼した、この時の演説は前の二度の演説より遙かに冴えてゐたが、然し必しも明確な筋の通つた演説ではなかつた。マクドナルドの著作などを讀んでみると實に明確な、そして透徹した論理を語つてゐるが、座談や、仲間に話する時には必しもさうでないらしい。然し、少しもブラない。ありの儘のブツキラ棒で行くと云ふ彼の面目は彼の三度の演説振によく現れて居た。『萬事が此調子で行くのだな』と私はすぐ感じた。そこには温い感もお上手も無い。たゞ訥朴（とつぼく）なスコツトランド人と云ふ感じだけが強く與へられるだけである。

英國議會の廣く美しいロビーで手を握つたアーサー・ヘンダーソンは實に温い感じのする男であつた。またそこで見た銀髪に漆黒のモーニングをつけてゐたロイド・ジヨーヂは上品で典雅なところのある男であつた。議會の廊下を一緒に散歩したランズベリーは優し味のある學者風の男であつた。然しラムゼーマクドナルドはありの儘の男であると云ふ感を強く與へられた。私は鼻柱の強い男としては死んだ大統領ウヰルソンの手を握つたことがあるが、然しマクドナルドに較べて非常に優しい感がした。ルーズベルトも私はプリンストン大學の校庭で會つたが非常に柔かな感がした。然し、マクドナルドは山から洪水で押流されて來た自然石のやうな感が未だにする。

（おはり）

蕪村俳句選評

野口米次郎

心太逆しまに銀河三千尺

李白は、「飛流直下三千尺、疑是銀河落九天」と歌ひ、蕪村は心太の長さを三千尺と形容してゐる。私は神田驛附近に見る手拭地のさらし場を眺めて、雷公の褌三千尺と見立てる。

『君が東京へ來ても何一つ見せるものが無い……いや、一つある、
僕と共に東京驛を電車で出て、お茶の水の方へ向ひ、
驛を出ると間もなく右手を見るのだ……ほら、其處に幾百といふ旗が風に流れてゐる、
それは手拭地をさらしてゐるのだ、が、そういつては興が無い、
僕はいつも天から褌が下ると思つてみる、幾百といふ雷公の褌三千尺だ……勇ましいぢやないか、
風にばた〱する「六尺」を見る位男性的なものは無い、
東京へ來たなら、せめては、これ丈けでも見て行き給へ。』

菜の花や月は東に日は西に

太陽と月とを一目のなかにどうして見えると疑ふ人があらば、私は彼に、『私はその實景を見てゐる』と答へるであらう。私はそれを倫敦で見た。私はある霧の深い早春の一日、倫敦で名高いウエストミンスター橋畔に立つた。理由なしに私がそこに立つたのでない……物質的意識の強すぎる倫敦に對する私の不平を、下を流れるテームスに捨てるためにそこへ遣つて來たのである、霧の倫敦はまつたく詩的である。必ずしも美麗とは云へなくても、如何にも面白い特殊なものである。霧の日に於ける倫敦は地理を超絶すると云へる。私が今黑い濃霧に包閉さ

れながら橋上に立つてゐると、私は夢にうなされてゐるのぢや無いかとさへ思つた。私にその場合緯度も經度の感念も無かつた。私と私の周圍に集つて友情振りを見せながら飛ぶ鴎と、どういふ相違があると私に問ふ人があらば、私は、『私に鴎のやうな羽翼の無いだけだ』と答へたであらう。この霧の倫敦は全く私の氣に入つて仕舞つた。テームスの向岸に並んでゐる不愉快な汚い廣告の看板は霧で見えない……それがまづ第一喜ばしい。傍若無人の恰好をしてゐるクレオパトラ・ニードルも今日は落付いて、いふに云へない優美の姿を見せてゐる。私は頭を上げた……さうして何を見た。私は橋を挾んで東と西に大きな團扇のやうな黃金色の太陽二箇が出てゐるのを見た。私は驚いた……倫敦に太陽が二つあるとは不思議だと思つた。然し直ぐ私の理性は、東の空の『太陽』は月だといふことを私に敎へて呉れた。私は倫敦へ來て始めて驚異の意味が分つたことを喜んだ。即ち、『鴎幾百月は東に日は西に』の實景である。私は聲さへ出して叫んだ、『これは愉快な繪畫だ、眞に繪と云ふ事が出來る一幅の光景だ。』私の足元にはテームスが鉛のやうな灰色の波を流してゐる。其上を色々の舟がすべつて行く。私はこの夢の浮橋に立つて、自分が古事記時代の尊の一人でもあるかのやうに感じた。そして橋から飛降りて、下を通る舟にひらりと乘つたかと思つた時、私は次の小詩を書いた。

『自分は霧の追憶を一杯積んだ小舟に乘つて
　灰色の生命の河をすべつて行く。』

私は太陽と月とを同時に眺めた倫敦の一光景を思ふと、この蕪村の『菜の花や』の句境は容易に了解される。倫敦の霧とは事かはつて、日本春郊の美風景はこの一句で盡きるの感がある。茜の色濃く西に沈みかける太陽は黃金色である。そしてそれに對照する東天の月は正にこれ圓かに上る一箇の銀鏡だ。この月とあの太陽との中間に、廣く擴がる田野は黃色の菜の色で毛氈を敷いたやうである。

家にあらで鶯聞かぬひと日かな

『霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き』と歌つて、寂寞を味ひ樂んだ詩人は芭蕉である。彼の寂寞は、これを譬へると恰も晩秋の夕の如く、その冷やかな現實味が人に迫つて來る。蕪村は一日家を外にして鶯にそむいて物足らなく感ずる……その寂寞は溫かい、これを譬へると晩春の如くである。

この相違は即ち彼等兩人の人格の相違である。芭蕉は現實的

てゐる、そして蕪村は藝術的である。前者は主觀的悲痛を帶び、後者は客觀的詩情に富む。一は哀愁の誘惑に捉はれやすく、他は輕快な遊離趣味に落入るのをその短所とする。故に芭蕉は倫理化し、蕪村は詩美を弄する僻がある。この異つた詩人的態度は彼等の臨終の瞬間までつき纒つた。『旅に病んで夢は枯野を馳めぐる』といふ芭蕉の辭世に對し、蕪村はかう最後の句を殘した…………

冬鶯昔王維が垣根かな

朝日さす弓師が庭や福壽草

春風のさす手引く手や浮人形

十二月の冷い白雲を花と見立てるのが日本人の思想である。その想像の燃える火の力で、地上の霜や、餘り嚴肅で言葉さへ出すことが出來ない北風のなかから、私共は春の王國を築くのである。私共は冬の存在を絶對的に認めまいと希望する。私共は一年が三つの季節で出來てゐるとさへ考へたいのである。私共日本人の心は、希臘思想（グリーキッソート）のやうな有限的な堅い支那思想を見捨てることが出來る時に、始めて驚くべき存在となるのである。支那思想の倫理觀は美の幻想さへ輕浮なものとして取扱つてゐる。私共が佛教に感謝する所があるとすれば、之れは自然を認識するといふことが人間生活の大部分であると獎勵した點にある。私共は日本文學史の上に日本と支那との二箇の思想が絶えず鎬を削つてゐる戰爭談を讀まされる。もともと梅花を賞し或は梅花を倫理化して眺めることを教へたのは誰でもない、支那思想である。又大體からいふと、鶯も支那の鳥であり、梅も支那の樹木であり、又福壽草も支那の草花である。然しこの梅花や鶯や福壽草をして、春に憧れる情熱を表現せしめるに至つて、始めてそれ等が日本の產物となつたのである。私は鶯と眞理、梅花や福壽草を美と同體に考へることが出來ない。私共の興味は、この鳥がこの樹木草花が春の日光を追つて、春の氣分を破つて出る衝動の上に置かれてゐる。私共日本人が多くの點でセルチック民族の個性的快調を表現する點に、私は特殊の注意を拂いたいのである。又春に對する私共日本人の思想は寧ろ燥髮であり又いつも情熱的であるが、この思想位明白に力强く日本人の國民性を說明するものはない。

十二月の終となると天空は灰色である。晩秋の紅葉は血で自分の歷史を書いて失つて仕舞つた。この紅葉がかかる悲劇的最後を演ずるに至るまでの、忍耐强いゆるやかな自然の歩みを思つて見給へ……自然は少しもあはてない、輕卒でない。冬ではあるが誰の家でも部屋のなかには春の情調がもう來て居る。福

壽草の一鉢位は床の間に置かれるであらう。この床の間から天下の春は笑ひ始める。舊式な服裝でやつて來る新春を迎へるために、何か相應しい掛物も床の間に懸けられねばならない。火鉢にはぱちぱち炭が燃えて、遙かな森林の粗野な人情談を話すやうな音がする。門松は身分相應なものがよいであらう。外では愉快な顔をして子供が遊んでゐる。寂寞と詩で滿ちる私の家にも、春がやつて來てゐる。私は室内に籠つて一歩も踏みださないが、それは折角骨を折つて創造した春の氣分を失いたくないからである。一日一日と經つに從ひ、外部の自然は破顔一笑の姿を具へて來る。さうなると私の部屋の内を打開けて、室内室外の空氣を相まじへても、自分のムードを破られ傷つけられるやうな心配はないであらう。私は笑ひこける福壽草を喜ぶものである。見よ、町に一軒の弓師の店がある……天井にも壁にも幾張かの弓が掛けてある、如何にも見るから清々しい。その店先に福壽草の鉢が置いてある。それが溫かい春の太陽を受けてにこにこ笑つてゐる。ああ、何たる太平の光景であらう。

浮人形とは何か。水に浮かす人形のことである。この人形はふざけ好きな春の風に弄ばれて、さす手引く手面白く踊つてゐる。おお、春風の舞踊の師匠よ、私にも舞踊の手ほどきして呉れないか。老ひたりと雖も、まだまだ青春の血汐は私に涸渇してゐない。私はかういふ土佐繪の情調を喜ぶ。又北齋や廣重の繪にあるやうな櫻の花の下で、遊び暮らす民衆を見ることも喜ぶ。詩人が春を歌ふといふことは、春を不思議な突飛な一大事件と取扱つて、その神祕世界をして笑と涙とに腕を一緒に組ませて歩かしたいからである。春になると私共の心は飛躍する……即ち、さす手引く手面白く春風に舞踊する……そこに詩人として私共の生命がある。

私の春の主觀的思想も、段々客觀的鑑賞に入つて、私の精神狀態は四月になると非常に不思議に開展するであらう。私は最早や春の個々別々の姿を見ない。私はすべての春の現象を打つて一丸とした大きな幻を眼前に見るであらう。その幻が霧のやうに見えたり見えなかつたりして、私の人間存在もその雰圍氣のなかに失はれるかも知れない。自分の存在を無にまでして、私は始めて最も大きな微音の生命に觸れる、そして私は眼前の幻を抱合し接吻するであらう。

自然は支那畫のやうに壯健に主觀的に出立したが、段々逸樂的に、客觀的になつて來る。從つて自然は現實味を增して來る。繪畫に譬へると、四條派と變し更に再變して浮世繪となつて來る。そして藤の花や菖蒲の季節となると、自然は光琳の屛風藝術となつて開展する……五月の日本の自然は、一番模様式

色彩美の發揮に豐かである。

　我門や松は二木を三の朝

芭蕉は『年立つや新年古き米五升』と歌つて、赤裸な人生に直面してこそり立つ勇者である。蕪村は門に二本の松を立てて新年を迎へ、春らしい太平の氣分に醉はんとする温良の詩人である。私は何故に彼がもつと露骨な態度に出ないかを質問するものでない。彼は藝術家である。彼は必ずしも人生の壓迫を廻避する弱者でない。然し私は彼が何處までも美的態度を維持したことを喜ぶ。特にこの句の上で、門松と云はずに『松は二木』といひ、漢詩のやうに二と三と云つた點を面白いと思ふ。芭蕉の『奈良七重七堂伽藍八重ざくら』と共に、この句は私に愉快な音律を與へることを喜ぶ。

　蕪雅要略の言葉を讀むと、蕪村の妻は狡黠不遜の女であつたとなつてゐる。文學者や藝術家の妻は、得てこの種類の女であることは昔も今も變りないであらう。蕪村は常に妻に罵られると、一本の釣竿を肩にして水邊を彷徨した、そして一尾の魚だも得ない場合は、彼女の怒を恐れて門人の門を叩き流宿したと出てゐる。この事を假へ事實とした所で、私は詩人生活の好模範だと稱贊するものでない。然しかゝる不都合な妻を彼がぢつと辛棒した點に、彼の温良な君士人であつたことを想像させられるやうな感じがする。この君士人が、貧乏ながらも門松を立てて新年を迎へようとする所に、いふに云へない同情の念がこみ上げて來ざるを得ない。從つて芭蕉の句より、寧ろ蕪村の『我門や』の句の方が私共に一層の親しみを與へるやうにも思はれる。

『蕪村文集』にこの句が出てゐて、歳旦說といふ一文が附いて居る。『ことしは歳旦の句もあらじなとおもひゐけるに、臘月二十日あまり八日の夜のあかつきのゆめに、あやしき翁の來りていふやう、おのれはみちのくにの善正殿にたのまれまいらせて、京うちまゐりし侍るおきななるが、よきついでなればそこに奉るべきものの侍れば、ここにまほて來ぬとて、ひらつつみときて、根松のみとりなるをふたもととうでて、これを御庭のいねゐの隅に植おき給はば、かぎりなきよろこびをも見はやし給はんといひつつ、かいけちて見えずなりぬ。ゆめうちおどろきても、此翁にむかひかたるやうにおぼえて、かの武隈の古ことおもひ出られてかくは申侍る。我門や松は二木を三の朝。』臘月廿日あまり八日の夜とは書いてあるが、何年の事であるか知ることが出來ない。然し彼の晩年にちがひない、彼も多少生活上の餘裕が出來た時代の作であらう。私は『松は二木を三の

谷崎潤一郎氏の一大快作

日本發賣

岡田七藏裝幀
寫眞十六葉挿入

妖艶なる毒草の如く、怪奇なる人魚の如き一大不可思議の女性を拉し來り、之に絡まる變轉極まりなき人事の怪奇を描出し、神人と獸人の葛藤を現出したる一大雄作。取材の奇、構想の大、描寫の妙、之に加ふるに文章の秀、全く神技に庶幾し。氏の藝術心境を愛する者は云はずもがな、苟くも氏が藝術を是非せんとする者、此一大篇を快讀三誦すべきだ。今春劈頭の異色ある讀物として何人も逸しがたき趣味津々の小說。

朝』の言葉を、ただもう理窟なく喜ばしく感ずる。

春の夜や宵あけぼのの其の中に
公達に狐化けたり宵の春
さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

春宵一刻價千金………昔の支那の詩人は春の夕暮をかく讚美して居る。又古代日本の歌人は紫がかつた春の曙の美景を歌つてゐる。淸少納言の枕草紙には開卷第一、から書いてある、『春はあけぼの、やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。』實にかくの如きが春の曙の美さである。所で、わが蕪村は今、美しい宵と曙との間に挾まれてゐる春の宵のことなれば、云はずと知れてゐる、美しいに相違あるまいと春の夜を私共に告げやうとするのである。私共は蕪村の句を得て、三たび歡喜の叫聲を發せるを得ない。ああ、春陽四月の夜が、如何に艶麗な香氣を放散するであらう。蕪村は如何にも千年の歷史ある山紫水明の舊都の詩人であると云はねばならない。私に一詩がある、……

『豬しい紫色の風そよぐ日本の夜、……
仙女の金の船のやうに、古風な月が
夢の海中を和かに揺れ始める
(私は聞く、月の船　かすかな美の歌を、
私は聞く、その金色の衣のきぬずれさへ(もゝ)
愛と祈禱に燃ゆる千百の提灯は、
朧げな追憶のやうに巷を漂ふ。
日本娘の銀のやうな木履のひびき……
彼等は古代の胸から生れた小さな幽靈だらうか……
忘れられた千の空想を滿たしに歸つてきたのではなからうか。
おお、古い戀と滿たされない希望から生れた、
日本の夜の想像の世界……
日本の夜に響く戀愛の歌……
飢ゑた情熱と淚の三絃の音……
おお、闇と戀から出づる長い心の慟哭……

諸君は假裝する狐の戲畫を見たことがあるであらう。亜には春の淡い新月の影を踏み、輕快な若公達が逍遙してゐるところを輕筆で描いてある。この若公達は芋の葉の狩衣を身に纏つてゐる。あはあ、お化の狐だた……後へ一本落とした脇刀かと見ると、狐の尾だ。扇はと見ると、一二三本の麥稈でもつて古

風に結んである。場所はどこか、京都の洛外あたりであらうか……日本の春の宵は濃艶で狹霧が深い。どんな狐の心でも、そのバランスを失はしめる位、何といふ誘惑美が日本の春にあるであらう。蕪村は艶美な自然の身振りを凝視する詩人だ。彼の詩心は夢のやうに人を醉はせる春宵の靈である。彼が春の宵を取扱ふ妙腕は實に古今に亙つて無敵である。

然し蕪村は春宵一刻の外面的評價から、更に歩を進めてその心理狀態に入らねばならない。私共が春の宵を包む紫色香ばしい帳のなかに坐り、拔足でやつて來る懈怠の感に撃たれる時、始めて春の宵がその祕密を洩らすのである。蕪村が『さしぬきを足でぬぐ夜や朧月』とうたひ、或は『行春やおもたき琵琶の抱き心』とうたつて、心の弛緩を感じた時、彼は春宵の靈を抱合してゐるのである。ここに於て彼の詩心は纖巧微妙の極を握り、彼の自然の理解は實に餘す所が無い。

私はこれ等の句を讀むと、直にキーツの『懈怠之賦』を念頭に呼ぶ。懈怠の靈が眼を痲痺させ、苦痛はその針を失ひ脈搏は游らぎ行く時、詩人キーツは戀と野心と守護神の『詩歌』の三つの姿を見た。然し彼は、『さらば、三つの靈よ。私の頭は草花の中に冷やかに休む。それを汝等は亂だすことが出來ない。私は賞讃を食ひ、感傷的茶番の寵兒とならうと思はない』と歌つて、懈怠の靈域の破壞せられることを恐れた。わが蕪村はキーツのやうに三つの姿を見、それ等に對して『消えよ』と叫んだかどうかは知らないが、私共は、彼が琵琶の抱き心の重たきを感じ又彼がさしぬきを足で脱ぐ自墮落な光景を見て、どんなに狎々しい親交の感を彼に覺えるであらう。キーツに比較すると、彼は恰も手のこんだ西洋料理に對する奈良漬の如きものであらう。私は日本人としてその奈良漬の一片が好きだ。

私はこれ等の句が蕪村の何時代の作品であるかを知らない。恐らく彼の中期に屬する作であらうと想像される。蕪村研究者は、『春の夜や』の句を安永二年即ち彼の五十八歲頃の作としてゐるが、句の情調からいふと、もつと若い時代の作でなければならない。然し同じ春の句にしても、それ等の作品を、『垣越にものうち語る接木かな』などの情調に比較すると、非常に感情が若いやうに思はれる。兎に角、それ等は濃厚艶麗のうちに一沫の寂寞味を傳へるもので、その情調は私共に抱一上人の繪畫を想起させるであらう。少くもそれ等は、蕪村が得意とした文人畫とは何の關係が無いと云はねばならない。勿論彼に二箇の個性があつて、一は抱一式岩繪具の情調である、そして他は淡泊清楚な水墨の趣味である。

鶯や小太刀佩いたる身のひねり

芭蕉は『鶯の笠落したる椿かな』で、鶯が椿の花の笠をかぶつてゐると見立ててゐる。蕪村は、長安の貴公子が小太刀を佩いてゐる姿に鶯を見立て、其輕やかな身のひねり工合を嘆美した。

私は必ずしも比較するといふ心持は無いが、ここにキーツの夜鶯之賦を語つて、如何に東西の詩人の思想が相違してゐるかを示したい。

キーツの胸は痛み、恰も毒藥を嘗め、昏睡の阿片を服して黄泉の路へと沈み行くかのやうに、彼の五官は麻痺する。彼は思ふ……それは單に夜鶯の幸福を羨むからで無い、實は、夜鶯の運命の幸福に醉つて自分も餘りに嬉しいからであると。彼は今ぶなの木の木立の蔭で、喉一杯安らかな聲で初夏を歌つてゐる輕い翼の樹神、いな、夜鶯を眺める。彼はいふ、

『ながい年月の間、地中で冷やされた葡萄酒一杯を傾け、花祭或は緑の田園或は舞踏プロヴアンスの唄或は日に燒けた人々の歡樂を偲びたい。温い南歐の酒を盛る杯は、赤い玉の泡がなみ〳〵溢れ紫色に飲口が染まる誠の泉だ。一杯飲んでこの世を去り、夜鶯の住んでゐる森のなかへ消えて仕舞ひたい。消えたい……融けたい、浮世のすべてを忘れたい。地上には疲勞がある、煩悶がある、不安がある。人々は地上でうめき合ふ。老人は殘り少い最後の白髪を震はせる、青年は幽靈のやうに痩せ青ざめ枯れて行く。物を思ふと悲哀がする。絶望は鉛のやうな眼附きをして來る。美人に輝く永久の瞳無く、新しい戀愛も明日を越えて憧れることが出來ない。』

詩人キーツは、豹のひくバッカスの車に乘らず、目に見えない詩歌の翼を借りて夜鶯のそばへ行きたいと願ふのである、そして彼の痴鈍な頭腦は亂れるであらうと心配するのである。彼は既に夜鶯と一緒に居るものと想像する……夜は柔かだ、月の女王は星の仙女にかしづかれて其玉座につき給ふ。たゞここは暗い……たゞ、微風と一緒に天から緊る木の葉と苔の細道との間をたどつて來るものがあるばかりだ。キーツの眼は足もとに何の花が咲いてゐるかを見ない、どんな柔い香氣が枝にかかつてゐるかも知らない。然し彼は闇のなかで、行く春の月が叢や野の果實に投げる香氣をかぎ、白さんざしに鄙の薔薇、葉がくれに褪せ易い菫色、五月半ばの姉娘麝香薔薇も咲き始めて、露けき酒に滿ち、夏の夜毎に羽音の騷々しい虻が乘つて來ることを感ずるのである。彼は闇のなかでなほも耳を欹てる：……彼はいく度か、死を愛し、やさしさ名前で死を呼び、靜かに自分の呼吸を止めたいと思つたか知れない。だが、今位死が

斉く、夜鶯の恍惚と魂をそゝぎ出す歌を聞きながら、眞夜中に何の苦痛も無く消えて仕舞ひたいと思つたことがない。

キーツはいふ、『夜鶯よ……お前は歌を續けるであらう、然し一たん死んだ時私はお前を聞かない。お前の氣高い挽歌に對して私は一塊の芝土に過ぎないであらう。おお、永劫の鳥よ、お前は死ぬために生れたもので無い。貪婪の世もお前を踏みにちらない。今夜私が聞くお前の歌は、昔王侯も田夫野人も聞いたであらう。又異國の畑で、故郷をしのび乍ら涙の落穂を拾つたといふ路得(ルス)の悲しい心を動かしたでもあらう。更に又淋しい仙境で、白波荒れる危險な海に開く魔城の窓により添ふ手弱女の耳を、お前は慰めたでもあらう。』

ああ、物寂しい。この一つの言葉が鐘のやうに響いて、キーツは今孤獨の自分を呼びさますやうに感ずる……彼は叫ぶ、『空想よ、おさらばだ。空想は名高いわりに人を欺き得ない。空想よ、お去らば、又夜鶯どもおさらばだ。夜鶯の悲しい頌歌は近くの牧場を過ぎ、靜かな流を越え、岡の彼方へ上り、向ふの谷の木立に消えてゆく。ああ、醒めし夢であつたか、或はまた現であつたか。夜鶯の歌は絕えてしまつた。私は醒てゐるか、或は眠つてゐるのであるか。』

いや、實に、詩の引用が長きに渡つて恐縮の次第であつたが、かういふ西洋の詩から蕪村の鶯の句へ來ると、山海の珍味から香の物に移るの感がある。所で、私の『鶯の頌』を一つ讀んでもらひたい。

『たつた一つの歌の創造者よ、
お前は勝利を、狂喜を、藝術をいつも同じ言葉で語る……
何といふ神秘だ。
私はお前よりも餘計な歌と夢を二つ三つ持つてゐる、
だが、私は歌はない前から慄き、躊躇する……
悲しいかな、私の音樂は私の命を奉じない。
お前は歌を突進させる……何といふ不注意な態度だ、
空中へ歌ひのけ、其歌をけろりと忘れて仕舞ふ……如何にも
お前は豪氣だ。
お前は、歌の順番を待つてゐる外のものどものを考慮しない、
お前は歌ひ歌ひ、自分の歌だけの路を推しすすめる、
(外の鳥や詩人は氣の毒なものだ、)
ああ、何といふ愉快な野蠻の一行爲であらう。
お前の歌の學術的意味を、私は知らない、

お前は鳥であるのみで無い、確に詩人だ……
ああ、お前は韻文學の謀反者だ、
何といふ新しい言葉をお前は發見したであらう。
お前の歌は、私共人間の生命と藝術をかき亂す
お前の聲に感動の蕩盡がある、
お前の人生に歡樂の驚異がある……
お前は人間を、お前と同種族のものと變じて仕舞ふであらう、
單純と力の一表現として仕舞ふであらう。
お前の歌は止み、お前の歌は飛び去る、
ああ、どうしてお前の仕事はそんなに早く終るのか、
お前は人間の歌に、お前の歌の將來を認めたのであるか。
ああ、お前は暗示だ……何といふ藝術の一斷片であらう。」

恐らく私の詩は、キーツの山海の珍味と蕪村の香の物との中間に位する果實の地位を占めるであらう。

野路の梅白くも赤くもあらぬかな

蕪村は何處で白くも赤くもない梅を見たであらうか。彼はそれを彼の心の中で見た。梅の蕊に色が付いてゐる餘地が無い。紅梅と云ひ白梅と云ふ、これ瑣細な外形上のことのみ。かかる詰らない色彩に惑はされて梅花を見るやうでは、眞實に梅を鑑賞するので無い。

彼が心の中で、赤くも白くもない梅を見なかつたならば、彼は繪畫の中でそれを見たであらう……眼前に長く展べたる尺五の紙に描かれた野梅二三本、これ水墨の一幅である。墨で圓く輪をなす梅花に紅白の議論が有りようが無い。見る人は白くも赤くも勝手に彩色して眺めたらよからう、筆者の關する所でない。筆者はただ梅を描いたに止る。

更にまた彼は實際、白くも赤くもない野路の梅樹を見たであらう。私もそれを見た。私がこの東中野へ移つて來た頃は、田野が一面に間近かに擴がり、そこに立つ一本の梅樹を遠方から眺めたことがあつた。その木が太陽の光線を受けて煙のやうに煙り、私は紅白いづれであるかを知らなかつた。私は人を送つてその木の所有者に談判させ、自分の庭へ移植させるに至つた時、始めてそれが白梅であることを知つた。

かたまりに杖うつ梅の主人かな

ステッキで叩かれる土塊にどういふ詩趣の響が出るであらう……疑ふものには疑はして置くさ。私はこの句を蕪村作品中

秀でたものの一つに數へ。かたまりに被うつ梅の主人となつて、自分だけの詩の雰圍氣を作りたい。空はくつきりと晴れて寒いけれども、春の靈は風の花瓣と花瓣との間に微笑してゐる。梅の滿開も間近に迫つてゐる。季節の進みも順良である。私共は自然の法則を守つて天命を知らねばならない。梅一輪一輪づゝの溫かさに對して感謝するであらう。時は何時……ロバート・ブラウニングは『ピパは過ぎゆく』の中でピパに歌はせた俗謠の句『時は春、日は朝、朝は七時』の頃合ひであらうか。ブラウニングは、このかたまりに被うつ梅の主人の安心立命を歌つてゐる。即ち、

『時は春、
日は朝、
朝は七時、
山の腹に露の玉、
雲雀は空に、
蝸牛は枝に這ふ、
神、天に知ろしめし、
すべて世界は事もなし。』

俳句詩人の目的はその住む詩的雰圍氣の印象を讀者に與へるにある。故にその讀者は、作者と等しき詩的雰圍氣に生活する人でなければならぬ。かかる讀者にして始めて作者の精細緻密な詩心に應合することが出來る。十七字詩は原始人の不定無責任な言語としか受取られないかも知れぬ。無教育で非文明な野蠻人の空想から吐きだす簡單な言葉に止るかも知れぬ。然し私は、如何なる詩人でも眞實である場合、原始的心理狀態に歸らないものがあるかと質問したい。私の解釋によると、眞の詩人はいつも原始的である、月の如く花の如く風の如く原始的である。私共今日の耳に聞く風の聲は太古時代に谷間や樹間を通つてアダムやイーブの耳に響いたものと等しいであらう。日本では詩人を『風月の友』と呼ぶが、この位愉快な形容詞はあるまいと信ずる。私共は人生の意味をより深くせんがために自然に入り、人情をより充實ならしめんがために花を歌ひ鳥を歌ふのである。諸君はそれは汎神教であると云ひたくば、云つて呉れ給へ。私は人間と自然、花と戀愛との間に神祕的親交を組ませたい。この觀念から左の一詩を書いてゐる。……

『花として存在し、詩人として存在するのは一つの偶然、
同じ力の發現、ただ進化の捻りが異つたばかり。

私はそれ等に形式を見ず、たゞ美の證據(エビデンス)のみ詰める。
美の想像がかたまつて詩人となり、又花となつたのだ、
詩人たるのは花たることで、
舞ひ手となるのは、即ち歌ひ手に歌はせるため。』

遲き日のつもりて遠き昔かな

私の俳句を愛する文學心は、時たま西洋の詩集を讀み、偶然に、恰も突然雲間を洩れる閃光をうけて異境の群集のなかから郷人の懐しい顏が顯はれるやうに、俳句情調を西洋の詩に發見して歡喜を感ずることがある。私は次の句を書いたサベージ・ランドアを俳句詩人と呼ぶであらう。

『私は人生の炎に兩手を翳して暖まつた、
炎は漸次に沈みゆく、
私に出發の用意が既に出來てゐる。』

この詩的雰圍氣は、確に、『遲き日のつもりて遠き昔かな』の句境に合致してゐるであらう……少くも私はさう思ひたい。句の表面上、俳人蕪村は過去の追憶にのみ止つてゐるが、運命の召喚に遇へば、われに出發の用意既に出來てゐるといふ意味を暗示する……詩的表現の客觀性も、その最善なる場合には、いつも作家の主觀を明白に啓示するものだ。讀者が作者の語らない靜寂の一面を讀み得る時、自らその豐富な敏感性に對し深く感謝する所があるであらう。實際、私はテニソンやブラウニングの作中からでも、日本俳句の趣旨をくみ出すことが出來る。殊にウオヅウオズの諸作は、直に飜へして俳句とすることが出來るといつても過言ではあるまい。コンベントリー・パトモーアの詩集『アンノーン・イロス』中の一篇の詩、題して『玩具』といふ作に對して、加賀の千代女が死兒を哀哭した一俳句、『蜻蛉釣り今日はどこまで行つたやら』を讀んだ時と殆ど同じ戰慄を私は感ずるであらう。實に俳句の上乘なるものを讀むと、私は希臘詩集を開いてその寶石に觸れるやうに感ずる。

ふためいて金の間を出る燕かな

端歌子は歌ふ、『飛んで往來の編笠をのぞいて來たか濡れ燕』私は燕に問ふであらう『お前は編笠のだれであるかを見屆けて來たか……お前は輕快だ、敏捷だ。私に胸に秘める戀がある。お前私のため戀の使者に成つては呉れないか。いな、私はお前に賴まないであらう……お前は餘りに向ふ見ずの慌てものだ。』

蕪村は歌ふ、『ふためいて金の間を出る燕かな。』蕪村の燕は何故に金の間へ飛込んだであらうか。芝居に出て來る戀の使者で、戸惑ひして其處へ飛込んだのかも知れない。お姫様の侍女の一喝を食ひ慌てゝ飛出したのかも知れない。燦爛たる金色の唐紙に映る燕の黒光りする紫色の着物に、何といふ見事な色の對照があるであらう。私は樣々の句に色の蕪村を見る。『海棠や白粉に紅をあやまてる、』『朝顏や一輪深き淵の色、』『朝顏や手拭の端の藍をかこつ、』或はまた『若葉して水白く麥黄みたり』などの句に、何といふ色彩美があるであらう。そして私はそれ等の句と等しく、金の間を出る燕の句を愛するものである。

日は日くれよ夜は夜明けよと啼蛙

春雨や暮れなんとしてけふも有り

『逍遙遊の二字ある事は、心に天遊ありて、世におもしろからむといふ事也。天はこれを得て月清く、地はこれを得て花咲り、鳶と魚とはひらめきて遊ぶもの也。野馬は風にうかれて遊ぶものを、草くふ牛の飽てしづかなる。虻はその尾に遊ばんとすれば、うしのぬしはとまらせてうたん事を思ふ。はたとうたれて、かなしからむは、遊ぶ時の心にかへよ。そのぬしの牛にはちかれて、ふたつなき鼻のかけたるためしもあらむに、すべて遊ぶ事は先にして、くるしむことはのち也。誰か遊んでくるしまざらん、くるしまずして遊ぶ人の世にありて何人ぞや。世に實あり虛なり、實にあそぶ人は虛にくるしむ。たれか實なく虛にすむ人ぞある時のあるにぞ。いとどくるしむべき虛に實有、實に虛あらば、虛實は虛にして自在なるべし。むかし莊周が夢に胡蝶と遊びしも、觀齊の花に、よめ入せられしも、もとより虛をもて虛をとかねば、まして實をもて實をとかず。かかる聖人の虛をさして、いまの人もつれてあそばざらんや。此故に春になりて、川狩にあそぶ、茸狩の時は浪人を遊ばしめ、鷹狩りの時には大名を遊ばしむ。定よく天のあそぶものにして、貴賤貧福は人のくるしむ處なり。』

これ芭蕉が雜然に與へた『逍遙遊』の一文である。彼はまたいふ、『しかも風雅に於ける造化に從ひて四季を友とす。見る所花に非らずといふことなし、思ふ所月に非らずといふことなし……夷狄を出で鳥獸を離れ、造化に從ひ造化にかへれとなり。』陰陽虛實は天地自然の法則である。この法則は破壞することが出來ない永劫の音律である。私共はこの音律に醉つて人生の長からんことを計らねばならぬ。

蕪村が『陽炎や名もしらぬ蟲の白き飛』と歌つた時、彼は名もない小蟲が宇宙に逍遙する姿を眺めたのである。宇宙に生命

を受けたもの、みなこの逍遙の音律に從はねばならぬ。喜んで狂せず、愛ひて痛まず、悠々自適せねばならぬ。蕪村は『日は日くれよ夜は夜明けよと鳴蛙』と歌つて、永劫に流れる時間の進みを語り、又、『春雨や暮れなんとしてけふも有』の一句で、時間の去來を喜ばず又必ずしも悲まず自然の音律に逍遙する詩人の姿を語つてゐる。詩人とは何か。彼は空間と時間との間にかかる一疋の蛾である。

春風馬堤曲　十八首

余一日問耆老於故園。渡澱水過馬堤。偶逢女歸省郷者。先後行數里。相顧語。容姿嬋娟痴情可憐。因製歌曲十八首。代女述意。題曰春風馬堤曲

やぶ入や浪花を出て長柄川
春風や堤長くして家遠し
堤下摘芳草　荊與棘塞路
荊蕀何無情　裂裙且傷股
溪流石點々　踏石撮香芹
多謝水上石　教儂不沾裙
一軒の茶店の柳老いにけり
茶店の老婆子儂を見て慇懃に
無恙を賀し且儂が春衣を美む
店中有二客　能解江南語
酒錢擲三緡　迎我讓榻去
古驛三兩家猫兒妻を呼妻來らず
呼雛籬外鷄　籬外草滿地
雛飛欲越籬　籬高墮三四
蒲公英花咲り三々五々五々は黄に
三々は白し記得す去年此路よりす
憐しる蒲公英莖短して乳を浥
むかし〳〵頻りにおもふ慈母の恩
慈母の懷袍別に春あり
春なり成長して浪花にあり
梅は白し浪花橋邊財主の家
春情まなび得たり浪花風流
郷を辭し弟を負て身三春
本をわすれ末を取る接木の梅
古郷春深し行々又行々
楊柳長堤道漸く暮れたり
矯首はしめて見る故園の家

黄昏に倚る白髪の人
弟を抱き我を待つ春又春
君不見古人太祇の句
藪入の寢るやひとりの親の前

この韻文は私共の詩に最も接近した作である、從つてウオッヅウオズの如き西洋の詩人を喜ばせるであらう。結句の『藪入の寢るやひとりの親の前（太祇）』も、倫理的な湖畔詩人の意に適ひ、又『やぶ入や浪花を出て長柄川』の起句の凡ならざるを思ふであらう。ウオッヅウオズの詩の急所急所を變して、俳句に書き直すことが出來るが、俳人蕪村のこの作は俳句の連續である ことはいふまでも無い。

古い俳詩界の連句は『冬之日』で止めを刺すであらう。私もその幽艷逸趣を認める。その變化の神出鬼沒を認める、その陸離たる色彩を認める。然し『連句』は現實を離れすぎる、想像の遊戲が放縱すぎる。如何にそれが精緻を極め怪光を散らしても、畢竟机上の詩は人に迫る力を持たない、私共の今日信ずる文學でない。詩でない。

『炭賣の己が妻こそ黑からめ　重五
人の粧ひを鏡磨寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲きかへり　杜國
鶴見る窓の月幽かなり　野水
風吹かぬ秋の日瓶に酒無き日　芭蕉
狄織る笠を市に振する　羽笠』

最初炭賣の妻の姿が樣々の場面を呼び起して、芭蕉の番になると『風吹かぬ秋の日瓶に酒無き日』を樂む清貧詩人となつて、内職の笠を町へ出て賣らうといふのである。奇想天外より落つといふ言葉は正にこの連句に對する評語であらうが、私共はこの現實的連絡のない聯想に驚れて徒に眩惑させられざるを得ないであらう。譬へると外國人の食へない雲丹の如きもので、其價値は鄕土的である。詩的聯想の訓練には成るが、現實を離れるといふ遊戲性の誘惑に落ちざるを得ない。私自身は、全篇を通する情調より、一句一句の獨らす詩趣に感服する場合が多い。

然るに蕪村の春風馬堤曲は終始一貫の意味ある作品である。『春情まなび得たり浪花風流』の一句で、この曲の主人公は人の氣嫌氣褄を取る客商賣の年若い娘であることが知れる。路傍の柳藥と共に老ひゆく茶店の老婆は、彼女を見て、『無恙を賀し且儂が春衣を羨む』とある。曲は『やぶ入や浪花を出て長柄

川』の句で始まる。長柄川を吹くそよそよの春風は長い、そして彼女の家は遙に遠い。將にこれ『歸去來之賦』の『舟遙遙以輕颺、風飄々而吹衣、問征夫前路』の景である。陶淵明は兒童へ迎へられ、『三逕就荒、松菊猶存』を喜び、部屋に入つて酒杯を擧げたのであるが、蕪村の女を黄昏の門に立つて待つ老母の髪は白い。『弟を抱き我を待つ春又春』の句で、この老母は幾年かの間幼弟を抱いて門に立ち、彼女の歸るのを待つたであらうといふことが知れる。

『歸去來之賦』は陶淵明が家に歸つてから詩の場面は開展するのであるが、蕪村の作は『春風馬堤曲』である。曲の主人公が老母に迎へられて終つてゐる。『歸去來之賦』の結句『樂夫天命復奚疑』は千金の重みがあるが、春風馬堤曲も『君不見古人太祇の句、藪入の寢るやひとりの親の前』の結句で、情景兼ね備はるの感がある。この太祇の句は、句としてのみ見ると、例の『あれも人の子樽拾ひ』以上のもので無いが、蕪村の叙景を得て感傷主義を脱し餘韻ある詩句と成ることが出來たのである。この一篇が恰もこの一句の解釋でもあるかのやうに思はれても辭しない所に、蕪村の溫厚な詩人的態度も偲ばれて面白い。

私は嘗て『蓮花崇拜』と題する一詩中に、

『晴明の水を貫く無音の蕾は、恰も合掌の女僧のやうに、
恰も合掌の女件のやうに、禮拜者は合掌する、祈願する』

の言葉を書いてゐるが、私はこの蕪村の曲を讀んで文字上の暗合があるやうに感ずる。蕪村は歌ふ……

『蒲公英花咲り三々五々五々は黄に
三々は白し記得す去年此路よりす
憐しる蒲公英莖短して乳を浥
むかし／＼頻りにおもう慈母の恩
慈母の懷袍別に春あり
春なり成長して浪花にあり。』

これは蕪村が、連句に於ける句々の聯想を文字に應用したものかも知れないが、實に愉快な音律が響き渡つて、曲の帯出しのやうに、長柄川を長く流れる春風の諧調がある。



島の爲朝

露伴學人

鎭西八郎源爲朝とへば先づ以て我が日本の快人であるが其の事跡のおほよそは普通の歴史にも見えて居るから、誰も知つてゐるところで、今更事新しく說くまでも無いし、又小說的には曲亭主人の弓張月が大に行はれて隨分今猶ほ多くの讀者を有して居るほどであるから、虛實打交への面白い物語は言傳聞傳へて、多數の人々が知つて居るので、爲朝に就いて說く餘地は殆んど無いと云つても宜い。しかも弓張月は曲亭の作中でも好い作であるから、假令時代が距たつて世間の好尙が異なつて來ても、曲亭を談ずる人が存する限り、猶ほ幾年も其の生命を存して、朦雲國師や阿公(クマギミ)の怪奇な條は我等には厭はしく感ぜられぬでは無いが、活動寫眞にも妖異幻怪な光景が猶ほ喝采される世である以上は、今後も歴史上の爲朝によつて小說の弓張月が手に取られ、又小說の弓張月によつて歴史上の爲朝が回想されるやうなことは

永く有り得る事情であらう。曲亭は其の傳に特書されるほどの事でも無いが、若い時何かの事情で暫時伊豆の下田の某家に寓して居たことが有つて、自分が明治年間に下田に遊んだ時、其頃の住者の某氏が其家を指示して呉れたことを記臆してゐる。下田は伊豆諸島との交渉の多い地で、大島其他の島々の事情は自然に窺ひ知らるゝところであつたから、後年に至つて馬琴が爲朝外傳の弓張月を起草するに至つた縁になつたことでも有らう。自分は曾て大島に一周間ほどを通したが、大島は伊豆國に遠からぬとは云へ、云ふまでも無い海中の一孤島で、三原山の烟、四圍の海、椿の茂みに牛鳩の鳴くくらゐより外に何事も無い眞に安閑無事の太古のやうな好いところでは有るが、さて此樣な島に居るのみで出ることの叶はぬ身となつたならばと、或日、山の上の砂原に箕踞して四方を見渡しながら、つく〴〵と昔の流人の上を思遣つたことが有つた。勿論先づ第一に爲朝の事を思浮めた。それから爲朝よりも古い人々の上を思つた。島は異なるが同じやうな島の三宅へ流された繪師の英一蝶や、神道者の井上正鐵や、俠客の小金井小次郎や、ずつと遠い島へ流された關ケ原の西軍の將の浮田秀家や、いろ〳〵さま〴〵の人の上をも思つた。そして井上正鐵を思ひ浮めた時のほかは、輝かしい南海の極樂のやうな好い島に身を置いて居るにも關らず、一種の黯然たる感を催さずには居られ無かつた。

爲朝が大島へ配流されて着いたのは保元元年の秋か冬で有つたらう。保元の戰が七月の十日の夜から十一日掛けてで、十一日の曉には萬事既に了したと云つても宜いので、十二日には上皇は薙髪あり、十四日には左大臣頼長は死して居るのである。爲朝は其の戰が敗れた後、九月の二日、或は三日に捕へられて、八月に北の陣を渡され、詮議の上、大島配流に決定されたとある。北の陣を渡されたのも、八月二十六日だといふ異説があり、捕へられた場處も、近江國の輪田といふところだといふのが流布本保元物語の記するところで、大日本史も之を取つて居るが、同じ近江の石山寺だ

といふのもあり、九州の田根といふところだといふのも有る。然し九州の田根といふところは、何國か知らぬが、九州へまで落ちて終つて居たらば、九州は爲朝の敵も勿論多いが、味方も澤山有つて、十三の歳から勢力を張つて、自ら九國總追捕使と號したと云ふほどだから、おめ／＼と召出されさうにも無いことで、これは甚だ事情に釣合はぬ。石山寺と云へば名高い寺で、人出入りも多いことであり、都にも甚だ近いから、特別に何か緣故の有る人物が有つて匿して呉れるといふ事でも無ければ、一旦朝敵となつた落武者が隱れ潛みさうも無い處である。これは蓋し京師本等の四本が皆記してゐる通り、或片山寺に立寄り、とある其片山寺が石山寺となつたので、名も知られて居らぬやうな近江の在の片山寺に潛んだといふのが實際であらう。七月といへば秋には入つて居るが殘暑の時である。其の戰には爲朝だとて、僅に二十八騎で一門を守つたのであるから、大汗をかいて身を揉んだり傷を負ふたりしてゐる。敵の箭ばかりでも、安藝守清盛の手の伊勢の住人伊藤武者景綱の射つたのは、距離が遠くて力が無かつたにせよ爲朝の錬鍔の太刀のもゝよせに射留めたと有り、同じく清盛の手の山田小三郎伊行といふ剛情我慢の男が、弓を挽き儲けて置いて、爲朝に名乘りかけて、鎭西八郎此に在りと答へたところを、弦音高く切つて發つたから、爲朝の左の草摺を縫ひさまに射切つたと有り、兄下野守義朝の家の者鎌田次郎正淸が、もとは一家の主君なれども今は遊軍の兇徒なりと呼はつて射た矢は爲朝の左の頬さき、半頭の間を射削りて兜の緒に射附けたとある。まして戰が急になつて、爲朝の頼み切つたる惡七別當、高間ノ四郎兄弟、大矢ノ新三郎、三町礫紀平次大夫、手取ノ與次等、二十八騎の中の二十三人が討れて、其餘の者も手を負はぬは無いほどになつては、何程剛勇手きゝ目きゝの爲朝だとて、鎧は破れ裂け、身も心も働き餘つたらうから、もとより打瑕切瑕突瑕箭瑕の數を負ふたことであらう。幸にして高腿を斬られたとか、腕を打落されたとかいふことは無かつたから、院の御所が義朝に燒打されて味方總敗軍になつた時、爲朝は大原山の方から落ちて、父の爲義と一處に居た

が、爲義が謀を用ゐないで義朝を頼りに降人に出るに及び、別れて一人潜んで居たのである。が、まだ秋冷が深くは信さぬ頃の事では有つたし、激勢負傷をした後では有り、其の手當も十分に出來ぬは勿論、朝敵殘類で有るから潜匿住事にさへ自在を缺く身である。そこで後に至つては海上で疱瘡神を睨返したと云はるゝ爲朝でも、病氣になつては爲ん方も無い、附從つた郎等一人を僞法師にして食を得る道を取り、自分は古い湯屋を借りて、おり湯をした。おり湯をしたといふのは今で云へば湯治である。さういふところへ取つて掛られたのだから如何に爲朝でも敵はうやうは無い。しかも爲朝に馳向つたのは佐渡ノ兵衛重貞といふ平家侍の中でも中々しつかりした者で有つて、家の子郎等を始め、土地の住民まで驅催して、爲朝が入浴裸裡のところへ押寄せたのであるから、爲朝も初は激しく防いだものゝ、後には手脚が酸くなつて筋弱り勢萎み、終に力無くも生擒さるゝに及んだのである。そこで周防判官季實が重貞から請取つて、北ノ陣を渡したのだが、其時の爲朝のさまを京師本の記してゐるのが甚だ要領を得てゐて面白い。長七尺に餘り、八尺に及べり、痩黑みて筋骨殊に高く、眼大に、口濶し、凡夫とは見えず、少しも臆する氣色無く、四方を睨みまはしてぞ有りける。といふのだが、痩黑みて筋骨殊に高く、眼大に、口濶し、とあるのは眼に見るやうである。少しも臆する氣色無く、四方を睨廻してぞありける、も如何にも然樣有りさうで宜い。そこで死罪に行はるべきところを、關白の言によつて死一等を減じ、伊豆大島に流さるゝことになつたのだが、こゝに少納言信西といふ老骨の學者が出て來て、此の爲朝、内裏高松殿に火をかけ、御輿の者に矢をまゐらせんなど申しけること、既に君を射奉るにあらずや、然れば自今以後、弓を彎かせぬやうに相計らふべし、と云つて、左右の腕を鑿にて打放して其の筋を拔かしめたといふのである。爲朝の臂を鑿で割いて筋を拔かせた信西といふ老骨は其因果應報でもあるまいが、それから三年たつた平治の亂に、大和の田原の奥の土の中に自分から生埋になつて隱れて居たのを掘出されて殺された。それは兎に角に、爲朝は信西の爲に

能い日に逢つて大島へ流されることになつた。其代りには、肩のつぎめ離れて手綱を取るに及ばされば、といふ譯で、牢の如くに四方を打附けたる輿を作りて乘せ、四方に轅を渡し、二十餘人して舁き、五十餘騎の兵士を相添へ、宿々次次に送られたのである。流布本には無いが、異本には此途中のさまを面白く書いてゐる。爲朝が其の牢輿の內で、おのれ等も聞け、人の流さるゝは皆悲歎にてあれども爲朝は悅ぶぞ、帝王にもあつかはれ、輿に乘せ、兵士を添へ、宿々の廚曹司にて配所へ遣はさること、誠に面目にあらずや、是に過ぎたる榮花やある。と戯れて云つたと書いてあるが、昔の物語作者も侮れない。如何にも物に屈せぬ勇士のさまを巧みに寫してゐる。又、朝威は恐ろしきかな、爲朝ほどの者が普通の凡夫に生捕らるゝことよ、今は何事をか爲べき、片輪者になりたればとこそ思ふらんが、一ト働だに働かば是程の輿は物にてやあるべき、これ見よ、とて少し働くやうにすれば、嚴しく打附たる牢輿むくめきわたり、碎け破れんとしける間、輿舁恐れおのゝき、逃去る時もあり、或時はエイヤと云ひて腰を押据ゑければ、些も動かぬ時もあり、又エイヤと云ひて身を打振れば、二十餘人の輿舁ども、一度に振倒さるゝ時も有り。などゝ書いて居る。曲亭の弓張月は此に據つて極力誇張して、爲朝がウンと力を入れると輿舁どもがヘタ張り伏すところなどを繪まで挿んで書いて居る。かくて伊豆へ着いて、流人の尻掛石のところへ率ゐて行つたところを、半井本が書いてゐる。流人の尻掛くる石に率て行き、尻かけよと申けれども、掛けたらば如何、かけずは如何、とて背て掛けず。人を人ともせず思ふやうに振舞ひければ、預り人伊豆國ノ大介、狩野ノ工藤茂光も、もてあつかひ思ひける、とあるが、掛けたらば如何、掛けずば如何、など云ふところ、簡單の二句の語に過ぎぬが、如何にも人を人ともせぬ不敵の勇者のさまが觀ゐやうで面白い。斯樣いふやうな次第で、爲朝は大島へ流されて來たのであるが、其の大島へ着したのは何日といふことも見えない。九月二日、又は八日に配流の事が決したとしても、海道を下り、伊豆に入り、大島に渡されたのは、早くて其月の末、遲くば十月

に入つてゞ有つたらう。

爲朝の父の六條判官爲義が情なくも子の義朝の家の子鎌田次郎正清の郎等に首を切られたのは七月の十九日とある。然すれば爲朝は其の潜伏中に無論其事を聞知つたのであらう。さすれば異本に、爲朝つく〴〵と思ひけるは、さても安からぬ事かな、左大臣殿と云ふ不覺人に支へられ、合戰に打負け、親兄弟を滅ぼし、身をいたづらに爲しつるこそ口惜けれ、中にも義朝を一ト箭に射殺す可かりしを助け置き、今は親の敵に成りぬるこそ悔しけれ、所詮鎭西に下り、九國の者共催し攻上り、王城を打傾けんに、義朝定めて防がんず、たとひ百萬騎が中なりとも驅破り、義朝を掴みて提げ、首捩切つて入道殿の孝養に手向け、與黨の奴原追靡かし、新院の御世となして、爲朝日本國の總追捕使とならんこと、何の仔細ぞあるべき。とあるのは、本より筆者の忖度で、誇張的に過ぎて居ることは爭へぬが、然しまんざら無理ばかりでも無い。父を兄に殺されて、物思ふこと無しに居らう人は有るまい。まして義朝は箭先に掛けて射らば射る可かりしもので有つたのである。又我が言さへ用ゐられたならば、戰つて勝つ可からざりし戰でも無かつたのである。又父の爲義も我が言を用ゐて東國へ走つたならば、それは不定であるけれども必ずしも殺されると定まつたことでも無かつたのである。然すれば伊豆の孤島へ送り附けられて、新しく島守となつた八郎爲朝が、都は雲と隔たり、磯に濤は高く大島に流人としの第一夜を過した時は、勿論の事、感慨千緒萬端で有つたらう。しかし爲朝といふ人は詩人的歌人的の幽懷を有つた人とも思はれぬから、胸に思のくる〴〵と倭文の苧環繰返し、いろ〳〵の事を考へたか何樣だらう。父の爲義姪の頼朝などは、歌人的のところも無いでは無いが、爲朝の歌は餘り聞かぬ。たゞ一ツ南海諸島や伊豆の南端などにあるところの「あしたば」といふ植物―それは野生の三ツ葉芹の如くで、一寸好い香氣があつて食べられるものであるが、それを詠じたといふ歌が傳へられて居る。あした葉は、今日摘んで取れば、明朝はもう復摘む可き嫩葉を出して居るもので、それで其名も生じて居るの

であらうが、たゞ其事を詠んだまでゝ、歌章は言ふに足らぬ。八郎爲朝の歌は弓箭である。詩詞の人でさへ一ト見識ある者は詠物を好かぬものである、況して八郎爲朝とも有らうものが、詠物の小技などは敢てしさうも無いことである。或はたま〳〵見も及ば無かつたあした葉といふ者を珍らしいと思つて歌を詠んだかも知らぬが、それはホンの一寸したはざくれであらう。八郎の歌は強弓長箭、九ツ目の鏑の長鳴り、それが爲朝の歌で無くて何で有らう。爲朝の弓は八尺五寸。流布本には七尺五寸にて、ツク打つたる、とあるが七尺五寸では普通の弓の長さである。建久二年八月一日、大庭ノ平太景能が新造の御亭に於て賴朝に盃酒を獻じた時、諸武士の前に於て、八郎爲朝の弓の長さを論じて、鎭西八郎は吾朝無雙の弓矢の達者なり、然れども弓箭の寸法を案ずるに、其の涯分に過ぎたるか、と云つて居る。景能は保元の戰に爲朝の鏑矢に右の膝節を片手切にフツツと射切られ、鏑のミツヲ串、馬の折骨を射切り、馬の腹を射徹されて、弟の三郎景親の肩に掛けられて退いて幸くも生延びた男である。それも景能が自ら言ふ通りに、小賢しく馬を馳けさせて爲朝の右手の方へ避けたので、馬既にキレ違ざかりたるを爲朝が射たからなのである。馬上で射る時、敵に右手へ廻られるのは甚だ不便宜で、普通の弓でさへ弦が物にせかれ勝になるのに、まして爲朝の弓は常ならず長いので、それで其處の條を記してゐる杉原本等に、兜にかせらて思ふ樣にも引かれず、とあるやうになつたのである。景能は其處を論じて、弓箭の寸法、其の涯分に過ぎたる歟と云つてゐるのである。既に大庭平太が然樣論じて居るからは、爲朝の弓の長さの得失の論は別として、其の弓が普通の弓より長かつたらうことは推測られる。して見れば普通の弓の寸法の七尺五寸と記してある流布本よりは、實際八尺五寸だつたか何樣だつたかは不明であるが、七尺五寸よりは長かつたらうことは明らかである。特にツク打つたるとあるのは、餘りに素人くさくて感心出來ない。爲朝の弓の太いことを云はうとて斯くは記したのだらうが、ツクといふのは鋲で、折釘の如きものを云ふのである。天秤棒の兩端近くにある荷の緒の留まるやう

にしつらひたるものを今もツクといふ。土地によりては「雀踊り」とも云ふが、ツクといふのが正しい語である。今の天秤棒のツクは丸鋲の大きい者の如く、又は單なる太い木釘の如くであるが、古いのは折釘のやうな形をして居たこと、古い畫を見て知るべきである。爲朝の弓が非常に太くて、握るに餘つてゐるので、矢を安くにも安き難く有らうと云ふところから、ツクが打つてあつて、それに箭を安くといふやうに書いたのであらうが、何樣も解し難いことだ。弓といふものは、少しの疵でも、膠の剝げたのでも、甚しく之を忌むもので、ツクなどを打つて置かうものなら、我等が引く弓でも直に其處から毀れてしまふ。まして爲朝の弓などならば一遍で毀れてしまはう。又如何に爲朝の弓が强くて太からうとも、弓といふものは弣、即ち握り處の弓の身を小指が工合好く緊ひ締め得なくては弓勢も無く矢の働も出無いものである。弓はたゞ押しさへすれば引けるものでは有るまいし、ツクが無くては矢の注せぬやうな其樣な馬鹿太いものが有らうやうは無い。況んや箭が押手に戝つて弓に添うて引かるゝ時は、朝嵐のかすけきにも落ちるほど輕く觸れて居ることを理想とすることは、後の書では有るが日置流の弓術傳を見ても知らるゝことであるに、ツクなどが有つて箭を啣んで居やうことは餘りに馬鹿々々しい。ツクの語は他に解しやうを知らない。狼牙棒のやうなツク棒といふのも多くツクを打つた棒であるから其名を得て居るのである。但し弓よりも强い弩弓にはツクがあるが、それは鈬、即ち弩牙で、弦を引掛けるところである。弓で云へば引手、即ち右手、の拇指の役目をするものが弩の鈬であるから、右手を以て弦をひくたゞの弓に、弩の鈬の如きが要らうやうは無い。ツクに別の義が有らば知らぬこと、さなくば爲朝の弓にツク打つたるは理が聞えぬ。京師本等には、ツク打つたるといふ語は無くて、弓は八尺五寸、長持の朸にも過ぎたり、とある方が、同じ誇張でも罪が無くて嬉しい。弓は斯の如き弓で、そして箭は。箭は、三年竹の極めて節近に金色なるを、洗ひ磨かば性弱りなんとて、節ばかりこそげ、猶も輕くも打れもやせんとて、鐵をのべて篦中過ぐるまで節を通し

て入れたり、羽繕は、鳥、鶏の羽を嫌はず、藤付に巻きたり、筈こらへずして破碎けゝる間、何をつぎて朱をさしたり、矢の根は楯破、鳥舌にもあらず、鑿の如くなるものを、さき細に、厚さ五分、廣さ一寸、長さ八寸に打たせて、まちぎはを篦にすりきせ、氷などの樣に磨ぎみがきたり。上矢の鏑は生朴、ひいらぎなどを以て、目の上八角に押削り、目九ツさしたるに、刃一寸、手六寸、亘六寸の大雁股を搖ちすげたり、三ツ峯に磨立てゝ、峯にも刃を付けたれば、小長刀を二ツ打違へて、瓶子に立てたるに異ならず。鏑は白篦に山鳥の羽、鶴の霜ふりを合せ矧に本四ツ立にして矧ぎたり、と記して居る。然樣いふ弓に、然樣いふ箭、十三束といへば勝れたる箭であるのに、十五束もあるのを、引いて放つ。中るところ必ず人を殪し馬を倒す。それが即ち爲朝の歌であつた。其の豪壯の歌の詠者たる爲朝は、今此の椿の國、あしたばの國、日の光の美しく輝く南の國、鰭の廣物、鰭の狹物、海幸の澤にゆたかな國、磯打つ浪の音、松の風のほかには騷ぐものも無い安らかな國、日出でゝ作し、日入つて息ひ、三原の山の神の火をたゝへ、大島櫻の淡々しい美しさをたゝふるほかには何の心も無い人々の平和な國へ、おちつきたく無くてもおちつかせられたのである。もう爲朝は何を爲すべくも無い安樂郷へ身を置いたのである。手の筋は拔かれて居るのである。病後の身は猶疲れてゐるのである。矢聲弦音の歌を樂しまうにも、それは叶はぬのである。流石の八郎もたゞ海風に髮を梳らせて、靑空の雲の往來を瞻るほかは無かつたのであらう。

あした葉は昨日摘まれても今日は芽を出す。南海暖地の晝の日の光、夜の氣の潤ひは、萬物に生々の勢を與へる。爲朝は五十餘日を經る中に臂を剝がれて筋を拔かれた其疵も次第に治つてしまつた。健康はずん〳〵と回復した。爽やかな心をもつ者は健やかな身を得る。八郎爲朝は其の強力長箭が絕倫なばかりでは無い、實に心の爽やかなことに於て比類の無い人物で、一生の行事を檢するに其の心の爽やかさを保つてゐたこと驚くべきものがあり、そして假令武勇があ

れほどで無かつたにせよ、あれだけに心の爽やかさを保つて居ることが出來れば、それだけで既に立派な人物であると思はせられる。一毫も氣に傷れが無い、じめ〳〵したところが無い。いつも長風滄海を渡ると云つたやうな爽やかさを持つて居る。其の氣象の爽やかさが後の爲朝傳を讀み味はふ者に感ぜられるので、そして其の氣象の如何を意識せぬ者でも、何となく其の爽かさに浸つて好い心持になるので、それで多くの人々は爲朝好きになるのである。頼朝は決して厭ふ可き人とのみは云へぬが、爲朝とは大に異なつて爽やかさが少い。少いどころか無いと云つても可い位で、其代りに重い厚いところが多い。然し其の重い厚いところが其人の好い處であるにかゝはらず、それが何と無く人に厭な感じを與へ、其の爽やかさの無いところが人をして頼朝を愛させなくなる。義經も爽やかなるところを相應に有つてゐるが、同じ爽やかさでも少し細りとしたところが劣る。義仲も爽やかさを有つてゐるが、少し濁さがまじる。源氏の其頃の人々は義朝でも義平でも皆若干の爽やかさを持つて居るのが多いが、頼朝、範頼、行家なぞは爽かさが無かつたり、少かつたりする。平家の人々にも立派なものは多いが、第一に忠盛、清盛、皆爽やかな心の持主では無い。清盛なぞは爲朝に立向つた時に、爲朝の弓勢を懼いて、必ずしも清盛が此門を承はりて向ひたるにもあらず、すさまじき者の固めたる門に向ひたること哉、と云つて、そこを退いて北の門へ向つたのなぞは、賢いには相違無いが爽やかで無いこと甚だしい。何も必ずしも爽やかなのが最も勝つてゐると云ふのでは無い、爽やかなのゝほかにも、和らかなのや、堅いのや、むらの無いのや、心の持ちやうの好いのは種々あるが、爽やかな心の持主は人の愛好を惹くことが多い。婦人などは特に爽やかな心の持主を好くもので、藝能地位なぞを有たないで、しかも美男子でも無くて婦人に愛される者に、何の美德が有るのだらうと觀察すると、唯一ツ爽やかな心を有つてゐるのだといふ例へが世に甚だ多い。まして相當の技倆や地位の有る人物でも爽やかな心の持主であれば、これは多くの人をして愛好せしむるに適した者である。

爲朝の如きは實に純た爽やかな心の所有者で、其上に其の勇氣と云ひ、心操といひ、人をして敬せしむるに足るのであるから、おのづから世に爲朝の贔負の多いのは異しむに足らぬのである。凝滯煩悶などゝ云ふものも、深く其肺腑に立入つて觀たならば、決して無い譯では有るまいが、其行蹟の上では更に其の存在したことを示して居らぬ、奇麗さつぱりとしたもので、一生の間たゞ一ツ保元の戰の時に、兄の義朝を射んとした時、待てしばし、弓矢取る身の謀、汝は内の御方へ參れ、我は院方へ參らん、汝負けば憑め、助けん、我負けば汝を憑まんなど約束して、父子立別れてかおはすらん、と思案して、番ひたる矢を指はづした一瞬のほかは、いつも右なら右、左なら左と、思ひきり好く、物明らかに、さら〳〵と心を持ち事に處して居て、露ばかりも凝滯踟蹰の痕を示して居らぬ。斯樣いふ調子の人は疫癘時氣なんどにあたる事は有つても、自己の心内より毒素を祕出して身を傷り臟を苦しめるといふが如きことは無いから、病むことは病むにしても回復する段になると早速なもので、之に反してねち〳〵した人は所謂煩悶といふ者が多く、自縄自縛、自縄自縛の境に陷り易いものである。爲朝は煩悶などゝいふ者を知らぬ人の如く見える。これは人物が大きいか、性質の極めて純で美はしいか乃至は慾心を捨切つたやうな者に任せるところより出て來ることで、自然の人柄からで無くては、假令慾心を捨切つても中々到り難い境地である。然し世に立つて事を爲す上には、此の爽やかさを保つといふことが最も有利なものでも何でも無い。人望を得るといふほかには、寧ろ不利を招くものかも知れない。失敗家にやゝもすれば爽やかな心の持主は有るものであるのでも知れることである。爲朝は其の天性から爽やかな心を有つて日を暮したと推測される。自分で木を割り材を檢して、弓を製したり箆を矯め羽を矧いで箭を造つたりして見た事で有らう。臂の筋を拔かれた位で有るから、弓箭を携ふることを許された筈は無からう、しかし射を善くする者は、少々不器用なものでも「爪遣り」をして箭の曲つて居るか居ぬかを檢し、そして其箭を矯め、又弓の「むらこき」をして、弓身

のカの不正に働くのを治したりするものである。又一段進んでは、自分の好に隨つて箭を造り弓を製することをも善くするものである。爲朝は必ず自ら其程の事を能くしたに疑無い。朴の木、柊の木の鏑が、椿の木や、黄楊の木や、ビンカの木に代へられたかは知らぬが、素矢も鏑矢も作つたことで有らう。鵄や鷹や鶴や鵠の矢羽が、覺束無い島の鴎の羽に代へられたことでも有らうが、それでも窮して而して窮せざるが自ら助くる者の常で、自ら助くる者は天之を祐くるのが不易の道理で有るから、路は需むるに因つて生ずる習で、何樣にか斯樣にか弓箭も出來た事だらう。既に弓箭が出來、弭、鏃が出來れば、島人は一も二も無く驚嘆畏敬したことで有らう。然樣で無くとも六條判官爲義の八男で、其の勇武材力は喧傳せられ、特に最近の合戰に名有る勇士を幾人と無く箭先に掛けて一世を壓倒した人では有りするから、狩野介茂光の代官で大島を管つて居た三郎太夫忠重といふ者を首として、皆おのづからに爲朝の下風に立つことを肯んぜざるを得ざる勢になつたことだらう。

爲朝は狩野ノ介茂光などを物の數ともする人では無い。大島と伊豆本國とは風波の無い日には一人乘の小船でも往來の出來る近距離で、喚べば答へんと欲すると云つても宜い位だが、それでも海は海である、山一ツ越ゆれば交通の出來ると云ふのではない。そこで爲朝の方から伊豆國に脚を着ける譯にも行かぬが。狩野ノ介の方から大島へ手を差出すといふことも一寸爲し難いので、云はゞ別に是れ一天地である。最初から然樣思つたか何樣か知らぬが爲朝は狩野ノ介の下におとなしくして居たり、島代官の三郎太夫の云ふことを聽いたりするやうに身の丈の矮い人では無い、自分は淸和天皇を出でゝ遠からぬ源氏である、此島を領したとて不都合は無い、と云ふやうな理屈を捏ねるほどの面倒もなく、おのづからに島中を壓倒して終つた。三郎太夫忠重は本によつては三郎太夫欽定となつて居たり、信重となつて居たり、忠光となつて居たりするが、どれが眞實でも差支無い。三郎太夫は島代官風情で、狩野ノ介の配下であるから、階級觀念の鞏固だつた

當時に於て、何として淸和天皇の後胤八幡太郎の御孫（爲朝の父爲義は祖父義家を嗣いだから）の爲朝に對つて頭の上がらう譯はない。しかも爲朝は剛勇無雙で、兎角を言つた日には擬宵にされるか何だか知れたものでは無いし、臂の筋を拔かれても弓こそ少し弱くなつたれ矢束を引くことは二ツ伏三ツ伏增したといふ途方も無い人に天降られたのだから、流人とは云へ、其流人を管かるどころか、却つて其流人に自分が管かられるやうな譯であつた。大島等は狩野ノ介茂光の所領であつたが、何も茂光風情に年貢を出すには當らないと、爲朝に押領されて終つたから、三郎太夫はそれも其儘にするよりほかは無かつた。厄介な籤を引いたのは狩野介で、爲朝退治に出かけたくない事は無いが、德利の上に小薙刀を打つたやうなものが十五束三ツ伏の箭幹に附いてゐる彼の大鏑矢を頂戴した日には堪つたものでは無いと、殘念ながら手製の意見に從つて默つて居るよりほか無かつた。

剛勇無雙の爲朝でも、たゞ大島の主となつて勝手を仕てゐるばかりでは淋しかつたらう。十五の時にはもう肥後國阿曾三郎忠國の婿になつて、九州中を暴れちらして、戰もすれば子供もこしらへてゐた八郎である。後に至つて上西門院ノ判官代になつた義實といふのは爲朝の長男である。又上西門院ノ藏人となつた實信といふのは次男である。此の二人は多分九州に居た時出來した子であらう。であるから大島の島主となつて、無事安閑たる日には、爲朝も二人の子の事を思出すことも有つたらうし、忠國の女で自分の妻となつたもののことを思ひ出したことも有つたらうが、思出し笑は助平の事だ、と世諺が云つてゐる。思出し悲みは痴人の税だらう、保元二年としても爲朝まだ僅に十九歲である、煩悶だの、絲瓜だのといふことは未だ流行してゐない世の中で有るし、まして生憎と爽やかな氣合の人で、鳥黐（とりもち）が枳殼籬（からたちがき）に纏ひついたやうなベタクタした小面倒なものをいちらちらしてゐることを名譽と心得るほど進步した若者では無かつたらうから、何等の談もそれ等に就いて傳へられて居らぬ。が、しかし一人では淋しかつたらう。そこで島中では多分第一

の女子であつたらうところの三郎太夫忠重の女を妻にした。忠重が歿したか、爲朝が押掛婿になつたか、それとも忠重の女が源家の御曹子に思ひを寄せて、キューピットが射た十五束三ツ伏、鷄、鳶、雉の羽を嫌はず藤はぎに矧ぎたるしたゝかの矢先に心臓をケシ飛ぶばかり射貫かれて眞紅の血を流したか、その様な事は古人に小説氣が乏しくて記し漏らしてゐるが、先づ以て爲朝と一ツになつたのである。今は當時を去る既に六百年であるが、それでも今に大島の婦女が木綿にせよ笹龍膽の紋つき裾模様の衣を着るならはしの遺つて居て全くは滅せぬところを思ふと、蓋し當時の島中に此の婚儀に就いての歡呼の聲の溢るゝばかりで有つたらうことは思遣られる。身分の好い立派な人を婿にすることは、當時上﨟婿取つたと云つて悦んだことであらうから、忠重も決して嬉しく無くは思はなかつたらう。爲朝はたゞ婿になつたといふ迄であらう。蘇武は漢の使として胡地に强ひて留められ、氷雪の間に漢の節を持して屈せざること十有餘年、今のバイカル湖の邊に、忠魂義氣金鐵の如く、凜々稜々として歲月を送つた人で有るが、それでも絲にかいたやうな瘦老人のむづかしい顏ばかりは仕て居なかつたと見えて、胡婦に子を生ませて居て、名を通國と命じてゐる。それを東坡だつたか誰か洒落た人が指摘して、遏め難きは此道だと云つてゐる。八郎は年は十九かそこらで、處は南海の暖かい島國、妻を迎へたに何の不思議は無い。

大島から望めば南に當つて洋中に島々が見える。既に大島を手に收めて居る爲朝が其島々を何で關はずに置かう。次第〳〵に島渡りして、三倉島、三宅島、上津島、新島、ミツケの島、沖の島、それらを悉く從へて、遂に八丈島をも從へたとある。八丈島は遙に離れて居る島で、詳しく考へたことが無いから斷定は爲し兼ねるが抑々八丈島の名は何時頃から見え初めて居るだらう、若し爲朝の頃より前に八丈島の名が聞えて居ぬのならば、古に於て諸國より織つて出した長さ八丈の絹を其島からも織りて出したので島の名となつたのだらうと云ふ說は點頭し難くて、爲朝が開いた故に八

丈島といふ名が出來たのだらうといふ說の方が受取り好いことになる。九州訛りでは八郎は「はつちやう」である、八丈は「はつちやう」の借字で無くて何で有らう。爲朝は最初九州に居て威を振ひ、保元の戰に引率した者も大抵九州で隨從したのもと見える。大島へ來て後も、威を張るに及んで、「昔の兵共尋ね下りて付從ひしかば、威勢漸く盛にして過行くほどに十年にぞなりにける」とある。曲亭の小說では、保元物語の三丁礫の紀平次太夫を、末始終爲朝に隨へる者として、名をも八丁礫の紀平次と誇張してあるが、紀平次太夫は保元の戰に村山黨の山口六郎といふものに右の腕を打落されたとあるから、實際は何樣なつたか知らないが、紀平次で無くとも爲朝の侍の大島へ隨下つた者は物語の本文の如くに必ず若干人は有つたことだらう。そして其等の大部分は九州訛の所有者で有つたらう。それ等の者が左右に居たればこそ爲朝も大島からは非常の里數の八丈島まで渡つたらうと云ふ者である。で、當時何といふ名の島であつたか知らぬが、其島が我が地となるに及んで「はツちやう島」即ち八郎島と呼ばるゝに至つたので有らうとすることは想像に於て順路を行く者であるやうに思へる。さる考證は他人に譲るとして、是の如くに爲朝が海南諸島に手を伸ばして居る間に十年は忽ち過ぎて、島の冠者爲頼、大島二郎爲家、の二兒を擧げ得た。

さて保元物語は八丈島の名を記する邊より甚だあやしくなる。それは物語の筆者が都方の僧で有らうか、或は文才ある者の歸佛入道した者であらうか知らぬが、何にせよ大島や何ぞより程遠い都の方の者で有つたらしく、そして大島に於ける爲朝の始終は傳聞の傳聞ぐらゐを文才で取廻して書いたらしいからである。大島のほかの島で爲朝の領した島といふのが、流布本には、大島を管領するのみならず、都べて五島を打從へたり、とばかりで、島名が無く、京師本には三宅島、八丈島、ミツケの島、沖の島など云島共と記し、鎌倉本には、大島を始として、三宅の島、上津島、八丈島、ミツケ島、奥の島、新島、三倉島と記し、半井本には三倉島を載せないで、奥の島を沖の島と作つて居るといふの

である。此等の記事中、三倉島、三宅島、上津島、新島、八丈島は論は無いが、ミツケ島、奥の島或は沖の小島は今の何島に相當するか、又島々の名の列擧し方が何れの本も何故に錯落として大小より言ふも遠近より言ふも少しも筋立ち居らぬか、此等は皆筆者の智識が朦朧として、把握する所の確然たらざることを證してゐるもので無くて何であらう。

それから物語の記事は爲朝が鬼ヶ島へ渡ることの段になるのであるが、「去程に永萬元年三月、礒に出て遊びけるに白鷺青鷺二つ連れて沖の方へ飛行くを見て、鷺だに一羽千里を飛ぶと云ふに、況や鷺は一二里にはよも過ぎじ、(文や理をなさず、爛化想ふ可し)此の鳥の飛樣は定めし嶋ぞ有るらん、追うて見んと云儘に、早舟に乘りて馳せて行くに、日も暮れ、夜にもなり、月を篝に漕行けば、曙に既に島影見えければ漕寄せたれども、荒磯にて波高く岩けはしくて舟を寄すべき樣も無し、」と云ふので、それから上陸すると鬼ヶ島で有つたといふのである。如何に古の書でも是に於て戰記は作り物のうつぼ物語や御伽草子の梵天國の類になつて終ふのである。第一大島に鷺の往來といふことは幾度か島人に問うて見たが呆然として答が無かつたばかりで無く、鷺の後を手漕の船で一晝夜追尾したといふのはお伽話的過ぎる。何程剛勇の爲朝にせよ、これでは狂氣じみてゐる。面白いには面白いが、其面白過ぎる。それから其鬼ヶ島の鬼共の生活を記したところに、「我等が果報にや、魚は自然と打寄せらるゝを拾ひ取り、鳥をば穴を掘りて領知別ちて其穴に入り、身を隱し聲を學びて呼べば、其聲に附いて鳥多く飛入るを穴の口を塞ぎて闇取にするなりと云ふ、實にも見れば鳥穴多し、其鳥の勢は鴨程なり」とある。何だか善知鳥の談にも似て居り、南洋の島嶼の談にも似てゐる。流布本には其鬼共を從へて網の如くなる太布を出させ、島の名を太き葦多く生ひたるより葦島と名づけて、是を八丈島のわき島と定めて、鬼童一人を具して歸る由を記して居る。京師本等は貢物を織のべ絹百疋と記して居るだけで大同小異である。八丈の脇島と定むとあるによりて、八丈島本島の附近の島かとすれば、それで先づ事は濟むが、大島から一日や二日では里程が

近過ぎるし、何様しても此記事は傳聞の傳聞、聞違め、聞落し、合點し損じを、古い鬼ヶ島の傳説等を混淆し、又二ツの談を一ツにして、好い加減に捏ちあげて記したものと見るほかは無いのであるが、扨其の眞實根本は何を語つて居るのであらうか。一には八丈島を從へた時の談のやうにも思へる。又一には八丈島本島から他の小島を發見した時の談のやうにも思へる。又一には琉球へ渡つた時の談のやうにも思へる。

琉球藩史は明治の早い頃の著述であるが、其書では一本箭に此談を以て琉球渡りの事として居り、青鷺白鷺の飛んで居るところを描いてあつたと記憶して居る。今其書を有して居らぬから其説を校勘するに由無いが、それにしては青鷺白鷺を何様解した事で有らう。神話的に眞の青鷺白鷺にしても宜いが、琉球まで飛鷺を追うて行くのは餘り荒唐過ぎる。勿論蝦夷に金色鷲(かニナしいは)を追ふ傳説も有り、我邦の上代に白鳥を追ふのも有り、鳥を追ふ譚は甚だ趣が有るが、たゞ趣が有る、面白い、として置くのは少し惜しい。

こゝに永萬元年三月といふ年月が記してあるのが眼を射る。琉球の向弘才等の撰するところの中山世譜の卷の三、舜天王紀によると、舜天王姓は源、神號は尊敦、童名は傳はらず、宋の乾道二年生る。父は鎭西八郎爲朝公、母は大里按司の妹、名を逸す。王の父爲朝公、身長七尺、眼秋星の如し、武勇衆に出で、最も射を善くす。日本人皇五十六世清和天皇後胤六條判官爲義公第八子也。宋の紹興二十六年丙子、和朝保元元年神武天皇七十七世鳥羽院と崇徳院と各兵を招いて戰ふ。爲朝公父と與に崇徳院を助く。戰敗れて擒へられ、諸將誅を受く。公は伊豆の大島に流さる。宋乾道元年乙酉、和朝永萬元年、公舟に駕して以て遊ぶ。颶風遽に起り、舟人驚き恐る。公天を仰いで曰く、運命天に在り、余何をか憂へんと。數日ならずして一處の海岸に飄至す。因つて其地を名づけて運天と曰ふ。即ち今の山北の運天江是なり。公岸に上り、遍く國中に遊ぶ。國人其武勇を見て之を仰慕す。公大里按司の妹に通じて一男を生む。居ること久

し、思郷の念に堪へず、妻子を携へて還らんとす。乃ち牧港に至り舟を出す。走ること数里、颶風俄に起り、漂ひて牧港に回る。数月を閲し、吉を擇み開洋す。未だ数里ならずして颶の起る前の如し。舟人皆曰く、男女舟を同じうす、龍神の祟る所と為る、請ふ夫人を留んと。公乃ち夫人に謂つて曰く、吾汝等を棄つるに忍びず、たゞ天意相俱にするを許さゞるものあるが如し、汝心を用ゐて吾児を育へ、長成の後、必ず為す有らんと。遂に独り海に浮んで還る。夫人児を携へて浦添に至りて居る。といふことが記してある。して見れば年月の一致から推して、為朝の鬼が島渡りは、鬼が島で無くして琉球である。為朝が歸つて自ら鬼が島へ渡つたと云つたか、大島人が為朝の共して歸つた童の異様なのを見て鬼が島へ渡つたのだと想像したのか、狩野ノ介が為朝征討の師を出すことを請ふに際し、物語の文にある通り、「鬼が島へ渡り、鬼神を奴として召仕ひ、人民を虐ぐる」由を誇張して訟へ申したので、遂に鬼が島へ渡つたといふことになつたか、蓋し後者でゞも有つたらう。

それにしても為朝が往くには漂流したとしても、歸るには能くも歸つたものである。潮流黒潮川の關係等で按外容易に歸つたか知らぬが、往航と同じ船で歸航したのであらうか。水路の知識は往航の經驗だけで得たところに止まつて勇敢に歸航したものであらうか。共して歸つた恐ろしげなる鬼童といふのは水路を知つてゐた琉球の舟乘では無かつたらうか。琉球と吾が海南諸島とは當時航通が稀々には有つたのでは無からうか。伊豆の三島明神は元來海南諸島を開いた神ではないか。都人は海上の智識を甚しく失つて居ても、海南諸島の者共は或は猶自然の境遇上から廣汎な智識を有して居たのではあるまいか。抑々又為朝の身邊に九州の者共が尋ね下つて扈從して居たとすれば、陸路をこそ九州まで為朝が勅勘流人の身で、少くとも三十日は掛つて容貌魁偉、人の眼に立ちやすいのに旅路を敢てすることは叶ふまいが、海路を九州まで人々と共に行かうといふ考へを起さなかつたらうか。平治以來義朝は亡び、源氏に沈淪し、為朝が當の

やうに思つてゐた淸盛は威張り出し、平家は榮えそめて居る。爲朝こそ島の外へ出ることは叶はね、內地より爲朝の方へ內地の事情を知らせる者が全く無かつたとは思へぬ。少し後の談であるが、餘り慕ふに足らぬ俊寬をさへ有王は尋ねて鬼界が島まで下つてゐるやうな主役の情合は存してゐた居た世であるから、さほど渡り難くもない伊豆の大島へ渡つて、保元の勇者として仰慕された爲朝の許を訪ふ者が、無かつたらうとは考へられぬではないか。然無くても無事安閑と午睡ばかり食つて居られるやうな爲朝では無い。八丈島まで從へてしまへばもう海南には仕事はない。無事平穩は精力あるものに取つては無壓迫の壓迫である。こゝまで考へると靑鷺白鷺に魂が入つて爲朝の郞黨が其翼に乘つて居たやうに思へる。靑鷺白鷺筑紫を志して飛んだ。爲朝は其後に踵いた。で無ければ何として普通のたゞの飛鷺の後を追ふといふ馬鹿氣た事が出來よう。ところが風波は暴れて靑鷺も白鷺も翼は折れ影は沒した。爲朝のみは運天の港へ着いたが、たゞ運天を感ずるばかりで有つた。そこで英種を琉球に留めて、復び大島へ取つて返した。九州は舊恩の者も有るが其は皆衰へて離散し、舊怨のもは皆榮えて居るので今の身では案內者を失ふては迂濶に入れぬから、再擧を考へての事であつたらうか。二鷺既に亡し、一雁遠く歸つたが、蓋し風波の穩やかな夏の時を撰んだであらう。出た時も三月とある。南の海は春三番の嵐と云つて、春季三度の暴風雨が濟めば海は和らぐのが常例である。そこで三月に出たのだが、天其志を祐けずして、殘忍な風雨に逢つたのだらう。鬼が島渡りは短い日月ではなかつたのである。歸つたのは少くとも仁安元年か、イヤ二年か三年かの事であつたらう。

歸つて見ると事情は變化してゐた。爲朝が出てから杳として消息がなかつたので、「龍神八部に捕れて失つらん」と島の者は思ふてゐた。爲朝がゐなければ狩野介に從はぬ三郞太夫では無い、茂光の方へ年貢を出して居た。年貢を出したほどであるから、萬年爲朝の掟を覆へして、爲朝來らぬ前の如くに執行つたに違無い。そこで爲朝は勃然と怒つて、「命

を絶つべけれども今度は子供の母に免ず」と云つて左右の手の中指を切つた。そして自分の郞黨のほかの島の者の弓矢を取上げて燒いて仕舞つて、絶對に自分に服從するより外仕方の無いやうにした。古い書には何も無いことで大島の傳說であるが、虎若とかいふ者が爲朝の信任を得たところ、これが勢を恃んで亂暴なことをしたので、島人の心が爲朝を離れたとある。此事は明治の初に海南諸島を遊んだ竹中邦香といふ人の記行にも出てゐる。虎若が共して歸つた鬼童であつたか何樣かは不明であるが、何にせよ三郞太夫の指を切つたのも此嚴し過ぎて、島人には好感情を以て迎へられなかつたらう。死んだらうと思つた者に歸つて來られては、中の好かつた夫婦でも厭な事の出來て居勝のものである。まして怖ろしい異樣な者などを連れて歸つて來て、びし〱と成敗せられては島人は弱つたらう。茂光は之に苦しめられることになつた。そこで茂光は態々都上りをして、散々に訴訟した。朝議は狩野介に伊豆國の兵を催して攻めよと定められた。

茂光は機を伺つた。爲朝は大病した。八十日餘病臥した。其を聞いて茂光は喜んで、伊豆の武士共を催促して發向した。伊藤、北條、宇佐美平太、同平次、加藤太、加藤次、新田四郎、天野藤内いづれも屈強の者共が、嘉應二年四月下旬に急に押寄せた。爲朝は病氣であつたが、舟を射つて之を沈めて、其後内に入り、今は思ふことなしとて家の柱に背を當て、腹を切つて終つたのは人の周知する通りである。腹を切つてゐてさへ人々が其首を擧げ兼ねたのを、後に至つて仁田四郞が切つたほどの勇士の加藤次景廉が辛くも長刀を以て後より狙ひ寄つて切つたといふので、何程世に畏れられて居たかゞ知れる。「爲朝の勇武は死するまで衰へないが、運命は末に至つて振はぬ觀がある。併し天意は何處にあるか分らぬもので、假初の契を籠めた大里按司の妹に生ませた尊敦は、逆臣の利勇といふ者を誅して琉球の王となつた。舜天王は即ち其人で、これは大日本史には載せて居らぬが事實である。足利系圖よれば足利義康の子の義兼は實は爲朝の季子だと云ふことだがして見れば足利氏は爲朝の血の末になる譯だ。然しこれは疑はしいとして史家が取らない。如何に尊氏が將軍になつたからとて、何も尊氏が爲朝の血の末で無くてもよい。

時評

政黨を離合せしめる目下の動因

長谷川如是閑

政治現象を觀察する場合に注意せねばならぬ事は、政治に依る統制、即ち政治組織に伴ふ種々なる機關の成立、並にその作用がどの點迄社會的有機組織の本來の過程に依つてをり、どの點迄その本來の過程に反する事情に基いてゐるかといふ事の見分けをつける事である。政治も社會統制の一つの法式である以上は、有機的な社會關係の上にその生存持續の基礎を求めねばならない。政治そのものがこの有機關係から離れた事情に動機して發生したものであるにしても、それが生存持續を可能ならしめてゐるものは矢張り社會の有機的統制に或る點迄一致することに依るのである。

政治の發生は、武力的統制の組織と必然の關係にあるもので、その點に於て政治的生活は、社會生活の有機關係とは沒交渉なのである。所謂政治階級は支配階級であり、政治的闘爭は古來支配階級の間の權力爭ひであつた。しかし社會生活は漸次にその有機關係を發展させて、支配の武力的性質を次第に壓迫するに伴つて、政治そのものの性質に變化をもち來したと認められてゐる。つまり、特殊の支配階級なるものが、階級的孤立を保つて、國民の上に外國の征服者の如くに嚴存するといふ昔の組織が成り立たなくなつたのである。この事情は見方によつて、二樣に云ひ現はす事が出來る。即ちそれは政治的統制の崩壞であるとも云ひ得るし、また政治學者の唱へるやうに政治の進化であるともいへる。

然し、進化は一つのものが有機的に生育する過程であつて、それが墮落崩壞する場合にはその分解作用を進化といふ事は出來ない。政治が果して進化すべき性質のものであるかどうかは、この點に於て問題であるが、然し、最初の成立から、政治的統制はその組織作用に於て、有機的の社會關係に入り込んでゐた。即ち、之れを云ひかへれば、政治は政治以前の社會統制を利用する事によつて成立したのである。武力による征服に於ては毫もさういふ政治以前の社會的統制に入り込む事はなかつたが、——寧ろそれを破壞するだけであつたが——征服の結果成立した政治的統制に於ては、如何なる征服者の統率も、彼れがその武力的統制を開始する以前の社會的統制によらないわけにゆかなかつた。さうして出來た軍國統制が即ち、國家の政治組織である。即ち政治は、その成立が非有機的であるに拘らず、政治そのものに於ては、政治以前の有機關係を利用した。

この事情が、政治現象の研究者によつて常に混同されてゐる。云ひかへれば、政治に於ける社會的と反社會的との見分けがついてゐなかつた。社會的といふのは政治的統制が、發生した動機ではなく、因つて成立した事情であつて、反社會的といふのは、その反對に政治が因つて發生した事情と關聯する現象である。反社會的といふ意味は社會現象ではないといふ事ではなく、社會生存の有機關係に因つてゐないといふ事である。政治の取り入れた社會的要素は、政治を成立させる上に欠くべからざる條件であつて、それは社會が何等かの組織、何等かの統制をもつ以上は、あらねばならぬ所の生活關係である。人間生活にたとへて云ふなら、肺臟の呼吸作用、心臟の血液循環作用、消化機關榮養の作用のやうに、人體生存の必須の條件である生理作用が、即ち人體の本來の生理作用であるといはねばならぬが、そこに病菌の侵入とか、組織的欠陷とかの爲めに人體生理に於て特殊な外部よりの器械的變化が與へられねばならなくなつた時には、さういふ生理的變化は、やはり生理現象には違ひないが、特に之れを病理現象と叫んで、本來の生理現象になかるべからざるものとは區別される。社會現象のうちに、澤山のさういふ病理現象が含まれる。社會現象の必然の道程として發生したものでも、必ずしもそれを本來の社會關係と見る事の出來ない場合が多い。、社會の發生上さういふ現象が自ら淘汰される事によつて、社會進化が持ち來されるといふ現象のすべてはそれである。政治現象に於ける反社會的といふのはその部分を指すのである。

政治に於ける社會的現象は、政治の進化過程に於てそれが內容的に擴大される作用であつて、政治に於ける反社會的現象

は、政治の進化に伴つて、それが漸次に退縮する性質のものである。而かも、政治に於ける反社會的現象が絶對に消滅すれば、政治はその社會的現象だけを殘す事となるが、さうなれば政治そのものが消滅したと變りがない。從つて「政治の進化」は、「政治の消滅」への過程である。故に、政治には進化がなく、衰退があるのみであるともいへるのである。

然しながら、現在の政治は、政治に於ける反社會的現象の依然として支配してゐるものである。さうして政治に於ける社會的の部分は、常に反政治的現象としてより強く政治社會以外の世界に働いてゐる。古代政治に於ける政治の社會的といふ事は、どういふ事實であつたかと云へば、それは迷信と輿論とであつた。征服者が、軍國政治を開始するに當つて、それが堅固に成立した場合には、必ずその政治を支持する迷信が社會的に支配し、輿論が確實にその特殊の政治的統制に一致した。即ち宗教の統一、學問の統一、社會思想の統一、といふ事が、政治的統制に、欠くべからざるものであつた。之れは政治以前の統制、即ち一定の社會的有機關係が、武力によつて支持されずに、迷信と輿論とで支持されてゐた狀態、即ち原始社會の共產狀態に於ける統制の組織を、後の武力的統制が利用したのである。

武力による支配も、この武力以前の統制方法を、巧みに利用する事が出來なかつた場合には、その政治的統制は成りたたなかつた。それが即ち政治に於ける「社會的」なるものである。

ところが、この政治以前の統制は、常に政治的統制を否定する傾向をもつ。宗教が政治の發達と同時にれと離れたのもその故であり、原始的科學、原始的哲學も總べて政治的統制を否定する地位にあつた。故に政治がこの社會的の否定に遇つて排除される事を免かれるには、政治的權力の根本要素、即ち武力がなければならなかつた。從つて政治的權力者は同時に武力的權力者に限られてゐた。政治以前の統制は、老人か乃至は科學者の統制であつて、武力的背景をもつてゐないものであつた。政治はその原始的統制を利用したが、武力がなければ支持されなかつたのは、その統制が、政治以前の統制に反して、社會的有機關係によらずに、軍國的征服關係に據つたものだからである。從つて政治的頭目は、生活經驗者たる老人、生活複習の天才である原始的科學者のやうなものではなく、武力的機關の創始者あつた。之れが政治に於ける「反社會的」なるものである。

近代政治に於いて、次第に、反社會的の部分が退縮し、社會的の部分が擴大されたといはれるが、政治現象の變化に現はれたいろ／＼の進歩的なるものは、果して政治的統制に本來の性

質をもつものであるや否や問題である。またさうして進歩した政治が、政治に於ける社會的なるものを、どれほど政治的統制の本質に繰り入れたかも問題である。

政治が支配階級の生活態度であり、生活目的であるといふ事情は、今日の政治に於ても依然として本質的に政治的統制の條件をなしてゐる。近代政治は支配階級の內容に變化を與へたが、政治が、支配階級の生活である事には何の變化もない。古代政治に於ける迷信と輿論の利用といふ事も、それが哲學、科學、宗教、その他信仰と理智との生活に於ける特殊の國家的敎化によつて、古代のそれと同じやうに存在してゐる。昔は迷信を政治の目的によつて歪めたが、今は學問を同じ目的で歪めてゐる。政治に於ける社會的現象が、反社會的現象を壓迫して、近代政治を支配してゐるといふ觀念その事が或る點に於て古代政治の宗敎利用と共通の方法で政治統制を支持してゐる迷信であるとも考へられる。

そこで政治に於ける反社會的なるものが、猶ほ政治現象の重大の要素となつてをり、その機構が政治事實を基礎づけてゐるのである。この反社會的現象が武力であつた事は上述の通りであるが、然し武力的强制と政治の關係が依然として支配してゐるに拘らず、社會の進化はその武力統制の古代の組織に含まれてゐた或る事情を特に重大ならしめるやうに進化した。古代の武力統制に含まれた或る事情といふのは、武力を支持する經濟力の獨占であつた。如何なる古代の征服者もこの經濟力の獨占を完成する迄は、彼等の政治的統制も完成しなかつた。政治の進化を特に色づけたものは、時代の進むに從つてこの政治內容の重大な部分が擴大された事である。經濟力が軍事的勢力の根柢であつた事は始めからの事情であるが、後の政治に於ては、經濟力は軍事的統制の補助的性質のものではなく、それ自らが、政治的權力に決定的のものとなつた。軍事は經濟力に對して從たる性質をもつに至つたのが近代政治の特徴である。

それは國家的生存が、軍國的から産業的に變つた事に關聯してゐるのであつて、武力が迷信と輿論とを製造乃至利用し得る時代が經過して、經濟力が迷信を造り、輿論を造り、云ひかへれば統制の心理的基礎を造り得るやうになつたのは、國家的生存が、武力による掠奪に基づく事が出來なくなつて、産業上の取引關係に依らねばならぬ事となつた結果である。云ひかへれば、國家は戰爭によつて生存を持續することが出來なくなり、平和の取引が國家繁榮の基礎となつたのである。近代國家の政治的統制は、武力的征服者の統制ではなく、産業的征服者の統制となつた。それが即ち近代政治である。

この近代政治は、武力の代りに『所有』を絶對とする統制であつて、戰闘的から平和的となつたが、然し政治階級は産業の支配者であつて、生産者でないと云ふことによつて政治の性質が古代政治のそれとちつとも違つてゐない事を知り得る。即ち、政治は産業の支配階級の生活態度であり、生活目的である。

そこで、經濟力が武力に代つて、根本的に政治的統制に作用する力となつた。所有者と無所有者とは、昔の武力者と平民との對立と同じ形ちで對立しつゝある。即ち、政治は所有階級の生活であり、政治的闘爭は所有階級者間の闘爭である。この事情は所謂政黨政治に於ても顯著である。産業の支配階級の樹立が政黨の最も新らしい作用となつた。之れは所謂無産政黨のやうなものでも變りはない。即ち、無産政黨は將來は知らず今日のところでは、やはり他の政黨と同じく、産業の支配的勢力を、別の方面から組み立てて、そこに一定の財力を蓄積し、ブルジヨア政黨と互格の戰ひを試みるのである。それを他の角度から見れば、やはり經濟的勢力の支配する機構に入り込むものと見られる。故に一層社會的の政治以前の統制心理は、たゞ無産政黨を過渡的の權力闘爭と見ねばならぬのである。いづれにしても、武力に代る經濟力の闘爭が、政治的闘爭に決定的のものである事は近代國家が經濟上の立場にその生存を求めねばならぬ結果である。

この世界的進化は、日本の近代歴史にも典型的に現はれてゐる。日本に於ける政黨の發生は、始めには無論舊政治の典型のもとに支配階級間の舊時代の軍閥的勢力を背景とした權力爭ひに基づいたもので、所謂閥族の勢力爭ひであつたが、政黨主唱者の側では、その爭ひに於て、西洋の近代政治の組織を利用してその闘爭手段としたのであつた。日本の立憲政治の建設は、實はこの支配階級間の闘爭に發程したもので、、産業革命の結果ではなかつた。即ち天下りの立憲政治たる所以である。政黨を造るものは、純然たる舊政治の朋黨仲間であつて、政治階級内の闘爭關係に依頼してゐた。而して所謂近代政治の意味に於ける政黨が完成されたのは、財閥即ち産業の支配者の勢力が政治統制を支配するに至つてからである。さうなつて後も、この財閥の政黨に對抗して、官僚政黨として有力であつたものは、軍閥を背景としたものであつた。長州の陸軍閥、薩州の海軍閥等とそれ〳〵結び付かなければ、實際の政黨的勢力を持つ事は出來なかつた。軍人たる桂が政黨を組織したといふことは、可なり一般を驚かしたが、然しその頃は如何なる政黨も、軍閥の背景なしには、政黨的に働く實力を得られなかつた。財閥政黨として初めから色彩の明らかであつた大隈の政黨も、政治的實權

を握るためには、軍閥の命令に從はねばならなかつた。

さういふ事實のある間は、日本の政治は舊時代の武力國家の統制を引き繼いでゐるのであつて、産業國家の政治統制に這入り込んだとはいへないのである。然るに最近に於ては、軍閥の頭目の老衰、死亡と共に軍事的勢力が政治統制を支配する舊時代の組織は崩れて、産業の支配者が政治統制の中心となつた。從つて經濟力が、政治統制の重心を決定するやうになつた。

そこに一つの過渡的過程としては、舊軍閥的勢力は凋落したが、その沒落の間に軍閥的頭目の政治的生命を支へる方法がやはり變化した。軍閥的勢力者側の政治統制に入り込む道が、その軍閥的勢力そのものによつてゐたのは、山縣、桂の時代であつた。この時代には、之等の頭目が、軍閥組織内に於て有する勢力それ自體を以つて政治に入り込んだのであつた。それは政治統制の重心が猶ほ軍閥組織の重心と一致してゐたのであつたが、この一致は總て破られた。即ち軍閥的頭目は今はその軍閥的勢力を以て政治に入り込む事、山縣、桂、山本(伯)等のやうな譯にゆかなくなつた。軍閥勢力の崩壊に當つて、政治に入り込む軍閥的頭目は、やはり一般の形勢に從つて、經濟的勢力に依らねばならなかつた。最近日本の政黨が、軍閥的頭目を排除したのは、政黨が軍閥的勢力を基礎とする時代の過ぎ去つた爲めであるが、その間に、どうして政友會が、新らたに軍閥的頭目を首領に戴いたかといへば、それは田中の軍閥的勢力に依頼したのではなく、經濟的勢力に依頼する爲めであつた。デモクラシーの政治家として、心理的に、また理論的に、寧ろ相當の資格があると認められてゐた高橋を斥けたのは彼れに經濟的背景がない爲めであつた。

目下の日本の政黨の離合集散は、個人的感情に因つてゐると云はれるが、然し今の政治家は、昔の政治家が個人的感情よりも武力の平衡によつて行動したやうに、その個人的感情そのものが經濟上のバランスに左右されてゐるのである。政黨が離合集散する場合には、必ず經濟問題が動機となる。後藤が加藤と別れたのもそれであり、原が永く地位を保つたのもその財政的技倆であり、高橋の引退も經濟事情であり、政友會の分裂もそれであり、田中の出現もそれであり、本黨の分裂も經濟上の頭目を中心として起つた現象に過ぎない。國民黨が政友會に吸收されたのも「金のため」だと犬養が言つてゐた通りである。

之等の事情は通常黨費問題として現はれる。黨費を負擔する能力のない政治家は葬られる。黨費の大部分を負擔させられながら、地位や勢力を與へられない政治家は分裂する。何等傳統的地位のない政治家も、黨費を供給する事によつて、一躍して

首領となり得る。この關係は政治統制そのものの經濟條件とは別な、政黨そのものの財政問題によつて政治的勢力が離合集散するのであつて、恰度昔の武門組織に於て、所謂宗家の勢力が、その支族の各々に於ける武力關係の消長によつて爭奪されたのと同じである。武門家族內の權力は、武力の存在點の移動によつて移動するのであるが、今日の我が政黨の過渡的狀態は、政治階級內の、財力の所在が移動するに伴つて政黨の離合集散が起つてゐるのである。この事情は過渡的の事情には相違ないが、從つて一層發達すれば、さういふ一時的財力關係によらずに、產業的支配階級の經濟的勢力の根底に依つてその分野が決定される事になる筈である。が、最も發達したイギリスの政黨でさへ全然財閥關係が、政黨の分野、または政黨內の勢力を決定するといふ事は今でも確かではない。自由黨の衰頽は、確かに產業支配者の政治的地位が、中間的なデモクラシーの意義を失はしめ、之れを大部分保守黨に一致せしめた爲めであつて、その意味では經濟的勢力の政黨に對する決定力を示したものだが、その保守黨內の內部勢力が、純然たる財閥の手に歸したのは、今の政府が始めてであつて、それ迄はイギリス特有の貴族的家柄、近代の特徵たる市民的尊敬といふやうなものが、內部勢力を決定するに與つて力あつたのである。そしてさういふ事は今後も長くイギリス政黨の內部關係を支配するであらう。日本では貴族的家柄や市民的尊敬の代りに、一時的の黨費供給が、今の過渡的過程を作つてゐるのである。

かういふ無意味の一時的現象は、イギリスのそれのやうに、傳統とか、社會的習慣とかいふものの根據を持たないだけ、一層一時的であるとも考へられるが、然し、政治の機構を支配するイギリス式の心理的事情がない限り、經濟心理の現實的效果は極めて有力であるに違ひない。支那の軍國組織が、最近に至つてやはり日本の政黨と同じく、軍費の供給者に絕對的勢力を賦與する事となつてゐるが、あの軍國組織の機構のもとに於ては、さういふ事情は決して改まらない。日本の政黨に於ける權力中心の消長は、支那の軍國勢力の消長と同じく、當分は一時的財力の問題によつて左右されてゆくであらう。無意味といへばこの位無意味の事はないが、之れ畢竟今の政黨關係が、支配階級內の內部鬪爭に過ぎないからである。政治の鬪爭のうちに、無產大衆の參加を見るに至れば、自づから有產階級の政黨の內部鬪爭にも變化を來すに違ひない。

軍事教育は國家的矛盾

過渡的の時代には、意識と行動の上に於て、一方に所謂過激的の突進があると同時に、他方に於て、舊形態に執着する後ろの方へ過激なそれが澤山ある。過激といふ事は、いつも進歩的のそれにのみ冠らせられる言葉になつてゐるが、實は、退歩的の意識並に行動にも同じ性質をもつて過激と云ものがある。無論、反動的な過激は、進歩的な過激に較べて、如何にも安全地帯を擁護してゐるやうに見へるが、然しその安全らしく見える地帯の崩壊が起りつゝある場合には、それを固執する事は可なり危險なのである。

軍備が今日の國家組織に於て、外部的にも内部的にも役立つてゐるといふ事は確かな事實であるが、國家の進化は前論にも述べた通り、その生存を戰鬪に基けずに、平和に基けるやうに進んでゐる事も亦事實で、近代國家の平和主義は、産業生活の平和主義と關聯してゐるのである。唯、産業生活の競爭が、往々、武力に訴へる迄に立ち到る事は、今日の夜店商人が時々毆り合ひをするのと同じであつて、産業上の繩張り爭ひである。而かも夜店商人が、毆り合ひに依つて生活するものでない事は云ふ迄もない。從つて彼らの生活理想は、腕力にあるとは誰れも思はない。産業國家は、産業上の目的で、戰爭を始めるが、その生存の基礎は、昔の掠奪國家のやうに、武力に依つてゐるものではない。

この事情は世界戰爭に依つて一層强く意識に反映して、平和國家の思想が、國家生活者即ち産業上の支配者を支配するに至り、國際聯盟を生み、國際軍縮の提議を見るに至つたのである。

事實は意識に反映するが、意識は更らに事實を促進させる。右に述べたやうな國家的形勢に對しては、國家者の意識は、實に事實に押されてゐるばかりに滿足せずに、意識を以つて事實を押し進めやうとするのが、人間的意志生活の當然である。武力時代に於ては國家者は、武力の必要に押されて軍事精神を止むを得ず持たしめられたばかりでなく、軍事的精神を守り立て、その意識で武力に貢獻したのである、さうしてそれが、軍國々家の發達に有力に働いたとすれば、今日の平和國家も亦同じ努力をせねばならぬ道理である。即ち、國家事實に押されて

──產業國家の自然の過程によつて──平和に押し進められるのみでなく、平和精神を積極的に守り立てる事によつて、その國家事實を押し進めて行かねばならぬ筈である。

この意味に於て、軍事精神の鼓吹は、近代國家としては全く顚倒的である。さういふ顚倒的行動を執らねばならぬ切迫した國家事實は、何處にも認められない。それは恰度支那の軍閥は常に戰爭してゐるが、あゝいふ戰爭をせねばならぬ國家事實は支那の國家の何處にも存在してはゐないのと異らない。それは單に軍閥階級だけの生存競爭であつて、日本の政黨の爭ひが、國民の生活事實と何の關係もないのと同じである。

日本の國家が、今日軍事精神を鼓吹することが日本人の生活と何の關係もないのは、恰度支那の軍閥の、日本人の軍事教練を受けるのが、支那國民の生活要求でも何んでもないのと同じである。それは唯、今日の政治組織の重心をなす階級の、階級的生活利害と、それが意識に反映して彼等のもつてゐる幻影とに基いてゐるのである。古代の政治階級が、迷信に依存したやうに今日の政治階級は、この幻覺を一般に鼓吹する事に依つて、軍事的精神を國民の間に保存しやうと企てる。然し今日の國民は、與へられた幻影よりは、自分自身の生活の現實に依つて動かうとしてゐる。政府はまたそれを利用する。即ち軍事教育を受ければ在營年限を短縮するといふやうに所謂利をもつて喰はせやうとする。

然し軍事教育の眞の目的は今日の軍國組織を最低度に減縮せしめやうとする現代的國家事實に對し、軍國階級が最後の手段を講じてゐるに過ぎない。それには極めて現實的の問題としては、現役將校の保存が一つであり、また社會的に排斥されやうとする軍國生活の命脈を敎化と訓練とによる軍國化によつて支持しやうとするのである。さういふ直接の彼等の階級の内部の目的は、社會的には殆ど意味をなさない　今日の國家生活に於て軍事的生活が廢止すべからざるものであるといふ事實の上に立つても、今の徵兵制度の如きものを絶對的とする理由はない。徵兵制度の國家が、軍國的に一番强い國家であると云はれたのは、普佛戰爭當時の思想である。國家的接觸の結果互に境を接してゐる敵國間に於ては、明日にも戰爭が始まれば、すぐと大兵を集中し得る組織のものが決定的の勝利を得ると考へられたのは、日本ならば封建國家の時代の思想、ヨーロパならば、世界戰爭以前の思想である、世界戰爭は、國家戰爭に於てさういふ一時的の軍事行動が決定的の力を振ふ事の出來ない事を證明した。戰爭が始つてから二三年もたつて、漸く完全な軍國的編制をもつ事が出來たイギリスやアメリカが、有力な戰爭

國家である事を證明した。つまり徴兵制度といふやうな事が、軍事行動の上に決定的の力をもつ組織であると考へるやうな事は今日では時代錯誤である。

然らば、徴兵制度を撤廢して、アメリカのやうに軍事教育を盛んにするのが現代的であるかと云ふに、それもまた錯誤である。アメリカの軍事教育は、元來徴兵制度のない結果それを補はうしたのではなく、――それならば徴兵を實行すればいゝのである。――全く戰爭の結果アメリカに起つた純粹アメリカ主義の片割れである。純粹アメリカ主義は二つの意味がある。一は外國種のアメリカ人が次第に有力となる事に對する純アメリカ種の恐怖心に基づいたもので、純然たる排外的の民族精神である。が、いま一つの意味は、それを絶對に排斥するといふやうな、原始的民族的精神によらずに、外國種の米人に、アメリカ魂を賦與するといふ事である。各學校に對する軍事教育は、その實用上の目的としては、大戰の經驗に依つて、將校の欠乏に困難した事情を補ふといふやうな事もあらうけれど、その無意識的動機としては、外國種をアメリカ化するといふ、民族的優越感から出たものに外ならない

かやうな特別の事情のあるアメリカの遣り方を日本人の眞似る事は全く意味をなさない。日本には徴兵制度がある。又日本では外國種を日本化する事業は、既に有史以前に於て終了したのであつた。無數の外國種が大和民族に統一されたのは歷史家の說に依ると二千年前の昔である。日本が朝鮮滿州を獨占する事によつて略々ヨーロッパ大陸の國家的接觸狀態に近い形勢を造つたが、然しその隣國に强國があつたのはもはや昔の事でもある。民族的恐怖心が、國民を軍國化しなければならない事情は、日本人全體が震災當時の關東人のやうに、精神病的錯覺をもつた憶病者とならない限り、國家事情の上には存在しない。

靑年一般に軍事教育を施して、その在營年限を短縮せしむるといふやうな交換條件で、日本の靑年を軍國化するといふ事は、彼等軍國階級の立場からいつても、決してその階級的命脈を支持する所以ではない。軍國階級の生命は、產業國家の發達によつて當然沒落すべきであつて、軍人は國家の主人公から、市民の奴僕と落魄れねばならぬのである。この事情は、產業國家が、封建國家に逆轉しない限り、到底防がれない。軍事教育がこの時代に於て軍國階級の命脈を保つたしめるといふ事は不可能である。されば、軍人はその個々が社會人としての生命を新らたに獲得する事によつて人間的に有力となる事を考へねばならぬ。

それは、軍國階級の崩壞と共に、個々の軍人が社會人に生れ變る事である。早い話が、軍縮によつて淘汰された軍人は、社

會人として生れ變る事によつて、明日から生活の途を求めねばならない。軍國階級が、國民を軍國化する事によつて命脈を維持しやうとするのは、近代國家の生存の方法と相反する手段で自分を生かさうとするものであつて、國家の繁榮を害して階級の支持を計るのである。今日の軍國階級は恰度明治初年の封建國家と同じ地位にある。當時の封建大名は、藩地を奉還し、封建的權力を國家に引渡す事によつて、階級的には亡びたが、個々の貴族または市民として生き返る事を得た。各國家に於ける軍國階級の現狀は、その藩地と權力とを市民國家に引渡した昔の建封國家の歷史を繰り返すべき地位にある。最も賢明に、この形勢に順應した軍人は、その社會的生命を蘇らせる事が出來るが、それを爲し得ない軍人は、軍縮と共に途方に暮れる軍人と同じ運命に投せられるものと思はねばならぬ。軍事教育の普及によつて誰れも――軍人でさへも――得るところのない事は、斯くして明らかであるが、萬一軍事教育が、多少の效果を若い日本人の精神に植へつける事を得たとすると、その錯誤狀態は恐らく資本主義國家の障碍にさへなるのであつて、更らにその資本主義國家が、當然の轉機をとる社會進化の道程に向つて妨害を投ずる事となるのは確かである。

社會科學（マーシャル研究）新年號

マルクス全盛の眞唯中にマーシャル研究號をなすに至つたのはよかれ惡しかれ現代の經濟組織を最も明確に體系化しておるからだ。現在の大學、專門學校の殆んど凡ては彼マーシャルに依つて居る位だ。マルクス學徒と雖も此の大潮流は徒らに默過し去るべきではない。況んや此の經濟組織の上に生存して居る者の痛切に必讀の要あるものだ。

里見弴著

縁談窶

（小村雪岱裝幀）

定價貳圓參拾錢

送料廿二錢

全く追隨を許さぬ清麗の筆致、女性心理の胸奥をX光線で透視した如く巧に捕へ、左に搖ぶり右に搖ぶる冴へ方は「縁談窶」を讀むもの丶何人も感ずる所だ。娘心の縁談への惱み、中年者の愛慾への憂悶が鏡にかけて見る如く描かれて戀心、娘心はかうしたものかと誨へられる。眞に本篇は里見氏近來の大名作だ。此篇以外「石門の奥へ」「無言の晩餐」「不貞」「伊豫すだれ」「うで玉子」「仕合せな藤七」「夢みたいな話」「オー・ド・キニン」「大臣の晝飯」「穴」「備忘錄より」の好篇皆情味豐かで一讀をそそらるるもののみだ。

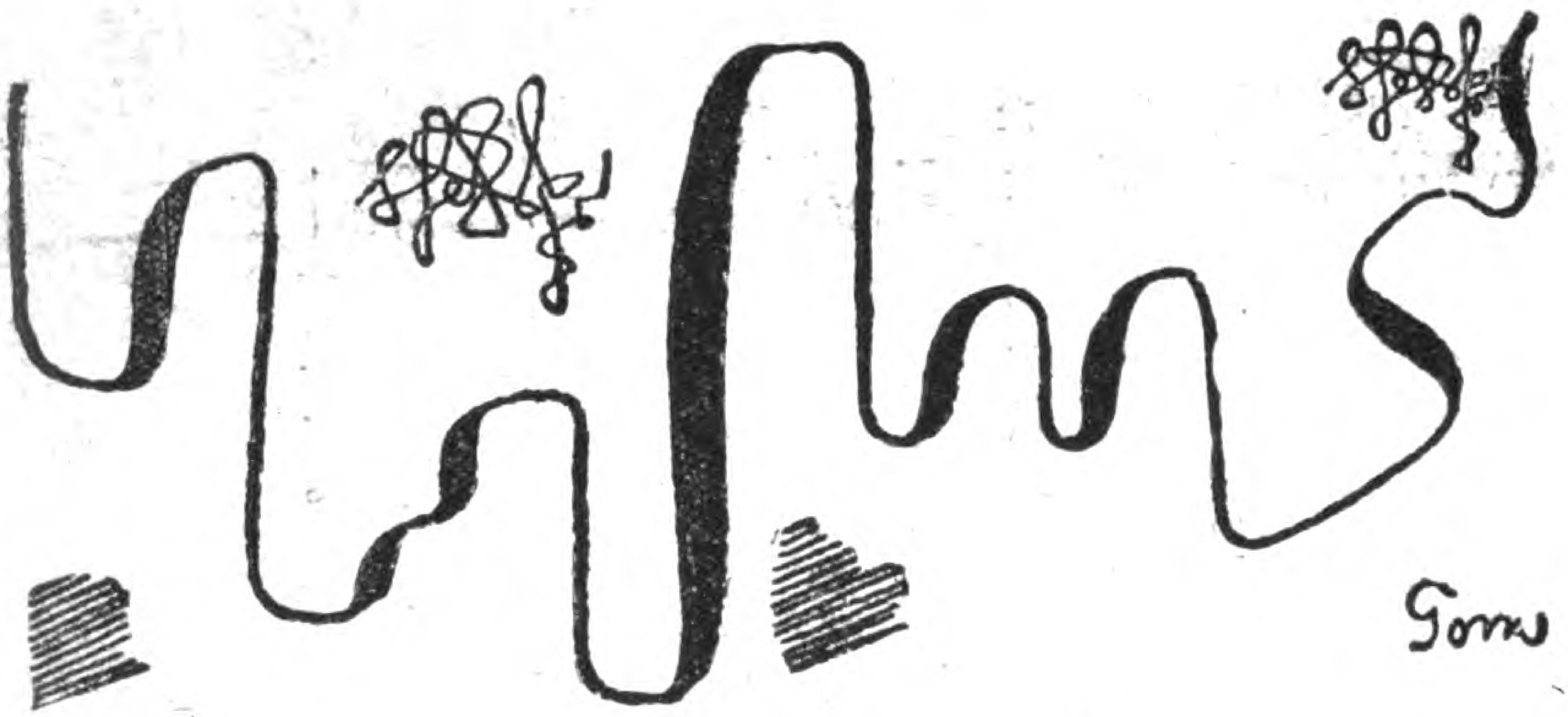
里見弴著 **文藝管見**（五版）

定價壹圓貳拾錢・送料十六錢

里見弴著 **直輔の夢**（十版）

定價壹圓五拾錢・送料貳拾錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



女房に逃げられた男の心理描寫

24 rue Wavioud にて

武林無想庵

―十月十日。

いつのまにか爰へ來た。來てからもう十日になる。この際はすべて妻の命令するまゝだから、無論その仰せに從つて來たわけだ。同時に妻の同棲者はこの家から退出して了つた。妻と同棲者との間には、烈しい感情の行きちがひが十日以上つゞいて、その結果が又生きるの死ぬのといふ痴情の爆發となり、皿小鉢がポン〳〵とんだ。行ちがひの原因は例によつてわたしと子供との事からだ。自然の法則といふものは果してどういふものかわたしにはまだよく分らないけれど、決してお互ひの感情が圓滿に融和してゆく筈のないわたし及び子供と同棲者との間に立つて、妻はさん〴〵苦しんだ揚句、つまりさうした爆發となり、さうした結果をもたらしたわけだ。すべてが成り行きだ。さうしてその成り行きの段どりが所謂自然の法則といふ

ものなのであらう。

——十一月。

爰の家には今月一杯しきやゐられぬのだ。來月一日にはもう次の借り手が入れかはるべく待つてゐる。さうしてわれ〳〵の引越しさきはまだきまらない。

* * *

去年の正月二日マルセイユに着いて以來、われ〳〵の居所は何度かはつたらう。今ばんはそれを一つ考へて見よう。

一千九百二十四年一月二日——マルセイユのホテル・ボオヴオ。その小さなホテルの入口には昔しラマルチンがとまつたことがあるといふ札が出てゐた。船の中で知り合ひになつたフランス夫人に教へられた宿だ。…………（一）

一月三日——ニースのホテル・リユクサンブール。これも香取丸の同船者なる古垣君にきいた宿だ。…………（二）

五日——カンヌのホテル・ロワイヤル。…………（三）

六日——グラツスのグランド・ホテル。爰に二日。…………（四）

八日——ニースのパンション・シヤルドナンス。マルセイユのホテルを教へてくれた佛蘭西婦人の滯在した部屋を借りてこの家に一ケ月ゐた。その佛蘭西婦人は日本で結婚したデンマークの良人と共にこの家に一週間ゐるとその良人の本國へ出發したわけだ。ニースに滯在中妻は早川雪洲夫婦と知り合ひになつた。…………（五）

二月十日――巴里のシャンゼリゼなるロンポアンのベル・ヴューといふホテルへとまる。…………（六）

十一日――リユ・ローリストン九七なるパンション・マルタへ落ちつく。ニースのシャルドナンスから紹介された家だ。爰に三月三十一日までゐた。そこにゐる間わたしはブルヴール・クリシイ十番地の六階をかりて、毎日原稿を書きに行つた。二月の末から三月のはじめへかけて、子供は肺炎になりかゝり、リユー・ラ・フォンテーンのメイゾン・ド・サンテへ入院した。パンション・マルタにゐる間、三井物産の佐野さんの奥さんと知り合ひになる。五年前巴里にゐた時上と下との親類づきあひした前田氏夫婦が歸朝したが、その前田夫人の紹介で知り合ひになつたものだ。……（七）

四月一日――リユ・デユバン二十二の三階へ移る。爰に十月十五日までゐた。妻と二人で約五百枚の原稿を日本へ送つたけれど、金は川田順君から前後に八百圓送つてくれたゞけだ。…………（八）

八月二十九日――妻は子供をつれて、新しい生活の道を求むべく倫敦へ赴いた。

九月十日――妻子は倫敦の日本料理店主人に送られて巴里へかへつた。

十月十五日――日本料理店をリユー・ケプレル八番地ではじめる。爰で二月十二日までくらした。…………（九）

一千九百二十五年二月十四日――妻子は農政學の秀才とリユ・ド・リヴオリなるホテル・ルーヴルへとまつた。

十五日――秀才と妻子とはニースへ向けて出發した。わたしはスカール・バチニヨルの秀才の宿へ移つた。そこに五日ゐた。…………（十）

二十日――サン・ジヤン・キヤツプ・フエラのグランド・ホテルへ赴いた。秀才と妻子との同棲してゐた家だ。そこへ一晩とまる。…………（十一）

二十一日――サン・ジヤン・オー・ボールのパンション・マスコットへ移る。爰で「コキユーのなげき」を書きはじめた。

四月九日まで爰へとゞまる。その間に秀才と妻子とはグランド・ホテルに一週間ゐて、ニースのホテルウインゾルへ移り、そこに一週間、停車場前のホテル・テルミニユースへ一夜、エドワード七世へ一夜、それからわたしのパンション・マスコットへ來て、秀才と妻子とわたしと四人が一緒にくらした。…………(十二)

四月十日――イタリアのゼノワなるホテルエデンへ一泊。…………(十三)

十一日――ミラノ停車場前の安宿ロカルノへ一泊。…………

十二日――湖水を見をろすコモの山上へ一泊。…………(十四)

十三日――瑞西ルツアンのシユワイツアホーフへ一泊。…………(十五)

十四日――ベルンなるシユワイツアホーフへ五日間とゞまる。…………(十六)

十九日――わたし一人でベルンの夜汽車にのつて巴里へかへる。秀才と妻子とはベルンなるパンション・レギナへ殘る。…………

二十日――プラース・アルマン・カレルのホテル・パルクへ落ちつく。…………(十七)

五月一日――農政學の秀才たゞ一人巴里へかへる。

十日――アヴニユ・ド・トルヴイルなる小さなホテルから妻子が巴里へかへつた由を通知してよこす。倫敦の日本料理店主人が妻子をベルンまで出かけて迎へて來たのだといふ。

十一日――妻子はホテル・フリエドランへ移る。

二十一日――妻は倫敦の料理店を閉店しに行くそこの主人と倫敦へ赴く。

二十二日――わたしはアルマン・カレルのホテル・パルクを引きあげて、前日に借りたこのリユ・ダヴイウーなるアパ

ルトマンへ、子供と二人のころ。……………………………………………………（十八）

二十七日――妻とその同所者とが倫敦からかへる。

二十九日――妻に命令されて自分の原稿書くところをさがしにゆく。アルマン・カレルへわたしをつれてつた高松氏の話をきゝかちつて、ロバンソンを志して行つて見る。ギード・ブルーを見ると、ロバンソンよりその近所のオルネー谷といふところが靜かだと書いてあつたので、そこへ行くとたつた一軒ホテルがあつた。五月二日からなら來てもいゝといふ。併しその晩はとめなかつたので、ソオまでゆき、小さなホテルレストランへとまる。…………（十九）

三十一日――メダンのセーヌ河畔へ一泊。ゾラの三十年ゐたところなので、よつぽどそこにきめようかと思つたが、兩方を比較すると、靜かなことはオルネーの方が優つてゐるやうに思はれたので、結局そこにきめる。…（二十）

五月二日――又六年前の鞄一つになつて、八月三十一日までオルネー谷即ちシャトネエ・リユー・シャトオブリアン百〇四メーゾンコアツフアール方へとゞまる。…………………………（二十一）

九日一日――わたしのうるさく巴里へ來てとまることが同棲者の反感を増すとかいふ理由で、夜とまらなくてもいゝやうに巴里へ出ろといふ妻の命令だ。そこで舟橋さんの近所なるリユ・ド・リイル二十八メーゾン・ムーブレへ移る。そこに九月二十九日までゐた。さうして十月二日そこを引き拂つて爰へもどる事になつた。…………………（二十二）

* * *

一年と九ケ月、即ち二十一ケ月間に二十二回かはつてゐる。さうして二十三回目がもうあと二十日きりで、未知の二十四回目へ移らうとしつゝあるところだ。

わたしは何のためにかうして動きまはつてゐるのだ？　無論生活のためだ。食慾のためだ。性慾のためだ。妻子と同棲したいためだ。わたしに對してよりもより多く牽きつけられてゐる何物かの幻影に向つて突進しつゝある妻のあとを追つて、わたしはかうした落ちつかぬその日〳〵をあとづけて行きつゝあるのだ。すべてが言語道斷だ。すでてが心行處滅だ。さうして無二亦無三に道を求めつゝあるのだ。われ〳〵の前途には人のつくつた道がないのだ。人跡たえた深山幽谷をばその日〳〵にかきわけて辿りつゝあるのだ。

＊
＊　＊

――十月十二日。

――十月十三日。

子供にマーテルリンクの「青い鳥」を毎ばんすこしづゝ話してきかす。さうして彼女のねむりついた後でないと、わたし自身の生活がはじまらぬ。リユ・ド・リイル以來、夜起きて讀書したり物を書いたりする習慣がついたので、こんな生活をしてゐても、それでもすこしづゝ、四周からせめたてられる人生の組織から、わづかに自分自身といふものを見出すことのできる時間がつかまへられることを喜び得るやうになつた。わたしは死ぬまでどうかしてさうした時間を愛護したいさうした時間がわたしには一番尊いのだ。さうした時間だけがわたしに本當に生を意識させてくれるのだ。さうして「本當に生が意識される」といふ事のみがわたしには一番人間にとつては尊いもの〻やうに信ぜられるからだ。

＊ ＊ ＊

——十月十四日。」

朝子供に起されて珈琲を入れる。妻はひるめしにラ・レエがたべたいといふので、プラース・パッスイのマルシエまでゆく。子供も一緒について來る。ラ・レエとは日本でアカエ又は北海道などでカスベといふ魚のことだ。いゝ天氣だつたが、日蔭はもうそゞろさむい。みんな暖かさうな冬外套にくるまつて道を歩いてゐる。わたしはまだこの四月ミラノで買つた、いや農政學の學生の金で、妻に買つてもらつた、カーキー色のレーン・コートだ。さうしてこの冬はどうでもこれで過ごさなくてはならないのだ。このマルシエは去年リユ・デユバンにゐた時すぐそのアパルトの脚下にあつたので、中の商人はみなわたしの子供をおぼえてゐる。子供の方でも覺えてゐて自分から握手を求めに行つたりする午後は家さがしにアジヤンスをまはつて見る。アントランジジヤンのプチツト・アノンスから拾ひ出して歩く。オペラのそばのロイドといふのへゆく。あんまりお粗末が多いので、待つのがばかばかしくつて、次のパレエ・ロアイヤルのそばのへゆく。プラース・ヴアロア五の恐ろしくきたない建物の四階にある。ベルを押すとたつた一人マドモアゼルがビユーローに控へてゐた。さがし賃二十フランとられる。二十九日にはきつと手紙で通知すると云つてゐた。リオリの通りからＡＩへのつてサン・ラザールへゆく。そのリユ・サン・ラザール九十五にもアジヤンスがあるのだ。一つ二つ貸家があつた。併しみんな思はしくない。前のオペラのそばのへ引きかへしてきいて見る。思はしいのがない。あつても高すぎる。金さへ出したら、どんなのでもすぐ得られるのだが、出來るだけ安くて出來るだけ都合のいゝといふのが滅多にないといふわけだ。そこらにあかりがつきはじめたのでかへる。妻は夕めしを例によつて博覧會へたべにゆく。わたしは子供と二人ソー

シスやソーシツソンをかつて來て、日本の米をたいてたべる。一トしきりおとぎ話の本をよんできかせろと子供がねる。何か書かうと思つてカナベの上へ横になつて考へる。眠りが足りないのでトロ〳〵とする。目がさめると水演がしきりに出る。二十フラン拂つたアジャンスへ風呂の事を云はなかつたので、是非風呂のある家をさがしてくれと賴みの手紙を書く。十一時すぎても妻がかへらぬので、またつまらなくなる。佐野さんの奥さんへでも愚痴を書いてやらうかと思つて一枚ばかり書きはじめると、妻がかへつて來た。コーカジアンからも返事が來て、おどりに來てもいゝといふから、來週から行つて見ようかなどゝはなしてゐた。アントランジイジャンの女記者チタイナ氏と約束して文章を一つ書くことになつてゐるので、とにかくそれを書きあげてから、おどり場へ出たり花を賣つたりして、どうにか斯うにか向ふ一年位は三人ほそぼそとたべてゆかれさうに思ふ、などゝも云つてゐた。この三月サンジャン・キャップ・フエラのグランド・ホテルで、わたしは農政學の學生に北海道のわたしの地面の處分方を依賴したが、五月二十六日にわたしの地面はもうその學生の所有に歸し、金を一萬五千圓拓殖銀行から八月二十二日に借りたのださうな。わたしはその學生の力を信賴して、賣却と讓與との二通の證書を書いてわたしたが、日高のアイヌ村々長なるその學生の叔父がわたしの實父と相談の上讓與の形式にしたものなのであらう。併しそれはわれ〳〵夫婦が巴里で生活するそれを基礎にするといふ話し合ひからであつたが、わたしから地面を取りッぱなしにして、それを抵當に銀行から金を借り、それをわたし達夫婦のためには一文もつかはないとなると、どういふ結果になるわけであらうか？、妻の愛人はその地面をあてにして、それから博覧會がすんだあとでモンマルトルへ出さうと企てゝゐるレストランの資金の一部にしようと考へてゐるのだ。妻はけふ銀行からの手紙をその愛人に見せに行つた。愛人は學生へ電報をうつと云つてたといふ。どうにでもいゝやうにしてもらひたい、さうしてわれ〳〵夫婦子供が巴里で生活のできる事だつたらわたしはいかなる事でも承認する。

＊　＊　＊

十月十五日。

けふも貸家さがしだ。妻は子供をつれて博覧會へ午めしたべにゆく。この一二ケ月來子供はそこのディレクターと喧嘩したとかで、妻がどうすかしても子供はゆきたがらなかつたのだが、けさはどうした拍子か急に行くと云ひ出した。妻は大喜びで一緒にでかけたものだ。子供がどうしても妻の愛人になつかず、わたしばかり大騒ぎするのが妻には面白くないのだ。子供が妻とまつたく異體同心でありさへしたら、子供はわたしをきらつて妻の愛人の方を大騒ぎする筈だが、自然は中々わたしの妻一人の都合がいゝやうには境遇をつくつてくれない。併しけさはどうやら又子供がその點について妻の意向に從つたやうなので、妻はやゝ愁眉を開いたわけなのであらう。わたしは女中のこしらへてくれたムートンをたべて出かける。ゆうべアントランジイジヤンで見て置いたモンマルトルのアジヤンスへゆく。恐ろしくきたないうちだつたが、そこにゐたマドモアゼールに貸家のことを云ふと、すぐ近所に二間で風呂つき年に二千フランといふのがあるといふ。たゞし貸家のさがし賃として百フラン、いよ〱話がきまつたら四百フラン、都合五百フランのコンミツシヨンを申しうけるといふ條件だ。さつそく妻に話さうと思つて、博覧會のパヴイシヨン・ジヤポネーへ行つて見たが、もうそこにはゐなかつたので、ひよつとしたらルーヴルへ風船をもらひがてら、例のきれ地の買ひ込みに行つたかしらんと、マガザン・ルーヴルの人波をわけに行つて見る。そこにもゐないので、けふは駄目と斷念して、リヴオリの通りをセバストへ折れてブラ〱あるく。セバストにも一軒、又その先のシヤトオドオにも一軒、アジヤンスがあるので、そこを歴訪して見ようかと思つたのだが、歩いてゐるうちに、行けばそりやきつと貸家はあるだらうが、さがし

賃を出さなければオイソレと貸家へ紹介してはくれない事を思ふと、とにかくさつき聞いたモンマルトンのリュ・ダムレモンといふところはどんなところか一應見て置きたくなつた。そこでサン・ドニからメトロにのる。が、思ひちがひして、ギャール・ド・レストでヴィレットへのりかへてしまふ。中で氣がついて、途中で降りる。又別なメトロへのつて、ピギャルでノール・シュードへのりかへ、ラマルクで降りる。ダムレモンといふ町はすぐわかつたが、電車もブスも通る恐しくにぎやかなところだつた。丁度モンマルトンの墓地をぬけたところからはじまつてる町だつた。プラース・クリシイへ出ると、もうあたりはくらくなつて、そこらのキャフエやレストランの店あかりが花やかにかゞやきはじめてゐた。五番の電車でトロカデロまでかへる。さうしてそれから歩いて、又アントランジイジャンを思つたりして歸宅する。妻子はまだかへらない。どうせ今夜は又かへるまいと思つて、めしをたいてたべようとするところへ、鷄を一羽もつて、とりのすきやきをするのだと云つて、妻子は愛人とつれだつてかへつて來た。子供をつれてマドレーン・シネの活動を見て來たのだといふ。わたしはこの一年間一度も妻と一緒に外へ出たことがない。妻は親子三人で道を歩く事を避けてゐる。さうして愛人とばかり肩をならべて歩いてゐるのだ。わたしは別に妻と一緒に外へ出たくはないけれど、殊更にわたしを避けてゐる妻の心持を不便にも思つたり腹立たしくも感じてゐるのだ。さうしてそれほどまでにしてわたしから離れたいのかと思ふと、わたしは子供さへなければ、といつも考へる。恐らくわたしのやうなきたないきものを着てゐる人間を自分の亭主だと道ゆく人々に思はれるのがいやだからであらう。實際妻にはあんまり人をばかにしすぎてゐるところがある。併しどうせいかなる人間でもかまはないつもりで一緒になつたのだから、ばかにするだけするがいゝと思つて、行くところまで行く氣でゐるのだから、そんな事はもう大して氣にならない。要するに、すぐ目の前で一文でも自分のために金をつかつてくれる人が妻のやうな女には一番話しの合ふ人なのだらうから、そんな風になる

のが、妻にとつては一番自然なわけだ。夕めしをたべると、妻の愛人は布ざらしのきれを朝鮮うちはにぬいつけて、とまる。わたしはそれからこの日記をつけはじめたわけだ。かうしてわたしは人間同志の間をくゞりぬけつゝあるのだ。

* * *

——十月十八日。

——十月十九日。

十六日は舟橋さんが佛國領事の例の男爵をつれて來て、小森さんと西班牙人のピヤニストと六人で夕飯をたべ、食後妻が、衣裳をつけて小森さんにならつた。さうしてもうぢきモンマルトルへ出てやることになつてゐる踊りをやると、あとで西班牙のピヤニストがさかんにカスタネットをならしてダンス・エスパニヨールを踊つて見せた。このピヤニストは十合の息子さんと戀仲ださうで、そんな浮いた話がさかんに出たりして、一トばん大陽氣にすごしたが、みんなが歸つて、あとでシンとすると、妻が急に死にさうだから醫者をよんでくれと云ひ出す。例の神經衰弱だ。しかたなし下へ降りて行つてコンシエルジにたのむ。醫者の來たのは十二時すぎだつたが、醫者の顏を見ると、きまつてケロリとなほる。併し妻も昨今はよほど頭が疲れてゐるらしい。

十七日は妻の愛人が金をもつて來てくれたので、モンマルトルのアジヤンスへ家をたのみに行つたり、併しダムレモンの家は家賃こそ年二千フランだが、道具を買はされるのは四萬フランも出さなければならぬときいて、それをやめにしたり、農政學の學生へ一萬圓送れといふ電報を出したり、又それから舟橋さんの誕生日祝に出席したりして、十二時

きのふは妻がコンシエルジに約束した用を、材椰會館へとりに行き、愛人をつれてもどつたが、ばかにいゝ天氣だつたので、みんなでサンクルーへ行かうと云ひ出した。メトルへのつたり、タクシへのつたりして、サンクルーの森までゆき、すこしばかり落葉の中を散歩して、かへると、妻は愛人と出て行つたきりゆふべは歸宅しなかつた。

けふは午頃妻が歸つて來たが、ゆふべは愛人が病氣になつて一ばん中ねなかつたなどゝ云つてゐた。そのくせ一向ねむさうな樣子はないのだ。今夜愛人が來て、神經衰弱になり、醫者に見てもらつて來た由をはなす。さうしてとまつて行く事になる。

こんな日記はいくらつけて見たつて下らない。

* * *

* * *

——十月二十日。

子供はこゝのところすこぶる健康だ。日にまし頭がだん〳〵はたらいてゆくやうに思はれる。彼女はもう自由にフランス人と話ができるやうになつた。併し事物に對する説明は一々わたしに質問して日本語で答へさせる。もつともそのうち學校へでもゆくやうになつたら、彼女には日本語といふものが、必要ではなくなつて了ふかも知れない。さうは思ふものゝ、又私達夫婦が一生日本語といふものから離れきれぬであらうかぎり、彼女がわれ〳〵夫婦の子供として本能的の交渉をもつ間は、やはり彼女には日本語の必要を感じつゞけるであらうとも考へる。さうしてその問題がいかに彼女

によつて體驗されてゆくか、それがわたしには一方ならぬ興味を惹起すことゝなる。特殊の文明をもつ一民族中のあるものが、他の特殊の文明をもつ他の一民族中に、出來得るかぎり深い交渉をもつ人生を經過する場合に、前者の文藝が果してどういふ形式となつて表現されてゆくものか、わたしはさういふ點について殊更に注意してゆきたいと思つてゐる。

* * *

「青い鳥」の中に出て來る猫や犬やパンや砂糖や水や火が人間と同じやうにものをいふので、子供はまづそれを不思議がる。

——お犬は立つてるの？

——この犬も猫もその中のチルチルさんとミチルさんにお供してるものたちはみんな人間のやうに立つてるものサ。

——なぜさうなの？

——これはチルチルさんとミチルさんのお夢なの。さうしてお犬もお猫もみんな魂なの。夢の中のいろ〳〵なものゝ魂はみんな人間のやうに立つてゐるのサ。

——だれがそんな夢をこしらへたの？

——メーテルリンクといふベルジツクのおぢさんがこしらへたのサ

——そのおぢさんがこしらへた夢なの？でもね、夢は見えないぢやないの？夢はすぐなくなつて了ふぢやないの？と

――だから、夢はすぐなくなるものだから、かうしてメーテルリンクのおぢさんが自分の夢を御本に書いてのこして置いたのサ。

こんな問答をばわたしと子供とは毎晩のやうに交換する。わたしの子供は、ともすると、すぐ「なぜ？」「どうして？」ときく。結局なぜだかわからない事が一番彼女の興味をひき起すのだ。さうしてその「なぜ？」が「どうして？」存在してゐるのだか、それか知りたくてたまらなくなるのだ。わたしも彼女やうに、さういふ本能に驅られて、四十何年生きて來た。さうして彼女の質問にはいつも決して滿足な答ができかねてゐるのだ。

――なぜ人生と宇宙とがかうなのだ？

――かういふ疑問の起る人生や宇宙とは果して何物なのだ？

ねむくなる。ねる。起きる、たべる。排泄する。寒暑に對して衣服をかへる。そしてそれだけの事を用意すべく「明日」の心配で一日をくらす。彼女には併しまだ「明日」がないのだ。さうしてたゞそれだけの事がわれ〳〵夫婦と彼女との根本的の相違だ。いかに年よりはませてゐても彼女はまだ絶對に無邪氣だ。いかに年よりは愚かであつても、それ〳〵夫婦は絶對にもう無邪氣ではない。

* * *

人生は夢のやうなものだ。併し人生は夢ではないと人生の姿は藝術のやうなものだ。併し人生は藝術ではない。然らば人生は何物なのだ？永遠に不可言不可説だ。さうして冷暖自知によつてのみ捕捉することができ得るものだ。さうして人生は五感ではない。同時に五感を離れたものではない。五感は存在しない。云ひかへれば忽生忽滅だ。倘ほ云ひかへ

れば生滅そのものが存在してゐるわけのものではないのだ。即ち無生だ。さうして無生であるところの生が、つまりかうしてゐるところのわれ〳〵の人生なのだ。言語道斷だ。考へれば考へるほど心行處滅の境地より外にも考へ得られるところがなくなる。何遍考へても同じことだ。考へなくても同じことだ。さうしてその同じ事をばあきもせずに死ぬまで考へつづけて行くのだ。それがわたしの人生なのだ。さうしてほかにわたしの人生といふものはない。

* * *

——十月二十二日。

——十月二十四日。

——十月二十五日。——

このごろは朝起きて珈琲をのむと、パッスイのアフイシユを見にゆき、貸家があると、それをうつし、又POPのアジアヤンスヘアボンヌして、そこへ出て來る貸家をしらべ、それをもうつしとり、それから午飯の材料を買ひとゝのへ、さうして家へかへると晝飯の用意をし、たべて了ふと、カルネを見ながらパリ中をうろついて、一軒々々貸家をきいて歩くのだ。大抵はけさふさがつたとかゆふべ貸して了つたとか云つて斷られる。たま〳〵あると、妻の氣に入らなかつたりする。ガツカリしてかへると、今度は夕飯の用意だ。さうしてそれがすむと、子供が話をしろとせがむ、そこで妻の寢床へ子供と二人はいり、いろんな話をしてゐるうちに子供がねる。十時すぎる、時には十一時すぎる。妻が外出して歸宅しない事もあるが、さうしてそれが三日に一度位あるが、さういふ時は、この日記をつけようとして机へ向ふ、併し終日からだを動かしてばかりゐるので、どうもねむくなつて、ゴロリと横になると、そのまゝつひねて了ふ日

が多い。新聞もオチ〱よめぬ。まして讀書もできぬ。深く物など考へる事が不可能になる。

* * *

わたしの毎日はすべて徒勞だ。さうして自分の食ふものを買ふ金も、自分の住む家の家賃も、メトロ代もたばこ代も、一切すべて他人の金なのだ。それが去年の十月以來だ。この一年間にわたし自身の金として、わたしの手元へ屆いた金は、昨年の正月「改造」へ出たとか云ふ隨筆の稿料百五十圓きりなのだ。さうしてわれ〱の生活費として親子三人のつかつた金は約一萬圓にものぼつてゐるであらう。すべて妻が他人と×××てゐるために、その他人が妻に對してつかつてくれる金で衣食したことになる。もつともわたしには親讓りの地所が北海道に殘つてゐたわけだが、それを賣却すると云ふ言葉に多少の希望を抱いて、金を出す人は出してくれてゐたのだ。併しその地所にもうこの五月二十八日にわたしの所有から農政學の學生の所有に代つて了つた。そのことは前に書いたが、その學生からは何の通知もない。又銀行へ問ひあはせたことも書いたが、銀行の返事に、その事に關しては、實父から手紙があるだらうとあつたが、その手紙も一向に來ない。よし來たところで、一文も金など送つてくれさうな希望も持てぬ。要するに、すべてが徒勞なのだ。一文も金を拂はなければ、パン一片でも食ふ事の許されぬ世の中に住んで、われ〱親子三人は、一文なしでとにかく一年くらして了つたわけだ。

──十月二十六日。

* * *

雨の中をセーヌのふちを沿うて、並木の落葉をガサ〳〵踏みながら、アニエールからベーコン・レ・ブリユイエルへかけて、リユ・サン・ギョーム十五番地はと、一時間もきゝたゞしながらさまよつて、やつとの事さがしあてると、そこのアパルトのコンシエールジは、

――C'etait Love, il ya Longteiups. C.a oryéá s'ert fait. とケンもホロロに答へた。

――フン、また徒勞だ。と思つてかへると、妻が桃われのカツラをかぶつて、十七八の舞妓に扮裝し、これからモンマルトルへ踊りの試演に出かけやうとしてるところだつた。

そこへ札幌の實父から手紙が屆く。

「八月一日付信書本月七日に入手。直に一讀候處、第一意外とせるは宅地賣却之依賴の件に有之候。即此土地は本年春頃其地に於て池本喜三夫氏に所有權を斷與せられたる事に五月二十七日池本氏に權利移轉登記相成候趣札幌登記所より通知有之初めて之を知り、實に寢耳に水の感に有之、同二十九日拓銀に行相話候處銀行にても同感に有之、早速取調具候由、三十日銀行に參問合候處、右は池本代人辯護士關谷氏の武林の白紙委任狀によりて登記手續致候事、依て予は早速關谷を訪問相尋候に池本氏の伯父武田氏の依賴により取扱たる由、尤武林氏より委任狀の外武田氏に對し依賴書及池本氏宛斷與の書面も有之證據充分に候へば今更如何共致兼候。依て其顛末の報知と併て茲に至りたる事情問合の爲六月中旬書信發したるも未だ何等の返信無之甚だ不安に過し候。八月二日予は沙流平取村に參り武田氏に面會し武林は自分の實子に有之候へば右土地賣戻呉るゝ事出來るや否と申出候處同氏は私に同情し相談せり。當時池本氏より拓銀に追借申込居候由何れ之が出來候上取計との事已に池本氏も歸朝し居との事、然るに八月十五日拓銀より更に一萬五千圓借受られ候然るに私の賴は確答不致して、池本氏は恩師岩見澤農學校長蠣崎氏に謀り跡始末を同氏に賴候由。依て私は岩見澤蠣崎

氏に相賴候處諒解を得て三日目に同氏より書信ありて曰く池本氏は巴里に於て武林夫妻の爲に非常の苦しみを被られ候に付、今度又同地に參り候はゞ又々苦痛を被負候哉も難計を恐る故武林氏之此事承認せる書面を見て賣戻可致との事にて、今に解決不致候。池本氏は蜻崎氏の御配慮にて本月四日函館の資産家若山家長女と結婚被致候而て本月末に夫婦にて渡佛せらるゝ事ゝ聞くに此土地全部四千五百圓の方に宛贈與せるとの事、就て何等か條件もなきか、余りに馬鹿らしき事に候。少なくとも二萬五千圓の價ある土地を負債は合せて一萬圓以内にて他人に贈與するは殆ど諒解に苦み候。斯る事に至る前に父に豫め一言通知しても宜しかりし實に遺憾千萬なり。然るに今日の書信は矛盾極まる事にあらずや。若池本に對し無條件にて贈與しながら今日に至り土地を賣却して吳れとは非常識も甚だし。今は成行に任する外なし、賣戻吳れたら精々盡力し買人を求め整理し幸に何程か賣上金有之候はゞ仕合と申すべし。然し今日は財界甚行詰り不景氣極候へば好買人あるや否や當にならず。斯く相成候は誰の罪か。要するに文子は武林家にたゝり居れり。彼女はお前を愛せず。其持物を愛したるべし。お前が無一物となれば最早用はなかるべし。今に至り氣付たると信ず。窮すれば通ずとの如く此際根本的改心し新生命を求められたし。お前の爲に切に祈る。お前は子の愛を實驗したる由、之れが神の愛なり。今が復生の時なり。五百子を愛する同時に光章をも愛して吳れ。彼は今六才今年四月より幼稚園に通居れり。來年三月學齡になれり。兩親を知らぬ日陰者なり。子供に罪はなきものなり。

○池本氏に聞く文子は夫婦中に子の出來る事を嫌ひ幾度も×××しも遂に今の子が出來たとの事何れ子供を役者に吳れて武林と別れると申居れり。實にあきれたる女なり。然るに此頃廣告に改造にお前の文相見え候に付講讀せし處お前と文子との關係別居し居事文子と池本らしき人と同棲し居りお前に對して甚しく冷遇し居る事之を忍居様子男子として余りに不甲斐なきにあらずや。又一面より見れば夫婦慣合にて池本氏を誘惑せん計略とも思はれざるを得ず。兎も角あき

れ果たる狀態と云ふべし。又書中自身の不倫なる行爲に就て毫も恥る處なく表白し親兄弟に汚名を被らす所爲は不孝不義言語に絶へたり。自己の不行狀を無遠慮に書立、其事が他人の迷惑となるや否顧みざる如何之利益ある哉。斯る不倫なる行爲を露骨に書かなければ文が書けぬ程頭腦が貧弱に候哉。我等一族は社會に對し面目なく世間に肩身狹く感ぜられ候。今回の書信の中にもあり。實に困つた文士なりと云ふべし。少々自戒して爾後は我等に恥をかけざる樣にせよ。斯る不眞面目なる精神にて將來に遺すべき大作などの出來べき筈なかるべく思はれ候。其源泉淸からずば淸淨なる水は湧出せず。不健全なる思想、下劣なる品性にて社會人心を益すべき大作などの出來得べき道理なき故に、此際一大革正の必要あるべし此度の書信中大部悔悟せる處あり。所謂窮して通ずと云ふべし。文子の料理やに資金を出せし川村泉と云ふ人はロンドンの料理やとの事、文子は此男の妾となりて、資金を出させたりと聞けり。お前は此事を知れりや否や、聞くも耳の汚れなり。望む、此際斷然文と縁を絶ち一本立になり復活すべし。最早年貢の納め時なるべく、中心熟慮し自ら謙り、速に自決せよ。敢て警告する處なり。

大正十四年九月十二日。　父

次に當分は德死去後店は靑木直司に貸渡春子と六人の子供は別居爲致一ケ月九十圓づゝ生活費を給し、支店と本店より貳百五十圓毎月收入し其中より寛の學費を送り辛ふじて生計致居候寛も漸く卒業致し今は病院にて研究中來春頃には何れへか就職すべく候翠事昨年八月末より肺尖加多留を煩ひ中學四年にて休學最早一ケ年臥床前途生死難斗心配致候然し何事も神意に任せヨブの信仰を學び安慰を得候。在米光子去月廿日神戸上陸目下東京に滯在近日に札幌へも來るとの事七年振にて逢ふ事に候長壽も人に據り幸福なりや否や不相知候先は以上まで早々

盛一殿」

父は本年たしかに七十三だ。さうして所謂日陰者であるところの、わたしが×××に生ました子の寫眞が封入してあつた。わたしはこの手紙をくりかへし〱讀んだ。さうして父が氣の毒になつた。同時に一方ならずなつかしい心持もした。殊に寫眞の子供が可愛くてたまらなくなつた。さうして子供といふものは何人あつてもいゝものだと思つた。どうかして松方さんのやうに金持になつたら、澤山〱孫子を並べて、福々として長生きがしたいとも思つた。そんな事を思ひながらこつちの子供にお伽話してねかしつけ、父の所謂不孝不義の自分の一生をばそれからそれと考へて見た。遺憾ながらわたしには復活すべき新生がない。わたしのした事はした事だ。たとへキリスト教の神といふものが存在してゐても、わたしはジャン・ジャク・ルッソオと同じく、かうした貧弱なる頭腦を披瀝した日記をひろげて、恐るゝところなくこれがわたしの一生だと云つて、平氣でその神樣に示すことが出來る。神が若し怒つて地獄に墜落しても、わたしは如何なる責苦にも耐へて、ヴチカノのシスチナ寺の壁畫に喜び勇んで飾られるであらう。わたしは決して五千人の地上饅ではない。未得謂得とも未證謂證ともわたしは未だ生まれてから一度も思つた事のない人間なのだ。わたしはたゞ人世の眞實が知りたいのだ。さうしてそれを人間に知らしたいのだ。それだけだ。さうしてそれだけのためにこの世に生きながらへてゐるのだ。わたしは父の云ふことをすべて承認する。一言も反對はしない。又反對は出來ない。妻に反對しないと同じ樣に反對しないのだ。わたしは不眞面目に相違ない。妻もさう云ふ。妻の愛人もさう云ふ。わたしの文章を讀む讀者はみんなさう云ふ。わたし以外の人間はみんなわたしを不眞面目だといふ。わたしには恐らく不眞面目より外には眞面目といふものをば全くもちあはさずにこの世に生まれ出て來た人間なのであらう。わたしの思想の不健全であることも十年以來きゝあきるほど友人からきいてゐる。さうしてその不健全がどうしても健全にならぬのだ。わたしは恐らく不健全なる思想を抱いたまゝ一生を終ることであらう。そんな事を考へてゐるところへ、妻が愛人と一緒にモンマ

ルトルからもどつて來た。

——おやぢさん池本氏となれあひかも知れないから、ウッカリ返事などやりなさんなよ。と妻が云つた。

——池本氏はあなたから二萬五千圓まきあげ、若山家の五百萬圓を手に入れたところを見ると、すばらしい腕ですナ。と、妻の愛人が云つた。

——池本氏は文子さんにはわるい感じをもつてゐない樣ですよ。たゞあなたを非常に憎んでゐたから、その犬の螢の仇をうつツモリで、あなたの財産をおさへてしまつたものですよ。とにかくチョコ才ですナ。今度巴里へ出て來たら、わたしがウント仕返しをしてやりますよ。と、妻の愛人は尚つゞけて云つた。

人生とはをかしなものだ。男性が女性と交叉する時、そこに云ふに云はれぬ參得底の不可思議世界が出現する。佛教では畜生道と云ふ。科學ではビオロジイといふ。さうして畜生道であり、ビオロジカルであるものが、ブルジョアジイの世界では私有權設置の法律によつて、人間全部を裁斷する。利口なものはさうした法律によつて、さうした法律を利用して、さうした法律の保護の下に、どんな金持にでもなり得る。

*
*　*

——十月二十九日。

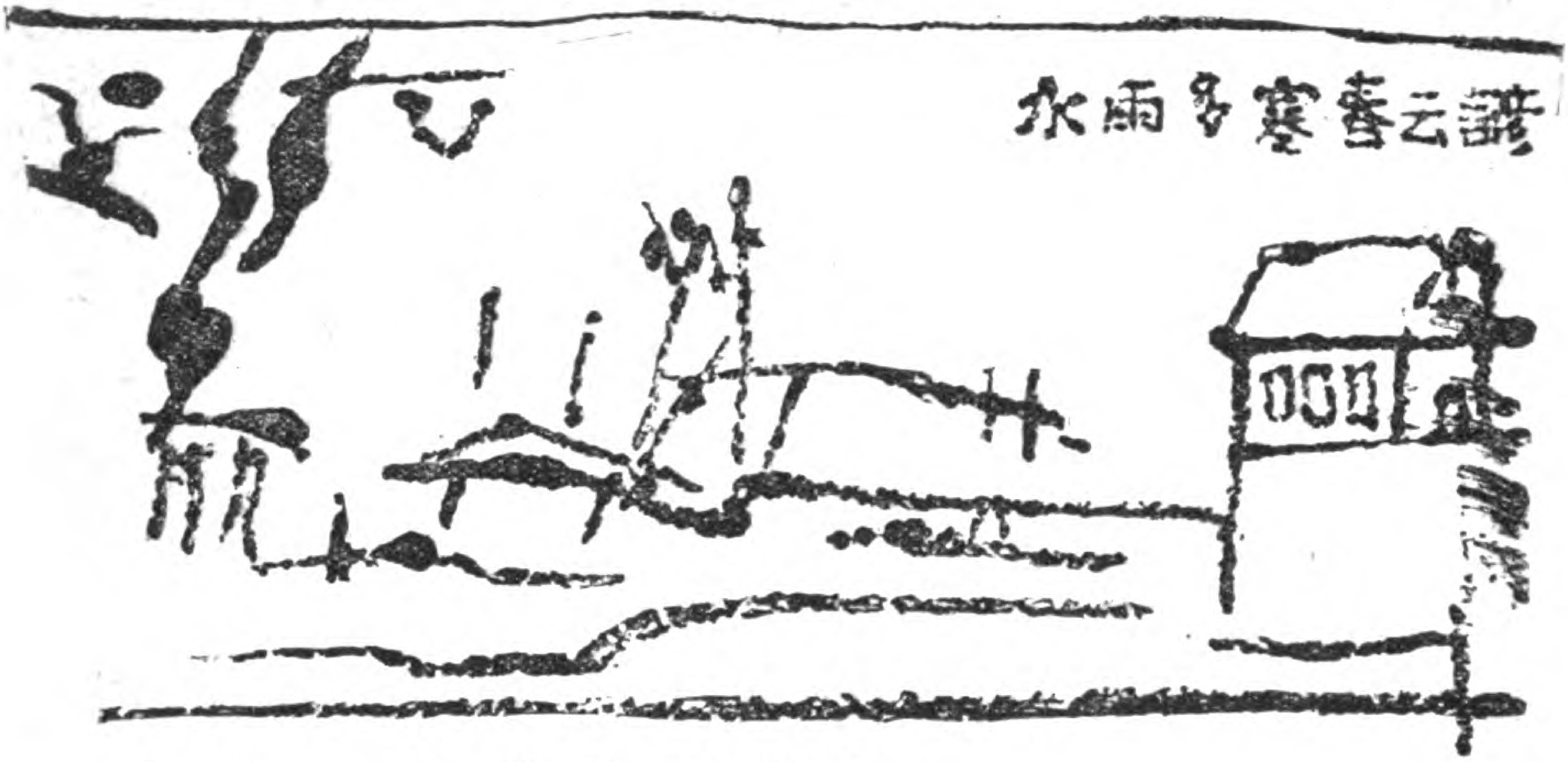
やうやくのことで、來月から引越すべき家をさがしあてた。サロン、サラマンジエ、シヤンブル、サルドバン、クイジン、それにショッフアージ・サントラールがあつて、ピヤノまでそなはつて、二ケ月先拂月に千百フラン、形式だけは妻の希望どほりだ。さうしてねだんもかり安だ。金を出してくれる妻の愛人は、レストランを出す金が足りないから、

なるべく八百フラン位のところで辛抱してくれと云つてゐたが、サルドバンのなる家で、二間以上あつて、千フラン以下でさがすことは全く不可能だ。一寸した氣のきいたところは、どうしても千五六百フラン出さなければない。とにかくそこに二ヶ月すんで、その間に永久に住める家具なしの家をさがさうといふ事にきまつた。農政學の學生が最初約束したとほり、北海道の地面を處分した金を送つてくれさへすれば、レストランもすぐ出せるし、もつといゝ家へすめるのに、と妻の愛人が云つてゐたが、農政學の學生はわたしから四千五百圓のカタに二三萬圓もするものを、マンマとまきあげて了つたものであらうか？

——十月三十日。

* * *

(コキユのなげきの四)



白霧（續）

中條百合子

（一）

正面には、新鮮な朝日に照らし出された、噴火山が小豆色に聳えて見えた。一本の煙が、揺がず空に立ち昇つて居る。左右は、見渡す限り、强さうな原始の矮樹林が連つて居た。かなりな勾配の路を、自働車は、平らな底力の籠つた爆音を立てゝひた押しに登つて行く。道が高まるにつれ、青木ばかり繁茂した爽快な地平線の眺めは擴がつた。彼方まで何十里あるかと思はれる、そこが一面綠の波だ。朝五時の、露つぽい空氣を快速力で劈いて走るので、太陽は上つて居るが、伸子は風にさらされる頬や唇が凍えて、强ばるやうに感じた。

登りは益々急に成つた。橋を一つ渡つて、崖に挾まれ、曠野の雄大な展望が利かなくなると、運轉手はもう一遍ぐいと、ギアを換へた。座席の上でずりこけ乍ら、荒つぽくくの字形の急坂を踰すと、彼等の前に古風な温泉町が現れた。坂に沿ふて兩側に宿屋や土産物を賣る店がぎつしり軒を並べて居た。道の眞中に

湯氣の立つ溝があり、高く湯の香がした。早朝に、自働車がその軒下をすれ〳〵に通るどの宿屋でも、まだ寢て居る人など一人もなささうに活氣づいて居た。からりと障子を明け放した手すりに浴衣を干して部屋には人影もないところ。着いたばかりの客が、洋傘を突いたまゝ彼等の自働車を見物するところ。一體に百姓風な陽氣さが漲つて居る。伸子はわるい心持がしなかつた。吉田屋と云ふ宿屋も、やつぱり此那氣取らない家だらうか。

「お待ち遠さま。――こゝが吉田屋です」

直ぐ、屋號を染め拔いた印半纏の若い男が迎に出た。

「お早いお着き樣でございます」

荷物を運ぶ間に店先に降りた。が、其場の雜沓に、伸子は不安な眼付をして佃を振返つた。土間からいきなり高くなつたかなりの廣さの店先には、先着の浴客が廿人近くごた〳〵群がつて居た。充分朝日のさし込んで來ないところに、荷物がちり〳〵に積まれたり、人々がざはめき動いたりして居る光景が、ちつとものんきでなく、燒け出されの集りのやうに感じられた。こみ合ふので部屋のない連中なのだ。

佃は、荷物と伸子とを遺して奧の帳場に行つた。彼は、手間をとつて戾つて來た。

「どうだつて？　電報は着いて居たの？」

佃は、頭を橫にふつた。

「部屋はないさうだ。滿員で……」

「――」

近くの數人が、彼等の問答に注意を集めた。

「電報は?」
「電報は受取つたんださうです。斷はらうと思つたのださうだが返信がついて居なかつたので番地も分らないしつて云ふんだが」
仲子はスウツケイスに手をかけ乍ら苦笑した。彼女は、夫が勿論返信つきで問ひ合はせて置いたのだとばかり思つて居た。夏休み中は浴客が殺到することは兼々きいて知つて居た。こゝばかりでなく、先刻、驛前の茶屋で自働車に乘る時も、不意では割こみの部屋も取られなからうと云ふ番頭の話を彼等は聞いた。其時二人は
「大丈夫? 我々は……」
「さあ、どうにかなるでせう。電報を斷つて返來してないんだから」
といふ會話をして來たのであつた。
仲子は、當惑して、店先を見廻した。一向どしどし客のはける氣勢も見えなかつた。始めと同じ人數が、不平さうに、ぶすりとして居る。
「でも、こうやつて立つたきりでも居られないわね、何とかしなければ」
「うむ。順に何とか都合して見てと云ふんだけれど……」
自分と同じに夫も無力なのを見ると、仲子は出來るだけの氣輕さで
「まあいゝわ」
と云つた。
「まさか夜まで斯うしても置かないだらうから悠くり待つことに仕ようぢやあないの」

彼女は、帳場の前の椽側があいて居るのを見た。

「彼處に居ませう」

間拔けな旅といへば、彼等は始つから大間拔けであつた。佃は、馴れない土地だから、夕方や夜着くより朝早い方がよいと主張し、上野を青森行の終列車で出た。ところが、急ぎすぎて、黒磯に下車したのは午前四時、眞夏でも四邊は未だ眞暗であつた。足許のわるい砂利路や、架橋工事で徒歩聯絡の嶮しい峽谷道をおぼつかない提灯を頼りに歩く滑稽を演じた。けれども、伸子は、今度の旅行では決して其位の障害で癇癪を起さない決心をして居た。外見は何でもない、野暮な小旅行だが、彼女はそれに、夫婦間の氣分を轉換させる種々な望をかけて來たのであつた。彼女は、一切をまかせにする氣であつた。子供のやうになつて彼に未知の土地へ連れて來て貰はふ。そして、頭を空つぽにして、永年來たいと思つて居た那須野ケ原の自然に包まれよう。自分が新しくなるまいものでもない。彼が新しくなるまいものでもない、自分達二人の總ての關係が一新しないものではない。考へると、心がよろこびでその緣を溢れこぼれるやうな夢想であつた。自働車が、露で光る朝の道を走つて、烟草畑を拔け、厩の横を過ぎ、刻々素朴な火山麓の矮樹林にさしかゝると、伸子は、實際自分の空想の實現を、何處かで約束されて居るやうな頼もしい健康な氣持になつた。自分も、あの青々繁つた根強い斜面の樹の一本になつた積りで、伸子は、樂天的に腰かけて居る足を振つた。

佃は、鹿爪らしい顏で兩手に荷物を下げて來、伸子の傍に腰を下した。斯ういふ待遇に私は不滿だ、と、體ぢゆうで云はせて居るやうな佃の强直した擧止が、却つて伸子にユーモラスにさへ感じられた。

「いゝのよ、本當に。私なら平氣よ、本當に大丈夫!」

伸子の前には、十坪餘の田舍らしい中庭があつた。彼等のかけて居る椽側は、その中庭三方から圍んで建つて居る總

二階の下に當つた。椽側の一隅に、南瓜を荒繩で括つたのが轉がしてあつた。階子口のところに、東京の者らしい若い女が蹲んで、四つばかりの男の子を遊ばせて居た。中庭に、鷄が三羽居た。若い女は小さい男の子に何か持たせ、その手を自分が持ち添へ

「トトトトト」

と鷄を呼んだ。蘂しべを啄んで居た鷄共は、一散に椽下にかけよつてコ、コ、云ふが、好きなものでないのだらう。つまらながつて、遠ざかる。

「あら、ケツコツコは嫌ひなんですつてさこれが。困つたわね」

男の子は、眞赤な肉冠を震はし乍ら地面を突つき廻る雞を一心に見とれて、返事しなかつた。どの部屋も誇張なく一杯なのが、手拭や上草履の様子で知れた。

伸子は、時計を出して見た。二時間たつぷり待つた。昨夜は十二時に上野を立つたから伸子は一睡もして居なかつた。日光が強くなるにつれ、彼女は疲勞を感じて來た。

「すまないけれど一寸又様子を見ていらして頂戴な」

なか／＼佃が戻らないので、伸子は店先へ廻つた。大分人が減つた。僅かの者が暇の浮いて見える煤におかのごろ寝をして居た。佃と番頭が、向ひ合つて突立つて居た。兩方とも氣のない表情だ、佃は近づいて來る伸子を見ると、力のこもつて居ない聲で

「どうにもならないかね」

と、義務的に反覆した。番頭も同じ暗誦の調子で

「何にしろどうもこゝんところ十日ばかりは混み合ひます一方でして——どうもまことに…………へえ」

仲子は、變に二人ながら誠意を缺いた應答を平氣で取り交して居るのを感じた。何まで、番頭と同列に賴りにならない者といふ心持がして仲子は厭であつた。彼女は、自分で番頭に云つた。

「私共は決して無理をして貰はふと云ふんぢやないんですよ。たゞ、待つて居ても當てがあるのか無いのか分らないぢやあ困るでせう？どうしても都合がつかなければ、このまゝ郡山まで行つてもいゝと思ふから、はつきりした返事が欲しいのです」

「——では——一寸お待ち下さい」

郡山から一里ばかり離れた處に、夏の初めから、仲子の母や弟妹たちが避暑して居た。其處へ行くか行かないか、兎に角仲子は直ぐ東京へ引返すことだけはしたくなかつた。番頭は、もう一人、縞の着流しの帳場をつれて來た。明日あたり離れて居るが一つ部屋が空く豫定であること、それ迄、自分の家の部屋で待つて呉れるなら必ず都合つけるといふ事になつた。

「どうなさる？」

「——さあ……君さへそれでいゝんなら、僕はかまひませんよ」

「一ツその部屋を外からでも見せて貰ひませうぢやあないの」

「へえどうぞ御覽下さい。尤もそこは、小林區の役宅の一棟を借りて居りますので、設備は不充分でございますが、その代りお客樣は二組きりで、專用の風呂もございますから、閑靜をお好みの方にはもつてこいでございます」

彼等は、溫泉町から二町餘山よりに入つたところにあるその部屋を見た。小瀧の湯といふのゝすぐ上手であつた。成

程靜からしい。小さい風呂がついて居るといふ點が、何より仲子を惹きつけた。それに定めて、番頭の家といふのに案內された。山田屋の筋向ひにある、土產物屋であつた。繪ハガキや、角細工、埋木擬ひの茄子の形恰をした茶入れ等、一杯擴げた店先から、すぐその裏の部屋に入れられた。障子に、擬ひ埋木の茄子の影が映つて居た。隣の部屋の薄暗いところに、衣桁があり、家の娘のメリンスの兵兒帶がかけてあるのが見えた。

（二）

八疊と六疊とある。八疊の方が仲子等の部屋になつた。六疊は見晴しがある代り、直ぐ前の四五尺の崖下が道路で、絕えずぶら〳〵通ふ浴客からまる見えであつた。八疊は、細長い空地越しに役宅と向ひ合ひ、左手は熊笹の茂つた斷崖であつた。そこに、如何にも田舍の溫泉らしい筧が通つて居た。硫黃の香のする溫泉が山からぢかにその筧を流れて、役宅附屬の小ぢんまりした浴槽に淙々と溢れてゐるのだ。たゞさへ都會ばなれのした場所が、こゝではまるで、湯だけ違ふ田舍屋同然であつた。仲子は

「さあこれから山家住居よ」

とよろこんだ。

「外から見たよりずつと落付くわね、どた〳〵人の通る母屋の部屋よりずつといゝわ」

佃は、粗末な白木の机に書簡箋や本を出しかけた。

「ふむ」

「何だか氣がないのね、不便でおいや？」

「結構ですよ」

仲子は、崖を見上げて居るうちに、可愛い龍膽を一輪見つけた。

「あら！一寸來て御覽なさらない、奇麗な花があつてよ」

「何です？」

「ものぐささん！立つていらつしやい」

椽側に並んで、何とかいふ神社の在る道路越の高台の方を眺めて居るところへ、太い縞の浴衣で濡手拭を下げた二人連の男が、喋り乍ら悠くり石段を登つて來た。仲子等を認めると、彼等は警戒するやうに互に顔を見合はせるとぶつりと話をやめて仕舞つた。六疊の方に居る客であることは一目で分つた。彼等は、のろ〳〵歩いて、仲子等の立つて居る直ぐ横の沓脱石から上つた。一間と距らないところで、激しく手拭をバタ〳〵やつて水を切る。――どうも、妙な工合なのを仲子は感じた。これから當分でも隣り合はせに暮すのだから、互に挨拶し合ふのが最も自然な成行きである筈だつた。先客といふわけで、二人の男連は、仲子等からまづ頭を下げろ、と思つて居るのだらうか。明かなぎごちなさを感じ、彼女は夫を見た。佃は佃で、彼等が石段を登つて來てから、椽側に上り切る迄、攻撃的な視線を向けたぎり、今は知らない振で正面を切つて居る。双方から射出す得體の知れない感情の挾打ちに合つて、仲子はさりげなく部屋に引とつた。

夜、小林區の役人が隣に話しに來た。餘程馴染になつて居ると見え、

「やあ」

「どうですね、そろ〳〵効驗が現れましたかね」

といつた風であつた。活潑に礦林事業について話す聲が、筧を走る湯の音ばかり冴える仲子等の部屋へ手にとるやうに聽えた。佃は、ノオトを擴げて居る。仲子は、兩親に繪ハガキを書いて居た。部屋が豫定通り一晩であかなかつたので、彼等はまる二日、部屋とも云へない店裏で辛棒したのだ。隣では斯那聲がする。

「杉苗なんぞ買ふとなりや千本だつて廉いもんですよ。それが僕の年月で、資本の幾層倍つて金高になるんだからな――莫迦に出來ないもんですよ。――何しろ天然力を利用してやるこつたから大きいやハヽヽ」

「さうきくと、どうもお互に何だな、餘りぞつともしない店にかぢりついて、あくせくして居るのがいやに成つちやうね」

「せい〳〵體を丈夫にしてから、澤村さんに喰ついて、どつかに禿山でも落ちて居ないか探しに歩くこつたね」

仲子は、不圖、鐵瓶がから〳〵なのに心づいた。困つたことに、部屋の近所に、飲料水らしいもの丶冊るところがなかつた。

「どうしませう、番頭さんにきいて置けばよかつたわね」

「向ふの家にきつと井戸があるから貰つて來たらいゝでせう」

仲子は、鐵瓶を下げて、緣側に出た。役宅の雨戸は皆閉つて居た。一枚、浴室や廁に通ふ渡廊下のところがすかしてあるだけであつた。乳飲兒のある細君はもう寢たらしい。いきなり、家に入つて行つて起すのは無禮と思はれたので、仲子は躊躇しないではなかつたが隣室の障子の外から聲をかけた。

「一寸――御免下さい」

森となつた。然し障子も明かなければ、返事をする者もない。仲子は續けた。

「あの――水が欲しいんでございますが、お宅のをいたゞいてよろしうございませうか」

中では頑固に默つて居る。大の男が三人、氣をつめて鎭りかへつて居る樣子を想像すると、仲子は少し滑稽になつた。彼女が、眼の中には微笑さへちらつかせ、井戸の在處を尋かうとした時であつた。いきなり仲子がぎよつとした程慳貪な聲が來た。

「――自分で汲んで來たらいゝでせう」

仲子は、間を置いて穩やかに訊きなほした。

「井戸はどちらでせう」

「井戸なんかありやしませんよ。出て見りやわかるんだ」

終りを惡體のやうに呟くと、後は勝手にしろと放り出して、低い聞き分けられないひそ〱話を仲間内で始めた。

仲子は首をまげ、暫く其處に佇んだ。此那意地わるを他人からされたのは、彼女にとつて初めての經驗であつた。仲子はくるりと廻れ右をした。そして、すた〱來、自分達の部屋の障子をあけると、其拍子に、佃がいかにも周章てゝ机にかゞみかゝるのを見た。彼女が無駄に鐵瓶を下すのが分つても、さもさつきから書きものに心をとられ、何があつたか知らない風に裝つて居る。情けなさが一どきにこみ上げ、仲子は涙をこぼした。馬鹿な人！何故、惡戲つ子らしく舌でも出してはくれないのだらう。

(三)

風呂から出て來ると、椽側で、佃と女中とが話してゐた。

「ぢやあ日歸り出來るね」

「えゝ悠くりでございますよ、少し早めにお出かけんなれば」

「――どう云ふ風に行くのかね、此處からだと――殺生石の横の方からかい？」

「左樣です。あすこから一寸急なところをお登りんなると本道に出ます――大勢さんお出でゞすから、そこまでいらつしやれば一人でに頂上までお登れなさいますですよ」

「どこのこと？」

佃が答へた。

「折角來たんだから那須へ登りたいと思つてね」

伸子が髮を結ひ終るのを待ちかねて、彼は朝食を始めた。

「君はどうせ駄目でせう――待つて居て呉れる？」

伸子には、何だか相談もされず唐突に思へた。

「それや待つて居たつていゝけれど……」

一日、話相手もなく、ぼつねんと仕て居なければならない事を考へると、一間にとぢこもつて留守番は厭であつた。

「何里あるの一體――行けるなら行きたいわ私も」

「上下で三里ばかりださうだ。けれども、ずつと登りつゞけだから――どうかな――家に居た方がよくないかな」

成たけ置いて行きたさうな口振が、伸子を淋しくした。折角來て、といふ心持は違つた意味で彼女にとつても同じであつた。――山が、其那に大事なのだらうか――。伸子は、

「私も行くわ、其ちやあ」

と云つた。

「しよぼくない思をするより、辛くても一緒に行つた方がましだから。——大丈夫よ」

佃は、迷惑さうであつた。仲子は、膳を下げに來た女中に、草履と、結ひつけの紐とを頼んだ。

起きた時分霧があつたが、其が霽れると素晴らしい快晴になつた。輝く小石を踏んで、樹間の山道から、本道に出た。成程、登山路はすつかり世俗的になつて居た。彼等と前後して、女連れや子供づれの湯治客が、暢氣に喋ぎ乍ら旅笹の間の径を縫つて行くばかりではない。一間半程の道の一方に、狭いトロツコの軌道が麓まで敷けて居た。

「まあ、ずつとなのね、何が通るんでせう」十五ばかりの少年をつれ中歯を穿いた男が、仲子等の横を歩き乍ら教へてくれた。

「よく開けたもんですなあ、こりやトロツコで硫黄を麓の工場迄降すんです——餘程の産額になるらしいですよ」

話し好きと見え、暫く佃と硫黄採取のことを喋り乍ら歩いた。登るにつれて、高い樹木が減り、背後からさす日光が暑くなつた。仲子は下げて居た洋傘をさした。遠くから見たら、笹の繁つた山の中腹、キラ〳〵碧い夏空の下で、たつた一點赤い洋傘の色は、どんなに活々美しく見えるだらう。仲子は子供らしい嬉しさで亢奮した。風景も、湯本までの自働車から眺めたのとは比較にならず雄大であつた。紆曲の悠々とした笹山が、互に目路を遮る何ものもなく波うち、つゞく。遙か遙かの下界に、太陽の熱氣でぼーツと、水色つぽい眞珠色に霞んだ地平が廣く見晴せた。

道の工合で前に行く人の姿は見えず、時々話し聲だけ聞える。その人聲が却つて山路の明るい靜寂の深さを感じさせた。

彼等は、大丸といふ那須山麓の溫泉で晝飯を食べた。川になつてどん〳〵流れて居る野天の巖間の溫泉に、大勢男女が裸で入つて居た。原始的な、一種綺のやうな光景であつた。

大丸からは、四邊の景色が一變した。本當の火山道になつた。笹はまだ生えて居るが、處々に、眞白くさらされた枯木のしんが無殘に中折れして、ぎざ〳〵立つて居る。氣味惡い見ものであつた。路端の僅かな平地に、堀立小舍があり、硫黃採取人夫の法被が羽目に吊つてあつたりする。全體工業山の雰圍氣であつた。仲子は、大丸を出る時、子供づれの親切な紳士に貰つた杖を突いて、手間どつて登つた。やつと頂上が見えた。その前にもう一つ、急な攀りがある。

仲子は、汗だくになつて、立ち止つた。

「一寸休ませて」

佃も、大丸に着く前から上着を脫いでしまつて居た。それでも、襯衣をびつしよりにして汗が滲んだ。

「日かげがないからひどいのよ、あ、涼しい風！涼しい風！」

谷を隔てゝ目前に、火照つて仕方のない額を突込んで見たい程こんもり杉の生えた山があつた。右手の上の方では、噴火の地鳴りが響いて居る。その山合ひの開いたところから、涼しい風が通すのであつた。いゝ心持に風に當つて居るうちに、仲子は段々噴火の音が氣になり出した。硫黃運びのトロッコも、頂上近くでは別な側を下ると見え、登山道の上にも下にも、人間の姿は佃と彼女ぎりであつた。目の下の山々、赭ちやけた燒土ばかりのところに、點々唯一本の細道が三斗小舍の方に消えて居る淋しい行手。それ等が凝つと午後二時の太陽に照りつけられて居る。石ころの轉る音もしない裡に、巨大な鞴を吹くやうな噴火口の唸りだけが、怒つたやうに息ついて聽える。仲子は、のそ〳〵して居ると、山ぢゆうが爆發でもしさうな恐怖を覺えた。

「行きませうちやあないの」

「うむ」

道の險しさと、自然から受ける威壓とで、二人は默つて一氣に坂を踰えた。

「やつと來た！でも、よく我慢したな、僕はきつと中途で引かへすことに成るんだらうと覺悟して居た、」

「登りかけりやどうにかして登るわ」

帽子を脫いだ額を手巾で拭いて居た佃が

「おや」

と、驚いたやうに元來た道の方を眺めた。

「――天氣が變つたな」

「どうしたの？」

悠くり振返つて、伸子は思はず體を堅くした。五分前まで、彼那に燦き展開して居た下界がいつの間にかすつかり濃霧に包まれて仕舞つて居た。見境ひもつかず眞白けな海だ。霧は、更に冷たい風に追ひ立てられ、前後左右に擴がり乍ら、形體のきまらない、眞白な重い生きものゝやうに、彼等の立つて居る那須山目がけて進行して來る。ところであつた。見るく杉山の端が隱れた。谷間が見渡しのきかない白霧で一杯になつた。まるで音がしない。其濃霧の運動は迅速でどんな隅々迄も包み込まずに置かない貪慾を示して居る。――伸子は、ひどく進退谷まつた心持がした。それに、たゞの霧ではないやうに可怖かつた。滅びた地球にたつた二人だけ取遺された人類が、愈々死ぬ前は斯うだらうと云ふ氣がはつきりした。彼女は、佃に確り捉つた。

霧は、食ふ後から消化するやうに、彼等の目前の杉山を三分の二眞白にした。ぴたりと其儘動かなくなつた。右手の下界は、一層澱んだ白さが濃くなつた。左手、嶺に細道の見える焼山、噴火口の眞上の碧空は、平然と限ない日光に輝いて居る。稀有な光景であつた。やがて、微に、微に左手から風が吹き出した。霧は止つたところから一歩も進まない。………

「あゝ」

仲子は、夫に捉つて居た手をやつと解いた。

「早く頂上まで行つて下りませうよ、私、かういふ山は氣味が悪い」

「さうしよう」

噴火口は、山の眞上にあるのかと思つたら、横穴のやうな處であつた。灼熱した硫黄が燃え立つラバになつて流れ出して居る。冷却した部分が、世にも鮮やかな黄色で鍾乳石のやうに凝固して居る。碧い空、白い厚い霧の波。風景全體强烈な色調であつた。硫黄採の男が數十人、或不安に默り込ませられたやうに眞面目に働いて居るのが、荒涼とした山の斜面に見えた。

往きの半分の時間もかゝらず、彼等は峠の小休茶屋まで還つた。

「あら、店をしまつたのね、休みたかつたのに」

「天氣がわるくなつたからでせう、まあ、ずつと歸らう」

自分達が霧に入つたので、今度は山巓がまろきり見えなくなつた。

「下は雨でせうか」

「さあ……風があるから大丈夫だと思ふが」

下りの勢で、歩調を揃へ、とん〳〵下りて來るうちに、ポツリと額に當るものがあつた。

「さあ、降り出してよ」

「夕立でせう」

ポツリ、ポツリ、段々雨粒が繁くなつて來た。伸子は、傘を擴げた。彼女は笑ひ乍ら云つた。

「これでも有るから有難いわね、頭さへ濡れなければいゝわ」

雨は、霧が迫つて來たと同じ價で、一町位でも雨量がまるで違つた。半分ばかり下ると、もう其邊は大雨であつた。稀土道が泥濘になつてゐなかつた。雷が鳴り出した。笹の中に亡靈的に突立つて居る白い死木に電光が閃く毎に伸子はぞつとした。

「さあ、腕を組まう、その方が早く歩けていゝ」

「もう直きだから大丸で雨やどりして行きませうね」

日傘など何の役にも立たなかつた。髮がぢかに雨ざらしにされないといふだけで、透綾の着物が肌まで眞黑に濡れ徹つた。水を吸ひ込んだ草履が重くふやけ、ビシャツ、ビシャツと泥を跳ね上げる。

「なか〳〵やまなくてよこれは。——雲がどこも切れて居ないんですもの——本當に一寸大丸によつて行きませう」

「…………」

佃は歩調を速めた。伸子は小走りで調子を合はせた。

「こう雷に鳴られちや私閉口よ、全く。——おいやなの？　大丸によるの」

「大丈夫ですよ、雷は遠いもの」

「………でも、何故おいやなんでせう其那に。何でも無いぢやあないの一寸位休んだつて」

大丸に曲る浅い林の横に來た。仲子は佃の腕を引いて立ち止つた。

「どう？　どうしてもいや？」

「眞直行きませう、ね、休んだつてつまらない」

「泥んで居るから？」

佃は、曖昧に鼻を鳴らした。

「兎に角、さ、歩きませう」

大丸温泉に、何故其やうに浴つてはいけないのか、理由をはつきり云つてくれないのが仲子に不満であつた。余が不足でないの丈は分つて居たが。………仲子は、大の雷嫌であつた。

大丸を過ると、半町先が濛々煙つて見えない程大雷雨になつた。山ぢゆうの竹を横なぐりにどうと吹き降るので、傘がパラシウトのやうに風を孕んで仲子を體ごと吊り上げさうにした。或角でひよいと石に爪先を取られた機勢に、充分惰力がついて居たので仲子は、はつと思ふ間に兩膝ついて轉んだ。釣られて佃も中心を失つた。立ち直らうとする勢で、彼は仲子の背中に片足突かけ、辛うじて彼方側に飛び越した。

「泥んこ！　泥んこ！」

仲子は起き上ると、大丸のダの字も再び云はず、一里半の山路をずぶ濡れで駈け下つた。

(四)

二日ばかりして、又豪雨があつた。

表の椽側の雨戸も、明りとりにすかしたぎり一日明けられなかつた。

「ほう！　こりやあひどい！」

合羽をかぶつた番頭が岡持ちを下げて飛び込んで來た。

「御退屈さまで――……どうも近年にない荒れでございますね、全く番頭泣かせです」

崖下の川が、凄じい響で水嵩を増し流れた。晝頃から、頻りに人聲が右往左往した。仲子はそれを訊いた。

「あゝ、斯う瀬がひどく成りますと、大きな石をごろ〳〵ころがして下へよこしますんでね、人夫を出して石よけを遣ッて居りますんです、一堪りもなく、あの橋材なんぞ折られてしまひますんで………」

登山の草臥れがぬけて居ないので、大雨で暗く降りこめられるのも、仲子にとつて變つた趣があつた。いきなり雨戸一重で裏の崖で、激しく熊笹に雨の飛沫の散る音がした。量の殖えた温泉が咽んで筧を走る音。特に湯の香が四邊に强く漂つた。子供の時分、柿の花が斯いふ雨で出來た水溜りに澤山浮んだのを珍しがつて無雙窓から踏臺に乘つて熱心に眺めて居た。仲子はトランプの一人遊びをし乍ら、懐しくそのことを思ひ出したりした。佃が餘り默つて居る。トランプを並べる首をあげて見た。彼は、薄暗い机の前に胡坐をかき、茶色の鞣の財布を脚の上にのせて、金勘定をして居た。まるで退屈さうであつた。退屈して、金勘定を始めたのが仲子には可笑しかつた。彼女は笑ひ乍ら、トランプに誘つた。

「これでもしませうよ、詰らなくつても、其那ことをやるよりは増しよ―

「ふうむ」

自分が退屈をするのも厭だが、佃が表情といふものを置忘れたやうな顔をして居るのは更に仲子に氣になつた。

「――樂しむ氣になれば何でもあるものよ、………あゝぢやあ私がこゝで一つジプシーの眞似をして上げるわ、貴方の運命――主に戀愛問題を、僅かこのカード六枚で見事に當てゝ御目にかけます」

仲子は、佃にとつて何か感情的關係のあつたらしい女性の頭字を巧く札にこぢつけたりして占つた。

「どう、當つたでせう？」

「さあ………」

仲子は、心持の彈みを失つて、詰らなくトランプを切つた。

「ひどくモノシラブルばやりね」

程經つて、佃が、爪を剪り乍ら云つた。

「到頭今年の夏は何も出來なかつたなあ」

仲子は、ぼんやりした戸惑ひを心に感じて夫を見た。彼の調子には、長い考への餘韻が尾を引いて居た。

「何か豫定がおありんなつたの？」

「自分の時間と云ふのは、夏休み位しかないんだから………勿論仕たいことはいくらもありますよ」

仲子は、不愉快になりだした。溫泉に來てから、彼女は自分の不愉快を成たけ誇張しまいと心がけて居た。隣室の男たちと夫との感情についても、其故、彼女は强いて言葉に出して追究もせず、拘泥はるまいとして居たのだ。

仲子は、互の氣分の舵をとりなほさうとして云つた。

「――こんなお天氣だと滅入つちやうけれど、折角樂しみに來たんだから、まあ、出來るだけ愉快にした方がいゝわ」

すると、伸は、妙に持つて廻つてきゝかへした。

「――たゞ樂しむ爲にだけ來たんですか？」

思はず眼が喰ひ合つた。

「どうして？　違ふの？」

「僕は、君の足にいゝだらうと思つたから來たんだ」

伸子は、捨てたいと思つた旅行前の堅い、悲しい心持が甦つて來るのを感じた。胸の中で大切に守らうとして居た蠟燭の灯が、フツト消されたやうな寂しさを感じた。彼女は、自分が彼もその氣持だらうと思つたやうな心持――この小旅行でどうにか二人の心に新生命を見出したいといふ希ひ――で來て居たのではなかつたのを了解した。矢張り、同じ、彼らしい彼だ。何だかすつきりしない。何だかすつきりしない。………

（五）

天候が恢復した。

伸子等は、增水で川床の模樣が崩れた橋を渡つて、表通りへ出て見た。降りこめられた後なので、人出が多かつた。誰もが日光やや秋めいた外氣や、空を寫す水溜りを喜び味つて出歩いて居るらしかつた。青や赤の、粗惡な繪具で色つけした刳物細工ばかり賣る土產の前にどつさり人がたかつて居た。中に、濡手拭を、ふき流しに頭にかぶつた男が、他の宿屋に泊つて居る顏馴染みらしいもう一人の男と、聲高に喋つて居た。

「いやどうも、すつかり禁足を喰つちまひました。すつかり何物を拵へたのにあの雨でね、寒い〳〵で、又解いてネルを出す騒ぎでした」

「――今日でもお立ちですか」

「え、、改めて。――出なほして來るといふのは聞くが、出なほして歸りませうは、振つてますね。ハッハッハッ」

さわめきは其處ばかりでなく感じられた。

短い町並なので、彼等は直き端れに出た。逆に元來た道をぶら〳〵戻つた。

「大分すいて來たらしいことね」

「――そろ〳〵歸りますか、私共も――」

「さうお？私はもう少し居たいわ」

「同じだものいつ迄居たつて、もういゝでせう」

「何だか子供だましのやうね、兎に角來たんだからもういゝだらう、ぢや」

と、仲子は苦笑した。

「どうせ二日三日早くかへつたつて仕方がないでせう？まだたつた七日よ。來た日ともで……」

その七日が、全體として仲子には滿足を與へて居なかつた。此ぎり歸つたのでは、物足りない、失望的な感銘が積るばかりと思はれた。其では、來たことが、結果では逆に働くだけだ。何か氣を換ることはないものか。

歸つて、ぼんやり考へ乍ら茶を飲んでゐると

「今日は結構なお天氣でございます」

と番頭が來た。」

「――御散步で？」

「えゝ、――留守に來たの」

「へえ、お部屋をおかへ致したいと思ひまして」

仲子は、此はいゝ折だと云ふ心持がした。

「さう、どこ？」

「別館の方でございます。大分御不自由を御堪へいたゞきましたから、當分あちらでどうぞ御悠くりなすつて頂きたいもんで――」

「――こゝも靜かは靜かだけれど、何しろね」

敷居際で、障子に靠れて居た佃が、其時やゝ急き込んで言葉を挾んだ。

「部屋なんか別に換へなくていゝでせう」

「――氣分が變るのも惡くはないぢやあないの」

角刈の番頭は、斜かひに椽側に腰かけ乍ら、

「へえ、もう彼方なら……」

と、愛素よく腰をかゞめた。すると、佃は、何と思つたのか突然、氣色ばんだ聲を出した。

「――僕等は、此部屋だけの金を拂つて居るんだから、何にも動く必要なんぞ無いんだ。――どうせ、後、人を入れるんだらう」、

仲子は、想像もしなかつた言葉で、掌が一時に濕つぽくなるやうに感じた。彼女は夫の顔を見られず、さりげなく番頭に向つて訊いた。

「段々一まとめにするんでせう？」

番頭は、仲子に對しては先の丁寧さを保たうと努め乍ら答へた。

「へえ、こちらは本來役宅なんでございますから、本館か別館が空き次第御引越し願つて居りますんで」――

そして、彼は、頬が蒼白んだやうな眼付をして居る佃に、

「手前共はお客さんさへ御滿足なら、決して御無理にどうこうと申すんではありませんです、へえ。然しね、此方ではちいつと如何うも――いかがと思ひましたのでね」

「馬鹿野郎」と腹で舌打ちして居る調子、わざと、仲子と佃とに言葉使ひをがらりと變へたのが、仲子には如何にも辛棒ならなくなつた。

「その部屋を見せて下さい、では」

仲子は、下駄をはいた。

「貴方も御覽になるといゝわ」――

空いた部屋は別館の三階の隅であつた。六疊だが、溫泉宿らしく、萬端氣が利いて整つて居た。戸棚に繡紬の夜具が重ねてあつた。廊下に立つと、前庭と、鍵の手に突出た部屋の手摺のところで、櫛卷にした若い女が、父親だか夫だか遠目では見當のつかない爺と何か云つて居るのが見えた。部屋を見て居る間に、裾を端折つた女中が

「政どん――十番さんお立ち」

と云つて來た。

「では、後ほど恐れ入りますが、本館の張場へ一寸御返事下さい。手前はちよつと……」

彼等は、欄干によりかゝつて、部屋を眺め乍ら暫く默つて居た。

「どうなさること？」

「――君は？」

「ふうむ」

伸子は、氣分がくしやくして居た。獨りで居るには恰好な部屋らしく思へた。

「兎に角外へ出ませう」

浮かない顔を並べて、彼等は、挽物工場の轆轤が廻つて居る小窓の横を、見晴し台へ出た。左手には、ずつと那須野ヶ原が展望され右手の遠くに那須山が仰げる。作りつけの涼台に、大人や小供が出て居た。道端の射的場で、縮緬の兵兒帶をした田舍の青年が二人

「今度こそ、あの敷島ぶつくりかへしてやるぞ」

と、空氣銃で狙をつけて居た。伸子は、其を見物した。氣込みは大層だが、キルク玉は、殆ど逸れ、やつと敷島を二つ落したきりだつた。

伸子は、人から離れた大石を見つけて腰を下した。別館の部屋を定めるにしろ、彼女には先づ其をさつぱりさせたい胸のもだくがあつた。其を片づけないうちは、自然に夫と口も利けない氣がした。然し、――縺れた氣分は、何か底しの、無限なものと續いて居、今こゝで押問答した位で根本的に如何なりさうもない氣もする。

凝つとしてゐる彼女の後へ、時々鬼に追はれた子供が馳けて來た。呼びかへす母親の聲もする。軈て佃が、腰かけたまゝ伸びをするやうに兩腕と胸を張り乍ら、きり出した。

「――あの部屋、どうしますかね」

「貴方は？」

「私はどつちでもいゝが…………」

伸子は、躓き乍ら出た口調で云つた。

「私ね、さつきから厭な氣持で仕樣がないことよ。これが癒らないうちは、如何していゝかわからないわ」

「何が」

佃は、伸しかけた腕を中途でとめて伸子を見た。

「どうして？」

「先刻みたいなの。――私はね、今度の旅行にはいろ〳〵いゝ空想をもつて來たのよ。だからどうか愉快に終らせたいの。彼那思ひ、もうさせないで頂戴ね、お願ひだから」

「何も僕は――其那積りで云ひやしない」

「だからさ、からりとして、部屋を換へるなら換へませう。貴方もその氣になつて、たゞ場處だけ代へたつて仕方がないから」

「ぢやあ、君一人移つたらいゝでせう」

伸子は、身じろぎをした。

「私は東京へ歸ります。一人でゆつくり居たいだけ居たらいゝでせう」

既に幾度も心に浮び、云ひ出すばかりになつて居た言葉らしい調子であつた。仲子は平氣なやうな、心臓の鼓が鋭く痛み出したやうな悲しい心持がした。

「それで貴方はいゝの？」

「だつて仕様がないもの――さうでせう、もう豫定だけは居たんだし、私は夏休みぢゆう旅行ばかりで潰すのはいやです。――自分の爲に來たんでもないのに」

「さうだつたの！」

仲子は、自分で知らずに石から立ち上つた。彼女はもう一刻も夫に居て貰はないでいゝ氣がした。

「ぢやあ、どうぞ直ぐお歸りんなつて頂戴。私は――私は……」

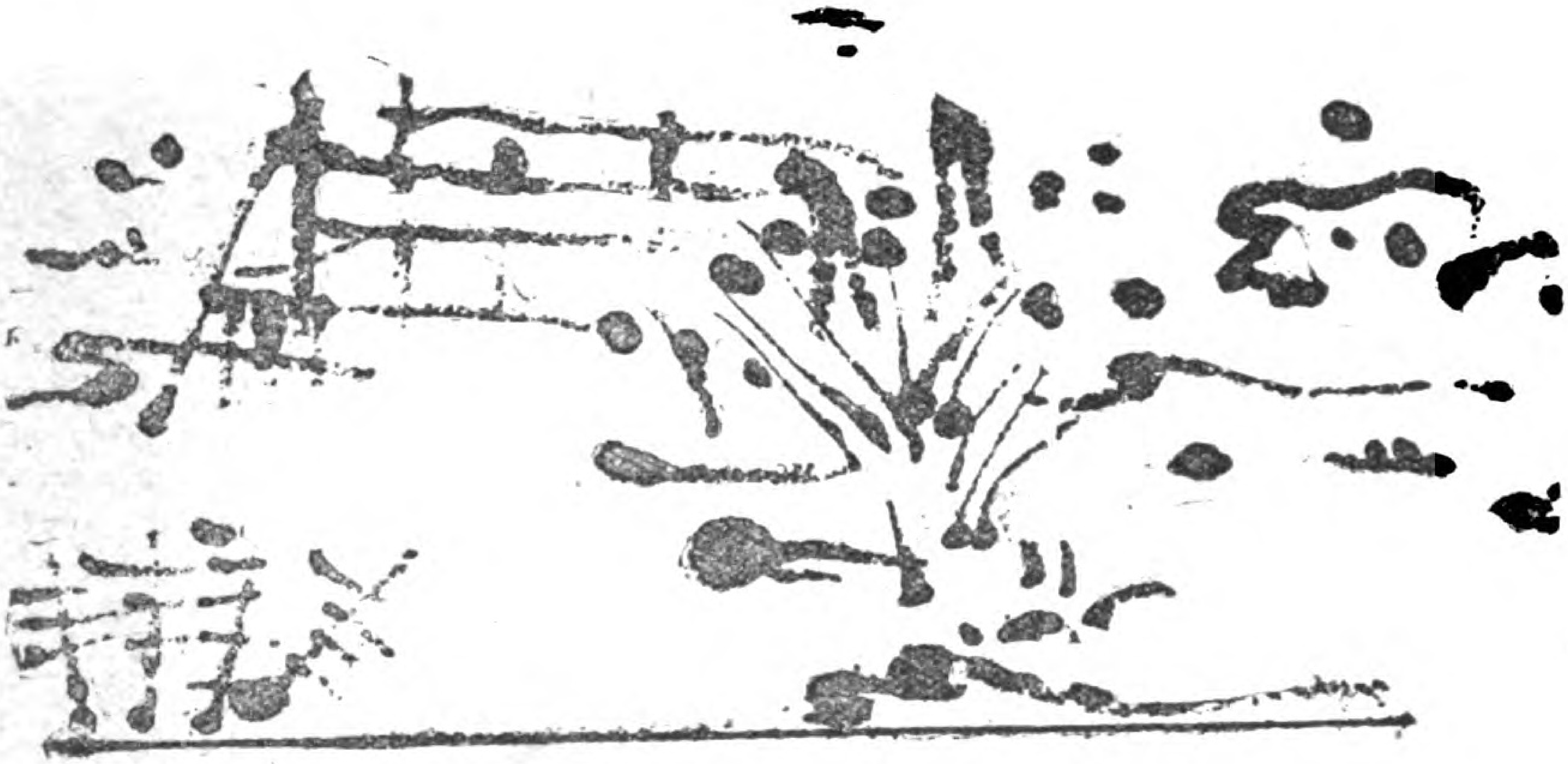
仲子は瞬間、號泣したいやうに寂しい、棲家の無い心持に打れた。其でも涙を見られまいと歩みかけ乍ら、斷々に云つた。

「何處へでも行くわ――郡山へでも、何處へでも」

彼女の心には、咄嗟に郡山へ立つ決心が出來た。眞直二三歩、歩き出した。佃は、石のところに立つたまゝ動かない。到頭此那にして、彼程喜び樂しんで來た旅行が終るのかと思ふと、然し、仲子は進むに進みきれない氣がした。傷ついた心持の持つて行きどころがない。彼女は戻つた。そして、遠くで見たら、否でも押しつけさうに顔を近々と夫の頬にさしつけ、體ぢゆうの歎欷で云つた。

「貴方よ――あなたがわるいのよ―― You spoil every thing 」

翌日、彼等は黒磯まで一緒に温泉を下つた。十一時五十一分の上りで、佃は東京へ向つた。四十分置いて青森行が來た。仲子はそれに乘つた。再び歸ることのない處へ出立する心持であつた。（此稿了）



綱の上の少女

片岡鐵兵

上

街の夏祭りを當て込んで、この頃來てゐる輕業師の中に、私の妹が居るといふ事實は、私をひどい憂鬱に陷し入れてしまつた。

生れつき空想家の私は、これまでの二三年間、幾度び、妹をさうした境遇から救ひ出さうと考へたどらう……けれども、私はどうする事も出來なかつた。私は貧しい少年職工にすぎなかつたし、彼女はいつも旅から旅を放浪して歩く巡業團の中のひとりだつたのだから——私は、どれだけ彼女に逢ひたくても、いつ何所で彼女たちが興行して居るのかも知らなかつたし、又、この三年足らずの間には、たまには彼女が屬する『山谷興行部』の巡業先を知る機會があつたとは云ふけれども、私には其の土地まで行く旅費のあらう道理がなかつたのだ。

彼女はそんな身の上にならなければならなかつた――これは、彼女が誘拐されたと云ふやうな事があつた譯ではない。私の父が、さうした興行師に、彼女を賣つたのである。私の父は、どういふ性格の持主であつて、又、どういふ生活や職業を渡つて來たものであるか、それは確かに不潔で、慘めであつたらう、そして、それは父の罪ではなくて、この世の中の出來上りのさせた罪であつたかも知れない、それゆゑ、私は父がどんな事をした男であつたらうとも、父を責める氣持ちにはなれない。然し、父が、私の妹を輕業師の手に渡したといふ一事だけは、許す事が出來ない。私はそれを想ふ度びに、父を呪ひ、父を憎まずには居られないのだ。これは私の不當に科せられた刑罰である、不幸である、父を憎まずには居られないと云ふ事は……だが、その父はもう此世には居ない。十年前に、死んでしまつた人である！

もう十二年も前の事である。その頃、私の一家は神戸に居た。私にはひとりの妹があつた。私たちの住んで居たところは、兵庫の佗しい裏通りであつた。だが、もう、遠い、遠い、昔のことのやうな氣がする。私は、その裏通りに就て、詳しい記憶を持たない。母が生きて居る頃、時々『兵庫に居た時……』と何か下らぬ思ひ出話をしたその度びに、私は、漠然と、じめ／＼した小路の水たまりや、剝げた赤い布片れや、小兒の喚き聲や、何か怒鳴る筒袖の女たちを眼に泛べるだけであつた。不思議な事に、さうして思ひ泛べる街の光景は、一度も明るい日光に照らされて居る姿では腦裡に出て來なかつた。私の記憶にある兵庫の裏長屋の通りは、いつも、いつも、くろずんだ薄明りのうちに、煤煙にまみれながら横はつて居る……

私が九つだつたから、妹は四つか五つであつたらう。或る日、私は玩具のポンプを弄んで居た。そのポンプは父が買つて呉れたのか、それとも、近所かどこかの子供を苛めて奪ひ取つたのか、私はおぼえて居ない。兎に角、黒い土の、僅かな空地に、膝を踞いて、私は黒い煤煙の流れる空を睨みながら、光る一條の水を玩具のポンプから飛ばして居た。

そこへ、小さな妹がチョコ〳〵と走つて來て、盥を距てた私の眞向ひにしやがんだ。私は、不思議に、しやがんだ妹の無格好な物に反感を持つた。そこで、いきなり、それを目掛けて、ポンプの水をシュウと射込んだ。妹がワツと泣き聲をあげたので、母が表口に飛んで出た。

『まア、繁は又ふみを虐めよつたな!』

母がそんな言葉で私を罵りながら、濡れてしづくの垂れる妹の股を前掛で拭いて居るのを見ると、私は急に取返しの付かぬ罪を犯したやうに考へ、云ひやうのない恥を感じた。私は、何とか云ひ拔けなければ、この事で一生自分が汚辱にまみれるだらうといふ意味の、漠然とした感じから、眞赤になつて、

『嘘や、嘘や、そら、ふみの小便やがな!』

『小便の臭ひかい、これが!』

妹に就ては、さういふ記憶がある。そして多分、そんな事があつて間もない頃だつたらう——或る日、いつも親子四人が寢る二枚の薄い蒲團の上に、私は小さい妹の姿を見失つたのである。

『ふみ、居らんがな。』

と私は、背ろむきになつて寢て居る母の脊中に向つて云つた。

母は默つて居た。母は泣いて居た……

と母の肩の上から、父の顏がつと現れ、私を見て云つた。

『ふみは、もう戻つて來ぬ。あれは、他所の子になつたんのやから、もう戻つては來まいがな。』

『他所の子に——』

その朝、どこからか、詰襟の服を着て、節くれだつた丸い指に、幾つとなく大きな部厚な金指輪を嵌めた男が來て、ふみを連れて行つたのは、私も知つて居た。私はおぼえて居る、さうだ、この事は不思議に、ハッキリとおぼえて居る、その男は、紅い、大きなゴム風船を持つて來て、ふみにやつた。それから、露路を去つてゆくその男の肩ごしに、ふみの小さな顏が、ニコ〳〵と笑つて居たのであつたが、私はふみの顏よりも、ふみの顏の一尺ばかり上を、ゆら〳〵としながら遠ざかつて行く紅い風船を、ぼんやり見送つたのを今でもハッキリおぼえて居る……

私の兩親は、ふみは他所の子になつたのだが、貰はれて行つたその家は、金持ちだから、安心したら好い、と私に云つた。私はひどく悲しくなつて泣いた。聲をあげて泣くと、母も一緒に聲をあげて泣いた。すると、父がひどく怒つた。

……それから二三日は、私はじつに淋しかつた。九つの子供は、然し、まだ父を憎みはしなかつた。その後、時々、妹に會ひたくて、彼女が貰はれて行つた他所の家に行つてみたいと云ひ出して、父母を困らせたものだ。すると、父母は、そんな時、きまつたやうに、相手の家が金持ちだから、行つたつて決してふみに會はせては呉れないと云ひきかすのであつた。

『金持ちだから、あんな大きなゴム風船も持つて來たのぢやないか。』

さう云はれれば、成程、と私は思つた。

『金持ちだから、貧乏人を家に上げては呉れないぢやないか。』

さう云はれても、成程と思つた。同時に、私は金持ちと云ふものは、何といふわけの分らぬ、鬼のやうな人間だらうと思つた。私は金持が羨しく、そして憤ほろしかつた。私の知らぬ世界にあるところの金持ちを激しく敬ひ、激しく呪つた……

その翌年、父は死んだ。神戸から、母の故郷の中國地方の或る街に、私と母とが移つて來たのは、私が十二の時だつた。その間の私たち一家の暮しかたに就ては、想ひ出すのも身ぶるひがする……それは然し、こゝでお話をする必要はあるまい。そして、私は今から七年前に、小學をやめ、今の工場に職工見習ひとして入つたのであつた。十四の時である。

その間に、私は妹の事などスッカリ忘れて居たと云つても好い。貧乏や、そのほか色々の、その日その日の生活――それは、生活であつて生活でない、一種の無限の苛責であつたやうな月日は、私たちに、可哀想な妹のことを想ひ出す餘裕すら與へなかつたのであらう。生きることが、その日その日の苦患であつて見れば、苦患にこたへて、身悶えするほかに生きる道はなかつたのだから。ところが、五年前の或る日、私は突然意外なことを母から聞かされた。

―『お前にや隱して居つたがな、ふみが此間まで此街に來とつたんだよ。』

―『ふみが？』

私は驚いて訊いた。すると、母もハッとしたやうに、口を噤んでしまつた。

その時は今から考へると、母に死が迫つて居るのが、彼女自身の疲れた心には豫知されて居たのに違ひない。彼女はその二三日前から病床に居た。妹に就て、私に眞實を語る事を母に決心させたのは、そのおぼろな死の豫感ではなかつたかとも考へられる。久しく考へてから、母は漸く口を開いた。

『先月、あの夏祭に、輕業が小屋掛けしとつたやらう。あれや。ふみは、あそこで綱渡りしとつた……わしは逢うて來たぞな。』

―『どうして？ あれは金持ちの家にやつたんぢやないか。』

私は激しく昂奮して、語るやうに云つた。そこで、母は急に眼から涙をぼろ〳〵とこぼし始め、それから金持ちにやつたのではない、父が軽業の興行師に賣つたのであることを告白した。

ふみを賣つたのは、「山谷興行部」といふ軽業師の一行の親分にであつた。その親分は、どういふ關係からか、母の昔の知合ひだつた。(これらの話は、母も話すのが不愉快さうだつたし、私も嫌だつたので、餘り深く立入つては聞かなかつた。)それで、父が娘をその男に賣つてしまつたのである。

「親父に、なんでそんな事をさせたんや。阿母んも、阿母んやないか。軽業師に賣るのは、女郎に賣るのも同じ事ぢや。賣らたけれア、食へなんだんなら、家内一同首をくゝつたら好えのぢや。どのいしてども生きて行かんならんいふ法はない。わがの娘を女郎や綱渡りに賣るなんちう考へを——どだいそんな考へが起るものぢやないんだ。この世の中にア、そんな考へが起るもんぢやないとせんならんのや。そんなら、阿母ア、どんなに暮しに困つたつて、そんな考へを退けてから方法を考へんならんのやろが……』

その頃の私は、まだ中學講義錄もとつて居なかつたし、雜誌や小說を讀んだり、それから何よりも第一に、大崎さんのやうな先輩も持つて居なかつたので、自分の思想を十分に母親に傳へる言葉を知らなかつた。私はひどく母を咎め立てゝ昂奮した。始終、あの、十二年前の、黑ずんだ朝の露路を、ゆたゆたと遠ざかつて行つた紅いゴム風船の記憶を眼に浮べながら……

然し、私はその上母を非難しようとは思はなかつた。父が賣ると云つた時、母はあらゆる方法をつくして反抗したのだつたと云ふ。母は泣いたり、罵つたり、死ぬると云つて脅したりした。でも、父はたうとう賣つてしまつた、小さいふみを、私の妹を!

先月、その山谷興行團が來た。その時輕業の赤い大きなビラが、錢湯に掛つて居たのを母が見たのであつた。母は無智で、文字は讀めなかつたのだが、山谷興行團のビラが、十年前のと同じ刷りであつたのが、母の記憶を刺激したのである。母は、私に內密で、輕業の天幕に行つた。そして、昔なじみの親方に逢つた。無理にたのんで、娘に逢つた……』

『逢つた?』と私は訊いた。

『他所ながらに、なア。』と母は泣きつゞけるのであつた。

他所ながらにでなければ、親方は逢はせて呉れなかつたのである。

『あれが、お前さんの娘さ。』

場內一杯の人ごみの中に、親方は母を引張つて行つた。そして、高いところを指さした。高い所の綱の上である。十二三の小娘が、ビロオドの肉襦袢をきて、いま綱の上に右の脚をピンと伸して上げた瞬間だつた……。

『あれが…… おゝ。』

母は袂で眼をおほうた。

『好い、きれうだらう。喜ぶが好い。人氣者でね、あれ、あんな花環や、ほら、あんな幟やら……な、敷島はつせ孃へと書いてあるだらう——字が讀めんかね、お前さんは。ハハヽヽ、』

そんなことを親方が說明して呉れたのである。母は、親方が指さすまゝに、そつと顏を持ち上げて、『そら、あんな花環を』と云はれゝば花環を、『ほら、あんな幟を』と云へば幟を、ふるへる空氣の底に、順々に眺め渡した。上を見る氣にはなれなかつた。敷島はつせ、敷島はつせ、と、心の中に飮み込むやうに繰返し呟きながら、母は、花環を、幟を、順々に、そつと眺めたのであつた。花環を、幟を、そして幟を、花環を、眺めて居る間に、あゝ、幟から花環に眼を移

すその間に、自分の娘は高い綱の上から落つこちるかも知れない……もう娘は持ち上げた脚を綱に戻したのかしら？今、落つこちて來はしないか知ら？あの、チラと見た顔の、細い眉、張り切つて凝る眼、固くむすんだ眼、花環、幟、敷島はつせ……

私はその時の母の氣持ちが、そのまゝ自分の胸にこたへで來るのを感じた。そして、私自身が、敷島はつせ、敷島はつせと心で繰返しながら叫んだ。私自身が、高い綱の上で、ピンと持上げた脚を見た。細い眉を見た、一とところに凝つた眼を見た、花環を見た、幟を見た……幻でなく、さながらに母の話の中にそれらの物を見たやうな氣がした。母は云つた。

『なあ、繁や。どうぞして、ふみをあそこから連れ戻る工夫はないだろか。』

『そんなこと——それよりか、こつちの身の上のことの方が忙しいがな。』

さういつた私の心は、嘘ではなかつた。私はほんとの心持を、苦り切つて云ひ放つほかはなかつた。自分自身らが生きるために忙しいのに、どうして今は他人同様にかけ離れて月日のたつ妹のことなど構つて居られよう。私がそれを冷かに云ふのを見て、母はすぐ默つてしまつた。

母の死んだのは、そのご間もなくである。

それから五年間たつた。私はその間に、多少仕事にも熟練し、日給も上つて來た。それに、母に死にわかれてからは場末の安宿に暮す獨り身である。私は下らぬことに金を費さなかつた。中學講義錄もとれば、雜誌も讀み、人から借りて小説も讀むやうになつた。そして大崎さんが、私の思想をズッカリ變へて吳れてしまつた。だが、私は大崎さんに感謝こそすれ、決して大崎さんを知るやうになつた事を怨んでも悔ゐても居ない。大崎さんに就いては、また後で、もつ

と詳しく話すことにしよう。

兎に角、私はこの二三年間、妹を救ひ出すことを色々と空想もし、計畫も立てたのである。初めは、妹のことなど忘れて(それは少しも不自然ではなかつた)居られたのが、だん〳〵さうでなくなつた。次第に私は、山谷興行部の、敷島はつせなる、まだ見た事もない女輕業師が、私の心の中に色の濃い存在となつて來だした。女輕業師、敷島はつせ孃。

『彼女は俺の妹だ!』

この考へは、最初のうちは然し、まだ空漠たる空想のやうに頭に來るだけだつた。それが、だん〳〵胸を打つ實感として感じられて來た。

すると、私の妹が、高い所の綱を渡つて居ることが、時々の幻想でなく、いつの瞬間にも在るであらう事實となつて、私の心を痛めつけた。

美しい女!妖しい魅力!綱の上……

彼女は私の妹だ。私の妹が、可愛いゝ、この世にたつた一人の肉親が、あの、昔私がポンプで濡らしてやつた妹が、紅い風船につり下げられた可愛いゝ女の子の顏の主が、いつも〳〵高いところの一本の綱を渡つて居る!私の妹はいつその綱から落つこちて死ぬるか分らないのだ、彼女たちの興行團は、いま何所で天幕を張つて居るのか知らない。或は九州の果てゞ、ひよつとしたら北海道の片田舍で、今、この瞬間に、いや、次の瞬間に、彼女が高い綱の上から落下して死なゝいとは、どうして云へよう。それゆゑに、私は、いま、この瞬間に、いや、次の瞬間に、ひやツ、ひやつと脅かされずには居られないのだ。いつの瞬間も、彼女は生命を脅かされて居る。それ故、いつの瞬間も、私は遂い知らぬ他國の空の、一本の綱を踏みしめて居る妹の生命を安心する事は出來ないのであつた、そのやうな三年間であつた。

『ひよつとしたら、俺は敷島はつせを戀して居るのかも知れない！』

或る日、私はさう思つた。そして、自分で顏を赧らめずに居られなかつた。私はもう二十歳になる。私は寂しい少年である。私は異性の友だちを持たない。友だち以下の何のつながりすら、私は異性に持たないのだ。私が妹に就いての惱みは、私の性慾の成長につれて深く、激しくなつて行つた。私は、ほかに何の對象もないから、見も知らぬ敷島はつせに就て、冒險を空想し、苦痛を享樂して居るのぢやあるまいか？この考へは、私を非常に寂しく、不愉快にした。それゆゑ、私はそんな考へは、頭から努めて振り落さうとした。次ぎに、

『考へて見ると、俺の惱みは、俺が生活に餘裕が出來、知識が加はつて來るに從つて成長して來た。これは何といふ事だらう。』

これは確かに發見であつた。私はこの發見の前に眼を瞠つて、そして私の手や、足を他人の物でもあるかのやうに、今更ら、物珍しげに見詰めたのである。

さういふ時なのだ、山谷興行團の一行が、この街の夏祭りをあて込んで、乘り込んで來たのは！ビラで見ると、その中には確かに敷島はつせも居る、その事は私を不安にし、同時に憂鬱にした。そして、一種、もの懷しい悲しみとも、不思議な憬れとも云へぬ心の憔悴が、私の胸を一杯にした。

だが、物語の前置きは、もう好い加減に切上げるとしよう。このやうな長い前置きよりも、私は、つぎの、非常に短い本題を語ることに、一層の焦燥をおぼえて居るやうだ。

〔下〕

夏祭りの季節となつて、街のなかほどを流れる青い水に傍ふ河原には、樣々の見世物の小屋や天幕が、うすきたない白さに連り、重り合つて建てたられた。機械人形や、手品や、シネマや、アルコホル漬の件や……それらの見世物の中に、あの『山谷興行部』の天幕は一際大きく、高く聳えて居た。天幕のまはりに色彩を散らす旗と幟、そしてコルネットに引かれて青い流れを渡り、對岸にまで擴つてゆくバンドの響きは、街の四方から人の足を吸ひ寄せて來た……忙しい夏の夕ぐれは、祭りの群衆が刻々に厚みを增して行くに從つて、次第に闇をふかめて行く……

私は貧しい少年職工であつた。河原に渡る橋の上まで來て、私は泣きたくなつた。私の眼の前を、夥しい群衆が、かるい足どりで祭りへ急いで居るのである。彼らは、みんな樂しい、はしやいだ氣持ちで、敷島はつせを見に行くのであらう。私の妹は、彼らのために辱しめられるのだ！私は、辱しめられて居る妹を、これから見に行くのであらうか？高い綱の上を、踏みしめ、踏みしめて行く妹を、汗つぽい群衆が辱しめて居る。汗つぽい群衆が、笑ひながら、心の中で彼女を姦淫して居るとも知らずに、一本の綱の上に命を賭けた彼女が、身も心も『死ぬまい』といふ人間最大の努力の一歩々々を踏みしめて居るのだ——曾つての日に私の母がさうであつたやうに、私はさうした姿の妹を、十何年ぶりに眺めに行くのであらうか？

私は、晝の間の勞働の疲れも忘れて居た。コルネットが、天幕の群れから、私の心に誘ひこむやうな響きを送つて來る。いつのまにかあたりは暮れはてゝ、闇を染め出した明るみの中に、『山谷興行部』と金絲で縫つた黑天鵞絨の幟が、夜風に魔物のやうにひらめいて居た……私の心は身構えて居た、氣がついて見ると、身構えて居た、非常に大きな冒險をする前の、お伽噺の英雄のやうに——彼女を救ひ出すのだ、少女を、妹を、と私の心はそんな、あてもない事を叫んで居た。

然し、そんな空虚な昂奮で、實際がどうならうものでもない。それは、儚い、功果のない空想にすぎないのだと、私はすぐ私自身に云ひ諾かせて居た。私は、河原の方へ下りて行かうとして、急にそれが厭になつた。妹が群衆に恥しめられて居る天幕の中へ、自分も入つて行くのが、自分自身に恥しくさへなつた。もし妹を救ひ出す事が、たうてい出來ない夢だと知つて居るのだつたら、私は何をしに妹の汚辱を見に行くのであらう？この考へは、私をひどく顔赧らめさせた。自然、私は橋の上を、河原とは反對の方向に去らねばならなかつた。ふと、私は大崎さんの下宿が此の近傍の横町にあるのを想ひ出したのである。大崎さんに逢つて、いろ／＼と訊いて貰ひたい事があるやうな氣がした。

大崎さんは二年ほど前から、この町に或る組合を作るために東京から來た〇〇〇であつた。まだ學校を出たての、若い人なのだつたが、顔はひどく蒼白めて、皺が多く、そして眼ばかりが鋭く光つて居た。それゆゑ、年だつて、もう四十に近いとさへ想はれるのである。この街へ來た當座は、勞働者たちの氣受けもよく、その事務所には、澤山の工場から始終組合員たちが出入して居た。菜葉服に取圍まれて、あの瘦せて蒼白めた大崎さんは、いつも微笑して居た。ただ、大崎さんの聲ばかりは、生き生きと澄んで居た。すべてが弱々しい大崎さんの、身體ぢうの精力が、その淸らかで太い聲の中に集まつて溶けて居るのかと想はれる。さういふ聲で、大崎さんは、いろんな事を說く、私たちの仲間は、みんな大崎さんの雄辯に魅力を感じて居た。どうしてあの貧弱な身體をした大崎さんの云ふ事で、斯うまで我々の世界の近づきつつある底力のある足音を、聽くやうな思ひをさせられるのであらうか、それは分らなかつたが、私たちは大崎さんの話のうちに、いつか私たちの力が如何によい未來を作るものであるかに就て、大きな自信を持つやうになつたのである。とりわけ、私は大崎さんから愛せられて居たやうだ。それだからだといふわけではないが、私はいまだに大崎さんを尊敬して居るのである。大崎さんを氣の毒だと思つて居る。こゝへ來てから、大崎さんの指揮した運動がみんな破棄

滅茶に失敗したのは、私も認める。けれども、それだから大崎さんが資本家に買收されて居るかのやうに云つた流言を、東京の本部が輕々しく信じたことを、かへす〲も口惜しく思ふのである。失脚した大崎さんは、事務所を追はれて、いま下宿して居るのだ。さうした大崎さんを、いまだに訪れるのは、殆ど私ひとりであつたと云つても好い。

『ヤア、どうだね、妹さんを見て來たかね？』

私の顏を見ると、大崎さんは萬年床の中から聲を掛けた。先日逢つた時に、私は妹の事の一切を告白して居るのである。

『それですがね。僕は、もう何も彼も厭になつちやいましたよ。』

私は投げ出すやうに云つて、大崎さんの枕もとに座つた。そして、さつき橋の上で感じたことを、そのまゝ此で云つた。

『つまり、僕は、空想家なんですね。すぐそんな境遇から妹を救い出さうなどと考へるんです……そんな空想家だから、あなたの信者にもなつちやつたんで。』

『ふむ。それで？』

『つまり、僕の思想や熱情は、大した根據の上に立つてるんぢやない。全く、夢のやうな空想から……』

『立派な自覺だよ。その通りさ。革命は英雄好みから餘つぽど思ひ上つた奴らの、盲目な突進がなくちや出來ないや。』

大崎さんから、こんな言葉を聞かうとは思ひ掛けがなかつたので、私は少々狼狽した。私の顏いろを見てとつて、大崎さんは、スパ〱と寢床の中で煙草を吹かし始めた。そして、氣味のわるい微笑を、あの蒼白く張つた薄い皮膚の上に漂はせることから、一層顏の上に皺を深くしながら云つた、

『だが、さういふ事は、君のやうな性格の人が尤もらしく吐く言葉だよ。僕なんか、すこし違つた考へ方をするね。』

『どう云ふ……？』

『君と僕とぢや、性格がまるで反對だ。第一、僕には、八つや九つで別れて十何年も別れて居た妹があつたとしても、まだ見ぬ赤の他人も同様な女が、ほんとの妹として實感に來ないものね。況して、それを救ひ出さうなんて童話や活劇まで創作する氣にはなれない』

『活劇はあなただつて創作してるでせう。あなたの理想は、活劇や血を通つてから實現されるのぢやありませんか。』

『創作ではないよ。計畫だよ。僕が君だつたら、妹を救ふよりも、寧ろ殺すね。僕だつて、妹の輕業を見る氣にはなれないよ。けれどもそれは君のやうにセンチメンタルからではない。輕業なんかをやつてる妹が、僕自身のいちばん醜い姿のやうに見えるからだよ。いや、さうでもない、そんな妹を見たら、殺したくなるからだよ。』

『殺す？　殺す？』

私はカツとなつた。大崎さんこそ殺しても好いとさへ感じた。そして、眞赤になつて、

『罪が、妹にあるでせうか？』

『罪は資本家にある。』

『誰が資本家です？』

大崎さんは、山谷興行部の團長こそ資本家だと云つた。そして、私の妹は、團長の資本のひとつだと云つた。

『だから、資本家の資本を破壊するといふ意味で、彼女を殺すのさ。ハヽヽヽ。』

大崎さんは急に哄笑した。そして、冗談をほんとにして腹立てゝ居る私をあはれむような眼で見た。

『まア、これでも飲みたまへ。』

さう云つて大崎さんは、枕もとにあつたウイスキイの瓶を私にすゝめた。いつもなら酒など見向きもせぬ私だつたが、どういふものかその夜は、ぐつと一と息に酒を飲むのが、私にとつて頗る自然なやうな氣がした。『妹を殺せ！』私の心はさう叫びながら、大崎さんが興味ふかげに見て居る前で、がぶ〳〵とウイスキイを肚の底にまで飲み込んだ。

『ヤ、やつたな。』と大崎さんは感嘆した。

『僕、妹のことなんか忘れます。あれが、始終、危險に身をさらされて居ることを、念頭から取去つちまひませう。』

『念頭においてたつて、どうにもならないんだからね。肉親の事を氣にしてたら、僕たちは手も足も出なくなるよ。君なんか、その點では、折角非常に有利な地位にあるんだから、わざ〳〵他人同樣な妹のことで、强ゐてこだはる必要もあるまいぢやないか。』

『さうです。僕は、妹なんかない。よしあつたつて、何時でも綱から落つこちて死ね！　死ね！』

私はウイスキーの瓶を、槃の上にドシンと突き刺すやうに置いた。瓶の中で、液體が、クラ〳〵とゆれ、私の空威張りの心が、それに調子を合はせて動搖し、全く統一がつかなくなつてしまつた。

『死ね！　死ね！　ひとりの妹さへ救へない者が、どうして多くの者のために鬪ふことが出來る！』

私がそんな事を云ひながら、再びウイスキーを口に持つて行つた時、大崎さんは煩さうな顏をして、あつちへ身體の向きを轉じてしまつた。

結局私は救はれない氣持ちで、大崎さんの下宿を出て行つた。すると、程遠からぬ河原の空が、ぼうと明るく照つて、バンドの音が、私を煽動するやうに此所まで響き渡つて來た。私は、すこしウイスキーに腰をとられて居るやうに感じ

ながら、足の運びを足の意志に任せて居た。その足はいつか橋上に出て居た。その足はいつか、河原におりて、そして夏祭りの群集の中にもまれて居る私自身を知つた。

其處は明るい世界である。數々の天幕と、樂隊の音と、夜店の間を、群集は流れたりたゆたつたりして居た。その明るい騷擾の中で、私が考へて居たのは『殺す』といふ異常な事であつた。私はそれゆゑ、あの大きな天幕を、眼の前に見る夢の國の入口かのやうに見詰めながら、歩いて居るのだつた。私は、私の働きの邪魔になる見知らぬ少女を殺すつもりであつた。それから、あの腹立たしい、暴戾な資本家の資本を破壞するつもりであつた。いや、世の中の一切が、私の手で破壞されなければならないやうに、私の耳は、先刻大崎さんが洩らした『ハ、、、、』といふ嘲笑をまだ捉へて離さないで居た——可愛い妹も、あはれな少女も、資本家も、資本も、みんな〱、殺し、破壞してしまへ！こゝに蠢く群衆諸君！諸君は私の片腕にも足りない。諸君がいかに私の前に無力であるかを今私は證明して見せるであらう。これは耐らなく愉快なことだつた。ハ、、、、。私は聽いて居る、惡魔の嘲笑を！いや、バンドの音だ、コルネツトだ。太鼓だ。美しく飾つた天幕に、私はなか〱近寄れない。私は浪にもまれて居る。今にこの群衆が、怒鳴り、金切聲をあげる中で、私は素破しい殺人を行ふであらう！天幕は眼の前に控えて居る。道化や、彩色美人や、肉襦袢の男が、天幕の表口に設へた樂屋の欄干から、群衆を見下して笑つて居る。どれが、私の妹だといふのだらう。私は白粉の匂ひを嗅いで居る。太鼓を叩いて居る。笛を吹いて居る。それだのに、私はもう聽力を失つて居るやうに感じられる。素破しい殺人の夢に、心ばかりが怒鳴りたくて、叫びたくて、私は仲々天幕の方に進めないではないか。

けれども、私は殺人なんか出來ないのを、よく知つて居た。心の底の底で、そんな徒らな昂奮を嘲笑つて居る私をよく知つて居た。私が殺すことを考へたのは、ほんの偶然の面白がりからだつたのに違ひない。私は殺す方法も考へて居

なかつたし、どんな事をしたつて殺せるなんて眞面目に自惚れても居ない。さうだ、ほんの一時の好みだ。偶然だ。全く、『彼女を殺したら』といつた古風な小説趣味が、偶然に私の心に泛んだといふだけの話だつたに相違ない。あゝ、私は偶然を呪ふ。

その證據に、ふと天幕の近くで、私は一軒の夜店を發見したのである。この明るい世界の、無數の夢と吐息とが、泡立つて凝つて出來上つたかのやうな、紅、紫、のゴム風船が、糸を引張つて店の上に浮いて居た。

突然、私はその澤山のゴム風船が、私に笑ひ掛けたやうに想つた。私は心の底から湧き上つて來るもので胸がつまつた。泣きたくさへなつた。十何年前の、兵庫の裏通りの煤けた露路を遠ざかつて行つた紅い風船と、その風船の下でニコ〳〵笑つて居た幼い顔とが、私の眼のなかに突然浮上つてすぐ消えた。

『おい、いくらだい。』

私は哀愁で一杯になりながら、店の親父に聲を掛けて居た。澤山な中でも、いち番大きくて紅いゴム風船のひとつが私の手に渡された時、私はこの妙にかるい癖に、握つた手もとに油斷のならぬ荷物の肌を感じて、見知らぬ妹に、急に近づいたやうな氣がした。

しばらくして、私は輕業の天幕の入口に來て居た。一等券を買つて、五十錢を財布から出さうとした拍子に、風船の糸がもつとで手からはづれやうとして、私はおつと危い！と呟いた。糸が手からはづれたら、この大きな風船は空中に逃げてしまふのである。

『おつと、危い！』

客を案內する女給仕が、ゴム風船なんか子供らしい物を大切さうに持つて居る私を、さも可笑しさうな眼つきで見て

居た。彼女は、うつむいて口をハンカチで押へ、笑ひをこらしながら私を一等席に案内して行つた。

一歩入つた時、私は、永らく怖れ、待ち設けて居た瞬間に、自ら飛び込んだ感じで、心臓が壓し潰されたかと思つた。其所でまた一杯の灯の明りと、人間の匂ひと——そして、賣られた娘の體臭とが、炎となつて私のぐるりに渦巻くやうに感じられた。一歩入つたまゝ、私は立ちすくんだ。逃げ出さうかと思つた。場内を埋めた見物の、みんなが私を嘲つて居るやうに思はれた。

「あれ、自分の妹のあさましい容子を、貧乏な兄が見に來て居るよ。」

誰かゞさう云つて、それゆゑ、見物が一齊に自分の方を振向いて嘲笑して居るやうな氣がして私は前の方へ出て行く男氣を失つた。

「どうぞ、こちらへ。」

先きに立つた女給仕は、意地わるさうに促したてた。

「俺は一等だぜ」

私は、心を見透かされまいと用心するかのやうに、わざと元氣に云つた

「ですから、どうぞ——一等席は、いちばん前ですから。」

私は、見物席の間に、わづかに通じて居る通路をとほつて、前の方に進んで行かねばならなかつた。恥しく、そして憶病にちゞこまつて、私はうつむきながら歩いた。

舞臺では、何か演つて居るやうだ。

「こちらへ。」

給仕はたうとう私を一番前の席に案内して、一つの空いた場所を指した。

座りながら、

『敷島はつせと云ふ女は、まだ出るの？』と訊いた。

『今、やつてゐます。』

女給仕がさう云ふので、私は舞臺に目を投げた。が、そこには二人の男が、一生懸命に上向いて、何か掛聲のやうな物を叫び掛けて居るだけで、女らしい姿は見えなかつた。

『どこに？　ア、あれ？』

『あれです。』

給仕は高い所を指さした。私の胸は俄かに亂調子な鼓動を鳴らしはじめたのである。そして、激しい呼吸づかひが、どう抑へやうとしても治まらなかつた。ふと氣が付くと、私は紅い大きなゴム風船を持つて居るではないか。心臟の鼓動は、私の手から白く細い糸をつたつて、紅い風船に音たかいリヅムを通はせるやうな——それにしても、私の妹は、あんなに高い、高いところで、それは殆ど天幕の天井につかへるほどのところで、あんなに細い綱を渡つて居るではないか。何と、彼女が小さく見えることよ。私の眼は、あんなに高い、高いところに張り渡した蜘蛛の糸かのやうな細い糸に、しつかと食ひ込んだ彼女の足の裏に突きあたつた。肉繻袢の、もゝ色の皺に灯火が織る影を見た。白い、小さな頭！短かい顎の上に、キツトと結んだ口と、やゝ低い鼻の固い表情を見た。眼が光つて居る！美しい？おごそかだ！私は私の女を見た。私の妹を見た。今、死ぬるかも知れない、弱い、小さな、美しい存在だ。世界のどこかに、このやうな少女が私につながつて居たとは！

『あい、しより！』

下の男が、彼女の方を見上げながら、底力のこもつた掛聲を投げた。

とたんに、今まで綱の三分の一どころをたゆたつて居た少女が、ト、トンと二足三足綱の上を前方に進んで、すぐ又そこで立ち詰つた。そして、キラリと、彼女の細い眼が光つた。それが、遠い下から見上げる私の眼に、闇の底で光るガラスのやうに映つた。

私は、あふれるやうに眼から涙が湧き出るのを感じた。すると、水の底から空の虹を見るやうに、はるかの上の方で桃色の渦がおぼろに廻轉しはじめる……

それだのに、私は眼の底から、彼女のあの緊張した顔が消えないのが苦しかつた。彼女は口を結び、目を据えて、ジツと焦點を見詰めて居る。全身から放射する生命の力が、綱の向ひ側の端を凝視させるのである。ひとつの瞬きでそれを見失つたら、死だ。それ故彼女の顔中が、生の望みと、祈りとで張り切つて居るではないか。

涙を拭いて、だが、私はもう彼女のさうした顔つきを見ては居られなかつた。いつか、私は一生懸命に彼女の足の裏を眺めて居た。足の裏は、『死ぬまい』とする努力で、殘酷なほど深い、太い皺が彫られ、それが綱にしがみ付いて居た。彼女は又進んだ、二あし、三あし、

『アイ、ショリ！』

その時、さつきの女給仕が、いつのまにか私のところへ引返して來て居た。

『誠に申し兼ねますが、木戸の方がやかましいものでございますから、その風船をお預りしたいので……』

『風船？』

私は妹の足の裏に妹の生死が釘づけにされて居るのを見た。

『その風船を……どうぞ、はねますまで、木戸でお預りしたいのでございます。』

あんなに高いところを！　又もや妹は進んで行つた。私の此の世にたつた一人の女は……」

『あの、もし、風船を。』

『風船？』

『アイ、ショリ！』

『風船を、どうぞ。』

『煩い！』

私は持つて居る風船を給仕の方へ投げつけた。

『相濟みません。』

給仕は、キャッチ・ボオルの無格好な手つきで、それを受けとらうとした。だが、投げ付けられた風船は、給仕の方には飛んで行かなかつた。私の手を放れると同時に、それはツイ、と、思ひ掛けもない方向に外れ、敏速な勢ひで、空中を上に、上にと昇つて行つた。

『あ——』

場内が俄かにざはめき始めた。

『馬鹿、氣を付けろ！』

誰かゞ、そんな罵りを叫んだ。私は恥しい事をしたと思つた。と不思議にも、十何年前のうす暗い露路を、ゆら〳〵

と遠ざかつて行つた紅いゴム風船が、ハツキリ目に泛んですぐ又消えた。

「風船よ。」

「あら、風船、」

「まア！」

「馬鹿！」

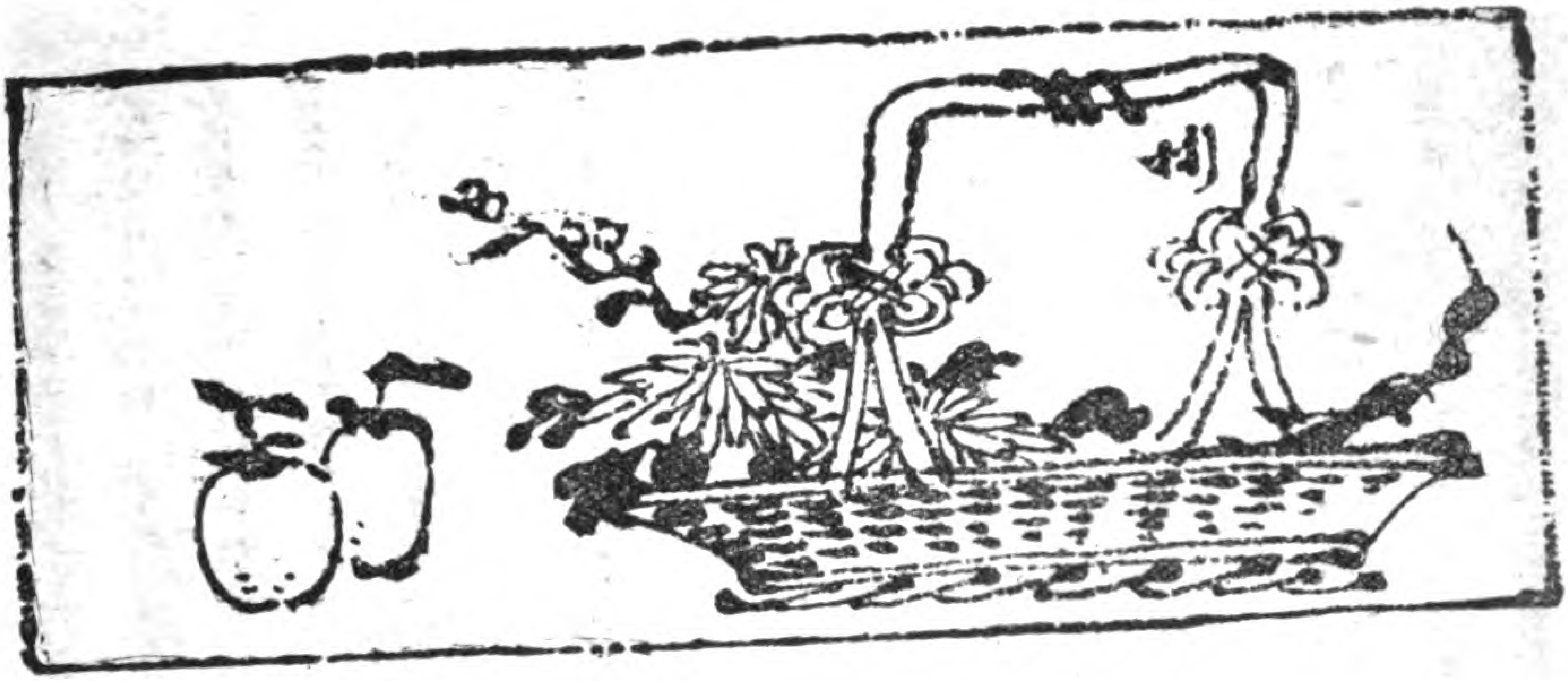
舞臺の上を、スイ、スイと昇つて行く風船は場内の時ならぬざはめきを尻目にかけて、益々速力を加えた。舞臺に立つてゐた一人の男は、あはたゞしく、長い青竹の竿を持つて來て、ポンと風船を打つた。風船は叩かれて急に横にそれて、そのため一層高いところの彼女に近寄るやうになつた。私の手は思はずその方に伸びた。私は叫びたくなつた。私の魂は私の身體を抜け出て、始めて風船の上に乘つた。それ故、魂の抜けた私の身體から、思はず伸びた兩手は、昇つてゆく風船を引戻さうとして藻掻いた。風船に乘つた私の魂は、次第に綱の上の彼女の近くに行きながら、一生懸命に風船を押へ付けやうとして居た。突然、私の魂は、風船を離れ、綱の上の彼女の上に飛び移つた。私は彼女にしがみ付いた。私の魂が彼女になつた。戀しい、私の、たゞひとりの少女が私であつた。私は、もう一間で、綱のむかひ側に渡るところであつた。その時、私の耳に、はるか下の方の時ならぬざはめきが、夢のやうに波打つて來た。私は醉つて歩く磯づたひのやうに、浪のねをうつらうつらと聽いた。けれども、もう一と息だ、私の妹は焦點を失つてはならなかつた。私は一層、眉と眉との間に力を入れ、眼を凝らし、一點の焦點を取り逃がすまいとした。私は、『妹！』と下から叫びたくなつた。私の足の裏は、冷酷に張渡された綱を鋭く感じた。私の足の拇指に異常な力が入り、指のふしが折れさうに一本の綱に凍り付いた。もう三足だ！　今だ！　私は……さうではない。彼女だ。彼女の眼の前に、突然、眞赤な

人魂が、幻のやうに出現した。はるか下の方の見物の群れは總立ちとなつた。怒濤のやうな騒めきが、急に、一瞬間、ハタと――その時、彼女の焦點に今まで集つて居た彼女の全存在から、彼女の一生の夢と色彩とが放射した。そしてゴム風船のぐるりに移つて眞赤に、ぐる／＼と燃えながら廻轉した――ハタと喧騒が消え、その瞬間に、水底のやうな沈默が俄かに世界を壓し去つた。

すぐ――その深い沈默の底に、パサ、といふ音が、舞臺の固い床の上を叩いた。

私の人魂は、高いところに渡された一本の綱の上をためらいながら、數丈の下にへしやげた私の戀しい少女の屍體を、ぼんやり見下ろしてゐたのである。………

（終）



霜から生れる一日

小川未明

私は、小學時代に打つた右の膝頭が痛むので、底冷えのする寒さだなと感じたのです。なぜなら、この數年間は大抵の寒さにも、昔の打ちみが痛むといふことがなかつたから。

硝子窓の色が、青く見えて、外の寒氣はひどかつたのです。どういふ加減か、乾いて寒さの強い時に、窓硝子の色が青く見えます。木々の黒い梢が鮮明に夕空の中にすいて見えて、家々の屋根瓦は、凋れ切つて凍破れさうな氣がしたのでした。今日も、暮れて行くのかと思ふと、私は、一種寒さから受ける萎縮した氣持の中に、あたりを暗くする憂愁とぢつとしてゐられない焦立たしさの湧くのをどうすることもできませんでした。

行火でもして、あたゝまらうといふ思ひ付が、一時からうして滅入つてゐる氣持を慰さめてくれたが、體を動かして、燈火を點ずる氣にもなれず、いつまでもうす暗がりの中でぢつとしていました。

唄の聲が聞えました。この唄になつてからたび／＼聞こえて來るので、誰か若い女が、下の方でうたつてゐるのでした。

私は、急に、體中があつくなつた。その唄の種類も、またうたふ女も決して上品なものではないことは、聞いただけで分つたのであるが、却つて、それが私に、ある種の魅力と興味を感じさせたのです。

寒さをも忘れて、私は、起ち上ると、片側の窓の硝子戸を開けて下を覗きました。アパートメントの三階の一室に私は住んでゐるのです。あちらは、谷の窪みを望む如く、すでに一面に乳色の夕霧がかゝつてゐて、將棋の駒を散らしたやうに、じみ／＼とした家屋が建て混んでゐるのが眼に映りました。唄は、其等のこゝに近いうちの一つから、洩れるのでした。

この外見だけ文化的な、粗雜な、大きな建物の陰になつて、下の片側にある家々は、晝間も日の光りを遮ぎられてゐたのです。私は、日の當らない家を見ると、住んでゐる人々の不平よりは、小さな家が、この漠然とした影を投げてゐる家に向つて、――から見えたつて、こゝにも人間が住んでゐるんだぞ。同じやうに、日光を必要としてゐる人間が住んでゐるのだ。考へたら、平氣な顏で、さうしてゐられる筈がないのだ――と言つてゐる。すると、この文化的な、粗雜な建物は、――私達は、なにも誰の邪魔をしようと思つて、こゝに建つてゐる譯ではないが、自然、日光が當らないといはれるならば、お氣の毒のことです――と流石に、大きな家のない場末の町で、氣恥かしさうに言ひ譯してゐる如く見えたのでした。

私も、どちらかといへば、昔風の、厭世的な、少し位の風や、雨を怖れたりするより、外面だけでも文化的の建築物の味方なんですが、あの私の胸を惱ましく苦しめた女の唄は、この低い土地に建つてゐる家から起るのでした。私が、

窓を開けて覗いた時には、もうその聲はきこえなかつたのです。

私は、こんな想像をしました。あの聲には女の魂がある。獨り、寒い空氣の中を四方へ漂つて行く。赤い舌をちら〳〵吐く蛇のやうに、また、燃える炎のやうに、建物の壁を這ひ上つてくる。それから、窓々を覗いて行く……。」

社會の下敷になつてゐる者が、せめて唄をうたふ聲にだけなりと、自由を、怨みを、悲しみを、すべてをそれで表現しようと思つてゐるのだと、私には、思はれたのでした。

私は、いつ頃からともなく、かういふ階級に戀を求めてゐました。さうです、女にでなく、階級にでした。決して言ふことに矛盾はありません。どんな女であらうと、階級さへ同じければ、樣子付から、理解に至るまで、何もかも同じく、同じやうな感激を私に與へてくれると思つたのでした。私と變則な戀愛をしてゐる、S子は、たゞ、その中の一人なのです。

西の夕空の明るみは消えて行つた。窓を閉めて、室の裡を明るくした。火鉢にも炭をついで暖かにしようとした。しかし、それだけでは胸の物足りなさを癒されませんでした。

「ちよつとしたことにも、人生は經驗される。それをしようと思つた時にしなければ永久に、二たびされる日はないだらう。そして、何一つにしろ、はじめて經驗する時は冒險である。冒險があつてこそ、人生の興味は、常に、清新であるのであらう」

私は、他にも、私といふものがあつて、かう私にさゝやくのを聞きました。

私は、あの唄をうたつた女が、どんな女だらうか見たいと思つたのです。女を見たいばかりでなく、こゝに越して來てから、そんなに日數が經たないので、このあたりの町を知りたいと思ひました。

次の瞬間には、室から出て、寒い外を歩るいてゐたのであります。

晝間は、日當りのいゝ家と較べて、日陰をかこつてゐたであらうものを、夜になると一切が、平等の闇の世界となつて、差別がなかつたから、一樣に、燈火の光りに浮き上つて、活々としてゐました。寄席があつて、その附近の細い小路にはいると、喫茶店や、支那そば屋や、おしるこやなどが、かたまつてゐました。私は、空を仰いで、自分の先刻まで、その三階の室にゐたアパートメントの影を探がし、所在を知らうとしたのです。この邊が、ちやうど裏手になつてゐるだらうか？それ等の店の前を歩るいて、内部を覗くようにしました。

どの店にも若い、さすらひの唄をうたふのにふさはしいといつてはをかしいが、その類の女がゐるのを見ました。

「彼女等に、何を求めようとしてゐるのだらう？」と考へれば、自分にも分らないのでした。

まんまるい月が、嵐の靜まつた後の、青ざめた冬の空にかゝつてゐました。こまやかな靄は、低く降りて、足先に纏はりつきさうに地面を這つてゐました。犬のやうに、あてもなく、町の中をうろついてゐる自分を月は見つめながら、

「お前は、なんといふ馬鹿者だらう。その病氣ばかりは、死なゝければ癒らない」と、言つたのです。

私は、死なゝければ癒らないと言はれたので、恥かしくなりました。また悲しくもなりました。この私にも、死といふものが人並にやつて來る時があるのだらうかと氣付いたからであります。私は、自分が死ぬ時の樣子をあり〳〵と空想することができました。

何といふ町であらう。どういふ病氣のために？病氣にかゝるとしたら、いまは、このやうに健全に活動しつゝある、一内臓の中のどれか一つの破壞であるが……周圍には、どんな人が臨終の刹那の自分を見守つてくれるだらう。若い女か……それとも老婆か？そして、自分がいよ〳〵瞑目してしまつた、同じ時刻に、屢々自分の歩るいたことのあつた街

では、恐らく、前日と少しも變りがなく、飯屋へは、同じやうな客が行つて無駄口をきゝ、世間の噂をはじめるであらうと空想したのでした。

　しかし、それは、また遠い未來のことであるといふやうな氣もしました。全く不確定な事實であつて、それまでに、すつかり生活の樣式が變るか、素的もない科學的の發見があつて、こんな空想は前世紀の憂鬱な悲哀として一掃されるかも知れぬといふやうにも考へたのでした。

　そこで、私は、月を仰いで、

「お月樣、私は、あなたを見て世界の死滅を考へたり、老人を見て、人間の死を考へたりすることをやめました。それより、そんな厭世的なことを考へなくていゝやうに、もつと愉快な生活がどうしたらされるだらうといふことを考へることにしました」

　すると、いまゝで、神々しさうに、輝いてゐた月の光りが、急に青ざめて、茶碗の缺けら程にしか眼に映らなかつたのです。

　もし、この晩、私がさびしさに堪えられなくて、F街に彼女を訪ねて行つたなら、淫賣婦として、S子に遇はなければならなかつた。一人の若い女性といふことに變りはないのだが、その町にゐることが、女に特別な名をつけさせたのでした。ちやうど工場が、そこにゐて働いてゐる人々を、勞働者としてしまい、學校が、そこにはいつて來る青年に、學生といふ名前を附けるやうなものです。

　S子を白晝、この町以外のどういふ場所へなりと出したなら、立派な一人の女性であつたのでした。そして、すべての女性が要求し得る同じい權利をこの社會に向つて要求することができたでせう。

早朝、私は、床の中で眼をさましました。まだあたりは寂然としてゐます。都會といふ大きな體をしてゐる動物が、やはり寒いので、脊中を圓くして、今日は、いつもよりかおそくまで、物憂さうに躊躇つてゐるやうに思はれたのでした。

そのうちに、どこかの工場で、汽笛が鳴りました。その笛の聲が、馬鹿に癇高く、神經質的にひゞいて、寒く、ちつとして靜かにしてゐる空氣を震撼させた。それは。宛かも細い、鋭い鞭を持つて、漠然と灰色の姿で眠つてゐる都會の脊中を撲りつけてゐるやうであつたのです。

不機嫌に、都會は、眼をさましました。

どこかを通る荷車の轍の音が鈍く軋り、そのうちに、線路の上へ、震動を波立たせて馳走する電車の逆音が、枕に傳はつて來ました。

いつの間にか、夜の間に下りた霜は、眼脂で兩瞼の塞がつたやうに、天地の間を白く閉ざしてゐます。私は、汚れた空氣を吸つたゝめに、重くなつた頭を曉の鋼鐵のやうに冷えた外氣に觸れて、鎭めようと考へ、窓を開いたのでした。

やがて眞赤な太陽が、霜の中から産れ出るやうに、地平線から上りました。

二人は、ブルジョアの男女がした戀愛の行程を模倣しようとしたのでありません。彼等から階級的に歪められた、變則にされた。複雜化された性欲關係から、少しの間だけなりと、解放されて、何の障害もない、大空の下で語り合ひたいといふのでした。

彼女の、指定した場處へ、私は、來て待つてゐました。約束の時間から、十分と違はずに彼女は來ました。いつか外出をした時に、二人が、半日程寛いで過すことのできた處でした。

背後は、工事のあつた時に、土を掘り取つたと見えて削り落したやうな崖になり、その上には、杉の林がうす赤みを

葉さきに帶びて風に動いてゐました。前方は、なだらかに傾斜をなして、南から、東北にかけて一帶の郊外の景色が見られ、空に燦々として燃える太陽の光りは、褐色に枯れた草の根をあたゝめてゐました。

この傾斜を降り盡したところは、平地になり、やがてまた遠く平野が拓けてゐるのに接してゐた。近傍に停車場があり、構内に停車してゐる貨車が見え、積まれてゐる材木までが鮮かに霞んで眼の下に集つてゐました。時々、客車を連結する列車が止つてゐると思ふと、やがて黒い煙を殘して出て行つてしまふのでした。

そんな時は、未練なく都會を振り捨て、新しい生活を求めて、あの汽車に乘つて行けるところまで行きたくなることもあるのでした。いま、私は、新しい生活を求めてゐます。

いはゞかうして、女と相對してゐるのも、また互に何をか求めるつもりで、語り合つてゐるのも、また面白くない時にも面白さうな顔付をするのも、怒るのも、笑ふのも、嫉妬するのも、みんな、新しい生活を求めようとしてゐるからで、どうすることもできない心の焦立たしさと、さびしさとが、心の底に、凝り固つてゐるのに、つくぐ堪えられないからです。

「昨夜は、ほんたうに寒かつたのね。なんだかあなたがゐらつしやるやうな氣がして、心待にまつてゐたのよ」

かう女が言ふ顔を、私は、明るい氣持になつて、見てゐました。

「僕も、行きたいやうな氣がしたが、考へて見て、止してしまつたんだ」

「さうなの……」

「また、あの男が來たかと、みんなに顔を見られるのが厭だからな」

彼女は、私には、何事によらず、常に、すべてを打明けるのでした。

この頃、足許に引摺りさうな黒の長いマントを被て、ハンチングを被つた、口髭のある靑年が、つゞけて三四日置に、三四回も遊びに來るのであるが、この前の時は、二圓五拾錢程の金を自分に向つて、貸してくれと言つたから、立替へてやつたことや、その靑年は、最近まで、勤めてゐたところを馘首されたのであるらしいことなどを話してから、

「どこか、男らしい人よ。だけど妾、あんな人、こわい氣がするわ……だつて、二人や、三人殺すのに、爆彈を投げて自分は死んでしまふのはつまらないつていふの……そんなことをしたからつて、この社會がどうなるものでもないから馬鹿らしいといふのよ。もし君達がこんなことをせんでも他のお孃さんのやうに、生活ができるやうになれるなら、いつでも自分は命を捨るといふの……」

「勇敢なもんだな」

「あなたは、いつたい憶病者よ」

「君なんかにも、そんなに見えるかい」

「顏なんか見られたつて、氣にしなくつて、いゝぢやないの」

「僕は、そんなにまでして、君にも、遇ひたくないのだ」

「どうせ、さうでせうとも……」と、言つて、女は涙ぐんだ。

私は、夜と、白晝に見るとでは、非常に觸感の異ふ、荒れた女の顏を見てゐるうちに、私自身に對する幻滅を感じて來ました。が、そんなら、いつたい人間は、どういふことに對して、眞劍にならなければならないのか。良心といふものは、どうした場合に於て働かなければならぬものか。いま自分は、眞實なシーンに觸れてゐるのではないのかと、自分

に問はなければならなかつたのであります。

「なぜ、泣くのだい」

「誰も、かれも信じられないんですもの」

「さういへば、みんなさうだが……全然、さうでもないだらう」

「あ、妾、ほんたうに、世の中がいやになつて、死んでしまひたくなるわ」

「みんな虚僞だから！」

「さうなのよ」

私は、この時、人によつて打突かる事柄はちがふが、誰でも眞面目であれば人生に對して同じやうに考へ、惱み煩つてゐると思ひました。死といふことについても、實行するとしないとだけで、一度は、頭の中に浮ぶ問題だと感じたのでした。

「黒いマントの男が言つたやうに、死んでしまつては、つまらないだらう。生きてゐればこそ、時々面白いこともあるのぢやないか」

「おんなじいことよ」

私は、その問題については、だまつてしまつた。夜々、窓の下の方から聞える、あのやるせない唄の節を思ひ出しました。

「さすらひの唄を知つてゐる？」

「えゝ、知つてゐるわ」

「歌つて聞かせないか」

「あなたお好きなの、あの唄を？……ぢや、唄ふわ」

彼女は、低調でうたひはじめました。私はだまつて、眼をつぶるやうにして、ぢつと耳を澄してゐた。なんといふ貧弱な、元氣のない唄だらう、青い、どこまでも明るい、廣い、空の下で聞くものではなかつたのです。やはり、壓搾された人々の住む巣箱から、彼女等が虐げられ、蹂躪された時、支配階級に對して、反抗的に歌はれてこそ、悲しくもやるせなくも、耳にひゞくのでした。

「妾、こんなところでは、さつぱり聲が出ませんわ」と、彼女も、それと悟つたらしい。

「あの汽車に乘つて、遠いところへ行つてしまひたいな」

「遠いところつて、どこ？どこへでもいつしよに行きますわ」

彼方のうすく煙つた地平線を望んで、私達がその先の海を越えて、知らない土地を漂泊する時の姿を空想の眼に描いたのでした。

ふと自分の後になつてついて來る彼女を振向くと、もはや新しい女ではない。私は、この汚濁した、弛緩しきつた女に、これから大陸の新生活が創められやうかと考へたのであります。そして、當惑げに、あゝ、いつしよに來るのではなかつたと後悔してゐる自分の姿をさへ、あり〳〵と見られたのでした。

「遠いところつて、どこなんですか」と、私の空想について知るよしもない彼女は、ふたゝび聞きなほしました。

私は、この時、他の空想に耽つてゐた。

自由を求めて、愛し合つた二人が、つひに相抱いて、河中に投じて死んだ、友のことを當時平靜に看過した自分は、

まだ友の達した境地へまでは、たどりつかなかつたからだと思つてゐました。話がもとにかへると、

「北海道……もつと遠い樺太へでもさ……」

晴れ渡つた、ひゞきさうな空の下で私は、かう言ひました。自分が、こんなに懐疑的でなく、もつと人間が強かつたら、今からすぐにも出發するのであらうと心に湧いてくる感激を惜しいものゝやうにさへ思はれたのです。

「どこへ行つたつて、同じことぢやないの」と、彼女は、ふたゝび言ひました。

「どうして？」

「だつて、同じことよ。どこへ行つたつていゝところなんか世界にありはしないわ」

「ぢや、どこでどうして暮すのも、同じといふのかね」

「さうなのよ」

私は、やはり絶望を感じたのです。成程、ほんたうにさうであるかも知れないといふ氣がしました。どこへ行つても、制度に變りのないところ、金のために人間は、苦勞をしなければならなかつたからだ。空想するやうな自由は、やはり死にでもしなければ他には、見出されるものでなかつたからです。

しかし、私には、死を感傷的な氣持で選ぶことができなかつた。

「いゝえ、妾、歸りますわ」

あちらの廣々とした野原へ、一面に日の光りが當つてゐました。けれど、流石に、その光りには、眼を射るだけの力がなく、微力な響きで、やはり冬だといふ感じを與へてゐました。白い建物が、日を浴びて、霞んでゐたけれど、ぱつ

とせずに、それすらくすんでゐました。そして、足許の焦色にさきのちゞれた枯草に吹く風は、冷たかつた。振り返へると、崖の上にベックリンの描いた「死の島」にある黒い木のやうな、杉の木が、陰鬱に搖れるともなく風に吹かれて動いてゐました。

彼女の歩るきつきが、どこか痩せた牝鶏の歩く時のことを、思はせたのは、その時に感じたことであります。若いながら、何となく痛ましい姿に見えて、遠ざかつて行つた、後影をばさびしい氣持で見送つてゐました。

「こんど、いつ、あの女に遇ふことであらう……」

私は、いまゝでも、顔を見るたびに感じたことであつたが、こんどばかりは、いよ〳〵これが、彼女との最後ではなからうかといふやうな氣がしたのでした。そして、私といふ、現實を樂しむことを知らない人間が、たとひ經驗にしては、はかないものであつたにしろ、彼女との關係は恐らく一生に於て、重要なものでなければならなかつたと考へられたのでした。

彼女と別れてから、私は、ある地點に來て立つてゐました。

專門の技術家でもない私は、生きるがためには、筋肉を働かすより、途がなかつたのです。部署をはなれた智識階級のみぢめさを感じながら、私は、生活の不安に戰いてゐたのです。

――暗渠――地下鐵道――工事のために、一群の人間が働きつゝあつたのを眺めてゐました。彼等は、働くといふよりは、永久に、地の底を掘らんために動いてゐる人間の群であつたのを知りました。

しかし、それでもいゝ。地底を掘るのだ。いつか壯麗を誇る、地上に構成された建築が、基礎的に、土壤から鍛へされる！ せめても、その日のことを夢想に描き、樂しむことによつて、私は、この群に入らうかと考へました。

それは、沈默の繪を見るやうな光景でした。彼等は、地を掘つてゐる。どこまでつゞくとも知らない深い溝渠の中で働いてゐます

何のためにといふことを、たとへ彼等自からは知らなくとも、この現實にかうした生活があるといふことだけは、たしかでした。

その人達は、ちよつと見たところ、丈夫さうに見えました。カンテラの火がその人達の顏を赤黑く色彩つてゐるからです。しかし、考へるまでもなく分るであらうが、太陽の光線は、そこへは一日たつても差し込みはしないのでした。生物が日の光りに晒らされなかつた時には、何うなるものであらうか。土鼠が日の光りを受けないことを却つて幸福と思つてゐるやうに彼等もまた信じてゐたであらうか。たとへ、幸福とは感じなかつたまでも、これを不幸と思はないなら、文明は、無智な者の上に怖しい、殘忍な犧牲を拂はして、平氣な顏をして笑つてゐるものです。

「結局、俺達は、この暗い方が、氣が置けなくていゝのだからな。それは、俺達になつて見なければ分らないことだ」と、その人達が腹の中で、言つてゐるやうに、私には、聞かれたのでした。しかし、それは、皮肉でなかつた！

その一つの理由は、きら〱する日光の眩しく流れてゐる。表面へ出ることが怖しかつたからでした。地上にある一切のものが、――物質、機械、機關、法律――それ等が、曾て、彼等を脅かした記憶が尙ほ新しかつたからでした。よし、街のある處では、面白さうなことが催うされたり、そこへ行けば、人間等の愉快げに狂つてゐる有樣が見られ、また、ある場所へ足を向けさへすれば、そこでは、見たいと思ふやうなものが見られ、また、いつでも自分の欲するやうな欲望が充たされたのだけれど、その世界を彼等は、振り向かうともしなかつたのでした。

曾て、彼等も、その世界を戀しがつたことがあつたのです。虛僞であり、假面であり、どこを探つても、溫かい血潮の流れてゐない世界を！今では、これに誘惑を感じた時分の自分を呪ひでもするやうに、暗い地の底に動いてゐる。その方が、どれ程、自分達の生活にぴつたりと合つてゐて、眞の氣樂さをさへ感じられることか？……かう、默つてゐる彼等を解釋するのです。

翌日も、私は同じ處に來て、彼等の働く有様を見てゐました。何人か生活の轉機に立つて、自から擇ばうとする、仕事の意義を考へないものがあらうか。

たゞ、その人達は、默つて地中を掘つてゐた。

この溝渠の一端は、遙かに都會を出端れて、海岸にまでも達してゐました。そこまで來れば、無心に日の光りに輝いてゐる海が見られた筈です。

海は、この溝渠について、別に、驚きの瞳を見張りもしない。永劫に明滅した變化に較べれば、何でもないことだつたからです。たゞ時々、その坑の中から、泥にまみれた人間共が這ひ出て來て、兩手を高く空にさし擧げながら、海の面に向つて欠伸をするのを見たのでありました。

その人達は、疲れたといふ風に、砂原の上へがつかりとして横はる。そして、またいつの間にか、知らぬうちに、彼等の姿は二たび溝渠の中に隱れて見えなくなつてしまひました。

ちやうどこの時刻に、街では、劇場が開幕されて、舞台に古代の風景や人物を見せてゐました。華やかな近代的の女と男とが、暗黑時代の奴隷解放前の野蠻な風習に對して、奇異と怖れを感じながら可愛らしい歎息をついてゐました。幕の切れ間には、其等の男女の笑聲で、劇場の中がいつぱいになつてゐました。この興行がまた餘程の人氣と見え

て、劇場の外部まで人間が集まつてゐます。その人達は、眞物の芝居を見ないまでも、せめて看板繪なりと見て享樂し、時を過さうとしてゐるのでした。

人生の一切は、生存の時間を殺すことにありといひながら、何たる矛盾したことでせうか。

私は、思つたのです。

――それはいゝが、地上に浮動する萬象が、そこに統一があるかといふのに、統一といふものがない。自動車は、こんなことに關係なくあちらの街頭を駛つてゐたし、こちらの横丁を赤い衣物を着て、鳴物を叩いた廣告の行列が過ぎ、そのあとから、子供等がぞろ／＼とついて行つた。………たとへ統一はなかつたけれど、すべてがたゞ同じ目的のために、しかも私利、自慾の目的のために、動きつゝあつたといふことを何人か、否定できよう？ そして、彼等には、統一はなかつたけれど、また眞の自由もなかつた。――

街には、虛僞があり、地の中には、苦惱がありました。あまりに、私は、そのことを知りつくしてゐる。青空の下に求めた、ロマンチツクの夢が消えたなら、カンテラの赤黒い火を見て奇怪な幻想を描くべく、むしろ默つて、虐げられ、忍從して、私は、暗い土の中で働くべく、彼等の群に、明日から、仲間いりをしようと決心しました。

――一九二六、一作――



長篇　この三つのもの

佐藤春夫

七　北村の告白

僕がお八重と結婚をしたのは、今から足かけ六年前のことである。あれが十九かそこいらで、僕は二十九だつた。さうだ、ちやうど今の君の年輩だね。僕の遊蕩時代の絶頂だつたが、僕はやうやく志を得て、文名は一作毎に高まるし、金は自由になるし、到るところで勝手氣儘なことをして遊び暮してゐたのだ。東京での遊びは飽きてしまつて僕は關西まで遊びに出かけた。さういふ方面の借り倒しも隨分あるし、高利貸からもひき出した。そんなことをしてもういくらか遊びに飽きてゐるころになつて、僕はふと向島の土地でひどく氣に入つた女にぶつかつてしまつたのだ。放縱な女だつた。勞れるといふことを知らない奴で、どの方面にもさうだつたが、殊に花をひくのが大好きで上手でもあつた。才氣のある女だつた。尤も、もう年もとつてゐて僕よりたしか二つぐらゐ上だつた。三十越してゐたのだが、心持も

色艶も十ぐらゐは若く見えた。さういふ奴だから、それまでにも旦那を持つたことも一度や二度ではなかつたのだが、いつもずぼらで失敗するのだ。花の借金などで旦那の手をやかせるのだ。それでも神妙に侘びでもいふのならまだしも、何かといふと啖呵をきつてしまふやうな女なものだから、ちつとも尻が落ちつかないでゐたのだ。その女に僕はすつかり打込んでしまつたのだ。僕がそのころ描いた妖婦や毒婦はみんな、その女から暗示を得たものなのだ。お雪なんぞの比ではない。智恵の働く女さ。さういふ點がお雪とは違ふ。お雪はあれで年のせいもあるが、あんまり頓狂すぎるが。

僕は向島のその女―勝子といふ名なのだが、それと結婚をしたいと思ひ出したのだ。僕は一たい、地道な結婚などといふものには何の興味も抱いてはゐなかつたのだが、一つにはそれほど遊蕩に飽きてしまつて居たのでもあらう、勝子を見てゐるうちに、この女となら結婚してもいいと思ひ始めたのだ。それを勝子に打ち明けると、女は承知しなかつたのだ。藝者などといふものは一緒に遊ぶもので女房にする者ぢやないと言つた調子で、まるで取合さうにもなかつたのだ。僕は藝者か何かでなけりや女房にする氣はないといふと、勝子はそれでも自分は年が上だからいけないと言ふ。それに勝子にはその時もやつぱりひとり旦那がゐたのだ。その旦那といふのがまた勝子に目が無いので、女がいくらだらしのないことをしても大目に見てゐる上に、金放れも惡くないものだから、さういふ點でもさんざ迷惑をかけてゐるといふので、さすがの勝子も、この旦那はおいそれと別れられなかつたものと見えるのだ。最後に勝子は、それぢや自分にひとり妹があるが、それを女房にしてやつてはくれまいかと言ひ出した。以前は、前橋市でやはり藝者をしてゐたのが土地の相當な商人に引かされて妾になつてゐた。近ごろ旦那に死に別れてひとりでゐるのだが、それならば年もまだ二十にはならないし、器量も若いだけに惡くはなし、その他の點でも自分を女房にするよりは、その妹の方がどれほど適當だかわからない。大丈夫、あなたの氣に入る。とさう勝子が言ふのだ。その女といふのは、前橋では姉の本名

をそのまま藝名にして、勝子と名乗つて出てゐたといふことであつた。

僕は勝子の言葉を信じたのだ。また勝子の妹ならきつと好いと思ひ込んだのだ。若いもつと生々とした勝子を僕は夢想してゐたのだね。それで前橋のことをよく知つてゐる或る男に、その土地にゐた勝子といふ藝者の噂を聞くと、それは土地では第一の藝者で、器量もよければいかにも藝者らしい藝者だと言ふのだ。僕はつひうつかり信じ込んでしまつたのだ。僕はまるで本人も見ないで結婚することに決めてしまつたのだ。馬鹿々々しい、僕は自分の空想と婚約したんだ。それがお八重さ。

よくも知らなかつたのだか、それとも知つてさう觀察したものだか、お八重のことを藝者らしい藝者などと、よくも出鱈目を言つたものだと思ふと、僕はそれを聞かせた奴を時々腹立しくなるよ。――可なり、いろんな事が判る筈の男だつたからね。それでうつかり僕が信じてしまつたのだ。もともと僕自身、勝子の妹といふ考へが根底になつてゐたものだから。

お八重が來て、一週間とは經たないうちに僕はすつかり後悔してしまつたのだ。勝子の妹どころではない、まるで反對の女なのだ。顏容もさうだが、心持に到つてはもつとひどい。恐らく僕の最も好かない型の女だつたのだ。藝者をしてゐたといふから、ことに藝者らしい藝者などといふから、そのつもりでゐたら全く何一つ知らない氣の利かない女なのだ。君に言はせたら素朴とでも言つたかも知れないのだが、まるで荒削りの、それこそ薪雜棒のやうな女なのだ。恐らく、その當時のお八重を見たならば、君だつてその山出しには閉口したらうと思ふ。いくら田舍の小都會だと言つて、あれが藝者らしい藝者などと、本當に僕は時々思ひ出しては、その言葉にまで腹が立つたくらゐだ。(話手は思ひ切

つて眉をしかめてゐたが、ふと氣がついたやうに、苦笑によつてその顏面を和げた）その點に於て今日のお八重はずつと增しさ。あれでも多少は神經を使ふ術を覺えたものだ。神經的（ナアバス）になつたせゐでいくらかは洗煉されて來た。――この意味でなら、僕の冷酷な仕打もお八重を磨くみがき砂ぐらゐな役には立つてゐるよ。ね、赤木淸吉たるものここでも亦僕に感謝して然るべきだと、言ひたいね。僕が辛くしたばつかりに君は、お八重を好きになる。しかも、お八重はその間に洗煉されたと來てゐるのだからな。

冗談はともかくもとして、全くあれは無神經に近いやうなたわいのない女だつた。尤も、うすぼんやりだけに、心持には溫味はあり、またすれつからしてゐないだけに品位もなくは無かつた。しかし、その品位なるものも溫情なるものも、僕のやうな男にとつては終に何の値打もないのだからね。僕はあれにはすれつからすだけの智惠さへ無かつたのだと思ふね。僕はあれの瞳を見てゐると情無くなつたものだ。茫として濁つてゐるのだ。あれは僕のところへ來る前年か何かにチブスに罹つたさうだが、それ以來あんなに白痴的（イデイオテツク）になつたのぢやないか、などゝ僕は考へたりした。實際あれの瞳が示すやうに、お八重には深い情操などありはしないのだ。あれが死に別れたといふ旦那といふのは、聞けば、隨分お八重を可愛いがつたものださうだが、あれが僕のとこへ來たのは、その男が死んで間もない頃だつたのに、お八重は全くけろりとしてゐるのだ。お八重も生前には懐いてゐた男らしいのだのに、それがこの世にゐなくなつてしまふとお八重は、そんな人なんぞ世の中に無かつたのやうにけろりとしてしまつてゐる。深い情操のない證據だ。だから、今、僕があれを捨てたところで、いづれは遠からず、あれはけろりとすると信じてゐる。いや、お八重が死んだ旦那を忘れてゐるといふのは、それが僕のところへ來て遠慮してゐるのではない。それならば僕ほどの感じのある男だもの、直ぐ氣がつく筈だし、お八重はまたお八重で、內に在る感情ならそれを包んでゐるなどゝいふことが出來る筈もないの

だ。さういふ點で、僕は何から何までお八重が氣に入らなかたのだ。さういふ女をつひうつかり一生の女房にしてしまつたと思ふと、男のなかでも女には就中無關心でない僕だけに、それや全く煩悶したのだ。

お八重は藝者をしてゐた當時から、もうひとりやはり熱中してゐた男がゐたさうで、僕と新婚した時にもそれが祝ひか何かに一度遊びに來たことがあつた。向ふぢや、勝子か誰かからさばけた人間だと聞いて、それぢやといふつもりで訪ねて來たらしいのだ。何でもそんな事を言つたよ。遊びに來るのはいくら來たつて構はいのだが、僕とその序に友達にでもなりたいといふのでは僕はまたそんな野紳との交際は眞平なものだから、挨拶を交すと別に友達が來たのを幸、場を外してそとへ出てしまつたのだ。さう〳〵。するとその一緒に外出した友達といふやつが、これがまた人の氣心など一向知らない馬鹿なものだから、僕が女房の古馴染を見て氣を惡くしたとでも思つて、そんな口ぶりで僕を揶揄したものだ。僕はカッとなつて、そいつを散々馬鹿呼ばりしてやつたが、すると、その友達がひどく、氣の毒なほど悄氣てしまつた事があつたけが、それといふのも、僕がお八重をそれほど氣に入らなかつたから、それが人に知られないのが腹立しかつたのだ。僕は一そ、何もかも打明てその男に——昔馴染の客にお八重を引取つて貰はうかとさへ思つたぐらゐだつた。お八重は何とも思つてはゐなかつたらしいが、その男の方では一とほりではない執着があるらしかつたしね。お八重にでも惚れる男があるのかと思ふと、僕はをかしかつたよ——いや、君も現にその仲間なんだから、あまりひどい事を言ちや惡いのだ。

僕はその後もながい事、その男のことを思ひ出して、なぜあの時、思ひ切つてさうしなかつたらう、さうすればその男だつてうれしかつたらうし、お八重だつて僕のところにゐるよりはずつと幸福だつたらうに、と度々思つたのだが、その男ももう死んでしまつてゐたのだ。僕がいよ〳〵お八重を持てあます頃にはね。

それに、お八重は僕のところへ來ると直ぐさまユリ子を姙んでしまつたのだ。それがまた、實に運命の皮肉ではないか、婚禮の當夜に出來たものなのだ。といふのは、僕は女房をもつても子供だけはどうしても持ちたくないと思ひ込んでゐたのだから、直ぐに避姙の方法を講じたのだ。しかし、さすがに婚禮の當夜から、そんな不自然な行爲も憚られるやうな氣がして、たつたその一晩だけは自然な方法をとつたのだ。それが意地惡くさういふ結果になつたのだ。だからユリ子は來ると直ぐに生れたわけだが、僕のおふくろなどは、當初のうちしばらく僕が藝者あがりの女などと結婚したのがひどく不服な折からではあつたし、ユリ子のことをお八重がよそから持つて來たやうな事まで、僕に匂はしたりした位だ。それや、僕はお八重を好いてこそはゐなかつたが、そんな、母のいふやうな魂膽などのあり得る女とは思へなかつたのだからね。いや、寧ろ、そんな魂膽など寸毫もないお八重が、僕にはこの上なくつまらない者だつたのだ。君は僕の事を、デカダン氣取のくせに病氣に惡いと言へば好きな酒までやめてしまへる平凡な男だと評したことがあつたが、その他の事では僕はあたりまへの男だが、女の好みにかけては僕は自分の創作のなかで自分を正直に告白してゐるんだ。―僕は男を弄ぶやうな妖婦いや毒婦的でなければ、女として何の價打も感じないのだ。この間の消息は君にはとても窺へまい。君にはさういふ分子が絶無らしいからな。僕は肉食家だし、君は菜食主義者らしいよ。さういふ僕にとつてお雪といふ女があるのだ。

お八重とお雪と。君はこのふたりの事を、よくもあんに似ても似つかない姉妹があると思ふだらう。そのとほりだが、勝子とお八重との相違も全くそのとほり――いやもつとひどいくらゐだ。つまり、勝子とお八重とはそれほど違ふのだが、お雪と勝子とは、これはいかさま全く瓜二つと言ひ度いほど似てゐるのだ。僕は最初から、勝子が駄目ならお雪を女房にすればよかつたのだ――いつもいふとほり。尤も、そのころお雪はまだ十五だつたが……

（北村はこゝでしばらく口を噤んだが、また話し出した）全く、お八重たちの兄弟や兩親を見てゐると、不思議な感がするね。一たい、その兄弟といふのは勝子を頭にして男が三人と、女が、三人、四人、五人、さうだ五人あるんだ。そのうち男がひとりお八重のすぐ上が死んだのだが、これは音無しい人物だつたらしい。長男も僕は見て知つてゐるが好人物だ。一番末の弟だけが、男のうちでは放蕩者らしい。姉の勝子のうちにゐて箱屋をしてゐるんだからね。女のうちでは勝子がさつきもいふとほりだし、それにお雪があのとほりの女で、外に一番末のはまだ子供だし注意してもみないが、お八重の次にもうひとりまるでお八重のやうなタイプなのがゐるのだ。小料理屋の女中か何かつまらない事をしてゐるのだが、これがどうしてだかそんなことをしてはゐるが、所謂心がけのいい女で、お雪などはその姉の――お雪のすぐ上だか――貯金を時々出鱈目を言つては卷き上げたりするらしい。お雪のいふことなどを眞にうけるやうな女だけに、兄弟思ひで、盆暮などにはこちらからは滿足にも扱つてもやらないのに、僕の家などへも心づけをしたり、お八重を訪ねて來たりする。これを亦僕が大嫌いなのだ。身分の事やなどをいふのぢやない。性が合はない。まるでそつくりお八重なのだからね。このとほり、あれの兄弟は白と黑とのやうにきつかり二組に別れてゐるのが不思議だなあ。一たい、親父といふのが大のお人好しで、喜んで女房の尻に敷かれてゐる性質で、ろくに口一つ利けないやうなところへ持つて來て、おふくろといふのが、これが惡い奴だね――僕はさう思つてゐる。なかなか一筋繩では行かない女だ。お主は馬鹿にする、子供たちは片つ端から藝者にでも何にでもして、自分ひとりは左團扇でゐたいやうな、それで口はなか〳〵巧いのだ。お雪や勝子などはみんなこのおふくろの血を引いてゐるのだ。お八重やあれの兄などは、どうも親父にそつくりだね。そのくせ顏はといふと、お八重はおふくろにそつくりなんだぜ。遺傳の法則だか何だかは知らないが、實にへんなものだ。――人事（ひとごと）ではない。僕はまた僕で、うちの親父のやうな人間の子なのだからなあ。僕の親父はといふ

と、永年、株式の仲買などをしてゐるくせにつき合ひにさへ茶屋酒一つ飲んだことのない男なのだ。女といへば恐らく女房より外にはひとりだつて知るまいよ。まるで滑稽で悲慘なほどだ。根が見込まれて養子に來て、家附の娘に大切に仕へた男だ。そんな人物だから、無能で財産は事毎にすつかり擲つてしまつた。それをまた女房にひどく氣兼してゐてどうかして盛返さうとした一生だつた。自分で下手な洋食などをこしらへては僕などに食はせたりするやうな、可哀さうなほどの人なのだ。が……。尤も、僕のもおふくろの方はやつぱり多少、我儘なところはあつた。生粋の江戸猾で、人に聞かれると僕なども子供の時分にはちよつときまりの惡いやうな鐵火な口調で親父などをやりこめてゐた。が、僕は、親父よりはおふくろが好きだ。…………

——そんな事は、この際、どうでもいい事だつたが。で、お八重だが。——お八重は君、さういふ風に僕に嫌はれながら、僕の子供を姙んだのだ。腹の大きくなつてゐる女を、それも來たばかりで何の落度もないのに、ただ氣に入らないとばかりで出してしまふことは、これは僕にもさすがに出來なかつた。でも、僕はどうしても我慢し通すことは出來ないのはわかつてゐた。だから、子供だけは引取つて、そのうちに別れようと思つてゐるうちに、子供が産れて、それがしかも實に僕に似てゐるのだ——淺ましい程似てゐると誰かが言つたつけが、本當に生れた時からそのとほりなのだから、僕の親父はもとよりおふくろもひどく喜んでしまつて、初めはお八重を不滿だつたらしいおふくろまでが、だんだんお八重を大事にし出したのだ。それは間違ではない。僕のやうな亭主には氣に入らないと逆反例で、僕の親父のやうな男や、我儘でも根は單純な僕のおふくろのやうな姑には、お八重は全く向いてゐる嫁には違ひないのだ。この點は、君、保證するが、假りに君があの女を君の家庭へつれて行つたとして見たまへ、君の兩親が非常に例外な人たちでない限りお八重はきつと氣に入るよ。ともかくもお八重は後世大事に努めるからね、それや、影日向などのあるのぢや

ない――もともと、例の家蕃だからね。お八重がそのとほり僕の兩親に氣に入つて來る事が、ごく自然なあたりまへなわけで、別にお八重が努めて取入つたわけでないことが萬々判つてゐながら、僕にはそれがひどく小癪なのだ。くそ忌忌しいのだ。氣の合はないといふのは困つたものだ。事毎にいけないのだからね。それに僕としちや、さうお八重が兩親に氣に入られちや、尙のこと別れることが困難になるわけだからね。さうなれば、もと〱理由はないのだから、氣に入つた兩親はお八重を離したがらないにきまつてゐるのだ。さうかうしてゐるうちに、僕のおふくろが病氣に罹つてしまつた。病氣は丹毒だつた。

結局、僕の母はそれで死んだのだが、病氣が重態になつて來るに從つて、お八重は全く懸命で看護をし出したのだ。生れたばかりの乳飮兒を片方に抱えてゐながら、あれは本郷からの下町の父母の家まで朝晩二度も通ふのだ。それを見て僕は全く困つてしまつた。今にも別れたいと思つてゐる女に、この上にもそんな義理が出來たとなるといよ〱難儀だと思つたからだ。僕は母のは傳染病だから看護婦に任して置けと言つた。お八重は聞かない。死んでもいゝといふのだ。そんなら自分はそれでよからうが、衞生の知識もありもしないで病人の傍へ行つて來て、うつかり子供に乳をやりでもする時に、萬一子供にでも傳染させてはどうするのだとも僕は言つた。僕自身子供などは死んだ方がいゝと思つてゐたのだが、お八重がひどく子供を可愛がるものだから、足をとめようと思つてさう言つたのだがね。それでも、何と言つてもお八重は、僕の母の看護を思ひ切らうとはしない。僕は仕舞ひに意固地になつてしまつて、理窟も何もやめて吐鳴りつけて怒ると、あれは僕の眼を偸んで行くのだ。初めは僕の氣に入りたくつてそんなに努めてゐるのかと思つたのだが、もうかうなつて見ると、あれはたとひ僕の氣にさからつてもやり度いのだ。つまり僕の母に對する眞情だと僕にも解つた。僕はもうそれ以上には何といふことも出來なかつた。それ程だから、僕の母は、一たいが氣の勝つたへん

に口に出して禮など言へない人だつたのに、その臨終ではくれぐれもお八重に感謝したさうだ。僕はその死際には間に合はなかつたのだから、あとで傳へ聞いたのだが、それは正しくさもありさうなのだ。僕の母といふのは感じ易い女だつただけに、心からうれしかつたのだらう。母ばかりではない、それをまのあたりに見た親父がまた、お八重の獻身的な態度にすつかり感激してしまつたのだ。母がゐなくなつて氣の弱くなつた父は、それ以來誰よりもお八重を賴みにして、お八重を相手に淚を流したりしてゐるのだ。實の娘のやうにお八重を好いて、お八重も大へんに親父を慕ふて、憫んでゐたのだ。全くのところ僕の親父とお八重とは、そりの合ひさうな二人ではあつた。僕はそれを幸に、お八重を下町の親父の家へ手傳ひに出すことにしたのだ。母のなくなつて締りのつかない家政を見るやうにと、お八重を父の家へやつたのだ。さうしてお八重には一週間に一度だけ本郷へ歸つてもいゝと云ひつけた。――それからの僕の生活は別に言はずとも、君は知つてゐるだらう。君と知り合つたのは、ちようど、その頃の事なのだから。

で、君の知つてゐるとほり母が死んでからまる二年後に、僕の親父が病みついた。母に死なれてから親父はげつそり衰へたのだ。あのやうな夫婦は、たしかにひとりになつてから生き永らへるなどといふことは不可能だ。母が亡くなつた後には親父は全く影のやうにしか生きてはゐなかつたのだから。で、年はまだそれ程でもなかつたのに、親父も死んでしまつたが、その時のお八重の看病振といふものは、殆んど手一つで、あの氣の利かぬお八重がよくもああやれたかと思ふほどだ。親類の人間なども皆、お八重を讚め者にしてゐる。さうして僕がいい女房を持つた事をみんなでそやし立てるのだ。僕にはほんとうに擽くて我慢がならない。それや、僕はお八重には感謝はしてゐるのだ。あの女房がゐなかつたならば、僕の父も母もともかくもああは滿足して死ねなかつたかも知れないと思ふ。ことに父の二年間の孤獨はきつとお八重に仕へられずには我慢出來なかつたらう。僕はこのとほりお八重に感謝してゐる。この點は、君からも充

分お八重に言つて貰ひたい。しかし、これほど感謝してゐながらも、それがどうしても愛情の礎にならないのだから、今更、君の説得やなどで、それがどうにもなるものではないのだ。この點も君からよろしく述べて貰ひ度いものだ。感謝はしてゐる氣の毒だとは思ふ。いいかね、それは理性の仕事だよ。惚れるといふこととは別の作用さ。全然、別の作用だ。――今までにも、お八重が、もし少しでも悧巧な女なら、僕の愛情を増さないまでも、ともかくもどうにか繋いで置くほどの機會はいくらでもあつたのだ。しかし、いや、もうこれを機會にすることは出來ない。今度のはもう別れる機會にしかはならないのだ。僕はあの女を愛する義務があると思へば思ふほど我慢しにくい。結婚した當時に、あの藝者時代の馴染の男にお八重を引取つて貰はなかつた事を、その後いく度も後悔したやうに、僕は今日、お八重を君に引取つて貰はなければ、きつともつとひどく後悔する日が來ることは解つてゐるのだ。君が、お八重を愛してゐてくれることは、だから、僕にとつては此際、この上ない仕合せなのだ。お八重にだつてもさうだ。君に愛せられることはあれの幸福さ。

序だから、お雪のことも君には言つてしまふ。この點はまだお雪とも相談しなければ、お雪が何といふかわからないが、僕としてはお八重と同棲しつづけるよりも、お雪と結婚することの方が本當だと思ふのだ。世間の形式はともかくも、僕はお八重との方が事實として夫婦らしく暮して來たのだ。君は、いつからそれを氣がついてゐるかは知らないが、それは今日此頃の出來事ではないのだよ。ふるい事だ――僕の母が死んでから間もない事だつた。事實はその時だが、もつと早く、僕がお雪を僕の家へ連れて來る時から僕は、既に充分の下心を持つてゐたのさ。若い女を藝者家などへ置いて置いては駄目だ、教育してやると言つたのだがね。實際、どうせお雪を勝子のところへ置いて置いたところが高がくだらない不見轉藝者ぐらゐにしかしはしないのだ。お雪はまだほんの小娘だつた。少年とも少女ともつかないや

うな肉體をしてゐた。僕には女ではあのころの中性的な樣子が最も魅惑的なのだ。僕は、さうして、お雪に就ては遠大な志を抱いたのだぜ。君たちが彈劾するお雪のあの性格は、先天的素質の上へ、僕が妖婦としての教養を傾注したのだ。僕は思ひのままの女一疋を創造してみようと案出したのだ。お雪はこの意味では僕の分身なのだ。ただの情婦などといふものではない。だからこそ僕は、お雪が橋やその外の男などを澤山相手にしたところが、何とも思へやしない。それこそ上手な料理人が、客に自慢の料理を一皿出したやうな氣持だ。お雪にうつつを拔す男を見ると、僕が征服してゐるやうな滿足をこそ感ずるが、僕自身が何物かを失つてゐるやうな氣持などは卵の毛ほどもありはしない。判るまいよ、君には。それを君に判らせようとも思はない。ただ、思ひかへすには、あまりに古い間柄だといふことと、あまりに奇妙に深い關係だといふことだけは知つて貰はなけや困るのだ。僕は、それやこの爲めには出來るだけの努力をして、世の中の目をかすめて來た。お八重などの目を怖れたのぢやないのだ。わかつてしまへば快樂は失はれるからだ。それをよく言ひつけてお雪にも努力をさせた。根がああいふ女だから、さういふコツを會得するのはわけのない事だつた。素知らぬ顏をしないで、わざと目にあまるやうに甘つたれて振舞せたのだ。世間の奴等とは反對の方法だね。どうだ、君はいつさう氣がついたか知れないが、自分で甘いものだつたとは思はないかね。（北村は、その時、腹の底から出るやうな聲で笑つた。外光から遠い部屋はもう夕闇が迫つて來てゐて、この不敵な神を怕れない言葉をどういふ顏つきで彼が言つたか、聞手なる赤木滿吉はそれを見ることは出來なかつた）僕たちのこれらの事を今までに、確實に睨んだ人間は恐らく四人しかないのだ。ひとりは、遲蒔ながらも先づ君さ。それからもうひとりは、勝子だ――さすがにああいふ世界へ住んでゐるだけに蛇の道はへびだと思つたね。うす〳〵感づいたのは早かつた。何しろこれは惡い才の勝つた奴だ。だから僕はそれ以來勝子のところへは近づかない。お雪には時々さぐりを入れるらしいのを、お雪は怪しから

ぬ事をいふといつて、小ひどく逆襲してゐるのだ――その方法はやつぱり僕が仕込んだのだ。だが、やつぱり勝子には太刀打は出來さうにもないよ。もうひとりは君の知らない男だが、これはまた鋭い眼光だつたよ。事のあつた前後をきつぱり指摘出來るほど早く明確に見拔いた。僕はただ、無心に笑つてしましたが、その男は恐入つたらうといふ口調で、僕に肉迫したのだ。僕も内心では兜を拔いだがね。その男は間もなく官命で外國へ行つた――高等學校時代の友人だ。もうひとりを誰だと思ふ。それは、ここの竹中の細君だぜ。竹中夫人は僕に直接さう咎め立てた。あの女はね、實は少々、僕に惚れてゐるやうなところがあつて、事實は何もありやしないが、昔そんな噂の立つた事があつた程だがね。だから、僕の動靜には目を光らしてゐる。それにお八重を妹のやうに可愛がつてゐる。お八重が何にも知らない女だし、それに素直だから引立てるのにちやうどいいのだ。で、僕とお八重と結婚の當座などは、よく衣物や帶などのお揃ひなどをこしらへて、僕の家内だ。自分の妹のやうなものだ。と言つて引つぱり歩いたりした。さういふ間柄だから、お雪とのことも直覺的にかんづいたのだ。賢い女だからね。せめてお八重がその半分ぐらゐ賢ければなあ。で竹中の細君が或る時、どうださうだらうといふ樣子で詰問した事がある。僕は、その場は以ての外の一點張で逃げてしまつたが、それでもまだ疑は晴れないと見えて、もしお雪がここの家へでも來るやうな事があれば、決していい顏はしないのだ。口ではお世辭は言ふけれども。だから僕も用心をして一切お雪はここへはつれては來ない。――さういふわけで、實のところ、僕としては、お八重に何もかも知られるより、竹中夫人に今更實は以前からかう〳〵であつたと泥を吐くのは、これが一番のことだて、ね。さうだらう。ともかく、一旦、先方がむきになつて詰問したものを、以ての外などと辭退してしまつてあるのだからな……。でもそんな事は今の場合仕方がない。

調子に乘つて、つまらない事まで喋つてしまつたが、君の言はうと思ふことはわかつてゐる。もう何も言ふ必要はな

い。僕のことは僕にさせてくれ。君は、さうしてお八重を憫むなら、どうにでもして、僕などはこの際眼中に置く必要のないものとして、あれの幸福になるやうに一つ謀つてみてくれ給へ。僕だつて、あれの不幸を望んでゐるのではない。僕がしてやることが出來ないだけで、幸福は祈つてゐるのだから。ね、だから、僕と何か押問答をするひまに、一つ、お八重の身に就ての君の考へを聞かせ給へ。君の心持をよく聞いたらば、僕もこの場合、安心が出來る。つまりはお八重に對する後事を托せるわけだ。また僕が君の心持をお八重に傳へることも出來る。僕は、今は、このとほり何もかも言つたのだ。

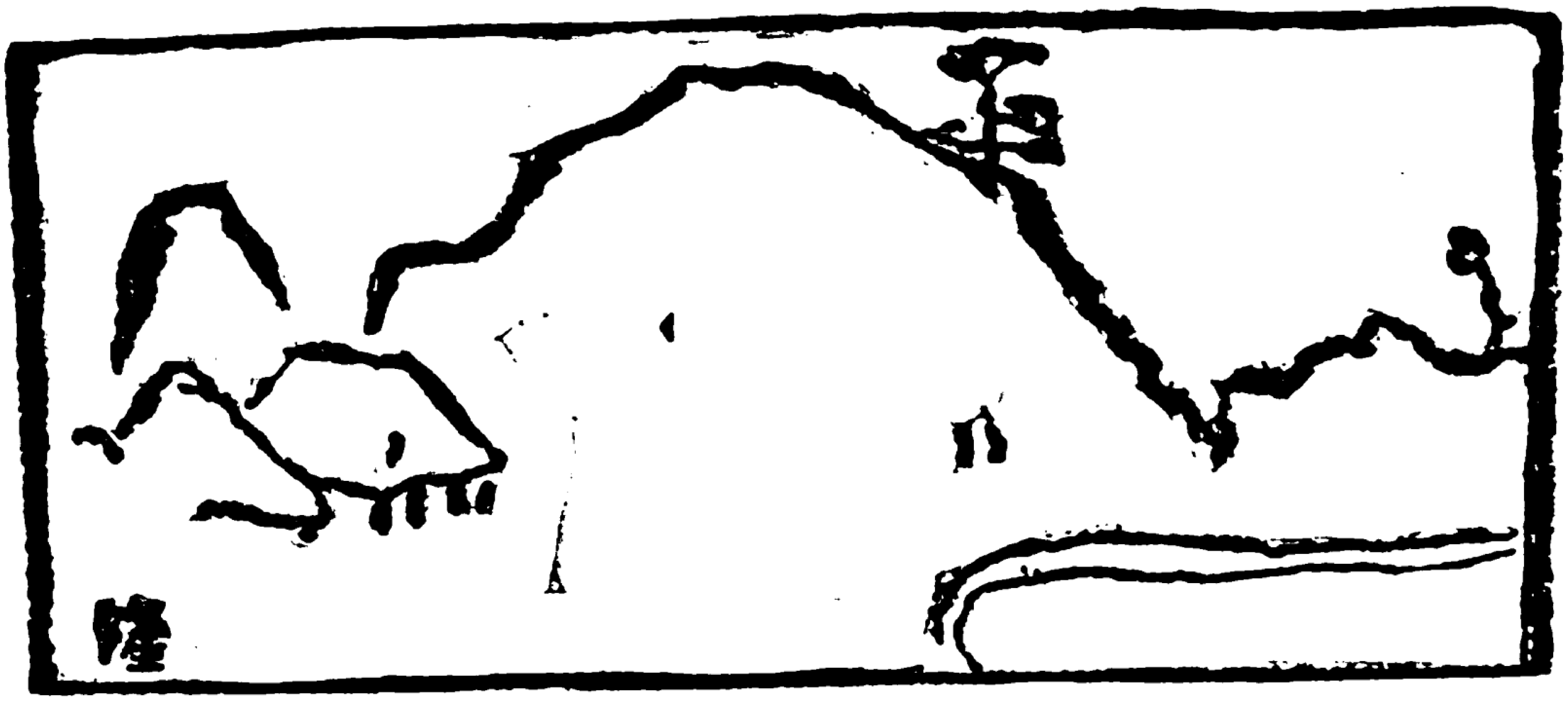
* * * * *

北村は話し終つて、うす暗がりのなかに、懐中時計を出して覗いた。赤木も同じように彼自身の時計を出して見た。その動かない少さな針を發見するまでは、赤木は彼の時計が、臺灣の戰地で壊れてしまつたきり、まだ直してゐるひまがなかつた事を忘れてゐた。

「何時だ――僕のは駄目だ」と赤木は言つた。

「五時だ。五分ほど前だが。五時半ごろには芝居小屋へ行つてみなけやならない。思はぬ長談義でありましたな」北村はあとの一句を、また例の知人の口眞似でわざと切口上に白めかしく言つた。

(以下次號)



或る犬の品評會

武者小路實篤

口上役

之は批評家を非難したものではありません。又批評家を讃美したものでもありません。批評家は常に生眞面目であることが必要かも知れませんが（そんなことは本當はないのですがね）作者は時々欠伸をしたり、冗談を云つたりしてもいゝものであります。それでは之から始めます。

（退場、黒幕とれる。一疋の犬中央に寢そべつてゐる。甚だ無格好な犬である。犬の形はつゞいて話される會話で想像してほしい。審査官達七人助手登場。皆滑稽人種なり）

A。今度はこの犬を御願ひします。之は當審査會に出品されたものの内でも優物の一つと云ふことになつておりますから特に丁寧に御審査を願ひます。矢張り尻尾の方から御審査を願ひたく思ひます。頭から審査するのはこの頃は時代おくれだと云つて大へんいやがられますから。

B。勿論です。尻尾からか、後足から審査されるべきです。それでは御説に従つて尻尾から審査することにしませう。皆さん異論はないでせうな。

他の人達。無論、異論はありません。我々一同は現代人のなかでも現代人であります。

B。それでは尻尾のながさをおはかり下さい。

A。承知しました。尻尾のながさをはかつてごらん。

助手。はい。（尻尾を丁寧にもちあげはかる）三尺四寸五分六厘あります。

B。それは正確でせうな。

助手。正確です。

B。少し力入れて引ぱつて見て下さい。

（助手引ぱる。犬なく）

B。いくらのびました。

助手。六分のびました。

B。六分のびましたか。それでは弾力性に富んでゐるとは云へませんな。

C。一寸ちゞめて見て下さい。

助手。ちゞめて見ても、ちゞまりません。

C。矢張り弾力性がとぼしいですな。

A。弾力性がとぼしいと云ふことに異論がある人はありませんね。

二三人。ありません。

A。それなら尻尾のながさは三尺四寸五分六厘ありて、引ぱれども六分よりのびず、ちゞめて見たれどちゞまらず、故に彈力とぼしとかいておいて下さい。

書記。承知しました。

A。それから尻尾の長さはどうですか。之でよろしいか。

D。少し長すぎはしませんか。

B。僕はさうは思はない。この犬の尻尾がもう五寸ながかつたら僕はこの犬を一等にする。なぜかと云ふと、それはレコードをやぶることが出來るから。だが（帳面を見）三尺四寸五分六厘ではまだ徹底し方が足りないと思ふ。どうせ尻尾をのばせるだけのばした以上はもう五分許のばすことが出來なかつたのはこの犬の主にたいする愛着の不足を語るものだと思ふ。

C。たしかにさうです。この犬の尻尾が六尺もあつて御らんなさい。僕はこの犬のためには一萬圓でもよろこんで出します。かりに金をもつてゐたとしてゞすね。

A。尻尾は短かい方がいゝと云ふ人の御意見はどうです。

D。Bさんのおつしやるのも一理があると思ひます。尻尾がながすぎる以上は其處までゆかなければ嘘です。之では中途半端です。この位いならもつと短かい方がいゝと思ふのです。

A。それではこの尻尾が中途半端であると云ふことに異論はありませんな。

二三人。ありません。

A。それならさうかいておいて下さい。

書記。はい。

A。それならこの尻尾の太さです。一寸はかつて見ておあげ。

助手。根元で三寸、先きで帑であります。

A。根本で三寸、先きで帑だそうです。

B。かつ切り三寸ですか。

助手。かきつり三寸です。

B。一厘もはみ出て居ませんか。

助手。おりません。

B。さうかた通りでは困りますな、丁度三寸なぞと云ふことは眞實性がありませんな。嘘らしい話です。

D。だがかつ切り三寸と云ふ所は面白いぢやありませんか、人工的であつて、モダーンの香があるぢやありませんか。

B。それはさう云ふ所もあります。

C。しかし之をメートルで計算すると正確とは云へませんな。

B。さうだ。君はい丶所に氣がついた。この犬はメートル法のまだ實行出來ない時に、尻尾をつくつたにちがいない。今にこの尻尾の太さは時代おくれになります。

A。Eさん。あなたはどうお考へになります。

E。僕ですか。僕はもう少し細い方がよかつたと思ひます。さうするとエキゾチツシユな味が出て、エロチツクな感じ

が出るだらうと思ひます。之では藝がありません。之ではいくら雄犬でも。

A。一寸待つて下さい。この頃は警察が非常にやかましいのですから。風俗壞亂になるやうな御言葉は御注意願ひます。

E。それでは殘念ながら僕の考は發表するのをさしひかへますが、之が周圍が一寸位いであつたらさぞ珍物だつたらうと思ふのです。

A。それではこの犬の尻尾の太さは舊式にして、エキゾチツクな味なく平凡なりとしますかな。

C。一寸お待ち下さい。平凡なりはいけません。

A。なぜです。

C。平凡と云ふ言葉は我々モダーン人にとつては神聖な言葉である。平凡ならいゝのですが、この犬の尻尾は中途半端なのです。徹底してゐません。現代的ではない。本當の意味で平凡ならいゝのですが、この尻尾は特色を出したがり、自己の存在を主張したがつてゐながら力不足で、途中でとまつたと云ふのがいけないのです。

E。平凡て云つたつていゝぢやないか。平凡と云ふことはどつちにしたつてほめた意味にはならない。君は平凡崇拜家だが、それなら等級をつけるのさへ面白くない。第一批評するのさへ面白くない。

C。そんなことはない。僕は一番平凡なものを一等にする。尻尾だつて一番目だたない一番あたりまいな尻尾を一等にする。所がこの犬の尻尾は平凡ではない。エキゾチツクのなりぞこないだ。

E。なに、この犬の尻尾の太さは平凡の域を脱しない。さきへ行つて太くならなければ面白くないのに。こいつはさきへ行つて細くなつてゐる。

C。先きへゆく程細くなるのはいゝ。しかし太さも二寸五分内外が正當で、長さも一尺五六寸を適當とする。勿論六尺位いになれば、又社會的に使ひやうがあるから、悪いとは云へない。

E。ともかく平凡はよくない。

C。ともかく特色を出したがるのはよくない。それは時代おくれな考へであり、ブルジョア根性である。

E。プロレタリア根性も時代おくれになりかけてゐるよ。何しろ特色のない犬と云ふのはいきてゐる甲斐のないものだ。

C。何を云ふのだ。君はプロレタリヤを輕蔑するのか。

E。僕はエキゾチツクな所と、エロチツクな所のないものは困る。

書記。それでは何とかきますかね。

E。奇を好んでしかも平凡なりとおかきなさい。

C。平凡を侮辱することは承知が出來ない。

E。君は低い山の方が高い山よりも價値があると云ふのか。

C。無論、さうさ。高い山には麥はつくることは出來ない。

E。君は美とか、鑑賞とか云ふことのわからない男だ。

C。人を侮辱するね。この藝術至上主義の時代おくれめ。

E。この平凡崇拜の凡人主義め。

A。まあさう喧嘩はしないで下さい。犬の尻尾の喧嘩をするのは滑稽ですから。

E。C。何が滑稽です。

A。失言は許して下さい。

C。僕は自分の主義に忠實になることを滑稽だと云はれては退場しますぞ。

E。僕だつて退場する。

A。失禮しました。犬の尻尾を鑑識しないと云ふわけではないのです。それでは今度、尻について御批評を願ひます。

E。この尻は少し貧弱すぎますな。もつと肉づきがよくつて、エロチツクな感じがなくつては尻の甲斐がありませんね。

C。いや、尻の肉のないのは決してわるくはない。たゞ獅子の尻のやうに戰鬪的氣分のないのを惜しむだけだ。

B。たしかにこの尻には戰鬪的意志がない。反抗的精神があらはれてゐない。だからかう云ふ尻には立派な尻尾が發生出來なかつたのだ。だらしのないものきり出來なかつた。

E。犬の尻が、獅子の尻のやうになるのが平凡ですかな。

C。尻が大きいと云ふことはエキゾチツクですかな。

A。まあ、尻はその位いでいゝとしておきませう。あとにまだ澤山の犬がひかへておりますから。

B。それでは今度は足にしませう。隨分太い足ですな。太さはどの位いありますか。

書記。前足も後足も一緒にはかることにします。

B。どうかさう願ひます。

書記。前足は七寸五分三厘、あと足は九寸八分二厘あります。

E。それはすてきですな。實にエキゾチツクですな。それではさぞ早く走るでせうな。

A。いえ、至つておそいさうです。

E。惜しいものですな。

C。いや、おそいのは大變結構です。犬の足の早いのをよろこぶのはブルジョア趣味です。犬がサボタージを行なふのは痛快です。それに足が太いのも有望です。何となくプロレタリア的土呂の臭ひがしますからね。娯樂的ではなく野性的で面白いです。

A。それなら足の太いのは賞めてよろしいね。

B。ほめてよろしい。殊に足のおそいのもほめて下さい。

E。足のおそいのはほめてはいけません。

D。それはさうだ、足がおそいのは面白くない。

C。面白くないと云ふのは人間の立場から見ての話です

D、いや、犬自身にとつても面白くはないでせう。

B。しかし象のやうに犬の歩くといふのは痛快です。

D。誰にとつて痛快なのです。

B。我々反逆の精神に燃えてゐるものにとつてゞす。

E。いや足が太くつておそいと云ふのは平凡だ。さうです平凡です。足が太くつてしかも早いといふのでエキゾチツクになつて面白いのです。

D。エキゾチックはともかく犬の足がさう太いといふのは面白くない。犬の足は馳けるのに最も適當につくられたのをよしとする。

B。それは昔の人の考へ方だよ。昔の人は皆さう思つてゐた。その考へは永遠に昨日の考へ方だ。

D。昨日か、一昨日か知らないが、ともかく足は走るためにあるのだから。

C。はゝゝゝ。それは舊式だ。

E。はゝゝゝ。それは平凡な考だ。

（Cが怒りかけるのでA機先を制し）

A。それなら胴體はどうですか。

D。少し張り子のやうですな。

B。それは賞めたのですか、惡口ですか。

D。元より惡口です。

B。しかし其處が面白いのぢやありませんか。この犬のとり柄は其處にあると思ひますね。人間の意識が働き、幾何學的であり、科學的であり、そして人工的であります。

E。なにしろ少しかはつてゐるから面白い。

C。この犬の取り柄は實際この胴體の唯物的な所にある。この犬はこの胴體を所有する故に十等の内に入ることが出來る。

E。さうだ、この胴體の面白味は過去の人間にはわからない。

A。だん〲この犬は評判がよくなりましたな。それでは首はどうです。

B。首すじの太さはどの位いあります。

書記。一尺六寸です。

E。平凡ですな。

C。大いによろしい。

D。だが見ともよくないね。

B。見ともないなぞと云ふ非科學的な言葉は使用しないことにしたいね。この首すぢに反抗的精神が加味されてゐれば理想的だが惜しいな。

C。本當にさうだ。

E。このくびはありふれてゐて面白くない。これではいくら異性の犬でも首すぢに抱きつく氣にはなれまい。

C。エロチックな話はよさうぢやないか。

E。だが性的興味をひかない女性は女性としての最大の任務を果すことが出來ない。

C。子供を生むのが女性の最大の任務なぞと考へるのはあやまりだ。

A。今度は一つこの犬の面(つら)について御批評を願ひます。

D。隨分面白い面をしてゐる。

E。この顏は惡くない。

C。呑氣すぎる。それに平凡でない。

E。だが唯物的な顔ですぜ。

C。唯物的な顔と云ふのはこんな顔ぢやない。この顔はむしろ精神的な顔と云ふべきだ。

D。へー之が精神的な顔ですか。

C。時代おくれの君は默つてゐたまい。精神なぞと云ふものは馬鹿氣たものだ。この顔の取柄と云へば、偶像破壊の點にある。唯物者がいかにまぬけな顔をつくるものかと云ふことを證明して、神と云ふものが、ヒヨツトコのやうなものであることを示してゐる。恐らく神と云ふものがこの世にあるとしたらこんな顔をしてゐるにちがひない。

B。大いに同感だ。さう思つて見るとこの顔も面白い。

E。なにこの犬の面は凡俗の人間の想像力のどの位いくだらないかを示すためにつくられたものだよ。平凡な人間を馬鹿にするために出來た面だ。

C。ブルジヨアの面と見れば面白い。

E。プロレタリアだつて五十歩百歩だ。否五十歩、五十歩だ。

B。君はプロレタリアを輕蔑するのですね。

E。僕はブルジヨアの十分の七を輕蔑するやうにプロレタリアの十分の七を輕蔑しないわけにはゆかない。

C。プロレタリアを輕蔑することは許されないことだ。

E。君自身ブルジヨアだからそんなことを云ふのだよ。プロレタリア同志全部がお互に尊敬しあふと云ふことはあり得ないことだよ。それに君達が自分の屬する階級を輕蔑してよろこぶのは女のくさつた趣味だよ。

B。君は女性を輕蔑するのですか。

E。僕は男だつて輕蔑すべきものは輕蔑する。

C。それなら君は僕達を輕蔑するのですか。

E。正直に云へばね。

C。何たる侮辱だ。

E。しかし正直に云へば、君達だつて僕を侮辱してゐる。御同樣ぢやないか。

C。君は輕蔑される資格がある。

E。君達はないと思つてゐるのか。

A。まあ〳〵喧嘩はやめにして下さい。もう時間がありませんから喧嘩はあとにして、早くこの犬の顏を批評して下さい。Dさんの御考は。

D。僕はこの犬の顏はあまりに人工的だと思ひます。それも天才がつくつた顏でなくつて、ごく趣味の惡い人間が。

C。君は人間を侮辱するのですか。

D。いや、僕は趣味の惡い人間のその趣味だけを輕蔑するのです。

B。輕蔑すると云ふ言葉は斷じてやめて下さい。それはあまりに過去の言葉です。

D。それならこの犬の顏を尊敬するやうに、この犬の顏をつくつた人達を尊敬しませう。

E。さうだ僕もこの犬の顏を尊敬するやうに君達を尊敬すると云はう。君達はこの犬の顏を尊敬するのですか。

B。尊敬すると云ふ言葉は一昨日まではやつてゐた言葉だが、我々はそんな言葉はつかはない。

E。それなら君達は何と云ふ言葉をつかうのだ。階級意識が現はれてゐない顏にたいして君達は何と云ふのだ。

C。否定すると云ふ。

D。恐ろしい言葉だ。野蠻な言葉だ。

E。君達は自分を否定するのか。プロレタリアでないものは全部否定したがる君達は自分の生命も否定するのか。馬鹿馬鹿しい。僕は自分の生命を否定はしない。

B。僕達はブルジョアではない。

E。この犬の尻尾のやうな位置にゐる人間ぢやないか。金持になりたくつてなれない。

C。馬鹿、君ぢやあるまいし。

E。馬鹿と云ふ言葉は明日の言葉かね。

C。生意氣云ふな。

（CとE、なぐりあふ）

B。よせ〳〵。

D。よせ〳〵。犬が笑つてゐるよ。

B。犬が笑ふなんて非科學的だ。

（犬段々聲高く笑ひ出す。皆あつけにとられる）

B。笑つてはいかん。犬のくせに笑ふなぞと云ふのは非科學的だ。

E。笑ふな。犬の分さいして、人間を笑ふな。

犬。あはゝゝゝ。

D。何がそんなに可笑しいのだ。
犬。たゞおかしかつたのですよ。先生方。
C。犬が人間の言葉をしやべるなぞとは、眞實性がない。
犬。あはゝゝゝ。君達は一體何のために生てゐるのだ。僕を批評して喧嘩さへしてゐれば飯が食へるからか。だがそんなことを朝から晩まで毎日々々云つてくらしてゐるのか。僕の顏がどんな顏したつて、僕の尻尾がどんなに長くつたつて、短かくつたつていゝぢやないか。
A。品評會に出品されてゐながら品評されるのを拒絶すると云ふことは卑怯なことですぞ。
E。さうだ。君は批評されて默つてゐられないのは卑怯だからだ。自己を擁護してゐるからだ。
犬。何とでもおつしやい。僕を品評會につれて來たのは僕ぢやない。僕は生てゐる以上君達に顏を見られ、更いろ〳〵のことを云はれるのは覺悟してゐる。何と云はれたからと云つて僕は生てゆくより仕方がないからね。だが僕だつて君達を笑つていけないと云ふことはあるまい。君達は笑はれるために生てゐるやうな人間達だからな。あはゝゝあはは、あははははは。
A。この犬は氣がちがつたやうですね。氣違病院につれこまなければならないでせう。
B。本當にこの犬は氣が違ひましたね。
(犬繩を切つて逃げだす。書記の使者、氣がつかぬ)
O。批評されるのに臆病で。
E。それに自信がないのがいけないのだ。

A。すぐ病院に入れることにしませう。

B。それは名案です。

助手。大變です、大變です。犬が逃げました。

A。それは大變だ。何處に、何處に。

助手。あすこに逃げて行きます。

(Dの他皆おいかける。滑稽な姿也)

B。(走りながらEに)それ見玉へ、足がおそいと云ふことはいゝことだ。

書記。(犬の逃げた時からニヤ〳〵しながら見てゐたが)。あはゝゝ。犬の方が常識家で賢いやうだ。あはゝゝ。皆さん。明日の言葉を敎へてあげませうか。之は私が何千年前から生てゐる人に敎はつたことですよ。先づ自己を忠實に生きられるだけ生きろと云ふのですね。他人の目のちりに氣がつく前に自分の目の梁りをとれと云ふのですね。あの皆のざまを見て御らんなさい。一體あの內で誰が賢いのですかね。さうです。犬です。犬です。犬の方が賢いのです。ともかく犬は氣違ひ病院の內で生活することはいやな事だと云ふことを知つてゐますからね。あはゝゝ。　(幕。)

(二五、一、一二、)

編輯だより

◇既成政黨の沒落は、もう目睫の間に迫まつたと云ふ感じがしながら、無産政黨組織の不手際はそれ以上に大衆に失望を與へる。もう少し偏狹をとり去れ、大同に就け、共同戰線に立つているものを正敵以上に罵詈し、誹謗する心根のあまりにきたなさよ。勞働總同盟も、評議會も、農民組合も自分の立場のみを考へずに全無産階級の眞の利益を考へたらどうか。

◇解散！解散こそ立憲政治家の選むべき唯一の方法だ。この道程を通過して日本もここに眞の政治が見られる。我大衆は今回の選擧には斷じて既成人物、普選に反對した人物を選むべきでない。でないと新たに選擧權を獲得した新興階級は永劫に踏みにじらるべきを思はねばならない。

◇床次がいかに躁擾からが、加藤がいかに解散を怖つても自然の勢は解散とならねば止まぬ形勢だ。

◇別欄廣告にある如く本社主催にて二月十六日より十八日まで三日間芝公園協調會館に於て消費組合展覽會を開く。此有意義な催しによつて如何に重大な影響を社會に與へるか刮目に値す。我愛讀者は總て一覽して下さい、そして友人その他にも吹聽して下さい。その誰にでも尤も重大の關係を有つことは今更喋々する必要もない。

◇谷崎潤一郎氏は一月六日渡支。氏の奇警、深酷を極むる彼地の感想、創作は本年の本誌をいかに華かに彩るか刮目に値す。

◇本誌新年號の發送がおくれたことを直接、購讀者にお詫びします。本月號から斷じてかかることとなきを玆に斷言します。

◇本月本社より發刊さるる新刊は谷崎潤一郎著「鮫人」藤森成吉著「惱み笑ふ」堀江歸一著「國際經濟概論」ブハリン著「唯物史觀」吉田絃二郎著「父」木下杢太郎著「支那南北記」松崎實編「切支丹鮮血遺書」等。

◇英語に堪能なる改造記者獨語に通ずる出版部記者各一名試驗の上採用。卅歲以下にして專門學校卒業以上の學力あるを要す。履歷書に一文添へて申込下さい。體力の强健ならざる人は斷じて採用しません。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓卅錢	增大號共郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾五年一月廿日印刷納本
大正拾五年二月一日發行

（價八十錢）

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行兼印刷人　平田貫一郎
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

長谷川如是閑著

第十七版

犬・猫・人間

定價壹圓八十錢
送料十參錢

犬と猫と人間と家とに關する漫錄である。「犬、猫、人間。」と名づけて家を省いたのは、全くただ語呂の關係である。家が怒らないことを望む。

此本も實は『人間、家、犬猫』とする所であつた。が、さうすると、もしそれを『人間否犬猫』と聽き違へて怒り出す人間があると困る。今の名も、人間諸氏にとつて無論餘り感じのいゝことはなからうが、少くとも羊頭を掲げて狗肉を賣る譏は免れやう。

一體、興に乘じてしやべつた言葉を、程經て本人に蓄音器で聽かされたら、冷汗をかゝない本人はなからう。此れもそれと同じ化學的成分の冷汗を著者にかゝせる。然しすべて書物は著者に讀ませるものでないからよからうといふことであつた。さうである。讀者が冷汗をかくことは、著者は或る程度まで我慢し得る。

すべて漫談である。強いて責任を取れといはれゝば取らぬこともないが、根が漫談であるから、讀者もまた著者と同じ態度で漫讀されんことを希望する。（著者）

內容

〔〕ピヨトルの猫と私の猫〔〕亡友四匹〔〕猛犬ジヤツクの話〔〕門〔〕玄關〔〕私の借りた家〔〕初めて逢つた漱石〔〕原敬の人相〔〕大阪人の顏其他〔〕支那人の顏其他〔〕純日本式〔〕もし日本人がアメリカを發見してゐたら〔〕低氣壓前後〔〕ある亡友への手紙〔〕マツチニのロンドン生活

東京芝區
愛宕下町
改造社
振替東京
八四二〇

改造社出版圖書目録

（大正十四年十月現在）

（一）經濟及社會

著（譯）者名	書名	内容一斑	版數	型 頁數	定價 送料
法學博士 穂積重遠著	離婚制度の研究	○離緣狀と緣切寺○緣切寺滿德寺○クリスト教の婚姻非解消主義○イギリス其他各國の離婚制度の研究	新刊	菊上 九四〇頁	一〇・〇〇円 内・三六
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	（一）家族制度論○家族制度の性質と機能○外五項（二）婦人問題○女子勞働問題等を検討す	7版	四六上 三三三	二・〇〇 ・二〇
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻等結婚に關する研究	5版	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會政策と階級闘爭	（一）社會政策序論○「社會」の發見○外三項（二）階級闘爭と共產主義者等其他の深刻なる研究	30版	四六上 五七四	三・〇〇 ・二四
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	（一）社會運動の理論的根據（二）勞働爭議の意義及種類（三）勞銀制度を博士一流に検討す	15版	四六上 四三〇	二・五〇 ・二〇
法學博士 福田德三著	ボルシェヴヰズム研究	○マルキシズムとしてのボルシェヴヰズム○レーニン國家論○ボルシェヴヰズム○「資本主義」への降伏、等	10版	四六上 三九四	二・九〇 ・二二
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	○緒論○ロオドベルトス研究○マルクス研究○雜錄（三章）○追補河上博士との論戰記錄	8版	菊上 四三三	三・二〇 ・二八
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の效力等勞働法概論	5版	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
ジノヴィエフ原著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動○勞働組合世界的名文獻の翻譯	4版	四六並 一六四	・九〇 ・一四
ニコライ・レーニン原著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシエヰキーの成功の一根本條件○ボリシエギーズム發達の諸期等	4版	四六並 三二四	一・二〇 ・一六

帝大助教授 平野義太郎著	法律における階級闘爭	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	8版	菊上 三三三	二・五〇 ・二六
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	○農村問題解決の鍵鑰○小作爭議と農村破壞○外四十一項、農村問題を知らんとする人の必讀の書	5版	四六上 三九八	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	○經濟組織の改造と政治の革新○政治的議會より經濟的議會へ○產業資金の供給○外九項	5版	四六上 三九四	二・五〇 ・二二
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	○緒言○基礎的研究の必要及び其綱領○農村問題とは何ぞや○村落の研究○農家經濟の研究等	新刊	四六上 三一八	一・五〇 ・一八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	マーシャル經濟學原理(分冊三)	現代の經濟學書中、此書程、學としての生命と光の鮮かなるものはない。本篇は主として生產を解く。	新刊	菊上 四九八	三・五〇 ・二六
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	マーシャル經濟學原理(分冊四)	譯者は、晩年のマーシャルに親炙したる人、原理に流れつゝある血を共鳴移植したる名譯。	近刊	菊上 三四四	三・七〇 ・二八
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	近刊	四六上	價未定
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歷史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	新刊	四六上 三三三	一・五〇 ・一八
室伏高信著	印象と傾向	著者が歐米漫遊中、彼地の文豪、政治家、社會運動家、哲學者、科學者に會見せし趣味ある印象記。	4版	四六上 四四四	二・〇〇 ・二〇
ロマン・ローラン著 大澤章譯	先立ちて來る者	深遠たる思想と熱意ある筆致を以て世界の思想界に牢乎たる位置を占むるローランの「先驅者」の飜譯。	新刊	四六並 二九六	一・五〇 ・一六

(2) 政治及法律

法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	21版	四六上 一一八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	○法窓閑話○誤判賠償の根本原理○軍法會議廢止論○小作人と土地所有權○法律小話(十二話)○外二篇	新刊	四六上 一三三	二・五〇 ・二二
帝大助教授 平野義太郎著	法律における階級闘爭	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	8版	菊上 三三三	二・五〇 ・二六

著者	書名	内容	版	體裁・頁數	定價・送料
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度の社會○莊園制度の社會○分權的封建制度の社會○郡縣制度の社會等	21版	菊上 三六六	二・五〇 ・二四
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	○農村問題と對策○農業改造方策○都會と田舍との分裂○農民土地愛着心冷却の傾向等外數項の熱論	14版	四六上 四四〇	二・〇〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序說○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	21版	四六上 四六八	二・五〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	嘘の効用	○嘘の效用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智慧に捉はれた現代の法律學○其他八項	41版	四六上 四五四	二・六〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	新法學の權威が新しき國民はいかに法律を心得ねばならぬかを說いた法治國民への國民讀本	新刊	四六上 四三三	二・五〇 ・二〇
佛國藏相カイヨー著 飽井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の囘題○世界的破綻○歐洲再生の力○佛國、一般財政經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務等	4版	四六並 二四〇	一・三〇 ・一六
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	近時澎湃たる社會科學問題に關し政府者に對し巨砲を放つ。學生諸君は本問題の內容發展を本書で知れ	14版	四六並 一六〇	一・三〇 ・一二
ウンターマン著 森喜一譯	哲學思想の史的考察	○著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の發達を論るもの	4版	菊上 三四二	二・〇〇 ・二二
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	現代のブルジョア哲學に對し無產哲學の新提唱新時代學徒の必讀すべき文獻	5版	四六上 三六八	二・五〇 ・二二
賀川豐彥著	生存競爭の哲學	生存競爭の原理を闡明し生存凡動の哲理を說き生命力と愛の力が生存競爭を超越するを進化論的に論す	12版	四六上	二・〇〇 ・二〇
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	(一)階級篇○階級の本質○マルクス的階級概念外一篇(二)第三史觀篇○經濟史觀より第三史觀まで等	5版	菊上 三八四	二・八〇 ・二四
森戸辰男著	思想と鬪爭	○震災と主義者と反動勢力○國粹主義者と政治的殺人○大杉榮君の追憶○外四項	4版	四六上 三五六	二・〇〇 ・二〇
細井和喜藏著	女工哀史	我國の工場及女工生活を知る世界的勞働記錄十五ケ年の氏の血と肉とから成る本書を國民は一讀せよ	10版	四六並 四六六	二・〇〇 ・二〇
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○○革命の文學的同伴者○アレクサンドル・ブロック○未來派○詩の形○外四項	新刊	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇

商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念○勞働法の研究方法○勞働法制の變遷○勞働法の理想○外六章	5版	菊上 二四〇	二・六〇 ・二六
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	(一)現代に於ける社會思想及び政治事實の進展(二)現代日本の政治過程(三)多元的國家觀の法理	4版	四六上 三二四	二・五〇 ・二二
法學博士 森莊三郎著	法制講話	○總論○親族法及び相續法○皇室法○憲法○全國の中學師範女學校の教科書、參考書としての最良書	4版	四六上 四二四	二・五〇 ・二二
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	近刊	四六上	價未定
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	○婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚の防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻	5版	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歴史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	新刊	四六上 二三三	一・五〇 ・一八
北一輝著	日本改造法案大綱	○緒言○國民の大衆○私有財産制度○土地處分三則○大資本の國家統一○勞働者の權利○外三章	4版	菊上 一六八	一・五〇 ・一八
佛國議出カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の苦悶○世界的破綻○歐州再生の力○佛國一般經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務○外三章	4版	四六並 二四〇	一・三〇 ・一六
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシエヰキーの成功の一根本條件○ボリシエヰズム發達の諸期○外五章	4版	四六並 二二四	一・二〇 ・一六
ヂー・ジノヴィエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動○勞働組合――刻下最必要の一文獻	4版	四六並 一六四	・九〇 ・一四
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	○カントの平和論○カントと政治○思想問題と哲學的精神等――カント研究者に必要の一書	7版	四六上 二四六	一・五〇 ・一八
阪内務事務官 三宅司法書記官著	普通選擧法要綱	普通選擧法に對する尤も信頼すべき當局者の釋義。各府縣警察署にては皆本書を參考として購買した	10版	菊半截 一八四	・六〇 ・一四

(3) 哲學及宗教

文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	一般心理學を體得せんと欲する學徒のために解り易く書かれた我國で心理學の最良書	30版	四六上 五四六	四・二〇 ・二四

著者	書名	内容	版	判型	定價
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	（一）序論（二）本論民族心理學（三）別論文化と歴史○文化の領域○文化の將來 四附錄	7版	四六上 三六六	三・五〇 ・二四
文學博士 米田庄太郎著	文化哲學叢書第一篇 リッケルトの歴史哲學	○リッケルトは現代哲學の巨星、氏の哲學を尤も解り易く解いた一書米田博士の懇切の釋義亦喜ぶべし	8版	四六上 六六六	四・七〇 ・二六
板垣鷹穗著	文化哲學叢書第二篇 新カント派の歴史哲學	○歴史存在の意味○歴史哲學の概念と歴史○カントの批判哲學と科學方法論○外三章	5版	四六上 三八	一・五〇 ・一八
帝大教授 恒藤恭著	文化哲學叢書第三篇 ジムメルの經濟哲學	○序説○本論價値と貨幣○貨幣と實體價値（）目的系列に於ける貨幣○附錄著作年表參考書	改版	四六上 四四八	三・〇〇 ・二〇
廣島高師教授 勝部謙造著	文化哲學叢書第四篇 ディルタイの哲學	○傳記及び重なる著作○ディルタイの哲學的立場○精神科學論（）世界觀說○○藝術論○結語	8版	四六上 二六四	一・八〇 ・二〇
リッケルト原著 小川義章譯	生の哲學	理想の魂なき生の偶像を禮讃するの愚を悟り眞の生の意義を闡明せるもの新理想の巨匠たる著者の傑作	5版	菊上 三四六	二・八〇 ・二四
京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	○藝術的理念○藝術的自然○藝術家○藝術作品○觀照—藝術の進展性を新銳の氏が熱烈に論究す	5版	菊上 四四四	二・七〇 ・二四
佐藤繁彥著	體驗宗教の研究	（一）序論○才驗宗教の意義（二）本論○カント、シュライエルマッハー、ルッターの宗教（三）結論	4版	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇
スティルネル著 辻潤譯	自我經	（一）人間篇○人生○舊時代と新時代の人々○古代人○近代人自由人（二）自我篇（）所有（）所有人唯一者	8版	四六上 六六六	二・八〇 ・二〇
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	○物理學と認識○文藝上の描寫論と科學○物理學上の認識の問題○絕對運動論○外四篇	6版	四六上 二四四	一・五〇 ・一八
東洋大學教授 關寬之著	學校兒童心理學	○學齡兒童を研究の對象として實驗的にまた演繹的にその心理狀態を考究したる教育的心理學である。	3版	四六上 四三二	二・七〇 ・二〇
文學博士 松本亦太郎著	智能心理學	人間力の智能方面を、博士獨自の廣汎にして精緻なる立場より研究したるもの。	近刊	四六上	價未定
ヨゼフ・ディツゲン著 山川均譯	無産階級の哲學	○ディツゲンの爲人と其哲學○哲學の實果○一勞働者の觀たる人間の腦髓の働きの性質	5版	四六上 三八八	二・五〇 ・二〇
ウンターマン著 森一譯	哲學思想の史的考察	原著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	3版	菊上 三四三	二・〇〇 ・二二



POLITICS. LITERATURE. SOCIAL AFFAIRS. ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA. TOKIO.



第八巻 第十二號 十二月號 定價金八十錢

株式會社秀英舍印刷